
夜天の守護者 番外編

混沌の魔法使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜天の守護者 番外編

【Nコード】

N0204S

【作者名】

混沌の魔法使い

【あらすじ】

今回は本編と一緒にになっていた番外編を別々に投稿しなしました、これからは番外編はこちらでどうかいするのでどうかよろしくお願いします

龍也とマテリアルと聖王と 第1話

第1話

「・・・不思議な夢を見た物だ・・・」

ベッドの中でそう呟く・銀髪の男・彼は現代の聖王であると同時に管理局最強の魔導師でもある、その男の名は「八神龍也」と言う
「闇の書の時の夢を見るなんてな・・・しかし・・・私が居なかったのはどういう事だろう?」

夢の中では私は居らず・・・しかもリインフォースも消える事無くはやての傍に居た

「あれが・・・IFの世界と言う訳か・・・」

ジェイルが言うには世界には様々な分岐点があるそうだ・・・例えば・私の居ない世界・・・アリシアが生きてる世界・・・そしてジェイルが悪として裁かれる世界・・・世界には様々な分岐があるそうだ、今ジェイルは平行世界に行く為の機械を作っている

「だが・・・それでも良いかもな・・・私はリインフォースには生きていて欲しかったからな」

短い間だったが彼女は間違いなく、私の家族だった・・・だから平行世界でも生きていてくれるという事が嬉しかった

「さてと・・・そろそろ起きるか・・・ん?体が重い・・・どういう事だ

？」

ここで始めて気付く。体が重いのだ。しかし金縛りとかではなく
まるで体の上に誰かが乗っているようだ

「またリインとアギトか。いや。それとも。ルーテシアとキ
ヤロか？」

そんな事を思いながら布団を捲り、また元に戻した

「私は夢でも見ているのか？」

私は暫く時間を置いてからもう一度布団を捲ったそこには

「ううう。うう。うう。うう。」

穏やかな寝息を立てる、三人の少女の姿があった、しかも三人とも
何処と無くはやて達に似ている、

私の上に陣取って寝ているのは。はやてに似ている少女だが若干
目付きが鋭い気がする

その横には。水色の髪をした幼い頃のフェイトそっくりの少女に
幼い頃のなのはに似ているが髪がショート少女だ

「。なのは達の子供？。いやそれは無いか。」

この少女達はどう見ても10歳前後。今20歳のはやて達の子供
だとしたら。3人が10歳の時の子供になる。それはありえな
い。ではこの子達は何だ？私が混乱していると

「ううーん。良く寝たぞ。」

私の上の少女が目を開く・・・やはりやてと比べると目付きが鋭いな・・・

「ジーッ・・・」

はやて似の少女が私の顔を穴が開くほど凝視し、何かに気付いたのか

「星光！！雷刃！！起きろ！！！！大変だ！！！！目の前に父上が居るぞッ！！！！」

父上！？何で私が父上と呼ばれるんだ！！その発言に更なる混乱に陥っていると

「うう・・・何寝ぼけてるの・・・僕達は・・・ああっ！！！！パパが居るっ！！！！」

フェイト似の少女が起き出し、私に気付くと大声を上げる

「・・・うるさいですね・・・朝から何を騒いでいるのですか・・・大体目の前にお父様が居る等と・・・どんな妄想・・・お父様です！！！！目の前にお父様が居ますっ！！！！」

なのは似の少女は少々毒舌の様だが、二人と同じ様に私に気付くと大声を出す

「あゝ、悪いんだが・・・もう少し声のボリュームを下げてくださいとありがたいのだが？」

流石にこの近距離での大声は流石にきついので三人に言うと

「我とした事がすまん、今静かになるぞ」

はやて似の少女は我か・・・少し態度が大きいかな？

「パパ、ごめんねちょっと嬉しくて・・・んつと・・・これくらいで良い？」

フェイト似の少女はあんまり小さい頃のフェイトに似てないな・・・どちらかと言うとヴィヴィオとかリインに似てる気がするな

「申し訳ありません、私としたことが・・・」

丁寧な口調で謝ってくるなのは似の少女に

「いや・・・怒ってる訳じゃないからそんなに謝らなくても良いぞ？・・・それと・・・悪いんだが・・・私の上から退いてくれないか？」

はやて似の少女は私の上、フェイト似の少女は左腕、なのは似の少女は右腕と完全にホールドされており動く事が出来ないので、三人に言う

「うむ・・・今退くぞ」

「・・・今退くね・・・」

「・・・はい・・・今退きます」

三人とも渋々という感じで私の上から退く

「ふう・・・漸く体が動かせるよ・・・」

流石にあそこまで完全にホールドされると動けなかったのだ

「さて・・・一つ聞きたいのだが・・・良いか？」

目の前に座り込む少女達に尋ねると

「何だ？我に判る事なら何でも答えるぞ！」

「僕に判る事なら教えてあげるよ！！パパっ！！」

「私もです、私に判る範囲で宜しければ、お答えします」

三人とも良い子だ・・・そう思いながら三人と一緒にリビングに行き、三人に牛乳を淹れたカップを手渡してから

「では聞くが・・・君達は何だ？」

今なら判る・・・この子達は人間ではない・・・だがかと言って・・・人造魔導師でもない・・・どちらかと言えばシグナム達に近い気配がする、そんな事を考えながら尋ねると

「私達は闇の書の闇の欠片ですよ・・・お父様」

闇の書の欠片っ！？・・・どういう事だ・・・あれは完全に消し飛ばしたはずなのに

「そう・・・確かに闇は消え飛んだ・・・だが我らは違った・・・我らは残骸として生き残り・・・我達を倒した魔導師達の姿をベースに・・・

再構築された存在だ」

成る程だから・・・はやて達に似ているのか・・・だがそれで行くところ疑問が浮かぶ

「あつ・・・と・・・星光の殲滅者です・・・すまないな・・・星光・・・良く考えたら私はお前達の名を知らないんだ・・・」

名前が判らず困っていると、なのは似の少女が名乗るが・・・星光の殲滅者・・・スターライトの事か？そんな事を考えていると

「僕は雷刃の襲撃者だよ！！パパ」

フェイト似の少女・・・雷刃の襲撃者が手を上げながら名乗り・・・

「我は闇統べる王だっ！！父上！！！！」

胸を張りながら名乗るはやて似の少女・・・いや・・・闇統べる王か・・・

「よし判った、王と星光と雷刃だな？ちゃんと覚えたぞ」

名前を呼びながら笑うと、3人とも嬉しそうに笑っていた

「それで改めて聞くが・・・星光何故私に似ている者が居ないんだ？」

はやて達に似ている者が居るのに、何故私に似ている者が居ないのかと思ひ尋ねると

「簡単ですよ、お父様は神王様です・・・幾ら闇の書と言えど・・・神の姿を真似する事は出来なかったと言う訳ですよ」

笑いながら教えてくれる星光に礼を言ってから

「それで・・・なんで行き成り出てきたんだ？」

どうしてこんなに時間が経ってから出て来たのかと尋ねると

「それは我らに力が足りなかったからだ・・・姿は真似したが・・・まだ具現化できるほど力が無かった・・・だから永い時、父上のペンダントの中で父上の魔力を少しずつ貰って行き・・・やっとこうして具現化できたのだ」

ふむ・・・だから・・・私が父と呼ばれてるのかと納得していると

「ねえ・・・パパは・・・僕達を消しちゃう？」

雷刃が不安そうな声で尋ねて来る

「消す？・・・どういう意味だ？」

意味が判らず尋ねると

「僕達は何度も世界を滅ぼそうとした闇の書の欠片だよ？・・・つまり僕達は悪なんだよ？」

・・・ふむ・・・そういう事か・・・良く見ると星光と王も不安そうな顔をしている

「悪・・・ね・・・では一つ聞ぐが・・・お前達はまだ世界を滅ぼしたいのか？」

3人の顔を見ながら尋ねると

「違うっ！！我達はそんな事を望んでいないっ！！！我達は・・・ただ・・・父・・・上・・・ぐすっ・・・一緒に居た・・・ぐすっ・・・だけだ」

涙を流しながら違うと言う王に

「でも・・・私達が悪・・・ぐす・・・と言うなら・・・私達は・・・消えるだけ・・・ぐす・・・です・・・」

星光も涙を流しながら途切れ途切れに言う

「でも・・・消される・・・なら・・・パパに・・・ぐす・・・消して欲しい・・・他の人じゃ・・・嫌だ・・・」

ソファーから立ち上がり、涙を流す3人の前に立つ、すると涙を流しながら私の顔を見る3人を

「誰が消す物か・・・私はお前達を受け入れる・・・王達が私を父と呼ぶのなら・・・私は王達の父になる・・・」

出来るだけ優しい声で諭すように言いながら・・・3人を抱きしめる・・・今更3人増えた所でどうという事は無い・・・結婚もしてないのに娘が居る私だ・・・それに闇の欠片だろうが何だろうが関係ない・・・私を父と呼ぶなら私はこの子達を護ろう・・・そう思いながら3人を抱きしめると

「我達は・・・一緒に・・・居ても・・・良いのか？」

涙を流しながら尋ねて来る王に

「勿論だ・・・王と一緒に居たいと言うなら何時までだってここに居て良い」

背中を撫でながら言う私の服を掴み、声を押し殺して泣く王に

「私達は闇の・・・欠片ですよ・・・そんなのが一緒に居ては迷惑では・・・無いですか？」

「誰が迷惑な者が・・・それに闇の欠片だどうだなんて些細な事だよ・・・星光・・・」

王と同じ様に声を押し殺して泣く星光の背を撫でていると

「でも・・・僕達が・・・欠片ってばれたら・・・パパも悪者になっちゃうよ?・・・」

「何の為の管理局大将だ、それくらい隠し通してみせるさ」

雷刃の背を撫でながら言う

「それじゃあ・・・僕達はパパと一緒に居て良い?」

一緒に居て良いかと尋ねる雷刃に

「ああ・・・勿論だよ」

3人を更に抱きしめ言うと

「「「うつつ・・・わあああああゝんんっ！！！」」」

大声で涙を流し始める3人が。泣き止む間での間ずっと私は3人をずっと抱きしめていた

「父上！！我は腹が減ったぞっ！！！」

ひとしきり泣いた所為かお腹が空いたと言う王に

「そうだな・・・それじゃあ朝ごはんにしようか？」

まだ抱きついたままの3人の顔を見ながら尋ねると

「うんっ！！僕もお腹空いたっ！！」

「その・・・私も恥ずかしながら・・・空腹です・・・」

元氣良く言う雷刃と恥かしそうに言う星光に笑みを零しながら

「よし・・・それじゃあ少し待っていてくれ」

朝ごはんの準備をする為に3人を降ろしてから、エプロンを身に付けキッチンに向かった

良かった・・・もしかしたら消されるかもしれないと思ったがそれは要らん心配だった様だ、そもそもそんな事を考えた方がおかしい・・・あの優しい父上が我らを消すなんて事は無いのだから、そんな事を思っているとキッチンの方から良い匂いが漂ってくる

「おおゝ・良い匂いだゝゝ。パパは料理が上手なんだねゝ」

雷刃が笑いながら言うが、我は少しイラついた

「当たり前だ、我らの父上だぞ？料理だって得意に決まっている！」

若干イラついた声で言うと

「その意見には賛成ですが・・大声を出すのは良くないと思いますよ？」

星光が落ち着けというので若干落ち着きを取り戻した所で

「さつき・王の大声が聞こえたが・・何かあったのか？」

料理を持って父上が戻ってくる

「いえ・・なんでもないですよ？」

「そうか？それなら良いが・・それより朝ごはんだ」

我達の前に皿が置かれる、メニューはハムエッグにコーンスープにサラダとパンだった

「パンは私の手作りだから、余り美味しくないかもしれないが我慢してくれ」

そう言うと父上が椅子に腰掛け

「それじゃあ・・・頂きます」

「」「頂きます」「」

手を合わせてから食べ始める

「美味しい！」

雷刃はスープを一口飲むと、美味しいと言い凄まじい勢いで食べ始めた

「・・・確かに・・・凄く美味しいですね」

星光も何時もの無表情を多少和らげて笑みを浮かべていた

「もぐ・・・本当に父上の料理は美味しいな」

パンを食べながらそう思う、どれも我達の為だけに作られたと思うとそれだけで、とても嬉しくて美味しい、そんな事を思っている

「雷刃・・・もう少し行儀良く食べれないか？」

雷刃の方を見て・・・我はドン引きした・・・食べ方が雑すぎる所為か
雷刃の口の周りはとても汚れている

「はあ・・・ほら雷刃こっち向け」

父上は呆れながらナプキンを取り、雷刃の口を拭った

「えへへ、ありがとう!!」

そう笑う雷刃がとても羨ましく見えたので、我もわざと口にケチャップを付け

「父上！！我もっ！！」

「お父様！！私もっ！！」

！！！！同時だと・・・考える事は同じか！！星光と少しの間ならみ合っている、父上は苦笑しながら

「ほら二人ともこっちを向け、二人とも拭いて上げるからな？」

父上は笑いながら我と星光と口を拭ってくれた・・・やはり父上は優しいと思った

「父上」

朝食が終わった後でリビングで仕事をする、父上の周りの座りながら、父上を呼ぶ

「どうした？王・・・何か用か？」

父上は書類整理を一度止め我のほうを見る父上に

「何でも無い・・・ただ呼んだだけ」

そう言っていると父上は笑いながら、私の頭を撫でてくれた・・・やっぱり父上は優しいと思っていると

「僕も！！！」

「私も！！！！」

父上に近付き笑う二人の頭も撫で、父上は笑いながら

「こつこついうのも悪くない」

と言う父上の顔はとても穏やかな物だった

娘が増えたか・・・うん・・・こつこつ賑やかのは良いなと思いながら書類を作る、3人を養女として引き取る為の書類だ、書類を作っていると、コンコン！！ノックの音がする、誰だと思いのぞき穴で確認するとぬいぐるみを抱き抱えたヴィヴィオの姿だった

「パパ、入っても良い？なのはね達忙しいからって遊んでくれないの」

扉越しに声を掛けてくるヴィヴィオ・・・ヴィヴィオにも3人を紹介するつもりだったしな

「良いぞ・・・今開けるな」

声を掛けてから入り口の鍵を外して、ヴィヴィオを部屋に招き入れる

「パパ、ごめんね仕事忙しかった？」

ぬいぐるみを抱えながら謝る、ヴィヴィオを抱き上げ

「いや、別に気にしなくて良いよ」

頭を撫でながら笑っていると、リビングから星光達が姿を見せる

「父上？客人か？」

「パパ誰？」

「誰ですか」

抱き抱えたヴィヴィオに星光達が気付きヴィヴィオの顔を見ると同時に

「！！ちっちゃい！！なのはねね達だっ！！」

ヴィヴィオも星光達を見る、私はヴィヴィオに

「この子達もヴィヴィオと同じだよ」

抱き抱えたヴィヴィオに視線を合わせながら言うと

「ヴィヴィオと同じ・・・！！パパの娘だねっ！」

ニコッと笑うヴィヴィオを降ろし、3人の前にヴィヴィオを立たせ

「星光、雷刃、王、この子も私の娘のヴィヴィオだよ」

3人にヴィヴィオを紹介すると

「えっと・・・初めまして、ヴィヴィオだよ」

手を3人に伸ばすヴィヴィオに

「うむ、初めましてだ、我は闇統べる王だ」

その手を最初に取ったのは王だった、それに続くように

「僕は雷刃の襲撃者だよ、ヴィヴィオ」

雷刃が勢い良くヴィヴィオの手を取り握手をする

「私は星光の殲滅者です、宜しくお願いします、ヴィヴィオ」

星光もヴィヴィオの手を取り握手をしていた、その穏やかな光景を見ながら

「クレア、出て来てくれ」

クレアにはヴィヴィオの様子を見ていてくれと指示を出していた、つまりヴィヴィオが居るという事は、クレアも居る筈だと思い声を掛けると

「何用ですか王よ・・・えっと・・・小さいはやて様達！？・・・いえ気配が違います・・・これは一体どういう事ですか？」

直ぐに姿を見せたが星光達を見て、困惑するクレアに

「悪いがあの子達の服を買ってきてくれるか？」

クレジットカードを手渡し、服を買ってきてくれるかと言うと

「いえそれは良いのですが・・・あの子たちは何者ですか？」

星光達を見て首を傾げるクレアに

「あの子達は私の娘だ・・・それ以上の説明が必要か？」

「王の娘・・・ええ良く判りました、それ以上の説明は必要ありませんね・・・では私は3人の服を買って来ます」

姿を消したクレア・・・流石と言うか何と言うか・・・やっぱりクレア達は凄いなと思っていると

「パパ、遊ぼう!!」

ヴィヴィオが私の手を引く、

「ああ、皆で遊ぼうか？」

私達はクレアが服を買ってくるまでの間、トランプ等をしながら遊んでいた

「お待たせしました」

昼少し前にクレアがアイギナと共に大量の紙袋を持って帰ってくる

「・・・誰?」

クレアとアイギナを知らぬ星光達が、二人を指差すと二人は

「初めまして、私は嵐の騎士クレアです」

「私は・・・炎の騎士・・・アイギナ」

穏やか口調のクレアと3人を睨むような視線のアイギナが自己紹介をする、ここで言うておくがアイギナは多少目付きが悪いのだ

「ビクッ！！パパ・・・アイギナ怖い・・・」

雷刃がアイギナが怖いと言うと、アイギナは

「王・・・すいません・・・私は恐ろしいそうなので失礼致します」

アイギナは若干落ち込みながら姿を消した

「パパ・・・アイギナに悪い事しちゃったかな？」

雷刃が悪い事をしたかな？と言うが

「大丈夫、アイギナは優しいから気にしてないさ」

そう言い雷刃の頭を頭を撫でていると

「さあ、雷刃、星光、王、私と一緒に来てくださいね・・・服に着替えましょう」

「・・・はい」

クレアに連れられ、3人は着替えに行った

「パパ、星光達と遊んで楽しかったの!!」

楽しかったというヴィヴィオと話をしていると

「王、3人の着替えは終わったので私はここで失礼します」

そう言うときレアは姿を消した・

「うーん・もう少し話とかしてくれても良いだろうに」

何時も直ぐに消えてしまうレア達の事を思いながらそう言うとき、後ろから

「父上!!どうだ似合うか!!」

王が走って来て、服は似合うかと尋ねて来る

「うん、良く似合ってると思うぞ?」

黒を基調とした服で、何処となく私に似ている気がするな

「僕は?僕は!!」

元気良くジャンプしながら服を見せてくる雷刃、彼女が着ている服は男の子の様な活動的な服だ

「雷刃も良く似合ってるよ」

しゃがみ込み、雷刃の頭を撫でていると

「お父様・・・その私はどうですか？」

星光も尋ねて来る、彼女の着ている服は白を基調としたフリルの付いたお嬢様のような服だ

「もちろん、星光も良く似合ってるよ・・・さて皆着替え終えた所だし・・・行くでしょう」

皆普通の服に着替えた所だし、そろそろ行かないと

「パパ？何処に行くの？」

ヴィヴィオが私の服の裾を掴みながら尋ねて来るので、その頭を撫でながら

「はやて達の所さ、星光達を紹介しないといけないだろう？」

そう言うと、星光達は手をポンと叩きながら、次々に忘れてたなど言い始めた

「じゃあ行こうか？、はやて達の所にな」

私は星光達を連れ、はやての部屋に向かって行った

第2話に続くかもしれません

龍也とマテリアルと聖王と 第2話

第2話

星光達を紹介する為に、はやての部屋に移動しようとしたが一つ問題が発生してしまったそれは・

「雷刃！！そこを退け！！父上の肩の上は我の物だ！！」

肩の上の雷刃の足を掴み退けと怒鳴る王に対して

「やーだ！早い者順だもん！！だから肩車は僕の！！」

退く気の無い雷刃がしっかりと私の頭を両手で掴む

「なあ・・・星光どうすれば良いと思う？」

喧嘩をする二人をどうすれば良いか、星光に尋ねると

「雷刃と王に肩に捕まって貰い、私とヴィヴィオと手を繋ぐのはどうでしょう？」

ふーむ・・・リインとアギトのお気に入り奴だな・・・よしそれで行こう、私は良い案をくれた星光の頭を撫でながら

「雷刃、悪いが肩車ではなく、私の肩に捕まってぶら下がってくれ
るか？王もな」

二人にそう言つと

「うーん・・・パパが言うならそうする・・・よいしょ・・・」

私の右肩にぶら下がる雷刃と

「では我は左だな！父上お邪魔するぞ！」

そう言い左肩に王がぶら下がったを確認してから

「よし、それじゃあ星光とヴィヴィオは私と手を繋ごうな？」

「うん！パパ！！」

私の手を取るヴィヴィオと

「お父様、失礼します」

断りを入れてから私の手を取る、星光に笑みを零しながら、私ははやての部屋に向かい歩き出した

「・・・星光何故だろう？通り過ぎる人の目が点になっているのだから？」

六課内で隊員と擦れ違うと信じられないと言う顔をするので、どうしてかと星光に尋ねると

「さあ・・・私は判りませんね」

首を傾げる星光、やっぱり判らないか・・・私はそう思いながらはやての部屋に向かって歩いて行った、龍也達の姿を見えなくなると隊

員達は

「おい！今の見たか！！どう見てもなのは一等空尉にそっくりだったぞ！！」

「ああ、見た・・・しかもフェイト執行官とはやて二等陸佐に似ている子も居たぞ！！」

龍也達の姿を見た隊員達が集まり、なのは達に似ていると話す中一人の隊員が・・・

「まさか・・・八神大将となのは教導官達の子供・・・？」

ザワザワ・・・ロビーがざわめく

「いや・・・まさか・・・どうみてもあの子達は10歳くらいだぜ・・・幾らなんでもそりゃ無いだろう？」

ロビーに居た隊員達が、色々と憶測を話してる間に、龍也達ははよての部屋に到着していた

「さて・・・はやて達になんと言うべきか・・・」

部屋の前で何を話すか考えたが・・・思いつかないので

「正直に言うとするか・・・それじゃあ星光、雷刃、王、行くぞ？」

肩の上の雷刃と王と手を繋いでいる星光に、そう言い私ははやての部屋に入って行った

兄ちゃん何やるか・・大事な話があるからって、連絡があっただけ・
・部屋の中で何の話だろうと思いつながら待つ、待っているのは私だけではなく、なのはちゃんとフェイトちゃんに、ヴィータとシグナムも居る、皆何の用だろう？と言いたげに首を傾げながら待っている・・

コンコン！

「はやて、入るぞ」

その声と共に扉が開き、兄ちゃんが姿を見せるが・・私は兄ちゃんより兄ちゃんの回りに居る少女達に目を見開いた

「おお、オリジナルだ〜パパ、オリジナルが居るよ〜」

右肩のフェイトちゃん似の少女がフェイトちゃんを指差し笑い

「ふん、何を呆けた顔してるか、塵芥どもがっ!!」

むちゃくちゃ態度のでかい、私に似た少女が詰まらなそうに言い

「・・ふむ・・予想外の事が起きると動きが止まってしまうのですね・・実に興味深い・・」

考え深いと言いたげにコクコクと頷く、なのはちゃん似の少女・・
どういう事や・・私は子供が出来る様な事はしていない・・なのはちゃん達も同じ・・ではこの子達は何だ？と思い硬直していると

「兄貴？・・・そ・・・その・・・子供は何だ？」

ヴィータが兄ちゃんに尋ねると、兄ちゃんは笑いながら

「何か闇の書の欠片が、はやて達の姿をコピーしたそうだ、ほら皆自己紹介」

肩の少女達を下ろすと、次々自己紹介を始めた

「僕は、雷刃の襲撃者だよ！！よろしく！！」

フェイトちゃん似の少女が元気良く言い

「ふん、一度しか言わぬぞ・・・ちゃんと聞け！！我の名は闇統べる王だ！！」

私に似た少女が胸を張りながら言い、最後に

「私は、星光の殲滅者です、宜しくお願いします」

丁寧に頭を下げる、なのはちゃん似の少女の自己紹介が終ると・・・私の思考は漸くフリーズが終ったらしく、凄まじい勢いで情報を処理し始めた・・・えっ・・・闇の書の欠片・・・私達の姿をコピーした？・・・えっ何で？

「・・・・えっ・・・闇の書の欠片・・・ええええええっ！！！！！！」

私達はこの子達が闇の書の欠片と理解した瞬間、大声で絶叫した

「龍也・・・本当？この子達本当に闇の書の欠片なの？」

ソファーに腰掛けながら、フェイトちゃんが兄ちゃんに尋ねると

「そうらしいぞ？別に私は気にしてないがな？」

自分の周りに座る少女達を見ながら笑う兄ちゃんに

「危なくないんですか？・・・私達の姿をしていますが・・・それは闇の書の欠片なんですよね？」

なのはちゃんが少女達を指差しながら言うと、

「失礼ですね？高町なのは・・・人の事を指差し・・・尚且つそれ呼びわり・・・実に不快ですね」

星光と名乗った少女がなのはちゃんを睨み

「本当、失礼だよ！！！」

大声を上げる、雷刃と

「ふん！やはり我らの事を理解してくれるのは父上だけだな！！」

私を睨む王・・・兄ちゃんは彼女達の頭を撫でながら

「なのは・・・彼女達だって生きてる・・・それ呼ばわり酷くないか？」

ビクッ！！やばい兄ちゃん怒ってる・・・兄ちゃんはしっかりとなのはちゃんを見据えながら言うと

「す・・すいません・・少し驚いちゃって・・ごめんね・・それ呼ばわりなんかして」

殺気に当てられたのか身を竦めてから、なのはちゃんが謝ると3人とヴィヴィオはそっぽを向いてしまった・・どうやらなのはちゃんは嫌われたようだ・・そんな事を思っているとシグナムが

「兄上は、その子達をどうするおつもりですか？」

・・シグナム・・そんなんわざわざ聞かんでも判るやろ・・多分兄ちゃんの事やから・・

「うん？星光達か？ヴィヴィオと同じ様に養女にするよ？」

星光達の頭を撫でながら、兄ちゃんは予想通りの発言をした、啞然とするのはちゃん達を横目に見ながら私は立ち上がり

「あーっと・・星光と雷刃と王やったね・・知ってると思うけど・・八神はやてやよろしく」

手を伸ばしながら言うと、3人は集まりひそひそと

「どう思う？・・僕は演技じゃないと思うけど？」

「確かに、悪意は感じられませんかね・・」

「我は信じようと思うぞ？父上の妹だ、つまり我らの姉になるのでは？」

ひそひそと話す3人を見てみると、ヴィータとシグナムが隣に立ち
「あー、私のことも知ってると思うけど・・・ヴィータだ、よろしく
な」

「シグナムだ、よろしく」

ヴィータとシグナムも手を伸ばしながら、自己紹介をする。3人は
私とヴィータの方を向いたと思うと、私達の手を握りながら

「よろしく!!」

はしゃぎながら元気良く言う雷刃と

「よろしくお願い致します」

微笑みながら言う星光に

「はははは!! 特別に塵芥ではなく、はやてとヴィータにシグナム
と呼んでやろう!!」

態度がやたらでかい王に苦笑しながら、握手をしていると

「「その私達は・・・」」

なのはちゃんとフェイトちゃんが近付いた瞬間

ブイ×4

そっぽを向く星光達とヴィヴィオ・・・どうやらまだ怒っているよう

だ、その所為でOrzで蹲りなのはちゃんとフェイトちゃんはぶつぶつと

「「遠のいていく・・龍也^{さん}の・・彼女の・・妻の座が・・遠のいていく・・」」

兄ちゃんにはその眩きは聞こえなかったようで、何事も無いように
「それじゃあ・・ティアナ達にも紹介しに行こう、ほら星光達行くぞ？」

はいいいと言ひ、兄ちゃんにしがみつく星光達を見ながら、私達も兄ちゃんと一緒に演習場に向かった

「「・・・はっ！！待つてください！！」」

兄ちゃんが居なくなったことに気付いたのか、私達と同じ様に演習場に移動を始めた

「訓練を止めて全員集合！！」

演習場で訓練中のスバル達とチンク達を呼ぶ、暫く待っていると

「龍也さん・・な・・んですか・・その子供は？」

ティアナとスバルが目を開きながら尋ね

「・・八神の子供・・いや・・それは無いな・・」

「ヴィヴィオと同じか？」

首を傾げるチンクとノーヴェ達を見ながら

「紹介しよう、新しく私の家族になった、星光達だ、仲良くしてやつて欲しい」

降ろした星光達の頭を撫でながら言うと

「龍也様の新しい家族・・・それは良いのですが・・・はやて達に似ているのは・・・どういう事ですか？」

首を傾げながら尋ねて来るセツテに

「なんかロストギア何だそうだが・・・大した問題じゃないだろう？」
何事も無いように言うと

「ロストギア！？大丈夫なんですか！！」

スバルが慌てて尋ねて来るので

「大丈夫、こんなに可愛いんだぞ？」

星光を抱き上げながら言うと

「いや・・・でもロスト・・・ガン！！痛い！！！！」

ティアナがロストギアと言おうとすると、王と雷刃が同時にティアナの足を蹴る

「我らをロストギア等と呼ぶな！！この塵芥がッ！！！」

「僕達はパパの養女だ！！ロストギアじゃないっ！！」

脚を抑えて蹲るティアナを睨みながら、王と雷刃が怒鳴る、その背後ではやて達が

「今のはスバル達が悪いで？」

「怒らせるような事を言うからだな」

こくこくと頷くはやてとヴィータ

「チンクは驚かないのか？」

「八神の事だからな、ロストギア云々より、生きる者全てに幸せになる権利があるの方が大事なんだろう？」

しみじみ語り合う、シグナムとチンク達を見ながら考え事をしていくと

「お父さん？何を考えてるんです？」

エリオが尋ねて来るので

「いやな・・・何時までも星光とかじゃ可哀想だから・・・名前を考えているんだ」

家族になるのだからちゃんとした名前を・・・と考え最初に抱き上げ

ている星光から考える事にした

星光・・星・・・星奈

「よし！！星光は今日から星奈だっ！！」

抱き上げていた星光・・いや星奈にそう言つと

「星奈・・それが私だけの名前・・嬉しいです！！」

嬉しいと笑う星奈を降ろし、次に雷刃を抱き上げ

雷刃・・雷・・雷華

「雷刃は今日から雷華だっ！！」

雷華はにこつと笑いながら

「僕は雷華・・今日から八神雷華だね！！」

本当に嬉しそうに笑う、雷華を降ろし最後に王を抱き上げる

「父上！！良い名前を期待しているぞ！！」

笑う王の名前を考える

王・・・無理だ・・王は女の子には似合わない・・闇で考えよう・・
闇・・夜・・静・・

「静夜だ！！王の名前は静夜だ」

ちよつと時間が掛かったが王の名前も決めた、所で

「はやて、ちよつと星奈達を頼む」

星奈達をはやてに預ける

「それは良いけど・・・どうしたんや？」

首を傾げるはやてに

「養子縁組の書類を出してくる、少し時間が掛かると思うが・・・
人とも良い子にしているよ？」

「・・・はい」

返事を返す3人とヴィヴィオの頭を撫でてから、私は本局に向かい
書類を書き始めた

長女は・・・静夜

次女は・・・星奈

三女は・・・雷華

四女はヴィヴィオ

と養子縁組の書類を書き上げ、受付に渡してから私は六課に戻った。
・思ったより時間が掛かり、戻ったのは日が暮れる直前だった、六
課に戻るなり抱きついてくる静夜達に笑みを零しながら

「はやて、今日は悪いが家に戻る・・・静夜達の部屋の準備をしないといけないからな」

私は事件後、家を買った・・・それがかなり大きい家なのだが・・・暮らしているのが私とヴィヴィオのみで空き部屋が沢山ある、だから今日は静夜達の部屋を準備しようと思い、そう言つと

「了解や、気をつけて帰つてね？」

二つ返事で許可をくれた、はやてに礼を言つてから私達は家に向かった

「・・・大きい・・・」

家の前で硬直する3人、だがその反応は正しいと私は思う、レジアスが紹介してくれた所で買った家だが・・・大きすぎる・・・流石にすずかの家と比べると小さいが・・・それでも私とヴィヴィオには大きすぎるので、基本六課に居たが・・・今日からはこの家で暮らせるな家族が増えたから・・・そう思いながら家を見上げるそれは3階建の建物だった

一階はガレージとアイギナ達の部屋があり、普段は3人が掃除等をしてきている

二階は6部屋ある、大きなフロアになっており

三階はキッチンやお風呂といったスペースになっている

「さっ！静夜達の部屋を決めるぞ」

呆然とする静夜達を連れて久しぶりに私は自宅に戻った

「家の中も凄い・・・部屋が6個もある・・・」

驚き辺りを見回す、雷華に

「使ってるのは3部屋だけだけだな・・・」

私とヴィヴィオは同じ部屋で寝ているし、使っている部屋も夜勤が
終わった、はやてやなのは達が使っている部屋だから、大して使っ
ている部屋ではない

「静夜はここで、雷華はこっち、星奈はここな？」

私の部屋の両隣に静夜と雷華、向かい側を星奈の部屋にする

「広い・・・それにTVとかもある・・・」

部屋を空けて驚く星奈達に苦笑しながら

「さっ・・・そろそろ夕ご飯にしようか？」

時間的にそろそろ夕ご飯の準備をするのに丁度良い時間なので、4
人を連れて三階に移動した

「パパ！何を作るの？」

笑いながら尋ねて来るヴィヴィオに

「ヴィヴィオは何を食べたい？」

頭を撫でながら尋ねると

「んーとヴィヴィオね・・・オムライスが食べたい!!」

オムライスか・・・良し直ぐに準備をするか・・・手際よく5人分のオムライスを作り上げる・・・やはり火力が強いから直ぐ出来たな
と思い静夜達の前にオムライスを並べると、目を輝かせる静夜達の頭を撫でてから席に座り

「さっ・・・食べようか・・・頂きます」

「・・・頂きます!!」

手を合わせてから勢い良く食べ始めた、静夜達に笑みを零しながら私もオムライスを口に運んだ・・・食事の後はお風呂に入り寝る為の準備をしていると

「・・・我も（私も）（僕も）一緒に寝る!!」

枕を持って一緒に寝ると言う静夜達と一緒に寝る事にした・・・今日から始まる騒がしく賑やかな生活を想像しながら、私は眠りに落ちた

第3話に続く

龍也とマテリアルと聖王と 第3話

第3話

「むにゃ．．朝．．？」

目が覚めたけど．．まだ眠いや．．もう少しパパと一緒に寝よう．．
そう思い隣で寝ている筈のパパに手を伸ばすが、そこにもうパパは
居なかった、その事で一気に僕の意識は覚醒した

「えっ．．パパが居ない．．」

パパが居ない．．それはとても悲しいと思い．．ベッドから抜け出す

「皆寝てる．．」

静夜と星奈にヴィヴィオも寝てる．．しっかりと布団が掛けられて
る事から、パパが起きた時にやってくれたという事が判る

「パパ．．どこかな．．」

無性に逢いたくなり、部屋から出ると

「むっ．．もう起きたのですか？」

この声は．．恐る恐る振り返る．．そこには．．

「どうなされたのですか？．．その様な泣き出しそうな顔をして．．

」

僕が苦手な人物・アイギナが立っていた

「その・・・あの・・・パパ・・・が居なくて・・・寂しくて・・・」

思わずしどろもどろで返答すると

「そうですか・・・では王の所へ行きましょうか？」

手を伸ばし笑いかけてくるアイギナに驚いた、僕のイメージではアイギナは恐ろしく怖い存在だ・・・それが笑いながら話しかけて来た・・・それだけで僕は目を見開いた

「どうなされたのです？・・・王の所に行くのではなかったのですか？」

手を伸ばしながら首を傾げてくるアイギナに

「う・・・うん・・・パパの所に連れてって」

僕はその手を握りながら言った、無言で移動する中僕は

（アイギナの手・・・暖かい・・・パパみたいだ・・・）

怖い筈だったのに・・・そう思っているとガレージの前で立ち止まる
アイギナ

「ここに王が居ますよ、それでは私は失礼します・・・」

直ぐに歩き去ろうとするアイギナに

「アイギナ!!」

声を掛けると驚いたように振り返ったアイギナに

「ありがとう!」

笑いながら礼を言つと

「御気になさらず」

につこりと笑みを浮かべながら歩き去ったアイギナに

「パパの言つとおりだった・・アイギナは怖くなかった・・」

昨日は怖く見えた・・でも今日のアイギナはパパみたいに優しく見えた・・僕はそんな事を思いながらガレージに入った

「ふむ・・やはり少し調子が悪いかな・・」

車の様子を見ているとパパの後姿が見える

「やれやれ・・乗ってなかったツケだな・・今度ジェイルにでも見て貰うか・・」

そつ呟きながら振り返ったパパは、僕に気付いたのか驚いた顔をしながら

「雷華?どうしたんだこんなに早く?」

と尋ねて来るパパに

「朝起きたら・・・パパが居なかったから寂しくて・・・探してたんだ・
」

若干俯きながら言うと

「そうか・・・悪かったな、寂しい思いをさせて・・・」

ぎゅっと抱きしめてくれるパパに頭を当てながら

「ねえ・・・パパどうして車見てたの？」

そう尋ねると

「何・・・今度皆で遊園地が買い物に行こうと思ってな、様子を見て
たんだ」

と笑うパパに

「遊園地？何時行くの？」

僕はそっちのほうがりになり尋ねると

「車の調子が良くなったらさ・・・さっ・・・朝ごはんの準備に行こう
か？」

僕は頷き、パパにだっこされたまま、三階に向かった

「さて・・・雷華は何が食べたい？」

エプロンを着けながら尋ねて来るパパに

「うーん・・・何でも良いよ？パパが作ってくれるなら」

と返事を返すと

「了解、少し待っていてくれよ？」

と笑いながらキッチンに入って行った、パパの後姿を見ていると

「むにゃ〜パパおはよう・・・」

目を擦りながらヴィヴィオと

「父上・・・おはようだ・・・」

「お父様・・・おはようございます・・・」

同じ様に目を擦りながら、星奈と静夜が姿を見せる、するとキッチンから

「皆おはよう、もう直ぐ朝ごはんが出来るから顔を洗っておいで」

はーいと返事をし、洗面所に歩いて行くヴィヴィオ達を見て

「あつ・・・僕まだ顔洗って無いや・・・パパ僕も顔を洗ってくるね」

パパに声を掛けてから僕も洗面所へ向かった

パパ・・・か・・・朝食の準備をしながら私は4人の事を考えていた結婚もしてないのに4人の子持ちか・・・まあこれはこれで良いなと思ひ、朝食の準備を終える

「ホットケーキか・・・久しぶりに作った気がするな・・・」

はやてが小さい頃は、良く作っていた気がする・・・静夜を見て、昔のはやてを思い出したから作ろうと思ったんだな・・・そう思いながら5人分のホットケーキを皿に移し、上から蜂蜜を掛けて持っていたと、既に静夜達が座って待っていた

「ほら、朝ごはんだよ」

ホットケーキの皿を全員の前に置いてから、自分の席に座り

「頂きます」

手を合わせながら頂きますと言うと、静夜達も手を合わせ

「」「」「頂きます!!」「」「」

元気良く食べ始めた静夜達の姿を見ると、どうしても昔のはやて達を思い出すな、と思いながら自分の分のホットケーキを口に運んだそれはとても甘く、本来なら苦手な筈なのにそれはとても美味しく感じた・・・

「さてと・・・私は仕事に行くから、ちゃんとお留守番していてくれよ?。」

玄関で靴を履きながら言うと、星奈が

「はい、ちゃんとお留守番をしています」

にこつと笑う星奈の頭を撫でながら

「それじゃあ、シャルナ、クレア・・静夜達を頼むな」

静夜達の後ろの立つ、シャルナとクレアに言うと

「お任せを」

「大丈夫ですから、安心して仕事に向かってください」

頼もしい返事を返す二人にもう一度頼むと言ってから

「それじゃあ、皆行つて来るな？」

屈みこみ静夜達の頭を撫でてから、玄関を出ようとする

「「「行つてらっしゃい！」「」「」

笑顔で行つてらっしゃいと言う、静夜達に

「ああ、行つて来ます」

返事を返し、私は家を出た

「王、それでは行きましようか？」

玄関ではアイギナが待っていた、基本二人は家で待機で一人を連れて行動している、今日はアイギナは私の付き添いをする日なのだ

「ああ、行こう」

アイギナに返事を返し、二人で六課に向かって行った

「おっ！旦那おはようさんっす！」

六課に着くと最初にヴァイスに会い、手を振りながら挨拶をしてくるヴァイスに

「ああ、おはようヴァイス」

同じ様に笑いながら返事を返し、自分の執務室に向かった

「・・・しかし・・・広いよな・・・」

執務室を見て呟く、事件後に作られた私の執務室だが・・・広く・・・少々居心地が悪い

「まあ良いか・・・さてと書類整理でも始めるか・・・」

昨日早くから仕事を止め、静夜達の事をやっていたので大分溜まっているが・・・

「・・・カタカタ・・・むっ・・・またか・・・カリムもしっこいな・・・」

書類整理をしていると、聖王教会から又管理局を辞め、正式に所属

してくれと要請が来ているが・

「断る・・・っとこれで良いな・・・」

最初の方はちゃんと書いていたが・・・いい加減、鬱陶しくなってきたので適当に断ると返信する、それからは六課関連の書類なので一気にやり始め・・・昼少し前に溜まっていた書類を全て片付けた

「ふう・・・流石に疲れたか・・・」

椅子に腰掛け呟くと

「王、何か飲み物でも淹れましょうか？」

同じ様に書類を整理していたアイギナが、尋ねて来る

「ああ・・・頼む」

頼むと直ぐにお茶を淹れに行ったアイギナと入れ違いに

「お兄様、今良いですか？」

リンが笑いながら入ってくる

「リンか、どうした何か用か？」

楽しそうに笑うリンに尋ねると

「はい用です！えーと・・・仕事中でしたか？」

首を傾げながら、仕事中でしたかと尋ねるリインに

「いや、今終わった所だから大丈夫だよ」

と笑うとリインはとことこと私の前に歩いて来て、私に抱きつく

「どうしたんだ？」

急に抱きついて来た、リインに首を傾げると

「ん・・・リイン夢見たです・・・またお兄様が居なくなっちゃった夢・・・」

抱きつきそう言うリインを抱き上げ

「大丈夫、もう私はリイン達を置いて居なくなったりはしないよ」

背中を撫でながら言う

「・・・それなら良いです・・・」

ぎゅっと小さな手に力を込め、私から離れまいとするリインの背を撫でていると

「王・・・すいません少々遅くなりました」

私の机の上に二人分のコップを置くアイギナ

「アイギナの分じゃないのか？」

もう一つは自分用に用意したんじゃないかと尋ねると

「いえ・・部屋の中からリイン様の気配がしたので、戻ってリイン様の分を用意しましたので、これはリイン様の分です」

と笑うアイギナにリインは、私に抱きついたまま

「アイギナ・・リインは様っていうの嫌です・・」

と横目でアイギナを見ながら、リインが言うとアイギナは

「はっ!?!?・・しかし・・リイン様は・・王のご家族ですし・・様をつけるのは当然だと思うのですが・・」

困ったようなアイギナに

「関係無いです、リインは様なんて欲しくくないです!だからリインと呼ぶです!」

はつきりとアイギナの目を見て言い切ったリインとは逆に

「しかし・・いえ・・私はどうすれば王よ・・教えてください・・」

動揺し私に助けを求めるアイギナに

「諦めて、リインの言うとおりにした方が良いな・・こう見えてリインは頑固だから・・」

何時の間にか膝の上に移動した、リインの頭を撫でながら言うと

「う・・・判りました・・・リインさ・・・ごほん！・・・リイン・・・これで宜しいでしょうか？」

アイギナがリインと呼ぶと、リインは笑いながら

「はいです！それで良いですよ！-！」

元気良く言うリインの頭を撫でながら、アイギナが用意してくれたお茶を飲んでいると

「そうです！もう直ぐお昼の時間ですから、お兄様一緒に食堂に行きましょう-！」

私の膝の上から降りながら言う、リインに頷き椅子から立ち上がり

「アイギナ、私とリインは食堂に行くが・・・お前は どうする？」

一緒に行くかと尋ねると

「いえ・・・私は後で行きますので、お気になさらずリインさ・・・リインと一緒に行って来て下さい」

一瞬様と言いかけたが、言い直したアイギナに頷き、二人で食堂に向かった

「ん〜と・・・どこで食べましょうか？」

料理を受け取り何処で食べるかと尋ねて来る、リインと一緒に空き席を探していると

「兄！リイン！ここが空いてるぜ！」

食堂の奥から、私とリインを呼ぶアギトの声が聞こえる

「そうだな・・アギトと一緒に食べようか？」

隣のリインに尋ねると、リインは

「はいです！アギトちゃんと一緒に食べるです！」

頷くリインと一緒にアギトの呼ぶ席に向かった、するとそこには、アギトだけではなくルーテシアの姿もあった、二人は私とリインの姿を見つけると

「兄！リイン！ほらほら早く座れよ！」

席に座りながら、早く座れと言うアギトと

「龍也、リイン、早く座って一緒にご飯食べよう」

座れと催促する、二人に頷き席に座り食事を始めた

「もぐもぐ・・美味しいな、兄」

おかずを食べながら、美味しいと言うアギトに

「そうだな、確かに美味しいな」

食堂のコックの腕も上がって来たのか、初めて六課に来た時より美味しいと感じた

「龍也・・・昨日聞いたけど・・・はやて達に似た子供を育てるって決めたんだってね？」

食事を終えたところでルーテシアが尋ねて来るので

「そうだよ、それと3人の名前は、静夜と星奈に雷華って言うんだ」

3人の名前を教えると

「静夜と星奈に雷華だね・・・ちゃんと覚えた・・・今度遊びに行く」

遊びに来ると言うルーテシアに

「ああ、きつと皆も喜んでくれると思うよ」

そんな話をしている内に休憩時間が終わったので、執務室に戻り仕事を再開した

「書類整理が多いな・・・上の役職というのは実に面倒だ・・・」

書類の整理をしながらそう呟いた・・・事件後に大将に昇格したが、やる仕事が倍近く増えたのでそうばやいた

「まあ・・・仕事が増えた分・・・給料も増えたので・・・イーブンって事か・・・」

給料が増えたから、静夜達も育てる事が出来る、だから仕事が増えたのは良かったのかもしれない

「・・・そうだ・・・静夜達も学校に通わせようかな・・・」

ヴィヴィオは今、ヒルデ魔法学院に通っているので、静夜達も通わせようかと考えていると、ジェイルから連絡が入る

「龍也・・・すまないが・・・クレアに言ってくれないか・・・車の様子を見に来たんだが・・・クレアが入れてくれないんだ・・・」

映像では家の前で難しい顔をしているジェイルと、ガレージの前に立ち塞がっているクレアの姿が映っていた

「・・・すまん・・・クレア達に連絡を入れるのを忘れていた・・・クレア悪いがジェイルを家に入れてやってくれ」

ガレージの前のクレアに言うと

「判りました、どうぞ」

頷き、ガレージを開けたクレアは、家の中に入って行った

「やれやれ・・・休暇だから、龍也の車の様子を見に来たのに・・・入れてくれないから困ったよ・・・」

工具箱を持ち上げながら、呟くジェイルに

「すまん、連絡を忘れていた私が悪かった・・・」

ジェイルにモニター越しで謝ると

「いや・・・気にしなくて良いよ・・・私とお前は親友だろう?」

笑いながらジェルはガレージに入って行った・

「どうやら・私は良い親友を持てたようだな・」

そう呟きながら書類整理を再開した、

「んっ・・やっと終わった・」

日が暮れ始めた頃漸く書類整理が終った

「さてと・・帰るとするかな・」

静夜達も待っているので家に帰ろうと、執務室を出ると

「あっ・・お兄様仕事終ったですか？」

リインが執務室の前の廊下の壁に背中を預け、待っていた

「どうしたんだ？リイン？」

どうして待っていたのかと思い尋ねると

「リインは今日早上がりです！だから今日はお兄様の家にお泊りしたいのですが・・良いですか？」

笑いながら尋ねて来るリインの頭を撫で

「もちろん良いよ、リイン一緒に帰ろうか？」

「はいですッ！」

元気に頷く、リインと一緒に家に帰ろうとすると

「おーい、兄貴！リイン！待ってくれよ！私も早上がりだから私も兄貴の家に行って良いか？」

走ってきながら尋ねて来る、ヴィータに

「ああ、ヴィータも一緒に帰ろうか？」

「おう！」

私はヴィータとリインと一緒に家に向かって行つた

「パパ！おかえり！！・・・あっ・・・ヴィータ姉とリインもおかえり！！！」

玄関に入るなり走ってくる、雷華を抱き上げながら

「ただいま、雷華」

ただいまと言っていると

「父上！おかえり！我は良い子で待っていたぞ！」

「お父様おかえりなさい・・・おや・・・ヴィータ姉様とリインも一緒ですか・・・二人もおかえりなさい」

「パパ！ヴィヴィオ良い子で待ってたよ！」

凄まじい勢いで突撃してくる、静夜達を受け止め、4人の頭を撫でているとヴィータが

「兄貴本当に静夜達に懷かれてるんだな」

と笑うヴィータと

「本当ですよ、お兄様お父さん見たいですよ」

リインも笑いながらそう言う

「そうか？そう見えるなら嬉しいな・・・さっ・・・何時までも玄関で話してるのも何だから家の中に入ろう」

リビングにヴィータ達と一緒に向かった

「ヴィータ達は先に風呂に入ってくると良い、その間に私は夕食の準備をしているから」

ヴィータに言う

「んー、兄貴がそう言うなら・・・先に風呂に入ってくるぜ・・・ほれ静夜達も行くぞ」

「・・・はい」「」

ヴィータは静夜達とリインを連れて風呂場に向かって行った

「さっ私は腕によりを掛けて、夕食でも作るか！」

私はいつもの黒コートを脱ぎ、はやてから貰ったエプロンを身に着け料理を始めた

「ふう〜ヴィータ姉いいお湯だったね〜」

頭を拭きながら雷華が言う

「そうだな、いいお湯だったぜ」

雷華の頭を撫でながら言うと

「ヴィータねね！ヴィヴィオも！頭撫でて！」

と笑うヴィヴィオに頷き、頭を撫でながらリビングに向かうと

「ん？もう出たのか？・・・丁度良かったな・・・今出来た所だ」

兄貴は料理を入った皿を机の上に置きながら、私達に笑いかけてきた

「おお！流石父上！凄く美味しそうだ！」

「本当です、流石はお父様ですね」

机の上の料理を見ながら笑う、静夜と星奈に吊られて机の上の料理を見る

「おお・・・凄げえ・・・」

私も凄いと言ってしまった、魚のフライにスパゲッティにスープ、更に兄貴の手作りパンが所狭しと並べられていた

「ふふ・・・つい張り切って作りすぎてしまったかな？」

困った様に笑う兄貴に

「全然大丈夫です！お兄様の料理なら幾らでも食べれるです！」

リインが笑いながら一番最初に席に着く、それに吊られる様に静夜達も席に着き

「ほら！ヴィータ姉も早く座って食べようよ！」

「そうだ！折角の父上の料理が冷めてしまつぞ！」

「お父様の隣の席をどうぞ、ヴィータ姉様」

「ヴィータねね早く！！！」

笑顔で早く座れと言う静夜達に

「ああ、今座るぜ」

兄貴の隣に腰掛けると

「さっ・・・食べるとしよう・・・頂きます」

「」「」「」「」「」「」「」「」

手を合わせから、食事を始めた

「んっ・・・ふうく食った・・・食った・・・美味かったぜ」

口を拭きながら兄貴は

「口に合ったなら何よりだ」

穏やかに笑いながら兄貴は立ち上がり

「さっ、静夜達は歯を洗っておいで」

静夜達に兄貴が言うと

「・・・・・・はい」

とてとて洗面所に歩いて行くのを見送り、兄貴と暫く話をしてい
ると

「父上、今日も一緒に寝たいぞ・・・」

一緒に寝ると言う静夜に兄貴は頷き

「判った、一緒に寝ような」

と笑い静夜を抱き上げ

「それじゃあ、私はもう寝るよ・・・ヴィータとリィンは空き部屋を
好きに使ってくれ」

と言に残し自分の部屋に向かって行った、兄貴の後ろ姿を見送ってから、私とリインも寝る為に空き部屋に向かって行った

「はぁ・・・お兄様と一緒に寝たかったです・・・」

ベッドで呟くリインに

「まあ・・・仕方無えよ」

と言うとリインは

「むう・・・でもリインはお兄様と一緒に寝たかったです!!」

足をバタバタさせる、リインにどうしようかと思っていると

「ヴィータ姉様・・・起きてますか」

星奈が私とリインの部屋に入ってくる

「どうした？星奈」

寝巻き姿の星奈にどうしたと尋ねると

「はい・・・ヴィータ姉様達もお父様と一緒に寝ましょう」

にこつと笑う星奈にリインは既に跳ね起き

「寝るです!!」

枕を持って星奈の隣に立つが・・私は

（どうしよう・・兄貴と一緒に寝る・・嬉しいような・・恥かしいような・・）

と悩んでいると星奈は私の手を握り

「早く行きましょう」

「ちよつと・・待て引つ張るなよ・・行くから・・兄貴の部屋に行くから引つ張るな」

強引に引つ張り星奈に連れられて私は兄貴の部屋に向かった

「ん？ヴィータとリン？どうしたんだ？」

風呂に入っていたのだろうか、濡れている銀髪を拭きながら尋ねて来る兄貴に

「その・・星奈と一緒に寝ようと言って、私達の部屋に来たから・・来たんだけど・・」

頭を掻きながら言うと兄貴は

「そうか・・じゃあ一緒に寝ような」

そう笑う兄貴の隣に横になると、その回りに静夜達が寄つて来て横になり直ぐに眠ってしまった、私もそれに吊られるように眠りに落ちた・・ヴィータが眠り落ちた頃・・龍也は静夜達の頭を撫でながら

「可愛いな・・静夜達は・・養女^{むすめ}が増えて私は幸せ者だな」

龍也は本当に幸せそうに笑いながら眠りに落ちて行った

第4話に続く

龍也とマテリアルと聖王と 第4話

第4話

「「「行つてらっしゃい!!」」」

仕事に行く、父上とヴィータとリインを見送り、我達はリビングに戻った、暫く本やゲーム等をして暇をつぶしていたが・

「うー暇だよーパパが居ないから寂しいし」

雷華がソファーに横になり、足をバタバタさせながら言う

「うるさいですよ、雷華、私は本を読んでいるのですから静かにしてください」

星奈が雷華を軽く睨みながら言うすると

「うー、だって暇なんだもん!!パパも居ないし!!やる事も無いんだよ!!」

ソファーの上で大声を出す雷華に

「やかましい!暇なのは我達も一緒だ!!」

置いてあつたぬいぐるみ(狸)を雷華の顔目掛け投げつける

「もふっ!!」

直撃し静かになる、雷華を見ながら

（まったく！暇なのは我だって同じだ！父上が居ないと暇で寂しいのは・・・我だって同じだ・・・）

心の中でそう呟いた・・・暖かくて・・・大きくて・・・優しい・・・父上が居ないとそれだけで寂しいし暇なのだ・・・反対側のソファーを見る・・・

「・・・・・・・・」

星奈もパラパラと本を見ているが・・・大して頭には入ってないだろう・・・そう思っている

「静夜！雷華！星奈！一緒にお絵かきしよっ！！」

さっきまで姿の見えなかったヴィヴィオが画用紙と鉛筆を持って、リビングに入ってくる

「絵か・・・良いな・・・それで何の絵を書くんだ？」

ヴィヴィオから画用紙を受け取り尋ねると

「パパの絵！皆でパパの絵を描こっ！！」

父上の絵か・・・うん・・・良い我達は絵を書き始めた・・・暫く無言で時間が流れる・・・

「出来ました・・・良い出来です・・・」

完成したと微笑む星奈に

「どれ、どんな出来か我が見てやろう！」

「ちょ・・待ちなさない！静夜！！」

止める様に言う星奈を無視して画用紙を見る

「・・・これはお前の願望だろうが・・・」

星奈の画用紙に書かれていた父上の絵は、星奈をお姫様抱っこしている絵だった・・・だから我が願望だろうと言うと

「そう言う静夜の絵はどうなんですか！」

「待て！止める！！」

止めようとするがそれより早く星奈が画用紙を取り上げる

「静夜だって似たような物じゃないですか！」

そう言いながら我の前に画用紙を突き付ける、星奈・・・その画用紙に描かれていた父上の絵は・・・我に膝枕をしてくれる絵だった・・・

「別に良いではないか！我がどんな絵を描こうと我の自由だ！！」

星奈の手から画用紙を引つたくる・・・お互いに睨み合っていると

「出来た」

雷華が出来たと言うので

「雷華！お前はどんな絵を描いたんだ！我達に見せろ！」

星奈と一緒に雷華の手の中の画用紙を覗き込む・・そこには雷華を肩車しながら遊園地を歩く父上の姿が描かれていた

「えへへ昨日パパが教えてくれたんだ〜今度皆で遊園地に行くんだって！」

嬉しそうに笑う雷華に

「本当ですか！お父様がそう言ったのですか？」

雷華に尋ねる星奈に雷華は

「うん！パパが言ってたんだよ！」

雷華が笑いながら言う・・我はその声を聞きながら

（遊園地・・素晴らしい・・いまから楽しみだな・・）

何時行くかも判らない遊園地の事を考えていると

「ヴィヴィオも出来た〜」

ヴィヴィオが笑いながら我達の前に画用紙を見せながら

「見て見て！良く描けてるでしょ！〜！」

その画用紙には我と星奈と雷華に父上とヴィヴィオが描かれていた

「ヴィヴィオね！静夜達が来て嬉しいの！だからこの絵描いたの！」

にこやかに笑うヴィヴィオの絵が一番上手いと我は思った・

「んー次何やるうか・・パパが帰ってくるまで大分時間があるし・

」

絵の後は何をするかと雷華が言っと、星奈が

「そつだ！お弁当をお父様に作るのはどうでしょう？」

お弁当・・父上にお弁当を作る・

「星奈！最高のアイデアだ！」

父上の所に行けるし、我達が作ったお弁当を食べて貰える・・実にいいアイデアだと思い言っと

「でも・・火とかは僕達だけじゃ使えないよ？パパが駄目だって言っただよ？」

雷華が言う・・確かにその通りだ・・我達だけの時は火を使っただ駄目だ、と言われていたのでどうしようかと考えていると

「そつだ！クレア！クレアに見て貰えばいいんだよ！」

ヴィヴィオが笑いながら言う・・クレア・・そつだクレアが居れば我達だけじゃない・

「よし！クレアに頼みに行こう！」

「うん！！」

我達は一階に居るクレアの元へ向かって行つた

「王にお弁当ですか？良いですよ、作りに行きましょう」

一階のクレアに頼むと直ぐに了承してくれたクレアと共に三階に戻つた

「さてと・・・サンドイッチでも作りましょうか？」

エプロンを着けながら笑うクレアに教わりながらサンドイッチを作る、ヴィヴィオは見学となっている

「パンにマヨネーズを塗って・・・そうそう上手ですね」

雷華がパンにマヨネーズを塗り

「これで良いのですか？」

その上に星奈がレタスとトマトをのせ、最後に我が

「これで完成だな！」

ハムをのせてからパンを上のにのせ、半分に切る

「はい、お上手ですね」

と笑いながらクレアはサンドイッチを弁当箱に入れていく

「んーハムだけじゃパパも飽きちゃうから・・・あった！昨日の魚のフライ！これも使おう！」

雷華が冷蔵庫から魚のフライを取り出す

「フライですか・・・じゃあマヨネーズよりタルタルソースの方が良いですね・・・」

クレアが冷蔵庫から瓶を取り出し我に手渡してくる

「それじゃあ、今度は静夜がパンにソースを塗ってくださいね」

と笑うクレアに頷きパンにソースを塗り、隣の星奈に渡す

「フライをのせて・・・上にレタスをのせて・・・」

フライとレタスをのせて雷華に手渡し

「これで完成！」

雷華がパンをのせ、半分に切る

「はい、お上手ですね・・・さてと・・・これでお弁当は完成ですね」

大きめの弁当箱が一杯になった所でクレアが笑う

「さっ、皆手を洗ってくださいね、洗い終わったら着替えて王の所

に行きましょう」

クレアに頷き手を洗ってから、我達は父上の仕事場である機動六課に向かつて行った

「んー兄ちゃんと一緒だと仕事が捗るわ」

私は現在はやての部屋で一緒に書類を纏めていた

「私が居なくてもはやての仕事は早いだろう？」

自分の分の書類を纏めながら言うと

「ちつつ・・兄ちゃん甘いな」私は兄ちゃんが居るだけで25%の仕事が早くなるんやで？」

と笑うはやてに

「そういう物なのか・・」

と返事を返し書類に目を通す・・

「はやて、またカリムから聖王教会に所属しろと書かれた書類が来ている・・」

半分呆れながらはやてにその書類を手渡す

「ちっ！またか・・・いい加減カリムも諦めれば良いのに・・・」

はやてはそう言いながら立ち上がり、その書類をシュレッダーに掛けた・・・

「何回言ってもこの書類が来る・・・一体どうすればいいと思う？」

これで100枚目の書類なので、いい加減面倒になってきたので言う

「とにかく断り続ければ良いと思うで、下手に聖王教会に行けば監禁されるかも・・・」

ありえる・・・私の直感も一人で聖王教会に行くなど言っているので
頷く、月に三回聖王教会に顔を出しているが・・・一人で行った事はない
必ずはやてかヴィータ、または六課のメンバーと一緒にいるのだ・・・
だからはやての言う事が正しいと思い頷き仕事を再開すると

コンコン

ノックの音と共に扉が開き

「父上！」

「「パパ！」」

「お父様！」

静夜達が走って来て私に抱きつく

「静夜？どうして・・・」

家に居る筈の静夜に驚いていると、その後ろからクレアが姿を見せ

「静夜達が王にお弁当を作って持って行く、と言うので連れてきました」

クレアの説明に納得していると、静夜が弁当箱を私に差し出し

「父上！我達が頑張って作ったんだ！だから食べて！」

笑いながら言う静夜達に頷き、弁当箱を開ける

「はは・・・一杯入ってるな」

弁当箱にぎっしりと入っているサンドイッチを見て、笑いながら一つ取り出し口に運ぶ

「どう？パパ美味しい？」

雷華が私の顔を覗き込み美味しいかと尋ねて来るので

「ああ、すごく美味しいよ」

食べながらヴィヴィオ達の頭を撫でていると

「良いなあ、兄ちゃんお弁当作って貰えて・・・はい！はやて、はやての分だ！」

静夜がはやてのサンドイッチを手渡し笑う

「えっ・・・兄ちゃんに作ったんやろ？私も食べて良いの？」

渡されたサンドイッチを見ながら、静夜に尋ねると

「もちろんだ、一杯作ったからはやても食べてくれ」

と言う静夜に頷いてから、はやてはサンドイッチを一口齧る

「うん、皆料理上手やな」凄く美味しいで」

と笑い静夜の頭を撫でるはやてを見ながら、私は弁当箱からサンドイッチを取り出し口に運んだ

「ふー、皆美味しかったで、お腹一杯や」

はやてが笑いながら言う

「本当？そんなに美味しかった？」

雷華がはやてに美味しかったと尋ねる

「うん、凄く美味しかったで、皆料理上手やね」

と笑いはやては雷華の頭を撫でる

「父上は！父上は美味しかったか？」

「お父様はどうでしたか？美味しかったですか？」

笑いながら尋ねて来る、静夜と星奈に

「凄く美味しかったよ、二人とも」

笑いながら静夜と星奈の頭を撫でる

「んっ・・・えへへっ」

目を細め笑う静夜達を見て笑っていると

「本当、皆兄ちゃんに懐いてるなあ」

と楽しげに笑うはやてに

「懐かれて悪い気はしないぞ?・・・それに私は子供は好きだしな」

寄って来た、雷華とヴィヴィオ達も抱き抱え笑いながら言うと

「そうやね・・・兄ちゃんが魔法に出会ってなかったら、孤児院とか保育士になってたんやない?」

ふむ・・・確かにそうなってる可能性もあるなと私は思った・・・むしろ天職かもしれないと・・・

「っっすう・・・すう・・・」

静夜達が持つて来てくれた弁当を食べてから、仕事を再開していたが・・・何時の間にか四人ともソファーで眠っていた

「ふふ・・・皆可愛いな」

笑いながらはやては星奈達の頭を撫で言う

「そうだな・・・皆可愛いな・・・」

ソファで眠る静夜達はとても可愛らしいと思いながら、返事を返す

「兄ちゃん、明日有給取るんやろ？星奈達と遊びにいくんか？」

有給の使い道を尋ねて来るはやてに

「ああ、星奈達を連れてハイキングにでも行こうと思ってるんだが・
・なんならはやても来るか？明日休みだろ？」

一応はやて達のスケジュールは把握しているので、明日はやても一緒にハイキングに行くかと尋ねると

「良いの？行く！私も行くで！」

直ぐに行くと言事返すはやてに苦笑いを浮かべながら、私は書類整理を再開した

「さてと・・・仕事も終わったし・・・帰るか・・・」

眠っている静夜達を起こさない様に抱き上げながら言うと

「そうや！兄ちゃん私も兄ちゃんの家泊まっても良い？」

家に泊まっても良いかと尋ねて来るはやてに

「もちろん、良いぞ、じゃあ帰ろつか？」

背中に静夜達を背負いながら、私ははやてと共に家に向かって行った

「兄ちゃん、重くないんか？」

家に向かって歩いていると、はやてが重くないのか？と尋ねて来るので

「重くはないな・・・それに仮に重いとすれば・・・それは幸せの重さだよ」

と笑いながら返事を返すと

「幸せの重さか・・・良いねそついうの・・・」

と笑うはやてに空いている右手を差し出す

「えっ？」

驚くはやてに

「手を繋がないのか？」

笑いながら手を繋がないのか？と尋ねると

「うん、手繋ぐわ・・・」

はやてと手を繋ぎ、私達は夕暮れに染まる道を歩いて行った・・・

「ふふん・んー良い出来や」

フライパンの料理を味見しながら、私は呟いた

「んふふー兄ちゃん好みの味付けやけど・・静夜達には合うかな？」

兄ちゃんは今静夜達とお風呂に入っているので、夕食は私が作ることにしたのだ

「まあ・・兄ちゃんの味覚はちゃんとしてるで・・大丈夫やろ・・はい完成つと」

夕食のメニューは野菜炒めにした、小さい静夜達は野菜があんまり多いのは嫌がると思い野菜は少なめで肉を多くしてある

「ふふ・・兄ちゃんに料理作るのも久しぶりやな」

笑いながら料理を机の上に持って行き、椅子に腰掛け、兄ちゃん達がお風呂から出るのを待つ

「うん・・良いお湯だった・・」

兄ちゃんが静夜達を連れてリビングに戻ってくる

「兄ちゃん出たか・・ほらご飯出来てるで食べよ」

笑いながら言つと

「そうだな・さつ皆座りなさい」

「「「「はい」「」」」」

静夜達が椅子に腰掛け、最後に兄ちゃんが私の隣に腰掛け

「頂きます」

「「「「頂きます！」「」」」」

手を合わせてから、夕食を食べる

「美味しい！はやて姉は料理が上手なんだね！」

雷華が食べながら、上手なんだねと褒めてくれる

「兄ちゃんに教えて貰ったからなあ〜そこいらの料理人には負けないで〜」

腕を叩きながら言う、兄ちゃんの料理の腕は一流のコックにも負けない位高い、その兄ちゃんに教わった私も必然的に料理は上手なのだ

「そうなんですか？では今度私にも料理を教えてくださいませんか？」

笑いながら尋ねて来る星奈に

「勿論！今度休みの時に料理教えに来るわ」

そう言うのと雷華と静夜も

「僕も！」

「我也教えてくれ！」

と言つて来るので私は

「勿論や！三人纏めて面倒見たるわ！」

そう言つと

「そうだな・・・その時は私も教えるのに参加しようか？」

兄ちゃんがそう言い、静夜達がわーいと騒ぐ、私はその光景を見ながら

（んーこういう騒がしいのも良いなあ・・・楽しいし・・・こういう光景が兄ちゃんの護りたい物なんやな・・・）

そう思いながら、食事を続けた・・・それはとても美味しく感じた・・・それはきつと幸せの味なんだなと思つた・・・

第5話に続く

龍也とマテリアルと聖王と 第5話

第5話

「さて・・準備も出来たしハイキングに行こうか？」

お弁当箱におにぎりを詰め、ナプキンで包みながらリビングにいる
はやて達に声を掛ける

「そつやね、そろそろ行こか」

はやては笑いながら立ち上がり

「さあ・・静夜達も準備出来てるな、ほならハイキングに行こか！」

「「「「うん!!!」」」」

元気良く頷く静夜達と共に私達は自宅を後にした

「ヴィヴィオ〜パパと手を繋ぐ〜」

笑いながら手を繋ぐと言うヴィヴィオの小さな手を握ると

「私も手を繋ぎたいです・・」

スカートの端を握り締めながら言う星奈に

「もちろん良いよ、星奈おいで」

空いている左手を星奈に向けると

「はい！お父様失礼します！」

笑いながら左手を掴む星奈に笑みを零しながらはやての方を見ると

「我ははやてと手を繋ぐぞ」

「僕も」

雷華と静夜ははやての手を既に握って笑っていた、六課のメンバーの中で静夜達が懐いているのははやて達だけだったりする

「ここかゝ凄いなあゝ楽しそうだな」

雷華はハイキングの山の入り口を見て楽しそうに笑う、山の中には公園や遊具もあり子供が遊ぶには最適の作りになっている、だからこの山にハイキングに来ようと言ったのだ

「さあ、行こうか？」

皆を見て笑いながら言うと

「はいー！」

元気良く言う静夜達と一緒に山を登り始めた・・

ハイキングと言うのは初めてですが・・とても楽しいものです・・私はお父様と一緒に山を登りながらそう思った・・まあ私の場合、

お父様が近くに居てくれればそれだけで楽しいのですが・

「パパゝリスさんが居るよゝ」

ヴィヴィオが木の枝を指差しながら言う、私もその木の枝を見ると

「チチッ？」

小さなリスがこっちを見ていた、お父様はそのリスを見て

「ふむ・・どれ・」

お父様がポケットからクッキーを取り出す

「父上？何をするんだ？」

私が訪ねるより早く静夜が尋ねる、お父様は笑いながら

「少し見ているよ・・チチ・・ほらおいでこれをあげるぞ」

クッキーをひらひらと動かしながらリスの鳴き声を真似するお父様
を見ていると

「チチッ？」

リスがすると降りてきてお父様の前の石の上に座る、お父様は
クッキーをリスの前に置く、するとリスは小さな手でクッキーを拾
い食べ始める、その仕草が可愛くて私達がリスを見ていると

「ほら、リスの前に並ぶと良い、写真を撮って上げるよ」

カメラを構えながら笑うお父様に頷きリスの前に立つと同時に

カシャッ！！

私達とはやて姉様達の思い出の写真が出来た事が私は嬉しかった・・

「到着したな・・」

お昼を少し過ぎた頃、私達は山の山頂に到着した、本当ならもう少し早く到着出来たのだが、花や鳥の写真を撮りながら来たので倍近い時間が掛かってしまったのだ

「パパ、ヴィヴィオお腹減った・・」

一番はしゃいでいたヴィヴィオがお腹が空いたと言うとお父様は笑いながら、レジャーシートを引き

「そうだな・・それじゃあご飯にしようか？」

お父様がリュックからお弁当箱を2つ取り出す

「僕が開ける」

雷華が2つのお弁当箱を開ける、そこには私達の大好物ばかり詰め込まれていた、玉子焼きに唐揚げにタコさんウィンナー・・どれも私達の好きな物ばかりで思わず笑みが零れる

「食べようか、はい手を合わせて頂きます」

お父様に続いて私達も手を合わせ

「……頂きます……」

お弁当を食べ始めた

「もぐ・うーん久しぶりに兄ちゃんの唐揚げ食べたけど、何時食べても最高に美味しいわ」

はやて姉様が最高に美味しいと言う、その意見には私も賛成だった、お父様の作ってくれたおかずはどれも美味しい、私はお父様の玉子焼きが大好きだ、この甘い玉子焼きは私の大好物だ、ちらっとお父様の方を見ると

「あーん」

ヴィヴィオがお父様の膝の上に座って口を開ける、お父様は唐揚げを1つ取りヴィヴィオの口に運ぶ

「もぐ・美味しい」

両手をパタパタと振るヴィヴィオの姿に私が羨ましいなと思っ
てい

「ほら、星奈あーん」

お父様が私の大好きな玉子焼きを私の口に向けている、一瞬驚いたが口を開くと同時に玉子焼きが口に入れられる、それはとても美味しいと私は思った・

「ほら、次は静夜だ、静夜はこれが好きだったな」

お父様が白身魚のフライを取る、それは間違いなく静夜の好物だった・・それを見て私は確信したお父様は私達の好きな物を全部覚えていたのだと・・それが嬉しくて嬉しくて仕方が無かった

「うーん・・お腹一杯です・・」

調子に乗って食べ過ぎてしまつて、レジャーシートの上で横になると

「ほら星奈もおいで」

お父様が呼ぶのでその方を見ると

「すう・・・すう・・」

お父様に抱きつくようにして静夜達が眠っていた、私も同じ様に眠りたいと思ってお父様に抱きついて眠りに落ちた・・

「んー良く寝たぞ・・」

我が起きると、星奈達も同じタイミングで起き出す、丁度眠り始めてから2時間経っていた

「静夜も起きたか・・さつ次は公園に行こうか？」

公園に行こうと言う父上に頷き、我達は公園に向かった

「ほら、私とはやてはここに居るから、好きな奴で遊んでおいで」

ベンチに腰掛け笑う父上に頷き、我達は遊具に向かって行つた・

「おーいゝパパゝ」

雷華とヴィヴィオが滑り台の上から手を振ると父上がカメラを構え写真を取る、我も写真を撮って欲しいと思い、同じ様に滑り台の上を上り手を振ると

「動くなよゝはいチーズ！」

我の写真も撮ってくれた、我はそれが嬉しくて仕方が無かつた・多分皆も同じ、我達は父上が大好きなのだと思つて改めて認識した

「さてと日も暮れてきたし、そろそろ帰ろつか？」

公園で服がどろどろになるまで遊んだ頃、父上が帰ろつと言つのでそれに頷き我達は山を降り家に向かつて行つた・

「はい、目を瞑れよゝ」

家に帰り父上と一緒に風呂に入る、我達は父上と一緒に風呂に入るのが好きだ

「はい、次はヴィヴィオな、おいでゝ」

「はゝい」

ヴィヴィオに変わつて今度は我が湯船に入る、こうして順番に父上

に頭を洗って貰う、この時間が我達にとって最高の一時だった

「今日の晩御飯はカレーだ、行く前に作って置いたんだ」

にこやかに笑いながらカレーを我達の前に置く、父上のカレーは初めて食べるのでどんな味なのか凄く楽しみだった

「頂きます!!」

皆で手を合わせカレーを1口食べ

「美味しい!!!父上これ凄く美味しいぞ!!」

もの凄く美味しくて美味しいと言うと父上は笑いながら

「口に合って何よりだ、カレーははやてが好きだから得意なんだ」

父上のカレーは六課で食べたカレーより遥かに美味しかった、美味し過ぎてお昼と同じ様に食べ過ぎてしまった

「さてと夕ご飯も食べ終わっしたし、寝ようか？」

「うん!!」

歯磨きを終えて、何時もと同じ様に父上に抱きついて眠る・・・今日のハイキングは最高に楽しかった・・・また今度も父上と一緒にどこかに遊びに行きたいなと思いながら眠りに落ちた・・・

「ふむ・・・皆寝たか・・・」

抱きつきながら眠っている静夜達の頭を撫でる、ここまで懐いてくれると私としてはとても嬉しい

「今度はどこに連れてってやろうかな・・・海鳴にでも行こうかな・・・でもそうになると勘違いされそうだな・・・」

今海鳴にはクロノにリンディさんだけではなく、あの恭也もいる、シスコンコンビである2人が勘違いするのは火を見るより明らかだが

「私が育った街を見せてやりたいしな・・・まああの2人も馬鹿じゃないしちゃんと説明すれば判ってくれるだろう・・・」

今度の長期休暇には静夜達を連れて海鳴に行こうと決め、私は眠りに落ちた、だがそれは後に間違いであったと私は悟る事になる

第6話に続く

龍也とマテリアルと聖王と 第6話

第6話

「うーん．．どうした物が．．」

我達は3人で集まり話をしていた、父上が今度旅行に行こうと行つてから1週間．．明日が旅行に行く日なのだが．．

「ええ．．どうしようね．．」

我達は父上の魔力を貰つて具現化している．．それは具現化している今も変わらない．．我達の意味とは関係なく父上の魔力も今も貰つてゐる状態なのだ．．そして溜めて置けるのにも限界がある．．

「どうやつても良いから魔力を放出しないとね．．どうしようか．．
適当に魔法ぶつ放す？」

笑いながら言う雷華の頭を殴る

「馬鹿が！！我達の魔力を適当に使つてどうする！！下手すれば大惨事だぞ！！」

我達には父上の魔力の上乗せがある為、オリジナルより遥かに高い魔力を持っている．．それを適当に等と使える訳が無いと言つと

「うーん．．そうだ！！じゃあこうしようよ！！」

笑いながら言う雷華のアイデアを聞く

「良いですね・・・面白そうです・・・」

「うむ・・・父上を驚かすのも良い!!」

雷華のアイデアを採用し、我達は食堂に向かった・・・

「なんと言ったんだ？雷華？」

私は驚きながら雷華に尋ねると雷華は笑いながら

「だから・・・どうしてパパは結婚しないの？って聞いているの!!」

笑いながら言う雷華に

「結婚と言ってもな・・・今はそんな事考えてる余裕が無いしな・・・」
事件の後始末が済んで居ない上に、平行世界に逃げたネクロの殲滅
など・・・色々やる事があると言うと

「じゃあその後は？」

繰り返し言う雷華に

「まあ・・・考えない訳ではないが・・・私と結婚したい等と言う物好きは居ないだろう？」

笑いながら言うとかたがタツ・・・椅子の上から何人かの隊員が地に

落ちる・何かあったのだろうか？と考えていると

「んじゃねー僕ねー大きくなったらパパのお嫁さんになるー」

笑いながら言う雷華の頭を撫でながら

「はは、雷華が結婚できる歳になったら、私はおじさんだよ」

雷華達が10歳、私が24歳だ、8年経ったら30を越えると言つと雷華は笑いながら

「えへへー・ちよっと待っててね・静夜、星奈、行こう」

雷華達が食堂を後にする

「何を待っていると言っただろうか？」

私がそんな事を考えていると

「どーんッ！！」

横から誰かに体当たりされひっくり返る

「痛たた・誰・雷華・なのか・？」

驚き尋ねる、私を押し倒している女性の顔はフェイトと瓜二つで違うのは髪の色・そしてこの髪の色は雷華の物だ・私が混乱していると

「えへへーパパの為に大きくなって見ましたーどうかな？」

えへへと笑う雷華の後ろから

「まったく・・・雷華は何をしてるのですか・・・」

「貴様！！父上の上から退け！！」

同じく大きくなった、静夜と星奈が姿を見せる・・・

「一体・・・何が起きたと言った・・・」

私はそう呟きながら、雷華の手を借りながら立ち上がり、椅子に座りなおし

「どうして、大きくなったのか聞きたいのだが？」

向かい合って座る3人に尋ねると、3人の代表として星奈が説明を始めた

「えつとですね、前に私達はお父様の魔力を貰って具現化していると言いましたよね？」

覚えてますか？と言う口調の星奈に頷くと

「それですね、具現化している今も無意識に魔力を貰っているんですよ、そんなに大した量ではないですが・・・それでも毎日貰っているとかかなりの量になります・・・それであんまり貯まりすぎると・・・体の調子を崩してしまうんです・・・だから魔力を放出する為に大人の姿になっているのです」

星奈の説明を聞き終わってから

「それで、何時くらいに元通りになるんだ？」

どれくらいしたら子供に戻るんだ？と尋ねると

「んーと・・・今日の夜かな？・・・それまでは大きいままだよ」

笑いながら言う雷華に

「そうか・・・それじゃあ・・・旅行の準備でもしていようか？」

予定では明後日から海鳴に行くつもりなので、旅行の準備をしようか？と尋ねると

「うん！！そうしょ」

雷華達に手を引かれ、私は食堂を後にした・・・それから半日程かけて旅行の準備を終えると同時に

「あーあ・・・もう元に戻っちゃった・・・」

雷華達が元の子供の姿に戻る・・・残念そうに言う雷華を見ると星奈が

「でも子供の姿の方が良いと私は思いますよ、大人になってはお父様に思う存分甘えられませんか」

笑いながら言う星奈に雷華は頷き

「そうだね！！僕も小さい方が良いかな？パパに一杯甘えたいからね？」

にこにこと笑う雷華達の頭を撫で

「ふふ．．．そんなに懐いて貰えると私も嬉しいよ」

3人の頭を撫でてから抱え上げ

「さっ．．．今日はもう寝ような．．．」

3人を寝かしつけてから

「旅行か．．．星奈達は喜んでくれると良いが．．．そうだ．．．アリサかすずかに離れを貸してくれと頼んでおくか．．．」

私はアリサとすずかにメールを送ってから眠りに落ちた．．．

第7話に続く

龍也とマテリアルと聖王と 第7話

第7話

「準備できたか？」

静夜達に尋ねると

「『『『大丈夫』』』」

全員が口を揃えて言う、4人は可愛らしいリュックを背負っている、着替え等は私が持っている旅行ケースに収められている

「あううう・・・私も一緒に・・・」

はやてが涙目で私も行くと言うが

「お前は仕事だろうが・・・大人しく待ってろ・・・」

はやてはすでに有給を使い果たしている・・・それははやてだけではなく

「うるうる・・・」

涙目でヴィータが私を見るが

「駄目だ、ちゃんと仕事してろ・・・お土産は買ってくるから」

そう言うと2人は渋々と言う表情で頷き仕事に戻った、私は2人が

仕事に戻ったのを確認してから、海鳴に跳んだ・

「風が気持ち良いねえ」

雷華が風が気持ち良いねえと笑う

「そうだな」

雷華達の頭を撫でアリサが迎えに来るのを待っていると

「龍也・・・迎え・・・」

アリサが雷華達を見て停止し、次の瞬間・・・

「この・・・女の敵がーッ!!」

アリサが殴りかかってくる

「ぐふうつ!!」

「「パーッ!?(父上!?) (お父様!?)」」

完璧なタイミングでボディブローを喰らい体が九の字に曲がる、それと同時にヴィヴィオ達が絶叫する・・・その間もアリサの攻撃は続く

「この女の敵が!!はやてだけじゃなくてなのはとフェイトまで・・・この死ねーッ!!!!」

これで気付いた・・・アリサはとんでもない勘違いをしていると

「待て！！勘違いしている！！話を聞け・・・がつ！！」

放たれる攻撃を捌きながら説得を試みる・・・アリサの攻撃を回避しながら説得する事15分・・・

「はーはー・・・成る程・・・あの何とかの書とかの残骸が・・・なのは達の姿をコピーしたと・・・何でもっと早く言わないのよ」

息を荒げ言うアリサに

「お前が言わせなかったんだろ・・・」

呆れながら言うアリサが

「まあハプニングはあったけど・・・翠屋に行きましょうか？」

アリサの車で翠屋に移動する・・・

「それじゃあ私は用事が有るから・・・離れの鍵は渡して置くわ・・・海鳴に居る間は好きに使ってくれていいからね」

翠屋の前で離れの鍵を受け取り、アリサと別れ翠屋の中に入って行った・・・

「いらつしゃ・・・龍也君・・・君はそんなに節操無しなのか？」

殺気を放つ士郎さんに説明をする事30分・・・

「ほー成る程ね・・・なのは達の姿をコピーしてるのか・・・私はつきり龍也君となのは達の子供かと・・・いやすまない・・・」

謝る士郎さんに

「いえ・・・良いんですよ・・・勘違いされるのは当然ですから・・・」
そう呟いていると

「パパ・・・ヴィヴィオ膝の上に座りたい・・・」

私の服の裾を掴み言うヴィヴィオを抱き上げ膝の上に座らせると・・・

「私も・・・」

静夜がぼそりと言うのでヴィヴィオと同じ様に抱き上げ膝の上に座らせると、雷華と星奈は私の両サイドに座る、ヴィヴィオ達がシュークリームを食べるのを見ていると

「ふふ・・・昔のなのは達を思い出すね・・・実に懐かしい・・・」

懐かしいという士郎さんと昔話をしていると

「あら～可愛いわね～昔のなのはを思い出すわ～」

桃子さんが星奈を抱え上げる

「わっ！」

急に抱きしめられた星奈は驚き珍しく大声を上げる、桃子さんは

「本当に可愛いわ～」

桃子さんが星奈に頬擦りしながら言っていると星奈は

「お・・・降ろしてください」

赤面し星奈は手足をバタバタさせるが

「もう・・・本当に可愛いわ～んふふ」

星奈の手足を器用に回避し抱きしめる桃子さん・・・離す気は無さそうだ・・・私がどうしようかと考えていると

「助けて」

雷華の助けを求める声に振り返ると

「昔のフェイトを思い出すわね」

何時の間にか現れたリンディさんが雷華を抱き抱えている

「リンディさん・・・何時の間に・・・」

確かフェイトからリンディさんとクロノも休暇で海鳴に來ていると聞いていたが、どうしてここに居るか判らず尋ねると

「さっきフェイトから連絡があつてね、龍也君が海鳴に行つたって聞いたから多分翠屋かな」と思つてきたのよ」

にこにこ笑うリンディさんと桃子さんと半比例して

「・・・離して・・・」

抱き抱えられている星奈と雷華が酷く消耗していた・

「ねえ・・・星奈ちゃんのはの事好き？」

「雷華ちゃんはフェイトの子と好きかな？」

自分の娘の事を好きか？と二人に尋ねると

「嫌い！！大嫌いッ！！！！」

2人同時に嫌いと呼ぶ、それに

「えっ？・・・どうして？」

桃子さんが如何して嫌いなのかと尋ねても2人とも頬を膨らませノ
ーコメントだ・・・答えてくれない2人に困ったような顔をしてリン
デイさんが

「龍也君・・・どうしてフェイトが嫌われてるの？」

どうして？と尋ねて来るので理由を話す

「2人を指差して、これとかあれとか・・・危険だ・・・とかと言った
からですよ・・・」

その説明に停止した2人の腕の中から2人が脱出し私の隣に座り、
しっかりと私の服を掴む・・・2人の目は涙目だった・・・

「なのは馬鹿・・・嫌われてどうするのよ・・・そんなんじゃ絶対龍也君を物に出来ないわよ・・・これはちゃんと話さないと・・・」

「フェイト・・・そんな事言ったら・・・嫌われるに決まってるじゃない・・・」

自分の娘達に頭を抱える桃子さんとリンディさんの姿があった・・・その間ヴィヴィオと静夜は

「おかわりっ!!」

頬に生クリームをつけシュークリームに舌鼓を打っていた・・・その頃ミッドでは・・・

「ブルツ・・・何だろう・・・寒気がするよ・・・」

食堂で休憩中私は急に感じた寒気に首を傾げた・・・この感じはお母さんに怒られる時の物の似ていた・・・向かい側を見ると

「?・・・なんだろう風邪かな?」

フェイトちゃんも首を傾げていた・・・

「フェイトちゃんも寒気がするの?」

そう尋ねると

「うん．．なのはもするの？．．2人して風邪かな？」

そう小首を傾げる私達にはやてちゃんが

「ちつつ．．違うな．．多分星奈と雷華が2人の事を嫌いとも言ったんちゃう？．．それで桃子さんとリンディさんが怒ってる．．
って所やな？」

はやてちゃんが笑いながら言う

「いや．．それは無いんじゃないかな？」

ズバリはやてちゃんの言うとおりだと知るのはもう少し先の事になる．．その頃龍也は

「貴様．．あるうことが妹に手を出すだけでは飽き足らず．．なのは（フェイト）まで．．」

勘違いをしているシスコンコンビに遭遇．．2人とも殺気を放ちまくっている．．その殺気に当てられたヴィヴィオ達は

「パパ（父上）（お父様）怖いよ．．」

震えながら私の服を掴むヴィヴィオ達の頭を撫でていると

「殺すッ！！」

さらにシスコンコンビの纏う殺気が濃厚になる・・・だが

「話を聞かない愚か者どもが・・・ヴィヴィオ達を怖がらせたんだ・・・その罪・・・命で償って貰おうか・・・」

私がコートを脱ぎながら言うと

「「上等だっ！！表へ出ろっ！！」」

私達は翠屋の外へ出た・・・そのやり取りを見ていた士郎達は・・・

「何分くらい持つかしら？」

「7分くらいじゃいかな？龍也君・・・そうとう頭に来てたみたいだし・・・」

桃子さんとリンディさんがクロノ達は何分くらい持つか話してる頃

「ごめんな、家の馬鹿息子達が・・・ほらお詫びにこれでも食べてくれ・・・直ぐに龍也君は戻ってくるからな」

士郎さんがヴィヴィオ達にシークリームを渡していた・・・その頃翠屋の外では守護者VSシスコンズのバトルの幕が切って落とされていた・・・

第8話に続く

龍也とマテリアルと聖王と 第8話

第8話

「父上・・・早く戻って来ないかな・・・」

時間も時間なので昼食をと・・・差し出されたオムライスを食べながら呟いた・・・父上が姿を消してからまだ3分程度だが・・・早く会いたくてそう呟くと雷華が

「心配だから見て来ようかな・・・パパは凄く強いけど・・・2対1だし・・・苦戦してるかも・・・」

そう呟く・・・そういわれると心配になってしまう・・・我と雷華が席を立とうとした時、無言でサンドイッチを食べていた星奈が

「ここで私達が動くという事は、お父様を信頼していないという事です・・・それでも動くというのなら私は止めませんよ・・・ですが私は動きません・・・お父様は直ぐに戻ってくると判ってますから」

うつ・・・そう言われると動けない・・・我と雷華が考え直し席に座り直した所で、店の外から

「機神・・・猛撃拳っ！！」

父上の声と共にズダダッ！！と凄まじいラッシュの音が聞こえてくる・・・いやそれだけではなく

「が・・・がふ・・・」

馬鹿の苦しそうな声も聞こえてくる・・・この声は多分恭也とか言う方だと思う・・・我がそんな事を考えていると

「これで・・・くたばれっ!!」

ズドンッ!!

交通事故の様な音が響き渡ったと思った瞬間

ドンッ・・・ズルズル・・・

店の壁に何かがぶつかった音共に崩れ落ちる音が聞こえてきた・・・間違いなく1人死んだ・・・我がそんな事を考えていると

「さて・・・馬鹿は死んだ・・・お前も死ぬ覚悟は出来たか?・・・クロノ?」

静かだがはつきりと怒気の籠った声の父上の声が聞こえてくる・・・この声を聞いた星奈は

「死刑判決という所ですか・・・」

死刑判決・・・言いえて妙だが・・・そのとおりだと我は思った・・・

「羅刹・・・幻殺甲!!!!」

ズダダダッ!!

先程と同じ凄まじいラッシュ音が響いてくる・

「がっ・・・げはっ・・・」

血を吐くような声が聞こえ次に

「剛鉄甲ッ！！」

ズダンッ！！

凄まじい踏み込み音と共に

ドスンッ！！ドスンッ！！

2発拳が放たれた音が聞こえ

「げふっ・・・」

この地点で恐らく馬鹿二号は沈黙していただろう・・・だが父上の怒りは収まらなかったようで・・・

「これで決まりだ・・・羅刹・・・断撃拳ッ！！！！」

ドガシャアッ！！

凄まじい爆音が聞こえ先程と同じ様に

ドンッ・・・ズルズル・・・

店の壁に何かがぶつかった音共に崩れ落ちる音が聞こえてきた

「5分と少しですか・・・まったくお父様との貴重な時間を5分も・・・全く腹ただしいですね・・・」

時計を見ていた星奈が呟く・・・恐らく我らの中で一番怒っていたのは星奈なのだろう・・・その証拠に片手で待機状態のルシフェリオンを確りと握り締めている・・・我は星奈を見ながら

（まあ・・・我も一緒か・・・）

我も雷華もデバイスを握り締めている・・・結局我らは似た者同士なのだ・・・我がそんな事を考えていると

「もぐ・・・むふふ」美味しかった」

にこにこ昼食を終えたヴィヴィオが無邪気な顔で笑っていた・・・

まったく・・・この勘違いコンビは・・・私は内心あきれながら気絶させた（いい具合に痙攣しているのは無視）2人の足を掴んで引きずりながら翠屋に戻った・・・近くの空き席に勘違いコンビ（いい具合に痙攣している+口から青白い光が出ている）に叩き付けるように座らせ

「すみません・・・後で手当てしてやってください」

士郎さんに言うと士郎さんは

「手当てね・・・もう手遅れのような気がするけどね・・・まあ大丈夫

だろう」

そう呟いた士郎さんは2人を家の中に引きずって行き、直ぐに戻ってきた

「しかし・・・龍也君は強くなったな・・・きっと私ももう勝てないだろうな」

微笑んでいるが獰猛な光を目に写しながら言う士郎さんに

「勘弁してくださいよ・・・私はまだ弱い・・・士郎さんにはとても勝てないですよ」

微笑みながら言い返す・・・私と士郎さんが戦えばどちらか酷い怪我を負うだろう・・・だからやりたくないと思いながら言う

「それもそうだね・・・桃子達を心配させるのも嫌だしな・・・」

私と同じ事を考えていたのだろう・・・そう笑う士郎さんの横から

「パパ、ヴィヴィオね・・・ご飯食べたよ・・・パパもご飯食べないと」

心配するように言うヴィヴィオの頭を撫で

「うん・・・判ったよ・・・私もご飯を食べるからな」

そう言いながら士郎さんに昼食を頼み、ゆっくりその食事を楽しみ・・・
暫く静夜や星奈達と旅行の予定を話していたが

「・・・ん・・・もうこんな時間か・・・そろそろアリサの家の離れに行

「どうか・・・」

大分日が翳ってきたので、そろそろ移動しようかと雷華に言つと

「うん！！行こう！！行こうっ！！」

私の手を握り笑う雷華とヴィヴィオに苦笑しながら

「士郎さん・・・私達はそろそろ泊まる場所に行く事にします」

そう言つと士郎さんは

「そうか・・・暫くこっちに居るのだろう？また気が向いたら来ておくれ」

そう笑う士郎さんに礼を言つてから私達は翠屋を後にした

「どれくらい歩くのですか？」

隣をチヨコチヨコ歩く星奈が尋ねて来る、静夜は反対側で、ヴィヴィオと雷華は私の肩の上だ

「そうだな・・・15分くらいか？・・・そんなに遠くないよ」

そういつと静夜は

「ふむ・・・それでは父上と散歩していると思えば良いな」

につこりと微笑む静夜の頭を撫でながら、私達はアリサの家の離れに向かった・・・

「ここか・・大きいな」

静夜が離れを見上げながら言う・・かという私も少し圧倒されたりする・・5人で使うには大きすぎる立派な離れだ・・すずかの和風だったのに対してアリサのはどこか宮殿のようだった・・私達はその離れに圧倒されていると

「おおゝ凄いなゝ凄いな家だなヴィヴィオ」

「そうだねゝ」

天然コンビは無邪気に笑いながら

「早く!! 早く!! 家の中に入る!!」

私の手を引き笑う2人に

「そうだな・・早く荷物を置いてゆつくりしようか・・明日も予定が決まってるしな」

明日は遊園地に行くと言う話になっている、これは静夜のリクエストで、静夜はうまく隠しているつもりだがリュックには遊園地のパンフレットがしっかりと収められている・・私はそういう静夜達の屈託の無い笑顔が好きだ・・子供は子供らしくにこにここと笑っているが一番良い・・私はそんな事を考えながら離れの中に入っていた・

第9話に続く

龍也とマテリアルと聖王と 第9話

第9話

「んふふ〜パパと一緒に」

ベッドでにこにこ笑う雷華の頭を撫でる、すると雷華はまるで猫の様に目を細めにへら〜と笑う・・・その仕草が可愛らしくて私が微笑んでいると

「むー！！雷華だけずるい！！私も頭を撫でて欲しいぞッ！！」

「静夜の意見に賛成です、私も頭を撫でて貰う事を希望します・・・」

怒っている静夜と冷静だが頬が膨らんでいる星奈を

「ごめんな、2人ともおいで」

手招きすると子犬の様に寄ってくる2人を抱き抱え、頭を撫でる・・・すると2人とも雷華同様にへら〜と笑い頭を擦り付けて来る・・・そのまま静夜達を抱き抱えてベッドに入った・・・既にベッドでははしやぎすぎて眠っているヴィヴィオがいる、ヴィヴィオを起こさぬように静夜達を寝かしつけた・・・龍也達が寝入った頃ミッドでは

「そう言えばさ・・・星奈達って龍也さんとお風呂は言ってるんだよね？」

書類整理をしながら思い出したように言うのはにはやてが

「そうやで、殆ど毎日かな？3人とも兄ちゃんとお風呂入ってるで？それがどうしたん？」

訳が判らないと言う表情のはやてになのはは

「星奈達つて私達の小さい時の姿をしてるじゃない・・・なんかこう・複雑なんだよね・・・」

そう言うなのははやては

「なのはちゃんとフェイトちゃんがどう思ってるかは知らんけど、兄ちゃんは全く意識してないで〜つまりそういう対象として見られてへんのちゃう？」

からかう様な口調のはやてになのはは

「そんな事もないもん！前に腕を抱え込んだら赤面してたもん！」

そう言うなのははやては黒い笑みを浮かべ

「へー・・・なのはちゃん・・・兄ちゃんにそんな事してたんや・・・ちょいお話しする？」

黒い笑みのはやてになのはは真っ向からはやての眼を見据え

「お話はしない・・・そもそもはやてちゃんとかヴィータちゃんばつかずるいよ！！私だつて良い思いしたいもん！！」

うつうつと睨み合っている事を龍也は知らない・・・

次の日・・・

私はさも当然の様に席に座っているアリサに

「さて・・・アリサ・・・なぜこんな朝早くからここに居るのか私に説明してもらえないか？」

そう尋ねるとアリサは優雅な仕草で紅茶を飲みながら

「何でって・・・そんな事も判らないの？・・・あんたの朝ご飯食べに来たのよ・・・そもそもあんたの無茶な頼みを聞いた私に朝食を食べさせる事も出来ないの？」

そんな事ないわよね？と目で語るアリサに

「判った、判った・・・作るよ・・・だからそんな目で見るな・・・」

アリサとそんな話をしていると、星奈達が起きて来てアリサを見て

「「「「ああーッ！！昨日、パパ・・・お父様・・・父上を苛めてた人だーッ！！！！」」」」

明らかに敵意を見せる星奈達に

「違う、違う・・・昨日のはアリサの勘違いだ・・・アリサは私を苛めてたんじゃないよ」

ちゃんと説明するが星奈達はアリサを睨み続けていた・・・アリサは冷や汗を流しながら食事をする事になった・・・そんな状態での食事は美味しいとは私には思えなかった・・・だがそれ以上に星奈達がフ

アザコンになつて来ているのではないか？と考えていた・

「はゝゝ・味は良かったけど・・なんか満足に楽しめたって気がしないわ・・」

疲れた様子のアリサに私は・

「なんかすまない・・私の我儘を聞いてくれたのにな」

私が謝るとアリサは手を振りながら

「私が変な勘違いしたから悪いのよ・・私としては星奈達と仲良くしたいんだけどね」

そう苦笑するアリサに星奈達を代表してか・・静夜が

「どうやら・・お前は父上を苛めてた訳ではないというのが良く判った・・だからもう睨まないし・・殺気もあてない・・これで良いか」

静夜に言われたアリサは微笑みながら

「そう良かったわ・・私ももう龍也を攻撃しないからね・・それじやあ私は用事が有るから失礼するわ・・龍也・・あんに頼まれてたのはガレージに置いてあるわ・・でもあんだ良くあんな良い物持ってたわね」

呆れたように言つて出て行くアリサを見送つてから

「さて皆顔を洗つておいで・・今日は遊園地に行くからな」

今日の予定を話すと嬉しそうに洗面所に走っていく、星奈達を見ながら私は遊園地のパンフレットを見ていた・・

「パパ、遊園地には何で行くの？電車？バス？」

にこにこ微笑む雷華に

「いや・・違うさ・・もつと良い物だよ・・おいで」

星奈達を連れてガレージの前に行き、シャッターを開ける・・それと同時に雷華達が

「「「「おおっ！」「」「」

きらきらとした目で笑う雷華達に

「これが私の車・・インパラだ」

これは私の父の車らしく・・何年も乗って無くて錆付いていた物をアリサに頼んで修理した物だ・・外見こそレトロチックなデザイン
の車だが・・中身は全て最新の物に変えてあるそうだ・・ミッドに
置いてある車はレジアスがくれた物だが・・やはりこれも気に入っ
ているので良い機会だからこれをミッドに持って帰ろうと思ってい
る・・

「さ・・乗ると良い」

運転席のシートを下げて後部座席を指差しながら言うと

「助手席は僕!!」

「いや、我だッ!!」

「違います・私です」

ううーと睨み合う星奈達に

「はあ・これから遊びに行くと言っのに喧嘩しないで欲しいな・
行きは雷華が助手席・帰りは星奈・明日ピクニックに行く時は
静夜で帰りはヴィヴィオ・これで良いな？」

そう言うとしぶしぶと言う様子で後部座席に乗り込む静夜達と

「えへへパパの隣」

にこやかに助手席に乗り込む雷華にシートベルトをさせる・勿論
星奈達もだ・全員が車に乗り込んだのを確認してから

「よし・それじゃあ行くぞ」

そう声を掛けてから私達は遊園地に出発した

第10話に続く

コラボ番外編 大魔導師の望む未来編

番外編

「教導・・・ありがとうございました！」

若い魔導師に見送れ、本局の入り口に向かう一人の男・・・腰元まで届く長い銀髪に蒼銀に輝く双眸・・・だが右目には切り傷があった。それはとても深い傷で、失明していないのが不思議というレベルの傷だ

彼・・・八神龍也は首に手を置きながら

「うつ・・・まったく・・・肩がこるな」

普段なら決して着る事の無い、管理局の上級役職の制服を着、歩く姿は銀髪と相まって、モデルのような印象を受ける

「やれやれ・・・レジアスも無茶を言う・・・私は人に物を教えるのは苦手なんだがな・・・」

私は実践方式で戦闘技能を身に付けたから、口や理論で人に物を教えるのはどうも苦手だ、がりがりと長い銀髪を掻きながら本局を出ると

「龍也、お疲れ様」

フェイトがスポーツカーの横に腰掛け、待っていた

「すまない待たせてしまったか？」

謝りながら尋ねると、フェイトは笑い

「気にしなくて良いよ、私も今終わった所だから」

そう言ってくれる、フェイトにもう一度礼を言い車に乗り込んだ

「でも、龍也も大変だね。管理局と聖王教会を行ったり来たりして
運転しながら言うフェイトに

「まったくだ・・・私は管理局員なのにな・・・よほど教会は暇なの
かね？」

そういうとフェイトは頭に手を置き、大きく溜め息を吐き

「あのね・・・龍也は聖王だよ？・・・判る？だから聖王教会からすれ
ば神様だよ？だからもう少し、聖王教会に顔を出した方が・・・そう
なったら、私は六課を出て、正式に教会に所属しないといけないの
だが？・・・やっぱり良いや。龍也は管理局員だね？」

フェイトはあつと言う間に意見を変えた、暫くお互い無言でいたが

「所で何処に向かってるんだ？」

車の進行方向は六課ではない事に気付き・・・それが気になり尋ねると

「ちょっと・・・今日は大事な用があつてね・・・悪いけど少し寄り道
させて」

そうかと呟き、私は窓の外をぼんやりと見ていた

「ここは・・・」

到着した場所には見覚えがあつた・・・以前ティアナの墓参りに付き合つてきた時の、墓地だった。フェイトは無言で墓地の中を進んで行く、私は慌ててフェイトの後を追つた。暫く歩くとフェイトが墓の前に立ち止まる、私はその墓石に刻まれた名を見て驚いた

「プレシアの墓・・・」

それは間違いなく、大魔導師、プレシア・テストロッサの墓だった

「うん・・・リンディ義母さんも居るけど・・・私の母さんはこの人だけだから・・・」

墓の前に花を置き、手を合わせるフェイト、私は手を合わせながら

（プレシア・・・か・・・）

あれは私の一つの可能性だった・・・愛する者を失い・・・狂った者・・・私もはやてが死ねば間違いなく、プレシアの様になつていただろう・・・大切な者を失うのは何よりも辛いから・・・だから・・・私はプレシアを悪とは思えない・・・誰だつてそうだ・・・死んでしまった愛する人に会いたいと思う気持ちは・・・間違いではない・・・私はそんな事を考えながら手を合わせていた

「・・・また来るね・・・母さん・・・龍也行こう」

立ち上がり、行こうというフェイトに頷き、歩き出した

「フェイト・・・プレシアの遺品は何かあったのか？」

車に戻りながら尋ねると

「・・・何も無いよ・・・あれは形だけ・・・形だけでも良いから・・・母さんを弔いたかった・・・でも・・・遺品が合ったら良かったよ」

お互い無言で車に乗り込み、六課へ戻った

「・・・遺品か・・・何とかしてやりたいな・・・」

自室で本を読みながら、私はそんな事を考えていた

「・・・虚空空間・・・今の私なら何とか出来ないか？」

プレシアと時の庭園は虚空空間に落ちた普通なら行く事は出来ない、だが聖王の魔力を使えば・・・出来るかもしれない

「試す価値は有りそうだな・・・」

私は天雷の書を取り出し

「セットアップ・・・」

起動させる、同時に私の体を白銀に輝く鎧が包み込む、だがこれで終わりではない

「神騎・・・覚醒」

白銀の鎧が黄金に染まり、それに伴い髪は燃えるような赤髪になり、左目だけが赤に染まり、纏う魔力は蒼から虹色になっていた

「空間転移・・座標・・虚空空間・・時の庭園・・」

座標をセットし、私は虚空空間に転移した・・・筈だった・・到着した場所は虚空空間では無かった・・私は目の前に広がる光景に驚いた

「どうして・・私は虚空空間に転移した筈なのに・・・どうして海鳴にいる？」

目の前に広がる、故郷である海鳴の街に驚き目を開く・・が違和感を感じた

「待て・・街並みが違う・・あの店はもう潰れている筈・・それに・・あそこに空き地は無かった・・・どういう事だ？」

記憶の街並みと目の前に広がる、街並みは全く違う・・まるで過去に来てしまった様だ・・

「とりあえず・・騎士甲冑を解除しよう・・モードリリース」

騎士甲冑を解除し、海鳴の街へ向かって行った

「・・・やはり・・過去・・それも・・8年前か？」

街並みは過去の物で・・時期的に言えばなのはが魔導師になった頃・・つまりジュエルシードがばら撒かれた時代だ、暫く辺りを見回し

ながら歩いていると

「はい、フェリシアちゃんにアリシアちゃん、これで良いかい？」

アリシア！？背後から聞こえたアリシアの名に驚き振り返る

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます」

アイスクリームの屋台の人から、アイスを受け取り走っていく二人の少女の姿が見えた。それは間違いなく幼い頃のフェイトだった・私は驚いた・アリシアは死んでいる筈・それにフェリシア？私はあの少女を知らない・

「いらつしゃい・何にするかい？」

あの二人の事を聞こうと思う、アイスクリームの屋台に近付いた

「すみません・さっきの・女の子の母親について聞きたいのですが？」

もし過去に居るなら・プレシアも居る筈・そう思い尋ねると

「あんた・プレシアさんの知り合いかい？」

怪訝そうな屋台の店主に

「はい」

返事を返すと、屋台の店主は笑いながら

「そうか・・・あの人の知り合いかい・・・あの人は良い人だよ。女で一つで3人の娘を育ててる。本当母親の鏡みたいな人だよ」

その店主は、上機嫌でプレシアの事を教えてくれた

「今の時間なら、翠屋で働いてる筈だよ。プレシアさんに宜しく言っておいてくれ」

人の良い笑顔の店主に見送れ、私は翠屋に向かった

「確かにプレシアだな・・・」

翠屋から少し離れた所から、視力強化を使い翠屋を見る、あの店主の言う通りで翠屋で働いているプレシアの姿が見える

「・・・考えても判らん・・・翠屋に行くか」

私は直接会えば判ると思い、翠屋に入った

カランコロン

入り口のベルが鳴る、

「いらつしゃ・・・」

いらつしゃいませ、と言いかけた所でプレシアが固まる・・・その顔は驚愕に染まっていた

「・・・何で・・・貴方が・・・龍也・・・」

驚きながら紡がれた言葉は間違いなく、私の名だった。私はそれで確信した・・・このプレシアは私の知るプレシアだと

私は信じられなかった、髪の色は違うが、間違いなく龍也だ・・・フエイトが写真を見せながら、嬉しそうに言っていたから覚えていた、私の動揺を知ってか知らずか店の一角に腰掛け、私の顔を見ている・・・あの男は間違いなく龍也だ・・・成長しているが・・・顔立ちや纏う空気で判る。

「桃子さん、悪いけど、知り合いが居るから少し休ませて貰っても良い？」

「良いわよ」

二つ返事で良いと言ってくれた、桃子さんに礼を言い。龍也の席の前に腰掛けた

「二つ、三つ聞きたいが・・・良いか？」

腕を組みながら尋ねて来る龍也に頷くと

「イエスカノーで良い・・・お前は次元震を起こそうとしたか？」

ジュエルシードの暴走の事ね

「イエス」

「次・・プロジェクトFをやったか？」

「イエス」

これも間違いない。私がやった事だ

「では最後に・・フェイトを人形と言ったか？」

!!・・・

「イ・・イエス・・よ」

動揺しながらイエスと言うと、龍也は

「そうか・・お前は私が知るプレシアに間違いが無いな？」

私が頷くと龍也は

「そうか・・プレシア・・良く生きていてくれた」

龍也は本当に嬉しそうに、そう言った

「どうして貴方がそんな事を言うの？」

私と龍也は敵同士だったのにそんな事を言う龍也に首を傾げると

「フェイトはまだ・・お前の事を母と呼んでいるんだ」

!?!?そんな・・私の事をまだ・・母と呼んでくれているなんて・・

「本当？・・・本当にフェイトは私の事を母さんって呼んでくれているの？」

涙で目が霞む・・・だけどその涙を零す事無く尋ねると

「ああ・・・まだ・・・お前の事を母さんと呼んでいるよ」

ああ・・・私には母さんなんて、呼ばれる資格が無いのに・・・私は・・・貴方の事を棄てた・・・のに・・・涙がボロボロと零れる

「ああ・・・フェ・・・フェイ・・・フェイト・・・」

逢いたい・・・もう一度逢いたい・・・私の娘に

「・・・プレシア・・・提案がある」

ハンカチを差し出ししながら、提案があると言う龍也に

「何・・・？」

涙を拭いながら尋ねると

「フェイトに・・・成長したフェイトに・・・逢いたくは無いか？」

！？そんな事が・・・

「逢えるの・・・フェイトに・・・？」

「ああ・・・お前が望むなら・・・私はフェイトを連れて来よう・・・ど

うつする？プレシア・・・逢うか逢わないか・・・決めるのはお前だ」

私が決める・・・私は

「龍也・・・私はフェイトに逢いたい・・・逢ってもう一度話をしたい・
・龍也・・・フェイトに逢わせて」

私はフェイトに逢う・・・そして謝りたい・・・そう言つと

「判つた・・・今から1時間後・・・街外れの丘の上で待っている、お
前の娘も連れて来ると良い」

「アリシアとフェリシアにフェイトの事？・・・どうして？」

どうしてアリシア達も呼ぶのかと思ひ尋ねると

「写真さ・・・皆で写真を撮れば良い・・・良い記念になるぞ」

そう笑い、龍也は翠屋を後にした。

「さてと・・・急ぐか」

再び転移で自室に戻り、ライトニングの隊長室に向かう

「フェイトは居るか？」

隊長室ではシグナムが居た

「兄上？どうなされたのです？そんなに慌てて？」

驚きながら尋ねて来るシグナムに

「すまない。フェイトは何処に居るか、教えてくれないか？」

「テストロッサですか？確か演習場に行くと言っていましたか？」

シグナムに礼を言い、演習場に向かう

「フェイト！居るかっ！」

演習場の扉を蹴り開けながら言う

「どうしたの・・・龍也？」

演習中の面々が硬直するが

「悪いが時間が無い！フェイトを借りていくぞ」

早足でフェイトの前に立ち、足払いを仕掛ける

「きゃあッ・・・」

倒れかけるフェイトを抱き上げ

「神騎覚醒」

即座に騎士甲冑と髪の色が変化する

「兄貴！どうしたんだ。そんなに慌てて・・・って言うかお姫様抱っこすんなあ！」

ヴィータがお姫様抱っこをするなど怒鳴るが

「ヴィータ、少し出かけてくる！はやてに上手く言って置いてくれ」

それを無視し、フェイトを抱き抱えたまま

「空間転移」

私は過去の海鳴へ跳んだ。残された面々は

「・・・エリオ・・・スバル・・・悪いが・・・お前達・・・叩き潰す！」

「「えっ・・・？」」

ヴィータのやり場の無い怒りの捌け口にされた、スバルとエリオの悲鳴が演習場に木霊していたそうだ

「「ここは海鳴？」」

突然龍也に・・・その・・・お姫様抱っこで連れ去られた場所は海鳴だった

「正確には違う・・・此处は過去の海鳴・・・そしてお前に逢いたいと言う人が居る・・・だから連れて来た」

連れて来た？・・・今は拉致じゃないかな？・・・でも嬉しかったから良いや

「もう直ぐだな・・・フェイト・・・今から此処に来る人物の事は、お前が一番良く知っていると私は思う」

誰だろう？私が良く知っている人？

「その人はもう死んでいる人だ・・・判るだろう？」

もう死んでる人で・・・私が良く知っている人・・・まさか

「まさか・・・母さん・・・？」

「そうだ・・・プレシア・・・早く出て来たらどうだ？」

龍也が茂みに目を向けると

「・・・自分のタイミングで逢いたかったんだけど？」

茂みの中から母さんが姿を見せる。・・・

「こうでも言わないと、出れなかったんじゃないのか？」

からかう様な声で言う龍也

「そうね・・・多分出れなかったわ・・・ありがとう」

そう言っていると母さんはゆっくり私の方へ歩いてくる

「か・・・母さん？」

目の前に居るのは、間違いなく私の大切な人だった・・・母さんだった

「まだ・・・私の事を母さんって呼んでくれるのね・・・フェイト・・・
ありがとう」

母さんに抱き寄せられる

「ごめんなさい・・・ずっと謝りたかった・・・大切な娘の貴方を人形
だ何て言って・・・嘘よ・・・フェイト私は貴方が大好きよ・・・私の大
切な・・・大切な娘のフェイト」

「母さん・・・母さん・・・あああッ！！あああああッ！！！！！」

私は思いっきり母さんに抱きつき、涙を流した。

「もう・・・フェイトは泣き虫ね」

優しく私の背を撫でてくれる、それが嬉しくてまた涙が出る。

「フェイト・・・私は過去の人間・・・判るかしら？」

丘の上のベンチに腰掛け、話をしていると母さんが突然そんな事を
言い出した

「えっと・・・ごめん・・・判らないや」

考えても判らないので素直に判らないと言うと

「私は虚空空間に落ちたわ．．でも私は虚空空間を出る事に成功した．．でも出た場所は過去．．今私には娘が三人居るわ。まずはアリシア．．次にフェイト．．最後にフェリシア．．此処で歴史は代わってるのよ」

そうか．．私じゃない私が此処に居るんだ

「うん．．大体判ったよ。でも母さんは母さんだよな」

笑いながら言つと

「ええ．．例え世界が違つても．．私は貴方の母親よ．．フェイト」

もう一度優しく抱きしめられる．．暖かい．．それに凄く幸せだ．．私はその幸福な余韻に浸っていた

「プレシア、写真を撮るんだろう？早く呼んできたらどうだ？」

さっきまで離れた所に居た、龍也が母さんに言う

「ええ．．記念写真ね．．フェイト．．少し待っててね」

母さんはそう言つと、丘を下つて行つた。暫くすると

「ほら．．三人ともおいで」

母さんが三人の少女を連れてくる

「こんな所に何の用なの？」

「母さん・・・私眠い・・・」

「僕・・・詰まんない」

丘に登りきった所で、水色の髪の少女が私に気付き母さんに

「母さん・・・あの男の人誰？」

どうやら私ではなく、龍也の事が気になるようだ

「あの人は母さんの、命の恩人かしらね？」

と笑っている。母さんの所へ龍也と共に行く

「始めまして、私はフェイトって言うの・・・貴方は？」

「僕はフェリシアって言うの」

「私はアリシア」

「えっと・・・フェ・・・フェイトです」

自己紹介する三人を見て、笑みを零しているとフェリシアが龍也に近づき

「おんぶして！」

龍也の服を引っ張りおんぶしてと言う

「構わないよ、おいで」

フェリシアを抱き上げる

「おおー、高い、高い凄い!!」

おおはしやぎのフェリシアを見て、アリシア達も龍也に近付く

「むっ・・・どうした？二人とも」

龍也が屈み込み尋ねると

「私達もおんぶして」

顔を赤くしながらアリシアが言うと

「良いとも、二人ともおいで」

器用に3人をおんぶする龍也を見ていると

「龍也は子供に好かれるのね」

母さんが私の隣に立ちながら、言う

「うん、龍也は子供に好かれるんだ。結婚もしてないのに3人の子持ちだって笑ってるよ」

「あらあら・・・龍也は魔導師より、保父さんに向いてそうね」

笑う母さんと龍也を見ていると

「プレシア・・・写真を撮るのでしょうか？」

リニスが近付き言つと

「そうね、早く写真を撮りましょうか。龍也写真を撮るわよ」

龍也に声を掛けると

「判つた。ほら三人とも降りなさい」

「・・・はい」「」

降りた三人の後ろに私と母さんと龍也が並ぶと

「はい・・・それでは行きますよ？」

リニスがカメラのシャッターを切る

カシャ

カメラのフラッシュが光る

「もう一枚行きますよ・・・」

カシャ

再度カメラのフラッシュが光る

「はい・・・どうぞ・・・フェイト」

現像された写真を受け取る。懐に仕舞う

「さあ・・・皆帰るわよ？」

母さんが三人に言うつと

「プレシア・・・私が連れて行きます」

リニスが割り込み、三人を連れて行つた

「ふふ・・・リニスが気を遣ってくれたみたいね」

と笑い私の前に立ち

「フェイト。また遊びに来なさい・・・今度はゆっくり皆で話しましょう」

「うん！今度はもっとゆっくり出来る時に来るね」

と笑う母さんに頷き、私達も元の時間に帰って行つた

「へへ・・・母さんとの写真」

自室の写真立てに入れた写真を見ながら、私は笑みを零したが

「龍也・・・大丈夫かな？」

戻ってくるなり、ヴィータに連れ去られた龍也の事が気になったが

「多分、大丈夫だよね」

私はそう呟き眠りに落ちた。フェイトが眠りに落ちた頃

「解放して欲しいな・・・」

ヴィータに抱き枕にされている、龍也の悲しげな声がヴィータの部屋の前から聞こえたそうだ

続くかもしれません・・・

コラボ番外編 純白の翼の軌跡編

番外編

「本当に1人で大丈夫か？」

蒼銀の瞳に銀の髪の方が金髪の方に話しかけると、男は

「ふん、いらぬ心配だ・・俺がネクロの残兵如きに遅れを取ると思
うのか？」

逆立った金髪に紫色瞳の男は好戦的な笑みを浮かべた、その姿を見
て銀髪の男・・八神龍也は

「そうだな・・いらん心配だったな・・すまないルシルファア」

ルシルファアと呼ばれた男は

「ふっ・・気にする事はない・・慎重なお前の事だ、もしもの事を
考えたのだろうか？・・だがキメイラも余計な事をしてくれた・・」

ジオガディスとの最終決戦の際にキメイラが放った、デイメンジョ
ンデストロイヤーは世界の壁を破壊し、過去、未来、平行世界を一
時的に繋げた、その際に何体かのLV4が姿を消した・・消滅した
のではない、間違いなく別の世界に居るはずだ・・その世界の魔導
師では手も足も出ない筈・・だから直接その世界に向かう必要がある
のだ

「気をつけてなルシルファ―」

龍也に見送られ、ルシルファ―は目の前の黒い渦の中に飛び込み姿を消した・・

「んっ？・・妙な魔力の流れだ・・何かあったのか？」

金髪と碧眼を持ち髪を背中まで伸ばした中性的な顔の男が・・五十嵐遥がそう呟いた・・

「良く判らないが・・見に行ってみるべきか・・」

俺はそう呟き、一人で裏山に向かって行った・・

「ここら辺の筈なんだが・・」

俺が気配を頼りに裏山を進んでいると

「キキ・・ミツケタ・・ミツケタ・・クロス・・クロス・・」

黒い影のような化け物が数体姿を見せる・・俺はそいつらを睨みながら

（何だ？こいつらは？・・見た事が無いが・・）

様々な世界に行った事のある俺でさえ見た事がない、謎の生物の事を不信に思いながら

（まあ良い・・・襲ってくるなら倒すまでの事だ・・・）

俺はそう思いながらデバイスであるシャイニングスターを取り出し

「セットアップ・・・」

俺を光が包み込み、バリアジャケットが展開される、所々銀の装飾がされた黒のバリアジャケットに機械的な鎌が現れる

「さてと・・・行くとするか・・・」

俺はそう呟き、黒い影に向かって行つた・・・

「はあっ!!」

鎌を振るい両断する・・・強いかと思つたが・・・それほど強くない・・・
ジュエルシードの暴走体より弱い・・・だが

（こいつらは何体居るんだ？）

両断しようが魔力弾を放とうが次々と現れる影の化け物達を考えていると

【危ない!!後ろです!!】

シャイニングの忠告を聞いて跳躍する、そこには

「ほう・・・良く避けたナ・・・」

黒の鎧姿の騎士らしき物が斧を振り下ろした体勢のまま言う・・・

体だけではない・・・複数体居るようだ

（やれやれ・・・弱いから良いが・・・こうもわらわらと出てくると鬱陶しいな・・・）

一体一体の力は弱い・・・簡単に倒す事が出来る・・・だがこうも連続で出てくると鬱陶しい

「速攻でかたを付ける。シャイニング、カートリッジフルロード」

ガシユンガシユンガシユンガシユンガシユン・・・

計12のカートリッジを使い

『光よ、闇を切り裂き、一筋の光となれ、シャイニング・・・』

俺とシャイニングが共に叫ぶ

『ブレイカーーーーーー!!!!!!』

砲撃を放ち纏めて影の化け物達を吹っ飛ばした・・・

「やれやれ・・・一体何だったんだこいつらは・・・」

消し飛ばした化け物達の事を考えていると

「考える事は無いだろう？どうせ貴様も死ぬのだ」

!!!!!!強烈な殺気を感じ後方に跳ぶと同時に巨大な剣が振り下ろされた

「避けるか・・・守護者の居ない世界にこれほどの剛の者が居るとは・
・予想外だ・・・」

獣の下半身に漆黒の鎧を身に纏った異形が立っていた・・・やはりこ
いつも見た事のない敵だと思っっていると

「まあ・・・それで良い・・・あんまり手応えの無い者と戦っても面白
くないからな・・・名乗らせて貰おう・・・俺はダークマスターズが1
人・・・ガルフだ・・・」

剣を構えながら名乗るガルフに先手必勝と思い鎌を振るうが・・・

「甘い・・・」

獣の下半身は伊達で無いよう素早く回避する・・・だが・・・

「甘いのはどっちだ・・・」

逃げた先に素早く移動し横薙ぎに鎌を振るうと

「ぬっ・・・」

その一撃は浅くだが体表を傷つけた・・・それに

（渾身の一撃だったんだが・・・何なんだこいつの防御力は）

生身である足を攻撃したのだが・・・手応えは浅くダメージも低そうだ

「ふむ・・・子供だと思って甘く見た・・・俺らしくない・・・自ら打っ

て出るなどは・・・俺らしい戦い方で行くでしょう・・・ネクロマジック・・・」

ガルフの背後から闇色の魔力陣が展開される・・・何だ？何をするつもりだ・・・何が出るか警戒していると

「ふふふ・・・何が起こるか警戒していると言う所だな？・・・だが遅い・・・既に起こっているぞ？」

その言葉と共に俺の足元から、最初に戦った影の化け物が現れ俺の動きを拘束する

「なっ・・・くそっ！！」

その拘束から逃れようと足を動かすが全く動く気配が無い・・・その拘束から逃れようとしていると・・・素早くガルフが近付き

ザンツ！！！！

俺を化け物ごと両断する、ガルフ・・・馬鹿な・・・味方ごとだと・・・何とか体勢を立て直すが

「遅い遅い・・・ダークネスサンダーッ！！！！」

闇色の魔方阵から漆黒の雷が放たれ俺に命中する

「がっ・・・」

直撃を喰らい吹っ飛ばされ・・・何とか体制を立て直し着地するが

「キキ!!」

再び俺の足元から化け物が現れ俺の動きを拘束する・また・このパターンか!!再び拘束から逃れようと動くが足が動く気配は無い・

「くつくつ・いくら貴様が強かろうが足を拘束されれば、戦えぬだろう?」

笑いながら近付くガルフに

「貴様!!さっきの奴らは味方じゃなかったのか!!」

先程俺と一緒に両断された化け物の事を言うと

「仲間?・ああそうさ俺の味方さ・俺が敵を殺す為に死ぬ・俺の大切な部下さ・」

こいつ!!心底腐ってやがる・敵を殺す為に味方を殺すだ?・仲間を何だと思ってるんだ!!俺は目の前のガルフに怒りを覚え拘束を振り解こうとするが・

「おつと・無駄な事だ・どうして俺が貴様に話しかけたと思う?・そろそろだな・3・2・1・0・」

そのカウントダウンが終ると同時にバリアジャケットが解除される・馬鹿な!!どうして!!訳が判らず混乱していると

「貴様の動きを拘束しているLV1は魔力吸収に特化していてな・いくら魔力が高くて無能力化できるのさ・さっ話は終わりだ・

貴様を殺し！！偉大なる王の復活の為の生贄になってもらうぞ！！
！ダークネス・・・ブラスト！！！！」

特大の砲撃が放たれる・・・回避は無理・・・防御も無理・・・

（くそ・・・俺はこんな所で死ぬのかよ・・・）

その迫り来る砲撃から目を逸らすと

「黒き門よ・・・我に害なす・・・暗黒を消し去れ！！ブラックホール
！！！！」

金髪の男がそれに割り込み黒いひずみを発生させ、その砲撃を飲み込む・・・その男から滲み出る威圧感の半端じゃない・・・誰なんだ？

味方か？・・・俺が混乱していると

「馬鹿な・・・何故貴様がここに居る！！・・・魔剣士！！ルシルファ
ーシャッカス！！貴様はこの世界に居ないはずだっ！！」

怒鳴るガルフにルシルファアと呼ばれた男は

「ぐだぐだとうるさい奴だ・・・どうでも良いだろう？これから死ぬ
貴様にはな！！グレイダルファアセットアップ！！」

黒い騎士甲冑に所々金の装飾が施された美しい騎士甲冑に、白のマ
ントに両手に幅広のダガーが握られる・・・

「忌むべき者よ・・・早々に消え去るが良い・・・」

ドン！！

空気が爆発する音と共にルシルファアの姿が消える・見えなかっただど？・この俺が？見えなかった事に驚いていると

「龍鳳天嚇！！」

次々とダガーから黒い衝撃波を放ちガルフにダメージを与えていく・
・嘘だろ？俺の攻撃じゃ掠り傷しか与えられなかったのに・

「くそ・俺がこんな奴に！！負けて堪るか！！ブラックブレイド！！」

闇色の魔力と共に剣が振り下ろされるが・

「遅い・スライドストライク！！」

何時の間にか握られていた、変わった形の刀でそれを弾き、両肩に的確に魔力で出来たダガーを突き刺し蹴り飛ばす・その動きは流れるような身のこなしでとても美しい物だった・蹴り飛ばされたガルフは怒りに燃える瞳でルシルファアを睨み再び砲撃を放とうとするが・

「遅い・欠伸が出るな・ダークデイメンジョン！！」

後ろを向いたまま刀を振り抜き鞘に戻す・その姿を見てガルフが

「ふはははは！！武器を収めるとは愚か者が死ねえッ！！！！」

笑い声を上げるガルフにルシルファアは

「死ね？．．ふん．．何を言っている愚か者．．既に死んでいる貴様がどうやって俺を殺すつもりだ？」

その言葉と共にガルフと周囲の木が両断される．．まさか．．さっきの一撃で切り裂いたと言うのか！！

「なっ．．ば．．ばかな．．」

ガルフは信じられないと言う口調で呟き、粒子となり消えた

「ふん．．詰まらん戦いだっただ．．おい！そこの餓鬼！！怪我は無いか！！」

怒鳴りながら尋ねる男に

「はっ．．はい大丈夫です．．」

その威圧的な態度に敬語で返事をする

「そうか．．なら良い．．今日見たことは誰にも言うな、良いな？」

そう言い歩き去ろうとするルシルファアに

「待ってくれ！！俺はあんな化け物は見た事が無い！！あれは一体何なんだ！！それだけで良い教えてくれ！！」

色んな世界を見たが．その俺でさえ見た事の化け物の事を尋ねると

「．．そうか．．なら教えてやる．．あれはネクロ、死んだ魔導師

を素材に造られる忌むべき存在・・・全て消し飛ばしたと思っていたのだが・・・生き残りが居た・・・だから俺が倒しに来た・・・それだけだ」

簡潔に言い、歩き去ろうとするルシルファアに

「助けてくれてありがとう！！俺は遥！五十嵐遥だ！！あんたの名前は！！！」

と尋ねるとルシルファアは振り返り

「ルシルファア・・・ルシルファアSハーティーンだ・・・もう会う事は無いだろうが・・・元気だな」

そう呟きルシルファアは黒い渦の中に飛び込み消えた・・・

「ルシルファアか・・・また会えそうな気がするのは俺だけか？」

俺はまた出会うかもしれないと、不思議にそう思った・・・俺はそんな事を考えながら裏山を後にしようとしたが・・・

「やば・・・服・・・なんて説明しよう・・・」

ボロボロの服をどうやって説明しようかと思い俺は頭を抱えた

帰ってきたか・・・遥か・・・不思議な男だ・・・俺に似た気配がしていたな・・・どこことなく俺に似た気配を持つ男の事を考えていると

「ハーティーン!!お帰り!・・・あつ!」

ラグナが手を振りながら走ってくるが、途中で足を滑らし転びかける、

シュン!!

俺は即座に踏み込み倒れかけるラグナを抱きとめ

「まったく・・・こんな何も無い所で何故転びかけるんだ?」

呆れながら尋ねると

「へへ・・・わざと・・・ハーティーンならこうやって抱きとめてくれるって知ってたから!!」

にこやかに笑うラグナ・・・どうやら・・・俺はラグナの策に嵌ってたという事か・・・

「やれやれだ」

と呆れながら言つと

「へへ」ご飯出来てるから早く行こう!!」

「おい!待て、引つ張るな!!」

と言つが

「聞こえない」ほらほら早く行かないと冷めちゃうんだから!!」

無視して俺の手を引くラグナに

（やれやれだ・・だが悪くないと思うのは何故だろうな？）

こうしてラグナに引つ張りまわされるのも悪くないと思う・・俺はラグナのおかげで元の名を思い出せた・・ジオガデイスに利用されていた頃・・なんでかラグナに惹かれた・・それは多分本能的な所で別っていたのだ・・ラグナが俺の束縛を打ち破ってくれるのだと・・だから俺はラグナに拘っていたのだ・・

「ほらほら！！早く早く！！」

笑いながら俺の手を引くラグナに

「そつだな・・早く行こうか？」

俺は笑いながら食堂に向かって行った・・

番外編 終り

オリキャラ紹介

ルシルファースハーティーン

かつて神王と共にジオガデイスに逆らった、伝説の騎士 魔剣士・・剣帝等の様々な呼び名を持つ
だがヘルズとヴェノムに洗脳され、ジオガデイスの為に戦っていた

だが、ラグナの助けを求める声に反応し洗脳を打ち破り、本来の姿と心を取り戻した。

元の姿に戻った当初は、ジオガデイスに従った以上ルシルファーンシヤッカスの名は名乗れないと言い、ラグナに貰ったハーティーンを名乗っていた、ジオガデイスとの決戦終了後に今のルシルファーンSハーティーンとなった、ハーティーンをつける理由はラグナから貰った名に誇りを持っているし、何より気に入っているから

使用するデバイスはグレイダルファールと菊燐に王龍刀で、二つの通り剣を使った戦闘では負け知らずだが・その反面射撃砲撃は余り得意ではない、かといって使えない訳ではなく、魔導師ランクで換算するとSランクである優れた戦闘センスに経験から来る判断力、その全てが龍也と同クラスであり、龍也と並んで最凶と呼ばれる、龍也と違い敵や犯罪者にかける容赦が無い為、最強ではなく最凶である・管理局内でも恐れられる存在である、だが味方には優しくスバル達に戦い方を教える等、割と面倒見は良い、だが龍也に勝つという目的はいまだ変わらず度々模擬戦をしているが、良い所でラグナによって強制終了させられている為、決着つかずである・

コラボ番外編 はじまりの魔法編その1

それでは番外編始まります・・

ピーッ！ピーッ！！

六課の中に警報が響き渡る、何事かと隊長陣達とFW陣がブリーフ
イングルームに向かう

「皆集まったか・・状況を説明するで？」

六課の部隊長である、八神はやてがモニターを指差しながら状況を
説明する

「今から30分前、市街に謎の生物が現れた、民間人がもう10人
近く犠牲になつとる・・武装隊が交戦しとるけど・・1体も倒せて
ない・・そこで私らに出動要請が来たんやけど・・多分私達でも何
も出来ん思う、そこで近藤さんはどう思う？これは昔の生物兵器の
類か？」

はやてがブリーフィングルームに奥に居た強面の男・・近藤大輔に
尋ねると男は首を横に振り

「すみませんが俺は知らないですね・・始めて見ますね・・」

近藤がそう言つと

「そうか・・でも出勤しん訳には行かんから皆気をつけてな？」

はやてに見送られ六課の魔導師達は出勤して行った・・・魔導師達が出勤した頃クラナガンの街外れに

「ここに・・・ネクロの生き残りが居るのか・・・」

銀髪に蒼銀の瞳を持った男が空を見上げそう呟くと・・・

「はあはあ・・・どうしてそんなに平気そうなの？」

金髪の女性が息を切らしながら男に尋ねると男は

「慣れてるからな・・・むっ・・・ネクロが動き出している・・・私は先に行くぞ？」

男の姿は一瞬で消えた・・・それに金髪の女性は

「馬鹿ーッ！！！！何で一緒に来たのに！！一人で行っちゃうのーッ！！！！」

女性の怒鳴り声が空に響き渡った・・・

「何なのだこいつらは！！」

私は苛々としながらそう呟いた

「キキ・・・」

黒い影の様な生き物にレヴァンティンを振るうが・

ブリュ・

鈍い音を立ててめり込むだけで、効果は薄い・それは私だけではなく

「どうしましょう！攻撃が全然効きませんよ！」

スバルやエリオも同様に攻撃が弾かれるだけで効果が無く

「私達の魔法も全然効果が無いよ！どうするシグナム？」

高町やテストロッサの魔法もまるで効果が無い・このままだとジリ貧だと思った瞬間

ピカッ！！

黒い稲妻が走り1体の異形が姿を見せる、翠色の体を持ち体の回りには無数の触手・それは龍の様にも見えた・その龍は私達を見て

「弱い・この世界の魔導師は弱すぎる・同じ人間でもこうも違う・だが丁度良い貴様らを皆殺しにして・我が偉大な王の為の贄になつてもらおうか・」

龍はそう言つと大きな口を開き

「消し飛べ・ヘルブレイズ！！」

巨大な黒い炎を吐き出してきた、反射的に回避しようとするがそれより速く炎が着弾した

ドーンッ！！！！

「うわああああっ！！！！」

私含め全員吹き飛ばされ大ダメージを受けてしまった

「後は貴様らのリンカーコアを頂くのみ・・・やれ・・・」

5体の黒い騎士は近付いてくる・・・

（くっ・・・こんな所で死ぬのか？）

死ぬのか？と思った瞬間

「羅刹覇龍吼！！！！」

聞き覚えの無い男の声と共に龍の形をした魔力波が私達の後ろから飛んできた

「ぐああああっ！！！！」

5体の騎士を龍が呑み込むと同時に

「でえええい！！」

銀髪の男が踏み込みながらアップパーを繰り出し、5体の騎士を跡形も無く消し飛ばす・・・馬鹿な一撃でだと？一撃で騎士を屠った男に

驚いていると

「キキーツ!!」

7体の影の化け物が飛び掛る

「危ない!!」

スバルが慌てて危ないというが、それは要らぬ心配だった・

「ふん!!」

裏拳を叩き込み、怯んだ影の化け物に連続で蹴りを叩き込み消滅させ・次の瞬間

「これで決める・麒麟・暁!!」

バババババツ!!!

手が分裂したように見える高速のラッシュの後に

「はああああっ!!!」

ドガン!!

「キキツ・」

6体纏めて蹴りを叩き込むと同時に体勢を低くし

「この一撃にて冥府に戻れ!!」

両肘から現れたブレードで6体全て消滅させた・

「嘘でしょ・・・」

ティアナが信じられないと言う声で言う、それは私も一緒だった、私達が束になっても敵わない敵をたった一人で倒したこの男に恐怖を覚えていると龍の異形が

「ご苦勞な事だ・・・態々世界を越えてまで俺を倒しに来たか・・・守護者？」

世界を越えて！？？どういう意味だ！・訳が判らず混乱していると

「その通りだ・・・私は貴様を倒す為に世界を超えた・・・貴様もあるべき所に帰るが良い・・・神騎覚醒・・・」

男の体を虹色の魔力が包み込む、私はそれに驚いたそれは

「聖王の魔力・・・」

ベルカの王の証である、魔力光だったから・・・驚いているのは私だけではなかった、高町やテストロツサも同じ様に驚き目を見開いていた・・・虹色の魔力が消えるとそこには美しい黄金の甲冑を身に纏った男の姿があった・・・その姿は神々しいまでの力強さがあった

「呪われし命よ・・・いまその鎖から解き放つてやろう」

男は剣を抜き放ち龍に向かって行った

「があああっ！！！！ダークハウリング！！！！」

龍が雄たけびを放つがそれを剣で弾き飛ばし一気に肉薄し剣を振るう

ズパッ！！

その一撃は龍の体に傷を与えたが

「むっ！」

傷跡から触手が飛び出して来て男を捕らえる

「くつくつくつ・・・愚かなり・・・守護者・・・俺の体はこの触手でできている・・・直接攻撃など効きはせん・・・どうやら死ぬのは貴様の方だな・・・死ぬ・・・ダーク・・・」

龍が炎を吐き出そうとした瞬間

「Vウイング・・・ブレード！！！！」

金色の魔力刃が放たれその触手を切り裂く・・・だがその声には聞き覚えが合った・・・その声の方を見ると

「私！？」

そこに居たのはテストロッサだった・・・だが身に纏うのは騎士甲冑だった・・・そのテストロッサ？は男の隣に着地し

「油断しすぎじゃない龍也？もう少し慎重に行った方が良くないかな？」

笑いながら言う。と龍也と呼ばれた男は

「そうだな．．少々焦りすぎたか．．私らしくない戦い方だったな．．
すまんフェイト」

フェイトと呼ばれた事から間違いなくこの女性は、テストロッサなのだろう、テストロッサ？は男に手を差し出し

「ほら、行くよ．．早く倒さないとね？」

「判った一氣に決めるとしよう．．少しの間．．時間稼ぎを頼めるか？」

時間稼ぎを出来るか？と男が尋ねると

「楽勝、詠唱が終るまででしょ？全然余裕だよ」

テストロッサ？は笑うと同時に右手のブレスレットから魔力刃を出し龍に向かっていった．．

「さてと．．私もやるか．．」

男が目を瞑ると男の周りに鳥を模した、ブラスタービットが現れる．
・高町の物と似ているが数が違った．．高町が4に対して男は10．
・その全てを完全に制御しているこの男に驚いていると

「ぐっ．．」

近藤が頭を抱え蹲る、それにテストロッサが駆け寄る

「大輔さん！？どうしたの？」

どうしたの？と尋ねると近藤は

「あの男・・・間違いない・・・神王・・・語られる事の無い最強の存在・・・
どうして・・・」

近藤が頭を押さえながら男を見る、それにつられ私達もその男を見る

「フェイト！もう良いぞ！！下がれ！！」

龍と戦っていたテストロッサ？に声を掛けると同時に鳥型のブラスタールビットが高速で動き龍の下に潜り込み

「全ての咎人に聖なる星の断罪を！スターライト・・・ブレイカーツ
！！！！！！」

ビットから強烈な虹色の砲撃が放たれ龍の巨体を上空に打ち上げる、
それと同時に

「聖なる雷よ迷える魂を天空へと導け！プラズマ・・・ザンバーブレ
イカーツ！！」

今度はテストロッサの砲撃を放ち龍を更なる上空に打ち上げ、男は
剣で円を描き

「全ての咎人に終焉と言う名の安らぎを・・・」

剣で描かれた円に魔力が収束していく

「今こそ断罪の時。ラグラク・・・ブレイカー!!!!!!」

今度は主はやての砲撃を放ち龍の動きを完全に拘束すると同時に、ビットが男の周りに集まり円を描く

「次元を破壊せし・・・無限力よ・・・呪われし命に安らかな終焉を・・・」

複雑な魔法陣に凄まじいまでの魔力が収束される

「アキシオン・・・バスター・・・デッドエンドシュートツ!!!!!!」

巨大な魔方阵から放たれた虹色の砲撃が龍を完全に飲み込み消滅させ、片手で十字を切り

「哀れな魂に魂の救済を・・・」

十字を切る男の隣にテストロッサ？が着地し

「ふう〜終わりつと・・・これでLV4半分倒した？」

男に尋ねると男は

「そうだな、これで半分と言った所だな・・・さてと大丈夫かね？どこか体の調子の悪い者は？ネクロの攻撃には精神にダメージを与えるが多いが・・・気分の悪い者は居ないかね？」

私の前にしゃがみこみ尋ねる男にテストロッサが近付き

「私達は大丈夫です・・・でも大輔さんが・・・」

男に近藤の調子が悪いと言うと

「ふむ・・・どれ・・・」

男は近藤の前にしゃがみ込み

「大丈夫か？何処が痛む？」

近藤に男が尋ねると、近藤は

「その・・・虹色の魔力を止めてくれ・・・頭が痛む・・・」

虹色の魔力の放出を止めてくれと言うと男は頷き

「これで良いかね？さてと・・・では回復させるぞ？傷ついた戦士に天界の祝福を・・・ヘブンスヒール・・・」

男の手から蒼い風が吹いたと思うと私達の体の痛みは完全に消えていた・・・

「さてと・・・これで終わりだ・・・フェイト戻るぞ、あんまり遅くなるとはやてが怒るからな・・・通信機持つてきてるだろ？」

男がテストロッサ？に尋ねると

「あ・・・ごめん・・・持つてくるの忘れた・・・」

男とテストロッサ？の間に沈黙が走る・・・少し聞いたただけだが・・・

どうやら戻れないらしい私が声を掛けるより早く

「あの・・・帰れないなら少し私達の所で休めますか？・・・それにその・・・その女性の事も気になりますし・・・」

テストロッサがテストロッサ？を指差しながら言つと

「・・・そうだな・・・悪いがお邪魔させてもらおう」

男が頷いたので、私達は男達を連れ六課に戻つた

「ほー・・・本当にフェイトちゃんそっくりやな・・・ああ悪いなあ、私は八神はやてや宜しく」

ブルーフィングルームで宜しくと言つはやてに

「ああ、宜しく、私は八神龍也、こっちは正真正銘フェイトＴハラオウンだ」

笑いながら自己紹介をすると

「そう、そこや！フェイトちゃんはどこにおる・・・だけどそっちにもフェイトちゃんがおる、それがどういふ事が説明して欲しいんやけど・・・」

説明して欲しいと言つはやてに

「ふむ・・・少々長くなるが良いかね？」

そう前振りをしてから、平行世界の理論を説明し始めた・・・説明開始から1時間後

「ほーつまり龍也さんは平行世界の私の兄ちゃんと・・・うーん・・・」

ジロジロと私の顔を見るはやてに首を傾げながら

「そうやって見られると居心地が悪いのだが？」

こうやってジロジロ見られるのは慣れてないのでそう言つと

「んっ・・・ああ気を悪くしたなら謝るわ・・・でも格好良いなあ・・・こんな兄ちゃんおつたら良いのにな」

そう笑うはやてに

「社交辞令でも嬉しいよ、ありがとう」

笑いながら言つと

「いやー社交辞令とかやないで？本当格好良いわーモデルみたいや」

暫くはやてと話をしていると

「ねえ・・・私は何時まで黙ってれば良いの？」

さっきから黙り込んでいたフェイトが少し怒ったように言つので

「むっ・・・すまん・・・少々話に夢中になりすぎていた・・・」

謝るとはやてが

「んーもしかして龍也さんはフェイトちゃんとお付き合いしてるのかな？」

からかうように笑うはやてに

「まさか・・・私のような男ではフェイトとは吊り合わんよ」

笑いながら言うとフェイトは大きく溜め息を吐いた・・・

（ん？どうしたんだろうか？何か不味い事でも言ったかな？）

どうしてフェイトが溜め息を吐いたのか判らず首を傾げると

「理解した・・・こういう人か・・・あんた苦労するわ」

「判る？・・・でもね・・・私の世界だとはやて凄く怖いので、下手に一緒にいると処刑されるんだよ？」

ぶつぶつと話す2人から視線をずらすと

「話終ったんですか？」

眼帯を着けた男・・・確か近藤さんだったな・・・がブルーフィングルームに入ってきた

「私の話は終ったよ、今女性同士で話をしているよ」

ひそひそ話をする2人を横目に言うと

「そうですか・・俺も貴方に聞きたい事があるんですが良いですか？」

笑いながら腰掛ける近藤さんに

「どうぞ、私に判る事でしたら」

そう言うと近藤さんは

「まず、スカリエツティ何ですけど・・やっぱり悪い事をしていますか？」

「ジェイル？・・いやあいつは管理局員だが・・こっちの世界では悪人なのか？」

ジェイルが平行世界では私は犯罪者になる事が多い、と言っていたのを思い出しながら返事を返すと

「やはり・・同じ歴史は歩まないと言う事ですか・・それでヴィヴィオは居ますか？」

ヴィヴィオは居るか？と尋ねる近藤さんに

「ヴィヴィオ？居るよ私が引き取って育ててるが？」

ヴィヴィオを引き取って育ててると言うこと

「そうですね．．それは良かった」

安心したという表情で微笑む近藤さんに

「近藤さんも目を怪我してるんですね．．私と一緒にだ」

私は眼帯をしてないが、目に傷があるので私と一緒にだと言うと

「そうですね．．嫌な一致ですけどね、でも俺は義手なんですよ」

義手だと言う近藤さんに

「そんな所まで．．私も義手なんですよ」

義手だと言うと近藤さんは驚いた顔をしながら

「本当、嫌な偶然ですね」

「そうですね」

2人で気が合うと思いつながら話をしていると、急に近藤さんが真剣な表情になり

「所で何故？貴方が聖王の魔力を．．」

聞かれると思っていた、聖王の魔力の話をしようとした時

ドンッ！！

演習場の方から爆音が聞こえ

「何かあったのか？」

慌てて演習場に行くと

「・・・・・・・・」

ゴゴゴゴゴツ・・・・

濃厚な暗い殺気を身に纏ったはやてが居た

「あれが・・・私か？」

この世界のはやてが困惑する中、私の世界のはやてがこつちを見て

「見つけた・・・」

ヒュンツ・・・

はやてが消え次の瞬間にはフェイトの前に立ち

「なあ・・・私言つたよね？通信機忘れるなつて・・・なあ？・・・なん
で忘れたん？なあ・・・答え」

どんよりとした目でフェイト睨む

「あ・・・あああ・・・ごめん・・・ついうっかりしてて」

震えながら弁解するフェイトにはやては

「そうか・・・うっかりか・・・初犯やから・・・これくらいで勘弁したるわ・・・」

はやてがフェイトの目を睨む

「ネクロエクリプス・・・」

はやての目が赤く怪しく光ると同時にフェイトは昏倒した

「ほい・・・おしまい・・・暫く悪夢にうなされると良いわ・・・さて・・・兄ちゃん帰ろう」

何事も無いように帰ろうと言っはやてに

「いや・・・フェイトが昏倒してるんだが？」

魔されてるフェイトを見ながら言っ

「うん？大丈夫や暫くしたら目を覚ますから、ほれ早よ帰ろう」

ズルズル・・・

フェイトの足を引きずり歩いて行くはやてを横目に

「騒がしてすまない、それと少しだが話が出来て楽しかった、ではまた会おう」

私は余りの事に硬直している、はやてと近藤さんに別れを言って私は共に元の世界に戻った・・・龍也達が帰って行った後の演習場ではやてが

「私・・兄ちゃんおつたら、あんな風になるんか？」

なにかショックを受けた様で呟くはやてに答える者は居なかった・・

「んー戻ってきたわ」

背伸びするはやてを見ながら、気絶しているフェイトをソファーに横にしていると

「ほれ兄ちゃん、遊びに行くで」

笑いながら遊びに行くと言うはやてに

「仕事は？」

仕事の事を尋ねると

「もう終わってるで、ほら遊びに行こ！」

私ははやてに手を引かれ街に出掛けて行った・・はやてに手を引かれながら私は

（何時になったらはやては兄離れしてくれるんだろうな？）

何時になったらはやてが兄離れしてくれるんだろうか？と考えていた

番外編 終り

コラボ番外編 はじまりの魔法編その2

「今日の訓練はここまで!!」

演習場でなのはの声が響く、その前にはへたり込んでいるスバル達の姿がある・・なのはの背後から眼帯を着けた男が現れる

「しかし・・何時見てもなのは隊長の訓練は厳しいですね」

笑いながら言う男・・近藤に

「うーん・・そうかなあ？」

そんな話をしていると・・

「うわあああああッ・・あぶっ!!ぎゃああああッ!!禿げる!!禿げる!!のわあああああッ!!!!」

演習場の上に黒い穴が現れ、そこから白衣を纏った男が現れ豪快に頭から落下しズザッ!!と音を立てて滑っていく・・男が滑っていく方向に壁があり・・

「そっちは危な・・」

なのはが声を掛ける前に

ドゴンッ!!!!

「ぐわあああああッ!!!!」

壁に顔面からぶつかり男が絶叫と共に停止する・

ピクッ・・・ピクッ・・・

足が良い具合に痙攣している男を見て近藤が

「！！この男は・・・スカリエッティですよ！！なのは隊長！！」

演習場の空気が張りつめる・・・広域指名手配の男が何故ここに？と近藤達が混乱していると

「はっ！！・・・逃げなければ・・・」

スカリエッティが急に立ち上がり走り出そうとする・・・だが頭から血を流すその姿は軽いホラーだ・・・そんな事を近藤達が考えていると

「くたばれえええっ！！！！」

銀の閃光がスカリエッティの背中を打ち抜く

「ぎゃあああああっ！！！！」

スカリエッティが悲鳴を上げながら吹き飛んでいく・・・そして近藤達の前に1人の男が着地する

「・・・・・・」

流れるような銀髪に蒼銀の瞳を持った男・・・

「龍也さん・・・？」

確か別世界の魔道師の筈・・・どうしてここに・・・近藤達がそんな事を考えていると、龍也が体勢を低くし走り出す

ドゴンッ！！！！

飛び蹴りを喰らい吹き飛んでいたスカリエッティに追い付き強烈な肘打ちを叩き込む

「がふっ！！！」

体が9の字に曲がるスカリエッティの顎を

「ふんっ！！！！」

ピンポイントで蹴りぬく

「げふっ・・・」

血を吐き体が浮いたスカリエッティの前で

ヒュウン・・・ヒュウン・・・

龍也さんが∞の軌道を描き体を揺する・・・俺はその動きに見覚えがあった・・・

「デンプシーロール・・・」

確かボクシングの技の1つだったと記憶している・・・∞の軌道で体

を揺すり連続でフックを叩き込む・極めて破壊力の高い技だった筈・・そんな事を考えていると

ドゴンッ!!ドゴンッ!!!

嫌な音を立てて次々とフックが決まっていく・そして17回目のフックで

「がふっ・・・」

血を吐きながらスカリエッティが倒れ込む、それを龍也さんが見下ろしていた・・・

「・・・・・・・・」

惨劇を目撃した、なのは隊長達は黙り込んでいる・かという俺もどうすれば良いか判らず止まっていると

「うん?・・近藤さんじゃないですか・・お久しぶりです」

頬に血を付けたままにこやかに手を差し出す龍也さんに驚きながら、差し出された手を握り返し

「あの・・あのスカリエッティ・・は龍也さんの世界のスカリエッティですよ?・・何したんですか?」

ピクピクと痙攣しているスカリエッティを指差しながら尋ねると

「あの馬鹿、六課の中に惚れ薬を散布しましてね、大変だったんですよ・・刺されそうになったり・・監禁されそうになったり・・足

の骨を完全に碎かれそうになったり・・・それでその惨劇を巻き起こした馬鹿にお話しようとしたら逃げたので、追いかけて来たんです」
説明してくれる龍也さんに

「それでお話が終ったんで帰るんですか？」

元の世界に帰るのか？と尋ねると

「・・・追いかけるので必死でして・・・通信機を持ってきてないんです・・・申し訳ないのですが・・・迎えが来るまでここで待っていても良いですか？」

頭を下げながら尋ねて来る龍也さんに

「別に良いと思いますよ？・・・なのは隊長はどう思います？」

なのは隊長に尋ねると

「私も別に良いと思うよ？・・・前に助けてもらったしね？」

笑いながら言うのは隊長に頷き

「それじゃあ、迎えが来るまでここに居てくれて構いませんよ」

笑いながら言うと龍也さんは

「ありがとうございます、近藤さん」

「スカリエッティは良いんですか・・・」

演習場に折り畳みの机と椅子を持ち出し、そこに座りながら近藤さんと話していると、近藤さんがスカリエッティが良いのか？と尋ね手来るので

「そうですね・・・そろそろ起こしますか・・・」

立ち上がり痙攣しているスカリエッティの首を掴み

「おい、いい加減起きろ」

バチンッ！！バチンッ！！！！

ビンタを繰り返していると・・・

「痛い！！龍也起きてる！！起きてるから！！」

痛いと呼ぶスカリエッティを椅子に叩き付け

「起きましたよ？」

近藤さんに起きたと言うと

「容赦ないですね・・・」

引き攣った笑みで笑う近藤さんに

「最初はこうじゃなかったんですよ・・・でも最近少し度が過ぎてる
んで、仕方ないですよ・・・」

机に伏せていたジェイルが近藤さんの顔を見て・・・

「ヤクザだな・・・よくそんな強面で管理局員が勤まるな」

物凄く失礼な事を言うジェイルの頭を掴み

「少し・・・黙ってろっ！！！！」

地面に叩き付ける

「へもっ！！」

変な声を上げて気絶したジェイルを見ながら

「すみません近藤さん、馬鹿が失礼な事を言つて」

私がジェイルの代わりに謝ると

「いえ・・・別にいいんですよ・・・判ってますから・・・自分の顔が怖
いって・・・」

落ち込んでしまった近藤に・・・どうしようか？と困っていると

ゴオオッ・・・

音を立てて黒い空間が広がりそこから

「よいしょつと・・・」

スバルが着地する・・・どうやら迎えが来たようだ、スバルが私に気付いたのか走ってくる

「龍也さん、迎えに来ましたよ、・・・スカリエッティさんはどこですか？」

姿の無いジエイルの事を尋ねるスバルの下から・・・

「白は良いと思うよ？」

スバルが下を向き、真っ赤に成りながらスカートを押さえ

「1回・・・死ねええっ！！！！」

変態を全力で蹴り飛ばす

「あぶろぱーっ！！！！」

ズガンッ！！

壁に頭から突き刺さったジエイルを見ながら・・・

「自業自得だな・・・」

私は紅茶を飲みながらそう呟いた・・・

「へー別の世界の私か、あんまり変わらないね？」

近藤さんの世界のスバルが椅子に腰掛け言っと

「そうだねゝそんなに違わないねゝ」

同じく笑いながら言うスバルに

「そうでもないぞ？・・・少し尋ねるが・・・君の魔道師ランクは幾つだ？」

近藤さんの世界にスバルに尋ねると

「私ですか？私は陸戦Bですよ？」

やはりな・・・私と言う存在の無い世界では、流れる時が違うと言うわけか・・・一人納得していると

「それで貴方のランクは？」

近藤さんの世界にスバルがスバルに尋ねる、スバルはクッキーを齧りながら

「陸戦AA」

もぐもぐ・・・クッキーを齧りながら言うスバルに、近藤さんの世界のスバルが目を見開き

「AA！？・・・どうしてそんなに差があるのっ！！」

驚く近藤さんの世界のスバルに、スバルは能天気クッキーを齧りながら

「龍也さんの訓練してたら普通にな？」

笑いながら言うスバルを見ると、近藤さんが

「どんな訓練をしてるんですか？良かったら教えてくださいよ」

どんな訓練をしているか教えてくれと言う近藤さんに

「基礎を重点的にです・・・正しこれを着けてですが・・・」

魔力を吸収するリストバンドを机の上に置くと

「着けてみても良いですか？」

着けてみても良いか？と尋ねる近藤さんに

「構いませんが・・・気をつけてくださいね」

何に気をつけるんだ？と言いたげに首を傾げながらリストを着けた瞬間

ドゴンッ！！！！

近藤さん腕が机にめり込む

「こ・・・これは・・・」

驚いている近藤さんに

「魔力の流れを止めれば楽になりますよ」

と言うと近藤さんの魔力の流れが弱まる・・・それと同時に

スッ・・・

めり込んでいた腕が元の位置に戻る・・・近藤さんは手首を回しながら

「こんなの着けて訓練してたら嫌でも強くなりますね・・・」

近藤と龍也が話してる間にスバル同士が世界の違いを話し始める

「そっちの世界のティアはどんな感じ？」

「私の世界のティアは・・・嫉妬深くて・・・病んでる」

「ヤンデレとかいう奴？」

「そうそう！・・・もうね、暴れ始めると手が付けられないんだよ」

突然私の世界のティアナについて話し始めた・・・近藤さんの世界のティアナは・・・

「なんか凄いやましい気がする・・・」

そう呟いてる間に話題が変わる・・・

「それじゃあ・・・そっちのなのはさんの訓練は厳しい？」

「なのはさんの訓練は厳しいけど・・・龍也さんと比べれば天国かな

？・・・龍也さんの訓練やると・・・一時間は禄に動けないし・・・」

その言葉に近藤さんが停止する・・・一時間も禄に動けない訓練とは・・・という顔をしながら

「基礎だけじゃないんですか？」

そう尋ねて来る近藤さんに

「基礎の後は、私の攻撃を3分間回避と、模擬戦ですね・・・3分間立って入れればクリアですね・・・今のところFWでクリアしたのはいませんけど・・・」

「平均何分くらい立ってれますか？」

「47秒から一分くらいですね・・・」

紅茶を飲みながら近藤と龍也が話してる中、スバル同士は

「何秒くらい立ってれるの？」

「27秒位かな？・・・一撃まともに喰らったら即気絶だからね」

「それは凄いな・・・」

能天気と言うスバルに対して、近藤さんの世界のスバルの顔は青い・・・スバルはその変化に気付かず更に自分の世界の事を喋る

「それでね、ヴィータさんもね嫉妬深くてね、龍也さんと話してる
と怒るんだ、私の兄貴に近付くな！！って」

「へー・・・んっ？・・・もしかして龍也さんってモテる？」

「モテモテだね〜六課の人は大概好きなんじゃない？・・・私もだけど・・・でもね〜ハードル高いんだ〜鈍感だし・・・部隊長が怖いし・・・」

「もしかして・・・あの時の黒い部隊長？」

「そうそう・・・怒るとダガー投げてくるし・・・給料減らそうとするし・・・大変なんだよ〜」

スバル同士が世界の違いを話しているのを見て、ティアナが

「もし・・・私が龍也さんの世界に行ったらノイローゼになりそうかわ・・・」

ティアナがそう呟いた時、私の世界のスバルが

「そうだ！！龍也さん、訓練してくださいよ〜今日は私の訓練の日でしたよね？」

思い出した様に言うスバルに

「そういえば・・・そうだな・・・近藤さん演習場借りても良いですか？」

近藤さんに演習場を借りて良いか？と尋ねると

「どうぞ、自由に」

と微笑む近藤さんに礼を言ってから、私とスバルは訓練の準備を始めた・・・龍也達が訓練の準備をしている頃

「うーうー」

壁に突き刺さった馬鹿が脱出しようと試みていた・・・

「良ーし・・・準備完了つと!！」

私が腕を回しながら準備完了と言うと

「おし、それじゃあ始めようか?」

近藤さんが私の前に立つ・・・私が困惑していると

「折角だから近藤さんと模擬戦してみる・・・良い経験になるぞ」

そう笑う龍也さんに頷き、私はバリアジャケットを展開した

「ふむ・・・スバルのとは全然違うな・・・まあ・・・君もスバルだがな・・・」

苦笑する近藤さんに

「バリアジャケットは良いんですか?」

尋ねると近藤さんは

「もう展開してるよ・・・さっ掛かってきなさい」

そう笑う近藤さんに頷き、私は一気に懷まで飛び込み拳を繰り出したが

ぱしっ・・・

軽い音を立てて受け流される・・・体勢を崩した私に

「ふんっ!!」

近藤さんの拳が繰り出される

「うわっ!」

反射的に受け止めるが、更に体勢を崩される・・・手を突いて後方に跳んで間合いを取り直しながら・・・

(駄目だ・・・近藤さんも龍也さんと同じだ・・・掴み所が無いっ!!)

龍也さんと同じで、どう攻撃すれば良いのか・・・全く判らないっ! それどころか近藤さんから動いて来ないので、自分から攻撃をするしかない・・・だがそれは畏に自ら飛び込むのと同義だ・・・私がどうしようか?と考えていると・・・

「来ないならこっちから行くぞ」

近藤さんが攻めてくる・・・龍也さんの攻撃と比べれば遅いが・・・それでも鋭い・・・捌くのが精一杯だ・・・近藤さんの突きを弾いていると

バシッ！！

近藤さんに足を蹴られバランスを崩す・・・しまった・・・手だけの攻撃じゃ無いんだ！！

「ふんっ！！」

バランスを崩した私の鳩尾に近藤さんの拳がめり込む

「がつ・・・」

一瞬息が詰まるが・・・敵の攻撃があたる時・・・それは・・・自分の攻撃があたる時でもある！！

「機神・・・猛撃拳っ！！」

回し蹴りから連続で拳と蹴りの連打を放つが・・・

「ふっ！！」

近藤さんは両手が弾き、直撃を回避する・・・だが勢いは私にある！！

「これで決まりだっ！！！！」

連続の拳と蹴りでバランスを崩した近藤さん目掛け蹴りを繰り返す
が・・・

「甘い・・・」

カッ・・・

サイドステップで蹴りを回避し、反撃の拳が私の顎を跳ね上げる
ガクツ・・

足に力が入らずその場にへたり込む・・しまった・・これは・・

「勝負ありだな・・」

近藤さんが私の前に立ち言う・・私は

「まいりました・・」

素直に負けを認めた・・脳が揺らされ・・平行感覚が麻痺してる・・
暫くは平行感覚は元には戻らない・・だから負けを認めると言う
と
「やれやれ・・いい加減学習して欲しい者だ・・むやみやたらに突
つ込むなと何回言えば判るんだ？」

呆れながら言う龍也さんに

「うつ・・すいません・・ついクセで・・」

龍也さんに謝っていると近藤さんが

「動きの切れは良いが行動が単調すぎるな、もう少し考えて行動し
た方がいいな」

何時も龍也さんに指摘されている事を近藤さんにも言われてると

ゴゴゴゴッ！！！！！

濃厚な殺気が演習場を包み込む・・・この殺気の主を知っている私は震え始めた・・・

（しまった・・・早く龍也さんを連れて帰って来る様に言われてたのに・・・つつい長居をしちゃった・・・）

私が部隊長に言われた事を思い出した瞬間・・・

ヒタリッ・・・

喉元にゼロアームズが突きつけられる・・・それと同時に私の影から部隊長が姿を見せる

「ぶぶ・・・部隊長・・・」

その殺気に私が震えながら弁解しようとする和小声で

「二度と浮いてこれん間に沈めたるうか？・・・それともクリスタルの中で安眠するか？」

・・・殺されるっ！！間違いない今ここで私は殺されるっ！！私がその殺気に震えていると

「はやて、スバルは私を迎えに来てくれたんだ、そんなに脅さなくても良いだろう？」

龍也さんが言うがこれは脅しではない・・・本気で部隊長は私を殺すつもりだ・・・私がそんな事を考えていると

「・・・嫌やな」冗談に決まってるやん、なんで私がスバルを殺さんよ」幾ら私でも仲間は殺さへんよ」

笑いながら私の喉元からゼロアームズが退けられたが・・・龍也さんが私から目を外した瞬間

「兄ちゃんがおって良かったな・・・居なかったら今頃スバルは・・・いや・・・最後までとは言わんよ・・・ふふっ・・・」

クスクスと可笑しそうに笑う部隊長の目は黒く濁っていた・・・

「どうも初めまして、そのもう1人の私と眼帯さんにはあったな・・・知ってると思うけど・・・八神はやてや」

にこにこと笑いながら自己紹介をするはやてを見る・・・笑っている・・・だがその目はまだ黒く濁っていた・・・よほど機嫌が悪いようだ・・・それに近藤さん達の世界のスバル達は

「・・・」

声も無い・・・はやてが無意識に垂れ流している殺気に完全に吞まれている・・・まばたき1つ出来ずただそこに立っているだけだ・・・はやてはクスクスと笑いながら

「さてと・・・兄ちゃんが私の前から居なくなる理由を作った愚か者はどこかな？」

はやてがジェイルを探す・・・そして運悪く

「ふう・・・やっと・・・は・・・はやて君・・・」

壁から脱出した瞬間、魔王とエンカウト・・・そんな所だろう・・・
ジェイルが逃げようと振り返るが

「どこに行くん？」

！！回り込まれた・・・ジェイルが顔を青くしながら

「その・・・これは・・・」

何か弁解しようとした瞬間、はやてが微笑み

「さよなら・・・」

ゴウッ！！

ノーリアクションで砲撃を放ち、ジェイルを吹っ飛ばす

「ごおおおっ！！！！」

奇妙な声で吹っ飛ぶジェイルの後方にラプラスの魔が現れ、飲み込む
むするとはやての前に再びジェイルが姿を見せ、更に砲撃を打ち込む
むはやて・・・7回目かの繰り返しで

ガクンッ・・・ジェイルが崩れ落ちるが

「ふんっ!!」

崩れ落ちるジェイルの顎を蹴りぬく

「あがつ・・・」

顎を押さえるがそれにお構い無しで蹴りを放つはやてを見かねて

「止める、それ以上やったらジェイルが死ぬぞ」

後ろから羽交い絞めにして動きを止めようとすると、はやては驚くほど無抵抗で私の腕の中に納まり

「んふふふ」

笑いながら顔を擦り付けるはやては思い出したように

「そうや・・・レジアスさんが呼んでるんで私が態々兄ちゃんを迎えに来たやった。はよ帰らんと・・・」

ジャラララッ!!!!

はやてが左腕を掲げた瞬間、スバルとジェイルをバインドが雁字搦めにする

「さて、別の世界の魔道師さん・・・私達は忙しいんでこれで帰ります〜それじゃあさいなら・・・」

私達ははやてに連れられ、元の世界の戻った・・・はやて達が消えた瞬間、金縛りに合っていた面々は再起動を果たし・・・次の瞬間口に

した言葉は

「部隊長にお兄さんが居なくて良かった……」

であった……そしてヤンデレ魔王に遭遇したこの世界のはやては

「私……兄ちゃん居ったら、本当に危険人物になるんやな……」

恐々とはやては呟いていた……元の世界に戻った瞬間スバルは馬鹿を介抱していたウーノに何かを耳打ちすると

「……」

ドバーツ!!!!

消毒液を一瓶全部無言で馬鹿に掛けるウーノ……次の瞬間

「うわぎやあああ……染みるーツ!!!!」

馬鹿の悲鳴が六課に木霊した……今日の教訓……何かをするときはどうなるか考えてからにしましょう!

番外編終り

コラボ番外編 テマリー編その1

番外編 コラボ小説始まります

番外編 仮面ライダー000（オーズ）外伝 テマリーコラボ小説

龍也達が住む世界と違う世界にて・

「グオオ・・・グオオツ・・・」

ボロボロの身体を引きずり歩く1体の異形・・・全身を切り裂かれ今にも消滅してしまいそうな、4本の腕を持った異形はどす黒い体液を流しながら、生きる為に前に進む・・・いや正確には復讐の為に・・・自分をこんな目に合わせた憎い存在に・・・そして偉大な自分達の王を殺した存在に復讐をする為に・・・そして異形は何かを見つける

「グオオ・・・？」

見た事も無いその物体を4本の腕で拾い上げる、それは5枚のメダルだった・・・それぞれ、赤、緑、黄色、灰色、青でそれぞれ動物の顔の様な物が刻まれていた・・・異形はそれを見つめ

「魔力・・・魔力を・・・！！！！」

そのメダルを喰らう・・・その瞬間異形の身体が即座に修復される・・・暗褐色の身体に4本の腕・・・そして腹部に現れたベルトの様な物・・・そして背中に背負った2門の砲台・・・先程まで死に掛けていた異形は・・・キメイラだった・・・体が修復されたキメイラは

「守護者アア・・・覚えてい口・・・必ず・・・この手デ・・・殺してヤル・・・」

そう言うときメイラは地を蹴り、高いビルの間へと消えて行った・・・その様子を見ていた1体の異形・・・その異形はライオンのような鬣と鋭い牙、トラを思わせる細身で攻撃的な姿をしていた・・・メイラの前にメダルを置いた異形は名を力ザリと言った・・・彼は

「ふふ・・・面白そうな事になってきたね・・・オーズ・・・テマリーであいつに勝てるかな？」

彼は楽しそうに笑いながら闇夜へと消えて行った・・・

その頃龍也の世界では・・・

「ん？・・・この魔力反応は・・・まさかつ！！」

研究に没頭していた私はある魔力反応を発見し、その魔力反応のあった世界を調べ・・・驚きの余り目を開きながら

「い・・・生きていたのか・・・時の破壊神・・・」

そのモニターには間違いなく、ハーティーンによって消滅させられた筈のキメイラ・・・いや・・・少し姿は違うが、ズイードキメイラの姿があった・・・ズイードキメイラ・・・最終決戦の折・・・あらゆる世界の壁を破壊し別世界にネクロ達を送り込もうとした、デクスでそ

の能力は桁違いに強く・・真の力に目覚めたハーティーンによって倒された筈だった・・だが生きていたのだ・・直ぐに龍也に連絡しようとしたが・・PCからの報告で踏み止まった・・何故ならその世界では

「魔法が・・使えないだと・・？」

管理外の世界に偶にある魔法の使えない世界・・運が悪い事にズイードキメイラはその世界に居たのだ

「くっ・・どうすれば良い・・魔法が使えなければ龍也とてやられてしまう・・どうすれば・・」

どうすれば良いのか考える私のの目に1つの映像が飛び込んでくる

【タカ！トラ！バッタ！タ！ト！バ！タトバタ・ト・バ！】

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！！】

それはその世界を護る2人の戦士の姿だった・・その姿を見て

「これだ・・開発中の新しいデバイスを改造して・・このメダルを作り変えれば・・」

私の手にはその世界でセルメダルと呼ばれているメダルと、作りかけのベルトの様な物があつた・・

「早く準備をしなければ・・あの世界が滅ぶ前に！」

私は急いでベルトとメダルの改造を始めた・・ズイードキメイラが真の力を取り戻す前に倒さねばならないからだ・・

「急げば2日・・2日で出来る・・それまでにズイードキメイラが力を取り戻さなければ良いが・・」

私はそう呟きながらメダルの改造を始めた・・

ジェイルの研究室に向かう男・・腰元まで伸ばされた銀髪に蒼銀色の双眸を持つ男・・名を八神龍也と言った・・神王とも呼ばれ管理局最強の魔道師だった

「ジェイル・・急に呼び出して何の様だ？」

私がそう尋ねるとジェイルは

「龍也、これを見てくれ」

そう言われモニターを見て私は目を見開いた・・そこには

「キメイラ・・生きていたのか・・」

ハーティーンが倒したはずのデクスの姿があった・・

「これは今から2日前の映像だ・・本当は直ぐに連絡を入れたかったのだが、あの世界は魔法が使う事が出来ない世界だ・・そんな世界にお前を送る訳には行かなかった・・だが対策が無い訳じゃない」

そう言うとジェイルは三つの穴が開いたベルトと何枚かのメダルを手渡してきた

「これは？」

それが何か判らず尋ねるとジェイルは

「あの世界で使える武器だと思ってくれ、使い方は・・・」

私はジェイルにその道具の使い方を簡単に教わった

「それがあればあの世界でも戦える筈だ・・・龍也・・・頼んだぞ」

肩に手を置きいうジェイルに

「ああ・・・任せろ・・・直ぐにその世界に向かう」

私はそう言つとその世界へと続くゲートを開き

「はやて達に説明をしておいてくれ」

妹達への説明を頼むと

「ああ、ちゃんと説明しておくさ」

と笑つジェイルに見送られ、私は別の世界へと跳んだ・・・

ゆっくりと消えていくゲートを見ながらジェイルは

「ふふ・・ちゃんと説明しておくさ・・ちゃんとね・・」

にやにやと笑うジェイルはとても楽しそうに自分の部屋を後にした、彼を良く知る人物なら直ぐにこう言っただろう「何を企んでいると」しかし残念な事に今それを言う人物は機動六課には居なかった・・

龍也が向かった世界にある多国籍料理店「クスクシエ」で働く2人の男性、1人は柔和な笑みを浮かべているが、強い意志の光を瞳に宿した「火野 映司」でも1人は男性と呼ぶのはまだ早い・・まだあどけなさが残る物の強い意志を感じさせる「日野勇樹」だ・・2人の前に金髪の男と女が慌ててやって来る・・いや訂正しよう・・男のほうは面倒くさそうにアイスを齧っていた・・2人は実は人間ではない2人はグリード（欲望）と言う名を持つ怪物だ・・だが男の方はある目的の為、女の方は純粹に人間を護ろうとしている・・男の方はアंकと呼ばれる、グリードで右腕だけのグリードで信吾という男の身体に寄生している、もう1人は沙良と言い、グリードなのに無欲・・そして人間大好きな人の良いグリードだ・・沙良は勇樹に

「勇樹・・グリードが出たかもしれないの・・一緒に来て」

と耳打ちする・・俺は首を傾げながら

「出たかも知れない?・・どういう意味だ?」

普通なら出たと断言するのに知れない・・と言ったユーズに尋ね返すと、アंकが

「普通のグリードじゃないんだ・・・どうも気配が妙でな・・・俺は無視すれば良いと言ったんだが・・・ユーズが聞かなくてな・・・いやいや呼びに来たって訳だ」

面倒くさそうに言うアंकの説明を聞き

「でも居るかも知れないんだな、アंक？・・・それなら行こう」

映司さんが言う・・・俺もそう思っていたので頷くと、沙良は嬉しそうに、アंकは面倒そうに、俺達をグリードの元に案内した・・・そこには確かに1体の異形が居た、それは今までのグリードと違っていた、暗褐色の身体に4本の腕、そして背中に背負った2門の砲台・明らかに今までのグリードと違う・・・俺は嫌な予感がし

「沙良・・・メダル」

「うん・・・はい」

ユーズからメダルを受け取る、映司さんもアंकからメダルを受け取り、俺と同時にベルトを腰に巻き、右側と左側にメダルをセットし、最後に真ん中にメダルをセットし、右腰の丸い機械を取り出し、斜めに降ろしながら

「「変身！！」」

【タカ！トラ！バッタ！タ！ト！バ！タトバタ・ト・バ！】

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！！】

リズムミカルな声と共に身体が変化する、映司さんは

赤の頭・・緑色の目に　額には菱形のアंक

黄の身体・・胸のサークルにタカ、トラ、バッタの絵が描かれている。

緑の脚・・バッタの様な軽やかな印象を受ける、仮面ライダーオー
ズタブaconボに変身し、俺は

銅の頭・・赤い目に、犬のような耳が付いている。

金の体・・胸のサークルにジャツカル、キツネ、オオカミの絵が描
かれている。

銀の脚・・オオカミのような強靱さを感じさせる、仮面ライダー
マリージャツクオオコンボに変身し・・2人同時にグリード？に向
かって行った・・この時は2人掛りだから楽勝だと思っただがそれ
は間違っていた・・

「グオオ！！！」

異形が叫ぶ、それと同時に凄まじい重力が俺達を襲う・・右腕が振
るわれる・・凄まじい電撃がオーズに降り注ぐ・・左腕が唸りを上
げて俺を殴りつける、それと同時に凄まじい電撃が俺を襲う

「映司！！！」

「勇樹！！！」

アंकと沙良の悲鳴が聞こえる・・2人は新しいメダルを投げる体制のままだった・・俺がそれを確認した瞬間

「ガアアアッ！！！」

背中の砲台から凄まじい爆炎が放たれ、俺とオーズは吹っ飛ばされ・
・変身が一瞬で解除された

「ば・・馬鹿な・・こうも簡単に・・！！おいつ！！ユーズ2人を回収して逃げるぞ！！」

アंकの声が聞こえる・・だがそれより早く異形が俺達の前に立ち・
・4本の豪腕を振り下ろそうとする・・俺が思わず目を閉じた瞬間・
・バイクの音が聞こえた・・そして

「グアアアッ！！！」

バイクの体当たりを喰らい吹っ飛ばされる異形・・そしてバイクから銀髪の男が降りながら

「その2人！早く倒れている2人を連れて逃げる！！」

その声にあंकが

「そんな事は言われなくても判つてる！！」

「勇樹・・大丈夫？」

アंकと沙良に連れられ、俺と映司は戦いの場から離された・・沙

良が

「早く貴方も逃げて!!」

男に逃げるように言うが

「残念だが・・・そんな暇はないようだ・・・」

男がそう言つと

「グルル・・・守護者アツ!!」

異形が立ち上がりながら言う・・・異形は4本の腕を男に向けながら

「良い覚悟ダ・・・この世界デお前は充分な力を使えない・・・それを知つてまで俺を倒しに来た力・・・だが貴様に勝ち目は無いゾ」

どうやら異形と男は知り合いのようだった・・・男は軽く笑いながら

「勝ち目が無いか・・・残念だが・・・お前の思い通りにはならないぞ」

男が懐からオーズドライバーに似たベルトを取り出し、右側と左側にメダルをセットし、最後に真ん中にメダルをセットし、右腰の丸い機械を取り出し、斜めに降ろしながら

「変身!」

男が叫ぶとベルトから

【ドラゴン!!グリフォン!!ペガサス!!ドードー!!ドリサス

ッ！！】

蒼と金と銀の光が現れ男の体を包み込み・光が晴れた瞬間そこにはオーズやテマリーに似たライダーが立っていた、神々しいまで蒼色と龍を思わす上半身に、両手には鋭い鍵爪を持つ金色の体、胸のサークルにはドラゴン、グリフォン、ペガサスの絵が描かれていた・そして美しい翼を模した銀色の脚部・男は拳を軽く構え

「さてと・行くとするか」

男・いや仮面ライダーガーディアン・ドリサスコンボは凄まじい勢いで走り出した・これが俺と異世界の男との始めての出会いだった・

番外編 仮面ライダー000（オーズ）外伝 テマリーコラボ小説
前編終り

コラボ番外編 テマリー編その2

番外編 仮面ライダー000（オーズ）外伝 テマリーコラボ小説

「凄い・・・」

俺は呆然とそう呟くしか出来なかった・・・謎の男が変身したライダーは圧倒的な強さを持って目の前のグリードにダメージを与えていく

「ぐがぁぁッ！！」

4本の腕から、電撃、真空波、水流を放つグリードだが

「ふっ！」

短い溜めの呼吸音と共にライダーは跳躍し、身体を捻りながら迫り来る電撃を華麗に回避し・・・グリードの懐を取り

「はぁっ！！」

強烈な肘打ちを叩き込み後退させる・・・だが即座にグリードも立て直し4本の腕を振るうが

「ふっ！ふっ！」

上下左右から迫る豪腕を簡単にいなし、次々と拳を叩き込んでいく・・・はつきり言って格が違う・・・俺が驚いていると俺を介抱してくれていた、沙良が

「あの男・・・一体何者？・・・あんなメダルは聞いた事が無い・・・」

グリードである、沙良が知らないメダル！？俺は慌てながら

「ちょっと待ってくれ、沙良あいつも俺みたいに適性者じゃないのか？」

俺や映司さんと同じく、グリードに力を借りてるんじゃないのか？と尋ねるとアंकが

「馬鹿かお前、どこの世界にドラゴン、グリフォン、ペガサスが居るんだ？・・・俺たちのコアメダルは全て動物の力をモデルにしてるんだぜ？つまりあいつのメダルは存在しない物なんだよ」

そのアंकの説明に頷きながら俺はライダーとグリードの戦いに視線を戻した

「が・・・があ・・・」

目に見えてグリードは弱っていた・・・何十何百と拳打を喰らったのだからそれは当然だろう・・・

「これでとどめだ・・・【スキヤニングチャージ！】」

ライダーがスキヤナーを使いメダルの力をチャージすると同時に両腕を振るう、それと同時に

ゴオオッ！！！！

凄まじい嵐がグリードの身体を拘束するそれと同時に

「ふっ!!」

ライダーが駆け出し、竜巻の中に飛び込み、拳と蹴りを浴びせながらグリードを上空に跳ね上げていく・

「はあっ!!」

グリードが竜巻の頂上まで来た所でライダーが竜巻の中から飛び出し、身体を反転させながら上空を舞う

フォンツ!!!

蒼と金と銀のメダルが浮かび上がる、ライダーはそれを潜りながらグリードに向け落下していく・そして

「でやあああッ!!」

足の翼が巨大化し刃となり、身体を反転させながらその刃でグリードを切り裂く

「があああっ!!」

グリードの凄まじい雄叫びと共に大爆発が起きた・ライダーは軽やかに俺達の前に着地し、一言呟いた

「逃がしたか・・・」

その言葉に驚きながら

「逃がしたって・・・倒したんじゃない？」

俺が尋ねるとライダーは変身を解除しながら

「最後の蹴りに何の手応えも無かった・・・あれは恐らく水で出来たコピー・・・本体は既にこの場所には居ないだろう」

冷静に分析する男にアंकが

「おい！貴様！そのメダルは一体なんだ？」

アंकがグリードとしての腕を見せながら言うと

「説明するのは構わんよ・・・だが・・・その前にこの2人を休ませる方が先ではないかな？」

柔和な笑みを浮かべる男に沙良が

「そうね・・・そっちが優先だよアंक」

そう言われアंकは面倒そうに映司さんに肩を貸し

「着いて来い、今から行く場所でこいつらを休ませる・・・そこで貴様の話を聞かせろ」

あくまで上から目線のアंकに

「判った・・・ああ君、彼は私が連れて行こう」

俺の体を支えようとした沙良を制し、銀髪の男が俺の身体を支える

「さてと・・・行くうか？」

男に促されながら俺達はクスクシエに向かった・・・

「さてまずは・・・私の名だが・・・八神龍也だ、八神でも龍也でも呼びやすいほうで構わない」

一通り手当てが終った所で男・・・皆で自己紹介をする・・・俺は龍也さんの容姿を見て外国人かと思っていたがどうやら違つようだ・・・俺がそんな事を考えていると沙良が

「貴方が持つてるあのメダルは何ですか？」

尋ねると龍也さんは懐から3枚のメダルを取り出し

「これの事か？・・・これは私の友人がセルメダル・・・だったか？・・・それを改造して作った物だ」

その説明を聞いたアंकがそのメダルを引つたくり

「・・・確かに・・・この感じはセルメダルと同じだ」

信じられないと言う様子で呟くアंकの隣から映司さんが

「あのグリード・・・知り合いみたいでしたけど・・・どういう関係ですか？」

そう尋ねると龍也さんは真剣な表情で

「世界は1つではないと言ったら信じるかね？」

世界は1つではない？・・・意味が判らず首を傾げると

「その反応は正しい・・・突然そんな事を言われても意味が判らないだろう・・・だが私が言っている事は本当だ・・・あのグリード・・・いやキメイラは私の世界に居た怪物だ」

暫く平行世界について説明して貰ったが、今一理解出来ずに居ると

「まあ・・・信じるも信じないもお前達次第だ・・・所で・・・この厨房は借りても良いのかね？」

龍也さんがそう尋ねると

「えっ・・・はい・・・使えますけど・・・何するんですか？」

映司さんが首を傾げながら尋ねると

「何、簡単な事だ・・・何か食事でも作ってやろうと思ってな・・・腹が空いてないか？」

微笑みながら尋ねて来る龍也さんに返事を返そうとした時

「・・・グウウウツ・・・」

3人分の腹の音がする・・・俺と映司さんと沙良だ・・・俺達が赤面している

「はは、その反応で充分だ、直ぐに何か用意してこよう」

そう言うた龍也さんはこの部屋を後にした・・龍也さんが消えてから数分龍也さんの事について話していると・・沙良とアंकが

「さっきの奴だ・・近いぞ」

近くにキメイラが出た事を教えてくれる・・俺達は痛む身体を引き摺りながらその場所に向かった・・広場に4本の腕を持った異形・・キメイラが居た・・俺達は戦う為にベルトを腰に巻いた・・体は痛むが・・大した問題ではない・・龍也さんの手当ての的確さが判る・

「映司！」

「勇樹！」

沙良とアंकがメダルを投げいざ変身という所で

バツ！！

漆黒の影が走り、6枚のメダルを強奪する・・その影は

「「龍也さん！？」「」

調理をしているはずの龍也さんだった・・龍也さんは俺達を見ながら

「やれやれ・・どこの世界にも自分の体の事を考えない奴というのは居る物だな・・まあ嫌いではないがね・・勇樹、映司・・今のお前達ではあいつには勝てない・・だからそこで見ているんだな・・お前達が使っ力の強大さをな」

龍也さんが腰にベルトを巻き、メダルをセットしていく

「変身」

【タカ！トラ！バッタ！タ！ト！バ！タトバタ・ト・バ！】

龍也さんがオーズに変身し

「さてと・・・行くか・・・」

そう呟き龍也さんは駆け出した・・・

「凄い・・・あんな戦い方があったのか・・・」

英司さんが隣で呟く・・・それは俺も同じだった・・・長い間オーズの戦いを見てたつもりだが・・・龍也さんの戦い方は見た事の無い物だった・・・

「はッ！！」

常にバッタメダルの能力を発動させ、蹴りが命中と同時にバッタ脚が炸裂し、強烈な一撃を叩き込む

「があ・・・守護者アッ！！！！」

蹴りを喰らったキメイラがよろよろと後退するが、4本の腕は龍也さんを捉えようと振るわれる・・・だが

「はっ・・・」

バツタ脚の跳躍力を用い、その攻撃を回避し・・・広場の木に着地し・
・バツタ脚でその木を蹴り弾丸な様な勢いでキメイラに肉薄し

「はぁっ!!」

トラクローでキメイラを斬り付け、そのまま反対側の木に足を着け

「ふっ!!」

再び突撃する・・・その速さにキメイラは反応できず次々と切り裂かれていく・・・龍也さんは縦横無尽に木を蹴り付け、キメイラの死角からの確にダメージを与えていく・・・だがその内キメイラが慣れたのか

「があぁあッ!!」

カウンターで拳を叩き込もうとする・・・いけない当たった瞬間

「変身」

【ジャッカル! キツネ! オオカミ! ジャ! ジャ! ジャ! ジャッキオオ!!】

空中でオーズからテマリーに切り替え、地面に両手を当てた瞬間

ズガガガッ!!!

穴を掘り地中に潜っていく・・・完璧なタイミングのカウンターの筈が急に対象が消え困惑するキメイラの背後から

ズガンッ！！

龍也さんが姿を見せ踵落としを叩き込み、また即座に地に潜る・

「がああ・・何処ダ！！・・こつちだ・・マヌケ・・」があっ！
！」

キメイラの背後を的確に取り完璧なヒット&アウェイを行う龍也さんの姿を見て、沙良が

「信じられない・・メダルを100%・・うつん・・それ以上に引き出してる・・」

その呟きを聞いて俺は納得してしまった・・テマリーにあんな戦い方があったなんか知らなかった・・俺が少し自信喪失になっていると・・姿を捉える事が出来ない事にイラついたのかキメイラが

「グルルル・・グオオッ！！！」

全ての能力を同時に発動させる、それは龍也さんが地面から飛び出したのと同じタイミングだった・・

「なっ！！！」

龍也さんが炎に電撃に水に風に吞まれ姿が見えなくなる・・まさか・・やられてしまったのか？・・俺がそんな事を考えた瞬間

【ドラゴン！グリフォン！ペガサス！ドードー！ドリサスッ！！】

爆炎の中から龍也さんが飛び出す・・・その手には剣が握られていた

「はッ！！はッ！！」

連続で刃を振るい、キメイラの身体に的確にダメージを与えていく・
見る見るうちにキメイラの動きが鈍る

ガシャンッ！！

龍也さんが剣の柄を開きそこに、タカ、トラ、バッタ、ジャッカル、
キツネ、オオカミのメダルを入れて行き

「こんどこそ終幕だ【スキヤニングチャージ！！】」

龍也さんがキメイラに剣を投げつける・・・それと同時に龍也さんが
跳躍する・・・

「がはアッ！！」

剣がキメイラの腹に突き刺さった瞬間、剣から6枚のメダルが排出
され龍也さんの前に一列に並ぶ

「はああああつ！！！！」

一枚ずつメダルを潜って行く・・・タカトラバッタのメダルを潜り終
えた所で、龍也さんの姿に半透明のオーラの様なオーズの姿が重なる・
それだけではない・・・ジャッカルキツネオオカミのメダルを
潜り終わるとオーズ同様、半透明のテマリーの姿が重なる

【トリニティ・スマッシュ！！】

龍也さんの蹴りとオーラのオース、テマリーの蹴りが同時にキメイラの身体を貫く

「ぎゃああああッ！！！」

断末魔の叫びを上げ爆発するキメイラの身体から、大量のセルメダルと5枚のコアメダルが飛び出す。その時背後の茂みから、1体のグリードが飛び出してくる。ライオンのような鬣と鋭い牙、トラを思わせる細身で攻撃的な姿。ガザリだ、ガザリはアंक、沙良より早く5枚のコアメダルを強奪した。そして龍也さんの前に立ち

「やれやれ。もう少し頑張ってくれと思ったんだけどね。まあ。コアメダルは回収出来たから良いかな？」

からかうようにガザリにアंकと沙良が悔しそうにしていると、龍也さんが

「コアメダルを回収出来た？。その手に持っている物がかね？」

そう言う龍也さんにガザリが

「はあ？。これは間違いなくコア。ばっ馬鹿な。セルメダルだと！！。お前何をした！！」

勝ち誇ったように5枚のコアメダルを掲げようとしたガザリだが、その手にあったのはコアではセルメダルだった。龍也さんは

「何もさ。お前は幻のコアメダルを回収したのさ。本物はこっ

ちだ・・・」

龍也さんが掲げた右手には確かに5枚のコアメダルがあった・・・ガザリは悔しそうに

「くっ・・・この僕が欺かれたって事だね・・・良いよ今回は負けを認めるよ・・・でもそのメダルは必ず返して貰うからな」

負け惜しみにも似た事を言い、来た時と同じ様に素早い身のこなしで消えて行った・・・龍也さんは変身を解除せずに

「アंक、沙良」

龍也さんがオーズのメダルとテマリーのメダルに先程ガザリから強奪した5枚のメダルを投げ渡す、アंक達がそれを受け取ったのを確認すると

「勇樹、英司・・・私の役目は終わった・・・悪いが元の世界に帰らして貰うとするよ・・・」

そう言うのと2枚のメダルを取り出し、ベルトにセットする

【ドラゴン！サラマンダー！ファフニール！！ドオオオ〜ラダアア
ア〜ルウ〜！！】

龍也さんの姿が組み変わる・・・より攻撃的になったドラゴンヘッドに・・・鋭い爪と刃を持った蒼い胴体・・・強靱な脚力を持っているであろう脚部・・・そしてその背に生えた鋭利な翼と尻尾・・・その姿は龍人という表現が一番相応しいと思った・・・龍也さんはその翼を羽ばたかせ龍也さんは宙に浮かんで行く

「また会う事も有るだろう・・その時はまた違う時間・・違う場所・
・になるだろう・・だが必ずまたお前達と再会する事になるだろう・
・お前達が私の事を判らなかるうがな・・」

そう言うとき龍也さんは空中に現れた漆黒の穴の中に飛び込み消えて
行った・・

これは別の世界でのIFの物語・・また違う場所・・違う時間で再
び龍也はこの世界に現れるでしょう・・ですが・・その物語はまた
別の所で語るとしましょう・・

番外編 仮面ライダー000（オーズ）外伝 テマリーコラボ小説
終り

コラボ番外編 忍者と守護者と剣帝と・・・

コラボ小説 忍者と守護者と剣帝と・・・

「ふう・・・今日も良い天気だな」

私が演習場でそう呟くとアザレアとハーティーンが

「に・・・兄さん・・・げ・・・現実逃避は良くないです」

「そうだ、さつさと止めて来い」

そうは言われ演習場の片隅を見ながら

「嫌な・・・幾ら私でもあれを止めるのは不可能だと思っただが・・・
そう言うなら止めるアイデアをくれ」

私が指差す方向からは断続的に爆発音が響いてくる、爆発音の元凶は言うまでも無くはやて達だ

「知らん、貴様が何とかしろ、俺に迷惑を掛けるな・・・」

ハーティーンは迷惑を掛けるなど言い黙り込む

「だがな、私ではどうすれば良いのか・・・」

私が何かを言い掛けた瞬間

「・・・あつ・・・」

3人のしまったという感じの声が聞こえ、3人でそちらの方を見ると3色の砲撃が迫って来ていた、私は隣に居たアザレアを抱き抱えながら

「ハーティーン、私がお前、今日厄日だったか？」

「俺が知るわけ無いだろう？」

「パニックにならないでください」

アザレアの悲鳴を聞きながら私達は砲撃に吞まれた・

「んお？何だつてばよ？」

俺が六課の敷地の中の木の枝の上で昼寝していると、上空に黒い歪みが現れ中から2人の男が落ちてくる

「あ・・・危ねえっ！」

俺が助けようと動く前に

「はっ・・・」

空中で体制を立て直し着地する男達を見ながら

「次元漂流者・・・とかいうやつだったけ？」

俺はそんな事を考えながら男達の前に着地した・・・目の前の男達は
どうにもちぐはぐな感じだった・・・1人は銀髪で蒼銀色の瞳の優し
そうな印象の男で腕の中に気絶した少女を抱き抱えており、もう1
人は金髪で何処と無く野性的な印象を受ける男だった、俺は2人の
顔を見ながら

「えっと・・・次元漂流者って、判るってば？」

そう尋ねると銀髪の男が

「・・・そうなるか・・・ああ・・・だが気にしなくて良いその内迎えが
来るから」

そう笑う男に

「そうってば？・・・それじゃあこっちで待ってるよ」

俺はそう言いながら2人を連れて休憩所に向かった

「ナルト君・・・その2人何？」

はやてが尋ねて来るので俺は

「えっと・・・次元漂流者？・・・まっ、大丈夫らしいし迎えが来るみ
たいだから暫く待たせてやって欲しいってばよ」

俺がそう言うとはやては

「別にナルト君がそういうなら良いけど・・・」

俺とはやてのやり取りを見ていた銀髪の男が

「・・・ナルト・・・だったか・・・すまないが少し手合わせ願えないか？」

えっ？六課のメンバーが首を傾げる中

「手合わせ？・・・組み手の事だつてばよ？・・・別に良いけど・・・なんだ？」

そう尋ねると男は微笑みながら

「ナルトは・・・中々強そうだから、どれほどの物か見て見たいのだから？・・・ああ、デバイスなら持つてる気にしないでくれ」

そう言う男を連れて俺達は演習場に向かった・・・

「えっと・・・そう言えば、名前なんだつてばよ？」

俺が尋ねると男は微笑みながら

「私に一撃いれる事が出来たら教えよう」

にこにここと微笑む男に

「一撃？・・・そんなの簡単だつてばよ！」

俺が一瞬で懐を取り拳を振るうと

「油断大敵・・・という言葉を知ってるかね？」

ガシッ

俺の腕を軽く掴み真上に投げ飛ばす、俺は空中で体勢を立て直しながら離れた所に着地して

「知ってるってばよ・・・もう油断しないってばよ!」

俺はそう言いながら印を結び

「多重影分身の術!」

影分身と共に男に向かって行く・・・これなら一撃くらいは・・・思ってたが

「・・・初めてみるが・・・特に問題ないな?」

そう言つと男は影分身にも目もくれず本体である俺に殴り掛つてきた

「!」

俺が咄嗟にクロスしてその一撃を防ぐが

「ふっ!」

そのガードの隙間を抜いて鋭い蹴りが腹に叩き込まれる

「うぐっ・・・」

腹を押さえながら離れた所に着地する・・・俺は男を観察しながら

（さっきは気付かなかったけど・・・隙が全く無いってだよ・・・）

男は自然体だ・・・だが隙が何処にも無い・・・俺は手を握り直しながら

「あんだ・・・本当に何者だつてだよ？」

そう尋ねると男は微笑みながら

「一撃入れたらお教えしよう」

その言葉にどれ程の自信があるか俺には直ぐ判った・・・この男は強い・・・しかも生半端な強さではない・・・もしかしたら自分と同等・・・いやそれ以上かもしれない・・・俺は自身の切り札を切る事にした

「ふっ・・・」

右手にチャクラが集まり螺旋回転をする・・・俺はそれを構えながら

「行くぜえ・・・螺旋丸ッ！！」

超高速で駆け出し男目掛け右手を叩き付けた

「むっ・・・うおっ！」

確かな手ごたえを感じ男が吹っ飛んで行った方向を見ると

「いや・・・こんな札を持っているとは・・・予想外だったよ」

穏やかに微笑んでいるが確かに身体には攻撃がヒットした後があっ

た・・・それを指差しながら

「一撃・・・入れたってばよ?」

そう言うとなんは軽く微笑む

「確かに・・・では約束通り私の正体をお教えしよう・・・君は平行世界を信じるかね?」

俺はその言葉に直ぐ頷いた・・・俺自身も似たような世界からこの世界に來た人間だったからだ・・・

「世界とは1つではなく・・・無限の可能性を持っている・・・例えば高町なのはに双子の兄が居る世界・・・例えばフェイトに弟が居る世界」

なのはとフェイトが驚いた顔をする・・・自分達は名乗ってないのにどうして名前を知っている?と

「そして・・・八神はやてに兄が居る世界・・・ここまで言えば判るだろう?・・・私の名は八神龍也・・・平行世界の八神はやての・・・兄だ」

その言葉の後にたっぷり3分は停止した後

「「「ええええええっ!!!!!!!!!!」」」」

大絶叫が演習場に響き渡った・・・俺は耳を防ぎながら

「でも・・・あんまりはやてに似てないってばよ?」

そう言つと男は肩を竦めながら

「それは気にしてるんだ・・あんまり言わないでくれると助かる・・

」

その言い方に何か裏があると思い、俺はそれ以上聞かなかった

「さてと・・ここからは本気で行くでしょう・・アザレアッ!」

龍也がそう言つと虚空からスカートを押さえながら、気絶していた少女が姿を見せ肩にちょこんと座る

「に・・兄さん・・えつと・・で・・出番でしょうか?」

そう言つ少女に

「ああ、お前の力を貸してくれ」

そう言つと少女は満足気に頷き

「「ユニゾン・・インッ!」」

龍也の体に取り込まれる・・それと同時に龍也の髪が金色に染まる

「さて・・ここからが本番だが・・手加減はしない・・お前が本当にはやて達を護れるのか・・見極めさせて貰おう」

龍也が右目の前に手を持って行くと同時に黒い魔力が龍也の体を包み込み・・龍也の体が作り変わる

「ディランス・・ディアボロ・ダス・エクストリーム・トラウリヒ・ドラッヘッ!!」

その姿は龍人だった・・禍々しいまでの黒い甲冑に蝙蝠の翼・・そして顔の右上を隠すような仮面・・その眼から覗く龍也の眼は真紅に染まっていた・・俺の頭の中に十尾の声が響く

（あの男・・お前に似た存在かも知れん・・気を引き締めろ）

その声に頷き、俺の身体を今までと違うチャクラが包み込む・・仙人モード・・九尾のチャクラではノックバックが大きいし・・下手をすると龍也を殺しかねない・・だがこのままでは勝てない・・ならば・・仙人モードしかないと思ったのだ

「木の葉の里・・上忍・・波風ナルト・・」

「機動六課所属・・時空管理局大将・・八神龍也・・」

互いの体が沈み込み・・

「いざ・・尋常に・・勝負ッ!!」

黒い影と青い影が交差した・・

「す・・凄い・・」

私は思わずそう呟いた・・平行世界のはやてちゃんのお兄さんは強

く、ナルト君と互角・・・もしかしたらそれ以上かもしれない私は思った・・・私達と同じ様に見ている金髪の男に

「えっと・・・貴方もしかしてフェイトちゃんの弟さんですか？」

そう尋ねると男は

「違う・・・俺は死神とは何の関係も無い・・・エース」

私の事をエースという男に

「どうして名前で呼ばないんですか？」

そう尋ねると男は面倒くさそうに

「呼びにくいし・・・俺には名前で呼んで欲しくないと言っていたからだ」

・・・どうやらこの男は元の世界では嫌われてるのかも知れない・・・

「別に俺は気にしてない・・・俺はあいつの騎士で充分だから・・・好かれよう等とは考えていない」

私の考えを読んだのか・・・そういう男は演習場を見て

「決着が付くぞ・・・それと・・・そこで隠れてみる男・・・いい加減出て来い・・・そうやってこそこそ見られるのは好かん」

そう言われると柱の影からイタチさんが姿を見せる・・・男はイタチさんを見ながら

「貴様・・・強者だな・・・俺と戦え・・・」

凜猛な笑みの男にイタチさんは

「俺にはお前と戦う理由が無い・・・」

そう言う男は

「理由など必要ない・・・俺が欲しいのは唯1つ・・・最強の証明・・・その為には強者と戦う必要がある」

そういう男にイタチさんは

「・・・はあ・・・嫌だが・・・仕方あるまい・・・」

模擬戦に了承するイタチさんに男は

「くく・・・平行世界に来るのも悪くない・・・様々な強者と戦えるかな」

凜猛な笑みの男は演習場を見下ろし

「決着か・・・」

そう呟いた・・・演習場では

「引き分けか・・・？」

「俺の負けだつてばよ・・・」

龍也の腕はナルト君の喉の5?前で止まり、ナルト君の腕は龍也の喉の10cm前で止まっていた・・・その差5?・・・それだけが両者の差だった・・・

「くく・・・決着だ・・・来い・・・」

「はぁ・・・」

そう言つと男は乗り気ではないイタチさんを連れて演習場に降りて行つた・・・

「俺は剣帝・・・ルシルファー・・・ルシルファー・・・S・・・ハーティーンだ」

俺が騎士甲冑を展開しながら名乗ると

「イタチ・・・うちはイタチだ・・・」

イタチが軽く構える・・・その構えに俺は苛付き

「おい・・・本気でやれ・・・さもなくば・・・貴様の命・・・刈り取らせてもらうぞ」

殺気がまるで無いのだ・・・だからグレイダルファアを向けながら言つと

「・・・本気でやる必要は無い・・・これは模擬戦だからな」

本気を出す気配の無いイタチに

「随分甘い事を言うのだな・・・貴様・・・何人・・・人を殺した？俺には判るぞ・・・貴様の手は血で濡れすぎている・・・」

俺がそう言うのと僅かにイタチの顔色が変わる・・・そして濃厚な殺気が漂い始める・・・俺はその殺気を感じながら

「良い殺気だ・・・これで漸く戦う意味が「シュッ！！」・・・つつ！！」

俺が喋りかけている中イタチが踏み込んで来てクナイを振るう、俺は反射的に首を逸らし直撃を回避するが、頬を浅く斬られる

「戦いの中で喋り続けるとは・・・愚かだな？」

挑発口調のイタチに

「愚か？・・・違うなこれはハンデだ・・・ここからが・・・本番だっ！！」

俺は地を蹴りイタチ目掛けグレイダルファーを振るった・・・

キンッ！キンキンッ！！

片手で俺の攻撃を捌き続けるイタチに

「くく・・・ははっ！！良いぞ！！ここまで俺の攻撃を防ぐ奴は久し

ぶりだっ!!」

渾身の一撃で胴を穿とうとすると

ドロン・

イタチの姿が丸太に変わる・俺はその丸太を両断しながら

「どこだっ!!何処に行った!!」

そう怒鳴ると背後から無数のクナイが飛んでくる

「ガンブレードッ!!」

グレイダルファアから銃剣という形の片刃剣に切り替え、それを振るいクナイを迎撃し

「そこだっ!!」

ガンブレードから魔力弾を打ち込む、それは何も無い空間に飛んで行く・壁に当たるといいう直後

「ふっ!!」

イタチが染み出るように姿を見せ魔力弾を弾き飛ばす、俺は笑いながら

「良いぞ・イタチ・これでこそ戦う意味がある!!」

そう言っているとイタチは高速で印を結び

「火遁・・・豪火球の術!!」

巨大な火球が迫る・・・俺は反応できず炎に吞まれたが

「この程度で倒せると思ったか!!」

マントで振り払い飛び出したところで

「万華鏡写輪眼・・・天照・・・」

イタチがそう呟くと同時に俺は黒炎に吞みこまれた

「ぐわああああっ!!」

焼ける・・・体が焼けていく・・・いやそれだけではない精神まで燃え尽きそうだ・・・俺が苦しんでいると

「降参しろ・・・そうすれば炎を消してやる」

そう声を掛けてくるイタチに

「な・・・舐めるなあっ!!この程度で・・・俺を倒せると思うな!!」

俺は炎に燃やされながら時空の狭間に手を突っ込み

「王龍剣っ!!」

王龍を引き抜く、俺は全力で王龍剣を振るい炎を吹き飛ばした

「な・・何っ!？」

驚くイタチ目掛け

「くたばれええっ!!!」

全力で剣を振り下ろそうとした直後

ブンッ!!

何かが投げられた音がし・・それは

「ぐわあっ!」

俺の頭にダイレクトに命中し、バランスを崩し落下する俺の前に1人の女性が立つ・・腕を組み・・明らかに怒っています・・と言う表情の

「ラ・・ラグナ・・」

俺がそう言うのとラグナはニツコリと微笑み、両手で辞書を振り上げ

「ハーティーン・・馬鹿ー!!!」

俺の頭に振り下ろした・・俺はその一撃で意識を刈り取られた・・

「本当すいませんっ!!ハーティーンが馬鹿な事したみたいで」

イタチに必死に頭を下げるラグナ・・イタチは

「いや・・そ・・そんなに気にしてないんだが・・それより龍也・・この子とハーティーンの関係は？」

動揺しながらもラグナとハーティーンの間係を尋ねて来るイタチに

「ん？婚約者同士」

そう答えるとはやて達が

「ええええええっ！！！！」

そう絶叫する・・そんなに驚く事だろうか？・・私が首を傾げているとラグナが

「えっと・・恥かしいんでそんなにダイレクトに言わないでくれま
すか？」

赤面しながら言うラグナに判つたと返事を返し

「所で迎えはラグナなのか？」

そう尋ねるとラグナは、気絶しバインドでぐるぐる巻きのハーティーンを見ながら

「私はハーティーンを連れ戻しに來ただけで迎えじゃないです・・私も迎え待ちですよ？」

のんびりと微笑むでは迎えは誰だ？と考えていると

ゴゴゴゴツ！！！

濃厚な殺気が辺りを包み込む・・・この世界のはやて達がその殺気に身を竦ませ、ナルトとイタチが臨戦態勢に入った所で・・・私の影から

「兄ちゃんっ！！」

私の世界がはやてが飛び出し抱きついてくる

「・・・はやてが迎えか・・・」

私がそう尋ねるとはやては首を振りながら

「えっと・・・なのはちゃんが行く言うてたから・・・闇に・・・ごほんっ！！ごほんっ！！相談して私が変わりに迎えに来ました」

そう微笑むはやてだが、さっき確かに闇に・・・と言いかけた

「お前・・・まさか・・・？」

私が問いただそうとするとはやてが

「気にしない・・・気にし・・・ちっ・・・思ったより早かったな・・・」

明らかに舌打ちしある方向を睨む、その方向から

「はぁ・・・はぁ・・・はやてちゃん・・・何てことするの・・・」

ボロボロなのはが歩いてくる・・・その姿にこの世界のはやて達が停止する・・・はやてはニヤ〜と笑いながら

「クリスタルビローにダークバースト喰らって、ようこの短時間で立て直したな？」

私の背に抱きついたまま言うはやてになのはが

「はぁ・・・はぁ・・・な・・・何回も・・・見てるから・・・直撃は防いだよ・・・ダメージはあるけどね・・・」

疲労の色が濃いなのはが言うとはやては

「そうか・・・でも関係ないわ・・・兄ちゃんは今が連れて帰る・・・変な虫が付く前にな？」

ギユウウツ・・・と私に掴まる力を強めながら言うはやてに頭を抱えながら

「はぁ・・・なのは・・・来い」

ふらふらのなのははやて同様、背中に背負う・・・その時ははやてが物凄く嫌そうな顔をしたがそれは無視した

「騒がしてすまない・・・私達はこれで帰る・・・また会う事もあるだろう・・・ではな」

そう言って帰ろうとする中、ラグナがハーティーンを引き摺りながら

「はやてさん・・・やっぱり攻撃は不味いと思いますよ？」

そう言われたはやては笑いながら

「欲しいもんはどんな手を使っても手に入れる・それが私のやり方や・悠長に構えとって欲しいもんが手の届かんとこに行ってもうたらどうする?・私はそんなの嫌や・だからその前に捕まえる」

ニヤ〜と笑い、この世界のはやて達を見ながら言うはやては私の背の上から

「ほら、はよ帰ろうよ〜何時までもこんな所に用ないし〜」

そう言うはやてに頷き、私達は元の世界へ帰った・残されたこの世界の面々ははやてが言っていた

「『欲しいもんはどんな手を使っても手に入れる・それが私のやり方や・悠長に構えとって欲しいもんが手の届かんとこに行ってもうたらどうする?・私はそんなの嫌や・だからその前に捕まえる』」

その言葉を復唱しながらナルトを見ていたそうだ・

番外編 忍者と守護者と剣帝と・ 終り

人気投票記念番外編 ハーティーン編

人気投票記念番外編 ハーティーン編

「ふっふっふっ・・・漸く見つめました・・・」

暗い遺跡の中で赤いマントを羽織ったネクロ・・・ヴェノムが笑いながら、クリスタルの中で眠る騎士の姿を見る

ガシャッ!!

その後ろから指の間に短剣を持った青い鎧を纏ったネクロ・・・ヘルズが姿を見せ、短剣をクリスタルに投げつける

「何をするつもりです？折角見つけたのに・・・」

ヴェノムがその短剣を掴みながらヘルズに問いかける

「何を？・・・こいつには個人的な恨みがある・・・だから排除しようとしただけですか？」

ヘルズは前にジオガデイスが復活した際に、最初に作られた最古のネクロ・・・それが恨みを持つ者・・・それは・・・

「神王と共にジオガデイス様に逆らった愚か者・・・復活されるくらいなら・・・ここで殺しておくのが得策という物ではないですか？」

当たり前の様に殺すと言うヘルズの瞳は憎しみしか映していなかった

た・・

「確かに・・だがそれは勿体無いです、神王と同クラスの魔力と戦闘技能を持つ・・騎士を殺すのは、折角ですから・・私達の為に戦って貰うと言うのは如何です？体にジオガデイス様の魔力を注入し・洗脳すれば、充分に私達の為に戦ってくれると思いますか？」

・
諭すように言うヴェノムに、少し迷った素振りを見せたヘルズだが・

「それもそうですね・・今の内に私達の味方にする方が得策ですね・」

そう言うとヘルズはヴェノムとクリスタルと共に漆黒の闇の中に消えた・・

俺は・・誰だ？・・俺が目覚めると同時に思ったのは自分が何者か？だった・・

「判らない・・俺は何だ？」

考えても判らない・・いや・・何も思いつかない・・俺の中には何も無い・・

「目覚めましたか？ゴレラ？」

赤いマントを羽織った誰かが入ってくる・・

「ゴレラ？・・・それが俺の名か？」

問いかけると

「名前？ふふ・・・貴方にそんな物は必要ありません・・・貴方は戦うだけの存在・・・名も・・・思考も・・・全ては不要なのです」

そうかと思う反面・・・どこかで違うと言う声が聞こえる

「まあ・・・暫くは戦う必要ありませんし・・・好きにしてくださいください・・・魔導師を殺すなり・・・戦う相手を見に行くなり・・・貴方の思った通りの事をしてくれば良いので」

そう言っ出て行つた赤マントの言葉に従い、俺は城を出た・・・

「空か・・・空は良い・・・どこまでも広く・・・どこまでも大きい・・・」

俺は目に止まつた広場（公園というらしい）の一部に結界を展開し、空を見上げていた

「俺は何だ？・・・本当に戦う為の存在なのか・・・？」

こうして空を見上げていると感じる・・・赤マントの言っていた事が違うかもしれない・・・

「だが判らない・・・俺には何も無い・・・」

違うと感じるが・・・俺にはそれは否定する事が出来ない・・・俺にはあいつの言葉を信じるしかないのだ・・・俺はそんな事を考えながら空を見上げていると・・・

ガサガサッ！！

茂みを掻き分ける音が聞こえた・

「結界があるのに？・誰かが破壊したのか？」

だが破壊された感じはしない・つまりすり抜けて来たか、元からこの場所に居た人物になる・俺はそんな事を考えながら茂みの方を見て、誰が来るのかを考えていた・

誰が呼んでいるの？

私には誰かが私を呼ぶ声が聞こえていた・回りの人はそんな声は聞こえないと言うが私には聞こえていた

「こつち？」

私はその声に従い、公園に足を踏み入れた・

「どっ？・どっなの？」

公園に入ると更にはつきりと聞こえる、私を呼ぶ声が

「ここかな？」

公園の奥に繋がる茂みの前に立つ・そこには結界が張られていた、

私はゆっくりその結界に手を伸ばした・・

スツ・・

私の手は結界に弾かれる事無く、結界の内側に入った

「ここに居るのね・・私を呼んでる人が・・」

私は結界の中に飛び込んだ・・

「空は良い・・どこまでも広く・・どこまでも大きい」

茂みの奥から呟くように聞こえる声を頼りに、私は茂みを掻き分けながら進んで行った・・茂みを掻き分けた先には騎士が居た・・

紺色のマントに闇色の騎士甲冑を纏った騎士が空を見上げていた・・私はその姿に目を奪われた・・怖いという感じは不思議としない・・ただ寂しそう・・私は空を見上げる騎士の姿がとても寂しそうに見えた・・

「誰かと思えば人間か・・どうやってここに来た？」

騎士は私の顔を見ながら尋ねて来る

「呼ぶ声が聞こえたの・・貴方が私を呼んだの？」

騎士に呼んだのか？と尋ねると

「呼んだ？俺がお前を？・・判らない・・呼んだのか、呼んでないかも判らない・・」

判らないと繰り返し言う騎士に近寄ると

「お前は俺が怖くないのか？・俺はお前を殺すかもしれないのだぞ？」

剣を私に見せる騎士に首を横に振りながら

「怖くないよ・私は貴方が怖くない・」

そう笑い騎士の隣に腰掛けながら

「私も一緒に空を見ても良い？」

騎士の顔を見ながら尋ねると

「好きにすれば良いだろう？一々俺に許可を求める必要は無い」

騎士と一緒に空を見上げた・それから毎日ここに来て騎士と一緒に空を見上げるのが私の日課になった

「また来たのか・よほどお前は暇なんだな？」

空を見上げながら言う騎士に

「うん！私は暇なの・だから今日はお弁当を作って来たんだ！だから一緒に食べよう？」

騎士の隣に腰掛け、お弁当を包んでいた布を外し蓋を開けて

「はい、食べて見て」

サンドイッチを手渡すと

「……」

無言で食べる騎士に

「美味しい？」

お兄ちゃん以外に作るのは初めてなので、内心不安を感じながら尋ねると

「良く判らない……でもまた食べたいと思う……」

良く判らないと言いながらもサンドイッチを手取る騎士に

「それは美味しいって事だよ」

と言うと騎士は頷き

「そうか……では言い治そう……これは美味しい」

余り感情を見せない騎士が笑ってるように私は見えた

「ねえ……貴方の名前は何？」

昼食を食べ終えた所で、騎士に名は何か尋ねる、何度か聞こうと思ったが……聞くチャンスが無かった、だから今聞こうと思い尋ねると、騎士は何かを考えた素振りを見せ

「俺に名は無い・・・強いて言うなら異端・・・それが俺の名だ」

「名前が無いなら私が上げる、貴方だけの名前を！」

笑いながら言う騎士は、驚いたような素振りを見せながら

「・・・俺は異端と呼ばれ・・・蔑まれた俺に名をくれると言うのか？」

震える口調で言う騎士に

「うん！名前が無いのは可哀想だから私は名前をあげる！ちよつと待ってね？」

私はそう言うと言前を考え始めた・・・異端・・・異端か・・・そうだ！！

「異端はハーラティカルって言うんだ、だから貴方はハーティーンだね！」

騎士・・・うつん・・・ハーティーンに言う

「ハーティーン・・・ありがとう俺に名をくれて・・・大切にする・・・」

私の頭に手を伸ばし撫でてる、ハーティーンの顔は兜で見えないが・・・笑ってるような気がした・・・

「じゃあね、ハーティーン！！また明日も来るから！！」

そう言って来た道に戻ろうとすると、ハーティーンが

「ラグナ・・・気を付けて帰れよ」

「！！私の名前を呼んでくれた？驚きながら振り返るとハーティーンはマントで姿を隠し消えて行った・・・」

「・・・ちゃんと顔を見て呼んで欲しかったな・・・まあ良いか・・・明日も会えるし・・・」

私はそう呟きながら家に帰って行った・・・

「くそ！！どうすれば良いんだ？」

武装隊の隊員である、ヴァイスグランセニックは舌打ちをしながら、ストームレイダーを構えていた、立て籠もり犯を狙撃する任務で現場に来たが・・・俺は現場に着くなり目を見開いた・・・立て籠もり犯を狙撃しようと準備していたが・・・そいつが人質にしていたのは・・・俺の妹である・・・ラグナだった・・・立て籠もり犯は殺気だっているからこうして狙撃するしかない・・・だがラグナが人質では・・・撃つにも撃てない・・・俺がどうすれば良いか迷っていると

「誰だ？あの魔導師は？」

隣に居る、同じ武装隊の隊員が驚きながら言う・・・何があったのかと思い現場を見る、そこには漆黒の騎士甲冑を身に纏った騎士が立っていた・・・

「黒騎士？・・・いや違う・・・」

最近出現する、黒い影の様な化け物「ネクロ」とそれと戦う正体不明の魔導師「黒騎士」漆黒の甲冑から黒騎士かと思ったが違う・・・ではこいつは何だ？俺が混乱していると騎士は背中から剣を抜き放つ・・・俺達と同じ様に硬直していた立て籠もり犯が

「てめえ！！これが見えないのか！！」

ラグナにデバイスを突きつける犯人・・・やばい・・・相当殺気立ってる・・・このままだとラグナが・・・しかし騎士は何事も無い様に歩を進める・・・

「見えないのかって！！言っただよ！！」

犯人がラグナの頭にデバイスを突きつける、だが騎士の歩みは止まらない・・・くそ！こうなったらあの騎士を先に狙撃して動きを止めない・・・俺がストームレイダーを構えた瞬間・・・騎士の姿が消える

ザンツ！！

鋭い斬撃音と共に

「人質に武器を突きつけると言うことは・・・敵に対して完全な無防備になる事を意味している・・・人質に武器を向けた瞬間・・・お前は敗北している・・・」

騎士は犯人の袈裟に斬り付け、人質になっていたラグナを抱き抱え後ろに跳ぶ騎士、騎士は気絶しているラグナを降ろし

「さて・・・貴様にもう生きてる意味は無いな・・・ここで楽にしてやるう・・・」

騎士の姿がブレると同時に

「えっ?・・・ぐああっ!!」

騎士は一瞬で犯人の前に立ち連続で拳を振るう・・・

「酷い・・・」

隣の隊員が呟く・・・倒れかける犯人に容赦なく拳と蹴りを繰り返す

「がは・・・うううう・・・」

血を吐き倒れかける犯人の首を掴み、無理やり立ち上がらせる

「ゆ・・・許して・・・下さい・・・がっ!・・・」

許してと言う犯人の言葉を無視して、腹部に連続で拳を叩き込む・・・騎士には一切の容赦が無い・・・騎士は無言で犯人の頭を鷲掴みにする・・・それと同時に騎士の手に魔力が収束していく・・・

「やばいですよ!・・・あいつ犯人を殺すつもりですよ!!」

その通りだ、あいつは犯人を殺すつもりだ、慌てて止め様としたがそれより速く、魔力の収束が終った・・・

「消える・・・」

騎士が無慈悲に砲撃を放とうとした瞬間・

「駄目ーッ！！ハーティーン！！殺しちゃ駄目ーッ！！！」

ラグナが目覚まし、駄目と言うと騎士・・いや・・ハーティーンは

「駄目だ・・こいつはお前を殺そうとした・・だから俺がこいつを殺す・・」

ハーティーンにラグナが近付き

「大丈夫だから！私は大丈夫だから！殺しちゃ駄目！！」

止めるように繰り返しラグナが言う・・すると騎士は

「判った・・」

ハーティーンは犯人を降ろし、殴りつける

「ハーティーン！！」

完全に敵意の無い犯人を殴りつけた、ハーティーンにラグナが怒鳴ると

「これ位で勘弁してやる・・じゃあな・・」

ハーティーンはマントを翻し消えて行った・・

「ラグナ・・あれがお前が言ってたハーティーンか？」

ラグナに尋ねると、ラグナは頷き

「普段はあんな風じゃないの！ハーティーンは優しいの！！本当だよ！！」

ラグナはハーティーンを庇うように必死で言う

「判ってる・・・ラグナの言う事を信じるよ」

ラグナが毎日楽しそうに言っていたんだ・・・だからラグナの言う事を信じると言うと、ラグナは安心したように頷いた

（ハーティーン・・・か・・・妹を助けてくれたんだ・・・礼くらいは言いたかったな・・・）

犯人を半殺しにしたのは頂けないが・・・それでも妹を助けてくれたんだ・・・やはり兄としては礼を言いたかったと思いながら、俺はラグナを連れて家に向かって行った

ラグナが人質にされた次の日・・・

「・・・何故・・・俺はあいつを殺そうとした・・・」

ラグナにデバイスを突きつけている男を見た瞬間、俺の中で声が聞こえた

殺せ・・・壊せ・・・と・・・俺はその声に従ってしまった・・・あの時ラ

グナが止めてくれなければ俺はあの男を殺していただろう・・・だがそれより気がかりなのは・・・

「ラグナはもう来てくれないだろうな・・・」

多分俺はラグナを怖がらせてしまった・・・だからもう来てくれないだろうと思うと、とても寂しかった

「こんな気持ちで空を見ても寂しいだけか・・・」

普段なら空を見上げれば落ち着くのだが、今日はそうは行かなかった・・・

「ふっ・・・らしくないな・・・」

俺はそう呟きいつもラグナが来る方に目を向けた・・・来てくれないと判っているのな・・・と考えていると

ガサガサッ！！

茂みを掻き分ける音と共に

「ハーティーン！！来たよ！！」

ラグナが姿を見せる・・・俺は驚いた・・・もう来てくれないと思っていたからだ

「ラグナ・・・来てくれたんだな・・・俺はもう来てくれないのかと思っていた・・・」

思わずそう言ってしまい・・・内心慌ててると

「何で？私が来ないと思ったの？」

尋ねて来るラグナに

「俺は人を殺そうとした・・・お前を怖がらせた・・・だから来てくれないと思った・・・」

素直に自分の気持ちを言う

「・・・んー確かに怖かったけど・・・ハーティーンは私を助けようとしてくれたでしょ？だからあんまり怖く無かったよ」

と笑いラグナは俺の隣に腰掛ける

「お兄ちゃんがあるがとうって、俺の妹を助けてくれてって、言うてたよ」

ありがとう・・・か・・・そんな事を言われたのは初めてだと思っています

「それと・・・私からもありがとう！！助けてくれて！！」

ありがとうと笑いながら言うラグナ・・・俺はその時とても暖かい気持ちになった・・・

「ハーティーンは何時も私を助けてくれる・・・ハーティーンは私のヒーローだね！・・・あってもお兄ちゃんも・・・私は大好きなんだ」

ヒーロー・・・俺はそんな大それた者ではない、と思ったが口にはしなかった、それから日が暮れるまでラグナの話を聞いていると

「ラグナーッ！！もう帰るぞー！！」

結界の外からラグナを呼ぶ声が聞こえると、ラグナは立ち上がり

「ハーティーン、お兄ちゃんが呼んでるから私もう帰るね・・・また会おうね、ハーティーンッ！！」

と笑うラグナを見送り、俺は再び空を見上げた・・・それは何時もの様に広く・・・見ているだけで心が落ち着いた・・・

太陽が沈み、辺りに夜の帳が下りた頃

「ゴレラ・・・探しましたよ・・・こんな所に居たのですね？」

赤マントが俺の前に着地する

「俺はゴレラじゃない・・・俺はハーティーンだ」

赤マントを睨みながら言うと

「・・・自分で名を考えたという事ですか・・・判りましたハーティーン、これで良いですか？」

俺は名を貰ったとは言わなかった・・・それは言っではいけない気がしたから

「さっ！パンデモニウムに帰りましょう・・・これから貴方の最終調

整をしなければならないので」

そう言う赤マントと共に俺はパンデモニウムに戻った・・ハーティンはそこでラグナに関する記憶を失った・・

だが・・ラグナに貰った名だけは消して忘れる事はなかった・・そしてこの別れから数年後・・再び、異端の騎士ハーティンとラグナは出会う事になる・・それは一体何を意味するのか？それは誰にも判らない・・

キャラ紹介

ハーティン

ヴェノムがクリスタルの中で眠っていた騎士をベースに作り上げた、デクスシリーズの始まりにして完成形。

ネクロ、デクスとは違い完全な人型である、また他のネクロと違い子供助けたり・・殺しをしなかったり・・と慈悲を持つ

目的は守護者（龍也）に勝つ事で、その所為か剣の扱いに長ける、また自身の心と存在意義を常に考えており、龍也や六課のメンバーと戦えば判ると思っている

魔力を自身で生成出来る為、ネクロやデクスと違い魔導師を襲う必要はない

ラグナとの出会いを忘れていたが、遺跡でのジェイルの戦闘を切っ掛けに、ラグナの事を思い出してもう一度会うことが出来れば、と思っている

人気投票記念番外編　なのは編

人気投票記念番外編　なのは編

機動六課の食堂でスバルが何気なく発した、言葉から全てが始まった

「なのはさんって、何時龍也さんを好きになったんですか？」

これが切っ掛けだった・・・即座に離脱しようとしたが・・・

「逃がしませんよ・・・」

両サイドのティアナとセツテに腕を押さえられる・・・普段仲が悪いのにこういう時のコンビネーションは凄い

「そういえば私も知らへんな～何時なのはちゃんが兄ちゃんを好きになったのか・・・いい機会やから聞かせてなあ？」

拒否権は無いようだ・・・私は諦めて

「判ったよ・・・話すよ・・・だから腕を放して・・・」

ティアナとセツテに腕を放すように言い、二人が腕を放した所で椅子に座りなおし、話し始めた・・・私と龍也さんが初めて会った時の話を・・・

「いたた・・・足を挫くなんてドジだなあ・・・」

帰り道の途中うつかり足を挫いて、私は道路に蹲っていた・

「どうしよう?・・・痛くて歩けないよ・・・」

立ち上がろうとするが、足が痛み動く事が出来ない、暫くどうしようか考えていると

「何かあったのか?」

ビクッ!!後ろから突然話しかけられ、驚きながら振り返る・・・そこには

「どうしたと聞いているのだが?」

黒の服を身に纏った男の子が立っていた・・・多分私より年上・・・11～12歳位だと思う・・・その男の子は

「どこか怪我でもしたのか?」

優しく尋ねて来る・・・なんでか判らないが安心し

「その・・・足を挫いちゃって・・・歩けないんです・・・」

足を挫いたと言うと

「そうか・・・じゃあ・・・」

男の子は私の荷物を持ち、私の前に背中を見せてしゃがみ込み

「おぶされ・・・家まで送ってやる」

おぶされと言う男の子に

「でも・・・悪いです・・・」

悪いと言うと

「気にするな・・・私が好きでやるんだ・・・お前は何も気にしなくて良い・・・」

そういう男の子に

「判りました・・・お願いします・・・」

恥かしい気もしたが、私は男の子の背中におぶさった

「良し・・・行くぞ、お前の家は何処だ？」

ゆっくりと立ち上がった男の子は、私に家は何処かと尋ねて来る・・・だが

「私はお前じゃないです！！私は高町なのはです！！」

何度もお前と言われたのが嫌で、怒鳴りながら名前を言うと

「いや・・・すまない・・・私はお前の名前を知らなかったのにな・・・なのは改めて聞くがお前の家は何処だ？」

もう一度尋ねて来る男の子に

「えっと・・・翠屋って言う喫茶店です・・・判りますか？」

家の名前を言うと

「知ってる・・・では行くか・・・」

男の子は私と荷物を軽々持ち翠屋に向かい歩き出した、その足取りは安定していた

「あの！お兄さんの名前は何ですか？」

翠屋に向かう道の途中で尋ねると

「私の名か？私は龍也・・・八神龍也だ」

と名前を覚えてくれた男の子の顔はとても穏やかな物だった・・・私は翠屋に向かう途中、自分では説明できない安心感を感じていた

（んー安心する・・・何だろう？上手く言えないけど・・・龍也さんは良い人だ・・・）

まるで、お父さんかお兄ちゃんにおんぶされてるような・・・そんな感じた・・・

（いけない・・・眠く・・・なって・・・）

段々気持ち良くなってきた・・・私は眠りに落ちてしまった・・・

「なのは・・・なのは・・・起きなさい」

うん？・・・お母さんの声？・・・ゆっくりと瞼を開く、直ぐに心配そうなお母さんの顔が見えた

「良かった、さつき男の子がなのはを連れてきた時は驚いたわ、でも足を挫いただけで良かったわ」

男の子？・・・龍也さん！！

「お母さん・・・龍也さんは？」

お母さんに尋ねると

「あら？あの子龍也君って言うの？龍也君ならもう帰ったわよ？妹が待つてるからって」

そっか・・・帰ったんだ・・・お礼が言いたかったな・・・と思っていると

「大丈夫よ、あの子もなのはと同じ学校だから、探せば会えるわよ」

そっか・・・じゃあ今度会ったらお礼を言わないと

「さつ、晩御飯が出来てるから、食べましょう？」

お母さんと一緒にリビングに向かって行った・・・その間も私の頭の中は龍也さんの事ばかり考えていた・・・

「んーどこかな？」

次の日学校で龍也さんの姿を探していると

「なのは・・・さっきから何キョロキョロしてるの?」

アリサちゃんが尋ねて来るので

「人を探してるの、昨日私を家まで連れてってくれた男の子」

と言うと、アリサちゃんは

「男の子!?・・・そつか・・・うんうん・・・」

何かしきりに頷きながら

「大丈夫、私は応援するわ」

何故か肩に手を置きながら言うアリサちゃんに

「応援? 探すの手伝ってくれるの?」

1人で探すより2人の方が効率が良い

「私も一緒に探してあげる・・・だからどんな子が教えて」

アリサちゃんにお礼を言い、龍也さんの特徴を教える

「髪は黒くて・・・目付きは鋭くて・・・格好良い人!!!・・・名前は龍也さんって言うの!!」

と言うとアリサちゃんは

「うわ・・・よりによって・・・八神龍也・・・ハードル高いわね・・・」
ぶつぶつと言いだめたアリサちゃんに

「アリサちゃん、龍也さんの事知ってるの？」

知ってるのか？と尋ねると

「当たり前よ、入学当時からスポーツ、勉強、全て完璧な人よ」

完璧か・・・凄い人なんだなと感心していると

「うーん・・・八神龍也か・・・それなら普通に探しても見付からないわね・・・良し！！お昼休みまで待ちなさい！私が会わせて上げるから」

胸を張るアリサちゃんに頷き、お昼休みまで待つことにした・・・

そしてお昼休み

「さあっ！！行くわよ！付いて来なさい！！」

自信満々に歩いて行くアリサちゃんの後を追って、すずかちゃんと食堂に向かう

「えっと・・・あっほらほら！！あそこに居たわよ」

アリサちゃんの指差したほうを見る・・・そこには

「龍也さんだ・・・でもどうして1人なの？」

広い食堂の机に1人だけ、腰掛け弁当を食べている龍也さんの姿があった

「龍也は完璧とか何とか言われてるわ、それで大概の人は恐れ多いとか言って近付かないのよ、だからこの時間がチャンスって訳、ほら行くわよ!!」

アリサちゃんとすずかちゃんと共に、その机に向かい・

（ほら、なのは自分で声を掛けなさいよ!）

小声で言われ、私は頷き龍也さんに声を掛けた

「あの・・・ここ良いですか?」

空いてる席を指差しながら尋ねると

「お前は確か・・・なのはだったな・・・好きにすれば良いだろう?・・・空いてるんだから・・・」

一瞬だけ私の顔を見て言う龍也さんに頷き

「それじゃあ、ここで食べさせて貰いますね?アリサちゃん、すずかちゃんもほら座らないと」

2人に声を掛けると

「う・・・うん・・・」

おっかなびつくりと感じて腰掛ける2人に首を傾げながら

「頂きます」

お母さんが作ってくれたお弁当を食べ始めた、それは何時もと同じでとても美味しかった

「あの・・・昨日はありがとうございました!!」

食べ終わった所で昨日のお礼を言うと

「気にするな・・・当然の事をしただけだ・・・」

そう言う龍也さんはポケットから

「昨日作ったんだ・・・良かったら食べると良い」

クッキーの入った袋3つ差し出してくる

「あ、ありがとうございます!!家に帰ったら食べます!!」

袋を受け取りお礼を言うと

「ふふ・・・」

龍也さんが笑った・・・驚いて龍也さんの顔を見る・・・さっきまで無表情でいた龍也さんは笑いながら

「いや・・・失礼・・・ついな妹に重なって見えてな、つい笑ってしまった」

と頭を上げる龍也さんに

「気にしないでください、それより始めて笑ってくれましたね?」

と言うと龍也さんは笑いながら

「はは・・そうだな・・学校で笑うなど久しぶりだ、最近は1人だったからな、また気が向いたら一緒にお弁当でも食べよう、じゃあな」

そう笑いながら食堂から出て行った龍也さんの姿を見ていると

「うわ・・なのはあんた凄いわ、龍也を笑わせるなんて・・龍也って無表情で有名なのよ?」

呆れた様に言うアリサちゃんに

「そうかな?でもまた一緒に食べようって言ってたね?これでまた龍也さんと一緒にご飯が食べれるね?」

とアリサちゃんに言うと

「そうね・・また一緒に食べるのも悪くないわね?ねっ?すずか?」

アリサちゃんは笑いながらすずかちゃんに話しかけると

「そうだね・・また今度一緒に食べようね?」

と笑うすずかちゃんとアリサちゃんと共に教室に戻った、それから

龍也さんと一緒に食べることが日課になった・・

話を聞いたり、話をしたりするのが楽しくて、殆ど毎日一緒にお弁当を食べた、その内龍也さんと居るのが楽しくなってきた・・それをお母さんに話すと

「まあ！あらあら・・なのはにも春が来たのね！良いなのはそれは恋って言うのよ？」

恋・・そっか・・私は龍也さんが好きなんだ・・それからだ・・それから私は自覚した、私は龍也さんに恋してるのだと

「と・・まあ・・こんな感じかな？私が龍也さんを好きになったのは・・」

と話終えた所で皆の顔を見ると

「んー微妙・・フェイトちゃんとかスバルとかと違って派手さがない」

はやてちゃんが微妙と言う、だがそれは間違いだ、フェイトちゃんやスバル達が派手すぎるのだ、命の危機を助けられたり、犯罪者として捕まりかけた所を弁護して貰う等、普通なら体験する物ではない

「微妙でも良いの！！そもそも派手さなんか必要ないじゃない！」

と若干怒鳴りながら言うと

「なのは？どうした何怒ってるんだ？」

食堂に顔を出した、龍也さんが驚きながら尋ねて来る

「にゃあああつ！！！！何でもないです！！！！気にしないで下さい！！」

余りに突然の登場に大声で返事をする

「何でもないなら良いが・・・それより他の隊から、訓練の依頼だ、なのは行くぞ」

「あつはい！判りました！今行きます！！」

食堂を後にする際、はやてちゃん達からの嫉妬の視線を無視して、私は龍也さんと共に出かけて行った・・・

前を歩く龍也さんの姿は昔と変わらず、大きく見ているだけで安心できる・・・まあ昔から鈍感なのは変わらない・・・でもそれでも良い・・・何時の日か気付いてくれるだろう・・・幾ら鈍感でも、これだけアブローチをしていれば、何時かは気付いてくれるだろう・・・だからそれまではこの関係で良い・・・恋人ではない・・・でも友達でもない・・・この心地良い場所が好きなのだ・・・でも何時までもその位置にいるつもりは無い・・・何時の日か恋人に成れたら良いと思う・・・そんな事を考えながら龍也さんの隣を歩く・・・私は小さな幸せを噛み締めていた・・・

人気投票記念番外編 マテリアルズ編

人気投票記念番外編 マテリアルズ編

カタカタ・・

執務室で書類整理をしていると・・一通のメールが届く・・

「ん？誰からだ・・おっと・・忘れてたな・・そうか・・もうこんな時期か・・」

そのメールの送り主は、以前私とフェイトが参加した祭りの主催者からで、内容は祭りへの招待状だった。

「仕事も終わったし・・静夜達と行こうかな？」

私はそんな事を考えながら、書類をしまい、私は自宅に戻った・・

「パパー（父上！！お父様！！）お帰り」

笑いながら出迎えてくれる静夜達の頭を撫でながら

「皆、今日お祭りがあるのだが・・行くか？」

祭りに行くかと尋ねると

「「「行く！！」」」

即座に行くと言う静夜達に、笑い掛けながら

「そうか・・・それじゃあ・・・皆に良い物がある・・・準備しに行こう」

私は笑いながら物置に向かった・・・確か・・・こちら辺に仕舞って置いたはず何だが・・・

「あつた・・・」

私は物置から4着の浴衣を取り出した、手作りの子供用の浴衣だ、サイズ的には問題ない筈だ

「パパ、それ何？」

雷華が私の背中におぶさりながら尋ねて来る

「ふふ・・・浴衣さ・・・さっこれに着替えて祭りに行こう」

私は4着の浴衣を持って、リビングに向かった・・・

「さてと・・・やはりこれに限る・・・」

私は自分用の着物に袖を通しながら頷いていた、黒の生地には赤い帯・・・少々派手だが私はこれが気に入っている

「後は皆が来るのを待つだけだな・・・」

着付けは出来るが・・・流石に私が着せるのも何だと思い、クレアに任せたのだ

「・・・お待たせ」

4人が浴衣に着替え、リビングに戻ってくる、

「ふふ・・・良く似合ってるじゃないか」

星奈には白の浴衣、静夜は紺、雷華は髪と同じ水色、ヴィヴィオはオレンジだ、4人にとっても似合っている

「「ありがとう！！パパ」」

ヴィヴィオと雷華が私の背にぶら下がり

「父上、早く行こう！！」

「お父様と一緒に、ふふ・・・とても楽しいです」

星奈と静夜が私の手を握る

「そうだな、行こう」

私は静夜達を連れて祭り会場に向かって歩き出した・・・

「おお～賑やかだね～」

雷華が祭り会場を見ながら、賑やかだと言い笑う

「そうだな、やはり祭りとはこうでないと・・・」

賑やかで人が沢山居る、これが祭りだなと納得し

「さっ、行こうか」

私は静夜達を連れ、祭り会場に向かって行った

「凄いなあ」

僕は祭りの屋台を見ながら呟いた、とても賑やかで居るだけで、とても楽しい気分になってくる

「おっ！兄ちゃんまた来たのか？」

歩いていると、屋台のおじさんが笑いながら、パパに話しかけると

「相変わらず元気そうですね」

と露天商に笑いながら返事を返す

「パパ、知り合い？」

と尋ねると、屋台のおじさんは

「パパ！？、なんだい兄ちゃん結婚してたのか？」

驚きながら屋台のおじさんがパパに尋ねると、パパは笑いながら

「残念ですが私は未婚ですよ、ちょっと訳ありの子達で私が引き取

って育ててるんですよ」

僕達の頭を撫でながらパパが言うと

「そうかい・・やっぱ兄ちゃんは優しいなあ〜どうだいお嬢ちゃん達はパパが好きかい？」

と尋ねて来るおじさんに

「うん！！僕パパ大好き！！」

「私もです！！私もお父様が大好きです！！」

「我也だ！我也父上が大好きだ！！」

「ヴィヴィオも！！パパ大好きだよ！！」

と皆で言うと、おじさんは笑いながら

「そうかそうか、どれおじさんが皆にプレゼントを上げよう、これから兄ちゃんと仲良くな」

おじさんは笑いながら、ペンダントを差し出してくる、僕達がそれを受け取るとパパは

「すみません、全部でいくらになりますか？」

とパパが尋ねると、おじさんは笑いながら

「良いつて、これは俺の気持ちだからさ、ただで良いよ」

ただで良いとおじさんにパパは

「いえ・・・それは悪いですよ」

とパパが財布を出そうとすると

「良いって言ってるだろ？俺の気持ちだからよ、ほれほれ行った行った、まだまだ見る所は沢山あるんだ、こんな所で時間を潰してたら勿体無いぜ？」

と笑うおじさんにパパはもう一度お礼を言ってから歩き出した、祭り会場を歩いていると

「おっ！！兄ちゃんまた来たのか！！ほれ！！これ持って行きなっ！！！！サービスだ！！！」

あちらこちらの屋台のおじさんが、どんどんパパに自分達の店の商品を手渡す、たこ焼きにお好み焼きや、綿菓子にジュース・・・とにかく沢山だ、しかも全員がパパからお金を取ろうとしない・・・押し付けては店に戻って行く・・・パパは困った様に笑いながら

「やれやれ・・・持ちきれないな・・・一回座って食べようか？」

と笑い近くのベンチに腰掛け、たこ焼きのパックを空け

「はい、ヴィヴィオあ〜ん」

一つ取り、ヴィヴィオの口に運ぶ

「あゝん、もぐもぐ・・・んゝ美味しい!!」

ヴィヴィオが美味しいと笑うと、パパは笑いながら

「そうか、美味しいか良かったな、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオの頭を撫でてから

「はい、次は雷華だよ、あゝん」

たこ焼きを爪楊枝に刺して、笑いながらあゝんと言うパパに

「あゝん」

口を開くとたこ焼きが口の中に入れられる

「もぐもぐ・・・美味しい!!」

と笑いながら言うパパは僕の頭を撫でながら笑う、その顔はとても穏やかで優しい物だった・・・

「我もあゝんして欲しいぞ!!」

「私もです!!」

と言う星奈と静夜の頭を撫でながら

「ふふ・・・判ってるよ、ほらあゝん」

と笑いながら星奈達にも僕とヴィヴィオと同じ様にあゝんをするパ

パ、暫く皆で貰った物を食べていると

「あれ？八神大将？何してるんですか？」

緑色の髪の人のが頬のガーゼを貼って、話しかけてくる、パパの知り合いかと思っていると

「ヴェロツサ・・・お前こそ何してる・・・仕事じゃないのか？」

と尋ねるとヴェロツサと呼ばれた男の人は

「はは・・・書類をはやてに持ってたら・・・行き成りビンタされて殴られたよ・・・兄ちゃんが居ない！！とか言つて・・・首が折れるかと思つたよ・・・」

と俯いて笑うヴェロツサに

「あ・・・すまん・・・一応注意しておく・・・」

と言うとヴェロツサは笑いながら

「いや・良いよ・・・そんな事したら兄ちゃんに告げ口したな！！とか言われてボコボコにされるから・・・言わなくて良いよ・・・」

どうやらこの男の人ははやて姉に相当お話されてるようだ、グリフィスさんとどっちが酷い目に会っているのだろう？僕はそんな事を考えていた・・・事実ははやての八つ当たりの被害に合うのはグリフィスかヴェロツサのどちらかで、酷い時は入院レベルの重傷を負う事になる・・・正しその場合即座にシヤマルによって回復させられる・・・龍也関連の人物で間違いなく一番酷い目に会っているのはこの2人

だろう・・

「さてと・・お邪魔するのも何だから僕はもう行くよ・・それにも
しシャツハに見付かったら怖いから・・」

と笑い歩いていこうとするヴェロツサに

「ヴェロツサ、これを持って行け」

パパが焼きそばのパックを投げる、それを軽く受け止め

「ありがとう、後で頂くとするよ」

と笑い今度こそヴェロツサが歩き去った

「グリフィスみたいにはやてにお話される者が居るとは以外だった・
」

と呟く静夜にパパは

「どうやらはやてはヴェロツサが嫌いらしい、チャラチャラした男
は癪に障ると言っていた」

そう呟くパパと一緒に再び祭り会場を見て回った、楽しくて来て良
かったと僕は思った、多分静夜達も同じださっきから嬉しそうに屋
台を見ているから判る、皆で屋台を見ているとパパが腕時計を見て

「そろそろだな・・おいで、もうすこしたら良い物が見れる」

と笑い開けた場所に歩いて行き、空が見える場所にパパが腰掛け

「ほら、星奈達も座ると良い」

と自分の隣を叩きながら笑うパパに頷き皆で座ると同時に

ドーン！！ドーン！！

凄まじい音と共に夜空に華が咲く

「うわぁ・・・綺麗・・・」

ドーン！！ドーン！！

と音がする度に夜空に綺麗な華が咲く・・・それは花火だった・・・

夏の夜空に咲く華・・・それは直ぐに消えてしまうけど・・・心の中に
残る・・・とても美しい物・・・多分それは少しの間しか見えないから
美しいのだ・・・夜空に咲く華・・・それが直ぐに消えてしまう・・・け
れど少女達の心に残り続ける・・・

それは夏の日の儚い思い出だった・・・しばらく花火を見ていると

「さてと・・・そろそろ祭りも終わりだ・・・みんな帰ろうか？」

花火の打ち上げが終った所でパパが帰ろうかと尋ねて来る

「うん！！お家に帰ろう！！」

行く時は僕とヴィヴィオがパパの背中におぶさったから帰りは静夜
と星奈の番、だから僕とヴィヴィオはパパと手を繋ぎ、代わりに星
奈と静夜がパパの背におぶさる

「父上！！我はとても楽しかったぞ！！」

静夜が笑いながらパパに言い、それに続くように

「私ものです！！こんなに楽しいのは初めてです！！」

星奈も何時もの無表情を和らげて言う・・・なんとなく悔しい感じがして・・・

「僕もだよ！！僕も凄く楽しかったよ！！」

と大きな声で言うパパは笑いながら

「そうか・・・それは良かった、来年もまた皆で来ような」

と言う、その笑顔はとても穏やかで幸せそうだった・・・暗い夜道を皆で歩く、本当なら暗い道は怖いでもパパが居るから怖くない・・・僕はそんな事を考えながら、家に向かって行った・・・

夏の日の大イベントそれは幼い少女達の心に残る、大切な思い出になっただ・・・

人気投票記念番外編 ヘルズ編

番外編 全てが変わった日・・

カタリ・・

私は背中の箱から美しい装飾が施された剣を抜き出し机の上に置いた、それは・・

「遠き日にあの方より賜った・・我が剣よ・・お前を見ていると過去を思い出すよ・・」

この剣は私がまだ人間だった頃・・我が偉大なる主君に賜った物だ・・昔を思い出しながら仮面をとる・・

「・・私はあの時のままだ・・あの時・・私が・・いや・・王が全てを失った日から・・私の時は止まったままだ・・」

私は全てを失った日の事を思い出していた・・

「カリエルツ！！カリエルは居るかっ！！」

私の部屋の扉を蹴り空け、美しい金色の髪を持った青年が入ってくる・・

「ジオガデイス様・・もう少し王らしく振舞う事は出来ませんか？」

私は本を読みながら答えた・・私は人間の時・・ジオガデイス様の

世話係であると同時に友として育った．．それはジオガデイス様が王になってからも変わりは無かった．．

「むっ．．すまない．．だが喜ばずには居られないのだ！！ついに我が国とベルカの調停が決まった！！もう争わなくて良いのだ！！平和な時が来るんだ！！」

腕を掲げ笑うジオガデイス様に微笑みかけながら

「それは良かったですね．．これで我が国も安泰ですね．．」

私達の国は小さな王国だった．．いや正確には禁忌の国として蔑まれていた．．我が国の王族は．．聖魔と呼ばれる特殊な血筋を持っていた．．光と闇．．相反する力を生まれた時から兼ね備えている．．それはジオガデイス様も例外では無く、歴代最強とも言われる力を持っている．．だがそれ故に争いが絶えなかった、だがベルカとの調停が決まれば、我が国も安泰になるはずだった．．

「そうだ！！エリナにも伝えなければ！！カイエル、エリナは何処に居るか知っているか？」

尋ねて来るジオガデイス様に

「テラスに向かわれましたよ」

私がエリナ様の居場所を教えると、ジオガデイス様は部屋から飛び出して行った

「ふふ．．婚礼の日も近いかもしれませんね．．」

エリナ様はジオガデイス様の婚約者にして、巫女と呼ばれる存在で・
・我が国の象徴とも言える存在なのだ・私は婚礼の日が近いだろ
うと思いきや笑みを浮かべた・だがその日は訪れる事は無かった・

ベルカとの調停が決まった日の夜・

ズガンッ！！ズガンッ！！

私は凄まじい音に驚き飛び起きた、それと同時に

「カイエル様！！敵襲です！！早く戦の準備を！！」

兵士の言葉に頷き、騎士甲冑を身に纏いながら

「ジオガデイス様は！」

兵士にジオガデイス様の事を尋ねると

「ジオガデイス様は巫女の間に向かいました！！敵の目的はエリナ様です！！敵兵は皆巫女の間に向かっています！！」

私はその報告を聞きながら舌打ちをした・油断していた・調停を結んだからと言って敵が居なくなる訳ではないのだ・

「ちいつ！！私は巫女の間に向かう！！お前達は城門を死守しろ！！敵を決して通すな！！」

私は兵士に指示を出しながら巫女の間に向かった・

「こんな所まで・・・」

城の奥の方まで敵が進撃して来ていた・

「ウオオオツ!!」

敵兵が私に気付き向かって来る

「ええいつ!!邪魔だ!!」

振り下ろされた剣を避け、胴を穿ち一撃の下に絶命させる

「早く!早く巫女の間へ!!」

私は敵兵を切り倒しながら巫女の間に向かった・そこで私が見た物は

「うつつ・・エリナ・・エリナ・」

血の海に沈むエリナ様の亡骸と、ボロボロの姿のまま涙を流すジオガデイス様の姿だった・

「エリナが・・エリナが目覚まさないんだ・・傷は・・傷は治したのに・」

エリナ様の体の傷は治っている・・だが開かれた目には生気が無い・既に事切れているのだ・・いかに聖魔の力を持つジオガデイス様とは言え死者を蘇らす事は出来ない・

「ジオガデイス様・」

私は掛ける言葉が見つからずその場に立ち尽くすことしか出来なかった・・・その時だった・・・

「おいおい！！めそめそしゃがって！！何時まで死んだ女を抱きしめてるつもりだ！！」

血塗りの斧を持った男が嘲笑うように言う・・・私は

「貴様かあああつ！！」

背中の中から剣を取り出そうとしたがそれより早く

ドウツ！！

「えっ・・・！？」

ジオガデイス様の放った魔力弾が男を跡形も無く消し飛ばした・・・
ジオガデイス様はエリナ様の亡骸を抱きしめ立ち上がり

「うっ・・・うわあああああつ！！！！」

ジオガデイス様の叫びと共に凄まじい魔力が駆け巡った・・・私はその魔力波に弾き飛ばされ意識を失った・・・

「うっ・・・何という有様だ・・・」

私は目を開くと同時に飛び込んできた光景に眉を顰めた・・・あの美しい城は跡形も無く消しとび・・・辺りは瓦礫しかなかった・・・

「はっ！？ジオガデイス様は・・・」

私はジオガデイス様の事を思い出し、巫女の間に向かった・

「・・・エリナ・・・すまない・・・俺はお前を護る事が出来なかった・
」

ジオガデイス様はエリナ様の亡骸の前にしゃがみ込み涙を流していた・

「ジオガデイス様・・・」

私はジオガデイス様の隣に立ち声を掛けると

「カイエル・・・良かった・・・お前は生きていたんだな・・・生き残っているのは私とお前だけのようだ・・・」

力なく笑みを浮かべるジオガデイス様に

「申し訳ありません・・・私にもっと力があれば・・・」

項垂れながら言うと

「良いよ・・・お前は良くやったよ・・・」

ジオガデイス様は涙を拭いながら立ち上がり

「私・・・いや・・・俺がやるべき事は皆の敵討ちだ・・・」

ジオガデイス様は懷から書を取り出す・・・それは・・・

「禁忌の書！．．それをどうするつもりですか！！．．それを使えば貴方は人ではなくなるのですよ！！」

禁忌の書．．それは我が国に伝わる、呪術の書で．．人の体を失う代わりに人知を超えた力を得る禁忌が記された書物だ

「俺は人を止める．．俺は．．俺から全てを奪った者全てを殺す！！」

そういつて書を開こうとするジオガデイス様の腕を掴む

「止めるな！カィエル．．俺は．．俺は許せないんだ！！俺から全てを奪った者達が！！」

私を睨むジオガデイス様に

「止めはしません．．ですが．．私にもその書を見せてください」

ジオガデイス様は驚いた顔をし

「駄目だ！お前は人として生きるんだ！！俺と同じ化け物になる必要は．．」

駄目だと言うジオガデイス様の前に膝を付き

「私は何時如何なる時も貴方と共にある事を誓いました．．貴方が人を止めると言うなら私も人を止めます．．」

ジオガデイス様の目を見据え言つと

「判った・・・一緒に行こう・・・皆の敵を取る為に・・・」

私達は狂気の書を開いた、そして次の瞬間

キキツ・・・

不気味な黒い影が私達を包み込んだ・・・その日から人では無くなつた・・・そして私達はベルカに戦争を挑み敗れた・・・それから気の遠くなる月日が経った今・・・今度こそ私達は全てを滅ぼし取り戻すのだ・・・

「あの時を・・・皆で笑いあつた・・・あの日を取り戻すのだ・・・」

私達の目的・・・何十万の魔道師の命を対価に世界を作り治す禁呪であの時を取り戻すこと・・・

「守護者も・・・魔道師も全てを殺し尽くしてやる・・・全てはジオガデイス様の為に・・・」

仮面を被り直し剣を鞘に収め、私は空を舞う・・・ジオガデイス様の悲しみを癒す為に・・・

人気投票記念番外編 セレス編

番外編 風邪を引いた融合騎

「ごほっ！！ごほっ！！・・・情けない・・・私とした事が風邪を引くとは・・・」

私はベッドに横になりながら呟いた・・・体はだるく起き上がる気にもならず、ずっと布団に包まっている

「・・・うー・・・頭痛い・・・」

そもそもプログラムである、私が何故風邪を？と思うが私はオリジンの融合騎に加え、グロウアビリティの二つにより限りなく人間に近い・・・その為風邪や筋肉痛と言った症状が起き易いのだ・・・

「王に仕える騎士が調子を崩すとは情けない・・・」

私は頭痛に顔を顰めながら、私は王に調子が悪いと言う連絡をしてから眠りに落ちた・・・

トントン・・・

私はキッチンの方から聞こえる音に気付き目を覚ました、一体誰が？と考えていると

「うん？起きたのか？」

王が土鍋を持ってやってくる、それに私は驚いた

「王!?!・何故ここに・あう・」

びつくりして起き上がろうとするが力が入らず布団に倒れ込むと

「ほら、風邪を引いてるんだから無理するな・」

土鍋を机の上に置いてから私に布団を掛けてくれる王に

「どうしてここに?・私は調子が悪いと言って置いた筈ですが?」

布団を目の下まで引き上げながら言つと

「調子が悪いと言つていたからな、看病しに来た・どの道やることも無いしな・」

からからと笑いながら王は、小さな茶碗に鍋の中身を取る・どうやら中身はお粥のようだった・

「ふーふー・ほら口を開ける」

スプーンを私にむける王に

「だ・大丈夫です!!私は一人で大丈夫です!!」

一人で大丈夫だと言うと王は少し怒ったような顔になり

「命令だ、大人しく口を開け・」

卑怯にも命令だと言う・それを言われれば私は従うしかない、ゆ

つくくと口を開くとお粥が口に入れられる

「美味しいです・・・」

とても優しい味に美味しいと言うと、王は笑いながら

「そうか・・・それは良かった」

私は王によってお粥を食べさせて貰った・・・妙に恥かしかったが・・・少し嬉しかった

「ほら、薬を飲んで大人しくな・・・」

王に渡された薬を呑むと、眠くなり私は眠りに落ちた・・・私は昔の夢を見た・・・王に出会ったばかりの時の夢を・・・

「・・・なあ・・・そんな顔してて疲れないか？」

隻腕だった時の王が疲れないか？と尋ねて来る、私は

「問題ありません・・・お気になさらず・・・」

一瞬だけ目を合わせ言つと

「気にするなと言われてもな・・・そんな能面見たいな顔をしてたら嫌でも気になるぞ？」

その時の私は無表情で笑う事も無く、また怒る事もなかった・・・笑う事も怒る事も出来ないほど磨耗していたのだ

「気にしないで下さい・・・私は統制人格・・・貴方の手となり足となる者・・・それ以外に私に価値は無いのです・・・」

返事を返すとポコンッ！！王の拳が私の頭に振り下ろされる

「??？」

如何して殴られたか判らず首を傾げると王は

「良いか？今までの王が同だったが知らないが、私がお前の主になった以上そんな事は認めない・・・普通に笑って過ごせ・・・それに何時までも統制人格と名乗っているのがいけないんだ・・・待つてる今名前を考える・・・」

私に名をくれると言うこの小さな王に私は驚いた・・・今まで兵器としての私しか必要にされてなかったのに・・・この王は普通に過せと言う・・・それが私は嬉しかった・・・だから王が名前を考えてくれる間、私は王の隣に腰掛け待っていた

「そうだ・・・空の上から見守る者、天界の青き風・・・セレスというのはどうだ？」

名前が考え付いたのか笑いながら言う王に

「空の上から見守る者・・・天界の青き風・・・セレス・・・ありがとうございます・・・その名・・・とても大切にします・・・」

頭を下げ礼を言うと王は、頭をがりがりと掻きながら

「別にそんなに気にしなくても良いさ・・・それより私は疲れたから

もう寝るよ・・・」

ゆっくりと遺跡の奥に進んで行く王の後姿を見ながら

「セレス・・・私の名前はセレス・・・」

貰った名前を繰り返して呟いていた・・・呟くたびに心が満たされて行くのを感じた・・・それから私は徐々に変わっていった・・・機械のような存在から今のようない普通の女性に・・・私の世界を変えてくれたのは他ならぬ王だったのだ・・・

「ん・・・」

私が目を覚ますと

「こっくり・・・こっくり・・・」

腕を組んだまま椅子に腰掛け眠っている王の姿が視界に入る

「お眠りになられているのか・・・」

ゆっくりとベッドから体を起こす・・・体は軽く・・・頭痛もしない・・・

「王の看病のおかげか・・・」

呟きながら起き上がり・・・

「王に仕える筈の私が・・・王に看病して貰うとは情けない・・・」

パジャマから普通の服に着替え、王の寝顔を覗き込む

「すーすー」

穏やかな寝息を立てる王に顔に

「良く眠っておられるな・・・」

何時もの凜々しい顔ではなく・・・子供のような顔の王に笑みを零しながら、王の体を抱き上げる

「王のお部屋に連れて行かないとな・・・」

起こさぬようにゆっくりと王の部屋に連れて行き、王のベッドに横にさせ自分の部屋に戻る

「今日は王に迷惑を掛けてしまったな・・・」

仕える筈の私が王に迷惑を掛けてしまった事が心苦しかったが、嬉しかった

「王の優しさがとても嬉しい・・・」

私はそう呟いた・・・私は人ではない・・・だがそんな事は気にせず優しく接してくれる王の優しさがとても嬉しかった・・・

「私は私の全てを持って王に恩返しをします・・・かならず貴方に勝利を・・・」

来るべきジオガディスとの決戦・・・私がすべき事は王に勝利をもたらす事・・・心を閉ざした融合騎は決意を固めた・・・傷つき磨耗した

心を癒してくれた者に恩返しをする為に・

人気投票記念番外編 ユニゾン三姉妹編

番外編 融合騎達と龍也

呼び名について・・・

「ユナちゃんに前から聞きたかった事があるです!」

食堂でリインがユナに尋ねるとユナは

「何です?」

首を傾げるユナにリインは

「どうしてユナちゃんはお兄様を王様って呼ぶですか?普通に呼んだほうが良いと思うんです!」

どうやらリインはユナの龍也の呼び方が気に入らないようです

「普通にですか?・・・ではどう呼べば良いと思います?」

「そうですねーうーん・・・そうだ!!お兄ちゃんと言っのはどうですか?」

リインが提案した呼び名が気に入ったようでユナの龍也の呼び方がお兄ちゃんになったそうです・・・

じろじろ・・・

「「「にゃー・・・にゃー」」」

ピロピロ・・・

猫耳装備のユナ達を見た龍也は

「ジェイルーツ！！！！」

ドロドロッ！！

「何だ龍也？・・・ごふっ！！」

ごろごろ・・・強烈なドロップキックで蹴り飛ばしたジェイルに

「貴様！！リイン達に何をしたんだ！！」

ドロドロッ！！

「違う！！・・・今回は何もしてない！！げふっ！！」

「信じられるか！！この馬鹿者が！！」

お話されてるなかユナ達に近づくクイントさんは笑いながら

「あらあら、その猫耳そんなに気に入ったのね？」

犯人はクイントさんだったようです・・・今日の教訓・・・普段の行動

で判断されるジェイルさん・・・もう少し普通の行動をしましょう

甘い物は大好きです

「美味しいです」

「本当だよな、兄のお菓子はどれも美味しいよな!!」

「もぐ・・・もぐ・・・」

笑いながらお菓子を食べるユナ達と

「「「・・・もぐ・・・手・・・止められないね・・・ああ・・・体重計が怖い・・・」」」

どんよりとした空気を纏うはやて達を尻目に龍也が

「リン〜ブルーベリーのパイとイチゴのタルトが出来たぞ〜食べるか？」

両手一杯のお菓子を持つてくる龍也にリン達は

「食べます!!」

「食べるぜ!!」

「にこっ!!」

笑いながら食べると言うリイン達と

「「「・・・体重が・・・」」」

頂垂れるはやて達・お菓子作りに嵌っている龍也・まだまだお菓子パーティーは続くようです

「「「嫌あああ・・・」」」

はやて達は嫌とは言いつつも手が止まる事は無かった・

龍也の夢は・

「お兄様は管理局を辞めたらどうするですか？」

ふと尋ねるリインに龍也は

「そうだな・喫茶店でもやろうか?・ゆっくりスローライフと言うのも悪くないと思うぞ?」

笑いながら答える龍也にアギトが

「そうだなー兄ならお菓子作り得意だし・きっと繁盛するぜ!!」

龍也のスキルならきつと最高の喫茶店になると言うアギトに

「そうだったら・私も一緒ですか?」

一緒か？と尋ねるユナに龍也は

「勿論、来たいなら一緒に来れば良い、アギトもリインもな」

笑いながら答える龍也・・・それから数年後・・・3人の可愛い看板娘のいる喫茶・・・夜天の園と言う喫茶店がオープンしたとか・・・ミッドでも人気の喫茶店となり、大層繁盛したそうです・・・ユナたち目当ての男性客に、オーナーである龍也目当ての女性客に、純粋に龍也のお菓子が好きなお客さん達に・・・

「兄ちゃん、ショートケーキと紅茶頂戴」

六課の魔道師達が毎日の様に来たそうです・・・

うたたね龍也・・・

「こつくり・・・こつくり・・・」

木に背中を預け眠る龍也の姿を見たリイン達は

「お兄様疲れてるんですね」

「そうだな・・・兄頑張ってるもんな」

「よいしょ・・・よいしょ・・・」

居なかったユナが布団を持って来て

「折角ですから皆でお昼ねしましょう?」

笑いながら言うユナに頷き、龍也に寄り添うように眠るリン達・六課のある意味名物である、とてもほのぼのとした光景がそこにはあった・・

龍也の誕生日プレゼントは?

「お兄様の誕生日どうしましょうか?」

「そうだな、兄の好きな物って何だろう?」

どうやらアギト達は龍也の誕生日プレゼントを考えてる様ですが何を送れば良いか判らない見たいです

「うーん・・そうだ!! 手作りのアクセサリーとかはどうですか?」

考え込んでいたユナが思いつた様で言う

「うーん・・でも唯の手作りって言うのもな・・」

と呟くアギトにユナは

「ですから普通ではなく、私達の魔力で加工したお守りを作りましょう!! お兄ちゃんを護ってくれるようにって思いを込めて!!」

今年の龍也の誕生日プレゼントは相当凄い物になりそうです・

ちくちく・

「兄ちゃん・なにやってんの？」

縫い物をしている龍也にはやてがなにをしてるの？と尋ねると龍也は

「パジャマを縫っている・デザインはこれだ・」

差し出した紙には、フード付きのパジャマが三着描かれていた

「それは判るけど・誰の作ってるんや？」

笑いながら尋ねるはやてに龍也は

「リインとアギトとユナ・リインは犬、アギトは猫、ユナは狐だ・」

パジャマのフードには可愛らしくデフォルメされた動物の顔になっている

「うーん・良いねえ・きつと皆喜ぶで」

笑いながら言うはやてに頷き龍也は縫い物を続けた・その日の夜

「「「ありがとう!」」」

パジャマを貰って笑うアギト達の姿があったとか・

何者？・

スタスタ・

「お兄様何してるですか？」

天井を歩く龍也に話しかけるリインに龍也は

「何故かはやて達に追いかけられているのでな・・・こうしてこうそりと移動している・・・」

スタスタと天井を歩いて行く龍也の姿に

「お兄様って本当に人間でしょうか？」

次の日・・・

「兄居ないな、何処だろう？」

どうやらアギトは龍也を探してるようですが姿が見えないのでそう
呟くと

「呼んだか？」

壁が落ちる・・・いや正確には壁の絵が書かれた布が落ち、龍也が姿

を見せる

「兄・・・なにしてるんだ？」

突然の登場に驚くアギトに龍也は

「クイントさんが来てるからな・・・隠れてるんだ・・・」

そう呟くと龍也はまた姿を消した・・・その光景にアギトは

「兄って本当何者だろう？」

龍也の所持する謎スキルの謎が深まった一日だった・・・

一日の終わりは・・・

「ふふん・・・気持ち良いです」

龍也に髪を梳いて貰いご機嫌なリン達・・・3人ともパジャマ装備である

「今日は一緒に寝る日ですからね・・・」

ユナは枕を抱き抱えている・・・ユナは枕が替わると寝れないのだ・・・

「ふあああ・・・むにゅむにゅ・・・早く寝ようぜ・・・」

横になる龍也を中心に横になる、リン達・・・3人は龍也が大好き

でそれは変わることが無い事である・・

「
　　〃　〃　〃　〃　〃
」

龍也の子守唄が響く中、3人は眠りに落ちた・・月に一回の龍也と一緒に寝る日が3人の一番楽しみにしている日である

総合評価1000突破記念番外編 酔い龍也リターンズ

総合評価1000突破記念番外編 酔い龍也リターンズ

「んしょ！んしょ！！出来たです」

食堂で何かを作っている妖精コンビ・リンとアギトは嬉しそうに出来た物を持ち上げながら

「これで兄も元気になるよな！！最近兄は疲れてそうだったからな！！」

2人は最近仕事で疲れている龍也の事が心配になり、疲れが取れる物を作っていた様である・リンは笑いながら

「間違いないです！！これでお兄様も元気になりますよさっ！！アギトちゃん早くお兄様に持って行くです！！」

「おう！！」

2人はエプロンを着けたまま食堂を後にした・2人が去った食堂の厨房には一冊の本・そこには

「美味しいチョコレートの作り方」ウイスキーボンボン編」

と書かれた雑誌と空っぽになったウイスキーの瓶が大量に落ちていた・

2人が良かれと思って作ったこのチョコレートが大騒動の引き金に

なるとは、この時誰も予想していなかった・

「ふう・・疲れた・」

私は椅子に深く腰掛けそう呟いた・・大将に昇格した後書類がこれでもか！と言わんばかりに増えた・・まあそれは良い・・地位が上がれば忙しくなるのは当然だ・・だがそれより私が参っている物それは・

「カリム・・しつこすぎるだろう・」

カリム・・いや聖王教会から来ている書類だ、ジオガデイスとの決戦の際に聖王の魔力を扱えるようになった・・だがそれが原因で聖王教会がうるさい、やれ管理局を辞めろだの、聖王教会に正式に所属しろ等、来る度に断っているがいい加減鬱陶しくなってきた・

「はあ・・こう疲れが取れるものは無いかな？」

私がそう呟くと同時に

コンコン！

扉がノックされ

「お兄様！今良いですか？」

「兄！時間あるか？」

扉の外からリインとアギトの声が聞こえる

「何のようだろうな・・・っと・・・2人にだらしない格好は見せられないな・・・」

服をちゃんと着直してから

「入ってきてても良いぞ」

と声を掛けると、エプロンを着けたリインとアギトが笑いながら入ってくる

「お兄様！！最近疲れてそうでしたから、アギトちゃんと良い物を作って来たです！！」

リインは箱に入ったチョコレートを差し出しながら言う、私はそれを受け取りながら

「態々私の為に作ってくれたのか？」

2人に尋ねると、2人笑いながら頷いた、

「そうか・・・ありがとう、食べさせて貰うとするよ」

甘いものは苦手だが、態々2人が私の為に作ってくれた物だ・・・苦手とか以前にただただ嬉しい・・・そう思いながらチョコレートを口に運ぶと同時に私は意識を失った・・・

「・・・どうしたんでしょう？何か間違えましたか？」

チョコを食べるなり意識を失った、お兄様を見ながら隣のアギトちゃんに尋ねると

「判らない・・・砂糖と塩間違えたか？」

アギトちゃんと、あーでもない、こーでもないと話していると

バツ！！

お兄様が突然立ち上がり

「にやはははは！！！」

普段なら消して出さない笑い方で笑い始めたです・・・その姿に

「・・・アギトちゃん・・・リン達もしかしてお酒チョコに入れちゃったですか？」

間違いなく酔っている・・・そう思い隣のアギトちゃんに尋ねると

「あーもしかしてウイスキーって酒だったのか？・・・私は調味料かと思ってたんだけど・・・」

リンもです・・・リンもそう思っていましたでもお兄様の様子を見ると、それは調味料ではなくお酒だったようです・・・どうしようかと考えていると

「あー！！リンとアギトだー！！チョコレート美味しかったよー」

お兄様が一瞬で私とアギトちゃんを抱き抱え、上機嫌で言います・
でもそれで判りました・・お兄様は酔っている

「んふふゝお兄さんはもの凄く嬉しいですよ」

と笑いリインの頬に頬擦りします・・恥かしくて逃げようとする
が・・無理ですお兄様の力の方が上で脱出は無理でした・・

「んっふふゝ2人とも良い子良い子」

と笑うお兄様はしばらくそのまま上機嫌で笑っていましたが、突然
立ち止まり

「にやはははゝ高速回転スタンバイ」

あっ・・もう終わりですか・・リインが何をされるか理解した瞬間
お兄様は高速回転し、私とアギトちゃんは意識を失ったです・・

「あれ？あれ龍也さんだ」

私は目の前をフラフラと歩く龍也さんを見つけた・・

ゴンー！！

良い感じに壁にぶつかる龍也さんに何かあったのかと思い近づく

「んゝにやはははは・・・スバルゝみーつけたー！！」

龍也さんはそう言つと行き成り私を抱きしめて来た・・・そして気付く・・・龍也さんが酔っている・・・

「スバル」お兄さんは今から食堂に行くです」だから一緒に行きましよう」

龍也さんは私を抱き抱えたまま移動を始めた・・・龍也さんの背が高い為私の足は地に付かず宙ぶらりんであり・・・私は首根っこを掴まれる猫の気持ちを理解していた・・・

「龍也さん・・・放してくれますか？」

好きな人に抱きしめられるのは嬉しい・・・だがそれ以上に恥かしく放す様に言つと

「やーだ！！にやはははは！スバル」は軽いな」ちゃんとご飯食べてるか」

話が噛み合わない・・・酔っ払い状態の龍也さんと会話しようと言うのがそもその間違いだ・・・そう思っている内に食堂に着いてしまった・・・

（ああ・・・多分皆いる・・・私今日が命日かな・・・）

こんな状態・・・龍也さんに抱きしめられた状態で、部隊長達の前に行く＝死である・・・

（ああ・・・短い人生だったな・・・）

と思っている龍也さんは

「さっご飯を食べましょう」

と笑い食堂に入って行った・

「あ・た・つ・やさん？・・・どうしてスバルを抱きしめてるんですか？私に教えてください・・・」

ヒイイイ・・・行き成りなのはさん！！死ぬ！！本当に死ぬよ
と思っていると龍也さんは

「ん？スバルを抱きしめてる理由〜ん〜と見つけたからだよねのは〜」

にやはははと笑う龍也さんを見て、食堂にいたメンバーは

「・・・どう見る？龍也酔ってる？」

「酔ってるね・・・大体龍也さんにはやはなんて笑わない・・・それは私の昔の笑い方だもん・・・」

ひそひそ話すなのはさんとフェイトさんに

「酔ってる・・・お父さんが酔ってる・・・」

カタカタと震え始めたキャロを連れて、エリオとルーテシアが食堂から姿を消し

「兄貴が酔ってる・・・チャンス・・・？」

「でもスバルを抱き抱えてるのはマイナスやな・・・」

「兄上の酒乱癖が・・・いやそもそもなんで兄上は酔ってるんだ？」

ぶつぶつと話している部隊長達・・・ああ・・・チンクさん達が居なくて良かった・・・もしいたら私セツテに殺されてたと思っっていると

ガチャツ！！ゴリ・・・

頭に妙な感覚を感じ其方を見ると

「抜け駆けね・・・良いわ・・・私が引導を渡してあげる・・・」

黒い目のティアが居た・・・殺される！？誰でもないパートナーに殺されると思っっていると

「んー？あゝティアナだゝティアナも捕まえたゝ」

ガバツ！！

私を抱き抱えたまま器用にティアも抱きしめる龍也さん・・・助かった・・・これで私殺されないと一安心し、ティアを見ると

「ふにゃゝ」

とろんとした目で笑っていた・・・でもどうすれば解放されるのだろうと考えていると部隊長が

「兄ちゃん、スバルとティアナ、放さんといかんで？」

と笑いながら話しかけるが・・・その目からは光が消えていた・・・相当イライラしてるのが判る・・・私が部隊長の様子を観察していると龍也さんは

「んゝやだゝスバルとティアナ良い匂いがするからゝ」

ギユウウ!!

更に抱きしめる力が強まる・・・だがそれ以前に

（今匂いって言った？・・・恥かしい!!早く放してゝ）

物凄く恥かしくなつて拘束から逃れようとじたばたしていると

「ほら、兄ちゃんスバルも放して欲しいって言ってるで？だから放したほうが良いで？」

諭すように部隊長が言つと

「んー判つた・・・嫌なら放すよゝ」

そう言つと龍也さんが私とティアを降ろし

「にやはははゝ」

再びにやははと笑い始めた・・・一体何がそんなに楽しいのだろう？と思つていと

「兄ちゃん・・・お酒飲んだ？」

と部隊長が尋ねると

「んゝお酒ゝお兄さんはお酒なんか飲んでませんよゝお兄さんはチョコ食べましたゝ」

と笑い懷からチョコを取り出し口に運ぶと

「ひっきゅー！！ゝにやははゝ良い気分ですゝ」

更に酔ったように更に笑い始めた龍也さんに確信したゝこのチョコが原因だとゝ

「兄ちゃんゝ私にもそれ頂戴」

部隊長もチョコが原因だと判断したのかチョコを頂戴と言うと

「んゝはやても欲しいのゝ良いよゝ上げるゝパクツゝんゝ」

チョコを加え部隊長を見る龍也さんゝって！！酔いすぎでしょう！！と思ひ部隊長を見ると

「ゝゝこれはあれやゝチョコを食べるだけやキスやないゝパクツ」

部隊長がチョコを銜えると龍也さんはチョコを銜えるの止め

「にやははゝ美味しいだろゝリンとアギトが作ってくれたんだよゝ」

あの2人の姿が見えないと思ってたけど・・・多分もう犠牲者になっているのだろうと私は理解した

「もぐ・・・もぐ・・・何やこれ！！むちゃくちゃアルコールの味がするでー！！」

部隊長がそのチョコを食べながら言う・・・その顔はうつすらと赤みを帯びている・・・恐らくチョコのアルコールが原因だろうと思っ
ていると

「んゝにやはは・・・おっと・・・ビリッ！！・・・へっ！？」

笑っていた龍也さんがバランスを崩し倒れると同時に布が裂ける音が聞こえる・・・恐る恐る聞こえた方を見ると

「・・・かああああ・・・」

ティアの上着の一部が破け・・・下着が僅かだが見えてしまっている

「ひっく・・・ごめん・・・足滑った・・・ひっきゅ・・・」

しゃっくりをしながら龍也さんはしゃがみ込みティアの右頬に

チュッ！

「ボン！！」

ティアの顔がトマトの様に紅くなる

「本当ごめんなゝ業とじゃないんだよ」

とティアの頬にキスした、龍也さんは笑いながら立ち上がり破けた制服を広い

「ひつく！・・・本当・・・ごめんな」

それをティアに手渡す、ティアはそれを受け取りキスされた右頬を押さえ

「・・・」

無言で食堂から歩き去った・・・だが怒ってる訳ではなくどこか夢を見ているような表情だった・・・私も食欲が無くなりティアの後を追う様に食堂を後にした・・・

「・・・ティアナ・・・嬉しそうだったね・・・」

ぼそりとフェイトちゃんが呟く・・・確かにティアナの顔は嬉しそうだった・・・そんな事を思いながら龍也さんを見ると

「ひつきゅー！ひつきゅー！！にやははははー！！」

と笑う龍也の近くには

「「ポーツ・・・」」

夢見心地と言う感じでシグナムとヴィータが頬を押さえていた・・・さっき近付いた瞬間抱きしめられキスの嵐を受けていた・・・多分そ

れが原因だろう・・・2人とも幸せそうにその場にへたり込んでいた・
・正直前に龍也さんが酔った時より酷い有様だと思っっている

「なあ・・・兄ちゃんは私が好きか？」

はやてちゃんが龍也さんの前に座り尋ねると

「んん？はやてんんお兄さんははやてが大好きですよひっく！
！おいでハグしてあげる」

と両手を広げる龍也さんにはやてちゃんは

「んん私はハグよりキスの方が・・・チュ！・・・」

キスの方がと言った瞬間、龍也さんがはやてちゃんの頬にキスをす
る・・・それにはやてちゃんは何かを気付いたようだ

「・・・兄ちゃん・・・ギュッ！っとして欲しいなぐギュウウ！！・・・
んんちよつと痛いけど幸せや」

はやてちゃんをしつかりと抱きしめる龍也さんに私も気付いた・・・

（まさか・・・言う事を実行してるの？）

酔いすぎて言う事を実行している、と私も判断したフェイトちゃん
も同様の様だ、そう思い近付く

「んにやん幸せ」

夢見心地と言う感じで龍也さんの胸に顔を埋めるはやてちゃんに

「ねえ・・・その・・・私達もその何か頼みたいだけだな」

と言うとはやてちゃんは

「んゝあんまり過激なのは駄目やで？今の兄ちゃん頼めばなんでもしそつやからな？」

と私とフェイトちゃんに釘を刺してから、はやてちゃんは龍也さんから離れた

「んゝ？ひつく！なのはとフェイトゝどうした」

虚ろな目で笑う龍也さんの前にしやがみ

「あの私もギュッとして欲しいな」

ガバツ！！ギョウウウ！！

言い掛けた瞬間龍也さんの腕が伸び私を抱きしめる

「んゝ？これで良いの？」

子供見たいに笑う龍也さんの胸に顔を埋める・・・さっき見たが凄く羨ましかったので顔を埋めてみる

（凄い幸せ・・・このままでも良いよ）

すっぱり包まれているこの感覚はとても心地良い・・・ずっとこのままでも良いと思ってしまう・・・そのまま10分程そのままで居ると

「ほい！もう終わりや！兄ちゃんから離れる」

はやてちゃんに離れる様に言われ名残惜しいが離れる、すると直ぐにフェイトちゃんがしゃがみ込み

「龍也、私はキスして欲しいな」チュウ！！」

という抱きしめられた上に頬にキスして貰っている・・・その光景を見て

（私もキスして貰った方が良かったかな？）

と感じていた、フェイトちゃんも10分程で離れるように言われ、渋々離れると

「んゝむにゃむにゃゝ」

龍也さんは完全に酔いが回ったのか眠ってしまった

「なんや・・・もう寝てもうたか・・・まだ頼みたい事あったのにな」

残念そうに言いながらはやてちゃんが龍也の頬を突く

「本当こうして見ると子供見たいやな・・・」

穏やかに寝息を立てる龍也さんは子供の様で見ているだけで癒される

「さてと・・・何時までもこんな所で寝かせられんな・・・ほら2人も肩貸して兄ちゃんを部屋まで連れて行くから」

頷き3人で龍也を抱え部屋まで連れて行った・・次の日

「頭が痛い・・私は昨日何をしてたんだ？」

頭を抱える龍也さんの姿を見ると・・ティアナが破けた制服を龍也さんの前に置き

「龍也さん・・昨日貴方が破いたこの制服治してくれませんか？」

と言うと龍也さんは顔を青褪めさせ

「破いた?・・私が・・?・・私は昨日何をしたんだ教えてくれ・・何も覚えていないんだ」

不味い・・教えない様になっていたのに・・これで龍也さんは知ってしまう昨日何があったのかを・・慌てて止めようとするがそれより早く

「昨日、龍也さんは酔って、私の服破いたんです・・それ以外にも色々してましたよ？」

若干顔を赤めながらティアナが言う・・多分昨日のキスの事を思い出しているのだろう・・だがそれと半比例して龍也さんは顔を青褪めさせて立ち上がり、ゆつくりと柱の方に歩いて行く・・まさか・・フェイトちゃん達も気付いたのか立ち上がり止めようとするがそれより早く

「私は!!!何という事を!!!!死ね!!!!死んでしまえ!!!」

ガン！！ガン！！ガン！！

頭を柱に打ちつけ始めた龍也さんを止めるのにまた1騒動会った・
これは賑やかな機動六課の日常の1ページ

酔い龍也リターンズ 終り

総合評価1000突破記念番外編　ちびちび龍也

番外編　ちびちび龍也

「うー酷い目に会ったぜ」

頭を押さえながら私は呟いた、兄の疲れを取ろうとチョコを作ったが・・不覚にも酒を入れてしまい、酔っ払った兄に振り回され私とリインは意識を失った・・今は医務室でシャルと話をしている

「うーん・・お兄さんの疲れを取ろうってアイデアは良かったんだけどね」お酒が不味かったわね・・お兄さんはお酒に弱いから」

笑いながら言うシャルにリインが

「でもお兄様が疲れてるのは変わってないです、だから何とか疲れの取れる物を作ってあげたいです」

うん、確かにリインの言うとおりだと思い頷くと

「そうねえ・・そうだ！！お兄さんに夕ご飯を作って上げましょう！！疲れの取れるスタミナ料理を」

料理・・そうだそれで行こう！！私達は食堂に行き料理を作り始めた・・だがそれが切っ掛けでまた大事件が起きる事になる・・

「今日龍也さん姿見せなかったね、どうしたのかな？」

演習場から戻りながら隣のティアに言うと

「疲れてたんじゃないかしら？最近龍也さん疲れてたみたいだから・」

2人でそんな話をしながらシャワールームに向かっていると

「ふふふ」

楽しそうな鼻歌と同時に5歳くらいの銀髪の男の子が歩いて来て、私達と擦れ違う

「・・・ねえ・・・今の男の子誰かに似てなかった？」

ティアに尋ねると

「そうよねえ・・・誰かに似てる・・・でも誰かしら？」

考えても判らないのでシャワー室に向かった・・・

「あゝさっぱりしたね」

タオルで頭を拭きながら言うと、視界の隅にちょこちょこ動く小柄な影に気付く

「あれ・・・さっきの男の子かな？」

その方を指差しながらティアに尋ねると

「多分ね・・・誰かの子供かしらね？」

と2人で話していると

「う？お姉ちゃん誰？」

誰かが話しかけたようで話し声が聞こえる、誰かと思い歩いていくと

「・・・そんな・・・まさか・・・この子は・・・」

セツテが何かを呟き次の瞬間・・・

ガバ！！

確りと抱きしめその子供を抱き上げるセツテを見て、ティアが

「あの病み娘・・・龍也さんが振り向いてくれないからって遂に犯罪に走った見たいね・・・」

かなりきつい事を言うティアを横目に見ながら

「ねえセツテ、その子セツテの知り合い？」

子供を抱きしめるセツテに尋ねると

「判らないのですか？この子供が誰か？」

逆に首を傾げるセツテに

「うん・・・判らない・・・その子誰なの？」

子供を指差すと

「はぁ・・・良いですか良くこの子を見てください」

その子供を私とティアナの前に持つてくる

「うっ？」

小首を傾げる男の子はとても可愛らしい・・・それに珍しい蒼銀の瞳と目に切り傷がある・・・？蒼銀？・・・目に切り傷？・・・あれ？ジーツとその子供の顔を見て

「「ああッ！！！！！！」」

気付いた・・・いや気付いてしまった・・・この子は

「「龍也さん！？」」

子供になっているがそれは間違いなく龍也さんだった・・・龍也さんと言つと

「お姉ちゃんも何で、僕の名前知ってるの？」

首を傾げる子供・・・もとい龍也さんを見る・・・もうとんでもなく可愛いずっと抱きしめていたい・・・そんな衝動が襲ってくる・・・

「ねえ・・・セツテ・・・龍也さん貸して」

抱きしめたくて言つとセツテは

「嫌です、そもそも言われないと気付かなかった貴方達に龍也様を抱きしめる資格はありません」

そう言つとセツテは速足で歩き出してしまった・私とティアは

「「ちょっと待って！（待ちなさい！）」」

2人でセツテの後を追つた・

ズーン・

食堂で頭を抱える、部隊長を除く隊長陣とチンク達・理由は

「あううつ・・なんで判らなかつたの？」

子供化した龍也に気付く事が出来ず、セツテに龍也さんを渡して貰えないのが理由だ・その子供化した龍也さんは

「美味しい」

お子様ランチ（セツテがコックを脅し無理やり作らせた一品）を口の周りを汚しながら笑顔で食べていた

「あううつ・・可愛いよ」セツテ・お願いだから・駄目です！貴女に龍也様を抱きしめる資格はありません！！・うつ・」

何度かトライしているがセツテは消して龍也さんを放そうとしないのだ・今も膝の上に乗せて放そうとしないのだ

「でも何で龍也さんって判ったの？はつきり言って全然判んないよ？」

良く見れば判るがはつきり言って見て直ぐは判らない・・・どうして判ったのかと尋ねると

「私と貴女達は違うんですよ」

勝ち誇った笑みを浮かべるセツテに

「くううう・・・何であの時気付かなかったのよ・・・私の馬鹿・・・」

悔しそうに言うティアナを見て

「ふん・・・所詮はその程度って事ですよ・・・姿形が変わったくらいで判らないとはなんと愚かなんでしょうね？」

「「がふっ！！」「」

ティアだけでは無くなのはさん達も血を吐く・・・そんなやり取りを繰り返していると

「皆々おはようさん々兄ちゃん見なかった？」

笑いながら龍也さんを見なかったかと尋ねる部隊長を見て

「ふふふ・・・狸は気付きますかね？」

セツテは黒い笑みを浮かべながら

「はやて、この子は誰か判りますか？」

小さい龍也さんを抱き抱え部隊長に言うつと

ヒュン！！

「ば・・・馬鹿な・・・」

一瞬でセツテの腕から龍也さんを奪い返し

「兄ちゃんやろ？何でそんな簡単な事聞くん？・・・んゝ兄ちゃん可愛いなあゝ」

小さい龍也さんに頬擦りしながらセツテを見る部隊長

「んゝ？お姉ちゃん誰？」

首を傾げる小さい・・・言い難いや・・・チビ龍也さんに

「私はな、はやて言うんや、宜しくな」

と笑い部隊長を見てチビ龍也さんは

「うん！！」

満面の笑みで返事を返した・・・

「んー可愛いな〜でもなんで兄ちゃん小さくなったんや？」

膝の上に兄ちゃんを乗せながら皆を見る・・セツテを除き机に伏せて血を吐いている・・一体何が・・そんな事を思いながら机を見回すと

コソコソ・・

見つからない様に動くシャマルを見つけて

「シャマル〜まさか兄ちゃんに何かやったのシャマルか〜今なら怒らんで教えてなあ」

シャマルを見ながら言うと

「はひい！今説明します」

おどおどと歩いてきたシャマルはゆつくりと説明を始めた・・昨日スタミナ回復料理をオリジナルで作り兄ちゃんに食べさせたそうだ

「成る程ねえ・・シャマルのアレンジ料理の効果か・・んーグッジョブこれは良い仕事やで」

兄ちゃんの頭を撫でながら親指を立てると

「怒らないですか？お兄さんをそんなにしつちやたのに？」

と言うシャマルに

「何で怒るんよ？こんな可愛い兄ちゃんそんなに見えへんで？」

膝の上の兄ちゃんを見ると

「ん」

すりすりと頭を擦り付けて来る・・・可愛すぎる・・・もっこれは凶器の域や・・・と思い頭を撫でていると

「八神兄様ここにクッキーがありますよ」

クッキーを兄ちゃんに見せ笑うクアットロさん・・・馬鹿やな～兄ちゃんは甘い・・・

ピョン！

私の膝の上から飛び降りクアットロさんの前に行き

「ちょうだい！」

笑いながら両手を差し出す兄ちゃんの姿に

（しまった・・・兄ちゃん小さくなつとるから甘いのが好きなんや）

そう思いクアットロさんを見ると

「ほらほらもう少しで取れますよ」

「えいえい！！」

兄ちゃんの手が届かない所にクッキーを持ち上げヒラヒラさせてい

る、兄ちゃんはそれを取ろうとジャンプしてるがギリギリ届かない

「うゝクアの馬鹿ーッ！！！！もう僕クア嫌い！！！！」

何度やつても取れないので遂には涙目で嫌いと大声で言つと兄ちゃんは、私の所に来て

「はやてゝお菓子ちょうだい・・・」

涙目でお菓子が欲しいと言つ兄ちゃんの姿を見て

「・・・ちよつと待つてて！！！！」

私含め皆が食堂を後にした・・・それから数分後

「・・・ほら！お菓子だよ！！！！」

皆が思い思いのお菓子を持ってきて兄ちゃんに差し出す

「うゝどれにしようかなゝ」

兄ちゃんは皆が差し出すお菓子を見ながら悩んでいる、その姿も可愛らしくもう今にでも抱きしめたいくらいだ・・・だがここは待つ時だ・・・だからこうしてお菓子を差し出し待っている

「決めたゝ」

ゆつくりとチンクさんの所に歩いて行く・・・チンクさんが差し出しているのはチョコバーだ・・・しまったやっぱチョコ系で攻めるべきやったかと思っていると

「龍也！！お菓子持って来たよ！！」

その大声に驚き振り返り、更に驚いた

「・・・なんて・・・量なの・・・」

ティアナが驚きながら言う、だがそれも無理は無い何故なら、小さな山くらい大量のお菓子の箱があるのだ、それを見て兄ちゃんは

「お菓子〜」

チンクさんの前でUターンしフェイトちゃんの所に向かって歩き、フェイトちゃんの前で

「フェイ〜お菓子ちょうだい！」

と笑い両手を差し出す

「うん！！いっぱいあるから好きなの食べて良いよ〜」

そう言うとフェイトちゃんは兄ちゃんを抱き抱えた・・・お菓子勝負はフェイトちゃんの圧勝だった・・・

「んーーーー美味しいーーーー」

チョコを食べて笑ってる龍也を膝の上に乗せる・・・ああ・・・なんて

いう幸せ・・・滅多に感じることの無い幸せを噛み締めていると

「フェイトちゃん・・・そのお菓子どうしたの？まさか買ってきたの？」

なのはが尋ねて来るので

「これ？前にお中元とかで貰ったやつだよ？私とクロノとリンディ義母さんに来やつ食べきれないからしまっておいたの！」

クロノには子供が居るし、リンディ義母さんは甘い物好きだから大量に来るのだ

「ああ・・・そんな手が合ったのか・・・」

崩れ落ちるはやてを横目に龍也にお菓子を渡すと

「んゝフェイゝ大好きゝ」

大好き・・・大好き・・・大好き・・・

「私も龍也が大好きだよゝ」

全力で龍也を抱きしめる・・・もう可愛いすぎるよゝずっとこのままでも良いよゝそう思い抱きしめていると

「んゝ・・・はい！」

龍也が食べかけのチョコを私に差し出す

「えっ・・・どうしたの龍也？」

突然の行動に驚くと龍也は

「フエイもチョコ食べるの」

笑いチョコを差し出してくる

「うん・・・ありがとう食べるよ・・・」

差し出されたチョコを食べる・・・

（これって間接キスだね・・・小さい龍也だけど嬉しい）

間接キスに感動している隙に龍也が私の膝の上から降り

「はい！皆もチョコ食べるの」

皆にチョコを配り始める龍也だったが・・・

「あう！・・・」

置いてあったグリフィスの本に引っ掛かり転んでしまう・・・グリフィスの本に引っ掛かってだ・・・龍也の大きなくりくりとした目に涙が溜まって行き・・・

「うつ・・・ひつく・・・痛い・・・痛いよ・・・えぐ・・・えぐ・・・うええええええんんん！！！！！！痛いよ！！！！」

大声で龍也が泣き出すと同時に

「フェイトちゃん、兄ちゃんは任せる・・・私達はちょっとやる事が出来たから・・・」

バインドでぐるぐる巻きになったグリフィスを持ちながら

「さて・・・私はいまからお話しするけど・・・参加希望者は演習場な・・・」

ズルズルと引きずっていくはやての後を追ってなのは達も姿を消した

「痛いよー！！！！」

大泣きする龍也を抱き抱えた物のどうすれば判らず困っている

「フェイトは駄目駄目っすねー小さい子の世話が苦手見たいっすねーここは私に任せるっすよ」

自身ありげに笑うウェンディに龍也を手渡すと

「よしよし・・・痛かったすねー痛いの痛いの飛んでけー」

あやしなから龍也を抱き抱え暫くすると・・・

「ひっく・・・痛かったの・・・ぐす・・・」

徐々に泣き止んでいく龍也に

「もう大丈夫すっよー痛くないっすよねー」

笑いながら龍也の頭を撫で笑うウエンディに

「ひつく・・・ぐす・・・うん・・・もう大丈夫だよ・・・ふあああ・・・」

遂には完全に泣き止むと、欠伸をする龍也にウエンディは

「泣いたら疲れたっすか？そんならお部屋に連れてってあげるっすよ」

笑いながら龍也の手を握ったウエンディを見て

（凄いな・・・完全に泣き止ませちゃったよ・・・）

そのあやしの技に驚いていると

「何してるっすか？フェイトも一緒に来るッすよ」

笑いながら言うウエンディと共に龍也の部屋に向かい、龍也を寝かせてから部屋を後にし・・・演習場に向かいながら

「ウエンディは凄いな～あんなに簡単に泣きやますなんて」

凄いと褒めているとウエンディは頭を掻きながら

「いや・・・あれは見よう見真似っすよ・・・昔龍也兄がルーテシアをあやしてるのを見て覚えてたんすっよ」

恥かしそうに笑うウエンディに

「それでも凄いよ、私はおたおたしてるだけだったからね」

笑いながら演習場の扉を開くとそこには

「……」

ぼこぼこにされ逆さに吊られているグリフィスの姿があった

「……これ以上やったら死にそうっすね・私もお話したかったすけど・次の機会にするっすか・」

ウエンディに頷き私は自分の部屋に戻って行った・

次の日……

「なあ・フエイト・昨日私は何してたんだ？・なんにも覚えてないんだ・はやて達に聞いても教えてくれないんだ」

元の姿に戻った龍也が尋ねてくるが・私は

「秘密だよ・でも変な事はしてないから大丈夫だよ」

笑いながら言っていると龍也は

「そうなのか？・それなら良いが・体の疲れも無いし・気分も良いしな・」

その日から偶にシャマルの特製料理で子供化する龍也の取り合いが機動六課で見られるようになった

番外編 ちびちび龍也終り

レビュー 記念番外編 黒き騎士と機械の少女達の出会い・・・

レビュー 記念番外編 黒き騎士と機械の少女達の出会い・・・

ヒラリ・・・

オットーのポケットから一枚の写真が落ちる、私はそれを拾い上げ

「オットー・・・写真落とした・・・あれ？これ龍也さん？」

悪いと思ったが写真を一瞬見た・・・そこにはオットー達と龍也さんの姿があつたが・・・龍也さんから感じる印象が大分違う、回りに人を寄せ付けない・・・そんな印象を受けた・・・それが気になっていると

「それは兄様が黒騎士だつた時の写真だよ、しかも最初の方の怖かつた時のね」

私の手から写真を取り、ポケットにしまいながら説明してくれるオットーに

「最初の怖かつた時の龍也さん？・・・ねえオットー良かつたらその時の龍也さんの事を教えてくれない？」

怖かつた時の龍也さんというのが気になり教えてくれないかと尋ねると

「良いよ、教えてあげる、僕達が最初に兄様に会つた時の事を・・・」

そうしてオットーは語り始めた・・黒騎士の時の龍也さんの事を・・

「なあ・・何時まで私達はこんな所に閉じ込められるんだ？」

ノーヴェが詰まらなそうに呟くそれに

「洗脳が終わるまでじゃないか？あいつらは私達の体を改造したんだ・
・洗脳くらいわけないだろう・・」

返事を返す姉様・・僕達は今ネクロのアジトに捕まっている・・お父さんに悪い事をさせるために僕達を誘拐し、自分達の戦力にするために僕達は半分体に機械を埋め込まれた・・世間的に言えば戦闘機人という奴だ

「はあ・・やっぱそうかよ・・でもよ・・私はあいつらの思い通りになるのは嫌だぜ・・人殺しとかはしたくない・・」

暗く返事を返すノーヴェに何かを言おうとした時

ドーンッ！！！！

とんでもない爆音が響き、僕達の牢屋の隣の壁が砕け、そこから黒い甲冑を身に纏った左腕の無い男が基地の中に入ってくる・・一瞬助けかと思ったがそれは直ぐに違うと判った、男が纏う空気はネクロ達よりも暗く濁っていた・・どうすればこんな殺気を放てるのか？と思うくらい濃い殺気だ・・男は僕達に目もくれず腰から剣を抜き放ち

「出て来い・・・隠れてるのはお見通しだ・・・」

何も無い空間に剣を向けると

「くつくつくつ・・・流星は復讐者ですね・・・」

青い鎧のネクロが姿を見せる・・・そいつは僕達を誘拐したネクロだった・・・

「・・・死ね・・・」

男の姿が掻き消え次の瞬間

ガキン！！

剣と剣がぶつかる甲高い音が響く・・・

「行き成り死ねとは言ってくれますねえ？」

短い短剣で男の剣を受け止めるネクロに

「良いから黙って死ね！！」

再び剣を振るうが

「おっと・・・危ない危ない・・・」

バク転で回避しネクロはおどけた素振りです

「今はまだ決着の時ではありません・・・復讐者・・・いえ守護者だった

た者よ・・・それではまたお会い致しましょう」

頭を下げネクロは姿を消した・・・

「・・・」

男が僕達を見る・・・怖い・・・どこまで澄んでいるがそれと同時に底なしの闇が男の目の中に見えた、男が剣を振り上げ

ザン！！

僕達の牢屋の鉄格子を切り裂き

「死にたければそこにいろ、生きたい者だけついて来い」

そう言い自分が破壊した壁から出て行く男

「どうする？・・・ついて行くか？」

あの男は怖い・・・でも助かるなら・・・

「僕は行く・・・お父さんに会いたいから・・・」

僕がそう言つと皆頷き、男の後を追つて基地を後にした・・・

「来たか・・・」

基地の外では騎士甲冑を解除した男が待っていた

「お前達はスカリエッティの娘達で合ってるな？」

淡々とした口調で尋ねて来る男に

「どうして私達が父さんの娘だと知っている・・・答えろ」

姉様が拳を向けると

ドゴン!!

「がはっ!!」

男は姉様の首を掴み木に叩き付けていた

「調子に乗るなよ・・・今は俺が聞いてるんだ・・・お前達の質問に答える義理は無い・・・判ったか」

鋭い視線で僕達を睨む男は姉様の首を放し

「それでお前達はスカリエッティの娘達で合ってるのか」

再び尋ねる男に頷くと

「そうか・・・なら着いて来い貴様らの父親に会わせてやる」

そう言う男は暗い森の中を進んで行った・・・僕達は着いて行くしかない判断し男の後を追った

「・・・」

男は無言でどんどん進んで行く、僕達が着いて行くのがやっとの速

さだ

「まったく酷い方ですわ・・・助けてくれたのは感謝しますけど・・・姉様に何てことを・・・」

ぶつぶつと文句を言う姉様の姿を見ながら男の後を追っていると、その内開けた場所に出た

「来たか・・・随分と遅い到着だな？」

男はテントを張り、鍋で何かを作っていた・・・そのあんまりな言い方に皆が睨むと

「ふん、食事は用意してある、食べたら寝る判ったな」

男はそれだけ言いもう1つのテントの中に入って行った

「くそ、感じの悪い奴だぜ・・・あんな奴が作った料理だ、絶対美味くないぜ・・・！美味いぞこれ・・・」

文句を言いながら用意されていた食事を口に運んだノーヴェが目を見開く、皆同じでかなり驚いている

「美味しい・・・」

デイエチも美味しいと呟く・・・僕もそう思った物凄く美味しい、それにそれだけじゃなく胸がぽかぽかしてくる・・・食べてるだけで暖かい気持ちになれた・・・皆で食事を終えテントで眠りに落ちた

それから毎日の様に歩いた・・・来る日も来る日も深い森の中を進ん

だ、何日かしたある日・

「はあ・・はあ・」

セツテが高熱を出し寝込んでしまった・多分男はそんな事を気にせず来いと言うに決まっている・どうすれば良いか判らず困っている

「どうした？何故出て来ない・」

男がテントの中に初めて顔を出した、そして苦しそうなセツテを一瞬だけ見て直ぐにテントから消えた・多分この風邪が移るのが嫌だったんだ・僕達はそう思ったでもそれは違っていた、暫くすると男が戻ってきて

「邪魔だ、知識の無い者が看病が出来ると思うな・」

近くに座っていた姉様達に退けと言い、セツテの隣に腰掛け片腕で器用に草を摺り始めた・

「何をするつもりですか？」

姉様が話しかけると

「黙ってろ、調合を間違える・邪魔だからお前ら全部このテントから出て行け、外に新しいテントを用意してある」

・姉様を見ずに出て行けと言う男に嫌々だったが、テントを後にした・

「あいつ、セツテに変な事するつもりじゃないよね？」

姉様が木に腰掛け言うと

「大丈夫ですよ。ちゃんとカメラを用意してありますから。」

姉様がカメラを取り出し木の上に置く、そのカメラにはテントの中が映し出されていた

「出来た・・・これを飲め」

薬であろう液体をセツテに飲ませる、それは苦いらしく吐き出しかけるセツテの口を押さえ

「我慢しろ、直ぐに良くなる」

男は無理やりその液体を飲ませ、セツテに布団を被せ

「寝るんだ・・・風邪の時は寝るのが一番速く治る・・・お・・・いや・・・私はここにいて、いる物があつたら声を掛ける良いな」

一瞬俺と言いかけたがそれを言い換え私と言いつつも違う穏やかな口調の男の姿に

「何か別の人みたいだな・・・」

僕はそう呟いた、皆同じ様に感じたのか頷いていた

「あの・・・水を貰えますか？」

数時間後、起きたセツテが水が欲しいと言つと

「ほら・・・落ち着いて飲めよ」

小さめのコップに水を淹れて、手渡す男の姿はどうも手馴れた様だった

「こくこく・・・ありがとうございます・・・」

セツテがコップを返す、セツテの顔色は大分良くなっていた

「あの・・・私は貴方を誤解していたようです・・・貴方はとても優しいですね・・・」

セツテが男の顔を見ながら恐々と言う感じで言つと

「私が優しいか・・・そんな事を言われたのは久しぶりだ・・・」

男はおかしそうに笑う、初めて見たかもしれない男の笑い顔だった

「あの一つ聞いても良いですか？」

セツテが笑う男に尋ねると

「何だ？」

怒るかと思つたが予想に反して、笑いながら尋ねる男にセツテは

「名前を・・・いつも貴方とか呼んでるので、名前を教えてくださいませんか？」

セツテが布団を握りながら言うと男は

「ダークネス・・そう呼べば良い・・もう調子は良さそうだな・・私なんかよりお前の姉達の方が良いだろう・・今呼んで来てやる」

男がテントから出ようとするとセツテは

「ありがとうございます、ダーク様」

笑いながらセツテが言うとダークネスは後ろを向いたまま、手を軽く振ってテントを後にした

「おい、セツテの様子が良くなった、後はお前達で様子を見てやるんだな」

ダークネスはそれだけ言い自分のテントに戻った

「・・・もしかすると私達も誤解していたのかもしれないね・・」

姉様の言葉に頷き、僕達は自分達のテントに戻って行った

次の日からセツテはダークネスにべったりになった、離れようとしていないし、ずっと傍に居ようとしていた・・それはセツテだけではなかった、ウェンディは最初からダークネスに友好的だったが・・セツテの看病をしているダークネスを見てからセツテと同じく離れようとしていない・・僕はその姿に首を傾げた、あんなに怖いのに・・どうして2人はダークネスの傍に行くのかそれが僕には判らなかった

「うつん?・・誰・・」

その日の夜、テントを抜け出す音が聞こえ自分達のテントを見るが、全員いるでは誰がと思いテントを出るとそこには

「・・・・」

星空を見上げるダークネスの姿があった、その姿は何処か寂しそうに見えた

「オットーか・・・どうした？眠れないのか？」

最初会った時と今は大分印象が違う、口調も柔らかいし名前で呼んでくれるダークネスに

「ううん・・・違う誰かがテントから出て行く音が聞こえたから起きちゃったの」

返事を返すとダークネスは

「そうか・・・それはすまない事をした」

謝るダークネスの隣に腰掛け

「気にしなくて良いよ、何してたの？」

ぼんやりと空を見上げるダークネスに何をしていたのか？と尋ねると

「妹の事を考えていた・・・元気だろうかとかかな？」

初めて自分の事を話すダークネスに

「妹がいるの？」

妹の事を尋ねると

「ああ、妹がいる・・優しくて泣き虫で甘えん坊なのかな」

空を見上げて呟くダークネスに

「どうして会いに行かないの？」

何故会いに行かないのかと尋ねるとダークネスは

「砕けた盾に価値は無い・・ここにあるは復讐者の牙・・そんな姿では妹達も気付くまい・・さっ話は終わりだ・・明日にはお前達の父親の所に着く、だから寝ておけ」

更に聞こうとしたがそれを許さず寝ろと言うダークネスに頷き僕はテントに戻ったが・・胸がドキドキして中々寝れなかった・・この時セツとウエンディの気持ちが少し判った気がした・・それから僕達はお父さんと再会した、ダークネスは直ぐにその場から去ろうとしたがそれを捕まえ、無理やり僕達と一緒に生活させた・・その間に皆ダークネスに惹かれて行つて今みたいになつた・・それが楽しくてしょうがないと僕は感じていた・

「これが僕達がお父さんに会った直後に撮った写真でね・・この時の兄様はまだ今みたいな感じじゃなかったの・・でも僕はこの時の兄様も好きだったよ」

食堂で昔の兄様の話をスバルにしていると

「オットー、ここにいたか・・・買い物に付き合えと言っていただろう？デイドはもう準備しているお前も準備をしるよ？」

兄様が笑いながら言うので

「うん！今行くよ」スバル、その写真上げるよ・・・まだあるからね」

写真を手渡し兄様のところに向かう・・・優しく強い兄様が僕は大好き・・・でも兄様は気付いてくれない・・・でも今はこの関係で良い何時の日か気付いてくれる日がきつと来る・・・僕はそう思っているから・・・遠い日に出会った記憶・・・悲しみを棄て切れず自暴自棄になつていた龍也の心を救ったのは・・・誰でもない・・・オットー達だった・・・

レビュー 記念番外編 守護者と夜天とエースと執行官

レビュー 記念番外編 守護者と夜天とエースと執行官

「うーん・・兄ちゃん何処かな」

私は六課の中を兄ちゃんの姿を探しながら歩いていて、今日は私と兄ちゃんになのはちゃんとフェイトちゃんが休暇の日だ、だから2人より先に兄ちゃんと遊びに行こうと思い、探しているが兄ちゃんの姿は無く困っている

「はやてどうしたの？」

ルーテシアがどうしたと尋ねて来るので

「いやなあ、兄ちゃんを探してるんやけど、ルーテシアはどこに兄ちゃんが居るか知らんか？」

しゃがみ込み、兄ちゃんの居場所を知らないかと尋ねると

「六課の外の木の所で本を読んでたよ、多分今も居ると思うよ？」

ルーテシアに居場所を教えて貰い、私はその場所に向かった

「「あつ！」」

外に出るとなのはちゃんとフェイトちゃんに遭遇した、・・暫く3人で睨みあっていたが目的を思い出し

「………ダッ！！……」

走り出すタイミングも全く同時だった、そしてその場所に着いたのも全くの同時だった。後姿だが兄ちゃんが居るのが見え

「兄ちゃん！！（龍也！）（龍也さん！！）」

3人で同時に呼びかかるが反応が無い。……どうしたんだろうと思い兄ちゃんに近付くと

「すう……すう……」

兄ちゃんは本を読んでいる内に眠ってしまったようで、右手に本を持ったまま眠りに落ちていた。

「あ……龍也……寝てるね……」

フェイトちゃんが残念そうに言う、多分私と同じで兄ちゃんと遊びに行くつもりだったのだろう

「……寝てる龍也さんか……これはこれで良いかも……」

なのはちゃんが眠っている兄ちゃんの顔を見ながら言う、同意するつもりは無いが私もこれはこれで良いと思い、兄ちゃんの前にはしゃがみ込み

「うわ……ほっぺ柔らかいな」

兄ちゃんの頬を突く、普段は絶対に出来ない貴重な体験だ

「髪さらさら・・・女の人・・・いや・・・それは無いか・・・」

フェイトちゃんが兄ちゃんの髪を触りながら呟き

「あう・・・私よりウエスト細い・・・男の人なのに・・・」

なのはちゃんは何かショックを受けていた・・・

「ううん・・・」

兄ちゃんが一瞬動いたので慌てて距離を取り様子を見る

「うん・・・すう・・・すう・・・」

どうやら相当深い眠りに落ちてる様でまた穏やかな寝息を立てる兄ちゃんを指差しながら

「二人とも静かにしてるならここに居ても良い、静かに出来んならここから離れて」

寝ている兄ちゃんを起こすなと言う意味を込めて言うと

「それくらい判ってるよ」

直ぐに返事を返すなのはちゃんと

「こんな貴重な体験、滅多に無い、だから私はここに居るよ」

ここに居るというフェイトちゃんを見ながら

「そうやね、確かにこんな貴重な体験は無い、じゃあ今日はここでゆっくりしよか？」

折角の休暇だから遊びに行きたいという気持ちもあるが、兄ちゃんが寝てるならここでゆっくりするのも悪くないと思い、その場にしがみ込む、それに続くようになのはちゃんとフェイトちゃんもしがみ込む

「うーん・・・風が気持ちいいねえ」

フェイトちゃんが両手を伸ばしながら言う、確かに風の通りも良いし木が日陰になってるからとても居心地が良い良く兄ちゃんとヴィイヴォがここに居るのも納得だ、暫く兄ちゃんの寝顔を見ながら兄ちゃん時間を潰していると

「うーん・・・でもこうして見ると龍也の体って細いよね・・・」

フェイトちゃんが兄ちゃんの体を見ながら言う、確かにその通りで兄ちゃんの体は細い・・・かといって女の人見たいと言う訳ではないが、ゼストさん比べると確かに細身だ

「・・・一人で無茶して居なくなつて・・・私達に寂しい思いをさせて・・・そう思うと龍也さんは酷い人だよ・・・」

なのはちゃんがそう呟く、今から1年前、兄ちゃんは姿を消した・・・いや・・・正確にはMIA扱いだった・・・今でもあの時の事は覚えている・・・

「はあ・・・はあ・・・これで終わりだ・・・あと少し・・・あと少しで良いんだ・・・動いてくれ・・・」

兄ちゃんは壁に手を置き、足を引きずりながらパンデモニウムの奥に向かっていた・・その時の兄ちゃんの満身創痍・いやそれさえも甘い・・義手は無く・・血で濡れてない場所を探す方が難しい有様だった・・

「ここだ・ここが・・ぐっ・・動力室だ・・」

兄ちゃんは知らないがあこの時の兄ちゃんの姿は、クラナガン全体に映し出されていた・・ジオガデイスが宣戦布告に使った時の機械が動き兄ちゃんの姿を写していたのだ・・私達はその姿を見ているしか出来なかった・・魔力も底を付き兄ちゃんを助けに行く事さえ出来なかった

「はあ・・はあ・・蒼龍・・月牙斬ッ！！！！」

ズドン！！

兄ちゃんの一撃は動力室を粉々に破壊し、パンデモニウムが落下を始めると同時に兄ちゃんは倒れ込み

「はは・・やったぞ・・これで終わりだ・・ごほ！ごほ！！・・はあ・・はあ・・私も限界か・・」

騎士甲冑とユニゾンが解除され、兄ちゃんの隣にセレスさんが姿を見せ

「王よ、まだ間に合います、速く脱出を」

脱出を進めるセレスさんに

「この死に掛けの体で脱出しろ？断る・・・どうせ死ぬんだ、はやて達を悲しませる必要は無い・・・私はここで大人しく逝くとするよ」

兄ちゃんはパンデモニウムの窓から空を見上げ

「私の役目は終った・・・はやて達はもう私が居なくても大丈夫だ・・・守護者の盾はもう必要じゃない・・・」

くぐもった笑い声を上げ兄ちゃんはセレスさんに

「なあ・・・セレスは神を信じるか？」

神を信じるかと尋ねる兄ちゃんにセレスさんは

「私は信じます・・・貴方のような素晴らしい王に出会う運命を授けてくれた神に感謝します」

信じるというセレスさんに兄ちゃんは

「私は信じない・・・だが今だけは信じてもいい・・・神は・・・信じる者の願いを叶えてくれるんだろう？・・・神よ・・・もし居るなら私の願いを叶えて欲しい・・・はやて達は充分苦しい思いをした・・・もう良いだろう？・・・これから先はやて達にこれ以上苦しい思いをさせないで欲しい・・・もしまだ過酷な運命が待っていると言うのなら・・・私を地獄に落とすが良い・・・はやて達も分も私が背負おう」

あれほどボロボロなのに・・・私達を心配している兄ちゃんの姿に私達は涙を流す事しか出来なかった・・・

「はは・・・だが今まで神を信じなかった私の願いなど叶えてくれる訳も無いか・・・ごほっ！！・・・はあ・・・はあ・・・もう限界か・・・これから・・・先・・・はやて達の進む道に・・・幸福・・・があらん事を・・・」

兄ちゃんは震える手で十字を切り、十字を切ると同時に兄ちゃんの手は血に沈んだ・・・そして兄ちゃんとセレスはパンデモニウムと共に消えていった・・・それから一年後再び私達を護る為に姿を現した・・・その1年はとんでもなく長く感じたので良く覚えていた

「そうや・・・兄ちゃんは酷いわ・・・だから2人は諦めた方が良いで？」

眠っている兄ちゃんの頬を撫でながら言う

「冗談、それくらいで嫌いになるくらいなら最初から好きにならな
いよ」

おかしそくに笑うのはちゃん・・・ちっ・・・そう簡単には諦めない
か・・・

「それを言うならはやては早く兄離れしたら？その方が龍也も安心
出来るよ？」

フエイトちゃんが兄離れしろと言うが

「それこそ冗談や、私が兄離れする？ありえへん、それこそ世界が
破滅しようとして私は兄離れせんぞ」

私が兄離れする？そんな事は決してない・・・例え世界が破滅しよう

とも私は兄離れはしないだろう

「私達もだよ、例えば世界が滅びたとしても龍也さんを嫌いになること何て無い」

私と同じ言い回しが気に食わないが、2人の言いたい事は判る

「そうか、なら言わせて貰うわ、私は絶対に2人には兄ちゃんは渡さへん！！兄ちゃんは私の物なんやからね！！！」

寝ている兄ちゃんの体に抱きつきながら言うと

「龍也は物じゃないんだ、そんな言い方すると龍也に嫌われるよ？」

兄ちゃんの腕を抱き抱えながら、なのはちゃんとフェイトちゃんと言う・・・このやり取りは昔から何でもやったやり取りだ

「ははっ！！変わらんなあ・・・2人とも昔から私から兄ちゃんを取ろうとする・・・それが大嫌いや・・・でもその分私は2人が好きや・・・同じ人を好きな人って言う意味でな」

昔から2人は変わらない、真剣に兄ちゃんに恋してる2人を私は大嫌いで好きだ・・・この矛盾している感情は私から消えることは決して無い・・・それは多分2人も同じだろう

「はは、そうだね・・・私も同じ気持ちだよ」

笑いながら言うフェイトちゃん達を話している内に眠くなり、私達も眠りに落ちた・・・大好きで大嫌いな2人はきつと最高の友達で最高の恋敵だ、でもその関係でも良いと私は思う・・・何故なら最後に

勝つのは私なのだから・・

「どうしてこうなっているんだ!!」

それから数時間後目覚めた龍也が酷く混乱したのは言うまでも無いだろう・・

レビュー 記念番外編 守護者と夜天とエースと執行官 終り

レビュー 記念番外編 電子の世界

レビュー 記念番外編 電子の世界

ドーン！！ドーン！！！！

演習場で連続で爆発音が響く中2人の男が何かを話している

「なあ、ハーティーン・・・どうやって止めようか？あれ・・・」

銀髪の男・・・八神龍也が指差す方には3人の美しい女性の姿があった、1人は男の妹で後の2人は妹の友達だ

「知らん、貴様が何とかしろ、俺に迷惑を掛けるな・・・」

金髪の男・・・ルシルファースハーティーンは迷惑を掛けるなど言い黙り込む

「だがな、私ではどうすれば良いのか・・・」

龍也が何かを言い掛けた瞬間

「・・・あつ・・・」

3人のしまったという感じの声が聞こえ、2人でそちらの方を見ると3色の砲撃が迫って来ていた、龍也は冷静に

「ハーティーン、私がお前、今日厄日だったか？」

「俺が知るわけ無いだろう?」

2人はそんな事を言いながら砲撃に吞まれた・

「うん?・・生きてるのか・・・ここ何処だ?」

私が目を覚ますと私は小高い丘の上に居た・・何処だろうと混乱している

「ギャーッ!!ギャーッ!!」

バサッ!バサッ!!

頭上を炎の体を持った巨鳥が飛んでいく・

「何だ?あれ・・見たこと無い生き物だな?・・また変な平行世界に落ちたかな?」

そんな事を思いながら丘を降りて平原を歩いていると

ノシッ!ノシッ!!

巨大なサイの様な生き物が歩いているのが見える

「ふーむ・・人は居ないのか?・・居れば何か判ると思うんだがな・
・そう言えばハーティーンはどうしたんだろうな?」

一緒に砲撃に飲まれたハーティーンの事を考えていると

「貴様・・・如何してここにいる・・・」

背後から声を掛けられ振り返るとそこには

「答える、何故人間がデジタルワールドに居る・・・」

白銀の甲冑に龍と狼の腕を持った騎士が敵意を持った目で私を睨んでいた・・・私はその騎士の姿に

（オメガフォームに似てるな・・・どういう事だ？）

リンとアギトとのユニゾンで変化する騎士甲冑に似た騎士の姿に混乱していると

ビュンッ！！

龍の頭の方から剣を出し突然斬りかかって来る騎士に

「むっ・・・危ないな・・・」

バク転でその攻撃を回避しながらデバイスを起動させ、剣を構えると

「俺の攻撃を回避するとは・・・やはり貴様人間ではないな！！何故人間の姿をしているかは知らんが、デジタルワールドに害なす存在を俺は許す訳にはいかん！！」

何故か激昂しながら攻撃してくる騎士の攻撃を受け止め

「待つてくれ、話しくらい聞いてくれても良いだろう？・・・ここは

何処なんだ？」

襲ってくる騎士に尋ねるが返答は無い・

「仕方ない・・気絶させてから話を聞くとするか・・」

私は剣を構え騎士に向かって行った・・龍也と騎士が戦闘に入った頃

「人間か・・目障りだどつと消え失せる・・」

漆黒の竜人に目障りと言われ

「目障りだと？貴様の方が目障りだ、トカゲもどきがどつと失せる・
」

お互いの間に沈黙が走り

「良いだろう・・そんなに死にたいなら俺が殺してやろう・・」

鉤爪を向ける竜人に

「はっ！死ぬのは貴様だトカゲもどき・・」

ハーティーンと竜人が全く同じタイミングで戦闘に入っていた事を
龍也は知らない・・

「ブレイブトルネードッ！」

私が竜巻を纏いながら騎士に突撃する

「馬鹿なっ！！どうしてブレイブトルネードが使える・・・がああっ！
」

私の突進攻撃は驚き硬直している騎士の腹を捕らえ吹き飛ばすが

（硬いな・・・全力だったんだが・・・あの程度か・・・）

全力の攻撃だったが、掠り傷程度の傷しかない騎士の鎧の硬さに驚いていると

「やはり貴様はイレギュラーだ！俺の全てを賭けて貴様を消去する
！！！！」

狼の頭から砲塔が姿を見せる

「！仕方ない・・・こっちも全力で無いとやられるか・・・」

私も砲撃を放つ為の魔力を収束させる

「ガルル・・・」

「コキュートス・・・」

同じ輝きを持つ光が私と騎士の腕に溜まって行き・・・ほぼ同じタイ
ミングで

「「キャノンッ！！」」

眩いばかりに輝く青色の光が放たれた・・・その頃遠く離れた荒野で
ハーティーンと竜人が激戦を繰り広げていた

ガキン！！ガキン！！

鉤爪と双剣がぶつかり凄まじい火花を散らす・

バツ！！

ハーティーンがマントを翻しながら着地し

「・やるなトカゲもどき・まさかここまでやるとは・・認識を改める必要がある・・お前は強者だ・・だから俺の全力で貴様を屠る・
・吼えろ・・グレイダルファー！」

ハーティーンの手から剣が落ち、地面に吸い込まれるように消えていくそして次の瞬間、無数の剣が地面から現れる

「これは・・」

驚く竜人にハーティーンは

「これが俺の持てる最強の技・・滅天蒼龍刃・・この技の前に消え失せる！！」

その叫びと共に剣が光りながら散っていき、まるで花びらが舞い散るように竜人に迫る

「この程度で俺が倒せると思うな！！おおおっ！！！」

竜人はそれを跳躍で回避すると同時に両手に闇色の光を集め・

「消し飛ばー！！ガイア・フォースッ！！」

闇色の球体が炸裂し、凄まじい爆音が響き渡った．．それと同じタイミングで龍也と騎士の砲撃がぶつかっていた

「ぬう．．思ってたより威力があつたな．．」

私は爆風で塞がれた視界で騎士の姿を探していると．．

「待って下さい．．それ以上戦わないで下さい．．」

背後から声を掛けられ驚きながら振り返るとそこには

「私達の仲間が貴方に剣を向けたことは謝罪します．．だから今は剣を収めてください」

白銀の鎧に赤のマントを纏った騎士が居た、その騎士に敵意が無い事を感じ剣を鞘に戻すと同時に砂煙が晴れ、私と戦っていた騎士の方を見ると

「放せ！あいつはイレギュラーだ！！俺達が倒すべき敵なんだぞ！
！判っているのか！！アルファモン！！！！」

私と戦っていた騎士は漆黒の鎧の騎士によつて動きが拘束されていた．．

「貴様こそ判っているのか？．．あいつはイレギュラーではない．．
ましてやバグでもない．．異世界より迷い込んだ客人だ．．丁寧に
持て成せとユグドラシルから指示があつた．．お前は危うく客人を
殺す所だっただんだオメガモン」

オメガモンに諭すように言うとオメガモンは

「くっ!!」

マントを翻し飛び去っていくオメガモンを見ながら、アルファモンは私の前に着地し

「申し訳ない・・・異世界の客人よ・・・私達の仲間が剣を向けた事を許して欲しい」

頭を下げるアルファモンに

「気にしなくても良い・・・所でアルファモンだったか?・・・ここがどこか説明してもらえるとありがたいんだが?」

アルファモンにここは何処か?と尋ねると

「少し待ってくれ・・・デュークモン、オメガモンに話をしておいてくれ・・・焦る気持ちも判るとな・・・」

「判ってますよ・・・オメガモンが焦るのは判ります・・・私も同じでしたからね・・・ロイヤルナイツに入っただばかりの新入りの気持ちはね」

穏やかに笑うデュークモンはオメガモンが飛び去った方向に飛んで行った

「さてと待たせてしまったな・・・今説明しよう・・・」

アルファモンがここがどういう世界なのかと私に丁寧に説明してくれた

「ここはデジタルワールドと言うのか・・・こうして言うのは何だが・
・良く判らない」

説明して貰ってなんだが良く判らないと言うと

「そんな物だ・・・聞くだけでは判らない・・・もう1つの世界である
と言うだけ判ってくれば良い」

アルファモンの言葉に頷くと私の周りにバーコードの様な物が現れる、それに驚いていると

「そう驚く事はない・・・それはデジコードと言う・・・簡単に言えば
この世界から元の世界に戻る為の道しるべだ」

そうなのかと頷いた瞬間思い出す

「そうだ、私の仲間もここに居ると思うんだが・・・そいつは大丈夫
なのか？」

ハーティーンの事を尋ねると

「問題ない、近いうちにデジコードが現れ、お前の仲間も無事にも
との世界に帰れるだから安心しろ」

安心しろと言うアルファモンに頷くと同時に、私はデジタルワールドから元の世界に引き戻された・・・

手強い・・・トカゲもどきと罵ったが・・・こいつは本当に強い・・・トカゲ・・・いやもう黒いからブラックで良いな・・・ブラックは滅天蒼龍刃、一陣・滅天蒼龍刃の無数の刃を華麗に回避している・・・花びらの様に輝く刃を操作しながらそう思う・・・ここまでこれを回避できるのは龍也かジオガディスくらいだ・・・そんな事を考えていると

「ブラック・・・トルネード！！！」

黒い竜巻と共に突撃してくるブラックの前に刃の壁を作るが

「無駄だ！そんな物で俺は止まらんぞ！！」

その刃を突き抜け俺に向かって来るブラック、ここまで簡単に破壊されると思って居なかったので反応できず

「くっ・・・」

咄嗟に腕をクロスして受け止めるが、その衝撃を全て防ぐ事は出来ず、俺は後ろに吹っ飛ばされた・・・だが俺は途轍もない高揚感を感じていた・・・ここまで苦戦するのは龍也との模擬戦くらいしかない・・・だがそれも良い所でラグナに止められる・・・だがこいつなら全力で戦っても問題ない・・・全力で・・・叩き潰すのみ！！弾き飛ばされながら体勢を立て直し着地と同時に

「終焉の翼・鳳凰紅蓮刃・・・」

俺の最終奥義を発動させる・・・無数に散っていた刃が俺の背中に集

まり、刃の翼となるそれと同時に俺の手に紅蓮に輝く剣が現れる、その刃をブラックに向けると

「まだ・・・そんな隠し手があったか・・・面白い！人間と侮ったが前は俺が戦った中で一番の強者だ！！貴様を叩き潰し・・・俺は更なる高みに行く！！！」

嬉しそうに鉤爪を向けるブラックに

「全力勝負だ・・・行くぞ！！」

俺は刃の翼を羽ばたかせブラックに向かって行った、それと同時にブラックも駆け出す

「はあああつ！！ドラモン・・・キラーツ！！」

「おおおおつ！！！！」

炎の刃と鉤爪が追突する・・・均衡は一瞬だった・・・渾身の力を込めた一撃はお互いの武器の限界を超えていた

バキン・・・

鈍い音を立てて炎の刃と鉤爪が砕けた・・・俺は

「やるな・・・」

砕けてしまったグレイダルファアを見ながら言つと

「ふん・・・貴様もな・・・」

不敵に笑うブラックの姿を見ると、俺の周りにバーコードの様な物が現れる、突然のことに驚いていると

「デジコードか・・・成る程・・・別世界の戦士だったのか」

納得という感じで呟くにブラックに

「おい、これは何なんだ」

慌てて尋ねると

「害は無い・・・元の世界に戻る為の切符だ・・・人間・・・次は会う時は俺が勝つ」

不敵に言い放つブラックに

「抜かせ・・・貴様では俺には勝てん」

俺はそう言つと同時に意識が遠のいていくのを感じていた・・・

「・・・どうしたんだこれは？」

気が付くと俺は演習場に居た、そして目の前に広がる光景を指差しながら、龍也に尋ねると

「私が聞きたいくらいだ・・・」

呆れた素振りの龍也は右手で頭を押さえている・・・頭痛でもしているのだろうか・・・いや間違いなくこの光景を見たものは頭が痛くな

るだろう・・・何故なら・・・

「「「うーん・・・」」」

ボロボロの状態で倒れている、3人の魔導師達・・・3人とも頭に大きなたんこぶが出来ている

「多分・・・誰の所為かで喧嘩になったんだな・・・」

俺と龍也を呑み込んだ砲撃の事で喧嘩になったのだと容易に予想がついた

「はぁ・・・とりあえず部屋に連れて行くか・・・」

龍也は器用に3人を担いで歩いて行った

「・・・俺も戻って寝るか・・・」

俺も休もうと思い自室に戻って行った・・・その際

「ハーティーン!!!また喧嘩したでしょ!!!暴れたら駄目って!!!何度言えば判るの!!!」

ラグナに怒鳴られたのは言っまでも無い・・・

レビュー 記念番外編 電子の世界

レビュー 記念番外編 酔い龍也リターンズ改ッ！！！！

レビュー 記念番外編 酔い龍也リターンズ改ッ！！！！

カツカツッ！！

管理局本局を速足で歩く、白衣の男・ジェイルだ・私は眉を顰めながら一直線にレジアスの部屋に行き・そして

「レジアスッ！！お前は何を考えてるんだっ！！」

そう怒鳴りながらレジアスの部屋の扉を蹴り空けながら入室した・その怒声に驚いたのはレジアスだろう・眼を白黒させながら

「何をそんなに怒ってるんだ？スカリエッティ？」

訳が判らないと言う表情のレジアスの襟を掴み

「本当に判らないのか？」

睨みながら尋ねると、ゆっくりと頷きレジアスに本気で切れそうになりながら・冷静に何について怒ってるのか説明し始める

「レジアス・お前は・いや管理局は何を考えている？・龍也をあっちこっちに引っ張り出し・禄に休息も与えない・このままでは龍也は過労で倒れるぞ？・そうなる前に私が無理やりにも休ませるが・根本的に問題を解決しなければ同じ事の繰り返しだ・だから・教えてくれ・お前が・管理局が何を考えてるかを」

真剣な顔で言うのとレジアスは、乱れた襟を直しながら

「龍也が疲れている事はワシも把握していた・・・ならば、何故ッ！・・・話しは最後まで聞けスカリエッティ・・・だからワシは3提督と協力してある計画を立てていた・・・これだ」

差し出された書類を見て・・・私は・・・

「レジアス・・・私はお前を誤解していたようだ・・・お前はちゃんと龍也の体の事を考えていたのだな・・・」

私がそう言うのとレジアスは腕を組みながら

「当然だ・・・ワシだって龍也のことは心配していた・・・それは当然機動六課の魔道師達も同じだろう・・・だからこういうのを考えてみた・・・」

書類の1部分を指差すレジアス・・・私はそこに書かれていた一文を見て

「完璧だ・・・この計画なら龍也を充分に休ませる事が出来る・・・」

私が書類を返しながら言うのとレジアスは

「だがこれには1つ問題がある・・・恐らく立候補者が続出するだろう・・・だが今回は龍也の為の計画だ・・・龍也の本心が重要になる・・・だから・・・これを使い」

そう言うって差し出されたのは1本の瓶だった・・・レジアスはその瓶

を指差しながら

「それは非常に特殊な酒だな・アルコールの匂いがしないんだ・それなら龍也も安心して呑むだろう・だから龍也の本心を聞いてくれ」

・
そう言うレジアスに頷き、私はその瓶を持って機動六課へと戻った・

その日私達は、スカリエッティさんに呼び出された・呼び出されたは簡単言えば兄ちゃんに想いを寄せてる面々だ・なんで呼び出されたのだろうと首を傾げていると、兄ちゃんとスカリエッティさんがやって来て椅子に座る、スカリエッティさんは皆の前に置かれたコップに瓶の中身を淹れて回り、兄ちゃんの真向かいに座り

「レジアスが美味しいジュースをくれたんだ・私も飲んだが実に美味しかった・だから皆も飲むといい」

邪気の無い顔で笑う、スカリエッティさんに頷きそのコップを取る
うとした時、念話で

（飲むなっ！！！！そのコップの中身は飲むなっ！！）

と言う警告に驚き手が止まる・さつき進めておいて飲むな？どう
いう意味だと私が首を傾げた時

ゴトンッ！！

兄ちゃんが机に頭をぶつけ停止する・一体このコップの中身は何だ？と私達が首を傾げた時、スカリエッティさんが

「ふう・作戦成功・皆良く集まってくれた・今回呼び出したのは全て龍也の為の計画だ」

気絶させておいて・兄ちゃんの為の計画？・私が首を傾げると同時にスカリエッティさんが

「レジア達が過労気味の龍也を休ませる為にある計画を立てた・それは管理外の世界で龍也を休ませるといふ物だ・だがほっておけば龍也は無茶をするだろう・だからその監視役として、ドウエ、そしてリン君、アギト君、ユナ君、アザレア君、最後にヴィオがその世界に付き添うことになっている」

！！初耳の事に私達が立ち上がるとした時、ラグナが手を挙げる

「あの・八神さんの事だからはやてさん達が呼ばれたのは判ります・では何故私が呼ばれたんですか？」

首を傾げながら言うラグナにスカリエッティさんは

「君を呼んだのは君にもその世界に行って貰うからだ。勿論行く理由は監視などではない・君はあの争いの時に管理局員でもないのに・救護に回ってくれた・そのお礼としてその世界への旅行とも思ってくれたまえ・勿論君の騎士も付き添いだ・多分外で待つてから合流するといい、長い事その世界にいる事になる・準備はちゃんとしておいた方がいいからな」

そう笑うスカリエツティさんに頷き、出て行くラグナを見ているとなのはちゃんが

「スカリエツティさん・私達を呼んだ理由は何ですか？」

冷静に言うが目は単色に染まり、苛々してるのが判る・まあ・それは私も同じなのだが・スカリエツティさんは笑いながら

「まず君達を呼んだのは龍也と一緒にその世界に行く者を決めるためだ・勿論決めるのは私でも君達でもない・決めるのは龍也自身・」

そう笑うとスカリエツティさんは部屋の入り口に行き

「酔った龍也はどちらかと言えば本能で動く・それは酔えば酔うほど強くなる・まあ単純に言うとは好感度の高い人物を龍也が襲撃するという事だ・少しばかり恥かしいかもしれないが我慢してくれ・付き添い出来る人数は8人だ・それが決まったらここを開ける・頑張ってくれ」

そう言うのと扉が閉まる・えっ・酔っている兄ちゃんと同じ部屋に閉じ込められた・その事の事態の大きさに私達が気づいた時

「えっ・兄貴・？」

ジイイ・

机に伏せてる兄ちゃんが起き出し、ヴィータを穴が開くほど見つめている・そう思った次の瞬間

「ヴィータ」

ガバツ！

笑いながらヴィータに抱きつき、ヴィータは突然の事に反応出来ず、押し倒されるように抱きしめられる

「ちよっ！兄貴・・・やめ・・・止めて」

バタバタッ！！

ヴィータが手足をばたつかせ暴れるがそれを無視し

「うっん・・・ヴィータは可愛いな、私はヴィータが好きだよ」

チュツと言う音が聞こえてくる・・・１回どころではなく何回も・・・ヴィータは身を擦って抵抗するがそれも無駄な抵抗で終る・・・私達の角度からは何が起こっているか見えず・・・ヴィータがどうなってしまったのだろうと？考えていると・・・兄ちゃんが離れる・・・兄ちゃんが離れたことでヴィータの姿が良く見えるようになる・・・私達が見たのは

「ピクツ・・・ピクツ・・・」

上着の一部がはだけ、手足が良い具合に痙攣しているヴィータの姿があった・・・R-18禁な事が起きたのではなく・・・唯あちこちキスされすぎて脳の処理が間に合わなくなり気絶してしまったのだろうが・・・あれは少し恥かしい所では無い・・・皆が見ている前でキスの嵐＋気絶した後放置・・・恐ろしいと思うのと私はヴィータと同じ様にされるのだろうか？と言う妙な期待感を感じていた・・・私達の

内・・・こういう展開に全く耐性の無いチンクさんが赤面して停止している・・・

ユラリッ・・・兄ちゃんがチンクさんの後ろに音も無く現れる・・・

「はっ！？・・・あーっ！！！」

気付いたがとき既に遅し・・・兄ちゃんのコートにチンクさんの姿が消える・・・コートの中から

「おおおお・・・落ち着け・・・八神・・・嬉しいが・・・嬉しいのだが・・・はっ・・・話を聞け」

説得を試みたようだが失敗し、コートの中が別の生き物の様に暴れ回る・・・その間中から悲鳴にも似た声が聞こえ・・・

「止め・・・もう・・・止め・・・ああああ・・・」

その声を最後にチンクさんの声は聞こえなくなった・・・私達は赤面しながら顔をあわせ

「どうする？・・・次の犠牲者だれや？」

ここに居るのは11人・・・後6人犠牲者が居る事になる・・・あつ犠牲者というのは正しくない・・・今判る兄ちゃんが大好きな人物は後6人という事になる・・・私が行っても良いが・・・心の準備がまだ・・・皆も同じようで赤面しながらお互いの顔を見ていると

「にゅふふふ」

その声と共に兄ちゃんがまた活動を再開する・・・案の定兄ちゃんが

離れた後には・

「ひくっ・・ひくっ・・」

ヴィータと同じ様に痙攣しているチンクさんだけが残っていた・

「・・・・」

キヨロキヨロと辺りを見る兄ちゃん是谁かを探しているようだっ
・誰を探しているのだろうと思った時・兄ちゃんの元に歩いて行
く1人の人物・セツテだ・頬は赤く・心なしか鼻息が荒いよ
うに見える・キヨロキヨロと辺りを見回していた兄ちゃんがセツ
テの姿を見つけると

「にぱ」

楽しそうに笑い始める・それで判った、癪だが3人目はセツテだ
と・セツテは無抵抗で兄ちゃんに抱きしめられ押し倒される・
見ているだけでも判る・相当強い力で抱きしめられるようだがセ
ツテは

「はふう・・こんな日を夢見てました・」

恍惚とした声で呟いている・多分セツテの顔はだらしく緩んで
いるだろう・兄ちゃん至上主義のセツテだ、そんな彼女にとって
兄ちゃんに抱きしめられ、尚且つキスされる・これ以上はない幸
せだろう・私達がそんな事を思っていると・兄ちゃんがセツテ
から離れ始める・今回セツテは倒れていなかったし・痙攣もし
てなかったが

「あは・・・幸せ・・・ああ・・・こんな素晴らしい事が起きるなんて・・・私は生きていて良かった・・・」

とろんとした目でそう呟き、完全に別世界に飛んでしまっているようだった・・・私達はある意味戦慄していた・・・私達から見えない角度で何が起こっているのか？・・・そうしてあんな恍惚とした表情を浮かべるほどの出来事・・・何が起こっているのか全く想像できなかった・・・私がそんな事を考えていると

「きゃああつー！！」

スバルとティアナが同時に捕まる・・・いや捕食される・・・もごもごとコートが動き回り、徐々にそれが小さくなる・・・明らかに色々吸われている・・・やる気とか・・・体力とか・・・とにかく色々な何かを・・・何故そう思うかって？簡単だ・・・

「くたゝつ・・・」

キスの嵐と抱きしめられた、スバルとティアナは明らかに消耗し・・・ひくひくと痙攣してる・・・その反面兄ちゃんは・・・徐々に肌の艶とかが良くなっている・・・何が起きてるかは判らないが・・・胸を揉まれたりくらいはしているのか知れない・・・皆が皆上着の一部がはだけてるからだ・・・でも兄ちゃんの事だからそんな事はしてないと思うが・・・チラリと横を見る・・・ノーヴェ達とシグナムはバリケードを造り防御体制に入っている・・・幾ら好きでもあんな状態の兄ちゃんでは嫌なのだろう・・・と私が思った時

「フェイトちゃん・・・ごめん」

なのはちゃんがそう呟きフェイトちゃんの背を押す

「なのは!？」

驚いた声を挙げ倒れかけるフェイトちゃんの手が何かを掴む・・・ゆつくりとフェイトちゃんは顔を上げる・・・フェイトちゃんが掴んでいた物は・・・

「フェイト」

にこにこと笑う捕食者と化した兄ちゃんだった・・・

「あはは・・・龍也・・・」

乾いた笑い声を上げたフェイトちゃんは次の瞬間、コートに包まれ姿が見えなくなってしまった・・・コートの中からは

「ひゃああああっ!!首っ!首にキスしないで!!ひゃああ耳も噛まないで」

妙に色気の混じった声のフェイトちゃんの声だけが聞こえて来ていた・・・

(ご愁傷様です・・・でも多分私も同じ結末か・・・)

恐らく、私もなのはちゃんも捕食されて終り・・・だが次だけは嫌だ・・・なのはちゃんも同じ考えなのか

「ジャンケンで決めよう・・・どちらが先か・・・」

そう言うなのはちゃんに頷き

「「ジャンケン・・・ポンッ!!」」

私が出したのはグーでなのはちゃんは

「チョ・・・チョキ出しちゃった・・・」

プルプルと肩を震わしていた・・・この瞬間次の犠牲者はなのはちゃんに決定した・・・2人でもごもごと動くコートを見る

「長いね・・・」

「うん・・・長いわ・・・」

フェイトちゃんが捕まり、既に7分・・・チンクさん達より2分近く多く捕まっている・・・ある仮説が思いついた

「なあ・・・もしかして私達ってかなり長く兄ちゃんと一緒やったよな？」

そう尋ねるとなのはちゃんは何を言ってるんだ？と言う顔で頷く、私はそれを確認してから

「つまり私達はその分だけ長く・・・なるってことちゃう？」

そう言うとなのはちゃんは

「かもしれないね・・・」

そう呟いた瞬間、兄ちゃんがフェイトちゃんから離れる・・・フェイ

トちゃんは

「ヒクッ！…ヒクヒクッ！…！！！」

チンクさん達と比べれないくらい痙攣していた…その目はセツテの様にとろんしてしていた…それを見てなのはちゃんは

「はやてちゃん…何でもするから順番変わって…心の準備するから」

そう言うなのはちゃんに

「兄ちゃんの事諦めるならいい…最後の最後で良い思い出を作りたい言うなら良いで？」

そう言うとなのはちゃんは

「それは嫌っ！！…判ったよ…先に逝くよ…」

少し行くよの雰囲気違ったが気にしない事にした…私が心の準備をし始めると同時に

「ひゃああああっ！！！」

なのはちゃんがコートに包まれ見えなくなり、次の瞬間

「にゃああああああっ！！！！！」

凄まじいまでのなのはちゃんの悲鳴が聞こえる…かなりの羞恥心で暴れてるのか、コートが凄まじい勢いで暴れるが脱出出来ないよ

うだ

「にゃあああ！！！ひゃああああんっ！！耳！！耳は嫌」

段々声に色気が混じってくる・・それほどまでのスキンシップ・・何が起きてるんや・・私はあのコートの中で何が起きているのか・・物凄く気になった・・それから私は心の準備をしながら、なのはちやんの姿が再び見えるようになるのを待ちながら、時計を見ていた・・最初の5分くらいは暴れていたが・・8分くらいで抵抗が出来なくなるほど消耗したのだろう・・コートが動かなくなった・・そして10分後・・

「ピクッ！！！！ピクピクッ！！」

目は虚ろで凄まじく痙攣しているのはちゃんから離れ、兄ちゃんがふらふらとこっちに来る・・兄ちゃんの目と合う・・にぱと心底楽しそうな顔の兄ちゃん顔をみると同時に、私の視界は完全に闇の中に消えた

「にゃふふははて」

ぐりぐりと頭を擦り付けて来る兄ちゃんは子供の様で、普段と違い格好良いより可愛いと感じた

「んーお兄さんははやてが大好きですーずーと一緒に居てくれると嬉しいのです」

そう呟きながらキスしてくる兄ちゃんの頭を撫でると、兄ちゃんはぶつぶつと

「んゝ寂しいのは嫌なんです・・悲しいのも嫌なんです・・1人ぼつちは嫌なんです・・」

そう呟く兄ちゃんは痛いほどの力で私を抱きしめている・・暫く兄ちゃんの頭を撫でていると

「んゝ」

兄ちゃんが突然首筋を舐め上げる

「ひゃうつ!!」

思わず反応して声を上げると兄ちゃんは今度は耳を噛んで来る、勿論甘噛みで痛くは無いがくすぐつたい・・そんな事を考えていると兄ちゃんが首筋にキスを連発してくる・・

「ひゃう・・首・・首はくすぐつたい・・」

こんな事をされていては抵抗する気も無くなってしまう・・それ以前に私達は兄ちゃんが好きなのだ・・そんな人にこんな事をされれば・・幸せを感じ・・くつたりしてしまうのも理解できた・・10分位だろうか・・兄ちゃんに抱きしめられたり、キスされたりしていると突然、電池が切れたように兄ちゃんが動かなくなる・・何かか?と思い兄ちゃんの顔を覗き込むと

「すーすー」

穏やかな寝息を立てていた、私は自力でコートから脱出し、辺りを見回す

「……かあああつ……。」「」

真っ赤な顔で夢見心地という表情のなのはちゃん達が視界に飛び込んでくる……。どうやら復活したようだ……。私は兄ちゃんの体を支えながら

「ちょお、誰でも良いで手伝って！兄ちゃんを椅子に寝かせるで」

そう声を掛けるとスバルが反対側から兄ちゃんを支え、なのはちゃん達が椅子を並べて眠れるようにする、そこにスバルと協力して兄ちゃんを寝かせると、スカリエッティさんが戻ってきて

「どうやら、別の世界に行く面々は決まったみたいだな」

それは一目瞭然だろう、りんごの様に真っ赤になっている面々が私を含め8名……。態々尋ねなくても判るだろう、スカリエッティさんは頷きながら

「出発は今から半年後、それまで色々と準備しておいてくれ……。それと君達はその世界で中学生として学校に通ってもらう……。二度目の青春といった所かな？」

穏やかに笑うスカリエッティさんを見ながら私は、

（もう1度中学生か……。まあ……。それはそれで楽しそうやね）

そう笑っているとセツテが

「私達が学生をやるのは判りました……。それでは龍也様達は何をしてるんですか？」

私も気になって居た事をセツテが尋ねると

「龍也の事だからなにかやる必要があるだ・・だからこんな物を考えた・・喫茶店だ・・ドウエにリン君達がいれば、龍也にそこまで負担が掛かるわけじゃないし・・丁度いいだろう?。」

私達が納得していると、今度はフェイトちゃんが

「それで私達は何処に住むんですか?。」

もつともな事を尋ねるフェイトちゃんにスカリエッティさんは

「それも考えてある、15部屋あり、尚且つ喫茶店も出来る・・移動型の家型のデバイスを開発中だ・・その完成に半年掛かるんだ」
なるほど準備は万端って事か・・私が頷くと

「さて・・今日あつた事は龍也には秘密にしておいてくれ・・龍也の事だこんな事を知つたとすると・・失踪するぞ・・だから絶対に言わないでくれ・・判つたら解散してくれ・・皆準備があるだろう?。」

そう笑うスカリエッティさんに見送られ、私達はその部屋を後にし準備を始めた・・

番外編 とある融合騎の一日

とある融合騎の一日

「朝か・・・」

私に割り振られた部屋のベッドの中で目を開いた

「眠る必要は無いんだが・・・王に言われたのが習慣になっちゃったな・・・」

私には本来睡眠は必要ないが、王に言われてからは、パジャマを着てベッドで寝るのが習慣になっている・・・眠るとしてもスリープ状態になっているだけだが・・・

「さてと・・・王の下に行くとするか・・・」

何時もの神官服に着替え自室を後にする

「王はもう目覚めているか・・・」

リンクが繋がっているから王の状態は手に取る様に判る

「起こしに行く必要は無いか・・・」

最も余り私が起こしに行かなくても、私が目覚める頃には王は既に起きている事が多いから要らぬ心配なのだが

「挨拶に行くとするか・・・」

起こしに行く必要は無いが、挨拶に行く必要はある、だから食堂に向かつて移動する

「ん？セレスかおはよう」

食堂に行くと共に食事は終えてるようで、紅茶を飲んでいた王が笑いながら声を掛けて来る

「はい、おはようございます、我が王よ」

王と呼びながら椅子に腰掛けると

「その王と言うのは止めてくれないか？私はそんな大層な者ではないのだが・・・」

頭を掻きながら言う王に

「王は天雷の書の主、私にとって仕えるべき存在です、ですから王と呼ぶのは当然の事です」

昔から何度もやりとりしたが、この答えは変わらないのでそう言う

「はあ・・・判った好きにすれば良いさ・・・所で食事はまだなんだろう？良かったら何か作ろうか？」

食事はどうだ？と尋ねる王・・・どうするべきか・・・私には食事が必要無い、王の魔力で体を維持しているからだ・・・だが食事はしない訳ではない・・・一応味は感じるし・・・色々と考え

「そうですね・・・ではお願いしても宜しいでしょうか？」

食べる事にし笑いながら言うと

「了解、少し待っていてくれ」

笑いながらキッチンに消えた王の後ろ姿を見ると、とても楽しそうだ・・・私はそんな事を考えながら食事を待っていた

「ご馳走様でした」

手を合わせながら言う、王に教わった作法という奴らしい・・・古代のベルカにはそんな物は無かったが今では必要な物らしい・・・そんな事を考えていると気付く

「王よ、はやて様達はどうしたんですか？」

何時も傍にいるはやて様達の姿が無い事を尋ねると

「健康診断の日だそうで、朝早くから本局に行っている、私はもう終ってるから留守番だ」

成る程それではやて様達が居ないのかと納得しながら、立ち上がる

「ん？どうした？」

本を読みながら紅茶を飲んでいた王がどうした？と尋ねて来るので

「少し調べ物がありまして、申し訳ありませんが失礼致します」

私は頭を下げ、王の前から姿を消した・

「ふむ・・やはり私の時代のベルカの事は記されてないか・」

ここ数日、聖王教会の資料室で古文書を見ているが、私の時代のベルカの資料だけが無い・・その前と夜天の書が制作された時代の資料はあるが、私の時代だけまるで決り取られた様に無い

「また来ていたのですか？セレスさん？」

カリムがやって来て、また来ていたのか？と尋ねて来る

「ああ、ジオガデイスが現れた時代と戦争終結後の資料はあるが、肝心の戦争中の資料が無い事が気になってな・」

全ての時代の資料を調べた結果、ジオガデイスの反乱が起こった時代のみ、資料が無いと言うと

「それは空白の時代ですね・・決して語ってはいけない空白の時間・その時代の資料は存在しません、私もそういう時代があったとしか聞いた事が無いですから・」

ふむ・・やはりジオガデイスの事は禁忌か・・そう思いながら本を本棚にしまうと

「前から気になってたんですけど、どうしてここに来るのですか？貴女は空白の時代を生きた融合騎・・態々ここに来なくても記憶があるのでは？」

尋ねるカリムに首を振る

「私には戦いの記憶が無い・・・どちらが勝ったのかや断片的な記憶はあるが、肝心な所は欠如している・・・」

肝心な所が欠如していると言うと

「そうですか・・・やはりその時代の事を調べるのは無理なんですね・・・」

がっかりしているカリムに礼を言ってから、王の下に戻る、無いと判った以上これ以上ここに居るのは無駄だからだ

「調べても判らないか・・・辛い事だ・・・」

ジオガデイスと王では王の方が分が悪い・・・純粋な体術では同クラスだろう、だがジオガデイスには強力な呪術と魔力がある・・・王と私がユニゾンして五分五分と言った所だろう、そんな事を思いながら空を見上げる、どこまでも青く澄んでいる空を

（私は全力で王が勝つ為に力を貸すだけだ・・・空の上から見守る者・・・天界の青き風 セレスは王の為に戦うだけだ・・・）

今まで私に名をくれた王は居なかった・・・道具として、戦うだけの存在としての私しか必要とされてなかったからだ・・・だが王は違う・・・優しく・・・そして気高い・・・王のあり方は私にとって太陽だ

「さてと・・・戻るとするか・・・」

私は空を見上げながら六課に戻って行った

「王はどこだ・・・屋上か・・・」

王の魔力の流れを探し屋上に居ると判り、屋上に行く

「すう・・・すう・・・」

屋上の壁に背中を預け、王は眠っていた・・・

「やはり・・・疲れているのだな・・・」

無理も無い・・・ネクロは強い並みの魔導師では掠り傷がやつの相手だ、それを先陣を切って戦い続けていた王の疲労はかなりの物だろう・・・はやて様達の前では疲れた素振りは見せないが・・・きつと相当無茶をしている・・・眠っている王の隣に腰掛ける

「王はここまで皆を護りたいと言うのか・・・」

王はそれほどまでに仲間を・・・家族を護りたいのか・・・自身が傷ついてもそれを見せず戦い続ける王・・・

「王よ・・・何時までもそんな事をしては疲れてしまいますよ・・・」

王は磨耗していくばかり・・・それでも剣は決して手放さない・・・王は王でありながら守護者なのだ

「私は貴方を護りたい・・・どんな障害からも・・・どんな害悪からも貴方を護って見せます・・・」

王は護る存在で護られる存在ではない・・・だが1人位いても良いだ

ろう．．王を護る者が．．

「私は王に救われた．．だから今度は私が貴方を救いましょう．．」

何年も兵器として扱われた私は磨耗していた．．最初に王に会った時はまた戦うのか．．と思った．．今までの様に兵器として扱われるのだと．．だが王は違った．．自身が深い悲しみを背負っているのにそれを見せず、優しく包み込むように私に接してくれた．．

「私はとても嬉しかった．．人として．．兵器としてではなく普通に接してくれた王の言葉がとても嬉しかった．．」

眠っている王の髪を撫でながら呟く．．王に出会った時私は気付いた．．今まで兵器として扱われていたのは全てこの時の為だったのだと．．私の事を気遣い．．普通に接してくれるこの王に出会う為の苦しい時間だったのだと．．

「名をくれ．．笑う事を教えてくれた．．我が王よ．．私は私の全てを持ってこの恩を返しましょう．．」

名の無かった私に名をくれ、様々な事を教えてくれた王には返せない程の恩がある、私は私の全てを持ってその恩義に報いなければならぬ．．私は空の上から見守る者．．そうだ．．私は空を流れる風のように王を見守ろう．．私の世界を変えてくれた者を護る為にそんな事を考えながら王の髪を撫でながら呟く

「黒騎士の時の貴方は悲しさと寂しさを怒りで隠していましたね．．

」

護ると誓ったのに護る事が出来なかった．．力が足りなかったと涙

を流した王に、私は戦う為の力を与えた・・・そして王は自分の優しさを全て怒りで封じ込め、黒騎士となった・・・私はその姿を見るのが辛かった・・・どれほど力を得ようが悲しみは癒える事は無いのだから・・・だが何時かはこの悲しみを取り払う事が出来るだろうと思いい、王に付き従った・・・それが私の存在意義だから・・・

「今の王の姿が本当の姿・・・悲しみの黒い姿より今の方が良いです・・・」

今の太陽の様な王の姿が本当の姿、何よりも温かく・・・何よりも優しい・・・それこそが王の本当の姿

「私では王の悲しみを取る事は出来なかった・・・だからあの2人の少女には感謝しています・・・でも少し憎いとも思っています・・・」

あの2人は王の背中を押してくれた、それにより王は悲しみの衣を脱いだ・・・だが出来る事なら私がその役をやりたかった・・・王が私を救ってくれたように・・・私が王を救いたかった・・・だからあの時は柄にも無く殺意を覚えた物だ・・・

「止そう・・・らしくない・・・王の仲間に持つてはならぬ感情だ・・・」

王の仲間に殺意を持つなどあつてはならぬ事だと思つた瞬間

「ん・・・セレス・・・私は・・・そうか眠つてしまっていたのか・・・」

王の目がゆっくりと開かれる、私は髪を撫でていた手を止め

「おはようございます・・・どうですか？疲れは取れましたか？」

疲れが取れたか？と尋ねると

「微妙だな・・・疲れが取れたのかそうじゃないのか良く判らないな・
」

首に手を置きながら言う王に

「それでは部屋までお連れしましょう、ゆっくりと休んだ方が良いでしょうから」

王に肩を貸しながら言うと

「そうだな・・・すまないが・・・頼む・・・なんだかとても眠いんだ・
」

力なく笑う王を王の部屋まで連れて行き、私も眠ろうと思い自室に戻る

「王が作ってくれたパジャマが一番好きだな・・・」

眠る習慣が無いと言うと王が作ってくれたパジャマ・・・可愛らしくデフォルトされた猫の物だ・・・正直大人の女性が着る物ではないが・セレスはこれが気に入っていた・・・いやセレスの部屋は意外とフアンシーで

「ぬいぐるみというのも実に良い・・・」

沢山のぬいぐるみが無造作に積まれている・・・その数およそ150・
・とんでもない数だ・・・意外な事にセレスはこういう小物が大好きなのである

「それにこのぬいぐるみが一番良い・・・」

ベッドに置かれているぬいぐるみを抱き上げる・・・それは王が作ってくれたぬいぐるみだ

「寝るとするか・・・」

ぬいぐるみを抱き抱えたままベッドに横になるセレスの顔はとても幸せそうだ・・・長い間戦い続け心を閉ざした融合騎、それを救ったのは同じく悲しみを背負った男・・・悲しみを知らずから優しく出来る・・・痛みを知るから強くなれる・・・セレスと龍也はお互いに良く似ているのかもしれない

とある融合騎の一日 終り

番外編 融合騎の生まれた日

番外編 融合騎の生まれた日・

「・・・・」

ボーツと空を見上げる銀髪の男の姿がある、彼は管理局内で最強と称される魔導師にして神王・八神龍也だ・龍也の姿を見ながら複数の女性がひそひそ話をしている

「やっぱり、兄ちゃんセレスさんが居なくなつて寂しいやろな・・」

私は隣のなのはちゃんにそう声を掛けた

「多分ね・・私達の前じゃそんな素振りを見せないけど・・やっぱり寂しいんだよ・・」

それは間違いないだろう・・襲撃のあつた時から傍にいて支えてくれた者が居なくなるのは辛いだろう・・融合騎 セレス・・ジオガデイス事件の際の唯一の死亡者だ・・いや正確には少し違う・・セレスさんは死んだ兄ちゃんを生き返らせる為に、兄ちゃんの体に取り込まれる形でユニゾンをした・・その所為でセレスさんの意識は完全に消え・・また二度とユニゾンを解除する事も出来ない・・今の兄ちゃんは半デバイスと言っても言い状態なのだ

「何とか出来ないかな？・・ほらリン見たいにさ・・」

フェイトちゃんが言うが私は首を横に振った

「私もそれは考えた・・・でも無理や・・・リン見たいに情報が残ってる物が無い・・・」

リンの時は剣十字に残された情報を元に作ったが、セレスさんの場合それが無いのだ

「でも何かあるかもよ？・・・ほらセレスさんが良く使ってた物とか・セレスさんの部屋にあるかも・・・」

可能性は低い・・・でも賭けて見ても良いかもしれない・・・

「そやな・・・今からセレスさんの部屋に行って見よか・・・」

私はなのはちゃん達と共にセレスさんの部屋に向かった・・・

「うわ・・・凄い・・・」

なのはちゃんが驚きながら言う、私も同じだ・・・セレスさんの部屋の壁を覆い尽くす程の大量のぬいぐるみに驚いていた

「セレスって意外とこういうのが好きだったんだね・・・」

フェイトちゃんが大量のぬいぐるみを見ながら言う・・・意外だった・堅物でクールな印象のあるセレスさんがここまでぬいぐるみを好きだったとは・・・私達が呆気に取られていると

「何してるんですか？」

ビクッ！！

驚きながら振り返るとそこには柔らかな金髪の少女が居た・・私は

「驚かせんで・・クレア・・」

そこにいたのは天雷の騎士の1人のクレアだった

「驚かせたつもりは無いんですが・・所で何してるんですか？セレスの部屋で？」

尋ねるクレアに事情を説明すると

「成る程・・セレスを復活させようと・・それなら・・」

クレアは部屋の奥の行き、何かを持ってくるそれは

「セレスさんの杖・・」

セレスさんのデバイスである杖だった・・

「これなら行けると思いますよ」

これなら行ける・・私はそれを受け取り

「これなら行けるで、ありがとうクレア」

クレアに礼を言うと

「気にしないで下さい・・私達もセレスが居なくて寂しいですからね・・きつと王も同じだと思っんです・・だから生まれ変わりでも良いセレスにもう一度会わせて上げてください・・お願いします」

クレアに礼を言ってから、私はスカリエッツィさんの研究室に向かった

「ふむ・・リン君と同じ様にセレスを復活させるか・・出来ない事では無いな・・」

杖を分析しながら言うスカリエッツィさんに

「良かったわ・・私だけじゃ不安やし、やっぱり専門家に手伝って貰うのが一番やからな」

私とスカリエッツィさんなら融合騎の1人や2人楽勝だろうと思っていたが、スカリエッツィさんは違っていた

「だが・・私でもかなり難しい・・セレスはユニゾンデバイスの原型・・オリジンに類される・・他のユニゾンデバイスとは構造が違う・・」

うつ・・確かにセレスさんは全ての融合騎の原型だ・・最古の融合騎・・構造や能力は現代の科学でも判らない事がある

「だがやり遂げて見せよう・・友の為にな!」

その日からセレスさんの後継機制作が始まった・・制作から一ヶ月後・・

「で・・出来たぞ・・」

スカリエッツィさんには酷い隈がある・・何せ二週間近く徹夜をし

ているからだ

「ほんまや・・・やっとや・・・」

私は目の前の少女を見ながら言った、さらさらの銀髪に蒼い神官服の様なバリアジャケット・・・その全てがセレスさんを連想させる少女がゆっくりと目を開く・・・その目は金だった

「目の色が・・・」

目の色が金色に驚いていると

「マイスター・・・ですね・・・私のマスターは何処ですか？」

マスターは何処だと？尋ねる少女に

「ん？・・・ああ今連れて来るでちょっと待ってて・・・」

私は兄ちゃんを探しに行った

「・・・」

ぼんやりと空を見上げている・・・セレスがいなくなっって一月と少し・・・居ない筈のセレスの姿を求めて私は空を見上げてる事が多くなった

「兄ちゃん!!」

はやてが声を掛けてくる

「どうした？何か用か？」

立ち上がりながら尋ねると

「うん！！ちよつと来て！！」

はやては私の手を握り歩き出した

「ジェイルの研究室？」

はやてに連れて来られた場所はジェイルの研究室の前だった

「ほら、中に入って！」

私ははやてに背を押され研究室に入るなり目を見開いた

「貴方が私のマスターですか？」

目の色が違うがそれは間違いなくセレスだった・・・どういうことだと驚きはやての顔を見ると

「兄ちゃん、セレスさんが居なくなってから寂しいそうやったから・・・セレスさんのデバイスにあった情報から・・・セレスさんの後継機を作ったんや・・・どうかな？」

バれていたのか・・・妹に心配を掛けさせるは情けない・・・そんな事を考えながらはやての頭を撫で

「ありがとう・・・」

礼を言ってからその少女の前に立った

「マスターですか？」

首を傾げながらマスターか？と尋ねる少女に私は

「そうだ、私が君のマスターだ・・・君の名前は？」

少女に名前を尋ねると少女は

「私に名はありません・・・だからマスターに名前を付けて欲しいです・・・」

名前を付けて欲しいと少女に頷き私は名前を考えた

セレスは天界の風だった・・・ではこの子の名前も風から考えよう・・・
顎の下に手を置いて名前を考える

・・・

「ユナ・・・そうだ君の名前はユナだ」

希望を抱き風の様に前に進む者・・・ユナだと言うと

「ユナ・・・私の名前はユナ・・・ありがとうございます、王様・・・」

！！さっきまでマスターと呼んでいたユナが王様と呼んだことに驚くとユナは

「私のマスターは優しい王様・・・だから王様と呼ばせて貰います」

笑いながら頭を下げるユナに

「そうか・・・好きにすれば良いさ」

少女の頭を撫でながら私は研究室を後にした・・・消えてしまった天界の風の二代目・・・希望の風は今穏やかに吹き始めた・・・

ユナが六課の一員になってから数日後

「ユナちゃん！！おはようです！！」

食堂で元気良くユナに話しかけるリインにユナは

「朝から元気ですね・・・リイン・・・あんまり早く大声を出さないで貰えると嬉しいんですが？」

冷静に切り返すユナにリインは

「あう・・・判ったです・・・そうだユナちゃんはまだここに慣れてないですよね！！リインが案内するですよ！！」

六課内を案内すると言うリイン・・・どうやらお姉ちゃんぶりたいうだ・・・案内すると言うリインにユナは

「良いですよ、判らないところは王様に聞くので・・・それじゃあ失礼します・・・」

トレーを片付け歩き去ったユナを見ながらリインは

「あううう・・・うう・・・お兄様」

両目に涙を浮かべながら私に抱きついてくる・・・どうやらリインのお姉ちゃん作戦は失敗に終わったようだ・・・

「良し・・・良し・・・泣くなよ・・・リイン」

私はリインを抱え背中を撫でていた・・・ユナが六課の仲間になって4日たったが・・・まだユナは馴染めていない・・・正確にはユナが馴染もうとしないのだ・・・リインの様に友好的に接しても無視してしまふのだ

（どうした物が・・・）

私はリインの背を撫でながらどうしようか考え・・・私は良いアイデアを思いつき、リインに耳打ちしたするとリインは笑いながら飛び出して行った・・・

「・・・・・・・・」

薄暗い部屋の中で私はぬいぐるみを抱えながら後悔していた・・・あの時リインが案内してくれると言った時、嬉しかった筈なのに素っ気無い対応をしてしまった・・・

「どうして、ああいう風に言ってしまうのでしょうか・・・」

ぬいぐるみを抱き抱えながら呟く

「やはり・・・あの2人が融合騎と言うところが気に食わないのではありませんか・・・」

私はまだユニゾンした事がない・・・その点リインとアギトは王様とユニゾンした事がある・・・それが私に妙な苛立ちを与えるのだ

「嫉妬とは醜い事です・・・」

自分でも嫉妬は醜いと理解している・・・だがそういう行動にどうしても出てしまうのだ

「もう・・・案内してくれないでしょうね・・・」

ギュー・・・ぬいぐるみを抱き抱えながら後悔していると

コンコン

「入るですよ」

リインが私の部屋に入ってくる、ぬいぐるみを慌てて隠そうとするがそれより早く

「可愛いぬいぐるみですね、それに他のぬいぐるみも可愛いです」

リインが私の部屋を見ながら言う・・・私の部屋には大量のぬいぐるみが置かれている・・・元は私の原型になった、セレスという融合騎の部屋らしい

「可愛い？・・・本当ですか？」

可愛いと言っリインに本当か？と尋ねると

「はいです！・・どれも凄く可愛いです・・リインも1つ欲しいですね」

部屋のぬいぐるみを見ながら言っリインに

「良かったら・・欲しいのをどうぞ・・」

欲しいぬいぐるみをあげると言っ

「本当ですか！・・うーん・・どれにしようかな」

リインは笑いながらぬいぐるみを物色し・・1つのぬいぐるみを抱き上げた

「これが良いです！」

リインの選んだぬいぐるみは虎のぬいぐるみだった・暫くリインとぬいぐるみの事を話していたが・・私はある事が気になり尋ねた

「どうして？私の部屋に来てくれたんですか？・・私はリインに酷い事を言ったのに・・」

食堂での事を思い出しながら言っ、リインは

「うーん・・リインは別にさっきの食堂の事は気にしてないです！

それにリインはユナちゃんと友達になりたいですよ」

友達・

リインの言った友達という言葉に私は嬉しいと感じた・・・妙に恥かしくてぬいぐるみを抱き抱えていると

「それでユナちゃんはリインと友達になってくれますか？」

手を差し出しながら尋ねて来るリインに私は

「はい・・・こちらこそ宜しくお願いします・・・」

私はその手を握り返しながら言うと

「はいです！！これでユナちゃんとリインは友達です！！それじゃあ行くですよ！！」

私の手を引き、歩き出したリインに

「どこに行くんです？」

何処に行くのか？と尋ねると

「さっき話してた、案内ですよ！！リインがユナちゃんに六課の事を教えてあげるですよ！！」

笑いながら言うリインと共に六課の中を歩き回り、お昼になると

「そろそろですね・・・ユナちゃん！！お兄様の部屋に行くですよ！

「！」

王様の部屋に行くと言うリインに頷き、私達は王様の部屋に向かった

「ん？来たか・・・丁度良かった・・・いまお昼ご飯が出来たところだ」

王様は机の上に料理を並べていた

「ユナちゃん！早く座るですよ！！」

リインに手を引かれながら椅子に腰掛け、机の上を見るとそこには

「オムライス・・・ですか・・・」

美味しそうなオムライスが3つ並べられていた

「リインのリクエストでな・・・ユナもきつと気に入ると思う、だから冷めないうちに食べよう」

笑いながら言う王様に頷き、私はオムライスを口に運んだ・・・

「美味しい・・・」

ふわふわの卵の上に掛けられたデミグラスソースが非常にマッチしていて美味しい

「美味しいです」

リインはぱくぱくと凄い勢いで食べてく・・・その気持ちは判る・・・凄く美味しいからだ・・・私もゆっくりとオムライスを食べ始めた

「ご馳走様でした・・・」

お腹が一杯になった所為か眠くなり目を擦っていると

「布団を引いてきた、少しお昼寝をすると良い」

笑いながら言う王様に頷き、私とリインは王様の部屋で眠りに落ちた・・・

次の日からリインに手を引かれながら歩くユナの姿が良く目撃された・・・その姿は見ているだけで気持ちが穏やかになるほど、ほのぼのとした光景だった・・・これは平和な毎日の小さな1ページ・・・

番外編 融合騎の生まれた日 終り

キャラ設定

ユナ

外見は10歳前後の少女、長い銀髪に金の瞳を持つ、言動は大人びているが、甘えん坊でぬいぐるみが大好きと子供っぽい所もある
リインとアギトは仲が良い、同じ融合騎と言う所でシンパシーがあるのかもしれない、魔力ランクはSSS - と融合騎の中では最高の能力を誇り、龍也だけではなくアイギナはやてともユニゾン出来るが嫌だそうだ、好きなものは甘い物、嫌いな物は怒った龍也の顔である

番外編 剣帝VS守護者

剣帝VS守護者

それは長かったネクロとの戦いが終わってから数ヶ月後に起きた事だった・・その日はラグナが居らず・・簡単に言えば・・

「守護者っ！！俺と戦えっ！！今日こそ決着をつけてやる！！」

ルシルファアのストッパーが居ない事を示す・・私は溜め息をつきながら

「ルシルファア・・私は疲れている・・出来れば模擬戦はしたくないのだが？」

大将に昇格してから書類整理が増え確実に疲労は溜まっている、だから休暇の日はゆつくりしたいというところ

「黙れっ！！俺はなっ！！ラグナが出掛ける日をずっと待っていたのだっ！！今日しか貴様と本気で戦うことは出来ないっ！！軟弱な事を言わずさつさと演習場に来いっ！！良いなっ！！」

答えは聞いていないと言いたげに私の部屋を後にする、ルシルファア・・私はルシルファアの後姿を見ながら

（まいったな・・ルシルファアと模擬戦すればどちらかは戦闘不能だしな・・）

ルシルファア相手では私も本気に成らざるを得ない・・・そうならば非殺傷でもどちらかは戦闘不能・・・出来れば模擬戦を避けたいと思っ
っている

「お兄ちゃん・・・どうしましたか？」

ユナがどうしたと尋ねて来る・・・私がどういう状況になっているか説明すると・・・

「そうだ！それならユニゾンしてあれを試してみませんか？」

・・・あれか・・・あれはな・・・余りやりたくないな・・・私の顔の変化に気付かないのかユナは私の手を掴み

「さっ速く行きましょっつ！！」

私はユナに手を引かれ演習場に向かった・・・

「・・・」

ルシルファアは既に騎士甲冑を展開し待っていた・・・それに

「兄ちゃん！！頑張れっつ！！！」

「・・・龍也さんっつ！！！！」

何故かはやて達が観戦している・・・私はルシルファアに

「なんではやて達が居るんだ？」

そう尋ねると

「・・・知らん・・・俺も聞きたい・・・」

どうやらルシルファアにも判らないようだ・・・私は呆れながら

「まあ良いか・・・ユナ・・・ユニゾンだ・・・」

「はいっ!!」

元氣良く頷くユナとユニゾンをする・・・

「何だ・・・それは？」

今回試すのは普通のユニゾンとは別のユニゾン・・・私が使える2つの禁呪の内1つを使う為のユニゾンだ・・・だが本音を言えば使わないで済めば良いと思っている・・・私は握り拳を作りながら

「ただのユニゾンだよ・・・ルシルファア」

漆黒のボディーマーに真紅の外套を羽織っただけ・・・騎士甲冑と比べると弱そうに見えるが

「・・・見た目どりの能力と言う訳ではないだろう」

歴戦の騎士であるルシルファアはこのユニゾンがただのユニゾンではないと直感で感じ取ったようだ・・・油断無くグレイダルファアを構えるルシルファアを見ながら・・・私はあるキーワードを口にした

「投影開始」

私の手にルシルファアのデバイスである、グレイダルファアが現れる・・・それを見たルシルファアは

「召喚ではない・・・コピーか・・・」

確かにこれは天雷の書的能力である召喚ではない・・・これは私の魔力で作り上げたコピー

「正解だ・・・これは唯の贋作さ・・・だが贋作が真作に勝てぬということは無い・・・行くぞ・・・ルシルファア・・・」

私はそう言うと同時に駆け出した・・・

「ほー兄ちゃんのユニゾンはあんな事も出来んのか・・・」

私は兄ちゃんとルシルファアとの戦いを見ながら呟いた

キンッ！！キンッ！！！！

全く同じデバイス同士で打ち合っている・・・その動きは一種の舞いの様な美しさがあった

「はあっ！！！！」

ルシルファアが踏み込みグレイダルファアを振るっ

「くっ・・・」

バキンッ・・

兄ちゃんの苦しげな声と共に、偽グレイダルファアが碎ける・・ルシルファアはそれを見て

「成る程・・耐久力は劣るようだな？」

確かに全く同じ姿をしているが、耐久力は低いようだ・・耐久力も同じなら今の一撃で碎けぬ筈だ

「確かにな・・耐久力は劣るが・・だが・・耐久力は問題ではない・・投影開始・・」

兄ちゃんがそう呟くと再び兄ちゃんの手には偽グレイダルファアが現れる

「何っ!？」

今碎いた筈の物が再び現れる、それは少なからずルシルファアに動揺を与える・・兄ちゃんはその隙を突いて

「はあっ!~!」

風切り音と共に兄ちゃんの双剣がルシルファアに迫る

「くっ!~!」

キンッ!!キンッ!!!!

流石は剣帝と言つべきか、兄ちゃんの猛撃を弾き続けるルシルファ
ー・・・だが次の瞬間信じられない事が起きる・・・兄ちゃんが偽グレ
イダルファアを手放し後方に跳び

フロックンファントズム
「壊れた幻想・・・」

パチンツ！！

兄ちゃんが指を鳴らすと偽グレイダルファアが

ドンツ！！

凄まじい音と共に炸裂する

「ぐうつ・・・」

ルシルファアはそれに押され後退する・・・兄ちゃんはその間に

「投影開始・・・」

再びそう呟く・・・また偽グレイダルファアが現れると思ったが・・・
今回は違った・・・

「弓？」

隣で見ていたシグナムが呟く、兄ちゃんの手には間違いなく弓がある・・・
赤塗りの弓を持ちながら

「投影開始・・・」

再び呟くと兄ちゃんの手には剣が現れる．．だが剣は剣だ．．矢としては使えない筈．．私達がそんな事を考えていると

「我が骨肉は振れている．．」

兄ちゃんが呟くと兄ちゃんの手の中剣が振れ始め．．矢のような形になる．．兄ちゃんは弓を構え．．

「偽・螺旋剣．．」
カランドボルグ

兄ちゃんの手から剣が放たれる．．それは嵐の様な魔力を纏いルシルファーに迫る．．

「くっ．．菊燐っ！！」

ルシルファーの手に変わった形の日本刀が現れる、それを即座にクロスさせ

「ガイア．．リアクター！！」

黒い魔力の壁を発生させ、偽螺旋剣を受け止める

「ぬうつっ．．．」

嫌な音を立てて魔力の壁を抉る偽螺旋剣．．だが魔力の壁のほうが強いか、ある程度決った所で偽螺旋剣は停止し、消滅した．．だが兄ちゃんは既に別の獲物を手にしていた．．

「偽・刺し穿つ死棘の槍．．」
グレイボルグ

赤塗りの禍々しい槍を掴み兄ちゃんが駆け出す

「今度は槍かつ！！良いぞ・・・やはり貴様との戦いが一番面白いっ
！！」

獰猛な笑みを浮かべ、ルシルファアが駆け出す

「はああああっ！！！！」

赤い閃光と白銀の閃光が走る・・・私達には辛うじて見える程度で、
多分エリオ達には殆ど見えていないだろう・・・

「菊燐・・・一の型・・・燐火斬ッ！！！！」

菊燐に漆黒の魔力が集まり、振るうと同時に巨大化し兄ちゃんに迫る

「ふっ・・・」

兄ちゃんは槍を回転させその魔力刃を弾き飛ばす・・・だがルシルファアは既に別の技の体勢に入っていた

「菊燐・・・二の型・・・燐火撃ッ！！」

刀から二本の矢が打ち出される

「くっ・・・」

槍を回転させたが、その一撃は槍の耐久力を超えていたのか砕け、
兄ちゃんは直撃を喰らい吹っ飛ばされる・・・その間にルシルファアは両腕を掲げ魔力を収束させ・・・

「ガイア・・フォースッ!!」

兄ちゃんと同じ技だが色が違う炎の弾を放つ、それはシュミレーションのビルを灰にしながら兄ちゃんに迫る・・やばいな・・幾ら兄ちゃんでもあれの直撃は致命的なダメージの筈・・私がそんな事を考えていると

「偽・熾天覆う七つの円環・・」
ローアイアス

兄ちゃんの吹っ飛んで行った方向から7枚の花弁に似た魔力の盾が現れ、ガイアフォースを受け止める

ピキ・・ピキ・・

盾に輝が入り一枚・・また一枚と砕けていくが4枚目で完全にガイアフォースを無力化した・・そして次の瞬間には・・

「工程完了・・全投影待機」

煙の中から弓を構えた兄ちゃんが姿を見せる、その背後には無数の剣が浮いていた・・

「ソードバレル・・フルオープンッ!!」

無数の剣が雨霰の様にルシルファアに迫る

「ぬ・・おおおおっ!!!」

両手の菊燐を振るいながら走り出し、迫る剣を迎撃していくが・・

何発かは体に掠る・・・だがそんな事は関係無いと言いたげに接近し、兄ちゃん目掛け菊燐を振るう

「!」

まさか突撃しながら剣を迎撃するとは思っていなかったのか、兄ちゃんの反応は一瞬遅れ、ボディーマーを深く切り裂かれた兄ちゃんは真紅の外套を翻しながら後方に跳ぶ・・・ここからでも判る兄ちゃんの目から闘志は消えていない・・・戦いはまだまだ続きそうだと私は思った・・・

（不味いな・・・流石はルシルファ・・・剣帝と呼ばれた男・・・ソードバレルをあんな方法で防ぐとは・・・）

ソードバレルに加え矢としても放った一撃も全て弾き飛ばされた・・・その拳句手傷を負わさせれるとは・・・少々不利か・・・冷静に戦況を考える・・・天雷の書から召喚ではなく、自身の魔力でデバイスを呼び出す利点は1つ・・・耐久力は劣る分・・・素早く自身の手にデバイスを呼び出せる事・・・物量に物を言わせて詰みに持つていくのが・・・この戦法の利点だ・・・このまま物量戦に持ち込んでも勝てない・・・

（お兄ちゃん・・・やはりあれを使わないと勝てないですよ・・・）

ユナが言う・・・確かにそのとおりだな・・・出来れば使いたくなかったがしょうがない・・・

「どうした・・・掛かってこないのか？」

菊燐を油断無く構えるルシルファア・・・こちらから打って出るしかないか・・・

「投影開始・・・」

さっきまで使っていた弓ではない・・・シグナムがブラストモードを発動させると同時に左腕に現れるムスペルヘイム・・・あれは本来はSSSランクの弓型のデバイスで、それが簡略化された物がシグナムの左腕に装着されている・・・私が呼び出すのは簡略化される前の弓・・・

「偽・星を貫く聖弓・・・」
ムスペルヘイム

燃え上がる炎の様な形をした弓に魔力を通す・・・それを見て

「その弓を使った、戦闘スタイルは剣型のデバイスで矢として撃つ事・・・そんな事を何回繰り返そうが無駄だ・・・」

私を見据え言うルシルファアを見ながら弓の弦を引きながら

「確かにその通りだが・・・これにはもう1つの使い道がある・・・」

弦を限界まで引き絞った所で私は更に隠された能力を解放する為のキーワードを口にする・・・

「星を貫く・・・（ムスペル）・・・」

私の手の中に燃え盛る炎の矢が現れる・・・

「なっ・・・」

予想外の攻撃に驚くルシルファアを見ながら

「星弓っ！！！（ヘイム）・・・」

炎の矢を撃つ・・・

ゴオオッ！！

放たれた矢は瞬間的に爆発的に燃え上がり、ルシルファアに迫る

「くっ・・・回避は無理か・・・ならば迎撃するまで！！・・・龍鳳天嚇
っ！！！」

迫り来る業火を迎撃する為にルシルファアは漆黒の剣撃を放つ・・・
漆黒の刃が炎の矢を砕いていく・・・恐らく長くは持たない・・・だが・・・
この少しの時間で充分だ・・・私は大きく後ろに跳び詠唱を始めた・・・

「—— No body lives・・・（生きる物はいない・・・）」

「There is not saving in the world（広い世界に救いはない・・・）」

「It's filled, there is a death where it goes, as for the start, it is not only in Cz it there

mainder, and there is not an end either・・・（満ちいく死があり、残りは崩れいくだけ、始まりは無く終わりも無い・・・）」

「I'm watching over everyone with tender loving care・・・（私は皆を見守っているよ・・・）」

「It's nothing but one thay it is there・・・」 Snow Garden!」（そこにあるのは唯一・・・雪の庭園のみ!!）」

その呟きと共に世界が侵食される・・・私を中心に凄まじい吹雪が吹く・・・そして演習場を瞬く間に白銀に染めていく・・・私はその世界の中心に立つ・・・この世界には常に吹雪が吹いている・・・それは全ての敵に恐怖と絶望を与え・・・己の大切な者を護る為の嵐であり、自分に対する無力感を現している・・・私は全てを護りたい・・・だが何時も伸ばした手は届かない・・・そして私の目の前で人が傷つく・・・その絶望感と・・・自分に対する無力感・・・この世界に吹く嵐はその象徴・・・私は吹雪をその身に受けながらゆっくりと閉じていた眼を開き・・・驚き目を見開いているはやて達と信じられないと言っ顔をしているルシルファアを見ながら

「馬鹿な・・・これは・・・」

古代の騎士である、ルシルファアはこの世界の事を知っているだろう・・・

「固有結界・・・己の心を世界に映す・・・禁忌の魔法・・・」

ゆつくりと呟く・・・すると遠く離れたところで見ていたはやて達の驚いているのが判る・・・私はゆつくりと歩き出しながら

「この世界を展開した以上・・・お前に勝ち目はない・・・今の内に降参しろ・・・」

ルシルファアに言う

「ふざけるなよ・・・いかに固有結界とは言え・・・武器も何もない・・・貴様に負けるとは思わんっ!!」

そう言うルシルファアを見ながら

（この程度で諦める・・・ルシルファアではないか・・・仕方ない・・・速く戦闘不能にしよう・・・）

私はそう決め・・・右手を掲げ・・・

「行くぞ・・・剣帝・・・魔力の貯蔵は充分か？」

私はそう呟くと同時に駆け出した・・・

私は信じたくなかった・・・目の前に広がる世界が兄ちゃんの心の中だなんて・・・目の前に広がる世界はどこまでも美しく・・・そしてどこまでも寂しかった・・・隣に居るのはちゃん達も信じれないと言う顔をしていた・・・何時も笑っていた・・・その兄ちゃんの心の中だ等とは到底信じられなかった・・・私がそんな事を考えている中、

兄ちゃんとルシルファアの戦いを見る

「菊燐・・・二の型・・・燐火撃っ！！」

ルシルファアが刀から魔力の矢を打ち出す・・・だが

クンッ・・・

兄ちゃんが左を軽く右手を動かすと、一瞬でその魔力の矢が凍りつき砕ける

「くっ・・・まだだっ！！」

ルシルファアが菊燐を兄ちゃんに振り下ろそうとした瞬間

ピキッ・・・

ルシルファアの左腕が一瞬で凍りつく・・・それでも菊燐を振り下ろすが

「無駄だっ・・・」

兄ちゃんが菊燐を素手で受け止め握り締めると

パキャンッ・・・

乾いた音を立てて菊燐が氷の結晶となる・・・そして即座に氷の嵐がルシルファアを襲う

「ぐっ・・・」

ルシルファアは氷の嵐に襲われ後方に下がる・・・すると兄ちゃんが

「もう諦めたらどうだ？・・・お前に勝ち目は無い・・・」

ルシルファアの体は半分以上凍りつき、もう満足に動く事は出来ないだろう・・・だから諦めろというと

「まだだ・・・まだ・・・俺は・・・負けていないっ！！！」

ルシルファアの手に分の背丈と同じくらい黄金の剣が現れる・・・それに魔力が収束していく・・・それを見て兄ちゃんは

「仕方ない・・・少々眠っていて貰おうか・・・」

兄ちゃんの手に吹雪が集まり、1本の剣となる・・・それは透き通るような美しい剣となった・・・

「ルシルファア
龍」

ルシルファアの王龍刀に漆黒の魔力が集まる・・・

「電雪・・・」

兄ちゃんの手の中の剣に魔力が集まり、美しい輝きを放つ・・・そして

「殺咬（デスバイトツ）！！！」

「神威ツ！！！！」

漆黒の龍と凄まじい吹雪が同時に放たれた・・・

ゴオオッ！！！！

龍と吹雪がぶつかる・・・勝負は互角に見えたが・・・次の瞬間

ピキピキッ・・・

魔力の龍が凍っていき・・・それはルシルファアに迫って行き・・・次の瞬間

「くそ・・・俺の・・・負けか・・・」

ルシルファアがそう呟くと同時にルシルファアは氷の棺に閉じ込められた・・・それと同時に雪原は一瞬にして消えた・・・私はそれを確認してから演習場へと走り出した・・・

「くそ・・・完全に俺の負けだ・・・」

蹲り言うルシルファアに

「だから降参しろと言ったんだ・・・」

ユニゾンを解除した兄ちゃんはルシルファアに回復魔法を掛けていた・・・それを隣で見ているユナ・・・私はそれを見ながら

「兄ちゃんっ！！」

若干怒鳴りながら言うと

「ん？どうした？」

何事も無いように尋ね返してくる兄ちゃんに、なのはちゃんが

「あの・・・さっきの世界が龍也さんの心の中だなんて嘘ですよね？」

信じたくないと言う口調でなのはちゃんが言うと

「残念だが、嘘ではない・・・あの氷に覆われた世界・・・それが私の心の中さ・・・」

自嘲気味に呟く兄ちゃんはルシルファアを肩に担ぎ

「悪いがルシルファアをシャマルに診せて来る・・・だから質問はまた今度だ・・・」

私達にそう言うのと兄ちゃんは演習場から消えた・・・私達はその場から動けなかった・・・あんな寂しい世界が兄ちゃんの世界だと信じたくなかったからだ・・・私達がその場で立ち止まっていると・・・その横を通り、ユナが兄ちゃんの後を追って行こうとする

「待ってくれ、ユナ！！あれが兄貴の心の中だなんて嘘だよな・・・」

ヴィータがそう尋ねるとユナは

「あれは間違いなくお兄ちゃんの心の中ですよ・・・何も無い・・・世界・・・それがお兄ちゃんの心の中です」

そう言うユナは硬直している私達を見て

「でも・・・心の中は変わる・・・貴女達はお兄ちゃんの・・・王の心の中を変えれますか？」

私達を試すようにユナは微笑みながら

「王は何度傷つこうが立ち上がります・・・大切な者を護る為に・・・あの世界は自分がどうなろうと大切な者を護ると言う、王の心を現しています・・・でも心は変わる・・・貴女達が本当に王の事を想っているなら・・・変えられる筈です・・・私は王の傍で見えますよ・・・貴女達が本当に王の心の中を変えられるのかを・・・それでは失礼致します」

そう言うとユナは演習場から消えた・・・残された私達はある決意をした・・・例えどれほど時間が掛かろうと・・・自分の大切な人の心を変えて見せると・・・

固有結界 雪の庭園解説

「—— Nobody lives・・・（生きる物はいない・・・）」

「There is not saving in the world（広い世界に救いはない・・・）」

「It's filled, there is a death where it goes, as for the start, it is not only in Cz it there mainder, and there is not an end either・・・（満ちいく死があり、残りは崩れいくだけ、始まりは無く終わりも無い・・・）」

「I'm watching over everyone with tender loving care・・・（私は皆を見守っているよ・・・）」

「It's nothing but one t hay it is there・・・」 Snow Garden!!」（そこにあるのは唯一・・・雪の庭園のみ!!）」

無限に広がる雪原と吹きすさぶ吹雪が特徴的な世界、能力は敵対者を全て凍結させる事と自分の大切な者を護る事である。どんな攻撃も凍結させ無効とし、また味方が負傷している場合、その傷を全て自分に移しかえる事が出来る・・・それは自分がどれほど傷つこうが大切な者は護ると言う強い決意の証であると同時に、大切な者を護る為なら自分の命さえ捨てても構わないという自己犠牲の心の象徴でもある

剣帝VS守護者 終り

番外編 ヴィヴィオの授業参観

番外編 ヴィヴィオの授業参観

「休暇やのにな〜やること無いわ〜」

私は兄ちゃんの家のリビングのソファーに横になりながらそう呟いた・・今日は休暇だから兄ちゃんと遊びに行こうと思いついたのだが・
・どうやら急な用事が入り私にヴィヴィオの事を頼んで出て行ってしまったのだ

「はあー兄ちゃんも大変やな〜休暇に呼び出されるなんて・・」

そもそも兄ちゃんは元からかなりの有名人だ、それがネクロとの決戦の際に聖王の中でも最強と謳われた神王の生まれ変わりである事が判り、その知名度は大幅に上がった、その所為か仕事の量も増え満足に休めていないのが現状だ

「今度の休暇はゆっくり出来ると良いなあ・・」

私がそんな事を考えていると

「ただいま〜」

ヴィヴィオが学校から帰って来た様で元気の良い声が聞こえてくる

「おっと・・だらしない格好じゃいかな・・」

ソファーでだらしなく寝転んでいる姿で出迎える訳に行かず、確り

と座り直し、襟を整えていると

「パパゝただい・・・あれ？はやて姉？・・・パパは？」

私を見て首を傾げながら尋ねて来るヴィヴィオに

「兄ちゃんな、急な仕事が入ってな、出掛けてもったんよ」

ヴィヴィオにそう言うと、ヴィヴィオは目に見えて落ち込んだ素振りを見せながら

「そつか・・・パパ忙しいもんね・・・しょうがないよね・・・」

そう呟くヴィヴィオを見て

（やつぱ・・・私じゃいかんか・・・ヴィヴィオは兄ちゃん大好きやもんな・・・）

私やヴィータ達にもヴィヴィオは懐いてくれているが・・・やはり兄ちゃんが一番のようだ・・・どうしようか？と一瞬考え

「そうや、兄ちゃんがヴィヴィオにケーキを焼いてくれてたんや、私と一緒に食べよ？」

笑いながら言うとヴィヴィオは

「うん・・・食べる・・・」

そう頷き椅子に座ったヴィヴィオを横目に、冷蔵庫にケーキを取りに行った

「うーん・・・やっぱり兄ちゃんのケーキは美味しいなあ」

ヴィヴィオとケーキを食べながら私はそう呟いた、兄ちゃんはお菓子作りが得意だ、今回もかなり手間を掛けて作ったのが一目で判る、イチゴだけでは無く、様々なフルーツを使い自然な甘さを生かしたショートケーキだ、多分充分売り物になるレベルだろう・・・そんな事を考えていると

「はやて姉・・・これ見て・・・」

黙々とケーキを食べていたヴィヴィオがポケットから一枚の紙を取り出す

「なんや？・・・授業参観のお知らせか・・・」

そこには明日の授業参観の事が書かれていた・・・それを見ていると

「はやて姉・・・パパ・・・来てくれるかな？」

不安げに尋ねて来るヴィヴィオを見て

（ん・・・言い難いなあ・・・兄ちゃん明日の夜まで帰れないって言うてたし・・・）

今回の兄ちゃんの仕事は、管理外世界だが複数のネクロが集結している世界があると報告があり、エリオとハーティーンと共にその世界に向かったのだ・・・幾らなんでも今日中に討伐が終ると思えないが・・・

「大丈夫やで、兄ちゃんが来ないわけ無いやろ？私のほうから連絡しておくで安心し」

不安げなヴィヴィオの頭を撫でながら言うと、ヴィヴィオは

「うんっ！お願いだよ・はやて姉・ヴィヴィオ宿題してくるね！！」

さつきまでとは違い笑顔で自分の部屋に戻っていくヴィヴィオを見ながら

「・・・一応明日の朝にでも兄ちゃんに連絡しよか・・・」

私はそう呟きながら夕食の準備を始めた・・・

次の日

「言って来まーすっ！！」

朝食を食べ終え笑顔で学校に行くヴィヴィオを見送ってから、通信機で兄ちゃんのいる世界に連絡を取る・・・

「どうした？何かあったのか？」

連絡に出た兄ちゃんに

「あんな、兄ちゃん、まだこっちに帰れそうに無い？」

帰れそうに無いか？と尋ねると

「そうだな・・少し難しいかもしれん・・1体だがLV4が居る・・下位の者だがな・・所で如何してそんな事を聞くんのだ？」

首を傾げながら尋ねて来る兄ちゃんに

「そのな・・今日ヴィヴィオの授業参観なんやて・・兄ちゃんに来て欲しいって・・ヴィヴィオが言ってたんよ・・」

兄ちゃんに事情を説明すると、兄ちゃんは無言で立ちあがり、ハンモックで寝ていたハーティーンの肩を掴み

「さつさと・・起きろっ！！」

ハンモックからハーティーンを引き摺り下ろす

「ぐあつ・・貴様・・俺に何か恨みでもあるのかっ！！守護・・者・・」

かなり乱暴な方法で眠りから起こされたハーティーンは酷く怒っていたが・・兄ちゃんの顔を見て動きが鈍る・・この角度からは見えないが・・きつと凄い形相をしているのだろう・・兄ちゃんは無言でハーティーンの襟首を掴み立ち上げらせ

「私は急用が出来た、私の代わりにアイギナを呼ぶ、3人でネクロを討伐しろ・・良いな？」

抑揚の無い声で言う兄ちゃんにハーティーンは

「それは構わないが・・どうしたんだ急に？」

訳の判らないと言う表情のハーティーンに兄ちゃんは

「理由は知らなくて良い・・・その代わりこれをやる・・・今度の休暇にでもラグナと一緒に行って来い・・・」

遊園地のチケットを無理やり手渡された、ハーティーンは

「・・・成る程・・・娘の事か・・・判った早く行ってやれ・・・小僧には俺から説明しておく」

そう頷いたハーティーンに兄ちゃんは

「ありがとう・・・それではやて授業参観は何時からだ？」

時間を尋ねて来る兄ちゃんに

「後1時間あるで」

授業参観の紙を見ながら言うと兄ちゃんは

「家に帰ってる時間は無いな・・・判ったこのまま直行する」

そう呟くと兄ちゃんの姿が画面から消えた・・・恐らく転移したのだろっ・・・私がそんな事を考えていると

「やれやれ・・・守護者も大概親馬鹿だな・・・はやて」

呆れたように呟くハーティーンに

「すまんなあ・・・兄ちゃんの為に」

朝からとんでもない仕打ちを受けたハーティーンに、兄ちゃんの代わりに謝ると

「気にしなくて良い・・・ああいう所も守護者の良い所だと俺は思っているからな・・・」

そう呟くハーティーンに

「今度、有給休暇が取れるように手筈を取つといたるな・・・ほいじや私も仕事があるから切るで」

断りを入れてから通信を切り、私も仕事の為に兄ちゃんの家を後にした・・・

まだかな？まだかな？・・・そわそわしながらパパが来るのを待っていた・・・友達のパパやママが集まる中早くパパが来ないかな？と待っている、教室の外から、カツカツと規則正しい足音が聞こえてくる・・・その足音はこの教室の前で止まり次の瞬間、教室の空気が止まった・・・管理局の制服に腰元まで伸ばされた長い銀髪・・・そして蒼銀に輝く瞳と黒のロングコート・・・待ちに待ったパパの到着だ・・・

・

パパはゆつくりと教室の中を歩き、ヴィヴィオの後ろの方の壁に背中を預ける・・・そこで停止していた先生が再起動し授業が再開された・・・

キーン・・・コーン・・・カーン・・・コーン

「そ・・・それでは1時間目の授業を・・・を終わります、次は運動場で魔法の練習なので遅れないでください・・・」

噛みまくって先生は教室から出て行った、ヴィヴィオはそれを見てからパパの方に行こうとするが

「ヴィヴィオちゃん・・・止めといた方が良いよ?・・・八神大将だよ?」

友達のマリアがそう声を掛けてくる・・・そっか・・・ヴィヴィオのパパだって知らないのか・・・ヴィヴィオの名前は八神ヴィヴィオだけど・・・ヴィヴィオがパパの娘って知ってる人は少ないって・・・シャツハが言ってた様な気がする・・・

「大丈夫だよ、一緒に行こう」

マリアの手を引いてパパの所に歩いて行く、パパの前に行くとパパは笑いながらヴィヴィオの頭に手を置いて

「ちゃんと答えたな・・・偉いぞヴィヴィオ」

そう言って頭を撫でてくれるパパに

「えへへ・・・ヴィヴィオ頑張ったよ、パパ」

パパと言うとマリアが

「えっ・・・ヴィヴィオちゃんのパパなんですか?」

そう尋ねるマリアにパパは

「そうだよ・・君はヴィヴィオの友達かな？いつもヴィヴィオと仲良くしてくれてありがとう」

笑いながら手を差し出すパパに

「えっ・・いや・・」

おずおずとしながら手を差し出すマリアの手を握り握手しているパパの背中にぶら下がり

「パパ、次は運動場だから移動しないと」

移動しないとと言うとパパは

「そうか・・それじゃあ行こうか？」

パパは笑いながらヴィヴィオ達と一緒に運動場に向かった・・

「八神大将どうしてここに？」

運動場に居たシャツハが首を傾げながら尋ねると、パパは

「娘の授業参観に来るのは父親として当然だろう？」

そう言って離れるパパを見ながらシャツハの授業が始まった、基本的な魔法の訓練だけど・・やっぱり少し難しいと思いつながら実技をしているとチャイムが鳴る・・やはり体を動かしていると時間の流

れを早く感じるなと思いながら、教室に戻った

「あの・・・八神大将・・・その・・・握手してくれませんか？」

休憩時間にパパに周りに男の子達が一杯集まって握手してくれないか？と尋ねると

「握手かね？・・・別に構わないよ」

パパは笑いながら皆と握手している・・・やっぱりパパは有名人なんだな・・・と考えていると・・・握手を終えたパパが先生の所に歩いて行き何かを話しているが見えた・・・何を話しているのだろうか？と考えている中チャイムが鳴った・・・

「さて・・・本来なら算数の時間だそうだが・・・少しばかり私の話を聞いてもらえるかな？」

パパが教壇に立ち笑いながら話を始めた・・・皆は真剣にその話をノートに書き始めた

「まず、皆は私の事をどう思う？」

パパがそう尋ねると皆は

「「管理局最強の騎士」」

声を揃えてそう言うとパパは苦笑しながら

「確かに・・・そういう人が多いと思うが、私は自分の事を最強とは思っていないんだ・・・最強や最高と言う言葉は唯の言葉遊びに過ぎ

ないと思う・・仮に私が最強だったとしたら、ネクロ達に街を破壊されなかっただろう?」

ネクロとの争いが終ったばかりのクラナガンの映像を見せながらパパが言う

「でも八神大將が管理局では一番強いってパパが言ってたよ!!」

黒髪の男のが言うとパパは

「君のお父さんは管理局の隊員なのか?」

パパが尋ねるとその子はゆっくりと頷いた、パパはその子に

「それでは聞くが君は自分のお父さんが弱いと思うかな?」

そう尋ねるとその子はゆっくりと頷いた、パパはその子に

「それは間違っていると思うよ、君のお父さんは君や君の家族を護る為に頑張っているんだ、そういう人はとても強いんだよ」

パパが諭すように言うと

「でも・・僕のパパは・・Bランクだから・・そんなに強くないんだよ・・」

その子がそう言うとパパは肩を竦めながら

「魔道師ランクか・・確かに魔道師ランクという制度はある・・だがそれはあくまで目安に過ぎない、簡単に言えば私だって昔はBラ

ンクだった・・・だが戦い方を工夫すれば上のランクの魔道師にだって互角以上に戦えるんだ」

パパはそう言っていると皆を見ながら

「ここに居る子でいずれ管理局の魔道師になろうとおもっている子も居ると思う、だがこれだけは覚えておいて欲しい力だけでは何も護る事は出来ないんだ、人を思いやる優しさ・・・誰かを護ろうという想い・・・そういう気持ちこそが何より勝る武器になるんだ、良いかい？」

その言葉に皆が頷いているとチャイムが鳴った

「むっ・・・少々長話になってしまったか・・・すいません授業を丸々潰してしまいましたね」

パパが謝ると先生は

「いえ・・・とても良い話だったと思います、良い話を聞かせてもらってどうもありがとうございます」

逆に頭を下げる先生にパパは困った様に笑いながら、教室の後ろの方に戻って行った・・・その後皆でお弁当を食べ掃除を終えたところで

「それでは今日の授業はここまでです、皆さん気をつけて帰ってくださいね」

そう言う先生に見送られヴィヴィオ達は学校を後にした

「パパ、授業参観に来てくれてありがとう」

パパの手を握りながら言うと

「私はヴィヴィオのお父さんなんだ、来るのは当たり前だろう?」

にこにこと笑うパパとゆっくり歩きながら家に向かってしていると

「そうだ・・ヴィヴィオ・少し寄り道しようか?」

穏やかに笑いながら言うパパに

「寄り道?・・何処行くの?」

何処に行くのか?と尋ねると

「スバルに聞いたんだがな、この近くに美味しいアイスクリーム屋さんがあるらしいんだ、折角だから寄って行こうか?」

そう尋ねて来るパパの手を握り締めながら

「うんっ!!行くっ!!」

笑いながら返事を返した・・パパは本当に楽しそうに笑いながら

「それじゃあ行こうか?・・言うておくけどリン達には内緒だぞ?」

シーというジェスチャーをしながら言うパパに頷き、2人でゆつくりとアイスクリーム屋さんに向かった・・この日食べたアイスクリームはとても甘くて美味しかった・・後日2人でアイスクリーム屋

さんに行ったのがリンとアギトにバレその店にもう1度行く事になったとは言うまでも無い

番外編 ヴィヴィオの授業参観

番外編 新キャラ紹介編

新キャラ紹介番外編

「どうも皆さん！！こんにちはです！！今回の番外編の司会はリインがやるですよ」

ステージの上で笑顔で挨拶する、リインは上機嫌で

「もう少しで夜天の守護者の第一部も完結です・・・ですがまだお兄様とリイン達のお話は続くです！！・・・と言っても混沌の魔法使いさんはまだ構想を練ってる段階ですけど・・・まあ・・・大丈夫だと思ってるです、構想を練るためにアンケートをやっていますのでまだ参加してない方の参加をお待ちしてるです！！」

にこにこ語るリインは、コホンと咳払いをし

「さて・・・関係の無い話はこちらまでにして・・・さっそくりイン達の新しい仲間を紹介するです！！アザレアちゃん出てくるですよ」

ステージの袖に向かって声を掛けるが・・・そこから人が出てくる気配は無い

「・・・？・・・アザレアちゃん？どうしたですか・・・」

不審に思いリインがステージの裏に歩いて行く・・・何か話してるようです・・・少し近付いてみましょうか・・・

「えっ・・・恥かしいから出たくない？・・・名前だけで良い？・・・駄目ですよ！！ちゃんと出てくれないと！！」

どうやらアザレアと呼ばれた子は出る事を嫌がっているようです・・・ぼそぼそとした声で

「で・・・でも・・・私は・・・その・・・人前に出るのは苦手ですし・・・リインが・・・紹介してくれれば・・・」

そう言うアザレアにリインは

「だから、出てくれないと困るんですよ！！今回は第二部の新キャラのアザレアちゃんが出てくれないと・・・ここでPRが上手く行かないと第二部を始めれないじゃないですか・・・」

何とか説得を試みるリイン・・・暫く話しているとアザレアが

「こ・・・ここで・・・私が出ないと・・・兄さんに迷惑が掛かるんですか？・・・うっ・・・それなら出ます・・・兄さんに迷惑を掛けたくないですから・・・」

どうやら龍也を引き合いに出す事で説得に成功したようです、やっと舞台袖からリインが姿を見せます

「どうもすみませんでした・・・ちょっとハプニングがありました・・・改めてリイン達の新しい仲間を紹介するです！！アザレアちゃんどうぞ！！」

その声と共に舞台袖から、ゆっくりと少女が姿を見せる・・・背格好はリイン達と同じくらいで、服装は黒いワンピースに胸元にベルカ

の剣十字を逆様にしたブローチを付けています・・・ですが・・・顔は上手く見えません・・・何故なら黒いマントのフードを目深に被り僅かに口元とロングツインにした黒髪が見えるだけです・・・彼女・・・アザレアはマイクの前に立ち

「・・・えつと・・・その・・・第二部から・・・登場・・・する・・・予定の・・・兄さんの新しい家族・・・のアザレアです・・・どうか・・・その・・・宜しく願います・・・」

段々声が小さくなりましたが・・・何とかアザレアの自己紹介は終わりました、リインはアザレアの横に立ち

「アザレアちゃん・・・もう少し大きい声で喋れないですか？」

そう尋ねるとアザレアは

「えつと・・・そのごめんなさい・・・出来ません・・・」

ぼそぼそと喋るアザレアに

「無理な物はしょうがないですからね・・・それではまずは第二部でアザレアちゃん活躍？を少しだけ紹介するです」

ネギま！第1巻の後半

「・・・えつと・・・アザレアちゃん・・・取って食おうって訳じゃないの・・・そんなに隠れないでくれる？」

頭に鈴を付けたツインテールの少女が言うとアザレアは

「えっと・・・その・・・ごめんなさいです・・・他人さんは・・・苦手なんです・・・」

龍也の影に隠れたアザレアはぼそぼそと返事を返した・・・その様子を見て龍也は

「明日菜・・・すまないな・・・アザレアは少し人見知りが激しいんだ」
龍也がアザレアの頭を撫でながら言うと

「あ、別に良いですよ、人見知りするって聞いてましたから・・・それじゃあまた来ますね」

そう言うとき明日菜と呼ばれた少女は喫茶店を後にした・・・

「・・・とアザレアちゃんはこんな感じの性格です、ちょっと・・・いや・・・大分人見知りが激しいですが・・・良い娘なんですよ」

リインがフォローするよう言い、アザレアに

「アザレアちゃん・・・その・・・少しでいいからフードを取ってくれないですか？」

フードを取ってくれと頼むと

「フ・・・フードをですかっ!?!・・・でも・・・あの恥かしいし・・・私の顔・・・なんてそんなに面白い者じゃないですよ・・・?」

ばそぼそと言うアザレアに

「やっぱり・・・自己紹介ですし・・・少しでいいからフードを取ってくださいです」

リンが根気良く説得すると

「う・・・判ったです・・・少しだけですよ・・・」

アザレアはしぶしぶと言う様子でフードを取った・・・アザレアの顔は美少女と言う表現が相応しく・・・大きく開かれた金色の瞳に不安気な色を映していた

「やっぱりフードが無い方が可愛いですよ！！アザレアちゃん！」

リンが言うとアザレアはフードを被り直しながら

「可愛い・・・そう言われるのは嬉しいですけど・・・やっぱり・・・フードが必要なんです・・・」

そう言うアザレアにリンは

「むう・・・しょうがないですね・・・でもその内大丈夫なと思うですよ」

にこにこと笑うリンはマイクを握り直し

「それではもう1人の新キャラを登場したいと思います、アザレアちゃんお願いしますです！」

アザレアに言うと、アザレアは

「えっと・・・変われば良いんですね・・・ちょっと・・・待って下さい・・・えっと・・・アリウム？・・・ちよっと・・・変わって・・・」

アザレアがそう呟くとカクンとアザレアの頭が落ち、直ぐに戻る・アザレア？は鬱陶しそうにフードを外す・・・その瞳は紅銀に染まっていた

「まったく・・・いつもこんな物を被って何が面白いんだ・・・アザレアは・・・」

さっきまでと違い堂々とした口調のアザレア？にリインが

「アリウムちゃんですね・・・自己紹介をお願いしますです！」

リインがマイクを手渡しながら言うとアリウムは

「自己紹介か・・・判った」

アリウムはロングツインの髪を解きながら

「・・・私はアリウムだ・・・懸命な読者なら判ると思うが・・・私達は二重人格だ・・・理由はその内判る、アザレア共々よろしく頼む」

軽く自己紹介を終えたアリウムを見ながら

「それでは今度はアリウムちゃんの第二部での活躍を紹介するです

ネギま！、第7巻のヘルマン戦の後

「僕はあの人が羨ましい！！あんな力があれば！！僕は立派な正義の魔法使いになれるのに！！」

エヴァの別荘でそう怒鳴るネギ・・・だがここでその事を言うのは不味かった黙って聞いていた・・・アザレアが

「・・・羨ましいだと？・・・兄上様が羨ましいだと！！・・・貴様に何が判る！！」

目深に被っていたフードを勢い良く外しながら、ネギの服の襟を掴むアザレアの瞳は紅銀色に輝いていた・・・

「何も知らない餓鬼が・・・兄上様どんな思いをしてあの力を手にしたかも知らない餓鬼が・・・軽々しく羨ましい等と言っくなッ！！」

ネギを力任せに投げ飛ばす

「かはっ！！」

背中から別荘の壁にぶつかったネギは苦しそうにするが・・・アリウムはそれを無視し黒い弾丸をネギ目掛けて乱射する

「う・・・うわぁ！！」

必死に回避するネギ・・・その騒ぎに気付いたのか、別荘内に居たエヴァ達が出てくる・・・一瞬驚いた表情を見せたが、直ぐにアリウム

を止めようとするが

「邪魔をするなっ！！吸血鬼っ！！！！私はこの餓鬼を許すつもりは無い！！ここで生まれた事を後悔させてやるっ！！」

アリウムが手を掲げると、朱塗りの鎌が虚空から現れる、それを両手で握り締め

「死にたくなければ構えろ・・・まあ・・・構えた所で殺すがなっ！！」

そう言うときアリウムはネギ目掛け鎌を振り下ろした・・・

「・・・これがアリウムちゃんの活躍のシーンですけど・・・少しやりすぎじゃあ・・・？」

リインが言うときアリウムは鼻を鳴らし

「ふん、何も知らない餓鬼には丁度良いだろう？・・・あの餓鬼は兄上様がどんな思いをして力を手にしたかも知らず、好き勝手喚いた・・・お前だってそうだろう？あの餓鬼に腹を立てなかったか？」

アリウムがそう尋ねるとリインは

「うーノーコメントです・・・さてと少し暗い雰囲気になってしまったアリウムちゃんの自己紹介ですが、本当はとても良い娘なので、アザレアちゃんともどもどうか宜しく願いますです！！・・・それでは少し長くなってしまいましたアザレアちゃんとアリウムちゃんの自己紹介を終って・・・第二部の予告をして終わりたいと思います

す!!」

それは本来ありえない出会いだった・英雄を目指す少年と最強の守護者この2人が出会った時物語は幕を開けた・

「えっと・貴方は誰ですか？」

「私かね?・私は唯の通りすがりの御節介焼きさ・それではまた会おう少年」

初めての出会い・

「何なんだ!!こいつらは!!」

始祖の吸血鬼・エヴェンジェリンでも知らぬ謎の怪物に追い詰められた時

「また会おうと言ったが・まさかこんな所で会おうとは・」

柔和な笑みを浮かべた銀髪の男・そしてその男が扱う見たことも無い協力無比な魔法の数々・そして怪物を倒した男に

「貴方は何者なんですか？」

少年が尋ね、男は穏やかに微笑み

「唯の通りすがりの魔道師さ」

魔法使いと魔道師が出会う時・・・この世界の歴史は変わり始める・

『魔法先生ネギま！外伝 神の名を冠する最強の守護者（仮）』

夜天の守護者完結後、連載予定！！

「つとこれで第二部の予告は終わりです！！お兄様が加わった事でネギまの世界がどう変わっていくのかをお楽しみにです！！それはまた次回の最新話の更新の時に会いましょう！！それではさよならですっ！！！！」

リンが笑いながら言いアリウムは軽く笑いながら

「今度はこんな所ではなく、ちゃんとした舞台で会おう」

新キャラ紹介編 終り

番外編 守護者の幸せな一日

番外編 守護者の幸せな一日

3月11日 機動六課のメンバーは夜遅く食堂へと集められた・・集めたのは部隊長である、八神はやてだ、彼女は神妙そうな顔で皆の顔を見ながら

「こんな夜遅くに集まってもらって悪いなあ・・でもこの話は皆にもとても重要な話になるで、ちゃんと聞いてな」

そう言うときセツテは不機嫌そうに

「私達にとっても重要？・・本当でしょうか？・・貴女の事ですから、また何か悪巧みでもしてるのでは？」

そう言われたはやては少し眉を顰めたが微笑みながら

「そうやね・・本当なら悪巧みの1つでもしたい話や・・でもそうはいかんからな・・本当は皆には教えてくないんやけど・・まあ教えないわけにはいかない話なんよ」

そう笑うはやてにスバルが

「そんなに大事な話って？・・まさか・・またネクロが現れたとか？」

そう尋ねるスバルにはやては

「ちゃうちゃう、そんな胸糞悪くなる話やない・・私が言いたいのは・・後3日で兄ちゃんの誕生日って事や、皆知らんやろ？」

一瞬何を言われたか判らずきよとんとする、なのは達だったが一瞬に何を言われたか理解し

「「ええええええっ?!?!?」」

そう絶叫した・・なのは達は知らなかったのだ・・自分達の想い人の八神龍也の誕生日を・・

「「嘘!私・・バレンタインのチョコ渡しちゃったよ!?!?」」

なのは、フェイト、ティアナが絶叫する・・他にも何人かがしまったという顔をしている、今から3日後・・14日と言えばホワイトデー・・バレンタインのチョコを貰った男性が女性にお返しする日だ、つまり自分は誕生日で祝われる人間に物をくれと催促をしていたのと同義なのだ、そんな皆の顔を見ながらはやては

「だから私達は大好きな兄ちゃんにバレンタインのチョコを渡さなかったんや」

してやったりと言う顔で微笑むはやて達にがつくりと項垂れながらフェイトが

「・・何で今回は私達に教えてくれたの？」

そう尋ねるフェイトにはやては

「兄ちゃん・・最近元気ないやろ?・・仕事疲れとか・・セレスさ

んの事とか・・気つかれも多いやろ？だから皆で兄ちゃんの誕生日を祝って、元気になつてもらおうと思つたんや・・協力してくれるやろ？」

はやてがそう尋ねる前より皆、食堂を後にしていた・・それだけYESと言っているような物だった・・はやては1人になった食堂で

「まあ、祝い事は皆で分け合つた方が良いし・・私達だけやと力不足かも知れんしな・・」

はやてはそう呟き、食堂を後にした・・

はやて達が食堂に集まつてから3日後・・つまり3月14日・・龍也は機動六課には居なかった・・では彼が何処にいるか？・・彼はミッドチルダには居なかった・・彼はのんびりと海鳴の街を歩いていた

「・・突然、父さんと母さんの墓参りに行けとは・・はやては何を考えているんだ？」

私は墓に備える為の花束を持ち、はやてが何を考えているか考えながら歩いていた・・そんな彼のコートを引つ張る小柄な少女・・黒いマントのフードを被っていた・・彼女の名はアザレアと言つた・・彼女は龍也が無茶しないか監視としてはやて達によつて、付き添いとして付けられたのだ、アザレアは龍也のコートの裾を握り締めながら

「・・兄さん・・ど・・どうかしたのですか・・き・・気分が悪い・

「の……ですか？」

しどろもどろで尋ねるアザレアの頭を撫でながら

「いや……大丈夫さ……少し考え事をしてただけだよ……アザレア」

そう言うアザレアは頭を撫でられるのが気持ち良いのか、目を細めながら

「……そ……それなら……良いの……ですが……その私だけじゃなくて……アリウムも心配してた見たいなので……」

ぼそぼそと呟くアザレアが言うアリウムとは彼女のもう1つの人格の名だ……アザレアは2重人格なのだ……かといって精神障害の1つでは無いので、特に問題は無い……私はアザレアを連れて海鳴の墓地の中に足を踏み入れた……ここに来るのは8年ぶりになる……8年の間墓をほったらかしにしていた私は親不孝だな……そんな事を考えながら両親の墓の前に向かった

「父さん……母さん……お久しぶりです」

久しぶりに見た両親の墓は綺麗な物だった……もっと汚れているかと思っていたが、誰かが掃除をしていてくれた様で両親の墓の周りはとても綺麗だった……私は持って来ていた花束を置き、手を合わせてしゃがみ込み、心の中で

（父さん……母さん……来るのが遅くなつてすみません……）

何年も来れなかった事を謝ってから

（でも貴方達はそんな事を気にしなくて良いと笑うでしょう・・・）

私の両親の性格からすると・・・きっとそう笑っただろう・・・そう思うと自然に笑みが零れた・・・私はゆっくりと閉じていた目を開き、隣を見たそこには、小さな手を合わせ熱心に祈っているアザレアの姿があった・・・アザレアは闇を司る融合騎だ・・・だが悪という訳ではない・・・素直でとても良い娘なのだ・・・私がそんな事を考えていると、アザレアはゆっくりと私の方を見て

「良かったですね・・・兄さん・・・お父さんとお母さんに会えて」

そう微笑むアザレアに

「そうだな・・・会えて良かったよ・・・本当に・・・」

私はアザレアを連れて両親の墓の前から離れた・・・離れ際に

（父さん・・・母さん・・・私は前を向いて歩いています・・・だから・・・心配しないで下さい）

心の中でそう呟き墓地を後にした・・・墓地から離れて数分後、アザレアが

「えっ！？・・・変われ？・・・どうしたの？・・・アリウム・・・えっ私だけずるい？・・・うん・・・うん・・・判った・・・変わるよ」

そう言つとアザレアの瞳の色が金から紅銀に変わり、被っていたフードを外し、ロングツインにしていた髪を解きながら

「兄上様・・・寂しいのではないか？」

突然そう言われ私が困惑していると

「私には兄上様がとても寂しそうに見える．．何がそんなに寂しいのだ．．？」

そう尋ねて来るアリウムの頭に手を置き

「私は寂しくなどは無いよ．．はやて達にリイン達．．それにアザレアにアリウムも傍に居てくれる．．だから寂しくなどは無いよ」

そう言うときアリウムは納得したのか、どうかは判らないが．．

「そうか．．では忘れないで欲しい．．私やアザレアは決して兄上様を1人にはしない．．寂しくないように．．哀しまないように．．ずっと傍に居る．．それが．．私が私に与えた罰．．決して消える事の無い罪を償う唯一つの方法なのだから」

最後の方の言葉の言葉は聞き取る事が出来なかった．．だがアリウムが私を気遣ってくれているのは良く判った

「ありがとう．．アリウム」

私がそう言ってアリウムの頭を撫でると、アリウムは

「礼を言うのは．．こっちだ」

そう呟くとアリウムは私のコートの裾を掴み

「そろそろ．．戻ろう．．？」

ミッドに戻ろうと言うアリウムに頷き、私はミッドへの転送ポートに向かった

龍也がミッドへの転送ポートへ向かっている頃・・・機動六課では・・・

「ああああっ・・・間に合わないよ」龍也が戻って来ちゃうよ」

フェイトちゃんの絶叫を聞きながら

「叫んでる暇があったら、手え動かせっ!」

私がそう怒鳴るとフェイトちゃんは

「うう・・・ごめん・・・焦っちゃって・・・」

謝りながら料理を盛り付ける、今私達は兄ちゃんの誕生日パーティーの準備に大忙しだった、なにせ料理を出来る者が圧倒的に少ない・・・私とフェイトちゃんにチンクさん・・・そして癪だが

「何ですか？私に何か言いたい事でも？」

セツテだけだ・・・他の面々は料理は出来るがパーティー用の凝った料理は到底出来る訳が無かった・・・こういう時兄ちゃんが凄いと改めて思う・・・何せ1人で私達4人分動くのだから・・・そんな事を考えながら食堂の会場を見ると

「アギトちゃん、これそっちに置いて下さい」

「おう」

アギトとリインがグラスや皿を並べ・

「違います、それはもっと高く」

ユナがスバルやノーヴェに指示を出し、食堂に飾り付けを行っている・・そもそもアギト達は五分前から兄ちゃんの誕生日に向けてプレゼントや準備をしていたらしく、他の面々とは違いずっと率先して動いている・・ちらりと時計を見る・・5時15分・・アリウムの報告ではもうミッドに到着し、今ゆつくりとこっちに向かっているらしい・・何とか時間を引き伸ばすと言っていたが・・それも、そろそろ限界だろう・・だがこっちの準備は・

「終わったで・」

そう呟き、皿に最後の一品を置く・・これは兄ちゃんの好きな海老を丸々一匹入れた餃子だ・・兄ちゃんは肉より、魚介を好む・・だから私達は魚や貝をメインに料理を仕上げた・・白身魚の白ワインソース掛けやスパゲティボンゴレ等、様々な魚介料理を用意した・・後はプレゼントだが・

「皆、プレゼントは何を用意した?・・変な物は無いやろな?」

そう尋ねると約3名、ビクツと肩が大きく揺れる・

「シグナム、フェイトちゃんのとセットのとティアナのプレゼント回収してきて」

直ぐに持つて来たシグナムからプレゼントの箱を受けとり

「開けるで・・・変な物入れてたら・・・この場で廃棄するでな」

そう言うてからフェイトちゃんの箱を空ける・・・中身は普通の目覚まし時計に見えたが

「・・・成る程・・・兄ちゃんに自分の声入りの目覚まし時計を・・・つてとこか・・・」

その目覚ましのタイマーをセットし、直ぐ鳴らすと

【龍也！朝だよ！早く起きて！】

とフェイトちゃんの声がある・・・フェイトちゃんは慌てて私の手からそれを奪い

「これくらい良いでしょっ！！そんな変な物じゃないんだから」

そう言うてフェイトちゃんは時計を箱に戻した・・・まあ・・・これくらいならと思い、ティアナの箱を開け、私は

「へー随分趣味の良い物選んだな」

私は感心しながらそう呟いた・・・ティアナの用意した物・・・それは美しい銀細工の懐中時計だった・・・獅子をモチーフにしたマークが刻まれており、見た感じとても趣味が良い・・・だがそれは売り物ではないと一目で判った・・・少し歪んでいるのだ・・・売り物では無くハンドメイドの一品だ、ティアナは少し恥かしそうに

「その・・・手作りの方が喜ばれると思って・・・徹夜で作ったんです・
」

確かに徹夜したのだろう・・・ティアナの目の下には薄い隈があった・
・といっても化粧で上手く誤魔化されているので兄ちゃんが気付く
事は無いだろう・・・その時計を箱に戻しラッピングをしなおし、セ
ツテのプレゼントの箱を空けた瞬間・・・私は怒りで目の前が真っ赤
になった・・・セツテの入れた物・・・それは・・・

「・・・あなたは痴女かつ！！なんでこんな物入れるんや！！」

セツテは自分のヌードとは言わない・・・だがかなりきわどい写真を
数百枚単位で入れていた・・・セツテはしらっとした顔で

「痴女？・・・私が？・・・はっ！何を言うのですか？好きな人に自分
の全てを知って欲しいと思うのが痴女だと言うのですか？」

まったく悪びれた様子も無いので・・・

「アイギナさん」

そう声を掛け渡すと、アイギナさんは無言でその写真を全て燃やし
た・・・セツテは

「な・・・んと・・・言う事を・・・私が用意したプレゼントに何をする
のですか！」

そう怒鳴るセツテに

「もっとまともな物入れてから怒れ！」

そう言うときセツテは私のプレゼントの箱を取り

「それでは貴方は何を用意したのですか！」

セツテは私のプレゼントの箱を空け・次の瞬間

「これは・紅茶の葉ですか？」

困惑した顔で呟いた・私のプレゼント・それは私が育てている、紅茶の葉を飲める様に加工した物だ・私はセツテの手から箱を奪い

「これはな・私が毎年兄ちゃんに贈ってた茶葉や・兄ちゃんの好きな・ダージリンのな」

兄ちゃんは紅茶好きだ、だから私は自分で茶葉を作り贈っているのだと言うと

「ちつ・貴女がまともな物を用意してるのなら・私もちゃんとした物を送りますか・」

そう呟くとセツテは兄ちゃんが欲しいと言っていた小説を箱にいれ、包装しなおしていた・それを見た私は

（それがあるなら最初からそれを入れとけよ・）

きつと殆どの人間がそう思っただろう・唯チンクさん達だけは頭を抱え、ぼそぼそと相談していた・多分どうすればセツテを正常に出来るか？の話だと思うが・多分・それは決して叶わない願いだろう・私には判る・ベクトルは違うが私とセツテは非常に

考え方が似ている・・・だから何を考えているのか、大体判る・・・それ故にお互いの存在が疎ましく感じる・・・これが同属嫌悪という奴だろう・・・私がそんな事を考えていると・・・アリウムから

（もうすぐ・・・兄上様と共に戻る・・・準備は大丈夫か？）

その念話を聞き、私は

「今、アリウムから連絡があつた・・・もう直ぐ兄ちゃんが戻ってくるそうや！皆準備をして隠れるで」

食堂の電気を切り、手にクラッカーを持ち食堂の机に陰に隠れ・・・私達は兄ちゃんが戻るのを待った

（寂しいか・・・そうかもしれない・・・）

アリウムに寂しいのではないか？と言われた瞬間・・・心の何処かでそうかも知れないと思ってしまった・・・両親の墓を見た瞬間・・・私は１人なのだと・・・私を知る者は何もいないと・・・そう思ってしまった・・・

（らしくない・・・私は１人ではないというのに・・・何故そんな事を思う・・・）

最近私は自分でも判らない孤独感を感じていた・・・自分が１人ではないと判っているのに・・・どうしようも無く寂しいのだ・・・私がそんな事を考えながら歩いていると・・・

「兄上様・・・六課に到着したぞ?・・・判らなかったのか?」

アリウムのその言葉にハツとして、顔を上げる・・・気が付いたら私は既に六課の敷地内に居た・・・考え事をしていた所為でまったく気が付かなかつたのだ・・・私が驚いていると

「どうしたのだ?・・・兄上様らしくない・・・何をそんなに悩んでいるのだ?」

心配そうなアリウムに

「悩み事など無いよ・・・」

そう言うときアリウムは黙り込み、私のコートの裾を白くなるほど力を込めて握り締めながら

「それなら良い・・・なら私はお腹が空いた・・・食事にしよう」

そう言うアリウムに

「ふむ・・・それなら何か作ってやろう・・・何が食べたい?」

そう尋ねるとアリウムは私のコートを引っ張りながら

「兄上様は疲れている・・・だから食堂で良い・・・食堂と一緒に食べよう」

私はアリウムによって食堂へと連れて来られたが・・・食堂の電気は全て消えていた・・・私が引き返そうと言おうとした瞬間、アリウムの手によって私は食堂の中へ押し込まれた・・・

「急にどうしたんだ・・アリウム」

驚きながら振り返った瞬間・・食堂の明かりが一斉に点けられ

「ハッピーバースデー！！兄ちゃん！！龍也さんっ！！龍也っ！！！！」

その声と共にクラッカーの音が鳴り響いた・・私は驚きながら言われた言葉をゆつくりと呟きながら

「今日は・・私の・・誕・・生・・日・・？」

忘れていた・・今日は私が生まれた日・・私がそう呟くとはやてが

「その反応やと、やっぱり忘れてた見たいやね」

にこやかに笑いながら言うはやてに

「ほら、こっち兄ちゃんは主役なんやから真ん中やで」

はやてに手を引かれ、私は席に座らされた・・隣を見ると、リン達が座っており、1つだけ空いていた椅子にアザレアが腰掛ける・・向かい側にははやて達が座っている・・私は

（私は何と愚かな事を考えていたんだ・・私にはこんなに素晴らしい家族がいるじゃないか・・）

当の本人が忘れているのに私の為に動いてくれたはやて達・・私は孤独などではなかった・・私は1人ではなかった・・私を知る者は

こんなに沢山いるじゃないか・・そう思うと自然に涙が零れてきた・
・私は慌てて左手で目を押さえた・・私が泣いている事に気付いた
なののが

「どうしたんですか？もしかして・・嬉しく無かったですか？」

そう尋ねて来るなのは手を振り

「いや・・違うさ・・嬉しいんだ・・」

私は涙を拭いながら

「私は最近無性に寂しかった・・孤独を感じていた・・私を知る者はもういないと・・自分は1人だとそう思っていた・・」

静かに自分の胸中を語る・・

「だが・・それは間違ってたんだ・・私にはこんなに沢山の仲間がいるんだ・・私は1人などでは無かったんだ・・なんと・・幸せな事か・・こんなに幸せな事は無い・・皆・・本当にありがとう・・！こんなに幸せな誕生日は初めてだ」

そうだ・・私は1人などではなかった・・こんなに沢山の素晴らしい仲間が居た・・それで寂しいや孤独などと言うのは・・彼女達への侮辱にしかない・・私は心から微笑みながらパーティーを楽しんだ・・途中でセツテとはやてが喧嘩したり・・間違えてアルコールを飲んだスバルが抱きついてきたり・・それを見てヴィータが怒鳴るなど・・とても騒がしい物となったが・・私は幸せだった・・心がとても暖かくそして楽しかった・・こんなに幸せな日は本当に久しぶりだった・・皆・・本当にありがとう

守護者の幸せな一日 終り

番外編 姫と黒き守護者

姫と黒き守護者

「ハーティーン！！明日何処か遊びに行こうよ！」

部屋にラグナが入って来ながら言う、俺は

「遊びに？・・・別に構わない・・・」

確か明日は用事が無いので構わないと言うとラグナは

「約束だからね！それじゃあお休み！ハーティーン！！」

笑顔で部屋に戻って行くラグナを見ながら、俺はベッドに横になり眠りに落ちた・・・そのやり取りを見ていた

「・・・くそっ・・・ラグナが・・・俺の所から離れてくぜ・・・」

シスコンが唇を噛み締めていた・・・その頃ラグナは・・・

「えっと・・・服どうしよう・・・？」

私は明日着ていく服を選んでいた・・・ハーティーンはあんまり露出の多い服は好きじゃない、理由を聞いてみた所真顔で

「俺以外の男がお前の肌を見るのが気に食わない」

と言われた・・ハーティーンは八神さんと違い鈍感ではない・・だがその・・普通なら恥かしくて言えない事を真顔で言う・・ストリートに感情を言ってくれるのは嬉しいが・・その恥かしくなってしまう・・私は選んだ服をハンガーに掛け、眠りに落ちた

ジリリリリッ！！

目覚ましの音で目を覚まし、ベッドを出てパジャマから私服に着替えてから部屋を後にしキッチンに立つ

「えっと・・朝は何にしようかな？」

冷蔵庫を見ながら献立を考える・・ハーティーンは嫌い物はない・・だが肉系を好む傾向がある・・やはりそこは男性だからだろう・・そんな事を考えながら冷蔵庫から、ベーコンと卵を取り出し、ベーコンエッグを作りながらトーストを焼いておく・・そろそろ出来るという段階で

「おはよう、ラグナ」

何時もの黒いライダースーツでハーティーンがキッチンの椅子に腰掛ける、最初こそは通い妻の様になっていたが・・今は完全に同棲状態だ、はやてさんやなのはさんが羨ましいと良く私に言ってくる、八神さんはもの凄く鈍感だ・・様々なアプローチを掛けてもまるで意味がないと嘆いていたのを思い出し、笑みを零しながら作ったベークンエッグをお皿に移し2人で朝食をとった・・その後

「それじゃあ・・行こうかハーティーン」

笑いながら出掛けようかと言うと

「ああ、行くとしよう・・・邪魔者は排除したしな・・・」

ハーティーンの視線の先には

「むーっ！むーっ！！」

バインドで全身を縛られ、丁寧に口にガムテープを張られたお兄ちゃん
やんが居た・・・恐らく尾行しようとしていた所を見つけたのだろう
と私は思った・・・私は呆れながらも良い気味だと思い、ハーティ
ーンの手を取り出掛けて行った・・・

「どこに行くんだ？」

そう尋ねて来るハーティーンに

「うんと・・・まずは買い物かな？・・・ハーティーン何時もその服だ
から偶には別の服を着てみようよ」

そう言うとハーティーンは

「服か・・・あまり興味が無いのだがな・・・」

余り面白く無さそうなハーティーンの手を引き、デパートの中へ入
って行った

「えつとこれなんかどう？」

ラグナに手渡された服を見て

「俺が守護者の様な格好をするのか？」

手渡されたのは黒のスーツだった・色こそ違えどそれは管理局の制服に良く似ていた・俺が面白くないと言っていると思ったのか
「んゝやつぱこういうのは趣味じゃないんだね・やつぱり野性的なのが良いのかな？」

首を傾げながら服を選ぶ、ラグナの後ろで待っていると・ラグナは良いのを見つけたのか、嬉々とした表情で

「これだよ！これならハーティーンも気に入るよ！」

そう言われて差し出されたのは、白い服だった・かといってスーツ類の類ではなく、俺が今着ているライダースーツに良く似た雰囲気だった・

「悪くない・・ちよつと着替えてくる」

それを受け取り試着室に入り着替え、姿見を覗き込む

「似合ってるかどうかは判らんが・・悪くは無いな」

中は黒の長袖にその上から白のジャケット・・このジャケットには肩の所から飾りだろつか・茶色いベルトが縫い付けられており、ズボンにも同じ様な茶色のワンポイントが入っていた・・今まで黒

ばかり着ていたが・・・白というのも案外良い・・・そう思いながら元のライダースーツに着替え、ラグナと合流した

「どうだった？ 気に入った？」

心配そうに尋ねて来るラグナに

「ああ、気に入った・・・礼を言う」

そう言っているとラグナは嬉しそうに微笑み、俺の手を握り

「それじゃあ・・・次は・・・あそこに行こうよ」

耳元で呟くラグナに

「それは構わんが・・・その前に食事しよう・・・時間も時間だしな」

のんびりと歩きながら来た為、デパートに到着したのは昼少し前、今は丁度昼時だ・・・そう思い食事にしようと言つと

「そうだね、じゃあご飯を食べてからにしよう」

そう微笑むラグナと共にレストランのある階に移動しようとした時

（あれは・・・）

一軒の目に止まる店があった・・・これは良いと思った・・・後で一人で来ようと俺はそう思った・・・

「美味しかったね」

私は笑いながらハーティーンに言った、私達が入った店は地球食の専門店だった・・値段も手ごろで味も良かったので大満足だった

「そうだな・・だが守護者の方が美味しいな」

そう呟くハーティーンに、私はそれを言ったらこの料理人が可哀想だと思った・・そもそも地球生まれの人とミッドで生まれた人を比べるのは間違っていると私は思った・・2人でレストランのある階を出た所で

「ラグナ・・すまないが・・俺は買う物が有る・・少しここで待っていてくれ」

そう言うハーティーンは1人で別の階に向かってしまった・・最初は着いて行こうと思ったが・・一緒に来いと言われなかった以上着いて行くのは失礼だと思い、素直にここで待っていると

「ねえ、彼女なにやってるの？」

はあ・・と私は心中で溜め息を吐いた・・こうして待っていると必ずと言っていいほどナンパ男が来る・・私はそれが嫌だった

「ねえ・・無視しないでよ・もし暇なら俺とお茶しない？」

暫く無視していると大概の男はいなくなるのだが・・この男はしつこかった・・何度も何度もお茶しよう？とうるさく言ってくる・・

それでも私が返事をしないでいると

「だから無視しないでって、言ってるじゃんよ」

男の手が私の肩に伸びた・それが嫌で離れようとした時

「貴様・何をしている」

その声と共に男の手が横から伸びた腕に掴まれる・声で判る・彼はそうとう不機嫌だと・何故なら掴んでいる手からみしみしと骨が軋む嫌な音がしていたからだ・ナンパ男は涙目で振り返り・ヒツ・と引き攣った悲鳴を上げながら

「・・・く・黒の守護者・」

ハーティーンは黒の守護者と呼ばれている・理由は八神さんと違い敵対者に容赦をしない所から来ている・ハーティーンは男の腕を握り締めながら

「悪いが・ラグナは俺の女だ・薄汚い手で触れないで貰おうか？」

ギリギリとその腕を締め上げ・空いた手で私を抱き寄せ

「大丈夫か？嫌な事はされなかったか？」

そう言うハーティーンは既に男の手を離しており、しつこいナンパ男は脱兎の様に消え去った

「うん、大丈夫何もされてないよ」

と返事を返すとハーティーンは軽く頷き

「行くぞ・・・もうここに用は無い」

そう言い私を連れてデパートを後にし、新しい目的にへと足を進めた・・・

「ここは変わってないね・・・」

私はその場所を見て、微笑みながら言った・・・私達の目的地・・・それは私達が始めてあつた公園だつた・・・ハーティーンは

「ここには結界が張つてある・・・俺達以外誰も入れないし・・・認識する事も出来ない」

そう言うときハーティーンは切り株に腰掛ける、私は寄り添うようにハーティーンの隣に腰掛ける・・・暫く2人で話していたが・・・私は1つどうしても気になる事があつた・・・それはハーティーンが私の事を本当は好きではないのではないか？という事だつた・・・ハーティーンが私の事を本当はどう思っているのか聞きたかつた・・・さつき俺の女と言っていたが・・・それがどういう意味なのか？・・・彼女としてなのか・・・それとも自分の剣を捧げる者と言う意味なのか・・・私は勇気を出して聞こうとした時

「そうだ・・・これを渡さなければ」

ハーティーンが懷から何かを取り出し手渡してくる

「えっと・・・これは？」

首を傾げながら尋ねると

「開ければ判る・・・」

そう言うのと黙り込んでしまったハーティーンを見ながらその包みを開け・・・私は目を見開いた・・・それは

「指輪・・・」

美しい銀細工の施された、宝石付きの指輪だった・・・私が驚いてみるとハーティーンは

「それを左手の薬指に嵌めてくれ・・・」

そう呟くハーティーンの顔は真っ赤だった・・・幾ら私でもこの意味くらい知っている

「えっ・・・結婚してくれって意味？」

そう言うのとハーティーンは完全にそっぽを向き

「前から渡そう渡そうと思っていた・・・だが夜天が教えてくれた・・・行き成り結婚指輪を渡すのは失礼だと・・・だから婚約指輪を買ったんだ・・・嫌なら良い・・・返してくれ・・・俺は気にしない」

そう言うハーティーンに・・・私はなんと馬鹿な事を考えていたのかと思った・・・彼は何時だって真っ直ぐだ・・・真っ直ぐに自分の気持ちを伝える・・・迷う必要も疑う必要も無かったのだ

「ありがとう・・・大切にするよ・・・」

指輪を嵌めながら言うとハーティーンは軽く頷き、またそっぽを向いてしまった・・・その様子が可愛く見えてその腕を抱え込み、下から覗き込むように

「こういう時はキスしてくれると嬉しいけど・・・？」

そう言うとハーティーンは

「駄目だ・・・」

そう言い私の腕を外し隣に座らせる・・・私は

「どうして？キス位してくれたって」

私が頬を膨らませながら言うと

「俺には位ではない・・・俺はお前が大切だから・・・そう簡単にはそういうことはしない」

そう言ってハーティーンは空を見上げる・・・私も空を見上げる・・・この日の空は青く澄んでいて・・・とても綺麗だった・・・

その日の夜・・・食堂には女性陣が集まっていた・・・

「ラグナ・・・嬉しそうやね・・・どうしたん？」

はやてさんに言われて私は左手の薬指に光る婚約指輪を見せて

「ハーティーンに貰ったんです・・・」

頬を赤らめて言うとなのはさんが

「良いなあ・・・ラグナちゃんは恋が叶って・・・私はまだまだ成就しそうにないよ・・・ライバルも多いし」

本当に羨ましそうに言うなのはさんにはやてさんが

「なのはちゃんの恋は絶対に叶わんわ・・・この私が絶対に認めんわっ！」

そう怒鳴ると

「別にはやてちゃんに認められる必要ないもん！！用は龍也さん気持ち次第だもん！」

うっうと睨み合うはやてとなのはに挟まれながら、渡された指輪を見て微笑むラグナ・・・その頃、食堂の外では

「ハーティーン・・・てめええっ！！」

怒りに震えるヴァイスに

「いい加減に妹離れするんだな・・・このシスコン」

ヴァイスを挑発するハーティーンの姿があったそうです

姫と黒き守護者 終り

番外編 姫と黒き守護者 遊園地デート編

番外編 姫と黒き守護者 遊園地デート編

俺は仕事を終え普段着に着替えようとした時、胸のポケットから2枚の紙が落ちる・・・

「ん？何だこれは・・・これは守護者から貰った・・・」

それは守護者から貰った遊園地のチケットだった・・・（番外編 ユイヴィオの授業参観参照）

「ラグナを誘ってみるか・・・」

折角だからラグナを誘い行ってみようかと思い、ラグナの部屋に向かった・・・

コンコン

ラグナの部屋の扉をノックする・・・ラグナの部屋と言っても3人部屋用の大きな部屋の向かい側なのだが・・・ノックしてから暫くすると

「何？ハーティーン？」

濡れた髪を拭きながら、身体にはバスタオルを巻いただけの目のやり場に困る格好のラグナに俺は

「ラグナっ！！そんな格好で出てくるなっ！！」

顔を真っ赤にしながら怒鳴るとラグナは

「そんな格好・・・？・・・あっ！・・・んふふ」意識しちゃっ？」

悪戯っぽく微笑むラグナに

「良いから着替えてから出て来いっ！！」

そう怒鳴り俺はラグナの部屋の扉を閉めた・・・それから5分後・・・

「ん・・・着替え終わったよ・・・何の用？」

パジャマに着替えたラグナが顔を出す、俺はまず・・・

「良いか？・・・ラグナ・・・俺は男だ・・・もう少しその辺を考えてくれ」

そう言つとラグナは左手の指輪を見せながら

「私達婚約してるんだよ・・・意識するも何も無いでしょ？」

にこやかに笑うラグナに何を言つても無駄と判断し

「はあ・・・お前が良いなら・・・俺は何も言わないが・・・用件はこれだ・・・」

渡されたチケットをラグナに見せると

「あ・・・デートの誘い？嬉しいな」ハーティーンから誘ってくれるなんて初めてじゃない？」

そう笑うラグナに

「そうかもな・・・それで・・・お前さえ良ければ・・・明日出掛けよう」

そう言うラグナは微笑みながら

「良いに決まってるよ・・・それじゃあね、ハーティーン・・・明日楽しみにしてるよ」

ウィンクしながら部屋に戻っていくラグナを見ながら俺も部屋に戻った・・・

次の日・・・

「それじゃあ・・・行こう」

白いワンピースに身を包むラグナに

「後ろに乗れ・・・それと確り掴まれよ」

グレイダルファアをビークルモードで起動させそれに跨りながら言う

「言われなくてもそうするよ」

ギュッと抱きついてくるラグナを後ろに乗せて、俺は遊園地に向けて走り出した・・・その姿を見ていたヴィータは

「ラグナはまたハーティーンとデートか・・・良いな・・・ラグナは好

きな人に振り向いて貰えて・・・私は・・・全然だ・・・」

そう呟くヴィータの後ろに龍也が現れ

「ヴィータ、丁度良い所に・・・今からヴィヴィオと買い物に行くのだが・・・お前も来るか？」

そう尋ねられたヴィータは満面の笑みで龍也に駆け寄り

「行くっ！絶対行くっ！！」

ヴィータにも良い事があつた様です・・・

「着いたぞ」

バイクが停まる、私はゆつくりと降り遊園地のゲートを見上げた・・・この遊園地はミッドでもかなり有名な所で雑誌にも良くデートスポットとして紹介されている・・・まあ・・・ハーティーンは知らないだろうけど・・・そんな事を考えているとグレイダルファアを待機状態に戻したハーティーンが

「行くぞ・・・」

そういつて歩き出すハーティーンの後を追って、私も遊園地のゲートを潜った・・・

「どこに行く？」

そう尋ねて来るハーティーンの腕を取り抱き抱える

「どうした？」

どうして腕を抱えられたのか判らないハーティーンに

「デートなんだから・・・せめて恋人に見えるようにしてよ」

私とハーティーンの身長差はかなりの物だ・・・普通に歩いてはとても恋人同士には見えない・・・だからこういう事でアピールするしかないのだ・・・私がしっかりと腕を抱えるとハーティーンは

「それで落ち着くなら・・・俺は構わんが・・・それじゃあ行こうか・・・」

私とハーティーンはゆつくりと遊園地のアトラクションを見ながら歩き出した・・・色々あるアトラクションで私の目に止まったのは

「あ・・・あれ面白そう・・・」

それは室内ライド系のシューティングだった、私がやろうと言うとハーティーンに言う

「判った・・・行こう」

2人でそのアトラクションに向かった・・・

「あー面白かったね」

私が言うとハーティーンは右手を見ながら

「俺にはやはり射撃は向かん・・・」

面白く無さそうに言うハーティーン・・・何故なら彼の撃った弾は殆ど当たらず・・・全然スコアが取れなかったのだ・・・ちなみに今回のスコアの殆どは私が取った物だ・・・面白く無さそうなハーティーンに

「ほら、誰でも苦手な物あるじゃない・・・そんなに気にしないで・・・次はあっちに行こうよ！」

私はハーティーンの手を取り、次のアトラクションに向かった・・・

「ははっ・・・これは良い！！気に入ったぞ！！」

ハーティーンはジェットコースターが気に入った様で、私の手を掴み

「また乗るとしよう！！」

「ちょ・・・ちょっと待ってええっ！！」

私の訴えは決して聞かれる事無く・・・結局7回もジェットコースターに乗る羽目になってしまった・・・

「あうっ・・・気持ち悪い・・・」

口を押さえながら言うとハーティーンは

「す・・・すまない・・・あの感じが空を飛んでるようで心地良かったんだ・・・」

謝ってくるハーティーンに

「空を飛ぶのは気持ち良いの?..」

そう尋ねるとハーティーンはキョトンとした顔になったあと

「ああ..気持ち良いぞ..顔に当たる風..下の方に見える人や建物..それを見るのはとても楽しいぞ」

そう言うハーティーンの手を借りながら立ち上がり..

「今度私を抱き抱えて空を飛んで..そうすれば許して上げる」

上目遣いで言うところハーティーンは

「一緒に空を飛べば良いのか?..それなら約束する..絶対に一緒に空を飛ばう」

そう言うハーティーンに

「それなら許して上げる..それじゃあ..次行こう」

そう言うところ達はまた歩き出した..私が何のアトラクションをやろうか歩き回っていると..私は1つのアトラクションの前で立ち止まった..私が立ち止まった事に気付いたハーティーンはそのアトラクションの看板を見て

「体験型都市伝説..?生きて返すつもりはありません..?..これが良いのか?」

首を傾げながら尋ねて来るハーティーンの顔を見ながら・

（怖いのは嫌いだけど・・こういうのってデートの定番だよね・・それに抱きついても自然だし・・良しっ！！）

私は決意を固め・・お化け屋敷に入ったが・・次の瞬間後悔した・・

「うつ・・」

目の前に広がる・・光景に私は思わず息を呑んだ・・私の目の前に広がる光景は閉塞感で一杯の薄暗い廊下に・・それは廃病院という雰囲気だった・・それに明滅する蛍光灯に照らされた、血の付いた廊下が恐怖心を更に煽る・・私は計画とか関係無しに全力でハーティーンの腕を抱きしめた・・こうでもしないと恐怖心に飲まれてしまいそうだったからだ・・私が怯えながらハーティーンと病院の廊下を歩いていると

「がああああっ！！！！」

ゾンビが飛び出してくる、私はそれで一気に我慢できなくなり

「きゃあああああっ！！！！！！！！」

凄まじい悲鳴を上げた・・それと同時に

「ぎゃああっ！！！！」

ゾンビがハーティーンに殴り倒された・・私とハーティーンがアトラクションの外に出ると

「お客さん・・・困りますよ・・・ゾンビを殴り倒しちゃ・・・」

係員の人がそう文句を言いかけたが

「ギロリッ・・・」

ハーティーンに睨まれ、係員の人は冷や汗を流しながら

「今回は許しますから・・・次は止めて下さいよ」

そう言つて係員は消えた・・・私が掴んでいたハーティーンの服を見ると・・・それはよれよれになってしまっていた・・・私が謝ろうとすると、ハーティーンの大きな手が私の頭の上に置かれ、わしゃわしゃと撫でられる・・・私が驚いていると

「怖かったんだな・・・良し良し・・・大丈夫だ・・・俺が傍にいるからな・・・怖い物など何も無いさ」

そう微笑むハーティーンに

「うん・・・大丈夫・・・もう怖くないから・・・」

私はそう呟き時計を見た・・・もう1時を過ぎている

「そうだ、そろそろお昼にしようよ」

私がそう言つと、ハーティーンは

「そうだな・・・では行くとするか」

頷くハーティーンと一緒にレストランへ向かった・

「おれは海老ドリアにするが・・ラグナはどうする？」

首を傾げながら尋ねて来るハーティーンに

「私は・・ピラフにするよ」

2人で昼食を食べる・・食べ終えてから2人でまたアトラクションで遊び・・大分日が傾いてきた所で

「最後にあれに乗ろうよ！」

私はハーティーンの手を引き観覧車に向かった・

「綺麗だね」

私のがのんびりと言うとハーティーンは

「確かに・・だがお前の方が綺麗だ」

真顔でそんな事を言うハーティーン・・恥かしくなつて窓の外を見る・・本当に不意打ちだ・・何の前振りも無く突然そんな事を言う・
・本当に卑怯だ・・私がそんな事を考えていると・・ハーティーンは窓の外を見ながら

「俺は幸せだ・・お前といると本当にそう思う・・だから・・1回だけ言わせて貰う・・1回しか言わないからちゃんと聞いて置けよ」

そう言つて1回言葉を切つたハーティーンは私の顔を見て

「良いか、絶対に俺の傍にいる．．お前の居場所は俺の隣で、俺の居場所はお前の隣だ．．それを絶対に忘れるな」

その告白めいた言葉に私は返事を返す事が出来なかった．．でも私は確りと頷いた．．するとハーティーンは満足気に頷き私を抱き寄せた．．ハーティーンの体温が心地良くて．．ずっとこのままで居たいと思つた．．でもそれは叶わない願いで．．観覧車は一周し．．降りる時が来る．．私とハーティーンはゆつくりと観覧車を降り、そのまま遊園地を後にしようとした．．だがハーティーンはバイクを出さず何処かに連絡を取つていた．．遠くから聞こえてくるハーティーンの声が途切れ途切れに聞こえてくる

「．．何？．．出せない．．黙れ．．俺のやる事に．．文句を言うのか．．責任を取れない．．？構わん．．良いな．．俺がやる事に文句を言うな」

そう言つとハーティーンはゆつくりと歩いて来て、私を抱き抱える

「ちよつ．．急にどうしたの？」

私が慌てながら訪ねると、ハーティーンは

「セットアップ．．」

騎士甲冑を展開し空を舞う．．私は慌てながら

「ちよつと飛行には許可が要るんじゃない？」

そう尋ねるとハーティーンはにやりと笑い

「そんな事は知らん・・俺がやると決めた事に文句は言わせん」

そう笑うハーティーンと夜景を楽しみながら六課へと帰った・・私はベッドに横になりながら

「今日は楽しかったな・・ハーティーンの気持ちも判ったし・・」

指輪を見ながら呟き、私は布団に入りながら

「おやすみ・・ハーティーン・・」

ハーティーンと一緒に撮った写真をそう呟き、私は眠りに落ちた・・その頃ハーティーンは

「守護者・・俺はただラグナを喜ばせたかった・・それだけなんだ・・それなのにこれは酷くないか？」

大量の書類を見ながら、冷や汗を流すハーティーンに龍也は

「規則は規則だ・・頑張つてやれ・・」

そう言う龍也は自分の部屋に引き返していく・・龍也の部屋では

「パパ！！おかえりっ！！」

「・・あ・・兄貴・・お帰り・・」

ヴィヴィオと遊んでいるヴィータが居て、龍也は

「すまないな・・ヴィータ・・ヴィヴィオの面倒を見させてしまつて、・・ヴィータはもう部屋に帰らないといけないんだ・・」

龍也に言われたヴィヴィオは両手でヴィータの服を掴み

「いやっ!!ヴィヴィオ、ヴィータねねと寝るのっ!!」

嫌々と首を振るヴィヴィオに龍也は苦笑しながら

「・・ヴィータ・・すまないが・・ヴィヴィオと一緒に寝てくれるか?」

そう言つとヴィータは

「えっ・・そういう事は兄貴も一緒か?」

赤面しながら言つヴィータに龍也は

「まあ・・そうなるが・・嫌か?」

龍也がそう尋ねるとヴィータは

「い・・嫌じゃねえよ!!・・その・・うん・・嬉しいかな?」

そう言つヴィータは赤面しながら、布団に横になり・・眠りについた・・その顔はとても幸せそうだった事をここに記す

番外編 姫と黒き守護者 遊園地デート編 終り

一周年記念番外編 ラグナ争奪戦（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！さて記念すべき一周年記念の最初の番外編は・・・ハーティーンとラグナ関係のリクエストから行きます！！やはりダントツ人気のこのカップルが最初には相応しいと思ったので、しかも二本立てです！最初の話のリクエストは「スコピオン様」からでテーマはヴァイス、ハーティーンのラグナ争奪戦です！・・・それと私の我がままなのですが・・・一周年記念の番外編は一つ一つバラバラに感想をくれると嬉しいです、一つ一つ感想を書くのが面倒な場合は番外編のタイトルの下に感想を書いて頂いて、また次のタイトルを書いて頂いて感想を送ってくれると嬉しいです、私の我侭ですが・・・どうかお願いします！それでは記念番外編・・・の始まりです！！

一周年記念番外編 ラグナ争奪戦

一周年記念番外編 ラグナ争奪戦

ギリギリ

「ちくしょう・・・ハーティーンのやろう・・・ラグナとベタベタしやがって・・・」

俺は唇を噛み締めながらハーティーンを睨んでいた・・・ハーティーンは基本的にラグナの傍におり、ラグナに近付く不届き者を牽制している・・・悔しい事に俺もこの中に含まれている・・・またラグナもハーティーンの傍におり、非常に仲睦まじく良いカップルだと俺は思うが・・・頭で理解出来ても心で理解出来ないのだ・・・

「昔は・・・昔は良かった・・・」

お兄ちゃん、お兄ちゃんとラグナが言ってくれた昔が懐かしい・・・そんな事を考えていると

「それじゃあね、ハーティーンお休み」

ラグナが微笑みながらハーティーンに言っただ部屋に戻っていく・・・部屋と言ってもハーティーンとラグナは同じ部屋・・・3人用の大部屋だ・・・もう同棲に近い状態だ・・・それが俺の不安を掻き立てる・・・もしハーティーンがラグナを襲ったら・・・そう考えると夜も寝れなくなる・・・俺は意を決して

「ハーティーンッ!!」

食堂で酒を飲んでいたハーティーンを怒鳴りつけると

「何だ、ヴァイス・・・お前も飲むか？」

俺に酒を勧めてくるハーティーンに

「違う!!俺は・・・お前に決闘を申し込む!!」

俺がそう言つとハーティーンは

「決闘?・・・良いぞ・・・死にたいのなら何時でも墓場に送つてやるぞ?」

獰猛な笑みで笑うハーティーンの気配に吞まれ掛けていると、近くに居たなのはさんが

「ヴァイス君、無茶だよ!!殺されるよ」

そう俺とハーティーンの戦力差は歴然・・・普通に戦えば俺の負けは決まっている・・・だが俺が勝負するのは戦いでなく

「勝負のテーマは馬鹿の科学者に決めて貰う!良いな明日だぞ!!明日演習場に来いよ」

俺は捲くし立てるように言つと

「どんな勝負でも俺は負けない・・・良いだろう・・・明日だな・・・楽しみにしているぞ」

そう笑うハーティーンに背を向け、俺は食堂を後にした・

「何だ・・・これは・・・」

俺は演習場を見て眼を見開いた・・・演習場が何かの祭りの場の様になっている・・・一般局員達が観客席で盛り上がっているし・・・審査員席には夜天やエースの姿が見える・・・俺が困惑していると

「ハーティーン！！こっちだ来いッ！」

その声の先には腕を組んだヴァイスが居た、俺はヴァイスの待つ場所に向かった・・・

「さあ・・・俺とお前の真剣勝負だ・・・絶対俺が勝つから覚悟しろよ」
そっつい笑うヴァイスを見てみると、ジェイルが来て

「さー今回はハーティーン対ヴァイスのラグナ争奪戦だぁ！！勝負は簡単、このルーレットに書かれたゲームで勝負して貰う！！」

そう言うジェイルの後ろにルーレットが現れる、ジェイルはそれを見ながら

「勝者にはラグナ嬢との豪華ディナーだ！！作るのは・・・当然この人だーッ！！」

モニターに守護者の姿が映る・・・守護者は頭を抱えながら

「料理をするのは良いのだが・・・何なんだ・・・これは？」

今一状況を掴めていない守護者にヴァイスが

「旦那！！俺とこいつが今から勝負するんツすよ！！、旦那にはその賞品としての食事を作って欲しいっす！！」

ヴァイスが事情を説明すると守護者は

「まあ・・・別に良いが・・・それじゃあ調理を始めさせてもらっ・・・」

そう言う守護者が調理を始める、ここでモニターの映像が切れる、ジェイルがマイクを片手に

「制限時間は龍也が料理を仕上げるまで、つまり龍也が料理を仕上げるまでに相手より多くゲームに勝利した方の勝ちだー！！それじゃあ・・・早速第一のゲームと行こう・・・ルーレット・・・スター
トッ！！」

ジェイルが手を挙げると、ルーレットが音を立てて回る・・・そして第一のゲームが決まった・・・

「第一のゲームは・・・龍也に関する5問のクイズだーッ！！」

何なんだ・・・この突っ込み所満載のゲームは・・・俺が呆れている中ジェイルが問題を読み上げる

「第一問 龍也の事が好きな女性の数を挙げて下さい」

・・・簡単だろう・・・俺とヴァイスは同時にマジックで手元のホワイトボードに答えを書く

「13人・・・正解！！では第二問・・・龍也の謎特技の中に服脱がしがある？・・・マルかバツか？」

守護者が他人の服を脱がす所・・・想像できん・・・バツだな・・・ホワイトボードを出すとヴァイスはマルと書いていた・・・

「おーとツ！！答えが割れた・・・正解は・・・マルーツ！！龍也の特技の中には服脱がしがあります！！」

！！馬鹿な・・・守護者がそんなセクハラをするとは・・・俺が困惑している」とジェイルの解説で

「ちなみにこの特技は主にヴィヴィオやアギト達が対象の様です、用は汚れた服を着替えさせる為の特技です」

しまった・・・あいつの回りの子供の事を把握してなかった・・・俺が自分の失態を後悔している中、次の問題が読み上げられる

「第三問です！！龍也が苦手な人物を2人挙げて下さい！」

これは楽勝だな・・・カリムとクイント・・・2人の名前を書く・・・横目でヴァイスの答えを見ると・・・リンディとカリムと書かれていた

「今回も答えが割れた・・・正解はカリムとクイントさん！！、リンディさんも龍也の苦手な人物ですが・・・クイントさんの方が上です！！！」

これでイーブン・・・次の問題は・・・守護者の義手の職人・・・ジェイル・・・で2人とも正解・・・最後の問題は・・・守護者の義手の方の手は？・・・左腕・・・これも両方正解・・・

「最初のゲームは引き分け、では次のゲームは・・・」

再びルーレットが回り止まったのは・・・

「次のゲームは走り高跳びだあッ！！」

・・・何故？走り高跳びがあるんだ？俺が理解に苦しんでいる間にセツトが変形し、走り高跳びが出来るようになる

「1本勝負・・・それではヴァイスからだ」

その声に従ってヴァイスが

「おおおりゃあああッ！！」

ダンッズシャアアアッ！！

「・・・記録は・・・5M45！中々の高記録です、それでは次はハーティーンだ、どうぞ」

俺は呆れながら走り出し、軽く踏み切りをして跳躍した

タンッ・・・ズシャア・・・

軽い音を立てて着地し記録が発表される・・・

「記録は・・・6M15!・・・この勝負はハーティーンの勝ちだ・・・やはり身体能力的ではヴァイスには勝ち目が無いのかー」

妙に盛り上がっているジェイルに呆れていると再びルーレットが回る・・・あまりに馬鹿らしい勝負が多いのでハイライトで行こう・・・

ゲームその3 シルエットクイズ 協力者・・・スバル、ティアナ、セツテ、ウエンディ、キャロ、ルーテシア、リイン、アギト

内容は極めて簡単、普段と違う格好のスバル達を当てると言う極めて簡単なゲームの筈だったのだが・・・

「・・・アギト」

7問目・・・俺がキャロとアギトを間違え、ヴァイスの勝ち・・・これでイーブンに戻った

ゲーム4 ストラックアウト・・・

9枚の的にボールをぶつけ、その的を弾き飛ばすと言う物だ・・・これは言うまでも無く俺の勝ちだ

「こんな感じか?」

ヒュッ! スパント!!

軽い音を立てて2枚抜きを繰り返し、この勝負は俺の勝ちだった・・・これで2-1・・・このまま行けると思ったのだが・・・

ゲーム5 折り紙

・何で折り紙が？と暫く考え込み・結果が出た、どうやらあのルーレットには俺の得意な物、苦手な物がバランス良く入っており・今回は苦手な物が出てしまったようだ・俺はイライラしながらテーマの鶴を折り、審査員席に持っていたが・結果は言うまでも無く・

「これが鶴？・ハーティーンこれ鶴に見えないよ」

「ぷつ・無敵の・ああ無敵は龍也だね・最凶の騎士にも苦手な物があるんだね」

「あつははっ！！不器用すぎるで〜ハーティーン」

3者3様に良い様に笑われ、俺はとても傷ついた・仕方ないではないか・こういうのは本当に駄目なんだ・俺は諦めの境地に達し・笑われると言う苦行に耐えていた・2-2

ゲーム6 腕相撲

ブン、ボキヤツ！！

「うぎゃあああッ！！腕！！腕がぁッ！！！」

これで判って貰えただろうか？俺が力加減を間違え、ヴァイスの腕を粉碎・そして

「はいはい、今治しますよ〜」

「どうして・私が・王の命令だからって・こんな事をしなけ

れば・・・」

湖と氷によって治療され、骨折が治ったが・・・これが次のゲームでの悲劇の引き金となっていた事を俺は知らなかった・・・3-2・・・これは内容が濃いのでそのまま教えよう

「次のゲームは・・・ポイズンルーレット」

ルーレットも回さずゲームを発表するジェルに

「待て、今回はルーレットを回さないのか？」

そう尋ねると湖と氷が

「ハーティーンがヴァイスさんの腕を折ったり、意識不明に追い込んだ場合・・・特別ゲームになるんです」

にこにこ言う湖に

「・・・私とシャマルが・・・アタリの料理を作りました、私の場合業とですけど・・・シャマルは素でアタリを作りました・・・この場合のアタリの意味が判りますか？」

そう尋ねられた俺とヴァイスは同時に

「「死亡ゲームかあっ!?!」」

そう悲鳴を上げた、湖がオリジナルで料理を作ればそれだけで兵器・・・そして氷が不機嫌な状態で料理を作れば・・・それはもう核に匹敵する脅威だ・・・俺とヴァイスが震えている中、俺とヴァイスの前に

5品ずつ料理が置かれる・・・見た目は全部普通だが・・・この5つの内1つには猛毒が入っている・・・いや・・・猛毒なんて甘いか・・・

「それでは2人同時に1品ずつ取って食べてください・・・」

俺の前に置かれてるのは 唐揚げ、チャーハン、チンジャオロース、八宝菜、シウマイでヴァイスの前には、刺身、鳥のつくね、味噌汁、玉子焼き、天ぷらの5品・・・！1個安全パイがあるぞ！？刺身なんてどうしようが毒にはならないだろう！？・・・俺が驚いている中ヴァイスは刺身を取る、俺は手を震わせながら八宝菜を取った・・・

「それでは2人同時に食べてください」

俺は震える右手を左手で押さえ、八宝菜を1口食べた・・・モグ・・・モグ・・・

「美味しい・・・」

普通に美味しい・・・どうやらこれはセーフの様だった・・・ヴァイスも当然セーフ・・・俺とヴァイスが胸を撫で下ろしていると審査員席の夜天が

「1品目は2人ともセーフやったみたいやね、おめでとさん・・・ちなみにアタリを食べたらこうなるで」

モニターに医務室が映し出されそこには

「・・・・・・・・・・」

青い顔で横たわる、盾とグリフィスの姿があった・・・2人とも良い

具合に痙攣し・・・死ぬ一步手前に見える・・・俺とヴァイスが戦慄している。とジェイルが

「それでは2品目を食べてください」

俺は慎重に料理を選び・・・今度は唐揚げを・・・ヴァイスはつくねを取った・・・

「美味い・・・」

2人ともセーフ・・・しかしなんで一々料理を食べる度にこんなに怯えなくてはいけないんだ・・・俺はそんな事を考えながら3品目を取った・・・俺はチンジャオロース、ヴァイスは玉子焼き・・・これもお互いにセーフ・・・これで確率は二分の一になった・・・チャーハンかシュ

ウマイかだ・・・俺は直感でシュウマイを取った・・・ヴァイスは天ぷらだ・・・

「それでは4品目・・・どうぞ」

2人同時にそれを口に運んだ瞬間・・・

「ぐはああッ!?!?」

何だこれは!?!?口の中の物が飲み込めない・・・それどころか身体中が拒否反応を示す・・・それでも何とか飲み込み隣のヴァイスを見ると

「げぶあ・・・」

ゆっくりと泡を吹きながら倒れるヴァイスを見ながら俺も意識を失

った・・俺が意識を取り戻したのは30分後の事だった・・

「うおー俺は生き残ったぞーッ！！！」

ガッツポーズのヴァイスをぼんやりとした目で見ていたが・・ヴァイスが何を言っているのか理解した瞬間、ジェイルに詰め寄る

「おい！ヴァイスもアタリを引いただろう！！今回は引き分けじゃないのか！？」

そう尋ねるとエースが

「2人同時だったから先に立った方が勝ちって言う特別ルールにしたの・・それでさっきヴァイス君が「ラグナを・・渡すかああああッ！！！」って絶叫しながら立ち上がったの、だからヴァイス君の勝ち」

これでまた引き分けに戻ってしまった・・なんとしても次のゲームで勝たなければ・・俺がそんな事を考えていると

「それではラストゲームのルーレットを回すぞ」

音を立ててルーレットが回り・・最後のゲームが決まった

「スポーツチャンバラ！・・おおう・・ここでヴァイスは完全に天に見放されたーッ！！やはり妹から離れるという神の声なのかー」

にこにこ言うジェイルを見ながらチャンバラの棒を取り

「・・これでこのくだらない茶番も終わりだッ！！」

俺は一瞬でヴァイスを叩きのめした・俺が馬鹿2人・もう1人はジェイルだ・その2人を戦闘不能にしたところで夜天が

「ほい、ハーティーンの勝ち・大方の人の予想を裏切って善戦したヴァイス君に拍手」、それじゃあハーティーンはそのままラグナと夕食ね・ラグナの部屋に兄ちゃんが食事の準備しとるで・」

俺は夜天の説明を聞き終わる前に演習場を後にした・

「遅いなあ・ハーティーン・」

私はジュースを飲みながらハーティーンが来るのを待っていた・さつき八神さんが夕食の準備をしながら

「もう直ぐ来ると思うから待っててやってくれ」

そう言って帰ってから既に20分・何があっただろう？ちょっと不安になってきた所で

「すまん・遅れた」

ハーティーンが部屋に入ってくる・心なしか少し疲れているような気がしたが、ハーティーンは笑みを浮かべながら椅子に座り

「少し面倒事があったんだ・それで遅れてしまった・」

理由を説明してくるハーティーンに

「あらかた予想が付くよ．．お兄ちゃんでしょ？」

私がそう言つとハーティーンは頷き

「そうだ．．だが最初に言っておくぞ、俺から喧嘩を仕掛けたんじゃないからな」

不貞腐れたようにハーティーンに苦笑しながら

「判つてるよ．．それじゃあ．．ご飯にしよう？」

八神さんが用意してくれた夕食は豪華なフランス料理だった．．魚介をメインにした．．見た目にもお洒落だった．．私はハーティーンのグラスにワインを注ぎ

「これからも宜しくね．．私の騎士様」

そう言つとハーティーンは赤面しながらそっぽを向き

「こちらこそ．．よろしく頼む．．我が姫．．」

恥かしそうに言うハーティーンに笑みを零しながら私は食事をはじめた．．それはとても美味しくて．．それと同時に心が暖かくなった．．それはきっとハーティーンと一緒にだからだと私は思った．．

1度消えてしまった．．私の大切な大切な人．．今貴方と過ごすこの時が．．私にとっての．．宝物です

一周年記念番外編 ラグナ争奪戦 終り

一周年記念番外編 ラグナ争奪戦（後書き）

どうでしたか？今回の話は？リクエスト通りになったかどうか・・
あんまり自信が無いのですが・・自分ではそれなりには良い出来だ
と思います、次回の一周年の番外編もハーティーンとラグナのお話
です、次回も楽しみにしていてくれると嬉しいです、それでは失礼
致します

一周年記念番外編 姫と黒き守護者 結婚式編（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回の一周年記念の番外編は「鳴神様」からのリクエストでラグナとハーティーンの結婚式＋はやて達の暴走の話になります、時間軸は第二部完結後です、ネギま！？の世界でハーティーンが抱いた危機感とは？・・・おっとこれ以上言うのは反則ですね・・・それではごゆっくりお楽しみください

一周年記念番外編 姫と黒き守護者 結婚式編

一周年記念番外編 姫と黒き守護者 結婚式編

「何か落ち着くね・・自分の部屋は」

私達は別の魔法使いの世界から帰って来たばかりだ、それで自分の部屋は落ち着くねとハーティーンに言っと

「・・・」

無言で私を見るハーティーン・・心なしか不機嫌に見える

「どうしたの？楽しくなかったの？」

何で不機嫌なのかと尋ねるとハーティーンは

「あの世界は・・楽しくなどなかった・・ラグナには俺が居るのに・
・寄って来る馬鹿どもが居たからな」

不機嫌に言うハーティーン・・私は

「もしかして・・やきもち焼いてる？」

そう尋ねるとハーティーンは頷き、一気に私の前に立ちそのまま痛いくらいの力で抱きしめてくる

「そうだ・・俺はお前を誰かに奪われるのではないか？・・そう思

った・・・怖かった・・・お前が俺から離れていくと思うと・・・」

私を抱きしめながら言うハーティーンは私の眼を見て

「もう少し待とうと思ったが・・・もう駄目だ・・・ラグナ・・・お前に頼みがある」

真顔で言うハーティーンは顔を紅くしながら

「俺と・・・同じ時を歩んでくれ・・・絶対に俺の隣に居てくれ・・・ラグナ・・・俺と結婚して欲しい・・・」

プロポーズをしてくるハーティーンに

「えっ・・・」

突然のプロポーズに私は驚いた・・・私達は確かに婚約者だ・・・それが突然結婚してくれと言われ・・・私は驚いたが・・・

「良いよ・・・ハーティーン・・・私は貴方と同じ時を歩みます」

そう言うハーティーンはゆっくりと微笑み・・・触れるだけのキスをしてくれた・・・次の日ハーティーンは食堂で

「守護者・・・俺は決めた・・・ラグナと結婚する・・・だから結婚式の準備をしてくれ」

八神さんに頭を下げるハーティーンを始めてみた・・・八神さんは驚いた表情を浮かべたが

「・・・判った・・・結婚式の準備だな・・・引き受けた」

快く八神さんは結婚式の準備を引き受けてくれた・・・私がその光景を見ていると

「ラ、ラグナ！！結婚するって本当！？」

なのはさんが血相を変えて尋ねて来る、私は頬を紅く染めながら

「はい・・・昨日・・・プロポーズされたんです・・・俺と・・・同じ時を歩んでくれ・・・絶対に俺の隣に居てくれって」

そう言うとなのはさんは椅子に座り込み

「良いなあ・・・私なんかまだまだ結婚出来そうに無いのに・・・ってそんな事言ってる場合じゃないよ！！」

そう言うとなのはさんは弾かれた様に立ち上がり

「私も龍也さんと結婚式の準備をするよ・・・じゃあねラグナ」

手を振りながら食堂を出て行くなのはさんを見ながら私は左手の指輪を見ながら微笑んでいた・・・

「凄いな・・・」

俺はそう呟いた・・・結婚すると宣言してから1週間・・・急ピッチで

守護者は結婚式の準備をしてくれた

「初めてカリムに頼み事をしたよ・・結婚式が出来るようにしてくれってな」

そう隣で言う守護者は教会を見ながら

「良いだろう？お前とラグナの新しい門出を祝うのにこれ以上の物は無いだろう」

そう言う守護者に俺は

「確かに・・大聖堂を使うとは・・俺も予想してなかった」

ベルカ自治区の聖王教会の総本山・・大聖堂をまさか結婚式に使うと思ってなかった・・そもそもよく許可が出たと俺が思っている

「神王の名を初めて使ったからな」

・・聖王教会にとって守護者の存在は絶対だ・・彼らが信仰する神その物のなだから・・俺と守護者が話していると大聖堂から夜天が姿を見せて

「兄ちゃん！早く準備手伝ってや、私達だけじゃ大変やで」

そう笑う夜天に頷き歩いて行く守護者は思い出したように振り返り

「そうだ・・ヴァイスには言ったのか？結婚すると」

その言葉に俺は首を振った・・俺が結婚すると宣言してからヴァイ

スの姿は見えなくなってしまうた・・・俺も探しているのだが・・・どこに居るのか判らないのだ・・・守護者にそう言つと

「複雑なんだろうな・・・まあその内出て来るだろう・・・その時はちゃんと言えよ」

そう笑う守護者に頷き俺はその場を後にした・・・そして結婚式前夜・・・俺の部屋の扉に一通の封筒が貼り付けられていた

「?・・・これは・・・」

その封筒の差出人は結婚式の準備の1カ月の間、行方不明になっていた・・・ヴァイスからで内容は

『今日の午前零時・・・六課の屋上で待つ』

と書かれていた・・・俺はその手紙の指示に従い・・・その日の午前零時・・・六課の屋上に向かった・・・

「来たか・・・」

屋上ではヴァイスが腕を組んで待っていた・・・ヴァイスは俺を見ながら

「ハーティーン・・・てめえに聞きてえ・・・お前は・・・絶対にラグナを幸せにするって誓えるか？」

俺はその言葉に頷き

「騎士の誇りと我が剣に懸けて誓つ・・・必ず・・・ラグナ・グランセ

ニツクを幸せにすると・・・」

俺がそう宣言をするとヴァイスは何かを投げて寄越す・・・俺はそれを受け取り・・・それを見て驚いた

「父さんと母さんの形見の指輪だ・・・それを結婚指輪にしろとは言わねえ・・・だけど・・・父さんと母さんにも・・・ラグナの晴れ姿を見せてやってくれ」

そう言っているとヴァイスは俺の横を通りながら

「覚えとけよ・・・ラグナを泣かしたら・・・俺がお前を殺すからな・・・良いか・・・絶対にラグナを泣かすんじゃないぞ・・・」

そう言って歩き去っていくヴァイスの後姿に俺は思わず頭を下げた・・・

「こんな物か・・・」

私は自分で作ったウェディングケーキを見ながらそう呟いた・・・自分の持てるお菓子作りのスキルを全てつぎ込んで作った最高の１品だ・・・材料は全て最高級の１品ばかり・・・かなり値は張ったが・・・気にするレベルではない・・・私がその出来に微笑んでいるとフェイトが

「龍也・・・タキシード」

タキシードを手渡してくれる・・・昨日の夜から大聖堂に泊まりこんで作っていたから、私服のままなのだ・・・私は

「ありがとう、フェイト・・・直ぐに着替える・・・」

早着替えで着替え腕時計を見る、結婚式の1時間前だ・・・どうやら時間ギリギリで完成したようだ・・・受付ももう始まっているらしく、ウーノとドゥーエが協力してやってくれている、あの2人に任せれば何の心配も無いだろう・・・私がそう考えていると

「おはようございます、神王様」

いつもの軽装と違い、見た目的にも荘厳で重装備なカリム・・・司祭役を頼んだので、当然といえばそうなのだが・・・今日の式は、聖王教会の関係者や地上本部の関係者が多数来る予定だから、カリムも少し緊張しているのかもしれない・・・

「おはようカリム・・・すまないな・・・急な頼み事をして」

そう言つて頭を下げるとカリムは慌てて

「神王様!・・・その頭を上げてください」

頭を上げると言うカリムに

「神王と呼ぶのは止めてくれないか?」

そう言つとカリムは

「駄目です!神王様はれっきとした聖王の王位継承者なのですよ!

！
」

何度言われた事か・・正統王位継承者なのだから！と私は

「判った、判った・・もう言わない・・それで予定なんだが」

最後の打ち合わせをしてから、その場を後にした

「ハーティーン入るぞ」

新郎控え室の扉をノックし、中に入る・・ソコにいたのは、白いタキシードを着た、ハーティーンだった・・普段こそ黒い服装だが白も似合うなと私が思っていると

「お、おおお！よ、よ、良く来たなあああ！守護者アツ！！」

物凄く緊張しているハーティーン・・肩なんかガッチガチに強張っているし、何か震えが止まらないようだ・・

「緊張しすぎだろう？リラックスしろ・・」

私がそう言つとハーティーンは

「ししし・・しかし・・ここ・・こんなに緊張したのは騎士団長の襲名式以来なんだ」

噛みまくるハーティーンの溜め息を吐きながら

「ハーティーン・・お前がそんな様でどうする？お前が不安で一杯なら、きつとラグナも同じだ・・こういう時こそ・・男がリードす

る物じゃないのか？」

そう言うところとハーティーンはゆっくりと頷き

「悪い・・・みつともないところを見せた・・・」

そう言うハーティーンは既に何時もの堂々とした態度を取り戻していた

「もう平気だな？」

「ふん、誰に物を言っている？」

何時もの強気を取り戻したハーティーンに一安心してから、私はその場を後にした・・・良く判らないが・・・こういう時は黙って去るのがマナーらしい・・・私が席に座って2人の登場を待っていると、隣のはやてが

「兄ちゃん・・・来たで・・・」

はやてのその言葉の後に入り口の重厚な両扉が開かれ、腕を組んだ御両人が登場する・・・ラグナのドレスの裾を持って居るのはヴァイスだった・・・恐らく泣きたいのを堪えているのだろう・・・肩が小刻みに震えていた・・・私がそんな事を考えていると

「綺麗な・・・ラグナ・・・私も早くウェディングドレス・・・着たいわ・・・」

ぽそりと呟くはやてに

「それなら早く良い人を見つけるんだな」

そう言うとはやては私を見て微笑み

「良い人なら私の直ぐ隣に居るで？」

本当に綺麗な微笑みのはやてに私は黙り込んで、ラグナとハーティーンの方を見た・・・その時はやてが

「照れないで良いのに・・・」

その眩きを無視して私はカリムの方を見た・・・

「ラグナさん・・・あなたはハーティーンさんと結婚し、夫としようとしています・・・貴女は、この結婚を神王の導きによる物だと受け取り、その教えに従って、妻としての分を果たし、常に夫を愛し、敬い、慰め、助けて変わることなく、その健やかなる時も、病める時も、富める時も、貧しき時も、死が2人を分かつ時まで・・・」

カリムがそう言い掛けた時ハーティーンがそれを手で制し

「違う・・・例え・・・死が2人を引き裂いたとしても・・・愛し続ける事を誓うかだ・・・」

そう言われたカリムは言い治し

「こほん・・・それではその健やかなる時も、病める時も、富める時も、貧しき時も、例え・・・死が2人を引き裂いたとしても・・・愛し続ける事を誓いますか？」

その問いにラグナとハーティーンは2人同時に

「「誓います」」

カリムは満足気に頷き

「続いて指輪の交換を・・・」

参列者達が見守る中、2人は指輪の交換をする・・・そして・・・

「ここに交換は成りました・・・それでは互いに、誓いの口付けを・・・」

「

ラグナとハーティーンが口付けを交わす・・・ここに誓約は成った・・・そしてその瞬間、立ち直った参列客達からも、惜しみない拍手が巻き起こった・・・ゆっくりと退場していく2人を見ながら、私達は聖堂の外に出た・・・

「???・・・何かはやて達が殺気立ってるな?」

聖堂の外で殺気立っているはやて達に首を傾げていると・・・ラグナとハーティーンが出て来る・・・本当なら新婚旅行にでも行って貰うのだが・・・今は良いらしく、今度の休暇の時にでも旅行に行くと云っていた・・・私がそんな事を考えていると

「それじゃあ・・・行きますッ!」

ラグナが手に持っていたブーケを思いっきり投げ飛ばす・・・それと同時にはやて達がそれに向かって行く・・・私はその光景を見ながら

「・・・何であんなに必死なんだろうか？」

そう呟くと隣に居たヴァイスが

「旦那・・・少しは女性の気持ちに敏感になりましょ・・・そうしないとその内刺されますよ？」

そう言われ私が首を傾げている中・・・フェイトが

「やった！！取った・・・させるかぁッ！！」・・・ああッ！」

ブーケを取ったフェイトの手をはやてが蹴り、フェイトの手からブーケが弾け跳ぶ・・・それを

「オーライ・・・させない！」・・・スバルてめええッ！！！」

ヴィータが取りかけたブーケをスバルが横っ飛びで強奪するが

「ふん！」「し・・・しまっ・・・」

セツテが即座に脚払いを掛け、スバルをひっくり返し・・・再びブーケが空を舞う・・・

「やった・・・漁夫の利っす・・・『そうは行くかぁ！！・・・げふっッ・・・』」

ウェンディがブーケを取りかけた所でティアナが正拳を叩き込み、ウェンディを昏倒させる・・・

「良し・・・取った・・・『すまん・・・』・・・チンクッ！！！」

シグナムがブーケを取りかけた所でチンクがダガーでブーケを再び弾き飛ばす・私はその攻防を見ながら

「やれやれ・終るまで待つてられんな・帰るか・」

私が帰ろうと振り返った瞬間・後ろから何かが飛んで来て反射的に掴む・それと同時に

「ああッ!？」

はやて達の絶叫が聞こえる・私が掴んでいた物・それはなのは達が奪い合っていたブーケだった・

「いや・その業とじゃないんだ・何でにじり寄って来る？」

謝ってからブーケを再び投げようとする、はやて達ににじり寄ってくる・私が嫌な予感を感じていると・はやてが

「兄ちゃんが・ブーケを取ったんや・じゃあ次に結婚するのは兄ちゃんやよな・だから・」

ギュッピンッ!!!

はやて達の目が妖しく光る・私は冷や汗を流しながら

「待て・何を考えている？」

そう尋ねるとなのはが

「こうなったら・・・押し倒してでも・・・龍也さん・・・貴方を手に入れます・・・」

ゴゴゴッ・・・

妙な威圧感を放つのは達から視線を逸らし・・・

「こういう時は・・・全力で逃げる!!」

私は全力で走り出した・・・後ろから追って来るはやて達の気配を感じながら

「どうして私がこんな目に会ったあッ!!」

そう悲鳴を上げた・・・その時背後から聞こえた管理局関係者の笑い声が妙に悲しかった・・・

その光景を見ていた俺はラグナに

「業と守護者の所に行くように投げただろ？」

そう尋ねるとラグナは微笑を浮かべ

「こうでもないし八神さんは結婚しないでしょ・・・あの人鈍感だから」

そう言うラグナの肩を抱き寄せて

「これから・・・どんな災いがあるつと俺がお前を護る・・・だから・・・んむっ!？」

そこまで言い掛けた所でラグナの唇で口を塞がれる・・・俺が驚いているとラグナはにっこりと微笑み

「そんな事言われなくても判ってるよ・・・ハーティーン・・・」

俺はこの瞬間ラグナには一生勝てないと思いながら頷き

「そうだな・・・態々言うまでも無かったか・・・」

そう笑いながらラグナの前に腕を差し出す・・・するとラグナは微笑みながら腕を絡めてくる・・・俺は空を見上げて

「良い天気だ・・・まるで俺達を祝福してくれてるようだ・・・」

そう笑いながら言うつとラグナは

「そうだね・・・ハーティーン・・・」

そう微笑むラグナを抱き抱えて俺は聖堂を後にした・・・

これから先・・・例え・・・どんな困難が俺達を待っているようが・・・俺はそれに決して負けはしない・・・俺の最高の宝物を誰にも・・・傷つけさせない・・・俺が・・・必ずラグナを護る・・・そう決めたのだから・・・

一周年記念番外編 姫と黒き守護者 結婚式編（後書き）

いかかでしたでしょうか？結婚式の雰囲気は上手く出せていたでしょうか？それだけが少し不安なのですが・・・自分ではかなりの自信作です！！私の小説の中でもダントツ人気のハーティーン＆ラゲナのカップルの話は書くのが凄く楽でそして書いてても楽しいです！！これで姫と黒き守護者シリーズは完結ではなく・・・これからもちよこちよこ出てくると思います・・・どうか暖かい目で見てやってください・・・それでは次の一周年記念番外編もどうか宜しくお願い致します

一周年記念番外編 惚れ薬の招いた悲劇（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は「ジークフリート様」からの
リクエストで、惚れ薬の別パターンのお話です、ギャグ色の強い作
品にしたつもりなので、今回もよろしくお願いします

一周年記念番外編 惚れ薬の招いた悲劇

一周年記念番外編 惚れ薬の招いた悲劇

「あーあ・・・折角作つたのにな・・・」

私は手元の小瓶を見ながら呟いた・・・惚れ薬を作ってみたのだが・・・失敗・・・何か配合を間違えたのかもしれない

「天才科学者が聞いて呆れる・・・」

はあ・・・落胆しながらその小瓶の中身を捨てようとしたが

「棄てるのは勿体無いな・・・味は良い筈だし・・・」

不味かつたら誰も飲まないの味は爽やかなマスカット味にしてある

「そうだ、龍也に飲ませてみよう・・・もしかしたら面白い結果になるかも・・・」

私はそう微笑みながら龍也の部屋に行こうとしたが・・・立ち止まる

「私が渡したんでは龍也も警戒するな・・・どうするべきか・・・」

私がどうしようかと考えていると

「おーい、父さん頼まれてたデータ持って来たぜ」

ノーヴェがフロッピーを持ってくる

「お、良いタイミングだ」

私が思わずそう言つと

「何が良いタイミングなんだ？」

首を傾げるノーヴェに

「いや、気にしないでくれ、態々ありがとうノーヴェ」

首を傾げているノーヴェからフロッピーを受け取り、代わりに小瓶を渡す

「何だ？これ」

首を傾げながら尋ねてくるノーヴェに

「何、貰ったジュースだよ・・・今から龍也の所に行くのだろう？」

にやっと笑いながら言つとノーヴェは赤面しながら

「うつ・・・そうだけど・・・何で判るんだ？」

そう尋ねるノーヴェだが、恐らく誰でも判るだろう・・・ノーヴェは龍也に所に行くときだけ化粧をする・・・と言つても軽くだが・・・それと心なしに足取りが軽いので一目で判る、私はそんな事を考えながら

「まあ父親の勘でも思ってたくれ、それじゃあ龍也によろしく言
つといてくれ」

私はそう言つとノーヴェが持つて来てくれたフロッピーの中の模擬
戦のデータを解析し始めた

「ジューズねえ・・・本当か？」

私は渡された小瓶を見ながらそう呟いた・・・父さんの事だから何か
仕組んでるかもしれない

「うーん・・・まつ、龍也と一緒に飲めば大丈夫か」

私はそう判断し龍也の部屋に向かった・・・

「ノーヴェ？どうした？」

龍也が不思議そうに尋ねてくる・・・まあ無理も無い私から龍也の部
屋に行くなど滅多に無いことだから

「ジューズ貰ったんだよ、一緒に飲もうと思つて持つて来たんだけ
ど・・・迷惑だったか？」

そう尋ねると龍也は

「いや、迷惑ではないが・・・ノーヴェが行き成り来たからな、少し
驚いただけ・・・」

そう言くと龍也は扉の鍵を開けてくれる、私はその小瓶を持って龍也の部屋の中に入って行った・

「しかし・・・相変わらず綺麗だよな・・・龍也の部屋って」

部屋の中を見ながら言っていると龍也は

「そうか？普通にしてるだけなんだがな」

首を傾げる龍也は私の前にコップを置いてくれる、私は父さんに貰ったジュースをそのコップの中に注いだ・

「うん、いける」

私はジュースを飲みながらそう呟いた、マスカット味で美味しいと思った、龍也もそれを飲んで

「偶にジュースと言うのも悪くないな・・・」

2人でジュースを飲みながら話をしていたが・・・突然龍也が黙り込む

「どうした？」

私がそう尋ねると龍也が私の顔を見て

「気づかなかったが・・・ノーヴェって綺麗だな・・・」

！？！？突然真顔でそんな事を言われ

「なっ！なっ！・・・突然なんだよ龍也！」

驚いて離れようとする

ガシッ！！

龍也に腕を掴まれ離れる事が出来なくなってしまった・・

「こうして近くで見ると本当に綺麗だ・・」

繰り返し綺麗だと言う龍也に

（おかしい・・龍也はこういう事を言う奴じゃない・・何が原因・・あれかぁっ！！）

何が原因で龍也がおかしくなったか考える・・１つしかなかった・・父さんから貰ったジューズだ・・たぶん女の私には効果が無くて男に効果がある・・恐らく惚れ薬・・私はそれを龍也に飲ませてしまったのだ

（ちくしょう・・父さんの馬鹿・・変なの渡すなよ・・）

私は龍也の手を振り解こうとするが龍也の力の方が上で振り解く事は出来ない・・私が内心焦っていると

グイッ！

「うわっ！！」

龍也に腕を引っ張られて龍也の腕の中に納まる・・龍也は私の目を見て

「本当に綺麗だ．．誰にも渡したくない．．」

龍也が私を抱き抱える力が更に強まる．．私は焦った．．不味い．．不味すぎる．．龍也は好きだが．．こんな形では嫌だ．．自分の力で龍也に好きになつて貰いたいのに．．こんな薬の力では嫌だ．．私は渾身の力で龍也の腕を振り解き龍也の部屋を脱出した

「くそっ．．どうするよ．．」

後ろから龍也が追ってくる気配がする．．自分では対処出来ない．．酔った龍也より今の龍也の方が厄介だ．．

「スバルか．．フェイトか？．．それともなのはか．．？」

自分では対処出来ない以上、協力を頼むしかない．．スバルなら無条件でうんと言ってくれそうだが．．後の２人は間違いなく何らかの条件を出してくる．．それでも構わないから助けを求めるほうが重要だろう．．何故なら．．

「ノーヴェを見るなっ！！」

ドスッ！！

「うっぎゃああああっ！！目がっ！目がアアっ！！」

すれ違う男性局員に次々目潰ししながら追ってくる龍也．．正直言つて超怖い．．捕まったら何されるか判らない．．私は念話で今六課にいる面々に助けを求めた．．

緊急事態って何だろう？・私は首を傾げながら演習場でノーヴェが来るのを待っていた・さっきノーヴェから緊急事態・頼むから助けてくれという念話が来てから直ぐに演習場に来た・呼ばれたのは私だけではなく、なのはとスバルの姿も見える・私はバルディッシュを片手で持ちながらノーヴェが来るのを待った・

「っきゃあああつ！！こっち来ないでっ！！」

普段のノーヴェと違い可愛らしい悲鳴を上げながらノーヴェが演習場に転がり込んでくる・その背後から龍也が走ってくる・えっとうという状況？・なんでノーヴェが龍也に追いかけてるの？現状が掴めず混乱しているとノーヴェは

「フエイト、なのは、スバルッ！！早く早く龍也にバインド掛けてえゝこのままじゃ・私・龍也に捕まるゝ」

龍也の手を器用に潜り抜けながら走ってくる、ノーヴェ・その顔には明らかな疲労の色が見える・私達は戸惑いながらも龍也にバインドを掛けた・それで一瞬龍也の動きが止まるが

「ふんっ！」

簡単にそれを破壊してノーヴェの後を追いかける龍也・何故かその表情は楽しげだった・その反面ノーヴェは

「こんな形でファーストキス捨てたくないゝ」

そう絶叫し龍也を回避し続け・頭から私の背後に回りこんで、私

の服を掴みながら

「フェフェ・・・フェイト助けて・・・こんな形で私ファーストキスしたくない・・・」

がくがくぶるぶる・・・と震えるノーヴェに

「えっと・・・どういう状況・・・説明して？」

説明を求めるがノーヴェはますます震えて、頭を抱えながら女の子座りして

「まずは・・・龍也を気絶させて・・・それから話すから・・・」

そう言ってますます小さくなるノーヴェを首を傾げると

「フェイト・・・そこをどいてくれないか？・・・ノーヴェが見えない」

龍也が私の前に立ちながら言う・・・その目は正常じゃない・・・は yet セツテの目の色に似ていた・・・私は即座にまたあの科学者が何かを龍也にしたと判断して、念話で

（スバル、私となのはで龍也の注意を引き付けるから、後ろに回りこんで気絶させて）

そう指示を出してから、龍也からノーヴェが見えない様に体を動かしながら

「ノーヴェは別に良いから、私と話をしようよ？」

笑いながら言う　と龍也は

「いや・・・今は話したくない・・・早くノーヴェを捕まえたのだが・・・」

そう言っ　て私の影からノーヴェの姿を見ようとする龍也の前になのはが立ちブロックする、それに龍也はイライラした素振りを見せながらも

「なのは、フェイト・・・そこをどいてくれ」

繰り返しどけという龍也・・・完全にスバルの事は意識から外れたらしい・・・ゆっくりと背後に回りこむスバルを見ながら

「だから、どうしてノーヴェに拘るの？」

そう尋ねると龍也は

「気付かなかったんだ・・・そう・・・ノーヴェこそが私の理想の女性だと・・・もっ!？」

龍也が何かを言いかけた瞬間スバルが回り込むのに成功し、手刀で龍也の意識を刈り取る・・・崩れ落ちる龍也を抱き抱える・・・ああ・・・何か約得・・・こんな良い事滅多に無い・・・私が密かに感動しているとノーヴェがなのはに泣き付きながら

「あ・・・あ・・・ありがとう!!なのはあッ!!私・・・私・・・あと少しで・・・龍也に襲われる所だったんだよ・・・」

涙を流すノーヴェの服はあちこち破けてて素肌が見えてる所もある・

・泣き続けるノーヴェにスバルが

「ノーヴェ・・・龍也さんに何かしたの？」

そう尋ねられたノーヴェは

「父さんに・・・騙されたんだよ・・・ジューズくれて龍也と一緒に飲んでたら突然龍也がおかしくなって・・・あと少して・・・私は・・・私は・・・色々と大切な物を捨てる羽目になるとこだったんだよ・・・」

泣きながら事情を説明してくれるノーヴェに

「うん、うん・・・怖かったんだね・・・大丈夫、大丈夫・・・龍也は止まったから・・・」

気絶している龍也の横顔を見ながら言う・・・恐らく目覚めた頃には自分が何をしていたか覚えてないだろう・・・私はそんな事を考えながら

「なのは・・・これってお話決定だよな？」

笑いながら尋ねるとなのはは魔王の笑みで

「勿論、暫く龍也さんにちよっかい掛けられない様にちゃんとお話しない」と

そう笑うなのはの背後には4つのクリスタルが浮いている・・・本気だ・・・本気でお話・・・エクストリームジハードを打ち込むつもりだ・・・私はなのはに馬鹿の処刑をすべて任せて、気絶している龍也を抱き抱えて

「龍也・・・持って帰って良い？・・・大丈夫変な事しないから」

なのはに言つと

「私も後で行くけど良い？それで良いなら持つてて良いよ」

そう言うなのはに頷き龍也を私の部屋に持つて帰った・・・その光景を見ていたスバルは

「良いなあ・・・気絶してる龍也さんか・・・私も持つて帰りたいかったな」

何気に危ない発言をしながらノーヴェを連れて、演習場を後にしていた・・・それから数分後・・・ジェイルの研究室では・・・

「待て！・・・なのは君、話せば・・・話せば判る・・・」

何とかなのはの説得を試みたジェイルだが・・・なのははニッコリと魔王の笑みを浮かべ

「スカリエッティさん・・・少し・・・頭冷やしましょうか？」

その言葉と同時に桜色の砲撃が放たれジェイルは

「みぎゃあああああつ！！！！」

悲鳴を上げながら砲撃に吞まれて行った・・・なのはは崩壊した研究室を見ながら

「私達は龍也さんが好きです・・・でも薬とかの力で物にしたくないんですよ・・・あくまで実力で・・・私自身を好きになつて欲しいんです・・・だから二度とあんな物作らないでくださいね・・・」

そう呟き研究室を出たのはは

「龍也さん待つててくださいね〜今行きます」

万人が見惚れるような微笑を浮かべフエイトの部屋へと向かつて行った・・・それから数分後・・・

ガラガラ・・・

瓦礫の山からジェイルが姿を見せ

「げぼっ！げぼっ！！あー死ぬかと思った・・・」

そう呟いたジェイルは研究室を見て

「あーあ・・・全壊か・・・また給料から引かれるな・・・まあ今回は私が悪かったんだし・・・自業自得か・・・」

そう呟き後片付けを始めたジェイルだが

「・・・今回の方法は駄目だったが・・・まだ別の方法があるしな・・・」

懲りない男ジェイル・スカリエッティはまた新たな悪巧みを始めていた・・・

一周年記念番外編 惚れ薬の招いた悲劇 終わり

一周年記念番外編 惚れ薬の招いた悲劇（後書き）

どうでしたか？面白かったでしょうか？自分では中々手応えのある話だったんですけど・・自信が無いので感想を貰えると嬉しいですが、それでは次回も一周年記念番外編ですが、どうかよろしくお願いします、それでは失礼いたします

一周年記念番外編 剣聖と守護者と・・・（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回の作品は「冥府の死神様」のリクエストでコラボ小説になります、自分では上手く冥府の死神様の小説の雰囲気を出せているか不安ですが・・・どうかよろしくお願いします

一周年記念番外編 剣聖と守護者と・・

一周年記念番外編 剣聖と守護者と・・

「やれやれ・・まだ生き残りがいるとは・・」

私は肩を落しながらそう呟いた・・ネクロとの決戦が終わって1年近く・・だがまだ平行世界や管理外の世界に生き残りがいる・・私はそれを退治する為に平行世界に出掛ける準備をしていた・・

「さてと・・これで良いか・・」

もしかすると長期に渡りその世界にいる必要がある、その為のテントと非常食をコートの中にしまい

「行くとするか・・」

私はそう呟き平行世界へと旅立った・・

「貴様・・何者だ？」

赤髪の長髪に深紅色の瞳を持つ男・・高町恭介が睨みながら目の前の男に尋ねる・・だが

「・・・・」

腰元まで伸びた銀髪に蒼銀の瞳を持つ男は何も答えず・・・一瞬で間合いを詰め恭介めがけ剣を振るう

「!!」

俺は即座に後方に跳びその一撃を交わす・・・そして即座にエアを起動させるが

「・・・」

男は何も語らず走り出す・・・

「待て!!」

俺はその男の後を追って走り出した・・・その内開けた場所に出る・・・そこには蒼い騎士甲冑の男が俺を見ていた・・・その目には警戒の色が浮かんでいた・・・俺は王の財宝からグレイソードを取り出しながら

「貴様・・・一体何のつもりだ・・・突然襲って来て・・・」

俺が殺気を放ちながら言うと男は

「襲って来た・・・私はまだここに来ただけなのだが？」

訳が判らないという表情の男に

「とばけるんだな・・・ならば・・・すぐに思い出させてやるっ!!」

俺はグレイソードを片手に走り出した・・・

一体どういう事だ？．．私は振り下ろされる剣を捌きながら首を傾げた．．この世界に来てすぐ襲って来た謎の騎士．．魔力量は私と互角くらいだろう．．剣の腕は．．恐らく私が上だが．．

「グラムツ！！」

次々と武器を変え戦法を変えて襲ってくる男．．恐らくルシルファーと同じで様々な武器を使うタイプの騎士なのだろう．．私は繰り出された剣を受け流しながら

「待ってくれ、私に戦う気は無い．．話を聞いてくれ」

何度目かの説得を試みるが．．

「悪いが俺は貴様の話を聞く気は無い！！どうしても話を聞いて欲しいのなら俺に勝ってから言え！！」

どうやら説得は無駄か．．ならば．．

キンツ！！

男の剣を弾き飛ばし構えを取りながら

「仕方あるまい．．１度叩き伏せてから話を聞いて貰うでしょう．．

」

私はそう言つと地を蹴り駆け出した・・その光景を見ている龍也と同じ姿した何者かは

「・・お互いに潰し合え・・そっちの方が好都合だ・・」

龍也と恭介が戦う光景を見ながら笑っていた・・

「風刃閃ッ!!」

男の姿が掻き消える・・それと同時に背後に気配を感じ反射的に体をそらす

ヒュンッ!!

凄まじい速度で剣が通り過ぎる・・あれが直撃していたら・・そう思うと背筋が凍る・・それほどまでの一撃だ

「さっきまでの勢いはどうした?それとも私の話を聞いてくれる気になったかね?」

そう笑う男に返事の変わりに

「ロイヤルセイバーッ!!」

砲撃を放つと男は剣ではなく拳で

「ふんっ!!」

その砲撃を殴り飛ばし・・・そのままの勢いで踏み込んで来て

「はあっ!!」

袈裟切りに斬りかかって来る、まさかそんな方法で砲撃を防ぐと思
っていなかった俺は反応が送れダイレクトにその一撃を喰らってし
まい

「ぐっつ!!」

その一撃に吹っ飛ばされる・・・追撃を防ぐと前を見るが

「い・・・居ないっ!？」

その男の姿は既にそこに無く背後から

「水流・・・爪牙ッ!!」

男の声が聞こえそれと同時に凄まじい衝撃が背中に来る

「ぐっ・・・」

その衝撃に顔をしかめると同時に

「はあっ!!」

そのまま上空に蹴り上げられ、そのまま背中から地面に落下する

「ぐはっ・・・」

口から血が出る・・・それほどまでの衝撃だ・・・俺は血を拭いながら・
男を見る・・・男は呆れたと言いたげな表情で

「今ので意識を刈り取ったつもりだったが・・・まだ動くか・・・好い
加減話を聞いてくれないか？私はお前と戦うつもりなど無いのだよ」

余裕させ感じさせる男に

「調子に乗るなよ・・・この程度で俺は負けん！！・・・ナイトフォー
ムバーストモード！！」

手の中のエアに指示を出す

「バーストモード了解！！」

即座に指示を実行するエア・・・俺は深紅に輝く鎧を身に纏い、太陽
を彷彿とさせる高エネルギーの火炎オーラを身に纏い・・・そして深
紅翼を持ったバーストモードを起動させ、男を睨む・・・男は少しだ
け驚いた表情を見せ

「やれやれ・・・こつちももう少し真面目にやるとするか・・・」

そう呟くと男の纏う魔力が蒼から虹色になる・・・それは

「聖王の・・・魔力・・・」

なぜこの男が聖王の魔力を使えるのか気になったが・・・それ以上に
俺はこの強い男に勝ちたいと思い当初の目的を忘れて全力で男目掛
け剣を振るった・・・

ガキーンッ！！

甲高い音が辺りに響き渡る・・・何回打ち合ったか判らない・・・100・・・いやもつと打ち合った・・・何回も直撃を喰らいその直後体制を立て直し即座に剣を振るう・・・俺と男の技量はほとんど互角だった・・・

「ジーク・・・セーバーツ！！」

右腕のビーム状の槍から突きを放てば

「ふっ！！」

短い溜めの呼吸と共に男が剣を振るい突きを弾き飛ばし、そのまま殴り掛かってくる・・・俺も負けじと拳を繰り出す

ドゴーンッ！！

辺りに轟音が響く・・・それと同時にお互いに後方に跳び、お互いの様子を見る

「・・・」

鋭い視線の男の左側の騎士甲冑には輝が入り、左腕からは血が流れている・・・それでも男は剣を手放す気配は無い・・・この程度で倒れるほど柔な男ではないと・・・俺には判った・・・俺も右腕から血を流していたが・・・まだまだ剣を手放すつもりが無かったからだ・・・俺達が再び動き出そうとした所で

「ひゃーはっはっ！！ご苦労だな！！お互いにお互いを傷つけあつて」

俺達の間には紫色のマントを羽織った異形が姿を見せる、異形は楽しそうに男を見て

「守護者あ？どうだ？この世界で最も強い騎士と戦った感想は？．．ひやははは！！いくら貴様でも消耗してちゃあ、俺には勝てんよなあ？馬鹿な餓鬼で助かったぜ！貴様のコピーをぶつけて挑発したらこつも簡単にお前を襲ってくれたんだからなあ！！」

！俺は．．こいつに良い様に利用されてたのか．．俺が唇を噛み締めると異形は楽しそうに

「さてと！もう貴様に用は無いからな．．守護者と同時に消えて貰おうか？．．この世界で俺が動き易くなるために！」

そう言つと異形の影から無数の異形が姿を見せる．．その数約200．．

「！．．くっ．．」

ベストな状態なら余裕だろう．．だが今の消耗した状態では．．俺が諦め掛けると男は剣を軽く振るいながら俺の横に立ち

「消耗か．．この程度の消耗ならば．．ヘブズ．．ヒール．．」

俺と男の体を虹色の魔力が包み込み、即座に傷と魔力を全回復させる．．

「これは・・・」

俺は驚いた・・・ここまで一瞬で全回復させる回復魔法は始めて見た・俺が驚いていると男は

「私が100・・・お前が100・・・これで良いか？」

そう尋ねてくる男に

「ふっ・・・楽勝だ・・・なんなら俺が全部やつても良い・・・」

利用してくれたツケをあいつに払わせる必要がある・・・だから俺があいつを睨みながら言つと

「頼もしい限りだ・・・それでは・・・1つ・・・共同戦線と行くか!!」

そう言つと俺と男は同時に地を蹴り駆け出した

「キキッ!!」

飛び掛ってくる異形目掛け

「邪魔だあつ!!!!」

横薙ぎの一撃を叩き込み纏めて8体消滅させる・・・反対側を見ると

「消える・・・光の斬撃の前に・・・」

そう呟くと男の背後にいた異形が20体近く同時に消滅する・・・俺はその技を見て

「さつき・あれを喰らってたら・負けてたな・」

光と言っていたが・その通りだ・本当にさっきの一撃は光の速さに近い物を感じた・あんな速さでの攻撃を喰らえば致命傷は間違いないだろう・俺がそんな事を考えていると

「があああつ!!」

獣のような異形が襲ってくる、俺は異形をジャンプで回避して

「今はそんな事を考えてる場合じゃないな・さつさと化け物退治をするか!」

ザンツ!!

「ぎゃああああ・」

影から飛び出してきた異形を頭から両断しながら俺は異形達に向かって駆け出した

「セーバーショット」

俺はグラムに集めた聖なる魔力を込めた砲撃を異形の獣に放つ

「「ぎゃあああ・」」

集めた聖なる魔力の砲撃で苦しみながら、異形の獣数十体完全消滅させる・

「イマダッ!!」

砲撃を撃って一瞬間がある俺に黒い影の様な生き物20体が飛び掛ってくるが・・

「ソードオブリン!!」

グレイソードから放たれる究極乱舞でバラバラに切り裂き・・剣の衝撃波で残りの黒い影の様な生き物と異形の獣を次々と切り裂く

「はあああつ!!」

ボロボロの鎧を身に纏う亡霊騎士が20体同時に襲い掛かって来るが

「グレイソード+セーバーショットツ!!」

俺はグラムに集めた聖なる魔力の砲撃を横から切り掛かる亡霊騎士に合わせて、体を回転させ放射状にセーバーショット放ち、そのまま左手の剣に炎を纏わせ、亡霊騎士を両断する・・

「ギャアアアアツ!!!!」

悲鳴を上げながら消えていく異形の影から男の方を見ると

「羅刹・断撃拳ツ!!!!」

拳と蹴りのラッシュで最後の異形の一団を消し飛ばしていた・・俺はその男の戦い方を見て・・

（どんな状況にも無難な対応か・・俺とは違うタイプだ・・）

俺はただ敵を屠る為の戦闘スタイルだが・・・この男は違う・・・誰かを護る為の戦い方だ・・・俺はその男のあり方にどこか自分に似ている物を感じていた・・・

「さてと・・・残るは貴様だけだな」

俺がそう言つと紫のマントの異形は

「ひ・・・ひイ!!」

マントを翻し逃げ出そうとする・・・男は俺に

「止めは任せる・・・」

そう言つて騎士甲冑を解除する男を見ながら俺は

「エア真名開放ッ!! 乖離剣エア」

「了解! 真名開放!! 乖離剣エア」

エアが真名を開放する・・・乖離剣エア無銘にして最強の剣が俺の手の中に納まる、そして、凄まじい暴風と雷光が轟く・・・真名による宝具の開放、宝具は単体が強力な武装だが、真に力を発揮するためには武装の真名を唱えることが必要となる、つまり、真名を唱えてこそ宝具は格上の相手を打ち倒すほどの力を得るのだ・・・本来ならこんな雑魚に使う物ではない・・・だが俺はあえてエアを使う事にした・・・俺を利用しようとした馬鹿をこの世から完全に消し去るために!

「ほお・・・魔力だけなら私より上だな」

驚くような男の口調を聞きながら、エアはこの男に己が最強を証明するかのように、エアの纏う力は刻一刻と昇華されていく・・・既にこの場合は、世界が記憶する地獄絵図を呼び出すための召喚の場へと変貌していた・・・円筒がそれぞれに回転を始めると、剣に膨大な魔力が流れ込んでいく・・・ただそれだけで、開放されてもいないというのに圧倒されそうな魔力を放っていた。

「天地乖離す開闢の星！！」
エヌマ・エリッシュ

開放されてもいないというのに圧倒されそうな魔力を放っていた『乖離剣』の魔力が高まりきった所で俺はエアを振り下ろした・・・かつて世界を天と地に切り分けた最強の一撃を撃ち放たれた・・・

「ひっ・・・ぐあああああっ！！！」

エアの一撃は逃げようとしていた馬鹿を背後から呑み込み・・・一瞬の元に消滅させた・・・

「すまなかった・・・」

俺は戦いが終わると同時に真っ先に男に頭を下げた、男は驚いた表情を見せたが

「なに気にするな・・・誰でも間違いはあるさ・・・それより礼を言わせて貰おう・・・お前のおかげで仕事が速く片付いた・・・早く家に帰るよ」

そう微笑む男の前に黒い歪みが現れる・・・俺はその歪みを指差しな

がら

「なあ・・・あんたは一体何者なんだ？この世界とか・・・あいつは言っていたが？」

男の正体が気になり尋ねると男は

「世界とは1つではない・・・無限の可能性を持つものだ・・・私はその可能性世界の1つから来たんだ・・・」

そう微笑む男に

「俺は高町恭介・・・あんたは？」

名乗りながら尋ねると男は

「八神・・・八神龍也・・・」

八神！？・・・こいつははやての血縁者なのか・・・俺が驚いていると龍也は

「それでは私は帰る・・・じゃあな恭介・・・また会おう」

そう笑いながら歪みの中に消えて行った龍也を見ながら

「またか・・・そうだな・・・また会えると良いな・・・」

俺はそう呟きその場を後にした・・・それから数分後この世界の魔道師が辺りを見て絶叫したのは言うまでも無い

一周年記念番外編 剣聖と守護者と・

一周年記念番外編 剣聖と守護者と・・・（後書き）

本当にコラボ小説は難しいです、でも書くのが楽しいのでまたやりたいと思うんですよ・・本当に・・それでは次回も一周年記念の番外編です！！それではまたお会い致しましょう

一周年記念番外編 世界を渡る者と守護者（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回のリクエストは「海人様」でコラボのリクエストでした、やはり上手く海人様の小説の雰囲気を出せているのか自信が無いのですが・・・今回もどうかよろしくお願いします

一周年記念番外編 世界を渡る者と守護者

一周年記念番外編 世界を渡る者と守護者

「ここが次の世界か・・・」

俺はそう呟きその世界を見て、眼を見開いた・・・

「似ている・・・あの世界に・・・」

俺がいた世界に良く似ているこの世界に俺が驚いていると

「飛翔ッ！！いい加減に戻って来なさいッ！！」

ビクッ・・・この声は・・・俺が振り返るとそこには怒っています！という表情のアリシアがいた・・・どうしてここに・・・俺が驚いていると

「まったく・・・負けたくらいで・・・強くなる為にあっちこっち世界を渡り歩いて・・・いい加減に私達の所に戻って来なさい」

そう言うアリシアに

「駄目だ・・・俺はまだ何も変わっていない・・・俺は今よりもっと強くなりたいんだ・・・だからもう少し待っていてくれ」

俺がそう言うとアリシアは怒った表情のまま俺の前に立ち

「だから・・・待っててられないから帰って来いって言うてるのよ、この馬鹿！！」

馬鹿と言われた俺は

「馬鹿とは何だ！馬鹿とは！」

それが切っ掛けで口論になっていると・・辺りの影から

「キキ・・」

黒い影のような者が出てくるが・・そんなのに構っている暇が無く
アリシアと口論していると・・化け物達が襲ってくる・・俺とアリ
シアは

「邪魔するなッ！！」

向かって来た化け物を瞬殺して、口論を続けた・・

どういう状況だ？・・これは・・

私は混乱しながら目の前の光景を見た・・何処と無くフェイトとエ
リオに似た男女が激しく口論している・・その回りには消滅し始め
ているネクロの姿・・状況から見えてあの2人が倒したのだろうが・・
何故2人が喧嘩してるか気になったが、とりあえず話を聞こうと思い

「すまないが喧嘩はそれくらいにしてくれないか？」

そう話しかけると男の方が女性の前に立つ、まるで護るように・・
私はその姿を見ながら

「時空管理局の者だ・・悪いが一緒に来てくれるかね？」

出来るだけ穏やかに友好的に言っただつたが・・2人の顔からは嫌悪感が見え隠れしていた・・暫くそのままだったが女性の方が

「判りました・・一緒に行かせて貰います」

そう言う女性に頷き、私は2人を連れて六課へ戻った・・

「なあ・・兄ちゃん・・この2人何者や？」

モニターを見ながらはやてが尋ねて来る、私は首を傾げながら

「知らん・・だがネクロを倒す事の出来る程、腕のある魔道師・・
？だと思っ」

話を聞くために連れて来た2人を応接室で待たせながら、私は首を傾げた・・多分魔道師だと思うのだが・・確証が持てない・・

「まあ・・大丈夫だろう、私はあの2人と話に行くが・・お前はどうかする？」

そう尋ねるとはやては

「うん・・私も行くわ」

そう言うはやてに頷き、紅茶を用意してから応接室に向かった・・

「さてと・・待たせてしまった様ですまない、お茶の準備に手間取

ってな」

机に紅茶を置きながら言うと男の方は

「準備？・・・自白剤の準備か？」

警戒の色を瞳に浮かべる男に

「いやいや、そんな物は入れてないよ、唯幾つか質問させてもらって・・・それが終わったら解放するよ」

そう言う男は呆気にとられた顔をして

「何か企んでるのか？」

疑り深い男にはやてが

「なんもたくらんどらんよ、あんた達が何者でどこから来たか聞きたいだけや、前にな、時空を破壊して平行世界を繋いだ化け物があつたんよ、それでその影響で平行世界からの迷い人とかあつてな・・・元の世界に帰えす為に情報を集めたいだけや」

はやてが笑いながら言うと2人は警戒を解きながら

「すまない・・・俺はあまり管理局に良い印象が無くてな・・・つい警戒してたんだ」

そう言う男に

「いや、別に気にしないでくれ・・・それで君達は何者だ？・・・魔力

「があるから・・魔道師なのか？」

そう尋ねると男は

「魔力は使えるが魔道師じゃない・・詳しく説明するつもりは無いがな」

そう笑う男に私は

「そうか・・ではこちらでも無理に聞く気は無い・・それで名前は？・
・ああ、すまないこういう場合は先に名乗るものだな・・私は八神
龍也・・管理局の大將などをやらせて貰っている・・こっちは八神
はやて・・私の妹になる」

そう説明しながら名乗ると男は

「名乗る前に聞きたい・・龍也は・・平行世界を信じるか？」

そういわれた私は

「信じるよ・・私自身良く平行世界に行くしな」

ネクロ退治であつたり、はやて達に砲撃されたり・・それで色々な
平行世界に行っているのだ、平行世界の存在を信じると言うと男は

「そうか・・では名乗らせて貰おう・俺は不破飛翔・・こっちはアリ
シアだ」

私はその名に驚きながら

「アリシアッ！？・・・では君達は可能性未来の平行世界から来たのか・・・」

アリシアの名に驚きながら、私はその隣の男を見て

「彼女がフェイトの姉のアリシアと言うのは判る・・・では君は何者なんだ・・・飛翔・・・君とエリオは魔力の波長が似すぎている・・・君は本当は何者なんだ？」

そう尋ねると飛翔は驚いた表情をして

「見ただけでそこまで判るのか・・・俺は・・・エリオだった者・・・色々あってな・・・今は不破飛翔と名乗らせて貰っている」

そう言う飛翔に私とはやては

「お前がエリオ・・・そうでは無いかと思ってたんだが・・・こうして言われると信じられないな」

「嘘やろ！！エリオってまだ１１歳やで！？飛翔はどう見ても二十歳くらいやろ！？」

驚き詰め寄ろうとするはやてを静止しながら

「君達の世界では何があったんだ？・・・私の世界であった事を全て教える・・・だから君達の世界で何があったのか・・・教えてくれ」

そう言うとき飛翔はゆっくりと教えてくれた、JS事件の時にアンノウン・・・イマジンと言うらしい・・・それに襲われ、別の世界に飛ばされ記憶を失って・・・平行世界を旅していた事を教えてくれた・・・

今は自分の力不足を痛感して今は修行の為に世界を旅すると・
私はその話を聞き終えてから

「そうか・・君の世界で私は居ないのか・・大変だったんだな」

私が飛翔にそう言つと飛翔は

「大変か・・今思えば・・そう思うだが・・俺は平行世界を旅出来
て良かったと思う・・それのおかげで沢山の仲間が出来た・・それ
だけで俺は良かったと思う」

笑顔で言う飛翔に私は

「そうか・・それなら私は何も言わない・・それでどうする・・こ
の世界のエリオに会ってみるか？」

そう言つと飛翔は少し考えた素振りを見せ

「そうだな・・会つてみてても良いかもしれないな・・龍也・・連れ
てってくれ」

そう言つ飛翔とアリシアを連れて私は演習場に向かった・・

「はっはっ・・ふうゝまだ甘いな・・もっと速くしないと」

僕が訓練しているとお父さんが来る、僕がお父さんにアドバイスを
貰おうとした時、演習場に1組の男女が入ってくる

「お父さん・・・あの2人は誰ですか？」

そう尋ねるとお父さんは

「後で説明する、エリオ、フェイトは何処だ？」

そう言うお父さんに僕は

「フェイトさんですか？今呼んで来ます」

僕はそう言つとフェイトさんを呼びに行った・

「龍也、何の用・・・？・・・後ろの誰？」

首を傾げるフェイトさんの後ろからキャロとルーテシアが来て、男の方を見て

「・・・似てる・・・エリオ君に・・・ルーちゃんはどう思う？」

「私もそう思う・・・エリオに凄く似てる」

そう言う2人を見ながらお父さんは

「流石キャロとルーテシアだ・・・飛翔は可能性未来の世界から来た・
・エリオ・・・お前の成長した姿だ」

！？・・・僕は驚きながら飛翔と呼ばれた男を見た・・・何処と無く僕に似ていると思うが・・・纏う雰囲気があるで違ふ・・・ハーティーンの様鋭い・・・抜き身の刀の様な印象を受けた・・・飛翔はお父さんを見ながら

「龍也・・・何故父さんなどと呼ばれてるんだ？」

そう尋ねられたお父さんは笑いながら

「お父さんに見えたらしい・・・だからそう呼んで良いか？と言われて良いよと言っただけだ」

飛翔と話すお父さんにフェイトさんが

「それで飛翔？・・・その人がエリオの成長した姿って言うのは判ったけど・・・私が呼ばれた理由は？」

首を傾げるフェイトさんに女性の方が笑いながら

「判らない？私はアリシアだよ」

そう言われたフェイトさんは

「えっ？・・・アリシア姉さん・・・」

驚くフェイトさんにアリシアさんは

「うん、そうだよ・・・」

そう笑うアリシアさんにフェイトさんはぼろぼろと涙を流しながら

「本当だったんだ・・・平行世界の世界の1つではアリシアが生きる世界があるって龍也が言ってたけど・・・本当だったんだ」

本当に嬉しそうに言うフェイトさんの肩を掴んで引き寄せながらアリシアさんが

「フェイト・・・もしかして龍也のこと好きでしょう？」

そう言われたフェイトさんはボンツ！耳まで赤くなりながら頷く、アリシアは嬉しそうに

「そうか～うんうん・・・良かった良かった、お姉さんとしては妹の恋路は気になるのよ」

そう笑うアリシアさんにフェイトさんは

「それで、その！・・・龍也は凄い鈍感なの・・・どうすれば良い？」

そう相談されたアリシアさんはフェイトさんに耳打ちしながら、何か作戦を伝授していた・・・僕がその光景を見ていると

「おい・・・エリオ」

飛翔に呼ばれて振り返ると飛翔は僕の眼を見て

「お前に護りたい者はあるか？」

そう言われた僕はお父さんと話をしている、キャロとルーテシアを見ながら

「居ます・・・命を賭けてでも護りたい人達が居ます」

そう言うと飛翔は頷き

「そうか・・・それなら・・・何も言わんさ・・・」

遠くを見ている飛翔に

「それじゃあ・・・貴方に護りたい人は居ますか？」

そう尋ねると飛翔はアリシアさんを見ながら

「居るさ・・・何をしても護りたいのがな・・・何といっても妻だからな」

妻！？・・・えっ・・・じゃあ僕の可能性の1つとしてアリシアさんと結婚する場合があるの！？僕が混乱してると

ガシッ！！

両サイドからキャロとルーテシアに肩を掴まれる・・・今振り向いちや駄目だ・・・きつと良くない事がある・・・僕が怯えていると

「エリオ君・・・」

「エリオ・・・」

「「少しお話しよう?」「」

僕はキャロとルーテシアに引き摺られながら演習場を後にした・・・その後の事は思い出たくない・・・唯1つ言えるのはキャロとルーテシアが実は凄く嫉妬深かったという事だった・・・

るるゝ涙を流しながら引き摺られていくエリオを見ながら

「龍也、お前と話すのは中々楽しかった・・・だが俺にはまだやる事があるんでな・・・そろそろ帰らして貰う」

俺がそう言つと龍也は

「そうか・・・また気が向いたら来ると良い」

そう微笑む龍也に俺は

「俺は管理局は嫌いだ・・・だがこの世界の管理局は嫌いじゃない・・・」

「

他の世界の管理局とこの世界の管理局は根本的に違う・・・そうとも居心地が良いのだ・・・まるで光写真館の様に・・・だからまた来ても良いと思った・・・龍也の雰囲気も嫌いじゃない・・・良い友達に慣れそうな気がしたからだ

「今度この世界に来たら俺と模擬戦してくれ・・・龍也・・・お前と戦えば・・・俺はもっと高みに行けると思うんだ」

そう言つと龍也は戦闘凶かと呟きながらも

「今度な・・・それではな・・・飛翔また会おう」

別れを言う龍也を見ながら別の世界に行こうとした瞬間

ヒュッ！！

紅い布・・マグダラの聖骸布で拘束される・・驚きながら振り返るとアリシアが鬼の形相で

「何勝手に別の世界に行こうとしてるのよ・・私は飛翔を連れて帰るためにここに来たのよ?・・そんな勝手なことはさせない」

さっきまでフェイトと話してたのに!?俺が驚いているとアリシアは龍也の前に来て

「それじゃあ私達は帰ります、色々ありがとうございました、それとお茶美味しかったです」

ひらひらと手を振りながら別のゲートを生み出す・・そのゲートは元の世界に続くゲートだ・・俺が暴れて脱出しようとする

「マグダラの聖骸布から逃げれる訳ないでしょ・・さっ帰るわよ・・飛翔みんなOHANASHIするって準備してるんだから」

俺はその死刑判決を聞きながら龍也の世界を後にした・・いや強制的に後にした・・また今度この世界に来ようと決意しながら・・

一周年記念番外編 世界を渡る者と守護者（後書き）

ちよつと異色的なコラボにしてみました・・最初はガチバトルの予定だったんですけど・・上手いなくて・・こういう形にしました・・それでは次回の一周年記念の番外編の前書きで再会致しよう

一周年記念番外編 マテリアル・パニック（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回のリクエストは「ハナト様」でマテリアルの話です、それでは一周年記念番外編始まります

一周年記念番外編 マテリアル・パニック

一周年記念番外編 マテリアル・パニック

さて・・・人間と言うのは想定外の事が起きると思考停止になると言うが・・・今回それを実感していた・・・昨日私は静夜達と寝た・・・それは間違いない・・・では私の動きを完全に封じる様に眠っている3人の美女は

「むにゅむにゅ・・・」

「すう・・・すう・・・」

「・・・父上・・・」

間違いなく静夜達と言う事になるのだが・・・何故大きくなっているのか？と言う風に完全に混乱してしまった・・・服はどうやらBJの様だ・・・脱いだであろうパジャマが3着見える・・・静夜と星奈は畳んであるが、雷華はそのまま・・・らしいと言えらしいのでそこまでする必要は無い・・・だが問題は3人の方だ・・・良く眠っている為起こすのは可哀想だ・・・だが3人の甘い匂いとか・・・柔らかな胸とかに私は完全に困ってしまった・・・私は別の事を考え・・・今のこの状況の事を完全に頭の外へと追い出した・・・

ん・・・んん・・・朝か・・・我は目を開けた瞬間違和感を感じた・・・パジャマを着て寝た筈なのだが・・・何故か騎士甲冑・・・我が眠い目を擦りながら父上の方を見ると

「・・・やっと・・・起きたか・・・」

心なしか疲れた表情の父上は我を見て

「どうして大きくなっているのか説明してくれ」

大きく？首を傾げながら自分の身体を見て

「おおっ!？」

我は驚きバランスを崩しベッドから・・・と言うか父上の上から落ちる・・・その際星奈と雷華を反射的に掴んだので

「もぎゅっ・・・」

「つつ・・・何するんですか!？」

強制的に安眠を妨害された星奈が怒りながら我を見て・・・目を丸くしながら

「静夜?・・・どうして大きくなってるんです?・・・まだそこまでお父様の魔力は溜め込んでない筈ですが・・・?」

そう我達は父上の魔力でこうして居る訳だが、父上の魔力量は多いので月に1回魔力を放出する為に大きくなる・・・だが今回は限界量まで魔力を溜めた訳でもなく、また自分の意思でもなく身体が大きくなってしまっているのだ・・・我は星奈を指差しながら

「自分の身体を見てから言え・・・」

そう言つと星奈は自分の身体を見て

「!？」

ぺたぺたと自分の身体を触り始める・・そして

「どうして?・・静夜説明を求めます」

真顔で説明してくれと言つ星奈に

「我が知りたい・・」

2人で話してると雷華が目を擦りながら起き

「朝から何・・おおっ!？何で2人とも大きくなってるの・・って僕もツ!？」

漸く起きた雷華がまず我達に驚き、その後自分の変化にも気付き大声を上げる・・我達が漸く事態を把握した所で父上が

「皆・・起きたか・・ではどうして大きくなったのか教えてくれ」

そう尋ねて来る父上に首を振りながら

「すまん・・我達も判らない・・」

どうすれば元の子供形態に戻れるかも判らないし・・どうして大きくなっているのかも完全に判らない・・我がそう言つと父上は

「では、昨日の夜何があったのか・・・思い出してみよう・・・私達は昨日普通に寝た・・・この時は子供だった・・・だが起きれば大人・・・夜の間に何かあったという事だ・・・夜何があったか思い出せるか？」

我は昨日の事を思い出し・・・1つだけ思い当たる事があった・・・それは星奈と雷華も同じの様に

「そうです！昨日妙に身体が熱くて・・・BJに変えたんです・・・もしかしたらそれがきっかけで・・・」

冷静に分析する星奈に父上が

「身体が熱く・・・？判らんな・・・はあ・・・仕方ない暫く大人の姿で居てもらう事になるか・・・」

そう言う父上は携帯を取りどこかに電話を掛ける・・・雷華が

「パパ何処に電話したの？」

父上は疲れた表情で

「なのはとはやてとフェイト・・・何時までもBJで居る事もないだろう？・・・だから服を持ってきてくれと頼んだんだ」

そう言う父上に頷き、我達ははやて達が来るのを待つことにした・・・

兄ちゃん何やるか・・・急に服を持ってきてくれなんて・・・私は首を

傾げながら兄ちゃんの部屋に向かった・・・部屋の入り口でなのはちやんとフェイトちゃんが停止している・・・私はその2人を押しのけてから兄ちゃんの部屋の中を覗き込み・・・目を見開いた

「あっはやて姉おはよう」

「おはようございます、はやて姉様」

「おはよう、はやて」

大きくなっている静夜達に・・・

「ああ・・・はやてか・・・早く来てくれたんだな・・・助かる・・・」

疲れた表情の兄ちゃんが居た・・・私は持って来た服を静夜に渡しながら

「なあ・・・兄ちゃん・・・何で3人とも大人になってるん？」

そう尋ねると兄ちゃんと静夜が

「知らん、我が聞きたい」

私と同じ顔・・・目付きが少し悪いが・・・の静夜がそう言うと星奈と雷華は停止しているなのはちゃんとフェイトちゃんの前に行き

「何時までほうけてるつもりですか・・・オリジナル」

そう言うとなのはちゃんの手から服を奪い取る星奈と

「馬鹿みたいに口開けてたら、パパに嫌われるよ」

一応警告してからフェイトちゃんの腕から服を引っかく雷華、
人は服を持ってきて

「ふむ・・ワンピース・良いです」

「僕のは・・うん・良いね」

服の評価をしている雷華達の横をすり抜けて兄ちゃんが

「悪いが、服を着替えるのを手伝ってやってくれ・私では・無理だ」

そう言うときとささと部屋を出て行ってしまった兄ちゃんの後姿を見ながら私は

「ほいほい、それじゃあ着替えて兄ちゃん所行こうか？」

そう言うとき3人は

「「「はいッ!」「」「」

身体は大人だが中身はそのままのようで可愛い子供のままだった・私が着替えさせてるのを手伝っていると復帰したなのはちゃんとフェイトちゃんも着替えるのを手伝い始めたが・

「あう・私より胸がある・」

ショックを受けているなのはちゃんに星奈が

「私達と貴女達は外見は殆ど同じですが、同一の人間ではないです、だからスタイルが違うのは当然でしょう?」

馬鹿にするように言う星奈に

「むう・・ブラジャーやだ」

ブラジャーを着けるのを拒否する雷華に

「だ、駄目だよ!!ちゃんとして!!」

慌てて無理やり着けさせるフェイトちゃんを見ながら

「静夜は私と同じやね」

身体スタイルもまったく私と同じ静夜にそう言つと静夜は

「我は父上がどれほどはやてを大切にしてるか知ってる・・だから全く同じなのだ・・こうしてみると双子に見えるだろう?」

そう笑う静夜の頭を撫でながら

「そうかあ・・そういわれると嬉しいわ・・所で兄ちゃんが私の事大切に思ってるってどれくらい?」

そう尋ねると静夜は唇に手を当てて

「秘密だ・・だがこれだけは言える・・父上の心のウェイトを1番大きく占めているのは誰でもなくはやてだと・・」

そう言う静夜の言葉を聞きながら

「そうか・・嬉しいわあゝそれじゃあもつと頑張れば兄ちゃんの認識も変えられるな」

私はそう呟き、握り拳を作っていた・・

「着替え終わったな、そんじゃあ食堂に行こうか？」

私は静夜達となのはちゃん達と一緒に食堂に向かった・・食堂では兄ちゃんが紅茶を飲みながら座っていた・・それを見た雷華は

「どーんッ！！！」

迷わず走って行き体当たりを仕掛ける

「うおおおっ！？」

悲鳴を上げながら雷華に押し倒される兄ちゃんを見て

「・・あれってフェイトちゃんの可能性の1つやよね・・はっちゃけすぎやろ」

そう言うフェイトちゃんは

「そつか・・ああすれば龍也に抱き付けるのか・・」

物凄く私が不機嫌になる事を平気な顔で言うフェイトちゃんの頭を叩いてから私は兄ちゃんの所に行った

「・・・雷華・・・どきなさい・・・」

押し倒されている兄ちゃんがそう言つと雷華は

「やーだ・・・んふふ・・・パパの匂い・・・」

そう言つとすりすり頭を擦り付ける雷華に兄ちゃんは

「・・・良いから！早くどきなさい！！」

そう怒鳴るが無視する雷華・・・それを見ていた星奈が

「いい加減にしないで・・・」

雷華の服の襟を掴んで兄ちゃんから引き離す星奈の表情は不機嫌そうだった・・・私がそんな事を考えていると静夜が

「我達は父上が大好きだから・・・独り占めされるのは不快なんだ」

その言葉に笑いながら私達は兄ちゃんの座っている席の近くに腰掛けた・・・兄ちゃんの隣は静夜と星奈がブロックし、なのはちゃんとフェイトちゃんが近づけないようにし・・・斜め向かいに雷華が座り、自分の隣の席を叩きながら

「はやて姉はここ！」

にこにこと笑う雷華に頷き兄ちゃんの向かいの側の席に座った・・・

「私の考えなんですけど、私達が大人になった理由に心当たりがあ

ります」

朝食を終えてからそう切り出した星奈の話を聞く

「お父様のWユニゾンなんですけど・・あれは人間が持てる魔力の限界量を超えてますよね？はやて姉様」

そう言われた私は頷きながら

「そうやね、兄ちゃんの魔力がSSS+、ユナがSSS-、アザレアもSSS-・・この合計やから完全にオーバーしとるな」

私がそう言つと静夜が星奈の説明を引き継ぎ

「それでWユニゾンのコントロールをしやすくする為に暫くWユニゾンでの訓練をしてただろう？・・つまりその凄まじい魔力が我達に流れ込んで来て・・と言っても一気にではなくゆっくりと・・それで昨晚、我達が溜め込める魔力の限界量を越え・・大人になった・・そう考えれば辻褄が合う、我達の姿が長く大人なのもそれが理由だろう、普通なら半日で元に戻るのに・・まだ戻る気配がないからな」

そう笑う静夜に兄ちゃんは

「それなら待つてれば戻るのか？」

そう尋ねられた星奈は

「戻ると思いますよ？何時戻るかは判りませんけど・・」

そう笑う星奈に兄ちゃんは

「そうか・・・はやて私達は部屋に戻る・・・同じ姿の静夜達が居たら
局員が混乱すると思うからな・・・」

そう言つて戻つて行く兄ちゃんの後姿を見ながら

「大丈夫かな？静夜と星奈はともかく雷華は甘えん坊やからな・・・
兄ちゃん気絶しないと良いけど・・・」

私はそう呟いて執務室に戻った・・・

私は部屋に戻った後・・・とても困ってしまった・・・理由は

「雷華！離れなさいッ！」

「そつだ！独り占めは許さんぞ！！」

私に抱きついたらまま離れようとしないう雷華に静夜と星奈が痺れを切
らして強硬手段に出たのだが・・・

「嫌ーだッ！！パパの傍に居るのー！！」

2人掛でも引き離せない力で抱きついてくる雷華・・・正直こまる・・・
何に困るって？・・・言わなくても判るだろう？・・・柔らかい感触と
か甘い匂いとかにだ・・・私が困っていると・・・静夜と星奈が無言で
雷華を引っ張るのを止め

「そうか・・・そこまで独占するのだな・・・」

「そっちがそういう考えならこっちにも・・・」

そう言うとユラリと私の顔を見て

「ドーンッ!!」

「ぬおおおっ!?!」

2人がドーンと言いながら抱き付いてくる・・・もうこれに私は完全に混乱した・・・雷華だけでも手一杯だったのに・・・静夜と星奈を加わってしまい・・・3倍になった柔らかい感触とか・・・甘い匂いに私の脳は完全に処理オーバーを起こし・・・意識を失った・・・

「父上・・・父上・・・」

「パパ・・・パパ・・・」

「お父様・・・・・・」

うん・・・私が目を開くと心配そうに私の顔を覗き込む、元の子供の姿に戻った静夜達の顔が見えた・・・私は上半身を起こしながら

「私は・・・」

何があつたのか?と静夜に尋ねると

「父上は丸一日気を失っていたんだ・・・」

丸一日！？・私が驚いていると雷華が

「ごめんなさい・・僕が調子に乗ったから・・」

しゅんとして謝ってくる雷華・・私は雷華の頭を撫でながら

「良いよ・・私は気にしてないから・・今何時だ？」

そう尋ねると星奈が

「もう夜の7時です・・」

私はその言葉を聞いてから

「そうか・・もう夕食か・・そうだ折角だからヴィヴィオも連れて
外食に行こうか？」

そう言うと言きたい！！と声を揃えて言う雷華達を連れてヴィヴィ
オを迎えに行き外食に向かったが・・ガ移植に向かう途中私は

（抱きつかれて気絶か・・もう少し免疫をつけないと不味いな・・）

養女である3人に抱きつかれて気絶してしまった自分に嫌気が差し、
もう少し女性に対する免疫をつけようと私は決めた・・

一周年記念番外編 マテリアル・パニック 終り

一周年記念番外編 マテリアル・パニック（後書き）

人気のあるマテリアルのリクエストで大きくなった星奈達に困ってしまう龍也・・と言うコンセプトで作ってみました・・どうでしたか？上手く書けているのか自信がないので感想を貰えると安心できるので感想を貰える事を期待しています！それでは次の一周年記念の番外編で会いましょう

一周年記念番外編 八神家の温泉旅行（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回のリクエストは「畏無様」で八神家にユナとアザレアを追加した旅行編です、ほのぼの系の話なので得意分野なので自信があります！！ちょっと長めの話ですがどうか宜しくお願いします

一周年記念番外編 八神家の温泉旅行

一周年記念番外編 八神家の温泉旅行

それはある日の買い物帰りの事だった・

「に・・兄さん・・く・・くじ引きです・・や・・やってみたいです・・」

人見知りの激しいアザレアの人見知り克服作戦として一緒に買い物に来た帰り、アザレアがくじを引きたいと言う・・アザレアは余り自己主張をしないので良い傾向だと思い

「良いよ・・ちょうど・・券もあるし・・やってみようか・・」

買い物で貰った券が3枚あるのでくじを引きに行く

「お願いします」

係員の人に券を渡す・・係員は券を数えて

「3回ね・・はいどうぞ」

アザレアがガラガラを回す・・1回目は白玉

「あー残念・・外れ・・残念賞の飴ね」

アザレアはそれを無言でポケットに仕舞い・・・再び回す・・・今度は赤色で

「おっ！6等賞だね・・・はいぬいぐるみ・・・」

熊のぬいぐるみを受け取ったアザレアはそれを私に渡しながら

「こ・・・こんどこそ・・・」

妙に気合の入った顔で抽選機を回す・・・最後に出たのは

「おおっ！！一等賞だよ！！景品は最近出来たばかりの温泉宿へご招待～」

カランカランとベルが鳴るアザレアは

「やった！！やりました！！兄さん！私頑張りました！！」

笑顔で飛び跳ねるアザレアの頭を撫でながら

「やったな、アザレア・・・皆で行こうな・・・」

私はそう言いながらアザレアと一緒に六課へと帰った・・・そして3日後・・・

「おー中々良い所そうやね～」

はやてが旅館を見上げながら言う、この旅館は最近出来たばかりの和風旅館で地球の雰囲気によく似ている・・・私は荷物を持ちながら

「そうだな・・・中々良い雰囲気だ」

私がそう言つと肩の上からユナが

「お兄ちゃん、楽しみですね」

初めての旅行が楽しみでしようがないと言つ様子のユナの頭を撫でていると

「・・・に・・・兄さん・・・来て・・・よ・・・良かったです・・・」

最初は行かないと駄々を捏ねていたアザレアが私の顔を覗き込みながら言う・・・私はアザレアの頭を撫でながら

「だろ・・・本当はヴィヴィオも連れて来たかつたんだけどな・・・」

最初はヴィヴィオも連れて来る予定だったのだが、なのは達と一緒に居ると言つて来なかつたヴィヴィオ・・・そしてヴィヴィオを1人にするのは気掛かりだとザフィーラも残つた為・・・今来ているのは

「兄貴・・・楽しみだな・・・どんな所なんだろ？」

にこにこ笑うヴィータと

「おおっ！！・・・この名物は新鮮な魚介か・・・うむ・・・楽しみだ・・・」

パンフレットを見ながら笑っているシグナムと

「・・・旅行ですか・・・来て見たかつたんですよ」

本当に楽しそうに笑っているシャルと・

「温泉・・お兄様と一緒に入れるです」

小さなリュックを背負っているリインの計8人だ・・私ははやて達を連れてチェックインをしてから部屋に向かった・

「おおー広いお部屋です！ユナちゃん！アザレアちゃん！凄く広いですよ」

「そうですねーリイン・・広いですねー」

「・・ひ・・広いです・」

キヨロキヨロと部屋の中を見ながら笑うリイン達に

「リイン、ユナ、アザレア・・私は辺りを散歩に行くがどうする？一緒に来るか？」

私がそう尋ねると3人とも行く！と笑い走ってくる、私は3人の頭を撫でながら

「はやて達はどうする？」

そう尋ねるとはやては

「うーん・・私はやめとくわ・・ちょっと考えたい事あるし・」

「私もやめとく、兄貴はリイン達と一緒に散歩して来いよ」

行かないと言うはやてとヴィータ、シグナムとシャルは

「私は一緒に行かせて貰います」

「私もです、偶にはお兄さんと一緒に散歩に行きたいですから」

一緒に来ると言うシグナムとシャルを連れて散歩に出かけた・

「ほう・・・紅葉か・・・」

紅葉の時期ではないのだが、こういうのも悪くないと思いながら歩いていると

「そうですね・・・季節外れの紅葉も良いですね・・・」

紅葉を見ながら言うシャルと話をしていると

「お兄様！！早く！早くです！！」

「お兄ちゃん、早く来ないと追いつちやいますよ！」

「に・・・兄さん・・・早く・・・」

ピョンピョン跳ねながら言うリン達の姿を見て微笑みながら

「ふふ・・・子供は無邪気で良いな・・・」

そう呟くとシグナムが

「そうですね・・・さっ、兄上行きましょう、リイン達が呼んでいます」
私の手を握りながら言うシグナムに頷き、リイン達の方へ歩いて行った・・・

部屋に残ったはやてとヴィータは

「うーんとお風呂は・・・ちえ・・・混浴や無いわ・・・」

旅館のパンフレットを見ながら舌打ちする私にヴィータは

「でもでも皆で寝れるから兄貴に抱きついて寝れるぞ?」

そう言うヴィータに首を振りながら

「無理やね・・・ユナとアザレア・・・リインが抱きついて寝るやろ・・・近くには行けるけど・・・抱きついては寝れないやろね」

そう言うヴィータは

「ええ・・・折角兄貴と一緒に寝れると思ったのに・・・最近兄貴と一緒に寝て良いか?って言う駄目って言われるからチャンスだと思ったのに・・・」

がっかりした様子のヴィータに

「そうやね・・・でもまあ一緒にご飯食べて、一緒に部屋で寝るのも

楽しいで良いやろ？」

私がそう言つとヴィータは

「そうだな．．あんまり我俣言つもんじゃないか．．んじゃ．．私風呂行つて来るわ．．はやても一緒に来るか？」

「そうやね．．一緒に行くわ」

私はそう返事を返しヴィータと一緒に風呂に向かった．．私はヴィータと旅館の廊下を歩きながら

（ごめんな．．ヴィータ．．私1個嘘付いたわ．．）

心の中でそう謝っていた．．

「はふう．．良いお湯です」

身体にタオルを巻きつけながら言つラインに

「そうだな．．」

私はそう返事を返した、子供と一緒に入れる露天風呂、というのがあったのでライン達と一緒に来たのだが．．他には子供ずれの客が居ないようで独占状態を満喫していた

「あ．．ここから散歩してた道が見えますよ、アザレア」

「ほ・・・本当です・・・綺麗です・・・」

紅葉を見ながらお風呂を楽しんでいる、ユナとアザレアを見ながら、私も温泉を満喫していた・・・

「あうう・・・目に泡が・・・」

目に泡が入って痛いと言っているアザレアに

「あーあ・・・ほらおいで」

自分の傍に招きよせて頭からお湯を掛けて泡を流してやると

「うう・・・ありがとうございます・・・兄さん・・・」

笑いながらお礼を言うってくるアザレアの頭を撫でていると

「お兄ちゃん・・・頭・・・お願いします」

目を閉じて待っているユナに

「はいはい・・・今行くよ」

手にシャンプーを付けて頭を洗ってやってお湯を掛けてやると

「ありがとうございます」

そう笑うユナに

「気にしなくて良い、さっ．．そろそろ出るか．．」

リン達を連れて私は部屋に戻った．．

「兄上も風呂に行つて来たのですか？」

浴衣で尋ねて来るシグナムに

「ああ、良いお湯だったよ．．シグナム達はもう入ったのか？」

そう尋ねると頷くシグナム達．．それからお風呂上りのフルーツ牛乳をリン達に渡していると

「ご夕食を持つて来ました．．」

仲居さん達が夕食を運んで来てくれる、それを見てリンは

「美味しそうです」

にこにこと笑うリン．．私も笑みを浮かべながら夕食を見た．．この旅館の目玉だと言う海鮮料理は私から見ても素晴らしい物だった．．海老や野菜の天ぷらに青物の刺身につみれ汁、焼き魚．．それと小さな1人用のコンロには鮑のステーキ．．目玉と言うだけはあると思ひながら皆で夕食を食べる

「うん．．美味しいです．．」

海老の天ぷらを食べながら笑みを零すアザレアに

「アザレアは海老が好きなのか？」

そう尋ねるとコクンと頷きながら

「は・・・はい・・・好きです・・・この味と食感が好きなんです・・・」

そう言うアザレアに

「そうか、では私の天ぷらを上げよう」

そう言つてアザレアのお皿に自分の天ぷらを置くと

「に・・・兄さん！・・・べ・・・別に気にしなくて良いですよ・・・」

慌てた様子のアザレアに

「良いから良いから、私のことは気にしないで食べなさい」

そう言つとアザレアはコクリと頷き、天ぷらを食べ始める・・・もそもそと食べる様子が可愛くて微笑んでいると

「あーん」

口を開けて待っているリインに

「はいはい・・・リインは甘えん坊だな」

そう言いながら食べさせて上げると

「んふふ〜美味しいです〜」

本当に嬉しそうに笑うリインを見ていると

「あゝん・・・」

目を閉じて口を開くヴィータに

「・・・まあ良いか・・・」

一瞬どう反応しようか困ったが、口の中に焼き魚を入れてやると

「へへ・・・ありがと兄貴・・・」

嬉しそうに笑っているので良いかと思っているとユナが私の膝の上に座りながら

「あゝん・・・」

口を開き自分もと言うユナに

「はいはい・・・」

自分の食事が余り進まないが、別に良いかと思いリイン達にアーンをしながらゆっくりと食事を進めた・・・

「皆寝たか・・・」

食事を終え・・・皆でトランプなどをしてから眠りに着いたのだが・・・私は皆が寝てからゆっくりと部屋を抜け出し・・・家族用の露天風呂に向かった・・・この時

「・・・やっぱりな・・・」

ぽそりと呟く人の存在があつたのに私は気付かなかつた・・・

「ふう・・・こうしてゆつくり浸かるのは気持ち良いな・・・」

部屋事に家族で入れる露天風呂がある事を知り、1人で入りに来たのだ・・・

「月を見ながら・・・悪くないな・・・んっ・・・ふう・・・」

持つて来た気持ちだけの日本酒を呑みながら風呂を楽しんでいると・・・ガラッ・・・後ろで扉の空く音がする・・・私はまさかと思いながら振り返ると

「やっぱ・・・兄ちゃん入りに来とつたな・・・」

身体にぴつちりとタオルを巻き付けながら言うはやてに

「ど・・・どうして・・・？」

驚きながら尋ねるとはやては湯船に入りながら

「兄ちゃんはお風呂好きやからね・・・こう来ると思ってたんよ」

そう笑うはやては私の手からお猪口を取り、酒を自分で注いで

「んっ・・・うん・・・美味しいわ」

にこにこ笑いながら酒を飲み始めたはやてに何を言っても無駄だ

と思い、私はもう1個のお猪口で酒を飲み始めた・・・それから数分後

「ん・・・もう無いんか・・・兄ちゃんお酒に弱いからな」

無くなってしまった酒瓶を見ながら言うはやてに

「すまん・・・まさかはやても来ると思ってたんだ」

そう言うとはやては笑いながら近寄って来て私にもたれる・・・私が慌てて離れるように言おうとするとはやては

「昔はこうやって兄ちゃんと一緒に入ったよね～あん時から兄ちゃんは目にタオル巻いたり・・・私の裸、見ないようにしてたよね・・・」

懐かしそうに言うはやてに離れろと言えず・・・はやてに

「はやて・・・もう知ってるだろ・・・私はお前の本当の兄でも無ければ、血縁者でもない・・・何時までも兄だと呼ばなくても良いのだぞ」

私は正確にはこの時代の人間ではない・・・過去の古代ベルカから自分の父親である、初代神王によって過去から送られた人間だ・・・だからはやてとは何の血縁関係は無いのだからと言うと・・・はやては泣き出しそうな声で

「そんなん関係ない・・・血縁関係が無かるうが・・・過去の人間だろうが・・・関係ない・・・私の兄ちゃんは兄ちゃんだけや・・・だからそんな事言わんで・・・そんなん・・・言われたら私・・・悲しいわ・・・」

そう呟くはやての頭を撫でながら

「すまん．．もう言わない．．だから泣かないでくれ．．」

謝りながら言うとはやては涙を拭いながら

「それにな．．私本当は兄ちゃんが従兄妹や無くて良かったって思うとる．．私が兄ちゃんの事好きな気持ちは本当や．．誰にも渡したくないし、ずっと私の傍に居て欲しい思うとる．．兄ちゃんが私の傍から離れると思うと．．怖くて怖くて．．夜も寝れなくなるんや．．」

はやての呟きを聞き続ける．．はやてはゆっくりと

「兄ちゃんが私の事を妹としか見てない事も判ってる．．それでもな．．覚えてて欲しいんや、私が兄ちゃんの事を愛しとるって事を．．ううん．．私だけや無い．．ヴィータやシグナムも一緒や．．兄ちゃんの事を本気で愛してると思う．．」

私はその言葉にどう返事を返せば良いのか判らなかった．．私にとつてはやては妹だ．．これは絶対に変わらない事実．．なのだが．．最近．．少しずつだがその認識が変わって来てる気がする．．

「だからな．．兄ちゃんは１人やないんよ．．私達も居る．．リイン達も一緒に居る．．嫌やけど．．なのはちゃん達も居る．．だから兄ちゃんが絶対に１人になる事はないんや．．それだけは覚えといてや．．ふう．．ちよつと逆上せたわ．．私もう出るわ．．」

そう言うてはやてが出て行った後１人で空を見上げながら

「私は．．どうすれば．．良いんだ．．」

今・・・私は満たされ過ぎている・・・はやて達やなのは達・・・私の事を・・・はやての言い方で言えば・・・その・・・愛してくれてる・・・人達が居る・・・だが私には人を愛するという事が判らない・・・護りたいと思う・・・だけど・・・それは恋では無く・・・責任感や義務感だ・・・それに

「・・・私のような壊れた人間に・・・人を愛する資格など・・・無い・・・」

ヴェルガディオスに言わせれば、私は出来損ないのブリキ人形・・・人間の振りをしているロボットだそうだ・・・それは自分でも感じていた・・・死ぬ事を恐れない人間など居ない・・・だが私は自分が死ぬ事に恐怖を覚えない・・・だからヴェルガディオスの言っていた事は的を射てると思う・・・私は湯船から出ながら

「私は・・・幸せになっても良いのだろうか・・・」

セレスが消える前に言っていた・・・私には幸せに生きる権利がある・・・

「こればかりは・・・誰に聞くことも出来んか・・・自分自身の手で見つけないとな・・・」

私はそう呟きながら・・・部屋に戻った・・・次の日・・・

「ありがとうございました！」

見送られながら旅館を後にする・・・私が考え事をしているとはやてが私の腕を抱きしめながら

「なあ・・・折角やからこのままどこか遊びに行こう？・・・ザフィーラが荷物を取りに来てくれるらしいから」

そう言うはやてに少し考えてから

「そうだな・・・このまま遊びに行こうか・・・」

自分でも珍しいと思いながらはやての提案を飲んだ・・・私達は旅館の人に事情を説明し、ザフィーラの顔写真を渡し荷物を預け・・・そのままクラナガンに出掛けて行った・・・私の回りに居るはやて達を見ながら・・・

（少しずつ・・・少しずつで良い・・・考えてみるよ・・・自分の幸せを・・・）

そんな事を考えていると柔らかな風が吹いた・・・それはまるでセレスが頑張れと言ってくれてる様な気がした・・・私が空を見上げてみると

「兄ちゃん、早く早くッ！！」

「兄貴！早く来ないと置いてくぜーッ！」

階段の下の方から私を呼ぶ声がする・・・私は笑いながら

「ああ・・・今行くよ」

そう返事を返し歩き出した・・・まだ自分の幸せなんて判らない・・・でも何時か・・・判る日が来る・・・その時まで・・・私は進んで行こう・・・決して立ち止まらずに・・・

一周年記念番外編 八神家の温泉旅行 終り

一周年記念番外編 八神家の温泉旅行（後書き）

・・ほのぼの・・の予定だったんです・・それは間違いなのです・・
なのに後半はシリアスになってしまいました・・どうしてでしょう？

自分でも判らないのですが・・こういう流れになりました・・リク
エストの希望通りになったのか不安ですが・・それなりには自信作
です・・それでは次回の一周年記念番外編の前書きで再会致しまし
よう・・それでは失礼致します

一周年記念番外編 暖かい場所で・・・（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は「若輩侍様」からのリクエストで、ジエイル＋悪巧み＋龍也＋ノーヴェ＋チンクⅡ前半ほのぼの、後半ギャグ？という感じの流れです・・初めて自分から龍也を遊びに誘ったチンクとそれを応援しようとしたジエイルの馬鹿・・それによって幸せな時間を壊されたチンクとノーヴェの怒り・・という感じですねそれなりには面白いと思うので今回もどうか宜しく願います

一周年記念番外編 暖かい場所で・

一周年記念番外編 暖かい場所で・

食堂の前に銀髪の小柄な女性がいた・名をチンク・スカリエツ
ティの養女の1人だ・私は食堂の中を覗き込みながら

「ふう・落ち着け・出来る筈・私にだって出来る筈だ・」

自分に言い聞かせるように繰り返し呟いた・明日・私は休暇で
あり・八神も休暇・これを逃さない手はない・一応はやてに
も許可を取った・そう何も問題は無いのだ・だが・

(こ・断られたらどうしよう・)

断られたら・という考えが頭を過ぎる・八神は非常に良くモテ
る・優しく強くて思いやりがある・これでモテない筈がない・
私が断られたらどうしよう・と思い動けずにいると・後ろから

「チンク姉、どうだ龍也誘え・むぐっ!」

後ろから声を掛けてきたノーヴェの口を押さえゆつくりと食堂の方
を見ると

「??」

キョロキョロと辺りを見回している八神に一息ついていると、ノー
ヴェが

「その様子だとまだ誘えてないんだな・・・チンク姉・・・頑張れよ」

頑張れと言ってくれるノーヴェに

「でも・・・だな・・・断れると思うと怖くて・・・」

私がそう言うとノーヴェは頭を抱えながら

「大丈夫だって、龍也は断ったりしねえから・・・安心して誘って来いよ」

そう言われるが・・・私は

「いや・・・いざ誘えたとして・・・2人きりでは緊張して何も話せん！」

そう言うとノーヴェは呆れたように

「チンク姉・・・そんな事威張って言わないでくれ・・・はあ・・・んじや私も一緒に行こうか？・・・1人だ駄目だって言うなら仕方ないだろ？」

ノーヴェと一緒に行くのか？と尋ねてくる・・・少し考える・・・まずノーヴェも八神が好き・・・これは重要だ・・・私が計画してるのはピクニックの予定だ・・・私は料理が得意なのでアピールするには絶好の機会・・・そして行くところとしては街を歩いているうちに見つけた穴場的なポイントであり、明日は平日だから人も少ないだろう・・・それに1人より2人の方が心強い・・・色々と考え・・・出した結論は

「頼む・・・」

そう言うとノーヴェは頭をがりがり掻きながら

「ああ、一緒に行くのは良いけど・・・誘うのはチンク姉1人だぜ・・・ほら・・・スバルとかが居なくなっただし・・・今がチャンスだぜ」

・
そう言われ私はノーヴェに背中を押され食堂の中に足を踏み入れた・

「ん？チンク・・・どうした」

紅茶を飲みながら尋ねてくる八神に

「あ・・・うん・・・そのだな・・・」

スカートを握り締めながら八神の顔を見ながら

「あのだな・・・明日なのだが・・・その暇か？」

そう尋ねると八神は

「明日？暇だぞ・・・ヴィヴィオはなのはと遊びに行くそうだし・・・ユナ達ははやてと買い物に行くらしいからな・・・はは・・・折角の休みだが・・・部屋で本を読むくらいだな」

からからと笑う八神だが・・・その背後では

「・・・」

早く私に八神から離れる、という視線のフェイトが見える、その手には映画のチケットが見えた・・此処で退いたら駄目だ・・此処で退いたら・・明日八神はフェイトと出掛ける事になる・・そう思うと・・今まで緊張していたのが何処かに消えてしまい・・私は自然に

「それならば明日私と出掛けないか？・・ああ・・勿論2人きりと言う訳ではない、ノーヴェも一緒になんだが・・どうだ？」

そう言うのと八神は嬉しそうに笑いながら

「ああ、良いぞ・・明日一日暇か・・と思っていたからな・・明日を楽しみにしてるよ・・」

そう言って歩いて行く八神の後姿を見ながら

「やった・・上手く行った・・」

私が感動に震えていると、フェイトが

「ギリッ・・」

私を凄まじい眼光で睨んでいたが・・全く気にせず私は部屋へと戻った・・

次の日の朝早く

「よっ・・うむ・・」

フライパンでベーコンと卵を炒めながら1人納得する・・最初こそ酷い有様だったが八神に教わったおかげで料理も大分得意になった・

・良く考えれば・・・私が魔道師として活動出来るのも・・・こうして料理が出来るのも全部八神のおかげだ・・・

「私はどれ程八神に助けられてるのだろうか・・・」

私はそんな事を考えながら持つていく弁当を作っていく・・・先程炒めたベーコンと卵はパンに挟んでサンドイッチにし・・・茹でたスパゲティにケチャップを加えて炒める・・・ナポリタンスパゲティに・・・それと魚のフライ・・・最後にサラダをバスケットに入れていると

「おや？チンク・・・どこに出掛けるのだね？」

笑いながら尋ねて来る父さんに

「八神とノーヴェと一緒にピクニックでも行こうと思ひまして・・・」

そう言う父さんは楽しそうに笑いながら

「そうか、そうか、今日は1日良い天気だそうだ、気をつけて行っておいで」

にこにこと笑う父さんに頷き、バスケットを机の上において着替える為に自室に戻った・・・チンクが部屋に戻ったのを確認したジェイ
ルは

「チンクも甘いな・・・さてと・・・」

2つ並んだ水筒を空けて

「ふむ・・・こつちがチンク達だな・・・それでこつちは龍也か・・・」

水筒の中身を見て、龍也の水筒を手を取ったジェイルは中身を半分ほど出し

「これを入れてと・・・」

水筒の残りに何かを入れる・・・それは前に龍也を騙す事に成功した、無味無臭だが凄まじく度数の高い酒だった・・・（詳しくは番外編の酔い龍也リターンズ改ツ！！をご覧ください）

「少しは後押しをしないとな・・・ふふ・・・どうなるか楽しみだ・・・」

ジェイルは何事も無かったように水筒の蓋を戻し椅子に座った・・・

こんこん

外から聞こえてくるノックの音に

「今行くから待っててくれ」

昨日約束していたチンク達だと思いそう返事を返し、何時ものロングコートでは無く黒のジャケットを羽織り、自室の扉を開けた・・・そこには予想通りチンクとノーヴェがいた、2人とも何時もの管理局の制服ではなくお洒落服を着ていた・・・チンクはふわりとした桜色のワンピース・・・ノーヴェは膝丈ほどのジーンズと肩の一部が見える水色の半袖の様な物を着ていた・・・

「待たせた・・・チンク、ノーヴェ」

そう言うときチンクは

「いや・・・そんなに待っていない・・・では行く・・・」

そう言うとき先に歩き始めてしまったチンクに、私が怒っているのだろうか？と考えてるとノーヴェが

「大丈夫だぜ、チンク姉は怒っていないからよ・・・唯少し緊張してんだよ・・・ほら・・・初めて自分から龍也を誘っただろ？それで妙に緊張してんだよ」

そう教えてくれるノーヴェに頷き・・・私はチンクの隣を歩きながら

「チンク・・・持ってやるのか？」

大きなバスケットを持っているチンクにそう言うとき、チンクは

「いや・・・良い自分で・・・なっ何をする」

重そうなので強引にチンクの手からバスケットを取り

「何をするじゃないだろう？・・・荷物くらい私が持つさ」

そう言うときチンクは困った様に黙り込んでいたが・・・

「そうだな・・・折角だから八神に持って貰おう・・・道案内は私がするから着いて来てくれ」

そう言うチンクに頷き私達はクラナガンの市街に出掛けて行った・

むう・・どうした物か・・歩きながら私は頭を抱えた・・こうして八神の隣を歩いているがとてもデートに見える雰囲気ではない・・だがどうすれば良いのか判らず困っていると、ノーヴェが念話で

（チンク姉！こういう時は手を繋ぐもんだろ、ほら龍也の右手が空いてる思い切って手を繋げよ！）

そう言われた私は慌てながらも念話で

（そ・・そんなこと出来ない・・恥かしいし・・それに突然手を握ったら八神が驚くだろ・・）

そう言うところノーヴェは

（大丈夫だって、龍也はそんな事で驚かないから頑張って手を繋げよ）

繰り返し言われ・・私は勇気を振り絞って八神の手を握ると・・八神は一瞬驚いた感じだったが何も言わず自然に手を握り返してくれた・・私はそれが嬉しくて、そのまま八神に

「それで最近どうだ？アザレアは？」

八神の新しい家族となった、アザレアの事を尋ねると

「うーん．．私やはやて達になら大丈夫なのだが．．まだまだ人見知りが激しいな．．どうすれば良いと思うチンク？」

そう尋ねて来る八神に

「そればかりは時間が解決するのを待つだけしかないと思う．．でも大丈夫さ．．心配する事も無いと思うぞ」

そう言つと八神はゆっくりと頷き、今度は私に

「所でチンク．．教導官の免許を取ると言っていたが．．どうなんだ？」

私はその問いに

「大丈夫だ、まだまだ勉強中だが．．必ず取る．．だから待っててくれ」

そう言つと八神は首を傾げながら

「待つ？．．私が．．どういう意味だ？」

そう尋ね返してくる八神に

「い．．いや．．間違えた．．気にしないでくれ」

そう言つと八神は深く聞き返そうとせず、頷いてくれた．．私は胸を撫で下ろしながら

（つい口が滑った．．）

私が教導官の免許を取ろうと思ったのは単純に言っただけなのはが羨ましかったからだ・・・教導の仕事が多い八神は良くなのはと一緒に出かける・・それが妙に羨ましくて・・自分も勉強を始めたのだ・・

（こんな事・・恥かしく言えん・・）

私がそんな事を考えていると

「それにしてもこうしてチンク達と出掛けるのは久しぶりだな」

穏やかに微笑んでいる八神の後ろからノーヴェエが

「久しぶりつてのは当然だろ？・・龍也ははやてとか・・なのはとかと良く出掛けるからな・・私達とあんまり出掛けてくれないじゃないか？」

若干頬を膨らませながら言うノーヴェエの頭を八神は撫でながら

「そうか・・今度からはもう少しチンク達に付き合うようにしよう」

そう言う八神に満足気にノーヴェエは頷きながら、私を見て

（チンク姉・・もう良いだろ？私だって龍也と話したいんだよ）

そう念話で言うノーヴェエに

（ああ・・すまなかった・・それとありがとう・・ノーヴェエのおかげで緊張が解れたよ）

そう返事を返すとノーヴェは少し恥かしそうな素振りを見せてから頷いた・・私は八神の手を握り締めながら・・ゆつくりと目的地へと向かった・・その時八神と長い間世間話が出来たのがとても嬉しかったし・・楽しかった・・あの時までは・・本当に楽しかったのだ・・

昼食までは・・

「うん・・美味しい・・チンクは料理が上手になったな」

そう笑うながら言う八神の言葉に頬を紅く染めていると、ノーヴェが

「うーん・・やっぱり私も料理出来るようになりたい・・今度教えてくれよ」

八神は笑いながら

「良いとも、休みの時においで何時でも料理を教えてやろう」

ほのぼのとした雰囲気を楽しんでいた・・龍也が纏っている陽だまりの様な暖かさを心のそこから楽しんでいた時、八神が水筒の紅茶を飲んだ瞬間

「きゆう・・」

そう呟きひっくり返る・・私が慌てているとノーヴェが

「うわっ！チ・・チンク姉・・これ・・酒が入ってるぞ・・」

若干、頬を赤らめながら言うノーヴェ・・恐らく理由は八神のコツプの紅茶を飲んだからと・・間接キスと言う事に気付いたからだろ

う・・・私はそんな事を考えながら

「酒！？・・・私はそんな物・・・父さんか！父さんが入れたのか！？」

私が出掛ける前にあつた人物と言えば父さんしか居ない・・・父さんがまた何かを悪巧みして酒を加えたのだ・・・私達が慌ててると・・・八神は無言で起き上がり

「・・・にや〜」

物凄く楽しそうに笑う・・・まさか・・・これは・・・私の脳裏に以前八神が酷く酔い・・・私を押し倒した時の事を思い出した・・・するゝと音も無く近寄ってくる八神に・・・

「待て・・・落ち着け・・・八神、良いか・・・ここは六課じゃないんだ・・・こんな所では・・・嫌だ・・・」

こんな所で無くても嫌だが・・・一応そう言うが八神は

「にば〜」

するする・・・と近寄ってきたと思つた瞬間止まり

「チンク〜」

がばッ！！

覆い被さるように抱き付こうとして来る・・・逃げようと思つたのだが身体が動かず・・・私が出来たのは

「みつぎやああああっ！！！」

そう悲鳴を挙げる事だけだった・抱きしめられた上に押し倒される・恥かしく恥かしくて顔から火が出そうだった・何とか脱出を試みるが・失敗・私がもう諦めるしか無いのかと思った瞬間

「ごめん！龍也！！」

ノーヴェが謝りながら脚を振り上げ、踵落としを八神の頭に叩き込む

「もぎゅっ……」

変な声を出しながら意識を失う八神はぐったりとして私に覆い被さっていた・私は荒い息を整えながら八神の身体の下から脱出した・

「はあ・・はあ・・また捕食される所だった・・」

私がそう言つとノーヴェは拳を自分の掌に打ち付けながら

「くそっ！父さんの馬鹿！！・折角良い雰囲気だったのに！！もう今回は許さなねえ！！」

怒り心頭の様子のノーヴェに

「今度は私も許せん・私も協力する」

そう返事を返してから気絶している八神に膝枕をしながら

「だが・今は少し待とう・八神が起きるまではここに居よう・

「気絶している八神の頭を撫でながら

「はぁ・・・折角良い感じだったのに・・・」

八神の持つ暖かい雰囲気を楽しんでいたのに・・・私は溜め息を吐きながら八神が起きるのを待った・・・八神が起きたのは日が暮れ始めた頃だった・・・

「うん・・・」

目の覚めた八神と目が合う・・・暫くそのまま見詰め合っていたが・・・

「おおおおっ!?!」

私の膝の上から慌てて離れながら

「私は何でチンクの膝の上で寝てるんだっ!?!・・・くっ判らないっ・・・」

頭を抱えながら絶叫する八神に

「ああ・・・少し疲れてたんだろう・・・昼食を終えたら直ぐ寝てしまったんだ・・・シートの上にごろ寝も何だから・・・と思ってな膝枕をしたんだ」

さり気無く嘘を言うと八神はそれを信じたよううで

「すまん・・・折角の休みなのに疲れさせてしまったか?」

謝ってくる八神に

「いや・・・気にしなくて良い・・・それより日が暮れる・・・そろそろ帰ろう」

本当は殆ど何も出来てないが・・・仕方ない・・・次の機会にしよう・・・そう考えながら後片付けをして六課へ帰った・・・六課へ帰った私は無言で父さんに向かって

ビュンツ！！

ルナエツジを投げつける

「うおおおっ！？」

飛び退いて避ける父さんの先にノーヴェが回り込んで

「爆斧・・・無双断ツ！！」

すれちがい様に強烈な膝蹴りを叩き込み

「げはあッ！！」

一瞬で父さんの意識を刈り取ったノーヴェは

「はあ・・・今日は良い日になると思ったのに・・・」

落ち込んだ様子のノーヴェに

「次があるさ・・さてと・・今日はもう寝よう・・」

気絶した父さんを放置して・・私達は自分の部屋に戻って眠りについた・・今日のデートは成功とは言えなかったけど・・次がある・
・そう思いながら・・私は眠りに落ちた・・

一周年記念番外編 暖かい場所で・・

一周年記念番外編 暖かい場所で・・・（後書き）

普段余りスポットの当たらないチンクがメインの話でした・・・まあ・
・私の中のチンクのイメージは純情な乙女なので・・・こういう話に
したのですが・・・雰囲気にならなかったでしょうか？・・・それだけ
が心残りです・・・もっとレベルを上げないと・・・と思った作品です・
・それでは次回の一周年記念の番外編で再会致しましょう

一周年記念番外編 恋する乙女達の作戦会議（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回のリクエストは「竜華零様」で龍也を自分達の物にしようとする乙女・・はやて、ヴィータ、なのは、フェイト、スバル、ティアナの3チームに別れての作戦会議です！ギャグ系の話にするつもりなので、どうか宜しくお願いします

一周年記念番外編 恋する乙女達の作戦会議

一周年記念番外編 恋する乙女達の作戦会議

ケース1 夜天と鉄槌の場合

「うん．．これとこれはお土産やね．．」

私は兄ちゃんへのお土産を考えながらデパートの中を歩いてた．．すると

「なあ．．はやて．．今日出掛けるの兄貴をどうやって私達にするかの作戦会議じゃなかったのか？」

そう尋ねて来るヴィータに

「うん、そうやで．．でもその前に買い物買物．．兄ちゃんお留守番やからね．．少し位なんか買っておかんと．．」

今日は私達は休暇だが．．兄ちゃんはどうしてもやらなければならぬ仕事が出来てしまい．．六課で留守番である．．だから何かお土産を買ってて上げようと思ったのだ

「んゝこんな物かなゝ」

買ったのは兄ちゃんの好きなお菓子や紅茶の葉に．．新しいティーセット．．お土産はこんな物で良いだろう．．ここからは作戦を考

えよう・その前に少し休憩しようと思い喫茶店に入る

「んー・・やっぱ兄ちゃんの紅茶の方が良いな・・」

そんな事を呟いているとヴィータが

「んで・・はやてにはあんのか？兄貴を確実に物にするアイデアが？」

そう尋ねて来るヴィータに

「うん・・ある・・前にさ・・兄ちゃん達と温泉行ったやろ？」

そう言うヴィータはうん・・とゆつくり頷く・・私は

「んでな・・その夜に兄ちゃんと一緒にお風呂、入ったんよ・・」

そう言うヴィータはええっ！？・・凄くショックを受けたように睨んでくるヴィータに

「それは私が悪かったで謝るけど・・問題はそこやないんよ・・お風呂でな、兄ちゃんと色々話したんよ・・それで次の日から兄ちゃん・・何か私達に少し優しくなつてなかったか・・元々優しくなかったけど・・もっとや」

そう尋ねるとヴィータは

「あ・・そう言えば一緒に寝て良いか？って聞いた時・・良いよって言うてくれたし・・抱きしめて寝てくれた」

思い出したように言うヴィータ・．まあ・．私も最近は一緒に寝れる機会が増えたので嬉しい限りだ・．ただ兄ちゃんが手を出そうとしないのは嫌だが・．

「そう・．最近兄ちゃんの私達に対する警戒度が下がって来てるんや・．ここを突かない手は無い」

あの温泉が兄ちゃんになんらかの影響を与えたのは間違い無い・．前みたいに兄離れしろとか言わないし・．部屋に居ても怒らないし・．寝てる間に布団の潜り込んでも・．仕方ないな・．とか言って頭を撫でてくれたり・．ヴィータの様に抱きしめて貰える・．これらの事実は間違い無く兄ちゃんの中で何かが変わり始めた証拠だ・．

「んでな・．私としてはもう1人くらい味方が欲しいんよ・．」

シグナムはこつち側に引きこめたが・．シャマルは無理だった・．理由は

「私がお兄さんを好きになつたら・．多分止まらなくなっちゃいそうなんです・．だから私は・．今の妹の立場で良いんです・．ごめんなさい・．はやてちゃん」

そう言われた無理に自分側に引き込む訳には行かない・．元々シャマルは独占欲が強い・．多分止まらなくなるというのはそういう意味だと思う・．私はシャマルと話していた事を思い出しながら

「味方を増やしたいけど・．無理・．でも兄ちゃんの私達に対するバリケードは徐々に薄くなつて来てる・．長期戦になるけど・．ゆつくり兄ちゃんのバリケード破壊してこ・．ゆつくり時間掛けて・．兄ちゃんを私達の物へ・．うつん・．私達を兄ちゃんの物にして貰

お・・・んじゃ今からは兄ちゃんのバリケードを破壊する小道具を集めよ・・・とりあえず・・・1番最初は水着かな？」

そう言うときヴィータは首を傾げながら

「水着？・・・何に使うんだ？兄貴は泳げないんだぞ？」

訳が判らないと言う表情のヴィータに、にやりと笑い掛けながら

「水着なら・・・兄ちゃんと一緒にお風呂・・・入れるやる？」

あつ・・・と呟くヴィータ・・・兄ちゃんが私達と一緒に風呂に入ってくれない理由は・・・嫁入り前の女の子だから・・・そう簡単に裸を見せる物じゃない！という理由からだ、ならば水着を着ていたら？・・・無理かもしれないが・・・一緒に入れる可能性が出て来る・・・そう説明するとヴィータは

「すこし・・・冒険したのにしようかな・・・ビキニとか・・・」

大きくなったヴィータと私のスタイルは殆ど同じだ・・・と言っても見掛けほど私達は胸が小さいわけではない・・・背が低いから胸が小さく見えるだけで・・・私達は着やせするタイプなのだ・・・だから水着で誘惑すると言うのは良い手なのだ・・・私達はそんな話をしながらデパートの階層を移動した・・・移動しながら

（本当・・・味方はもう増えんかな？・・・）

私のこの願いは割と先の未来で叶う事になる・・・増えた味方が誰かって？・・・ふふ・・・そんな秘密や・・・でも・・・きつとあんならかも知っとる人やで？

ケース2 エースと執行官の場合・

「行つた？」

そう尋ねて来るフェイトちゃんに

「うん・・行つたよ・・」

はやてちゃん達が座っていた席の斜め後ろの席に私達は座っていたのだ・・ここに新しい服を買いに来て・・はやてちゃん達が来た時咄嗟に隠れたのだ・・私達は椅子に座りなおしながら

「聞いた？さっきのはやての話し・・」

私は頷きながらさっきの話を思い出していた・・私達も薄々感ずいていたのだ・・最近龍也さんのはやてちゃん達への警戒心が下がってる事を・・私が頷くとフェイトちゃんは

「落ち着いてる場合じゃないよ、・・このままじゃ龍也・・取られちゃうよ」

泣き出しそうなフェイトちゃんに

「大丈夫・・はやてちゃん達への警戒心が下がってるのと同じで・・私達への警戒心も下がってるから・・」

そう何も下がってるのは、はやてちゃんだけじゃない・・私達にも

対する警戒心も着実に下がって来てる

「フエイトちゃん・思い出してみても・昨日龍也さんの腕を抱き抱えたでしょ？・龍也さん・どっという反応だった？」

そう尋ねるとフエイトちゃんは

「あつ・・恥かしそうにしてたけど・・振り解いたりはされなかった・・」

思い出した様子のフエイトちゃんに

「うん、それで判るよね・・龍也さんは少しずつだけど・・皆に対する警戒心が下がってるんだよ」

今までの龍也さんと比べて最近の龍也さんは明らかに警戒心が低い・それは間違い無い事なのだ・私が言うとフエイトちゃんは

「じゃあ、私達も色仕掛けする！？・・なんなら超ミニのスカートでも穿く！？・・なんなら夜這・・むぐっ！？」

微妙にテンパツてとんでもない事を口にするフエイトちゃんの口を塞ぎ

「あのね・・フエイトちゃん・・ここ喫茶店・・そんな事大声で言わないで」

私が赤面しながら言うとフエイトちゃんは顔を紅くしながら、頷き

「ごめん・・少しテンション上がり過ぎた・・もし龍也が私の物に

なると・・・ううん・・・私達の物になると思うと・・・興奮して・・・」

謝ってくるフェイトちゃんに

「まあ良いけど・・・もう少し時と場所を考えようね？」

そう言うところりと頷くフェイトちゃんに

「それで、私とフェイトちゃんの龍也さんへのアプローチなんだけど・・・今まで通り正攻法で行こうと思うの」

そう言うといふっ！？と眩き驚いた反応をするフェイトちゃんに理由を説明する

「良い？・・・まず龍也さんは恋愛に対して凄く鈍いよ・・・そこではやてちゃん達みたいに色仕掛けを仕掛けるのも有効だと私は思うよ？」

そこで言葉を切る・・・確かに今の龍也さんなら色仕掛けも効果がありそうだが・・・

「私達にははやてちゃん達みたいに妹って言うアドバンテージが無いんだよ・・・それで私達が色仕掛けしようと思えば他の人にも見せる事になるんだよ？」

そう言うフェイトちゃんは首を振りながら

「私・・・龍也以外に見せるのやだ・・・」

即答するフェイトちゃんに

「うん、私も嫌だ・・・だから正攻法で攻めて行こうよ？・・・一緒に買い物に行ったり・・・ピクニックに行ったり・・・してさ・・・ゆっくりに行こうよ」

龍也さんはどつちかと言うと古風な人だ・・・そんな人に色仕掛けを仕掛けてそこまで効果が出るだろうか？・・・はやてちゃん達のようにほぼ毎日一緒に居れて、尚且つ自由に龍也さんの部屋に行けるのなら・・・それも効果的だろうが・・・私達のように長い時間傍に入れないのではそこまで印象に残らないのではないか？・・・ならば正攻法で攻めた方がよいのでは？・・・それに色仕掛けと口で言うのは簡単だが・・・実際にやるのは抵抗が残る・・・なら今まで通り正攻法で攻めた方がよい筈なのだ・・・そしてまずする事は

「お弁当箱でも買おうか？・・・龍也さんにお弁当持ってたら喜ぶんじゃないかな？」

龍也さんは基本作る側なので、人に作って貰うのは凄く嬉しいそうなのだ・・・私が言うത്フェイトちゃんは

「うん、良いよ・・・それと料理の本も買って行こうか？なのは料理苦手だし」

そう言われた私は苦笑しながら

「そうだね・・・それじゃあ料理の本も買いに行こうか？」

私はそう言うと言店のある階に向かって歩き出した・・・えっ？・・・私達の作戦がどうなったですか？・・・ふふ・・・それは秘密です・・・でもこれだけは言っておきますね？結構手応えあったし・・・良い事

もあつたんですよ？・・・良い事が何だつて？・・・それは・・・ここ
いう事じゃないですね・・・でも凄く良い事だつたんですよ？幸せだ
つて思えるくらい・・・これ以上は言えないので・・・失礼しますね・・・

ケース3 スナイパーと拳闘士の場合・・・

なのは達とはやて達がい物をしてる頃・・・機動六課では・・・

「ティアく折角のお休みなのに部屋にゐるって何でく遊びに行こう
よ」

詰まらなそうに言うスバルに溜め息を吐きながら・・・

「あのね・・・休みだから部屋に居るの・・・作戦会議するために」

そう言うスバルは首を傾げながら

「作戦会議？・・・何の？・・・痛いッ！！頭殴らないでよ」

私が思わずスバルの頭をグーで殴ると痛いと言って頭を押さえるス
バルに

「あのね・・・作戦会議って言ったら龍也さんの事に決まってるでし
よ？・・・スバルあんた気付いてないの？最近・・・龍也さんの警戒心
が低いのに？」

そう尋ねると首を傾げて訳が判らないと言う表情のスバルに

「はあ．．最近．．部隊長とか．．なのはさんとかが龍也さんにアプローチ掛けてるでしょ？」

そう言うのと、うんと言いながら頷くスバルに

「前までの龍也さんならあそこまでアプローチをしてたら．．顔を紅くして逃げてたでしょ？でも最近は笑ってるだけ．．それは間違いないく龍也さんの女性に対する耐性が上がって来た証拠よ」

最近の部隊長のアプローチは凄い．．自分の胸を押し付けるように抱き着いたり．．業と短めのスカートで下着を見せようとしてたり．．今までと違い相当強烈なアプローチを仕掛けている．．それはなのはさんやフェイトさんも同じ．．積極的にアプローチを仕掛けている．．龍也さんは困ったような表情をする物の．．そこまで過剰な反応はしない．．これだけで私は理解した．．何か．．そう龍也さんの何かを変える出来事があったのだ．．それで龍也さんの警戒心が下がっているのだと．．私がここまで説明するとスバルは

「あーそう言えば．．最近龍也さんに抱きついてる部隊長とか．．ヴィータさんを良く見るや．．」

納得という表情のスバルに

「そう、私達もこれを逃さない手は無いわ．．私達だって．．龍也さんの事が好き．．それなのに恋敵達がアプローチを仕掛けてるのを黙って見てるなんて出来ないの．．判るでしょ？」

そう言うときスバルは

「うん．．黙って見てるのはやだ．．じゃあどうすれば良いの？．．」

どうすれば龍也さんに意識して貰えるの？」

深刻な表情のスバルに私は

「ちゃんと考えてるわ・・・でも私達には決定的なデイスアドバンテージがあるの・・・判る？」

その事を尋ねるとスバルは何かを考えるような素振りを見せた後

「えっと・・・歳？」

そう尋ねて来るスバルに

「うん、正解・・・私達と龍也さんの歳の差は7歳・・・それに比べてなのはさん達は3歳・・・この差は大きいわ・・・」

私達には年下と言うデイスアドバンテージがある・・・これの所為で色仕掛けや正攻法も使いにくい・・・そう説明するとスバルは

「それじゃあ！勝ち目がないって事じゃ・・・嫌だよ・・・私・・・何もしないで負けるのは・・・」

そういつて俯きかけるスバルに

「話しは最後まで聞きなさい・・・確かに私達には年下って言うデイスアドバンテージがあるわ・・・でもこれは考えようによってはアドバンテージにも出来るわ・・・良い？・・・年下の私達には龍也さんに比較的楽に訓練を見て貰える様に頼み易いわ・・・そして一週間の内、私達が訓練を見て貰えるのは4日・・・これは良いアドバンテージだわ・・・それに自主練に付き合ってくれて龍也さんに頼めば・・・快

く引き受けてくれるでしょ？．．これはスバルの方が良く判ってるんじゃないの？」

そう尋ねるとコクンと頷くスバルに

「良い？私達は1日の内．．大分長い間、龍也さんと一緒に居れるわ．．これは隊長って言う肩書きを持ってない故のアドバンテージ．．長い時間を一緒に過ごす内に龍也さんの心の深い所に潜り込めれば．．勝機は見えるわ．．その為には訓練の時に少しずつ．．少しずつで良いからアプローチを掛けて行きましょう」

そう言うときスバルは

「具体的にはどうすれば？」

そう尋ねて来るスバルに私は

「訓練の時にさり気無く．．胸を押し付けてみたり．．料理とかの作り方を教えてくれて言うって部屋に潜り込んだり．．ヴィヴィオとかに懷いて貰ったりして．．少しずつ．．少しずつ．．龍也さんの心の中に潜り込んで行きましょう？」

そう言うときスバルは頷き、腕を回しながら

「良くしッ！！頑張ろう！私は龍也さんが大好き！だから頑張って振り向いて欲しいし．．私を．．うつん．．私達を好きになって欲しいのッ！！」

気合を入れて言うときスバルの腕を差し出しながら

「頑張ろう！相棒！ここからが本当の勝負だよね？」

そう笑うスバルの手を握り返しながら

「当然！ここからが本当の勝負よ！」

そういつて決意を改めていた・次の日から・私達は作戦を実行する為に動き出したわ・うん・正確には動き出したのは・私達だけじゃなかった・でも負ける気はしなかった・だって私達が龍也さんを好きな気持ちだけは絶対に負けてないと胸を張っている自信があるのだから・はやて、ヴィータ、なのは、フェイト、スバル、ティアナが決意を改めていた頃・龍也は

「ブルル・風邪か・凄まじい悪寒がする・何かとても良くない事が起きそうな気がする・」

こういう気配には敏感な龍也は何かを感じ取っていた・これは龍也達が別の世界に休みに行く半月前のお話・ますます・積極的になり始めた・はやて、ヴィータ、なのは、フェイト、スバル、ティアナに、龍也が困らせられる時は・本当に・あと少し先の未来の話です・それではその時に再会致しましょう・時は誰にも等しく流れ行く物なのですから・焦らずに・その時を待ちください・

一周年記念番外編 恋する乙女達の作戦会議（後書き）

どうでしたか？今回のお話はギャグのつもりで書いたのですが・・面白かったでしょうか？・・一周年記念番外編の1つであつた八神家の温泉旅行・・それがきっかけで龍也は少しずつ・・少しずつですが・・変わり始めたというお話でした・・勿論・・各メンバーの作戦会議も面白かったですよね？・・割と自信があつたのですよ・・珍しくね・・それとはやての言つていた・・新しいはやて側の仲間とは？・・これは別の一周年記念番外編で判ります・・ヒントは・・「救済」ですね・・それでは次の一周年記念番外編でお会い致しますよう

一周年記念番外編 遡る時の振り子・前編（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回のリクエストは「マーボー様」で龍也とはやて、なのは、フェイト達とのデートの様な話です・・もちろんデートの様な話しというだけで、デートではないですよ？・・今回は前後編です・・後半はかなり盛り上がる上に第二部のWユニゾン時の龍也の能力も紹介致します、それでは一周年記念番外編始まります

一周年記念番外編 遡る時の振り子・前編

一周年記念番外編 遡る時の振り子・前編

時の振り子・・・というのは時に突然遡る物です・・・それは何を意味するのか・・・それは別れであつたり・・・再会であつたり・・・様々な姿で姿を現すでしょう・・・これはそんな気まぐれな時の振り子が巻き起こした・・・小さな奇跡のお話です・・・

「はやて、なのは、フェイト・・・明日一緒に出掛けないか？」

その奇跡が始まったのは・・・龍也のこの一言からだつた・・・突然誘われた3人は一瞬驚いた表情を見せたが

「うん、良いで・・・でもなんでなのはちゃんとフェイトちゃんも一緒なん？」

3人ともそこが気に食わないという顔をしていたが、私は

「いや・・・偶には海鳴でゆっくりはやて達と過ごそうと思つたのだが・・・嫌だつたか？」

そついうと3人は頬を少しだけ赤らめながら

「そついうことなら・・・しゃあないな・・・うん良いで皆で行こう」

そう笑うはやて達に

「それじゃあ、明日な」

そう笑い掛けてから食堂を後にした・・・そして次の日・・・私達は海鳴の街に居た・・・まず最初に向かったのは翠屋だった

「いらつしゃいませ・・・おや、龍也君じゃないか？どうしたんだい？」

笑いながら尋ねて来る士郎さんに

「ちよつと休暇が取れまして・・・折角だから遊びに来たんですよ」
暫く士郎さんと話していると

「兄ちゃん、はよ座つたら？」

笑いながら言うはやて達に頷き、私はなのは達の座っている席に向かった・・・

「それで、龍也・・・今日は何をするの？」

シュークリームを食べながら言うフェイトに

「そうだな・・・思い出のある所を回ろうか？・・・初めてフェイトに会った所や・・・なのはに会った所とかを回ろうと思ってるよ」

そう言うとはやてが

「うーん・・・思い出を回る旅って所？」

首を傾げるはやてに頷き、私達は翠屋を後にした・・・翠屋を出る所でなのはが会計をしようとするので

「私が誘ったんだ・・・私が会計するから、先に行つてくれ」

先に行くように促すと3人とも頷き翠屋を後にした・・・私は会計をしなから

「土郎さん・・・頼んでた件・・・お願いしますよ？」

そう言つと土郎さんは穏やかに頷き

「勿論、任せてくれ」

私はその言葉に頷き翠屋を後にした・・・それと入れ違いで入ってくるスバル達に

「後は任せるぞ？」

そう声を掛けるとスバルは自分の胸を叩きながら

「大丈夫です！任せてください」

そう笑うスバル達に頷き・・・私ははやて達の後を追つた・・・

「うわゝ懐かしいなあ・・・ここで初めて龍也さんに会つたんだよ？」

隣のフェイトちゃんに言うとフェイトちゃんは

「へーここで足挫いてた所を龍也が通りがかったんだ・・」

2人でそんな話をしていると、後ろの方ではやてちゃんが

「この通りって・・翠屋に行く途中・・はっ!?!?・・私が兄ちゃんにシュークリーム食べたい言っただから、なのはちゃんと兄ちゃんのエンカウントが!・・くう・・私の馬鹿・・」

何か後悔しているはやてちゃんの隣で龍也さんは苦笑しながら

「いや・・そこまで後悔しなくて良いだろう?」

そう言うとはやてちゃんは

「後悔するで!・・この出会いさえなければ・・なのはちゃんが兄ちゃんを好きになる事はなかったんや!」

そう反論するはやてちゃんに私は

「別にここで出会わなくても私は龍也さんを好きになってたと思うよ?」

そう・・別にここでの出会わなくても私は龍也さんを好きになってたと思う・・私がジュエルシードを集めている時に龍也さんも同じ様にジュエルシードを集めていたのだから・・唯出会いが早かったか・・遅かったかの違いだと私が言つと

「くっ・・・でもな！兄ちゃんと一緒に居った時間は私の方が長いんや！・・・そこになのはちゃんが入ってくる隙間なんて無いで！」

2人でううーと睨み合っていると・・・ポンッ・・・私とはやてちゃんの頭の上に龍也さんが手を置きながら

「折角、遊びに来たのに喧嘩しなくても良いだろう・・・」

少し寂しそうに言う龍也さんに

「違いますよ！私とはやてちゃんは喧嘩してたんじゃないですよ！」

「そうそう、私となのはちゃんは仲良しやで！」

慌てて言う龍也さんは

「それならなおさら喧嘩しないでくれ・・・仲良くしててくれ」

そう笑う龍也さんに頷き私達はまた移動し始めた・・・

「んー懐かしいな」ここで初めて龍也に会ったんだよ？」

にこにこ笑いながら言うフェイトちゃんに龍也さんは

「そうだな・・・そう・・・アルフと2人で絡んで来たんだったな」

・・・そんな出会いだったの！？私とはやてちゃんがその言葉に驚いているとフェイトちゃんは

「ち、違うよ！私はやめようって言ったの！でもアルフが！私の言

う事、聞いてくれなかったの!!」

慌てて訂正に入るフェイトちゃんの話によると・・何でも龍也さんの事は大分前から知ってて、ジュエルシードの暴走体を軽々倒す龍也さんが格好良くて・・気が付いたら好きになって・・街中で買物してる龍也さんを見つけて・・後を追ってこの公園に来たそうなんだけど・・恥かしくて声掛けなくて・・困ってたらアルフが実力行使で名前を聞こうとした・・との事らしい・・その話を聞いたはやてちゃんは

「・・そんなに純情だったのに・・今は・・積極的過ぎん？」

そう言われたフェイトちゃんは頬を押さえながら

「だ・・だって・・龍也の事好きな人多いから・・後手に回ってたら・・手が届かなくなっちゃうでしょ？」

そう言い返すフェイトちゃんの事を見ながら龍也さんは

「私の事を好きな人が多い?・・・どういう事だ?・・私には心覚えが無いのだが・・」

真顔で尋ねて来る龍也さんの肩に手を置きながら

「龍也さん・・もう少し・・もう少しで良いんで・・鈍感を治してください」

そう言われた龍也さんは本当に意味が判らないと言う表情ながらも頷き

「・・・良く判らないが・・・善処しよう・・・」

・・・どうしてこうも鈍感なのだろうか・・・でも最近は少しずつ改善されてされて来てるから良いか・・・私がそんな事を考えていると

「兄ちゃん！次の場所、行こう！」

龍也さんの腕を抱き抱えながら言うはやてちゃんに龍也さんは

「そうだな・・・アリサとすずかにも連絡を入れてるし・・・次の場所に行こうか？」

何事も無いように歩き始めた龍也さんの姿に

（やっぱり・・・少しずつ鈍感が治って来てるみたいだね・・・）

私はフェイトちゃんに念話で

（私・・・龍也さんの腕抱き抱えるけど・・・良い？）

そう尋ねるとフェイトちゃんは

（良いよ・・・でも次移動するときは私だよ？）

そう返事を返すフェイトちゃんに頷き、私は龍也さんの腕を抱き抱えた・・・龍也さんは一瞬驚いた表情を見せたが何も言わず・・・そのまま歩き続けていた・・・やっぱり・・・龍也さんの鈍感さは治って来てるのかな？・・・そんな事を考えながら私達はアリサちゃんの家に向かった・・・

「ふう・・・中々楽しい時間だった・・・」

アリサとすずかと一緒にお茶をしながら、昔話をしたのは・・・中々楽しかったと思い呟くと・・・フェイトが私の腕を抱き抱えながら

「次は龍也の行きたい場所だね？・・・何処に行きたいの？」

笑顔で尋ねて来るフェイトに

「・・・2か所・・・行きたい場所があるが良いか？」

そう尋ねるとはやてがなのはを押しつけ、私の腕を取りながら

「良いで、兄ちゃんの行きたい場所なら、どこでも」

笑いながら言うはやての頭を撫でながら

「ありがとう・・・では行こうか・・・」

私はそう呟き・・・あの場所へ向かった・・・

「ここは・・・」

私の後を着いて来ていたなのはが目を見開きながら呟いた・・・私が来た場所は

「・・・なのは達も覚えているだろ・・・ここは闇の書の闇と・・・戦っ

た場所だ・・・」

飛行魔法で闇の書と戦った海上に来ていた・・・私がそう呟くとフェイトは

「どうして、こんな所に来たの・・・ここには悲しい思い出しかないよ?・・・早く行こうよ・・・」

私の事を気遣ったのか・・・早く別の所へ行こうと言うフェイトに

「そうだな・・・ここには悲しい思い出しかない・・・だが・・・私はここに来たかった・・・なあ・・・はやて、なのは、フェイト・・・もしあの時・・・私に今の力の4分の1でも良い・・・力があれば・・・リインフォースを救えたんじゃないのか?」

リインフォースは・・・少ない時間だったが・・・私の家族だった・・・クールそうに見えたが彼女は・・・実は凄く甘えん坊で・・・1人になるのを異常なほど怖がった・・・闇の書の闇の再構築が始まるまで・・・彼女は私とはやての傍を離れようとしなかった・・・短い時間でも良い・・・幸せな思い出が欲しい・・・彼女はそう言っていた

「今の力が少しでもあの時の私にあれば・・・リインフォースは消えなくて良かったんじゃないのか?」

私が拳を握りながらそう呟いていると・・・はやてが

「兄ちゃん・・・」

私の手を両手で握りながら

「兄ちゃんの所為や無いよ．．だから．．そんなに気にしないで．．
リインフォースも言ってたやろ．．兄ちゃんの所為じゃ無いって」
はやてがそう言うが私は

「だが．．思うんだ．．リインフォースが消えなくて済む方法があ
ったんじゃないのかと．．そう思うと．．私は．．悔しいんだ．．」

私は．．家族を救えなかった．．最後の最後まで．．彼女は泣かな
かった．．涙を見せなかった．．その事が私には辛かった．．出来
る事なら救ってやりたかった．．もっともつと．．彼女に幸せな思
い出を作ってやりたかった．．

「兄ちゃん．．そんなに自分を責めないで．．」

私の拳を開きながら言うはやての後ろから

「龍也さん．．」

「龍也．．」

後ろから抱き付いてくるのはとフェイトに

「すまない．．もう行こう．．」

これ以上ここに居ると．．どこまでも気分が沈んでしまう．．だか
らここから移動しようとした瞬間

「ッ．．！」

頭に激痛が走る・・・この感じは・・・私が驚きながら振り返ると

フオンツ・・・

静かに黒い歪みが口を開けていた・・・私はその歪みに驚いていると

「兄ちゃん・・・どうしたんや？」

首を傾げながら尋ねて来るはやて・・・どうやら・・・はやて達には見え
ないようだ・・・私は・・・

「いや・・・何でもない・・・早く行こう・・・」

私はその歪みにまさかと思いつながらその場を後にした・・・

「大分遅くなってしまったな・・・」

海上から戻った時には既に日が暮れていた・・・私がそう呟くとはや
てが

「後・・・兄ちゃんが行きたかった場所って・・・リインフォースのお
墓？」

そう尋ねて来るはやてに頷き

「ああ・・・墓参りをしたかったんだが・・・もう日が暮れてしまった・・・
墓参りは明日にしよう・・・さっ・・・翠屋に戻ろう」

今日は翠屋に泊まる予定だったので私達は翠屋に向かった・・・

「さっ・・先に行くと良い」

翠屋の前で立ち止まり先に行けと言うとはやて達は首を傾げながら翠屋の扉を開けた・・それと同時に

パンッ！！パンッ！！！！

中からクラッカーの音がする・・その音に驚いているはやて達に

「最近・・禄に休めてなかっただろう？・・だからサプライズパーティーを計画してたんだ・・」

私の仕事を減らそうとはやて達が頑張っていたのは知っていた・・だが禄に有給も使わず仕事をしているはやて達が心配になり、土郎さんとスバル達に頼んでパーティーの準備をしたのだ・・本当はもつと楽しい気分で帰ってくる予定だったのに・・あの海上で少し落ち込んだ気分になってしまった事を後悔しながら言うと・・はやてが

「兄ちゃん・・私達の事を心配して・・今日遊びに誘ってくれたん？」

そう尋ねて来るはやてに

「ああ・・だって大切な家族だろう？・・心配するのは当然だ」

そう笑いながら言うとはやては・・いやはやてだけではなくのはとフェイトも

「「「ありがとう・・凄く嬉しいよッ！」「」」

抱き付きながら言ってくるはやて達に内心凄く動揺しながら

「・・・行こう・・・皆待ってる・・・」

私はそう言って翠屋の中に入って行った・・・桃子さんが用意してくれた食事を楽しんでいるとヴィータが

「どうした・・・兄貴・・・何か寂しそうに見えるけど・・・」

心配そうな声で尋ねて来るヴィータに

「何でもないさ・・・こんなに楽しいのに寂しい訳が無いだろう？」

そう言つと後ろに居たシグナムが

「何か悩み事があるのなら・・・私達が聞きますよ？」

ヴィータと同じで心配そうな声のシグナムに

「本当に何でもないんだ・・・心配してくれてありがとう」

そう言つて頭を撫でるとヴィータが

「そんなら・・・良いけど・・・悩み事が有るなら相談してくれよ？」

そう言つて離れていくヴィータとシグナムを見ながら

（あの歪み・・・気になる・・・あれは平行世界に行く時のゲートに似ている・・・まさか・・・あの時へ続いているのか・・・）

平行世界への扉は何も同じ時間だけではない・・過去や未来にも通じている可能性があるのだ・・私は手に持った料理を口に運びながら（試してみる価値はありそうだ・・）

私はそんな事を考えながらパーティーに参加していた・・・途中フェイトが酔い潰れて、私に抱きついて眠ってしまったのには焦ったが・・はやて達だけではなくスバル達も笑顔だったので良かったと思いつつ・・私もパーティーを楽しんだ・・

そして・・その日の夜・・皆が眠りに落ちた頃・・

「行くか・・」

私を挟むように寝ているはやてとヴィータを起こさぬように布団から抜け出し・・目的の場所に向かう・・

「ユナ・・アザレア・・起きてくれ・・」

眠っているユナとアザレアを揺すり起こす・・

「んん？・・もう朝ですか？」

「ま・・まだ・・ね・・眠いです・・」

目を擦りながらも起きてくれたユナとアザレアに

「すまない・・少し大事な用があるんだ・・少し付き合ってくれ」

その頼むと目を擦りながら頷いてくれたユナとアザレアを連れて・
私達が高町家の道場から出ようとすると

「何処に行くんだい？」

道場の外で腕を組んでいる士郎さんと鉢合わせになった・私は

「大切な家族を助けに行きます・」

嘘を言わず真っ直ぐに士郎さんの眼を見て言つと

「そうか・はやて君達には私が上手く言っておくよ・気を付けて行つておいで」

何も言わず私の前から退いてくれた士郎さんの横を通り過ぎようとすると

「君は何も変わってないな・何時だってどんな時だって誰かを護ろうとするな」

穏やかな笑みの士郎さんに

「私には・この生き方しか出来ないんですよ・ただ愚直に前に進むこの生き方しか・出来ないんです」

私はそう言つと騎士甲冑を展開しユナとアザレアを連れて、あの海上へと向かった・直ぐに見えなくなつた龍也を見ていた士郎は

「その生き方しか出来ないか・本当に龍也君らしい・だが君は気付いているかな?・少しずつ自分が変わり始めていることに・

「

士郎はそう呟き家の中へと戻って行った・・

時の振り子は今・・穏やかに・・しかし確実に動き始めた・・

一周年記念番外編 遡る時の振り子・・前編 終り

一周年記念番外編 遡る時の振り子・前編（後書き）

今回は前後編の番外編です・初代リインフォースを救えなかった事を後悔する龍也・そして龍也の前に現れた・歪み・それが何を意味するのか？この謎の正体は後編で判ります・それでは後編で再会致しましょう

一周年記念番外編 遡る時の振り子・・後編（前書き）

どうも混沌の魔法使いです・・今回は前回の後編になります・・かなり長いので読むのが大変だと思いますが・・自分ではかなりの自信作なので・・どうか宜しくお願いします

一周年記念番外編 遡る時の振り子・・後編

一周年記念番外編 遡る時の振り子・・後編

私は目が覚めた時・・過去の闇の書の主の元へ居た・・私は酷い悪夢だと思った・・折角解放されたと思ったのに・・再び長く苦しい時を歩まないとならないと思う時が狂いそうだった・・だが・・私には1つだけ希望があった・・いずれ・・いずれまた主はやてと・・あの方に会える・・そう思うと・・私は耐える事が出来た・・どれほど苦しくても・・どれほど悲しくても・・また会える・・例えば短い時間でも・・あの方の傍に入れると思えば・・耐える事が出来た・・しかし・・私の夢見た日は来なかった・・再び主はやての元に行った時・・その場にあの方の姿は無かった・・私は絶望した・・そして・・また終わりの時をただ待ただけだった・・私の運命は決まっている・・闇の書の闇と共に消える・・それだけが・・私の運命だ・・私は再び終わりの時を迎えようとしていた・・

「夜天の魔道書、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム・・闇の書の・・闇」

主はやてが呟きながら、球体が膨らみ破裂しその中から現れたこの世の物とは思えない異形な体をした化け物、闇の書の闇を見ている・・この後の出来事は全て知っている・・

「縛れ！ 鋼の軛！」

盾の守護獣が闇の書の闇の尻尾を刈り取る・・そこに

「ちゃんと合わせろよ、高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

高町なのはと鉄槌が・・

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵、グラーファイゼン！轟天、爆碎！ギガント！シュラアアク！」

鉄槌の一撃で闇の書の闇の複合四層式のバリアが1つ壊され・・

「高町なのはとレイジングハート行きます！・・ディバイン・・バスターツ！！！」

強烈な砲撃を闇の書の闇へと打ち込む・・それはいくつか再生していた尻尾もまとめて吹き飛ばし、2つ目のバリアをも粉々にした・・次は将とフェイトテストロッサだ・・

「剣の騎士シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン」

将が矢を生み出し狙いを定める・・そして矢を放ち・・3つ目のバリアを砕く・・

「フェイト・テストロッサ！バルディッシュ・ザンバー・・行きます！」

フェイトテストロッサが最後のバリアを打ち砕く・・そして

「彼方より来たれ、宿り木の枝・・銀月の槍となりて、撃ち貫け！」

主はやての呪文詠唱と共に闇の書の闇の上空に魔法陣が浮かび上が

り、周りに六つの魔力弾が生成される

「石化の槍、ミストルティン！」

主はやてが生み出した魔法陣からも放たれ、七つの魔力弾が闇の書に闇に命中する・・そして槍のように細く長い魔力弾から侵食し始める石化が闇の書の闇の体を覆って行く・・主はやてのミストルティンが決まり石化が侵食し石化していた部分が自重に耐え切れず崩壊していく中、闇の書の闇はそれを上回る再生速度で石化していた部分を再生していく・・そして次は・・

「行くぞ、デュランダル！」

クロノハラオウンが詠唱に入る・・

「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて、永遠の眠りを与えよ・・」

水色の魔法陣が展開され、周りの温度が一気に下がっていく・・そして

「凍てつけ！」

その言葉と共に氷結速度が加速し闇の書の闇は完全に氷に包まれ動きを止めた・・この隙に

「全力全開！ スターライト！！」

「雷光一闪、プラズマザーバー！」

高町なのは、フェイトテストロッサの持つ最強の魔法がそれぞれの

デバイスに収束されていく・

「ごめんな、お休みな・・・」

主はやては悲しげな眼を闇の書の闇に向け、魔力を収束していく・
ああ・・もう終わりか・・私の時は・・私がそんな事を考えている
中・・3色の砲撃が放たれ・・全てが終った筈だった・・

「響け、終焉の笛、ラグナロク!!」

「「「ブレイカーッ!!!」」」

・・そして・・この後・・湖が長距離転送を使い・・アルカンシエ
ルで全てを消し飛ばし終わる・・筈だった・・

「グオオオオオッ!!!」

身の毛もよだつ雄叫びを上げながら闇の書の闇が姿を変える・・髑
髏の文様を胴体につく異形へ・・異形は迫り来る3色の砲撃を片手
で弾き飛ばす・・ば・・馬鹿な・・これで終る筈だったのに・・ま
さか・・あの方が居ないから・・駄目だったのか？私が慌てている
と異形は

「グアアアアアッ!!!」

咆哮を挙げながら凄まじい砲撃を私達に向かって放つ・・闇の書の変
化に驚いていた私達は避ける事も出来ず・・その砲撃の直撃を受
ける筈だった・・私は

（そうか・・私は今回は少しの安らぎも得る事が出来ずに消えるの

か・・・もし・・・次があるのなら・・・今度は・・・あの方に会いたい・・・
」

私はユニゾンを解除し、消えるつもりでその異形と主はやて達の前に立ち塞がった・・・

「リインフォース！！あかん！！」

主はやての私を止める声を聞きながら・・・私は消えていく覚悟を決めた・・・その時・・・

ヒュウウウ・・・

穏やかな風が吹き・・・私の前に1人の男が現れる・・・白銀に輝く騎士甲冑に4枚の翼を持った男は

「プロテイオーネツ！！」

蒼く輝くプロテクションを発動させ・・・その砲撃を弾き飛ばした・・・だが私はその男の顔に目を奪われた・・・右目に傷がある物の・・・見間違える訳が無い・・・この人は・・・

「あ・・・兄上・・・様・・・？」

私が再会する事を夢見続けていた・・・その人だったのだから・・・

間に合ったか・・・私はプロテクションを解除しながら心の中で一息
ついていた・・・あの歪みは私の予想通り・・・過去の・・・闇の書の闇
との戦いの時へと続いていた・・・私は背後を見て

（私が居ない・・・やはり平行世界か・・・）

幼いはやて達の近くに私が居ない事に・・・やはり過去ではなく並行
世界かと思っていると・・・クロノが

「お前何者だ！」

警戒心むき出しのクロノに

「邪魔だ・・・下がってろ」

そう呟きはやて達全員をプロテクションの中に封じ込める・・・そう
でもしないと巻き込んでしまうからだ・・・

「貴様！何をしてる！！一人で勝てる筈が無いだろう！！ここから
出せ！！」

そう怒鳴り続けるクロノに

「お前達ではあれをどうこうする事は出来ん・・・お前達の最高の一
撃でも無傷だっただろう？」

そう言つと・・・うつ・・・と呟き黙り込むクロノ達を見ながら、闇の
書の闇を・・・いや・・・

「成る程・・・貴様が原因だったのか・・・ヴェルガディオス！」

私が消し飛ばした筈の負の神・ヴェルガディオスにそう怒鳴りつける

「グアアアッ！！！」

咆哮を挙げながら飛び掛ってくるヴェルガディオスの拳を剣で弾き飛ばしながら

「そうか・・・知性の無い・・・唯の残骸か・・・」

そう呟き、即座に胴を穿ち後退させ・・・

「ユナ、アザレア！！」

ユナとアザレアを呼び出す・・・そして・・・

「・・・ユニゾンインツ！！！！」

ユナとアザレアと同時にユニゾンを行う・・・バサア・・・音を立てて8枚の翼・・・4枚は天使で残りの4枚は悪魔の羽だ・・・それが一瞬私の姿を覆い隠し・・・騎士甲冑を作り変える・・・銀の装飾と左胸に金の剣十字を持った黒いロングコートに黒いズボン、そしてに純白のマントを羽織る・・・それと同時に髪と目が色を変えるのを感じながら、両腰に現れた剣・・・ソルとルナを抜き放ちながら

「貴様に断罪を下す！！！！我が剣の前に消え失せろ！！！」

ヴェルガディオスの残骸に私は向かって行った・・・

「グオオオオツ！！！」

咆哮を挙げながら殴り掛かってくるヴェルガディオスの攻撃をルナで受け止め・・・

「リユンヌベルグツ！！！」

ヴェルガディオスの影から月と同じ輝きを持つ魔力で出来た剣が飛び出し、身体を貫きそれと同時に・・・

ズガンッ！！！！

凄まじい音を立てて爆発する

「ギヤアアアッ！！！」

悲鳴を挙げながら後退して行くヴェルガディオスに

「逃がさん！プロレミヤッ！！！」

右手から太陽の輝きを放つ砲撃を放つ・・・だがこれは普通の砲撃と違う・・・限界まで収束させ面ではなく点で攻撃する砲撃で使いようによつては剣の様にも使える、私は右手を振り抜きヴェルガディオスの腕を切り飛ばす

「ッギヤアアアッ！！！！！」

腕を切り落とされた事で更に凄まじい、悲鳴を上げるヴェルガディオスの懷に飛び込み

「月牙陽炎斬ッ！！！」

三日月を描くかのようにルナを切り上げ、その直後に陽炎のように揺らめきながら姿を消す・反撃に拳を繰り出していたヴェルガディオスは

「グアッ！？」

驚き辺りを見回しているヴェルガディオスの背後に回ってソルで一闪する

「ギャアアッ！！！！」

苦痛に悲鳴を上げるヴェルガディオスの八方位から二刀流の高速の連撃で斬り裂き、完全に動きを止めた、ヴェルガディオスの最後に頭上からソルとルナを全力で振り下ろした

ズバアアッ！！！！

凄まじい音を立ててヴェルガディオスの身体を深く切り裂く・私はヴェルガディオスを見ながら

（脆い・やはり残骸・この程度か・）

恐らくこいつはこの世界のヴェルガディオスなのだろう・身体も脆い・弱い・だが・

「容赦はしない！！全力で貴様を消し飛ばす！！」

ルナとソルを腰の鞘に戻し両手に魔法陣を展開し、詠唱を始める

「万象を表す真実の姿・・・世界に刻まれしその記憶・・・」

右手の光り輝く魔法陣と左手の闇色の魔法陣が私の正面で巨大で複雑な魔法陣を描く・・・

「我が浄化の光にて・・・その存在を無に帰せ！セレスティアル・・・ノヴァ！！」

放たれた砲撃は真っ直ぐにヴェルガディオスに命中する

「ギャアアアッ！！！！」

悲鳴を上げるヴェルガディオスを2色の砲撃が呑み込み・・・次の瞬間ヴェルガディオスの姿は完全に消えていた・・・私は背後のリンフォースを見ながら

（さっき・・・私の事を兄上様と呼んでいた・・・まさか・・・）

私は翼を羽ばたかせリンフォース達の方に向かった

闇の書の闇を消し飛ばした兄上様が私の顔を見ながら

「リンフォース・・・私が判るか？」

そう尋ねて来る・・・私はゆっくりと頷き

「あ・・・兄上様・・・」

私がそう言うのと兄上様は穏やかに微笑む・・・私と兄上様が話している

「時空管理局の者だ！お前は一体何者だッ！」

そう怒鳴りつけるクロノを無視した兄上様は

「見てるのだろう？リンディハラオウン・・・クロノでは話にならん・
・貴様が出る」

そう言うとき空中にモニターが展開され

「私の事を知ってる・・・貴方は何者なのかしら？」

そう尋ねられた兄上様は

「お前だけではない・・・ここに居る全ての者の名も・・・全て知っている・私が何者か知りたければ・・・私をアースラに連れて行け」

そう言う兄上様にリンディは

「良いわ・・・闇の書の闇を倒してくれた人ですもの・・・招待するわ」

私達はアースラの中へと転送された・・・

「騎士甲冑を解除しろ」

クロノが睨みながら言う

「規則だからな・・・」

騎士甲冑を解除した兄上様の肩の上に2人の少女が現れる・・・クロノが2人の少女に手を伸ばそうとするが、兄上様がその手を弾き落としながら

「悪いが・・・この2人には触らないで貰おう・・・私の家族だからな」
そう言っているとクロノは不機嫌そうに

「こっちだ・・・来い」

私達を先導して歩き出した・・・私達が歩いていると主はやてが

「なあ・・・リインフォース・・・あの人の事を兄上様って言ってたけど・・・どういう事？」

そう尋ねて来る主はやてに

「直ぐに判ります・・・兄上様が全てを教えてください」

私がそう言っている内にリンディの部屋の前に辿り着いた・・・

「ようこそ・・・アースラへ・・・正体不明の魔道師さん」

そう微笑んだリンディは直ぐに

「それで貴方は何者？・・・私達は貴方ほど強い魔道師を見た事が無いわ」

そう言われた兄上様は

「私は時空管理局所属し、アサルトフォースとい隊の指揮官をしている」

そう役職を名乗る兄上様にクロノが

「嘘を言っな！管理局にそんな部隊は存在しない！！」

そう怒鳴るクロノに兄上様は

「そう今は存在しない・・・だがいずれ設立される部隊だ」

そう言う兄上様にリンディは

「その言い方だと貴方が未来から来た様に聞こえるけど？」

そう言われた兄上様は

「その通り・・・私はこことは違う時間を歩んだ未来から来た・・・」

そう言う兄上様は平行世界について語り始めた・・・世界とは1つではなく・・・無数に枝分かれし・・・様々な姿を持つと・・・その説明を聞いた主はやてが

「それじゃあ・・・貴方は平行世界のリインフォースのお兄さんなんですか？」

そう尋ねられた兄上様は穏やかに微笑み主はやての頭の上に手を置き

「私はリンフォースの兄ではない．．私は君の兄だ．．私の名は八神龍也と言うんだ」

そう笑うと主はやては

「嘘．．平行世界には私に兄ちゃんが居るんですか？」

信じられないと言う風に呟く主はやてに

「信じられないかね？．．では証拠を見せよう．．」

懐から一枚の写真を取り出す兄上様はそれを手渡す．．それを見た主はやては

「私や．．ううん．．私だけや無い．．シグナムもヴィータも居る．．」

えっ！？と呟き鉄槌や剣が写真を覗き込み目を見開く．．自分達が写っていれば驚くのは無理も無いだろう．．

「それで．．平行世界の魔道師がここに来た、目的は？」

そう尋ねるリンディに

「私がここに来た目的？．．簡単だよ．．リンフォースを救う為さ．．私の世界では闇の書の闇は完全に消す事が出来ず．．リンフォースが命を引き換えに封じた．．私はその未来を覆す為に来た」

そう言う兄上様は足元に魔法陣を展開させながら

「私の役目は終った・・・明日・・・私はここを去る・・・もし気が向いたら海鳴にある丘の上に来ると良い・・・ではなリインフォース・・・お前は今度こそ幸せに生きれるぞ」

そう言うとお消えていく兄上様に

「待つて！待つてください！」

そう手を伸ばすが・・・私の手は兄上様に届かず・・・兄上様はここから消えて行った・・・その後私達はアースラの一室を与えられ休む事になったが・・・私は眠る事が出来なかった・・・折角会えたのに・・・また会えなくなってしまう・・・それがとても悲しくてとても眠る気になれなかったのだ・・・

「リインフォース・・・寝れへんの？」

尋ねて来る主はやてに頷くと、主はやては

「なあ・・・リインフォースは龍也さんと一緒に行きたいんじゃないの？」

そう言われた私は慌ててしまい

「そ、そ、そんな事は無いです」

そう言うとお主はやてはクスリと微笑み

「その反応を見れば判るで・・・良いよあの人と一緒に行っても」

そう笑う主はやてに何かを言おうとすると主はやては

「何も言わんで良いよ・・リインフォースが居なくなっただけなのは寂しいわ・・でもな家族が幸せになるなら私はそっちの方が良い・・だから私のことは気にしないで・・あの人と一緒に行きよ」

そう笑う主はやてに

「あ・・ありがとうございます・・せめて・・これを持って下さい」

自分のデータのバックアップを主はやてに手渡し、深く頭を下げながら

「本当に申し訳ありません・・私の我儘で貴方の傍を離れる私を許してください」

そう言う主はやては

「良いんよ、私は気にしないで・・その代わり約束や・・絶対に幸せになるんやで」

そういつて戻って行く主はやての姿が見えなくなるまで私は頭を下げ続けた・・そして次の日

「おや?・・見送りに来てくれたのか?」

丘の上で寝ている2人の融合騎を背負った兄上様に主はやてが

「はい、貴方は嘘言ってるように見えなかったし・・それにリイン

フォースを助けてくれましたから」

そう笑う主はやての背後には鉄槌と湖・それに将と高町とテストロツサの姿が見える・彼女達も兄上様の話を信じたのだ・兄上様は穏やかに微笑みながら

「そうか・・ありがとう・・ではな・・私は元の世界に戻るよ・・」

そういつて背後の黒い歪みに向かって行く兄上様に

「待つてください・・私も・・私も連れてってください!!!」

駆け寄りながら言うと兄上様は

「どうしてだ?リインフォース・・お前はここで幸せに暮らして良いんだぞ?」

そう言う兄上様に

「私は!・・貴方の傍に居たいんです!!お願いです!!私も・・一緒に・・連れてって下さい!!」

兄上様が困った表情をしていると主はやてが

「龍也さん・・お願いします・・リインフォースを連れてってあげて下さい」

そう言われた兄上様は

「君はそれで良いのか?」

そう尋ねられた主はやてはゆつくりと頷き

「はい、リインフォースは貴方と一緒に居たいって言ってます・・だから・・私はリインフォースの意思を尊重します」

そう言われた兄上様は・・少し考えた素振りを見せたが

「判った・・ではリインフォースは連れて行く」

そう言つて私を招き寄せる・・私は兄上様の隣に立ちながら

「主はやて・・すいません・・私の我侭で」

もう1度謝ると主はやては笑いながら

「良いんよ、リインフォース・・龍也さんと仲良くな?・・それとそっちの世界の私にも宜しく」

そう微笑む主はやてに深く頭を下げながら、私は兄上様の世界へと渡った・・

「リインフォース・・行くぞ」

世界を移動して直ぐ移動するという兄上様に

「何処へ行くのですか?」

首を傾げながら尋ねると

「はやて達が待つてる・・・早く戻らないと・・・」

そう言う兄上様と一緒に私は街の中を歩いた・・・兄上様が喫茶店の前で立ち止まる

「ここにはやて達が居る・・・今呼んでくるから待つてくれ」

喫茶店の前で兄上様がまた出てくるのを待つ・・・話によれば主はやて達はもう大人になっているそうだ・・・私は再会を楽しみにしながら兄上様が出て来るのを待った・・・

「うーまだ眠いよ」

目を擦りながら言うはやてとヴィータ・・・それにシグナムになのはとフェイトを連れて、翠屋の玄関の前に行く・・・

「良いか・・・はやて・・・この先にどうしてもお前に会いたいと言う人が待つている・・・」

そう言うとはやては

「私にどうしても会いたい人？・・・誰やる？」

首を傾げるはやて達を連れて私は翠屋の外に出た・・・

「おひさしぶりです・・・主はやて・・・」

リンフォースが頭を下げながら言う・・・眠たそうにしていたは

やては目を見開き

「う・・・そ・・・リインフォース・・・？・・・ど・・・どうして・・・」

驚くはやて達に

「真正正銘・・・本物のリインフォースだ・・・平行世界にいた・・・私達の世界のリインフォースを連れて来たんだ」

そう言うとはやてはゆつくりとリインフォースに近付き

「本当なん・・・本当に私の知ってる・・・リインフォース？」

リインフォースは涙を流しながら

「はい・・・主はやて・・・もう1度貴女に会いたいと思っていた・・・私の願い・・・は今叶いました・・・」

そう言うリインフォースにはやては抱きつき

「良かった！良かったよお・・・リインフォース・・・お帰り」

涙を流すはやてにリインフォースはその背を擦りながら

「はい・・・私は・・・今貴女の元へ帰りました・・・」

その光景を見ていたなのはとフェイトは同じく涙を流しながら、私に

「良かったですね・・・龍也さん・・・」

泣き笑いのなのはに

「ああ・・・もう1度リインフォースに会えて嬉しいよ・・・」

私がそう笑うと穏やかな風が私達を包み込んだ・・・それは祝福の風が帰ってきたと言う証だった・・・

時の振り子が巻き起こした小さな奇跡・・・消えてしまった筈の祝福の風が再び吹き始めた・・・それは何を意味するのか・・・それはまだ判りません・・・ですがきっと・・・これから良い事が起きる証なのでしょう・・・彼女が加わる事でこの世界がどうなるか・・・楽しみにしていて下さい・・・それでは失礼致します

一周年記念番外編 遡る時の振り子・・・後編 終り

一周年記念番外編 遡る時の振り子・・・後編（後書き）

リインフォース復活！の話でした・・・これは前々から考えていて・・・もしリクエストで海鳴に龍也達が行く話が見たいと言うリクエストが来たら書くつもりでした！勿論来なくても書くつもりでしたけどね！・・・賛否両論はあると思いますが・・・彼女はこれからレギュラー化の予定です！勿論第2部・・・そして他の一周年記念の番外編でも登場します・・・嫌だと言う人が居ないと良いんですけど・・・それだけが不安です・・・そして賢明な読者の方なら判りますよね？リインフォースは龍也の事が好きです・・・勿論異性として・・・はやて達に加わるリインフォース・・・どうなるか楽しみではないですか？・・・それでは次の一周年記念でお会い致しましょう、

PS リインフォース復活が嫌だと言う人は居ませんよね・・・私は大好きなので登場させたのですが・・・それだけが不安なので・・・感想に一言貰えると嬉しいです、それと龍也がヴェルガディオスを完膚なきまでに叩き伏せてましたが・・・本編ではもつと強いです・・・ここのヴェルガディオスはあくまで残骸なので、それとおまけで、ユナ、アザレアとのWユニゾンの説明を致します！！騎士甲冑のモデルは「鳴神様」・・・技を考えてくれたのは「若輩侍様」です、ご協力感謝いたします・・・それでは解説スタートです

イディアス

光と闇は対極でありながら、その存在はお互いに依存しあう存在。光が有る所に必ず闇はあり、光が有るからこそ闇は闇であると認識される。光に照らされ事象が認識される。しかし認識されない所は即ち闇。2つ揃えてその事象の真の姿と言えるなら、2つを知る者・・・従えた者が見ることが出来るのは？それはイデア・・・全ての事象

の真の姿だ ジェイル談

銀の装飾と左胸に金の剣十字（シュベルトクロイツに酷似）を持った黒いロングコートに黒いズボン、その上に純白のマントを羽織り、髪は金で瞳は右が金、左が銀で、背中 of 翼の右側は天使で、左側は蝙蝠の翼を持ち、計 8 枚の翼を背中に生やしている。武器は右手に光を操る太陽の紋章をあしらった黄金の大剣「ソル」、左手に闇を操る三日月の紋章をあしらった白銀の大剣「ルナ」を持つ・相反する力を同時に行使出来る為、すべての能力が非常に高い

技名

リユニヌベルグ

月の輝きを纏う魔力の剣を作りだす、対多数戦用の射撃魔法。影ある物には光あり。存在ある所には必ず影：闇が有るので、ゆえにこの魔法は必中。どんな術を持ってしても逃げ切る事は出来ない。龍也の魔力の持つ限り、いくらでも作り出せるが、その分、威力はそこまで高くは無い。しかしそれは龍也の基準にした場合であって、雑魚相手には十分な威力を持つ。強度さえあれば通常の防御魔法で防御可能。

プロミレア

太陽の輝きを放つ、極限まで魔力を集積した砲撃魔法。対象を面では無く点で攻撃するための砲撃魔法で、その効果範囲はとても狭いが、その分威力と弾速、射程と貫通力に優れる技で、使い方次第では大多数を相手にも効果を発揮する。また、砲撃を放ちながら射線

を移動させることで、一種の剣の様な使い方もできる。点による攻撃のためシールドで防ぎにくい。

ルナ・ソ・レイユ

胸の前でクロスさせたソルとルナに魔力を帯びさせ、それを振り抜く事で魔力刃を飛ばす近距離と中距離のどちらにも対応した技。集積された魔力の刃は、その威力よりも下回る魔法を切り裂き消滅させる。また、近距離で放つ場合は剣自身の威力も合わさって魔力と実体の二段ダメージとなるため、威力が飛躍的に増大する。魔力刃として飛ばさず常時発動にする事で、一種の近接強化のブースト魔法にもなる。

セレスティアルノヴァ

既存の魔法体系と異なるイディアスのみが使える魔法。右手に光の魔法陣、左手に闇の魔法陣を展開し、正面でその二つを重ね合わせて二重の魔法陣を展開して放つ広域殲滅用の砲撃魔法。光が闇を照らしだし、闇が闇の中の光を浮き立たせることで、対象の万象の全てを打ち砕く。必中にして必勝・光であって闇である力を持つ魔法。この魔法の前では全ての存在が真の姿を晒し出され、その存在の全てが浄化の対象になる。

げつがようえんさん
月牙陽炎斬

三日月を描くかのようにルナを切り上げ、その直後に陽炎のように揺らめきながら姿を消し、相手の背後に回ってソルで一閃。その直後にさらに姿を消し、敵を八方位から二刀流の高速の連撃で斬り裂き、最後に敵の頭上から二刀両断にソルとルナを振り下ろす。敵を惑乱させながらの近接技。ルナ・ソ・レイユとの併用でさらに威力

が増す。

呪殺剣
じゅさつけん

ルナで斬り裂くのと同時に相手に闇の魔法陣を刻み込み、任意のタイミングで爆発させる技

烈火炎閃
れつかえんせん

炎を纏わせたソルで斬り払う単発系高威力の近接技。水、氷系統の魔法を斬り払う事で無効化できる

神滅剣 黄龍の太刀

ルナとソルを一つに合わせることで2メートル程の長大剣に変化させる、二つの剣を媒体として剣を召喚する特殊な形態、陰陽を司り、森羅万象の司り、光、闇、雷、氷、炎、大地の6元素の力を収束し振るう必殺剣、剣としての威力に加え6元素の追加ダメージを持つ為、凄まじい破壊力を秘めている、だがユナとアザレアに凄まじい魔力負担が掛かる為、一回の戦闘中に一回しか発動出来ないという欠点を持つ

一周年記念番外編　デイドの日記帳（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回のリクエストは「悠様」で、デイドの日記帳です！デイドが毎日書いている日記に興味があったはやて達の話です！余りメインになった事の無いデイドがメインなので・・・少し自信が無いですが・・・どうか宜しくお願いします

一周年記念番外編 デイードの日記帳

一周年記念番外編 デイードの日記帳

カリカリ・・・

食堂の片隅で私が日課の日記を書いていると

「なあ・・・デイード・・・いつも日記書いてるけど・・・何書いてるんや？」

首を傾げながら尋ねて来るはやてに

「なんなら見ますか？」

書き終えた日記を手渡しながら言うとはやては

「えっ・・・見て良えの？」

驚いた表情のはやてに

「別に見られて恥かしい事は書いてないですし、どつぞどつぞ
笑いながら言うとはやては

「んじゃあ・・・見せて貰うわ・・・」

日記のページを開いた・・・

「ん？・貴女達も気になるのですか？」

はやての後ろで興味津々という表情のヴィータにスバルとティアナにそう尋ねると頷く、3人に

「では、どうぞ・見れなくても構いませんよ」

そう言うとはやてと同じ様に日記帳を覗き込む3人を見ながら、私は日記のページを見た

○月×日 晴れ

今日も山の中を歩き続けた・・ネクロの基地から助けられた私達は黒尽くめの男の後を追って山の中を進んでいた・・私は・・あの男が嫌いだった・・トーレ姉様に酷い事をしたし・・それに私達の事もおい！とかお前！とかとしか呼んでくれないし、私達が話しかけても無視をする・・ああいう態度が嫌いだった・・どうしてあんな男をウエンディは気にするのだろう・・私は判らなかった・・

そのページを見ていたスバルは

「デイド・・最初龍也さん嫌いだったの？」

首を傾げながら尋ねて来るスバルに

「はい・・私は最初龍也兄様が嫌いでした・・でも・・龍也兄様を知るたび・・それは変わりましたよ」

はやてが次のページを捲る・

○月×日 曇り

今日、7度目のネクロの襲撃を受けた・姉様達が戦闘態勢に入る前に

「どけ！」

あの男が右手で顔を押さえ次の瞬間・

「グオオオオツ！！」

身の毛がよだつ様な雄叫びを上げながら男の姿が龍人に変わる・何度も見たが・ただ恐ろしかった・敵を簡単に殺し・辺り一面を灰にするその凄まじい威力の魔法に・私にとってはあの男もネクロも大して変わらない存在だった・のだがそれは徐々に変わりは始めていた・セツテが倒れてから心なしに優しくなった、男は「手を貸そう・」

私達が上れない崖にいち早く上り手を貸してくれたり・

「キヤアツ！」

私が木の根に躓いて転びかけたりすると、無言で手で貸してくれたり・徐々に・徐々にだが・優しくなっていた・私は気が付くと男の後姿を目で追う様になった・何でか判らなかったが・男の姿に目を惹かれるようになっていた・何かの病気なのだろうか？・こんどオットーに相談してみよう・

「最初の兄ちゃんは怖かったんや・」

そう呟くはやてに頷き

「はい、最初の龍也兄様は凄く怖かったです．．でも．．それは振りだつたんです．．その振りが何時までも続く訳は無く．．徐々に優しい本当の姿が見え始めたんですよ」

そう笑うとスバルが

「前にオットーが言ってた．．怖い龍也さん．．でもオットーその時も格好良いつて言ってたけど．．デイドはどうだったの？」

そう尋ねて来るスバルに

「そうですね．．確かに格好良かったと思いますよ？．．でも私は今の優しい龍也兄様の方が好きですね」

そう笑っているとティアナが私の日記のページを更に捲る．．

○月×日 雨

ダーク兄様と暮らし始めて3年．．私はダーク兄様に恋していると気付いた．．今のダーク兄様は．．いや最近知つたのだが．．ダーク兄様はあの蒼天の守護者、八神龍也だったのだ！これには驚いた．．自分がファンだった管理局の騎士だったのだから．．だけど．．今はダークネスと名乗っている．．ダーク兄様は腕と目を失い．．護る事が出来なかった自分に．．その名を名乗る事は出来ないと言っていた．．私には良く判らなかったが．．チンク姉様達は意味が

判ったようだった・・今度意味をチンク姉様に聞いてみようと思っ
た・・私のほかにもダーク兄様を好きな姉妹は居て、チンク姉様に
ノーヴェ・・それにウェンディとオットーにセツテだ・・セツテは・
・病んでしまった・・とトーレ姉様が言っていた・・意味を尋ねる
と病的に誰かを愛するという意味だそうだ・・私も・・そうなった
方が良いのだろうか・・そうすればダーク兄様は振り向いてくれる
のだろうか?・・今度お父さんに相談してみよう・・

「だ・・駄目だぞ!病んだら戻れなくなるんだぞ!」

慌てたように言うヴィータに

「判ってますよ・・だから私は病んでないでしょう?」

お父さんに相談したら、病んでは駄目だ!好きなのは判るがそれだ
けは駄目だ!必死に説得するお父さんに頷き、私はオットーと共同
戦線を張る事にしたのだ・・

「それにしても・・そんな前からセツテは病んでたのか・・」

驚きながら言うはやてに私は

「いえ・・セツテが本格的に病み始めたのは、黒騎士として龍也兄
様が動き始めた頃からです・・この頃のセツテは龍也兄様の写真を
取っては、龍也兄様が居ない日は1日それを眺めながら・・「ウフ
フ・・」とか笑ってたり・・部屋の壁にペタペタと貼っているレベ
ルでした」

そう言うとティアナが

「それは・・・重傷ね・・・痛すぎるわ・・・」

そう呟くティアナだが、私から見ればティアナもセツテと同レベルだと思った・・・そんな事を考えているとスバルが日記を捲る・・・

○月×日 晴れ

もう直ぐダーク兄様がここを離れる日が来る・・・それは酷く私を動揺させた・・・何時も傍に居てくれた人が離れる・・・そう思うと胸が張り裂けそうだった・・・私はダーク兄様の傍が好きだった・・・暖かくて・・・心のそこから安心できるその場所が大好きだった・・・でもそれがなくなってしまうと思うと凄く悲しかった・・・どうやらそれは私だけではなく・・・オットーや皆も同じ様だった・・・皆酷く落ち込んだ様子だった・・・そしてダーク兄様がここを離れる日が来た・・・見送りは良いとダーク兄様は言っていたが・・・待っている事が出来ず見送りに行った・・・勿論姿を隠しながらだ・・・そこではお父さんとダーク兄様が話をしていた・・・内容は

「やっぱり君は私の娘に好かれているようだ、どうだい？私の娘と結婚する気は無いか？」

そう言うお父さんに私達は耳まで真っ赤になった・・・ダーク兄様と結婚・・・ずっと一緒に居れる・・・それはとても魅力的に思えたが・・・ダーク兄様の返事は

「そうだな・・・悪くないと言いたいところだが、お前のことを父さんと呼ぶ気は無いな」

・・・私達は凄くガッカリした・・・やはり私達では駄目なのだろうか？・・・エースオブエース 高町なのはとか・・・金色の戦乙女 フェイト・ハラオウンとか・・・夜天の王・・・八神はやての内・・・誰かが

好きなのだろうか？私達が落ち込んでいる間にダーク兄様は行ってしまった・・・でも私は諦めないと決めていた・・・絶対に振り向いて貰うのだとこの時既に決めていたのだ・・・

「「「「「・・・」」」」」

沈黙しているはやて達の手から日記を取りながら

「はい、ここまでです・・・これ以上は少し恥かしいので・・・」

そう言つとヴィータが

「いや・・・何かこう・・・デイド達つて純情なんだな・・・」

そう言つヴィータに笑いかけながら

「そうだと思いますよ？・・・私達はただ・・・真っ直ぐに・・・揺らぐ事無く龍也兄様の事だけを想っています・・・それはヴィータ達も同じでしょう？」

そう尋ねると無言で頷くヴィータ達を見ながら

「私は・・・いいえ私達は本気です・・・本気で龍也兄様が好きです・・・だかた貴女達とは恋敵になるでしょう・・・でもそれでも良いでしょう？・・・障害はあればあるほど良いと・・・誰かが言っていましたし」

そう笑うとはやては

「デイド・・・あんた凄いわ・・・」

そう言うはやてに私は

「そうですね？・好きな物は好きだからしょうがないじゃないですか？・嘘を言うのも・気持ちに蓋をするのも嫌なんですよ・私は・」

そう笑いながら言うティアナが

「デイドってこんな性格だったんだ・」

私達が合流したのはジオガディスが動き始める少し前・だからあんまり話してもないし・お互いの事をまだ良く判っていない・

「そうですね？・私はこういう性格です・ただ真っ直ぐに・龍也兄様を想い・同じ人を好きになった貴女達とも仲良くしたい・それは嘘偽りの無い私の本心ですよ」

そう、私ははやて達とも仲良くしたい・同じ人を好きになったのだ・気が合わない筈が無いのだ、私がそう言うとはやては

「こうまで言われると・いつそ清々しいで・あーなんか嫌やのに仲良く出来そう・」

はやて達がそんな話をしていると龍也兄様が食堂に来る・龍也兄様は私達を見て

「何だ？・何時の間に仲良くなったんだ？」

首を傾げながら尋ねて来る龍也兄様は私は

「私達は前から仲良しですよ？・・・ね」

そう微笑みながらはやて達を見るとゆっくりと頷く・・・その様子を見ながら龍也兄様は

「それなら良いが・・・ん？それは何だ？」

私が持っていた日記に気付き尋ねて来る龍也兄様に

「これですか？・・・これは私の日記です・・・恥かしいのでお見せで来ませんが・・・見てもそんなに面白い物ではないですよ・・・そうそう・・・私はお父さんに呼ばれているのでここで失礼しますね・・・それと今度約束していた買い物に連れてって下さいね？」

そう言う龍也兄様は

「前に私に一撃入れたら・・・との約束だな・・・大丈夫だちゃんと覚えてる」

そう笑う龍也兄様に頷き

「楽しみにしています、ああ・・・オットーも一緒に良いですよね？」

私とオットーは双子だ・・・だから私だけが良い思いをするのは嫌でそう尋ねると

「オットーもか？別に良いぞ」

穏やかに笑いながら言う龍也兄様に頷き、私は食堂を後にした・・・食堂から聞こえてくる騒がしい声に

「はやてとティアナが喧嘩してるんでしょうかね？．．ふふ．．喧嘩するほど仲が良いと言いますし．．気にするほどじゃあないですね」

そう笑いながら日記を捲る．．後ろの方のページを見て、自分で赤面しながら

「流石に．．これは見せるのが恥ずかしいですからね」

後ろのページには私が書いた龍也兄様の絵が大量に書かれていた．．私はそのページを捲りながら

「私は誰がどう言おうと．．貴方が好きです．．絶対に振り向かせて見せますからね．．」

私は最後まで日記のページを捲り、そしてそれを閉じてお父さんの部屋に向かった．．

知っていますか？龍也兄様．．貴方が思う以上に私達は貴方の事が好きなんですよ．．だから覚悟してくださいね．．私は絶対に諦めませんから．．

一周年記念番外編　ディードの日記帳　終り

一周年記念番外編　デイドの日記帳（後書き）

どうも！混沌の魔法使いです！デイドは私のイメージではヤンデレではなく、ヤンデレ予備軍なのです・・なんかヤンデレって似合いませんがするんですよね・・デイドって・・違いますかね？・私の感覚がおかしいのでしょうか？リリカルなのは・・私がヤンデレだと思うのは、はやて、フェイト、セツテ、シャマル、デイド、ティアナなんですけど・・皆さんはどう思いますか？意見をもらえる嬉しいです！それでは次の一周年記念番外編でお会い致しましょう

一周年記念番外編 祝福の風の決意（前書き）

どうも〱混沌の魔法使いです！今回はリクエストではなく・・・普通の番外編です・・・一応一周年記念番外編に含まれるんですけどね・・・今回はタイトル通り祝福の風・・・つまりリインフォースの番外編です、中々手応えのある話なのでどうか宜しくお願いします

一周年記念番外編 祝福の風の決意

一周年記念番外編 祝福の風の決意

龍也がリインフォースを救ってから1週間・彼女は六課の一員として受け入れられていた・私が廊下を歩いていると・

「おう、リインフォース何やってんだ？」

後ろから鉄槌に声を掛けられ、私が振り返りながら

「鉄槌か」

私がそう言つと鉄槌は眉を顰めながら

「だから・・私は鉄槌じゃねえ！！ヴィータだ！」

そう怒鳴る鉄槌に

「すまない・・て・・いやヴィータ・・」

私が謝りながら言つとヴィータは

「良い加減によ、私達の事を鉄槌とか呼ぶの止めてくれよ」

呆れたように言つヴィータに

「判っているのだが・・・遂・・・な」

私がそう言つとヴィータは

「まあ・・・直ぐに治せとは言わないけどよ・・・所で何処に行くんだ？」

笑いながら尋ねて来るヴィータに

「その・・・兄様の所に行こうと・・・」

私がそう言つとヴィータは

「兄貴・・・？・・・聞いてないのか？兄貴は今日居ないぞ？」

えっ・・・私が停止しているとヴィータは面白く無さそうに

「今日はよ・・・フェイトと一緒に本局で用事があるんだつてよ」

不機嫌なヴィータ・・・昔からだヴィータは兄上様に・・・その・・・多大な好意を持っている様で・・・これは勿論妹としての物ではなく・・・その・・・女としての好意だ・・・私がそんな事を考えているとヴィータは

「まあ・・・そんな訳でよ、兄貴は今日居ないんだよ・・・夜には帰るそうだからよ、それまで待つてろよ、んじやな・・・私は新人の訓練見に行つて来るからよ、リインとかと一緒にいろよ」

そう言うヴィータに頷き、私はリイン達の居る食堂へ向かった・・・

「あつ！お姉様です！」

「本当だな、姉だ」

にこにこ手を振るリン・彼女のフルネームはリンフォース？・つまり・私が残したデータを元に主はやてが作り出した私の生まれ変わりの様な存在なのだが・彼女は私の事をお姉様と呼ぶ・最初は困惑したが・今は少し嬉しいと思う・そしてその隣に居るのは兄上様が助けた融合騎でアギトと言つらしい、少し勝気な所がヴィータに似ていると私は思っている・私はリン達の所に行き椅子に座ると、後ろから

「持つて来ましたよ・あれ？お姉ちゃんも一緒ですか？」

「！・わ・私は・や・やっぱり・か・帰ります・は・
・放して下さい」

何かの布を持つて来たユナと私を見て逃げ帰ろうとするアザレアをユナが掴んで引きとめる、彼女達が兄上様の融合騎で、ユナは私と同じ様に消えてしまった、セレスという融合騎の二代目で、アザレアは詳しくは教えてくれなかったが、元は誰かの融合騎だそうだ・アザレアは人見知りが激しい・逃げようとするアザレアにユナが

「アザレア、お姉ちゃんはお兄ちゃんの家族です、逃げるのは失礼ですよ」

そう言われたアザレアは逃げようとするのを止め、出来るだけ私と距離を取って椅子に座った・今から何をするのだろうと私が考え

ていると

「今からですね、お兄様の人形を作るんですよ！図面ははやてちゃんを書いてくれました」

リンが笑いながら図面を見せてくるが・

「・・・??」

意味が判らなくて首を傾げていると、ユナが図面を私に渡しながら

「初めてですから判らないですよ？私が教えてあげますからやってみませんか？」

私は図面を受け取ってよく見る・確かにパーツごとに分割されているが、確かに兄上様のデフォルメされた姿が書かれていた・・リン達のは少し違っていて、騎士甲冑やBJを身に着けている兄上様の姿が書かれていた・・私が図面を見ているのに気付いたアギトが

「私達のは兄とユニゾンした時のやつで、姉のは普通の基本のやつだぜ・・完成するところなるんだ」

アギトがポケットから兄上様の人形を見せてくる、管理局の制服に黒いコートを着ている何時もの兄上様の姿をそのままに・・可愛らしくデフォルメされた人形を見て

「・・・私も・・作れるのか？」

その人形が私でも作れるのか？と尋ねるとユナが

「大丈夫ですよ、私がちゃんとお姉ちゃんに教えてあげますから」

私はその言葉に頷き、ゆっくりときこちない手で配られた布に図面を書き写し始めた・・私が苦戦していると、紅銀の瞳になったアザレア？が

「違う、ここはこうだ」

私の手からペンを引ったくり図面の間違いを訂正してくれる、さっきまで私と話そうとしなかったアザレア？が話しかけてきた事に驚いていると、アザレア？は私の眼を見ながら

「私の名はアリウム・・アザレアのもう1つの人格だ・・今まで自己紹介が遅れて申し訳なかった・・余り私は表に出ないが・・よろしく頼む姉上様」

そう言うアリウムに

「ああ・・こちらこそよろしく頼む・・」

そう返事を返すとアリウムはユナに

「ユナ、姉上様は私が見よう」

そう言うアリウムは私に丁寧に教えてくれ・・作り始めてから3時間後・・

「で・・出来た・・」

私の手の中には兄上様の人形があった・・少し不出来な所もあるが・

・充分すぎる・私がその人形を見て1人納得していると

「何してるんだ？リインフォース？」

突然シグナムに話しかけられ驚いてその人形を落としてしまう・
地面に落ちかける前にシグナムがそれを拾い上げ

「兄上の人形か・よく出来てるな」

そう言つて私に人形を返してくれたシグナムは

「もう直ぐ兄上様が戻る、もし見られて恥かしいなら部屋に戻した方が良いでしょう」

そう教え、直ぐに何処かに行くシグナムの後姿を見るとリインが

「シグナムも同じ人形を持ってるんですよ？・何時も枕元に置いてあるんです」

そう教えてくれ私は少し驚いた、シグナムは兄上様に好意を持っていた・だがそれはあくまで兄妹としての物だった筈なのだが・私はそんな事を考えながら持っていた人形を抱き抱えながら自分の部屋に戻った・私が食堂に戻ると兄上様が居た

「兄上・・・！？」

私は声を掛けかけたが、それを呑み込み食堂の柱の陰に隠れた

「龍也、美味しいね」

兄上様の周りにはフェイトや・確か・スバルとティアナと言う名の少女達が居り・楽しそうに食事をしていた・兄上様は少し困ったような顔をしながらも食事を楽しんでいるようだった・私はその光景を見ながら・

「胸が・・苦しい・・」

自分でも判らない不快感を感じていた・・どうして私があそこに居れないのか・・どうして私や主はやて達ではなく、フェイト達に笑いかけている・・そう思うと胸が苦しくて仕方なかった・

「・・・？」

兄上様と一瞬目が合いかけるが、自分から目を逸らし逃げるようにその場を後にした・・兄上様と話したかったがそれ以上にこれ以上あの光景を見たくなかった・・私は逃げるように自分の部屋に戻り、扉に鍵を掛けてベッドに横たわり・・自分で作った兄上様の人形を抱き抱えながら

「私はどうしてしまったのだ・・」

私はただ兄上様の傍に居たかった・・名を呼んで欲しかった・・ただそれだけの筈なのに・・最近兄上様となのは達が話していると胸が苦しくなる・・そしてそれと同時になのは達が酷く憎いと思っ
た・・

「判らない・・この気持ちは一体何なのだ・・」

自分でも訳の判らない感情に困まりながら人形を抱き抱えベッドの上を転がりまわる・・そして私は1つの答えに辿り着いた

「わ．．私は兄上様が好きなのか!？」

この行動は見た事がある、主はやてやヴィータが良くやっていたからだ．．私は自分の出した答えに．．

「駄目だ．．この想いは叶う事はない．．」

直ぐに否定的な答えを出す．．私のこの願いは叶う筈が無いのだ．．兄上様の隣は主はやての物だ．．そこに私の入る隙間は無い．．だが．．

「せめて．．諦める前に良い思い出が欲しい．．」

私のこの気持ちは．．多分本物だ．．だが．．それは願ってはいけない事．．私はそう考え．．最後に良い思い出をと．．思い枕を抱き抱えながら兄上様の部屋に向かった．．

（あの時のぬくもりを最後にまた得て．．私は兄上様の事を諦めよう．．）

消える前の最後の晩．．私は兄上様と一緒に寝た．．暖かくて．．それで居て心が満たされた．．最後にその温もりを感じて．．兄上様の事を諦めよう．．兄上様の隣は主はやてとヴィータの．．いやシグナムの物だ．．そこに私の居場所は無いだ．．私はそんな事を考えながら兄上様の部屋の前に行き扉を叩いた

「．．誰だ．．なんだリインフォースか．．どうしたんだ？」

笑顔で尋ねて来る兄上様は寝る前だったのかパジャマ姿だった．．

私は兄上様に

「えっと・・・ですね・・・そのですね・・・一緒に寝たいと思ったのですが・・・駄目でしょうか？」

私がそう尋ねると兄上様は

「別に良いぞ、おいで」

私はすんなり良いよと言ってくれた兄上様に驚きながら部屋の中に入った・・・部屋の中は綺麗に整頓されていた・・・兄上様は欠伸をしながら

「すまんが・・・今日は疲れた・・・私はもう寝るが・・・リインフォースはどうする？」

そう尋ねて来る兄上様に

「私も寝ます・・・」

そう返事を返し私は兄上様と一緒に布団に入った・・・

（何だ・・・この胸の高鳴りは・・・）

前は感じなかった胸の高鳴りに私が困惑していると・・・隣から穏やかな寝息が聞こえてくる・・・

「もう寝てしまわれたのか・・・」

よほど疲れていたのだろう・・・直ぐに寝てしまった兄上様の寝顔を

覗き込み・・・顔の前で手を振ってみるが反応が無い・・・どうやら完全に眠っているのだろう・・・私がそんな事を考えていると、兄様の手が伸びてきて私を抱き抱える

「!?!?!」

突然の事に私が驚いたが、私は

「んっ・・・」

兄上様の胸に顔を埋め、兄上様の背中に手を回し抱きつきながら・・・

「暖かい・・・」

包まれているようなこの感じ・・・まるで陽だまりの中に居るような心地良さを感じ・・・私は・・・

（駄目だ・・・兄上様を諦める事なんて出来ない・・・私はずっと・・・傍に居たい・・・）

この暖かさを知ってしまったては駄目だ・・・諦めようと思っていたが・・・そんな事は無理だと私は思った・・・

（明日・・・主はやてに言おう・・・それで主はやてに嫌われても良い・・・私はずっと・・・兄上様の・・・そ・・・ば・・・に・・・）

私はそんな事を考えながらその暖かさに吞まれ・・・直ぐに寝入ってしまった・・・そして次の日私は兄上様を起こさないように布団から抜け出し・・・主はやての部屋に向かった・・・

「・・・」

私は主はやての部屋の前で・・・

（仮に私が兄様の事を好きだと言ったらどうなるだろう・・・主は
やては怒り狂うかもしれない・・・）

主はやては私から見ても独占欲の強い人だ・・・私がそんな事を言え
ば・・・怒り狂った主はやては私の事を嫌いになっってしまうかもしれ
ない・・・でも・・・

「私は兄上様が好き・・・この気持ちに嘘はつけない・・・」

私は覚悟を決めて主はやての部屋の扉を叩いた

「ん？・・・誰やこんな朝早くから・・・なんやあ・・・リインフォース
かあ・・・そんな所に立ってないで部屋の中に入りよ」

笑顔で招き入れてくれる主はやてと暫く紅茶を飲みながら話をして
いたが・・・私は自分がここに來た目的を主はやてに切り出した・・・

「主はやて・・・大事な話があります」

私がそう言うのと主はやては椅子に座りなおし

「そんなに改まるって事は相当大事な話しやね」

そう笑う主はやてに私は頭を下げながら

「最初に言っておきます・・・申し訳ありません・・・私は・・・兄上様

が好きです・・最初は傍に入れるだけで良かったです・・でも今はそれだけじゃ嫌で・・私を見て欲しくて・・兄様に好きになってもらって欲しくて・・すいません・・私はこの自分の気持ちに嘘をつけないんです!!」

私が捲くし立てるようにそう言うと主はやては穏やかに微笑みながら

「良かったあ・・リインフォースも兄ちゃんが好きなんやね? 嬉しいわあ・・味方が増えたで」

怒られると思っていたのに、予想に反して笑いながら言う主はやてに

「怒らないんですか?」

そう尋ねると主はやては

「何で怒るんよ?・・リインフォースも兄ちゃんを好きなんやろ?・・怒る必要なんか無いわ、私としては味方が増えて嬉しいわあ」

そう笑う主はやては私に兄様を囲む状況を説明してくれた・・今兄様を好きな者は13人居り・・その内時分の味方は、シグナムとヴィータで・・後は皆敵で・・自分達から兄様を奪おうとしていると・・主はやては説明を終えると手を差し出しながら

「これでリインフォースも私の味方・・兄ちゃんに私達を好きになつて貰つて・・ずっと兄ちゃんと一緒に居よう?」

そう笑う主はやての手を握り返しながら

（そうか・・私達から兄様を奪おうと言う者達が居るのだな・・

そんな事はさせん・・・兄上様は・・・私達の物だ・・・)

リインフォースがそんな事を考えている中・・・龍也は

「リインフォースどこに行っただ？」

一緒に寝た筈のリインフォースが居なくなっている事に首を傾げていたりする・・・

一周年記念番外編 祝福の風の決意 終り

一周年記念番外編 祝福の風の決意（後書き）

龍也争奪戦にリインフォース参戦決定！！これがやりたかったんですよ！幸せに生きれなかったリインフォースに今度こそ心のそこから幸せを！！原作では直ぐに消えてしまった彼女の救済にはこれしかないと思ったんですよ、これから第二部、番外編で出て来る、恋愛初心者のリインフォースのあわあわする所を楽しみにしてくださいと嬉しいですよ！それでは次の一周年記念番外編も宜しく願います

一周年記念番外編 マテリアルとヴィヴィオの小さな嘘・・・（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回のリクエストは「ハナト様」で
エイプリルフルとマテリアルズとヴィヴィオの話です、ヴィヴィ
オとマテリアルズのついた小さな嘘・・・それがきっかけで起きる一
騒動・・・どうなるか楽しみにしていて下さい

一周年記念番外編 マテリアルとヴィヴィオの小さな嘘・

一周年記念番外編 マテリアルとヴィヴィオの小さな嘘・

この騒動の始まりは静夜の一言から始まった・

「父上は最近・・我達と遊んでくれない・・父上は本当に我達のことを大切に思ってくれてるのか？」

その呟きに雷華が

「・・それは僕も感じてたかな・・パパ最近仕事行くのも早いし帰ってくるのも遅いもんね・・」

1回不安になるとそれはそう簡単には消えてくれない・・それは幼いマテリアルズとヴィヴィオも同じで

「・・本当はパパ・・ヴィヴィオ達の事嫌いなのかも・・」

その呟きに星奈が

「しかしこんな事は直接お父様には聞けないです・・でもお父様の気持ち判らないと不安で不安でしょうがないです・・」

ヴィヴィオとマテリアルズ達には1つ不安な点がある・・それは自分達が本当の娘達ではないという事だ・・片や人造魔道師・・片や闇の書の闇の欠片・・その事が自分達の不安を加速させる・・それは捨てられるのではないか？と言う不安だ・・星奈達がそんな事を

考えていると

「どうしたの？こんな暗いのにも明かりも点けないで？」

スバルとティアナが4人の顔を見ながら尋ねると、静夜が

「そうだ！塵芥・・・いや・・・ティアナ・・・お前に頼みがある！」

この静夜の頼みが全ての騒動の引き金となった・・・

「兄ちゃん・・・最近忙しそうやね・・・どうしたん？」

そう尋ねて来るはやてに私は書類を見せながら

「静夜達がヴィヴィオと同じヒルデ魔法学院に通えるように準備をしてるんだ・・・」

私がそう言うとはやては

「もう・・・兄ちゃんは本当に静夜達が大切なんやね」

笑いながら言うはやてに

「当然だ、私には静夜達が人間じゃないとか・・・どうとかには興味は無い・・・ただ大切な私の娘・・・それだけで充分だ」

もう直ぐ書類が全部揃う・・・カリムやシャツハにも頼んだ・・・どうにかして静夜達を学校に通わせる事は出来ないか？と・・・何度も何

度も頼み、遂にはカリム達が折れ、条件付だが入学が許可されたのだ・・・その条件とは

「強力なりミッターで魔力の制限・・・それにデバイスの弱体化・・・ねえ・・・」

書類を見ながら言うはやてに

「仕方ないんだ、静夜達の魔力はSS+・・・リミッターでC-まで能力を下げるのが絶対条件だったんだ」

私とはやてがそんな話をしていると、なのはが部屋に駆け込んで来て

「龍也さん！大変です！！ヴィヴィオ達が誘拐されました！！！」

その言葉に私は一瞬で座っていた椅子から立ち上がり、なのはの服の襟を掴み

「どういう事だ・・・説明しろ」

私が睨みながら言うとなのは私の腕を叩きながら

「た・・・龍也さん！く・・・苦しいですっ・・・」

涙目で言うなのはに冷静になり

「す・・・すまない・・・頭に血が上ってしまった・・・大丈夫か・・・？」

苦しそうに咳き込んでいたなのはに謝ると・・・

「だ・・大丈夫です・・それよりヴィヴィオ達の部屋にこれが・・」

私はなのはに渡された手紙を見た・・そこには

『蒼天の守護者・・いや・・神王・・八神龍也・・お前の娘は預かった・・返して欲しければ、今日の17時までには5億円を用意して1人で、ベルカ自治区の外れの教会に來い・・もし来なければ・・お前の娘の・・いや・・この造られた命の身の安全は保障しない・・それが嫌なら1人で教会へ來い』

そう書かれていた・・私はその手紙を握り潰していると、なのはが

「た・・龍也さん・・落ち着いて・・」

落ち着くように言うなのはに

「私は落ち着いている・・落ち着いてるさ・・」

私がそう言うとなのはは・・

「キレてる・・龍也さんが・・完全にキレてる・・」

そう言うなのはに私は・・

「ここで時間を潰してるつもりは無い・・私は行くぞ・・」

部屋から出て行くことするとはやてが

「お金は、お金はどうするんや？」

慌てて尋ねて来るはやてに

「金はある・・・殆ど給料なぞ使ってない・・・5億くらいある」

大将という地位で金はある・・・私達の生活日を差し引いても・・・余る位なのだ・・・私がそう言って出て行こうとするとなのはが

「私も一緒に行きましょうか!・・・1人より2人の方が・・・」

一緒に行こうか?と尋ねて来るなのはに

「必要ない・・・1人で充分だ・・・金なぞの為に、ヴィヴィオ達を攫った奴らに生まれて来た事を後悔させてやる・・・」

私がそう言うとなのはは

「怒らせちゃいけない人を怒らせちゃったね・・・私知らないよ・・・あの場所・・・灰になるよ・・・」

そう呟くなのは言葉を聞きながら、私はその場所を後にした・・・

「パパ・・・来るかな?」

目の前で呟く雷華を見ながら私は

「本当に良いの?・・・こんな事して・・・龍也さんが心配するよ?」

そう尋ねると静夜がジュースを飲みながら

「判らないだろう、スバル・父上がここに来るとは限らない・
我達が必要とされて無いかも知れないだろう・」

そう呟く静夜を見ながらティアが

「はぁ・私こんな事してて良いのかな・幾ら頼まれたからって
狂言誘拐なんて・したくなかったな・」

そう今回の事態は全て・静夜達が計画した狂言誘拐なのだ・龍也
さんがここに来てくれるかどうか・自分達は本当に龍也さんに大
切に思われているのか知りたいと言う静夜達が計画した物なのだ・
その為にティアが幻覚魔法を用いて、この狂言誘拐の犯人を作った
のだ・横目で犯人役ロボットを見る・スカリエツティさんが
造った模擬戦用のロボットに幻覚魔法を重ねて犯人役に仕立て上げ
ているのだ

「強さは最高にしてあるけど・あれでも役不足だと思うけど・
大丈夫かな？」

私は不安を感じていた・私達は見た事が無いが・本気で怒った
龍也さんは超が付くほど怖いらしい・しかもトラウマになるほ
どの物らしいのだ・今回私の予想通りなら・龍也さんはここに
怒りながら登場するはず・私がそれを恐れていると・ヴィヴィ
オが

「パパ・来てくれるかな・来て欲しいな・ヴィヴィオはパパ
が大好きだもん・パパもきっとヴィヴィオの事好きだよ・ス
バル？」

不安げに尋ねて来るヴィヴィオの頭を撫でながら

「大丈夫だよ・・龍也さんはここに来るよ・・絶対に・・私が保証するよ」

そう言うとき雷華が

「そうかな・・パパは本当に来てくれるかな・・スバル・・」

不安げな雷華に

「間違いないよ・・龍也さんはここに絶対来る・・雷華が思う以上に龍也さんは雷華達の事を好きなんだよ・・」

私がそう言うとき、ティアが顔を青くさせながら

「スバル・・来たわよ・・超怖い・・私ここから逃げたい・・逃げて良い？まだ死にたくないし・・嫌われたくないし・・」

ティアがそう呟いた瞬間・・教会の壁を蹴り破りながら・・

「来たぞ・・とつとと出て来い・・屑が・・」

アタッシュケースを持ちながら言う龍也さんの纏うオーラは普段と全然違う・・燃え上がる炎の様なオーラを感じる・・その前にプログラムされたロボットが移動し

「金は持って来たか？・・それとも造られた命に出す金は惜しいか？」

そう言うのと龍也さんの纏うオーラが更に凄まじくなる・・・龍也さんはアタツシユケースを持ち上げ

「金はここだ・・・ヴィヴィオ達を返せ」

龍也さんがそう言うのとロボットが

「くく・・・確かに・・・金は受け取った・・・だが・・・造られた命は返すつもりは無いな・・・お前だって本当は要らないのだろう？・・・人間では無い物に・・・父親等と・・・メキヤツ！」「黙れ・・・それ以上・・・ヴィヴィオ達の事を造られた命と呼ぶなァッ！！！！」・・・グギヤ・・・ガガ・・・ピピツ・・・」

騎士甲冑も展開してないのに、龍也さんは凄まじい速さでロボットの懷に飛び込み、無造作に拳をロボットの胴体に叩き込み簡単に破壊した・・・破壊された事でロボットに掛けられた幻覚魔法が解除された・・・無残な残骸になったロボットを見ながら・・・龍也さんは

「スバル・・・ティアナ・・・5秒以内にヴィヴィオ達を私の前に連れて来い・・・さもなくば・・・私は2度とお前達と口を利かない・・・」

そう言う龍也さんの言葉を聞くか聞かない内に私達はヴィヴィオ達を抱き抱え・・・龍也さんの前に行った・・・

「・・・どういう・・・つもりだ・・・この茶番は・・・お前達は・・・何をしたかったんだ・・・答える・・・今すぐに・・・」

振り返らずに背中を向けたままに呟く龍也さんは正直・・・超怖い・・・出来る事なら今すぐ逃げ出したい・・・私がそんな事を考えていると・・・

・

ドゴンッ！！！

教会の壁に大穴が空く・龍也さんは壁から腕を引き抜きながら

「・言わないか・なら・お前達に直接聞こうか？・私は女子供に手を挙げるのは嫌いだ・だが・今回は違うぞ・笑って許せる・レベルじゃない・」

ゆっくりと振り返る龍也さんと目が合う・怖い・怖くて・動けない・

「ひっ・ひっ・ひっ・」

隣でティアが大粒の汗を流しながら、へたり込む・だがそれは私も同じだ・足に力が入らずその場に倒れるようにへたり込んだ・龍也さんがゆっくりと歩きながら

「私は・今まで一度だって・ヴィヴィオ達の事を造られた命などと思つた事は無い・ヴィヴィオ達は・私の・大切な・大切な娘達だ・」

ゆっくりと近付いてくる龍也さん・その怒気に当てられ・私達は呼吸する事が出来なかった・

「だから・そんな娘達を作られた命などと呼ばれるのは不快なのだよ・いい加減説明してくれないか？・この茶番の意味を・」

言うならこれが最後のチャンスだと思つた・だが私達が口を開く

事は出来なかった．．その様子を見て龍也さんは

「そうか．．教えるつもりが無いなら良い．．だが．．もう2度と．．」

この後続く言葉は判った．．2度と話しかけるな．．だ．．私達は．．2人揃って完全に龍也さんに嫌われた．．そう思った瞬間．．静夜達が龍也さんに抱き付きながら

「ごめんなさい！！ごめんなさい！！スバルとティアナは悪くないの！！ヴィヴィオ達が悪いの！！」

大粒の涙を流しながら言うヴィヴィオに龍也さんは

「ヴィヴィオ達が悪い？．．どういう意味だ．．」

少し冷静になったのか、怒気が和らぐ．．それで私達は漸く呼吸を再開できた．．私達が呼吸を整えていると．．静夜が泣きながら

「さ．．最近．．父上．．が．．遊んでくれなくて．．寂しく．．て．．ヒックツ！．．父上が本当に我達を好きなのか．．気になって．．スバルと．．ティアナに手伝って貰って．．父上の．．気持ちを知りたかったのだ．．うう．．うわあああんツ！！！」

堪えられなくなったのか大声で泣き始めた静夜達を龍也さんは抱き抱えながら

「そうか．．そんなにも静夜達は寂しかったのか．．すまない．．私は静夜達が喜ぶと思って．．学校に行けるように．．手筈を整えていたんだ．．だが．．そんなにも寂しい思いをさせていたんだな．．」

・すまない・・・」

そう謝る龍也さんは何時もと同じ優しい龍也さんに戻っていた・

「スバル、ティアナ・・・すまない・・・私の勘違いで怖い思いをさせてしまった・・・」

廃教会を出て直ぐ謝ってくる龍也さんに

「い・・・良いんですよ！！私達が悪かったんですから、ねッティア
！」

手を振りながら隣に居るティアに話しかけるとティアは

「はい、今回は私達が悪かったんです・・・すいませんでした・・・龍也さん」

頭を下げながら言うティアに龍也さんは

「いや・・・悪かったのは・・・私だ・・・静夜達の為だと思いやつていたのに、悲しませていては意味が無いだろう・・・だから今回は私が悪かったんだ・・・」

お互いに謝り合っていると、ヴィヴィオが

「パパ・・・ヴィヴィオ・・・お腹減った・・・」

お腹を擦りながら言うヴィヴィオを抱き抱え龍也さんは

「そうか・・・それじゃあご飯でも食べに行こうか・・・そうだ・・・ス

バルとティアナも来ると良い・・・お詫びになるか判らんが・・・夕食を奢ろう・・・」

そう言う龍也さんと一緒に夕食をした、私達は部屋に戻った後・・・

「龍也さん・・・怒らせると怖かったね・・・」

前に龍也さんが怒った所を見た事があったがそれ以上に今回の龍也さんは怖かった・・・だからそう言うティアは

「そうね・・・怖かった・・・私は決めたわ・・・2度と龍也さんを怒らせないって・・・」

2人でそんな話をしていると頃・・・龍也は・・・

「ごめんな・・・皆・・・もう寂しい思いはさせないからな・・・」

静夜達の頭を撫でながら寝る準備をしていた・・・ヴィヴィオ達は頭を撫でて貰うのが気持ち良い様で目を細めながら

「うん・・・約束だよ・・・パパ・・・お休み、それと大好きだよ・・・」

「約束だよ・・・パパ・・・もう寂しいのは嫌なんだ・・・」

「はい・・・私は寂しいのも悲しいのも嫌です・・・だから・・・傍に居てくださいね・・・」

「我もだ・・・父上・・・我も寂しいのは嫌だぞ・・・」

眠いのを我慢しながら、口を揃えて寂しいのは嫌だ・・・そう言うヴ

イヴィオたちに龍也は

「もちろんだ・・・もう寂しい思いはさせないから・・・安心してお休み」

そう言いながら龍也達は一緒に布団で眠りに落ちて行った・・・

一周年記念番外編 マテリアルとヴィヴィオの小さな嘘・・・ 終り

一周年記念番外編 マテリアルとヴィヴィオの小さな嘘・・・（後書き）

ヴィヴィオ達がついた小さな嘘・・・それが切っ掛けで龍也とヴィヴィオ達の絆は更に強く、太い物となりました・・・これからも・・・ヴィヴィオ達と龍也の物語を見てやってください・・・それでは今回のお話はこれにて終わりです・・・それでは次の一周年記念番外編を宜しくお願い致します

一周年記念番外編 恋する乙女の日常（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回のリクエストは「竜華零様」ではやて達が1人の時に何をしているのか？という話です・・ヒロイン候補の中で5人の乙女達の話にしたいと思います、後半3人は病んでいますのでご注意ください・・それではどうか宜しくお願いします

一周年記念番外編 恋する乙女の日常

一周年記念番外編 恋する乙女の日常

ケース1 純情銀髪少女

「・・・」

私は本を読みながら、八神の事を考えていた・

「どうするべきか・・・」

私には1つ重大な欠点があった・・・それは

「この上がり性だ・・・」

私は八神が好きだが・・・いざ話すととなると緊張して話せなくなる・

「うーこんな様では・・・八神を物にするのは無理だ・・・」

どうして私はこうも上がり性なのか・・・こんな様では八神に好きになつて貰うなど不可能・・・せめて普通に話せるようにならなくては・
・私がどうすれば良いか考えていると、クアットロが

「上がり性のチンクちゃん八神兄様と普通に話せるようになる良いアイデアがありますよ」少し・・・刺激は強いかもしれないですけど

どうどうします〜試してみますか？」

にこにこ言うクアットロに頷くと、クアットロは私の頭に手を置いて

「それでは行きますよ〜」

そう言うと同時に私の視界は闇に沈んだ・

「何だここは・・・？」

私は気が付いたら夜景の綺麗な橋の上に居た・・・私が辺りをキョロキョロと見回していると・

「どうだ？・・・チンク・・・綺麗だろう・・・？」

！！その声に驚き振り返ると八神が後ろに居た・・・私が慌てて離れようとするとその前に八神が私の手を掴んで引き寄せる

「だが・・・この夜景よりお前の方が綺麗だな」

・・・うつ・・・真顔でこんな事を言われると・・・恥かしい・・・いや・・・待てよ・・・八神はこんな事を言う男だったか・・・そんな事を考えていると八神が

「チンク・・・私はお前が好きだ・・・ずっと・・・私の傍に居て欲しい」

！！！！

「なっ・・・なっ・・・きゅっ・・・」

私は目の前が真っ赤になり意識を失った・・

ペシペシ・・

「チンクちゃんゝ起きてくださいよゝもう朝ですよゝ」

私の頬を叩くクアットロの声で私は目を覚ました、そして判ったさつきの八神はクアットロの幻覚魔法だと・・私が怒って何か言おうとするとクアットロは

「うゝん・・1番刺激が弱いのにしたんですけどねゝ純情なチンクちゃんにはこれでも駄目でしたかゝ」

そう呟くクアットロに

「さっきのは何だ?・・お前の幻だとは判ったが・・」

そう尋ねるとクアットロは笑いながら

「セツテちゃんに頼まれてゝ作ったんですよゝ八神兄様に好きだって言って貰える楽しい幻想が見たいって言われて」

セツテか・・私が脱力しているとクアットロは

「それで最初はセツテちゃんだけだったんですけどゝ今はなのとはかゝフェイトも偶に来ますよゝ」

!!・・あの2人まで・・私が驚いているとクアットロは・・後に知るがどうやらこの魔法を掛けて貰いたくて、八神の事を好きな者

が時間や日付をずらして頼みに来ることがあるらしい・

「それで、チンクちゃんはどうします？・・偶にこれで八神兄様に好きだと言ってもらって・・八神兄様に慣れますか？」

私はクアットロにそう言われ・・紅い顔を隠しながら

「も・・もう少し・・柔らかい感じの幻なら良い・・あれは・・私には刺激がありすぎる・・」

抱きしめられた感触・・八神の匂い・・その全てがリアルすぎて、私には刺激が強いと言うとクアットロは

「そうですね、それじゃあ今度はお茶をしながら八神兄様と会話出来る幻でも作りましようかね」

そう言って歩いて行くクアットロを見ながら

「これで・・もし慣れる事が出来れば・・八神と普通に話が出来るようになるかも・・」

私はそんな事を考えながら自分の部屋を後にした・・それとこれは余談だが・・チンクが頼んだ幻は割と直ぐに完成した・・龍也の会話のパターンを組み、デートや外食に行く・・等の要素も組み込んで一種の恋愛シュミレーションの様な物に仕上がった・・だが最初の方はこれでもチンクは慣れる事が出来ず・・幻の龍也と普通に話せるまでに3週間の月日を労した事をここに記す・・追記・・このシュミレーションは思いの他良く出来ており、龍也に内緒でゲームとして発売されていたりする・・

ケース2 スナイパーと売人の場合

六課の裏で・

「ヴァイス陸曹・今日は何か掘り出し物がありますか？」

私がそう尋ねるとヴァイス陸曹は

「あるよ、凄いのがでも・それを引き当てれるかはティアナの運次第だな」

そう言うヴァイス陸曹は9つの銀の袋に入った何かを私の前に置いた

「1人1個の限定の数量限定販売・旦那の隠し撮り写真・どれにする？」

そう今回私はこれを買いに来たのだ、ヴァイス陸曹が隠し撮りしている龍也さんの写真・ランダムに5枚入っていて、必ず一枚は珍しいのが入っている・2000円・かなり割高だが・それでも良い・

「今回のレア物は？」

どれくらい希少ながあるのか？と尋ねるとヴァイス陸曹は

「そうだな・3枚しか焼き増ししてない・旦那の寝ぼけた顔か・3枚ある、訓練中の真剣な顔した奴か・2枚ある、ヴィヴィオ

とかと昼寝してる奴か・・・おっ・・・そう言やあ、今回はまだきわどい奴は出てないぜ・・・しかも風呂上りのかなりきわどいやつ・・・」

リストを見ながら言うヴァイス陸曹に

「私は！きわどいのは欲しくないの！・・・私は訓練中のが良いのよ！」

私はきわどいやつは欲しくない・・・確かに少し興味はあるが・・・そんなの見てては完全に変態だ・・・だからそう言うヴァイス陸曹は

「判った、判った・・・まあそれはともかく金」

手を差し出すヴァイス陸曹にお金を渡して、1枚パックを取る

「はいありがと、言っとくけど欲しいの出なくても怒るなよ」

そう言うヴァイス陸曹に頷き離れようとすると後ろから

「・・・ヴァイス・・・とっととパックを出しなさい」

金を投げ渡しながらセツテが言うとヴァイス陸曹は

「はいはい、ほれ好きなの取れよ」

そいつって差し出されたパックの中から無造作に1つ掴み取り

「・・・！・・・こんなの・・・要らない・・・私はきわどいのが欲しいのに・・・」

バックを開けて落胆するセツテを見ながら、自分のを開ける・・・そして吹いた

「なっ・・・なっ・・・私は・・・変態じゃないのよ！こんなの要らないわよ！」

私が出したのは1枚しかないきわどいやつ・・・言ってた通りかなりきわどい・・・見えそで見えない・・・という奴だ・・・私が落胆していると

「！ティアナ・・・その写真私に寄越しなさい・・・代わりにこれを上げるわ」

セツテが私の手の中の写真を覗き込み、自分の写真と変えろと言う・・・その写真を見て

「！それは・・・」

私が狙っていた訓練中の写真・・・しかも私も一緒に写っている・・・私は自分の写真を手渡し、セツテの手から写真を奪い取る

「・・・これよ・・・これが欲しかったの・・・」

訓練中の鋭い視線の龍也さん・・・私が1番集めてるのはこの分類だ・・・私が写真を見ながら言うセツテは

「そんな物が良いとは・・・貴女の趣味を疑いますよ・・・やはり・・・この系統が一番です・・・」

セツテはきわどい系のばかり集めてる・・・特例として自分が一緒に

写っている物も集めているが・・それ以外は基本的に全て交換してしまう・・そんなセツテに限って訓練系の奴が出るから不公平だ・・だから

「煩いわね・・貴女みたいにそんなのばかり集めてる人に言われたくないわ・・」

これ以上一緒に居ると掴み合いの喧嘩になりそうなので、その前にそう言っただけでその場を後にした・・

ケース3 鉄槌の場合

「んーんふふ」

私は兄貴の人形を抱き抱えながらベッドの上にいた・・今日はお昼から兄貴と教導に行く事になっている・・これだけで教導官の資格を取って良かったと思う・・兄貴と2人きり・・と言うのがたまらない魅力だが・・

「今日は聖王教会か・・カリムに気をつけないとな・・」

カリムは兄貴に聖王教会に来いと繰り返す・・それこそストーリーカーの様に付きまとう・・兄貴も困っていて絶対1人では聖王教会には行かない・・それほどまでに兄貴はカリムが苦手なのだ・・だから

「私が確り兄貴の傍に居ないとな・・」

兄貴の人形を全力で抱きしめながら言う・・・もし私が兄貴から目を離せば・・・その隙にカリムは兄貴を監禁してでも聖王教会に残そうとするだろう・・・そんな事はさせない・・・

「兄貴は私達のなんだ・・・カリム達のも・・・なのは達のも無いんだ・・・私の・・・私達の兄貴なんだ・・・」

誰にも・・・誰にも渡さない・・・私の大切な大切な兄貴を奪おうとするのは許さない・・・私は抱き抱えた人形をベッドの上に置きながら

「・・・なんか・・・最近病んでるのか？・・・」

自分では良く判らないが・・・最近病んできてると良く言われる・・・

「はやてに似て来たのかな？」

私はそんな事を考えていた・・・私は最初兄貴が好きだった・・・最初はそれだけだった・・・だがはやてと一緒に居る内に兄貴に近づく女が嫌いに・・・そして憎たらしく思えてきた・・・はやてに引つ張られる形で私は兄貴を好きな気持ちが大きくなった・・・そして今回は

「はやてに引つ張られる形で病んで来てるのかな？」

自分では判らない・・・だがなのはに言わせると病み始めてきてるとの事・・・だが

「別に良いよな・・・それほどまでに兄貴が好きって事だよな・・・なら何にも悪い事じゃないよな・・・」

そう何にも問題ない・・・問題無いのだ・・・最近リインフォースも味方になった・・・4人なら・・・他の誰より私達が有利・・・それに自分達には妹と言う絶大なアドバンテージがある

「妹って立場は最初嫌だったけど・・・今は良いや・・・だって色々出来るし・・・」

妹という立場は考えようによっては最高のアドバンテージだ・・・最近兄貴の私達における警戒心が下がって来てる・・・私は夜勤の日以外殆ど兄貴と一緒に寝てるし・・・休暇になれば一緒に家に帰る・・・これはなのは達には出来ない事だ・・・私は管理局の制服に着替えながら

「絶対・・・誰にも兄貴は奪わせない・・・兄貴は・・・ずっと私達と一緒になんだ・・・そこに入れる隙間なんて無い・・・」

私達と兄貴の間に入れる物なんて何も無い・・・一mだって隙間は無いんだ・・・私は着替え終え兄貴に貰ったブレスレットを着け

「そうさ・・・誰にも・・・兄貴は渡さない！」

私は誰に聞かせるでもなくそう宣言し、待機状態のグラブファイゼンを拾って部屋を後にした・・・

ケース4 超病み娘の場合

「うふふ・・・新しい写真・・・」

私はティアナと交換した写真を見ながら笑っていた・・・今回も素晴らしい写真だ

「素晴らしいです・・・ジュル・・・おっと・・・涎が・・・」

写真を眺めていたら自然と出てきた涎を拭い・・・今日手に入れた写真をアルバムに貼り付ける

「・・・うふふ、ああ・・・なんと素晴らしいのでしょうか・・・この部屋は・・・」

椅子に座りながら私の部屋を見る・・・

「・・・」

あっちここに張られた龍也様の写真・・・部屋の元の壁が見えないくらいに貼り付けられた写真・・・

「ウエンディとかは悪趣味だと思いますが・・・何処がですか・・・こんなにもこの部屋は素晴らしい・・・」

ここは私だけの空間で私と龍也様に関する物しかない・・・つまりここは私と龍也様だけの空間・・・何処が悪趣味だというのだ・・・私にとって龍也様は

「神であり・・・光である・・・私の世界は龍也様が居てこそその物・・・」

そう私にとって世界とは龍也様が居てこそ色の付く物・・・龍也様が居ない世界など必要の無い物・・・

「あの1年は苦しかったですねえ・・・」

龍也様が居ない1年間・・・あれは苦しかった・・・私にとって絶対の神である龍也様が居ない・・・それだけで私の世界は色を失った・・・

「何度気が狂いそうになった事か・・・」

自分でも何度気が狂いそうになったか判らない・・・全てが憎くて・・・全てを破壊したかった・・・だが

「あの方は戻って来て下さった・・・狂わなくて良かった・・・破壊しなくて良かった・・・」

龍也様が命を掛けて救った世界・・・破壊しなくて良かった・・・もし破壊していたら龍也様に嫌われたかもしれない・・・もしそうなら・・・生きる意味を失ってしまう・・・

「私の生きる意味は龍也様に尽くす事・・・それ以外に私が生きる意味は無い・・・」

狂っていると言われようが・・・病んでると言われようが構わない・・・他人の評価など取るに足りないもの

「誰であろうと蹴落とすだけ・・・龍也様の隣は私の物・・・誰の物でもない・・・私だけの・・・私だけの物」

邪魔者が居るがそれでも良い・・・邪魔者を全て蹴落として龍也様の隣に立てた時の喜びが大きくなるのだから

「つぶつぶ・・・その時が楽しみで楽しみでしょうがないです・・・」

全てを蹴落とし・・・その時見える光景はどれほど素晴らしいだろう・

「龍也様は私の物・・・誰にも渡さない・・・」

私の世界に色をつけてくれた人・・・

私を救ってくれた人・・・

私に力をくれた人・・・

それは誰でもない龍也様・・・私は私の全てを持って貴方を愛します・
・それが間違っていると言われても・・・私は変わらないし・・・変え
れない・・・これこそが・・・私の生き方なのだから・・・

ケース5 ヤンデレ魔王の場合

「どうすりゃ兄ちゃんを私達の物に出来るかな・・・？」

仲間も増えた・・・ヴィータにシグナム・・・それにリインフォース・・・
これだけの人数で兄ちゃんに迫れば、何時かは振り向いて貰える・・・
私達だけを見てくれる様になるだろう・・・でもそれは時間を掛けれ
ばの話・・・だが私は・・・

「もう待つのは嫌や・・・直ぐにでも私の物に・・・私達の物になって
欲しい・・・」

9年待った・・・兄ちゃんから私達を物にしてくれるのを・・・でもそれも疲れた・・・、ヴィータには長期戦で行こうと言ったが・・・私はもう待ち疲れた・・・私が兄ちゃんに恋心を抱いたのは7歳の頃・・・それからただ真っ直ぐに他の人を見ずにただあの人だけを見てきた・・・なのはちゃん達より遥かに長い時間想い続けてきた・・・

「自分から迫っても良い・・・今すぐにも兄ちゃんを私の物にした
い・・・」

自分でも判る・・・私は凄まじく独占欲が強い・・・私達以外の人が兄ちゃんの傍に居るのが嫌だ・・・話すのが嫌だ・・・だから今すぐにも自分の物にしたいでも

「今はまだ待たなかん・・・今はまだその時や無いんや・・・」

自分の気持ちだけでは駄目だ・・・兄ちゃんにも心の底から愛して貰わなくては意味がない・・・

「だから待つ・・・別の世界に行く時を・・・その時が最大の好期や・・・」

兄ちゃんを狙う人が減る・・・その時こそ私の最大の好期・・・他の人が2人になる時私達は3人だ・・・1人多い私達は有利だ・・・だからその時に備えて準備をするのが絶対に必要な事だ・・・

「ただなあ・・・リインフォースは常識人やしな～自分から迫るって言っのには乗ってくれんよね・・・」

リインフォースはチンクさんに近いタイプだ、純情で自分から捕まえるのではなく捕まえて欲しい派なのだ・・・そこが私とヴィータと

違う所だ・・私達は自分から捕まえたい・・自分の傍にだけ居て欲しいという気持ち強い・・

「リインフォースも変わると良いな」私達見たいになってくれんな・・」

自分はヤンデレと言うやつだろう・・病んでてブラコン・・

「濃いよな」

普通どつちかだと思うが両方の私はかなり濃いだろう・・だがそれは私だけではない・・

「最近・・ヴィータも病んでるよな」

私に引つ張られる形でヴィータが病んで来てる・・これは自分にとってプラスだ・・

「私もヴィータも尽くす方やし・・兄ちゃんも嫌にならんよね・・」

ヤンデレには好きな人を傷つけたいという欲望を持つタイプもあるそうだが・・私は違う・・兄ちゃんを傷つけたくは無い・・

「それにこればかりは変えようが無いし・・仕方ないもんな」

自分のありようだからこれだけは変えれない・・そう思いながら自分で作った兄ちゃん人形を抱きしめる

「うふふ・・もうすぐ・・もうすぐや・・」

もう少しでスカリエツティさんの準備が出来る．．それまで待つしかないと判っているので待てる．．

「楽しみやわ．．別の世界に行くのが．．」

私はそう笑いながらベッドに横になった．．私をずっと護り続けたくれたのは誰でもない兄ちゃんや．．それだけじゃない．．私に勉強や料理を教えてくれたのも全部兄ちゃんや．．私はずっと兄ちゃんだけを見て兄ちゃんを愛してきた．．

「兄ちゃんは知らんのや．．私がどれくらい兄ちゃんを好きなのか．．」

兄ちゃんが思う以上に私は兄ちゃんが好きだ．．兄ちゃんは知らないのだ．．自分がどれ程私の心の中を締めているのかを．．

「絶対に振り向いて貰う．．ずっと一緒に居てもらう．．もう決めたんや．．これは絶対に変えない．．」

私は兄ちゃんの人形を抱きしめながら眠りに落ちた．．その日私は夢を見た．．兄ちゃんと結婚する夢だ．．私はこれが、正夢だと良いなと思った．．私を護り続けてくれた．．私の傍にずっと居てくれた．．誰にも渡さへん．．私はずっと前からそう決めていたのだから．．

一周年記念番外編 恋する乙女の日常 終り

一周年記念番外編 恋する乙女の日常（後書き）

・・・何ででしょう？後半3人が完全な病みキャラになってしまいました・・・・どうしてでしょうか？何度か書き直したんですけど・・・・やっぱりこんな流れになってしまったんですね・・・・ヤンデレが嫌いな人に少し面白くない話かもしれないです・・・・まだ一周年記念番外編は続くので、次回もどうか宜しくお願いします・・・・それとチンクのでゲームとして発売された恋愛シュミレーションってありましたよね・・・・もしこれでギャグの番外編を書ける人が居たら書いて貰えたら嬉しいなゝ等と考えています・・・・もしやつても良いという人が居ましたらメッセージを下さい、それでは失礼致します

一周年記念番外編 龍也の受難？（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回は「腰痛持ちの小学生様」からのリクエストで、龍也が女性に慣れる為の特訓の話です・・これで判りますよね今回はギャグメインの話です、どうなるか楽しみにしてくださいと嬉しいです！それでは番外編始まります

一周年記念番外編 龍也の受難？

一周年記念番外編 龍也の受難？

「放せええ！！私は・・・帰るうう！！！！」

逃げようとする龍也を

「駄目！逃がさないんだから」

メイド服のフェイトが後ろから抱きつき引き止める・・・いやそれだけではなく

「兄貴の為、何だからから逃げるなよ」

かなり短めのスカートを穿いたヴィータがフェイトと一緒に龍也を引き止める

「良い、もう良い！！もう慣れた・・・だから放せえっ！！」

それでも逃げようとする龍也・・・一体この部屋の中で何が起きているのか・・・それは30分前の事だった・・・

「特訓・・・何の？」

切っ掛けはジェイルのこの一言からだった・・・ジェイルは笑いながら

「お前は女性に対する免疫が低すぎる・そんな事では駄目だ！もつと免疫を付ける必要がある・・だから特訓なのだ！」

私達はもう直ぐ平行世界に行く事になっている・・私は良いと言ったんだが、三提督とリンディさんに押し切られ平行世界への休暇が決まった・・行くのは、ヴィヴィオにアギト、リイン、ユナ、アザレアにハーティーン&ラグナ、なのは、はやて、フェイト、ヴィータ、チンク、セツテ、ドゥーエ、スバル、ティアナ、リインフォース何だが・・見て判るとおり男は私とハーティーンのみなのだ

「皆で共同生活になるんだが・・龍也の様に免疫が低いと休暇にならないだろう・・だから特訓だ・・責めて抱きつかれても赤面しないようになるう」

その言葉に私は

「別に良い・・ガシツ！な・・何をする！？」

良いと言うとジェイルは無言で私の肩を掴み

「悪いが・・この特訓は強制だ・・お前に拒否権は無い！」

暴れるが振り解く事が出来ず・・私は引き摺られて行った・・

「それでは特訓開始」

楽しみに言うジェイルは私を1つの部屋の中に押し込んだ

「ちょっと・・待て・・何の特訓をしろと言うんだ！」

私が閉まった扉越しに訪ねるとジェイルは

「くつくく・・・すぐに判るよ・・・どうなるか楽しみだ」

そう言うとジェイルの足音が遠ざかっていく・・・私はその足音を聞きながら

「どうしろと言った？・・・こんな部屋で・・・？」

あるのは椅子と机のみと言う部屋で何をしろと言った・・・私が首を傾げていると

「それは・・・こういう事だよ！」

ギューウツッ！！後ろから誰かに抱きつかれる・・・私が驚きながら振り返るとそこには・・・

「フェ・・・フェイト！？・・・何だその格好は！？」

メイド服と言うのだろうか？白いレースがついた服で私に抱きつくフェイトに

「は・・・離れる・・・」

背中に当たる柔らかい感触に赤面しながら言うと、フェイトは

「駄目だよ！これは龍也の特訓なんだもん・・・早く女の人に慣れてよ！」

にこにこと笑ってそう言うフェイトを振り解こうとしていると

「へへー兄貴」

反対側からヴィータに抱きつかれる・・普段なら赤面などはしないのだが・・

「ヴィ・・ヴィータ!!・・何だその短いスカートは!？」

膝丈より更に短いスカートを穿いているヴィータに尋ねると

「これ?・・これは制服だぜ?・・ほら私達学校に行くだろう?・・その学校の制服と同じくらいのスカートを用意したんだよ」

そう笑うヴィータ・・私の方が背が高いからスカートから見える、白い足に私が困惑してると

「私もいますよ?」

スバルとティアナも姿を見せる・・2人ともヴィータと同じスカートを穿いている・・スバルは赤面してるが、ティアナはけろっとした顔をしていた・・私が呆然しているとティアナがヴィータとフェイトを見て

「・・ずるいですよ・・私も!」

ギョウウツ!!!

横から凄まじい力で抱きついてくるティアナに

「!?!?」

目を白黒させているとスバルが

「えっと・・・これ・・・そう龍也さんの為なんです!・・・決して疚しい気持ちがあるわけじゃないんですよ!」

ティアナの反対側から抱きついてくるスバル・・・

(何だこれは!?!・・・何の意味があるんだ!?)

そう言いたかったが・・・言う事が出来なかった・・・4人分の柔らかい感触とか・・・女性特有の甘い匂いで私は完全に混乱してしまった・・・私が赤面して停止しているとヴィータがにや〜と笑いながら

「えへへー、兄貴」

今まで胸の辺りに抱きついていたヴィータが、私の肩を掴んで自分の身体を持ち上げる・・・そして私の目の前にヴィータの顔がドアップになる

「!?!?」

突然の事に驚くとヴィータは悪戯っぽく笑い

「えへへー兄貴大好きッ!」

頬に唇が押し当てられる、私が驚いていると・・・それを見ていたフエイト達は

「何してるの！ずるいよヴィータ！！」

ずるいと怒鳴るフェイトにヴィータは

「ずるくないもんな」私知ってんだぜ？・・・お前達が・・・兄貴のか・
・もがもがつ！」

何かを言い掛けたヴィータの口を慌ててフェイトが塞ぐ・そのやりとりをぼんやりと見ていた私は

（このままこんな事が続くのか・・・そうなる前に逃げよう・・・）

私が逃げようとするヴィータとフェイトが気付き、抱きとめてくる

「放せええ！！私は・・・帰るうう！！！！」

私はその柔らかい感触から逃れるように手を振って逃げようとするが

「駄目」逃がさないんだから」

メイド服のフェイトが後ろから抱きつき引き止める・・・いやそれだけではなく

「兄貴の為、何だからから逃げるなよ」

かなり短めのスカートを穿いたヴィータがフェイトと一緒に私を引き止める

「良い、もう良い！！もう慣れた・・・だから放せえつ！！」

それでも逃げようとする私に

「スバル・そっち！時間制限があるんだから・・こんなので時間をロスしたくない！」

「判ってるよ！」

スバルとティアナが私の服を掴む・・4人の力で引っ張られた私は耐える事が出来ず

「う・・おおお！？」

倒れながら部屋の中に戻された・・どうやらこの天国のような地獄はまだ続くらしい・・

「あはは・・やっぱり兄ちゃんまったく動かへんで」

私はモニターを見ながら笑っていた、兄ちゃんの特訓と言うのは建前で私達が楽しむ物なのだ・・お互いに条件を出し合い、どんなアプローチを掛けても絶対に怒らないや、抜け駆けや押し倒したりしないという条件の中で今回の計画は実行された

「・・私はやはり・・このままで良い・・」

何時もと同じ格好で呟くチンクさんに

「良いの？折角可愛い服が一杯あるのに？」

私が尋ねるとチンクさんは

「い・・いくら・・可愛いくてもな・・急に着るのは恥かしいんだ！」

顔を真っ赤にしながら言うチンクさんを見ると、衣装部屋から

「じゃーん・・猫耳メイド〜」

猫耳を身に付けメイド服を身に纏ったのはちゃんが出てくる、私はそれを見ながら

「ちよつと・・スカート短くないか？」

ヴィータ達より更に短いスカートを指差しながら言う

「うーん・・そうかな?・・でもほら・・結構ミニスカートに困惑してるみたいだから良いんじゃない?」

なのはちゃんがモニターを見ながら言う・・確かに今兄ちゃんはミニスカートを穿いたスバル達に苦戦している・・有効なのかもしれない

「そついうはやてちゃんはそれで良いの?」

私の服を指差しながら言うのはちゃんに

「うん、これで良いんよ」

白の身体にフィットするワンピース・・これで良い・・白と言っの

は純白なイメージがあるからだ、私がそう思っていると

「色気を出せない貧相な身体ですからね。貴女は・・・」

にや〜と笑いながら言うセツテは自分の抜群のスタイルを活かす、露出が多い服を着ていた・・・私はその服を見ながら

「そんな服着てたら露出狂だと思われるで」

親切のつもりで言うとセツテは

「良いんですこれで・・・龍様は男やはり露出が多いほうが良いのです」

そう言うセツテに何を言っても無駄と判断し、私は交代の時間を待った・・・

「はあ・・・楽しかった〜」

フェイトちゃん達が楽しそうに笑いながら戻ってくる、私達はフェイトちゃん達と入れ違いで兄ちゃんの居る部屋に向かった・・・うふふ・・・どうなるか楽しみやわ・・・

「・・・まだ続くのか・・・」

私は部屋の中に1人座りながら呟いた・・・フェイト達もう終わりだからと言って出て行こうとしたので、私も出ようとしたが

「兄貴駄目だぜ、まだはやて達が残ってるんだから」

そう言うヴィータに押し戻された、はやて達が居ない事を疑問に感じていたが、どうやら順番に来るらしい・私がそんな事を考えていると、部屋の扉が開き、はやて達が入ってくる・

（ほっ・はやてとチンクは普通か・）

先頭のはやてとチンクが普通の格好をしているので一安心した・さっきのミニスカートのスバル達で大分精神を擦り減らしたからだ・幾ら女性に弱いとは言え、私も男である事には違いは無い、業と胸を押し当ててくるヴィータやフェイト達・幾らなんでも意識してしまうからだ・私がそんな事を考えていると、なのはとセツテが入って来て私は

「な・ななななな・何だその格好は!？」

「にゃー、龍也さん猫耳メイドですにゃー」

かなり短めのスカートに猫耳と猫の尻尾を着け、赤面しながらにゃーと言う語尾を付けるのは

「どうでしょう? 龍也様・ドキドキしますか?」

かなり露出の激しい服装のセツテ・とんでもない格好の2人に困惑してると

「失礼しますにゃあー」

「失礼しますね」

なのはとセツテが私の隣に座り腕を抱え込む・腕に感じる柔らかい感触に私が赤面してるとはやてが

「んー2人だけってのはずるいよな」

そう笑いながら私の膝に座り、私の胸元に頭を置いて

「んー兄ちゃんの匂い・安心する・」

目を細め笑うはやてに私が完全に停止すると・後ろから

「や・八神・その・私もだな・その・あれだ・八神と一緒に居ると安心する・」

チンクが耳まで真っ赤になりながらそう言って抱き付いてくる・私は再び4人分の柔らかい感触と甘い匂いに完全に思考が停止してしまった・暫く私が停止しているとセツテが

「・気絶・いえ・この状況から逃れる為の思考停止ですか・フェイト達は抱きついてるだけで満足そうでしたが・私は違いますよ」

そう言ってセツテは私の腕を放し、はやてに

「そこをどきなさい、貴女だけ良い思いをするのは我慢できません・」

はやてに退けと言うがはやては

「嫌や、兄ちゃんの膝の上は私のや」

両腕を私の首に絡めて嫌だと言うはやてにセツテは額に青筋を浮かべながら

「・・・そうですか・・・そう来るのですね・・・ならば・・・無理やりにもー!!」

セツテがはやてを引き離そうとしてはやての服を引っ張るが、はやては両手を私の背中に回して全力で抱きついてきてそれを防ぐ・・・2人のやり取りを見ていた、なのはとチンクが

「はやてちゃん！セツテに譲ってあげてよ・・・」

そう言うのはと

「セツテ！あんまり我俣を言うな！」

チンクがセツテを怒鳴るが、2人はそれを完全に無視し攻防を続ける・・・2人が余りに暴れる物だから・・・

グラァ・・・座っていた椅子が後ろに向かってひっくり返る

「おお!?!」

「つきゃあー!!」

「くっ・・・」

「退きなさい豆狸!!」

「嫌や!!」

暴れ回るはやてとセツテをそのままに私達は後ろへと投げ出された

「痛たた・・!!」

私が頭を振りながら起き上がりうとして眼を見開いた・・チンクが私の前に座り込んでいて・・その・・スカートの中身の白い物が丸見えだった・・

「・・!!つ・・見たなッ・・」

私の視線に気づいたのかスカートを手で押さえながら涙目で言うチンクに

「見てない・・見てない!!・・私は見てないぞ!!」

慌てて手を振りながら言うチンクは赤面しながら立ち上がり・・

「その顔を見れば・・判る!見たんだな・・」

涙目で言うチンクの剣幕に押され頷くと

「／／／／かああ・・／／／／」

チンクは耳まで真っ赤にし・・

「っ・・八神の馬鹿ッー!!見たなら見たとはつきり言え!遠まわしに言われる方が傷つくんだぞ!!!!」

そう言うときンクは私の服の襟を掴んで

「私はな！お前が好きなんだよ！！だからなパンツを見られるくらいはどうでもない！．．だがな．．そういう反応は傷つくんだよ！．．だから．．これは罰だ」

そう言うときンクは掴んでいた襟を自分の方に引き寄せた．．

「！？！？」

チンクの顔がドアップになり私が驚くとチンクは自分の唇を頬に押し当てて来た．．

「！！．．な．．なにを．．」

キスされた右頬を押さえながら尋ねると

「言っただろう．．罰だと．．」

赤面しながら言うチンクはそう言うとき振り返り

「良いか忘れるなよ．．私はお前が好きだ．．今回ののはその証明だ．．」

そう言うときンクは凄まじい速さで走り去ってしまった．．私が右頬を押さえてると、部屋の真ん中から

「セツテもはやてちゃんも落ち着いて！！」

「この豆狸が!!」

「病み娘が!!」

お互いに罵りあいながら、掴み合いをしているセツテとはやてをなのはが引き離そうとしているが結果は芳しくないようだった・・私も止めるのに協力しようとした時・・それは起きた・・

ビリリリッ!! × 3

「へっ!?!」

3人の服が同時に破ける・・3人とも服の正面の布が破け下着が丸見えになってしまった・・私は止めようとして立ち上がった所であり・・正面からそれを見てしまった・・白、青、オレンジの下着を直視してしまった私の脳は処理できる限界を簡単に越え

「きゅう・・」

目を回してひっくり返ってしまった・・

次の日・・

「えへへ・・昨日は楽しかったな」

えへへとだらしない顔で笑っているフェイトちゃんを見ながら

「フェイトちゃん達は良かったなあ・・私達は楽しかったけど・・

最後にハプニングが合ったでな・・」

私となのはちゃんとセツテは下着を兄ちゃんにダイレクトに見せてしまい、恥かしかった・・着替えてから気絶してる兄ちゃんを部屋に戻したのだ・・もう少し慌てふためく見たかったので残念だった・・そんな中赤面しながらチンクさんが

「・・ぶつぶつ・・昨日は勢いに任せてキスしてしまったが・・くうっ・・恥かしい・・」

赤面しながらぶつぶつ言うチンクさんを見てチンクさんは純情なんだな・・と私が思っていると

「そういえば龍也さんまだ来てないですね？」

朝食の時間なのに姿を見せない兄ちゃんに首を傾げるのはちゃんに

「恥かしいんじゃないですか？・・龍也さん初心だから・・」

そういうティアナに頷いてるとヴィヴィオが

「はやてねね！！パパが・・パパがつ！！」

手紙を持って慌てて走ってきたヴィヴィオから手紙を受け取り中身を見るそこには

『暫く探さないで下さい・・ 八神龍也・・』

一言それだけ書かれていた・・それを見た私達は

「『兄ちゃん、龍也さん、兄貴、八神、龍也様が家出したアアアッ！』」

私達は声を揃えてそう絶叫した・・・はやて達が絶叫してる頃・・・龍也は管理局本局に居た

「龍也・・・気にしすぎよ・・・」

ミゼット提督に言われた私は・・・

「私は一瞬・・・はやて達を自分の物にしたいと思ってしまいました・・・駄目なんです・・・私はゴミです・・・生きてる価値も無いです・・・」

私は一瞬・・・そう一瞬だけ・・・はやて達を自分の物にしたいと思ってしまった・・・だからゴミだ・・・生きてる価値も無いと呟いてると

「かあ！情けないのう龍也・・・お前も男なら纏めて面倒見るくらい言えんのか！・・・ワシならそうするぞ！！皆纏めて愛してやるわ！」

ラルゴ元帥にそう言われた私は

「私は！妹と！その幼馴染に！親友の娘に！・・・そういう感情を持つてしまったんです！！だから・・・もう駄目です・・・屑です・・・生きてる価値も無いんです・・・」

自責の念に駆られた私がそう呟くと

「ふーむ・・・龍也は生真面目じゃからの～そう言う気持ちを抱いた自分が許せんのかな・・・うむうむ・・・判るぞ・・・」

肩を叩きながら言うレオーネ提督は私の目に手を当てて

「良いかの～龍也・・・お前が感じたのは唯の気の迷いじゃ、お前は自分の妹に邪な感情を抱くような男ではないのはワシがよう判つとる・・・だからの～速くはやて達の所へ戻ってやれ・・・きつと心配したるでな」

そう笑いながら言われ私はソファから立ち上がり

「?・・・私は何を悩んでたんだ?」

何かについて悩んでいたと思うのだが・・・それが何か思い出せず首を傾げていると・・・レオーネ提督が

「龍也、用事はもう済んだでな・・・帰ってくれて構わんぞ」

そう言われ私は思い出せない内容に首を傾げながら

「そうですか・・・それでは失礼致します」

私はそう頭を下げて、ミゼット提督達の部屋を後にした・・・

「レオーネ・・・お前・・・龍也の意識に催眠を掛けたな?」

ラルゴにそう言われワシは

「ほっほっ・・確かにのうゝワシは催眠を掛けたぞ」

自分のやった事を認めるとミゼットが

「どうして？龍也の事を想ってる娘達の邪魔をするの？」

そう尋ねるミゼットに笑いながら

「邪魔はしとらんわい、ワシがやったのは一時的な意識の封印じゃ、何かトリガーがあれば簡単に解除できるわい」

つまり今ワシが掛けたのは本当に一時的な催眠で切っ掛けさえあれば簡単に解除できる、もうすぐ平行世界に行くと云うのにギクシャクした状態で行って貰っては意味が無い

「そう・・例えば・・キスされるとか・・そういうトリガーで簡単に催眠は解除される・・その後で龍也にドギマギして貰うと楽しいじゃろ？」

平行世界で逃げ場が無い所で解除されれば面白いことになるのは目に見えている

「ほっほ・・はやてとか龍也にキスしそうな者が居るからのうゝそうなれば良い加減龍也も誰かとくつつくじゃろ？」

ワシとしては早く龍也が結婚する所を見たい、だから邪魔する訳が無い

「成る程、レオーネ・・・良く考えてるわね」

「そうじゃの！ほっほっ・・・お前の言うとおりじゃわい」

にこにこと笑うミゼットとラルゴを見ながら

「ほっほ・・・昨日の出来事は忘れてるじゃろうが、龍也の中には確
実にはやて達を想う気持ちが生えた筈じゃ・・・それで良いじゃろ
う」

龍也は鈍感じゃからの・・・誰かが背を押さねば、きつと自分の幸せ
など考えんじやろう・・・だから今回はワシが背を押そう・・・それで
龍也が幸せになり笑ってる光景を生きてる内に見たいもんじやのう

龍也が知らない所で龍也を追い詰める者達が増えた瞬間だった・・・

一周年記念番外編 龍也の受難？ 終り

一周年記念番外編 龍也の受難？（後書き）

どうでしたか？三提督は龍也とはやて達の恋愛が成就する事を願ってるわけです！第二部・・そしてキスというキーワード・・ネギまを知ってる人なら、私の考えが判ると思います、それでは第二部でどうなるのか楽しみにしてくれると嬉しいです！！それでは失礼致します

一周年記念番外編 天雷の騎士達の日常・・・（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回はリクエストの番外編ではなく普通の番外編です、テーマは本編では僅かに出番しかなく、尚且つ番外編でも余り出番の無い、天雷の3騎士「アイギナ」「クレア」「シャルナ」の3名がメインの話です！普段彼女達がどういう生活してるのか？気になった人は多くないでしょうか？・・・もしそうなら嬉しいのですが・・・それでは番外編始まります

一周年記念番外編 天雷の騎士達の日常・

一周年記念番外編 天雷の騎士達の日常・

「朝ですか・・起きるとしましうか・・」

私はそう呟きベッドから上半身を起こした・・時間は4時30分・・王が起きるまでジャスト30分・・何時も通りの時間に起きた事に1人納得していると・・もぞもぞと布団が動き、アイギナとシャルナも起きだす・・2人の目が合う・・それと同時に

「「はあっ!!」」

2人同時に拳を繰り出す・・お互いに力比べをしながら

「今日は私が王を起こしに行くッ!!」

「黙りなさい・・アイギナ・・王を起こすのは私です!!」

お互いに自分が起こしに行く!と言っている2人を見ながら

（やれやれ・・あの2人は何時も通りですね・・では私は朝食の準備でもしに行きましょうか・・）

喧嘩している2人を見ながら私は部屋を抜け出した

トン!トン!!

野菜を切り鍋の中に入れ、暫く煮た所で味噌を加える・・・それから蓋をして煮詰める

「さてと・・・次は玉子焼きでもしますか・・・」

卵を割りボウルに入れる・・・味付けの段階で

「ふーむ・・・甘めか出汁を効かせるか・・・迷いますね・・・」

王はどちらも食べるが今日の好みはどちらだろうか？

「そう言えば・・・昨晚はヴィータが泊まりに来てましたね・・・では甘い方にしましょうか・・・」

ヴィータが居るなら甘い方が良さだろう・・・そう思いボウルに砂糖を入れた甘い玉子焼きを作る・・・6人分焼いた所で・・・

「クレア、おはよう・・・ヴィータいい加減離れろ」

「やーだッ!」

「クレアッ!!おはよう!」

王の心なしが少し疲れた声と楽しそうなヴィータの声がする・・・私が振り返ると、私の予想通りヴィータが王の背中にしがみつきながら笑っており、ヴィヴィオが王の手を握りながら手を振る

「ほら・・・もう朝ご飯だから離れろ」

王が繰り返す言うつとヴィータは渋々といった表情で離れる・・・うん・
・何時も通りの朝だ・・・私が微笑んでいると

「くうう・・・お前の所為で王の目覚めに間に合わなかったではないか・・・」

「・・・それはこっちの台詞です・・・」

酷く疲れた様子のアイギナとシャルナが入ってくる・・・どうやら結局決着つかずで王が起きるまで争っていたようだ・・・私は2人に呆れながら朝食を机の上に並べた・・・

ううー順番なのに・・・どうしてああ・・・シャルナは強情なんだ・・・私は玉子焼きを食べながらそんな事を考えていた・・・私達は基本ローションでその日の行動を決めている・・・のだが・・・シャルナはそれを護ろうとしない・・・だから毎朝こんな攻防をしなければならぬ・・・速く決着が付けば良いが、中々決着が付かず王が起きてしまふ事の方が多いのだ・・・そんな事を考えながら正面を見ると

「あーん」

にこにこと笑うヴィヴィオ様の口に微笑みながら玉子焼きを運ぶ王を見る・・・何時もの光景でとても心が和む・・・私がそんな事を考えていると王が

「どうしたアイギナ？食事が進んでないようだが・・・調子でも悪いのか？」

しまった・・・王の事を見ていて食事の手が完全に止まっていた・・・
私は

「だ・・・大丈夫です！私は元気ですから！」

慌てながら言うと王は

「そうか？・・・調子が悪いなら悪いと言ってくれよ？」

そう言いながら食事を進める王に一安心し

（ふー・・・焦った・・・しかしやはり王はお優しい・・・私の事もちゃんと心配してくれている・・・）

プログラムである、私達の事も普通の人間の様に扱ってくれる王の優しさを感じながら、私は食事を進めた・・・

朝食後・・・

「・・・掃除でもするか・・・」

王達が仕事に行く準備をしている間に家の周りの掃除を始める

「中々・・・楽しいな・・・」

自分が掃いた所が綺麗になっていくのを見て楽しいと考えていると

「あ、アイギナさんおはようございます」

穏やかに笑いながら頭を下げる、なのは姿が見える・私は箒を1度壁に立てかけて

「なのはか・どうした？まだ王の出掛ける時間ではないはずだが？」

時計を見ながら尋ねるとなのはは笑いながら

「そうなんですけどね・ちょっと用事でこの近くまで来たんで・龍也さんと一緒に六課に行こうと思って・」

そう笑うなのはに私は

（嘘だな・用事と言うがこんな朝早くからある訳も無い・夜勤空けにも見えない・王と一緒に居たいから来たんだな・）

王は非常に良くモテル・私が知る限り14人の女性に想われている、それも全て王の優しさと人徳からだろう・私がそんな事を考えていると

「・その細い目は何ですか・？」

そう尋ねて来るなのはに

「別に・だが・朝早くから押し掛けるのは・印象だと思っが？」

ゴミを掃きながら言うとなのはは

「・・そう・思います？」

涙目で尋ねて来るなのはに

「そう思っな・私としては仕事先で出迎えた方が好印象だと思うぞ？」

落ち葉などを掃きながら言うとなのはは

「私がここに來た事言わないでくれます？」

そう尋ねて来るのはに

「さて・何の事かな？・ここには誰も來なかつたし、私は誰とも話してないぞ？」

そう言うとなのはは頭を下げた・私は走り去るなのはの後姿を見ながら

「王を支えられるのは・案外あいうタイプなのかもな・」

無茶をする王を支えられるのはなのは様な芯の強い女なのかもな・天雷の騎士達はそれぞれ龍也に相応しいのは？と言うのを考えている、アイギナはなのはとフェイトで、クレアはヴィータというか八神家全体、シャルナは・何だかんだ言ってるがナンバーズを押していたりする・私が掃除を続けていると

「アイギナ・私達はそろそろ出掛ける・後は任せるぞ？」

制服に身を包んだ、王とヴィータにシャルナが玄関から出てくる、私は掃除の手を休め

「はい、お任せください・お氣をつけて」

そう見送り、私は掃除を再開したが・

（どうして今日に限ってシャルナの番なんだ・納得いかん・）

今日は私が王を起こしに行き、シャルナが付き添い、クレアが食事の準備の筈なのに・私は王を起こしに行けなかった・その事が納得できず・

（シャルナめ・1度決着を付けてくれる・）

どうやらもう1組の炎と氷の相性は良くないようです・

「!・」

私は王の後ろを歩いていて感じた妙な気配に立ち止まる・これは

（アイギナですか・まったく・しつこいですね・）

この感じはアイギナがまた決着を付けてくれるとか・考えてる時の物に良く似ている・私達は同じ目的、同じ人を護る為に一緒に居るが・正直仲はそれほど良くない・クレアは私の邪魔をしないから仲が良いが・アイギナとはどうしても馬が合わないのだが

（こんな事は王には言えませんし・自分で解決するしかないですね・）

王は私達の事を仲良しだと思っている・・・それは単純な理由で王の前で喧嘩するほど私達は馬鹿ではない・・・だから仲の良い振りをしているのだ・・・私がそんな事を考えていると

「シャルナ？どうした行くぞ？」

エスカレータの上から声を掛けてくる王に

「すみません、少し考え事をしてました・・・今行きますね・・・」

私はそう返事を返しエスカレータに乗った・・・私は王の元へ行きながら

（・・・決着を付けるのはこっちの言い分ですよ・・・アイギナ・・・）

自分と相性が悪い炎の事を考えていた・・・

「今日の予定は？」

執務室で尋ねて来る王に私は手元のスケジュール表を見ながら

「午前中は、FW陣の訓練と書類仕事・・・午後からは本局でレジアス中将とこれからの事についての話し合い・・・それが終わったら今日の報告書に目を通してください」

今日の予定を読み上げると、王は天雷の書を手に取り

「判った・・・では先に訓練を見てくる・・・暫く待っててくれ」

そういつて執務室を出て行く王の後姿を見ながら

（今日はツイてないですね・・・殆ど付き添い出来ないではないですか・・・）

本局に行く時は私は付き添い出来ないし・・・訓練を見る事も出来ないの・・・その間は執務室に待機となる・・・

「アイギナの邪魔をしたからでしょうか・・・因果応報とも言いますし・・・今度は邪魔をしないでおきましょうか・・・」

今日アイギナの邪魔をしたからそのしっぺ返しが来たのだと思い、暫く本を読んで暇を潰していると・・・

「何だ、シャルナ居たのか？」

チンクが入って来て、驚いたという表情で尋ねて来る私は読んでいた本を閉じながら

「そう言うチンクはどうしたのです・・・王はここには居ませんよ？」

この時間なら本局に居る筈だと思いそう言つとチンクは

「判つてる、八神に提出した報告書で間違いがあったからそれを訂正しておこうと思つたんだ・・・」

王の机の上を探して、目当ての書類を見つけたチンクは胸ポケットからボールペンを取り出し、すぐに訂正をし

「さてと・・・やる事は済んだ・・・私は戻る・・・」

戻ると言うチンクに

「そうですか・・・王には来た事を黙って置きますから」

そう言うチンクは頭を下げ

「ありがとう、シャルナ・・・」

戻っていくチンクを見ながら、私は王の部屋に置いてあった料理の本を開きながら

「明日の朝食はどうしましょうかね・・・」

私は明日食事当番だ・・・だから何にするか考えながらページを捲り

「ふむ・・・これで行きましょうかね？」

私はオムレツを作ると決め、チンクが来るまで読んでいた本を再び読み始めた・・・そして日が暮れかけた時間帯に王が戻ってくる・・・王は肩に手を置きながら

「レジアスめ・・・騙したな・・・雑誌の記者が居るなんて聞いてないぞ・・・」

恨めしそうに言う王に

「肩を揉みましようか？」

お茶を置きながら尋ねると、王は

「すまん・・・頼む・・・」

王の肩を揉みながら

「記者が居たのですか？」

そう尋ねると王は

「ああ・・・何でもこれからの復興についての私とレジアスの対談を取材したかったそうだ・・・」

クラナガンの一部は現在立ち入り禁止となっている、ネクロの生き残りが居る可能性が有るからだ・・・だからその復興の目処を取材したかったのだろう・・・そんな事を考えながら肩を揉んでいると王が

「・・・もう良い・・・ありがとう・・・大分楽になった」

そう笑う王に

「お気になさらず、それでは戻りましょうか？」

仕事はもう終ったはずだから戻りましょうか？と尋ねると王は

「・・・そうだな・・・今から帰れば・・・ヴィヴィオと夕食が出来るな・・・よし戻るか・・・」

そう言って立ち上がる王の後ろを歩いていると

「お兄様〜リインも一緒に帰るです〜」

肩に飛び乗る小さな妖精・王の家族の1人・融合騎のリインだ・
・王の事をお兄様と呼び、慕っている・可愛らしく見ていて和む
ので嫌いではない・

「リインも上がりか？・では一緒に帰ろうか・」

そう笑う王と一緒に私達は家に戻った・

「パパー！！お帰り〜」

突進してくるヴィヴィオを抱き抱え

「ただいま、ヴィヴィオ」

にこにこ笑うヴィヴィオの頭を撫でながら笑っている王の前にクレアが来て

「お帰りなさい、王・お風呂にお湯が入っているのでどうぞ、その間に夕食の準備をしますから」

そう笑うクレアに頷き、お風呂場に歩いて行く王の後姿を見ながら、私は夕食の準備を手伝う為にキッチンに向かった・

「シャルナ、これを机の上においてください」

チーズと野菜のサラダの入ったボウルを受け取っていると、

「んふふ〜お風呂気持ちよかった〜」

「リインもです」

にこにこと笑いながら戻ってくるヴィヴィオとリインの後ろから

「ふう、仕事の後の風呂は良いな」

髪を拭きながら歩いてくる王にアイギナが

「夕食の準備が出来ましたので、どうぞ」

椅子に座るように促す、私は王達にジュースを注ぎ

「どうぞ」

笑いながら手渡すと

「ありがとうございます」

「ありがとうございますです」

笑いながら受け取るヴィヴィオとリインに

「すまないな・・・」

謝ってから受け取る王に頭を下げてからキッチンに並べられた料理を取りに行く、本来なら王と一緒に食事を摂る等恐れ多いのだが・・・王の意向で一緒に食事を摂る様にしている・・・食事を終え部屋に戻って行った王を見送ってから、私は風呂に入り汗を流しパジャマに着替え

3人の部屋に戻る・・・ベッドに座りながら瞑想しているアイギナに

「アイギナ・・・今日はすいませんでした」

向かい合う様に座り謝ると瞑想していたアイギナは目を開き

「お前としては珍しい・・・どういっつもりだ？」

そう尋ねて来るアイギナに

「いえ・・・やはり順番を決めてるのですから・・・その通りに動いた
ほうが良いと思うんです・・・ですから、すいませんでした・・・」

今日の事を謝るとアイギナは布団を被りながら

「お前がそういう事を反省するだけ救いがあるな・・・今度から気を
つける」

そう言つて眠りに付くアイギナを見ながら

「私も寝ますか・・・」

そう呟き私も眠りに落ちた・・・また明日・・・王の為に力を使うこと
が出来る、幸福を感じながら・・・

一周年記念番外編 天雷の騎士達の日常・・・ 終り

一周年記念番外編 天雷の騎士達の日常・・・（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！どうでしたか？アイギナ達の日常は？・
・アイギナとシャルナのコンビとそれを見るクレア・・・三者三様の
性格と行動パターン・・・面白かったでしょうか？普段はあまりスポ
ツトの当たらない、アイギナ達の日常は・・・少し書きにくかった
物の書いて面白かったです、番外編ではマテリアルズで主に登場
するアイギナ達ですが・・・もっとアイギナ達が見たいな～と言
う人がいましたら感想に一言ください、もう少し活躍の場を広げた
いと思うので！それでは次回の更新もどうか宜しくお願いします

一周年記念番外編 幸せ？の形（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回の一周年記念の番外編は「姫と黒き守護者 結婚式編」の続きと言いますか・・ブーケを受け取ってしまった、龍也がどうなったか？という話です！中々面白いと思うので今回もどうか宜しくお願いします！

一周年記念番外編 幸せ？の形

一周年記念番外編 幸せ？の形

「私が何をしたあああつ！？」

私は凄まじい形相で追ってくる者達の気配を感じながら、そう絶叫した。・元を正せば私が悪いのだろう・ブーケを受け取ってしまったのだから・だからと言って、ここまで追いかけて来なくても良いではないか・私がそんな事を考えていると・

「てやああああつ！」

「でやああああつ！」

スバルとノーヴェがウィングロードとエアライナーで飛び出してくる

「魔法まで使わなくても良いだろう！？」

高速で迫ってくるスバルとノーヴェに言う

「魔法でなんでも使いますよ！、こうでもしないと捕まえないじゃないですか！」

「普段はこういうのは嫌だけど・今回だけは特別だ！」

律儀に返事を返すスバルとノーヴェの腕を回避しながら

「だから、ブーケを返すと言ってるだろう!!」

左手で持っているブーケを返すと言つとティアナがウィングロードの上を走りながら

「返してくれなくて良いですよ、でもブーケトスの意味は知ってますよね？」

そう言うティアナの横を走りながらなのはが

「ブーケを受け取った人が次に結婚出来るんです・・・だから次に結婚するのは龍也さんですよ・・・誰と結婚したいのか教えてください!!!ティアナ邪魔っ!!!」

ティアナとなのはの攻防に目を取られた一瞬・・・

「うふふ・・・捕まえました・・・」

背中に重みを感じ振り返ると

「あはは・・・遅しい背中・・・うふふ・・・」

単色の瞳で私の背中に頭を擦り付けるセツテが居た

「!?!?!?」

その突然の事に驚き若干スピードが落ちる・・・すると・・・

「「「「へっ!?!?きゃあああっ!!!」」」」

高速で走っていたスバル達が私が急に見えなくなった事で一瞬後ろを向いた瞬間

ドーンッ！！

道路に掛かっていた看板にぶつかり、ひっくり返る・私は背中にしがみ付いたままのセツテを振り解こうと手を振り回しながら・

（あれは・痛そうだったな・冷静になったら回復魔法でも掛けてやろう・）

そんな事を考えながら振りほどこうともがいてっているとセツテが

「うふふ・そんなに恥かしがらなくても良いではないですかあ・
龍也様・ふっ・」

恍惚とした声で呟き、私の耳に息を吹きかけるセツテに

（だから・セツテは苦手なんだ！・誰か助けてくれ）

この際追いかけてくる面々で良い、誰かセツテを引き離してくれ・
私がそんな事を考えていると

「この痴女があっ！！龍也から離れる！」

フェイトが力付くでセツテを引き離しそのまま

「ていつ！」

ドスッ！！！！

セツテの鳩尾に拳を叩き込む・セツテは目を白黒させながら

「こ・・・の・・・女狐が・・・」

そう言い残しぐったりするセツテを道路の脇に置いたフェイトはゆっくり振り返る・そして目が合う

「・・・龍也あ・・・」

単色の眼で獲物を見るような視線のフェイトに

「ぞくつ・・・」

強烈な寒気を感じ私が後ろにゆっくりと移動しようとする・・・

「うふふ・・・逃げないでよ・・・何も痛い事とか酷い事をしたい訳じゃないの・・・」

黒いオーラを纏いながら近寄ってくるフェイトはうふふ・・・と笑いながら

「唯ね・・・いい加減龍也の気持ちを知りたいの・・・」

前髪が垂れて表情を窺うことが出来ない・・・その凄まじい圧力に私が動けずにいると

「私はね・・・龍也が好き・・・この世界で誰よりも・・・だから・・・教えてよ・・・龍也がどう思ってるのか？」

フェイトが私の前に立ち、両手で私の顔を掴もうとした所で・

「！！」

フェイトが伸ばしかけた手を戻し、後ろに跳ぶ・その直後にフェイトが居た場所にレヴァンティンが振り下ろされる・レヴァンティンの持ち主・シグナムはフェイトを睨みながら

「兄上の気持ちも考えず・自分の気持ちだけを優先するとは・愚かだな・テストロッサ」

そう言い放つシグナムにフェイトは

「うるさい！うるさい！待つのはもう疲れたの！！いい加減に龍也の気持ちを知らたいんだよ！！！」

首を振りながら言うフェイトになんと声を掛ければ判らず困惑すると、シグナムが

「ここでテストロッサに近付いてはいけません・あれは・罠です・ここは私が食い止めるので、今日一日逃げ切ってください」

逃げろと言うシグナムに

「味方と考えて良いのか？」

そう尋ねるとシグナムは軽く微笑を浮かべながら

「そうですね・本音を言えば・私も兄上の気持ちを知りたいです・でも今はその時じゃないんですよ・だから待ちます・兄

上が自分から話してくれるのを」

私はシグナムに礼を言い走り出した・・・その直後背後から

「シグナム！！邪魔あつ！！！」

ズドンッ！！！！

魔法の炸裂する音と共にフェイトの怒声が聞こえ・・・

「邪魔とでも何とでも言えっ！！兄上はまだ汚させんぞ！！！」

応戦するシグナムの声を聞きながら、私はその場所を走り去った・・・
暫く走っていると

「やっと・・・見つけたっすよ」

ゴオオッ！！

エンジン音が聞こえそっちの方を見ると

「龍也兄」

「兄様」

「龍也兄様」

ボードモードのバニシングバードに乗った、ウェンディ達の姿が見える・・・デバイスと生身ではデバイスが有利・・・あっという間に追い抜かれ、3人が私の前に立つ・・・オットーがスカートの裾を握り

ながら

「あのね・・・兄様・・・ブーケ・・・受け取ってたよね？」

赤面しながらもじもじと言うオットーの言葉を引き継いで

「ブーケを取った人が次に結婚出来るんですよね・・・龍也兄様は・・・誰と結婚したいんですか？」

オットーと同じ様に赤面しながら尋ねて来るディード・・・そして

「私達は、龍也兄が自分らを選ばなくても気にしないっす・・・だから龍也兄の気持ちを教えて欲しいっす」

普段と違い真剣な表情で尋ねて来る3人に・・・私がどう返答すれば判らず停止してると・・・ウエンディはふるふると肩を震わせながら

「・・・や・・・やっぱり・・・龍也兄が好きなのは私達じゃ無いっすね・・・」

目に涙を浮かべながら言うウエンディに

「いや・・・まだ私は・・・」

正直に言おう・・・私はまだ結婚するつもりが無い・・・まだ24だし・・・慌てて結婚するつもりも無いし・・・好きな者も居ない・・・だからその事を話そうとするとウエンディは耳を塞ぎながら

「聞きたく無いっす・・・慰めの言葉なんか欲しく無いっす・・・」

完全に勘違いしてるウェンディと

「やっぱり・・・僕じゃ駄目なんだね・・・」

「くすん・・・選んで欲しかったです・・・」

ぐずぐすと涙を流しているディードとオットーにどうすれば良いか判らず困惑してると

「お前達！いい加減しないか！！」

後ろの方からチンクの怒声が響き渡る、チンクは私の横を通りながら

「八神は何も言っていない！、お前達が嫌いだとも・・・誰が好きとも言っていない！全てお前達の勘違いだ」

堂々と言い放つチンクは私を見ながら

「八神はまだ結婚をするつもりが無いんだ、自分達の我侭で八神を困らせるな」

そう言われたオットー達は涙を拭いながら

「・・・ごめんなさい・・・」

声を揃えて謝ってくる3人に

「いや・・・私が早くまだ結婚するつもりがないと言えば良かったんだ・・・すまない・・・」

私が謝り返しているとチンクは横目で

「謝ってる暇があれば行け、私だって本音を言えばお前の気持ちが知りたいんだからな」

そう言うチンクに頭を下げ、私は再び走り出した・・

「ふう・・あと少しで六課か・・」

もう少しで六課というところで私は気付いた

「はやてとヴィータが・・来なかった・・？」

おかしいあの2人が動かない筈は・・私は

「し・・しまった・・罨・・」「ふふ・・時既に遅しやで？」！！」

私が罨だと気付き、その場を移動しようとした瞬間、はやての楽しい声と共に私の手足にバインドが掛けられる

「しまった・・嵌められた・・」

はやての事だから私が疲労するまで動く筈が無かったのだ・・私が己の失態を恥じていると

「兄ちゃん、捕まえたで」

「・・兄貴・・」

楽しげなはやてと赤面しながらスカートを握り締めてるヴィータが

木の間から姿を見せる・・・はやては私がバインドを掛けられると同時に落としたブーケを拾い上げ

「うふふ・・・折角やからこれ貰っとくで」

にこにこ言うはやてに

「これ・・・外してくれないか？」

バインドを外すように頼むと

「嫌や」

にこやかに嫌だと言うはやてに私がどうかしてバインドを外すように頼もうとするとヴィータが

「兄貴は・・・まだ結婚するつもりが無いんだよな・・・？」

確認するように尋ねて来るヴィータに頷くと、ヴィータはこくこくと頷きながら

「そっか・・・まだ結婚するつもりが無いなら、無理に迫るのは迷惑だよな」

そっというヴィータに私は解放されるのかと思った直後ははやてが

「うん、だから無理に結婚しろとは言わんよ・・・でも・・・少し位良い思いがしたいな」

にぱーと笑うはやて・・・よく見ると頬が赤くなっている・・・はやて

は赤面しながら私の前に立ち

「少し位・・・味見しても良いよね？」

にこっ！と笑い爪先立ちになるはやてに

「何をするつもりだ・・・？」

判っていたが一応尋ねるとはやては両手で頬を押さえて

「いゃん・・・女の子にそんな言わせないで・・・ちょっとだけ味見するだけや・・・もう2回もキスしてるんやで・・・兄ちゃんもそんなに気にしないやろ？」

そう笑うはやてに

「に・・・2回ともお前が無理やりしたんだろう！？」

そう言うとはやてはにっこりと微笑み

「そうや、だから3回目も無理やりさせて貰います」

そう微笑むとはやては私の唇に自分の唇を押し付けてきた

「!?!?!?!?!」

私がジタバタと暴れるがはやては無視・・・暫くそのまま時が流れ・・・はやてはゆっくりと離れながら

「うふふ・・・こんで3回目のキスや・・・」

妖艶な笑みで言うはやてを見ながら

「わ．．私は．．妹と3回もキスを．．」

私がショックを受けているとヴィータが私の前に立ち、にっこりと微笑む、それに吊られて私が微笑むと

「．．頂きます．．」

「な．．何を．．むぐうつ?!?!?」

ヴィータにはやてと同じ様に無理やり唇を奪われる、はやてより長い時間キスをしていたヴィータは赤面しながら

「これで．．私も3回目だ．．なのは達より2回も多い．．私の方がなのは達より近い場所に居るんだ」

そう言うヴィータは私から離れて

「えへへ〜兄貴大好きだかな!!」

そう言うヴィータは走り去ってしまった．．私がヴィータにまでキスされた事で放心状態になっているとはやてが

「バインドは解除しといたで、立ち直ったら帰って来てや、兄ちゃんの部屋で待つてるで」

ブーケを両手で抱きしめながら歩いて行くはやての後姿を見ながら

「わ．．私は．．い．．妹と．．3回もキ．．キスを．．だ．．駄目だ．．私は．．人間失格だ．．」

私はorzのポーズを取りながら、涙を流した．．今日の事は早く忘れよう．．

大勢の女性に好かれ過ぎす日々．．これもある意味幸せな日々なのかもしれない．．

「こんなに悩む幸せなど私は欲しくない！！！」

一周年記念番外編 幸せ？の形 終り

一周年記念番外編 幸せ？の形（後書き）

どうでしたか？龍也は結局逃げ切れず捕食されてしまう訳ですね・
それとはやてが言っていた2回のキス・それが何時行われたのか
？第一部なのか・それとも第二部でなのか・それを楽しみにし
てくれると嬉しいです！それでは次回もどうか宜しくお願いします

一周年記念番外編 未来を語る者・・・（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回は「ノート様」からのリクエストで未来と過去がキーワードなのですが・・・過去はちよつと無理だったので未来と言うキーワードでやらして頂きました、プロローグで出て来た、正史とは違う歴史を記録する図書館、それと私混沌の魔法使い・・・それがキーワードになっています、どんな話になるのか・・・楽しみにして貰えると嬉しいです！それでは失礼致します

一周年記念番外編 未来を語る者・

一周年記念番外編 未来を語る者・

なのはの場合・

「はあ・・ブーケも取れなかったし・・龍也さんの気持ちも知れなかったし・・良い事無かったな・・」

私はハーティーンの結婚式の次の日・・買い物のに市街に来ていた・・

「まあ良いや・・買い物して帰ろう・・あれ?・・こんな所に図書館あつたかな?」

デパートに向かう途中、古びた図書館が目止まる・・だがこんな所に図書館があつただろうか?・・私は一瞬それを考えたが・・

「なんか気になるんだよね・・行ってみよう・・」

私はその図書館がどうしても気になり、その図書館に足を踏み入れた・・

「こほ・・こほ・・埃っぽいなあ・・」

私が咳き込みながら呟くと

「おや・・お客人ですか・・ようこそ・・高町なのはさん」

目の前に黒い服装の男が現れる．．柔らかな笑みを浮かべているが．．
どうしても私にはその男の顔が見えなかった．．

「どうして私の名前を？」

驚きながら尋ねると男は帽子を脱ぎながら

「私、混沌の魔法使いと申します．．私はこの管理人などをやら
して貰っている．．しがない司書でございます」

帽子を脱いでる筈なのにやはり、混沌の魔法使いの顔は見えなかつ
た．．混沌の魔法使いは柔らかな笑みを浮かべながら

「それでは高町なのはさん．．貴女が望む未来を見せて差し上げま
しょう．．」

そう言う私の前に鎖で封印された本が浮かび上がる．．それにも
驚いたが．．

「未来ってどういう意味ですか．．？」

その言葉の意味を尋ねようとしたが混沌の魔法使いは

「それは貴女の目でお確かめ下さい．．」

そう言う私の意識は闇に沈んだ

「ここは．．？」

私は気が付いたら明るい家の中に居た．．キョロキョロと辺りを見

回していると

「ママーッ!」

後ろから子供が抱き付いてくる・男の子と女の子だ・

「・・・!?・・・」

私は振り返り驚いた・その子供は龍也さんに良く似ていたからだ・
・私が驚いていると、男の子が

「ねえ、ママ・今日パパ帰ってくるんだよね?」

楽しみという表情で尋ねて来る男の子に

「うん、そうだよ、今日パパが帰ってくるよ」

私は自然とそう呟きその男の子の頭を撫でた・すると女の子が

「えへへ・楽しみだな」パパとママと一緒に寝るのが・」

目を細め笑う女の子は私に良く似ていた・私はその女の子の頭を
撫でながら

「さっ ■■■・・・パパが帰ってくる前に宿題をやっておきなさい」

私は確かにその子供の名前を呼んだ筈なのだが・その子供の名前は私には判らなかった・私がそんな事を考えていると

「「はーいつ!」」

手を挙げて走っていく子供の後姿を見ていると

「ただいま」

玄関の方から龍也さんの声が聞こえる・私は驚きながらも玄関に向かった・

「ふう・やれやれ・レジアスも人使いが荒い・なのはもそう思うだろ？」

ネクタイを外しながら言う龍也さんは私を知る龍也さんより年を取っていた・だが渋みがあると言うか・凄く格好良いと思った

「そうですね・でも仕方ないですよ」

私の意志と反して自然と口が開き言葉が飛び出してくる・龍也さんは苦笑しながら

「そうだな・仕事なのだから仕方ないな・疲れたから風呂に入るよ・夕食を期待してるな・」

そう言つて家の中に入っていく龍也さんの後姿を見ながら、玄関に飾られた写真立てを見た

「!?!?・これは・私・?」

教会の前で龍也さんと腕を組んでる私の写真があった・私は驚きながら写真立てを持ち上げた瞬間、頭の中に

「残念ながら・・・貴女が見れるのはここまです」

混沌の魔法使いの声が響き、私はその世界から引き戻された・・・

「・・・如何でしたか？・・・貴女が望んだ未来は？」

本に鎖を巻きながら尋ねて来る混沌の魔法使いに

「わ・・・私は龍也さんと結婚出来たんですか！？・・・何時・・・何年後に結婚出来るんですか！」

私がそう尋ねると混沌の魔法使いは本を本棚にしまいながら

「さあ・・・それは私では存知かねます・・・私はあくまで案内人ですから・・・それに貴女が見たのが確実な未来とも言えません・・・」

えっ！？・・・私がその言葉に驚くと混沌の魔法使いは

「世界とは数多の姿を持ちます・・・貴女が見たのは貴女と守護者が結婚する未来・・・ですが未来とは1つではありません・・・」

私の本は桜色の表紙をしていたが・・・他に金色の表紙、白い表紙、紅色表紙の本の他のオレンジや数字が刻まれた本が並んでいた

「貴女が見たのはあくまで可能性未来の1つ・・・ですがこういう未来があるのもまた確か・・・それでは・・・貴女が再びこの図書館に足を踏み入れる時を楽しみにお待ちしております」

そう混沌の魔法使いが頭を下げると図書館は一瞬で消えた・・・

「未来・・・ん！？・・・あれ・・・私如何してこんな所に・・・？」

何も無い空き地の前に立っていた私は首を傾げながら

「おかしいな、私買い物に来た筈なんだけど・・・？・・・どうしてこんな所に立つてるんだろう？」

考えても判らないので私は買い物の為に歩き出した・・・その足取りはとても軽く

「何か良い事でもあったかな？」

判らないが何か良い事があったのかもしれないと思い、私はデパートに向かって歩き出した

ヴィータの場合

「あれ・・・こんな所に図書館あったか？」

私はパトロールの帰りに今にも崩れ落ちそうな図書館があるのに気付き、立ち止まった・・・

「なんか気になるんだよね・・・行ってみよう・・・」

私はその図書館がどうしても気になり、その図書館に足を踏み入れた・・・

「げほ・・・げほ・・・埃っぽいな・・・掃除してないのかよ」

私が咳き込みながら呟くと

「おや・・・今日は珍しい日ですね・・・同じ日に2人も客人が来るとは初めての事です・・・ようこそ・・・八神ヴィータさん」

目の前に黒い服装の男が現れる・・・柔和な笑みを浮かべているが・・・どうしても私にはその男の顔が見えなかった・・・

「どうして私の名前を知ってた？」

驚きながら尋ねると男は帽子を脱ぎながら

「私、混沌の魔法使いと申します・・・私はこの管理人などをやらして貰っている・・・しがない司書でございます」

帽子を脱いでる筈なのにやはり、混沌の魔法使いの顔は見えなかった・・・混沌の魔法使いは柔和な笑みを浮かべながら

「それでは八神ヴィータさん・・・貴女が望む未来を見せて差し上げましょう・・・」

そう言うのと私の前に鎖で封印された本が浮かび上がる・・・それにも驚いたが・・・

「未来ってどういう意味だよ？」

その言葉の意味を尋ねようとしたが混沌の魔法使いは

「それは貴女の目でお確かめ下さい・・・」

そう言つと私の意識は闇に沈んだ

「へっ・・・ここ何処・・・つて！？・・・ウェディグドレスうッ！？」

私は気が付いたら教会の中に居た・・・そして白いドレスを身に纏いながら

「・・・な・・・何で・・・私がこれ着てるんだよ・・・」

どうしてドレスを着てるか判らず首を傾げると

「ヴィータちゃん、準備出来たですか？」

リンが白い服を着ながら部屋の中に入ってくる・・・私は

「お・・・おう・・・準備出来てるぜ」

そう返事を返すとリンは

「そうですか・・・では行くですよ・・・お兄様が待ってます」

兄貴が待つてる！？・・・じゃあこれは

「わ・・・私の結婚式・・・？」

そう呟くとリンは

「何言ってるですか？・・・今日はヴィータちゃんとはやてちゃんの結婚式じゃないですか？・・・忘れたですか？」

私とはやての結婚式！？・・・で待ってるが兄貴・・・じゃあ・・・私は・

「私は兄貴と結婚するのか？」

そう呟くとリインは私の前に立ち

「んーヴィータちゃん興奮しすぎて昨日寝れなかったんですね・・・じゃあ説明してあげるです、今日はヴィータちゃんとはやてちゃんの結婚式です・・・本当はシグナムとお姉様も結婚出来たはずなんですけど・・・2人は辞退したです・・・お兄様の隣はヴィータちゃんとはやてちゃんの物だと言って・・・でも一緒には暮らすそうですよ、皆で仲良く暮らすですよ」

私はその説明を聞きながら、ホールに向かって移動した・・・

「それでお兄様ははやてちゃんとヴィータちゃんと結婚すると決めたそうです・・・ほらほら・・・もう事情は判ったですね・・・それじゃあ行くですよ」

リインにドレスの裾を持ってもらい、私はホールの中に足を踏み入れた・・・祭壇の前では既にはやてが待っていて

「遅いで・・・ヴィータやっぱり緊張したんか？」

笑いながら尋ねて来るはやてに

「う・・・うん・・・」

そう返事を返すと、はやては幸せそうに微笑み

「あはは・・・やっぱそうやよね・・・兄ちゃんがプロポーズしてくれた時は嬉しくて、嬉しくて寝れへんかったもんな」

そう笑うはやてに頷いていると司祭が

「それでは新郎の入場です」

教会の扉が開き、タキシードを着た兄貴が歩いてくる・・・私はその姿を見ながら

（そ・・・そうか・・・私の願いは叶ったんだ・・・）

兄貴の傍にずっと居たいという願いは叶ったんだ・・・私が嬉しくて嬉しくて涙を流しかけた瞬間・・・頭の中に

「残念ながら・・・時間切れでございます」

混沌の魔法使いの声が響き、私はその世界から引き戻された・・・

「・・・如何でしたか？・・・貴女が望んだ未来は？」

本に鎖を巻きながら尋ねて来る混沌の魔法使いに

「ど・・・どうして良い所で終わりなんだよ！！続きを見せてくれよ！！」

私がそう怒鳴ると混沌の魔法使いは本を本棚にしまいながら

「それは出来ません・・・この記録を見れるのは1日1回・・・そして時間制限があります・・・これを破れば・・・貴女という存在はこの世界から抹消されてしまいます」

えっ！？・・・私とその言葉に驚くと混沌の魔法使いは

「世界とは数多の姿を持ちます・・・ですが貴女はこの世界で今歴史を作っている存在・・・故に貴女が記録を見れる時間は短く・・・そして1回しか見る事が出来ないのです・・・判りましたか？・・・そして貴女が見たのは貴女と守護者・・・そして夜天の王が結婚する未来・・・ですが未来とは1つではありません・・・」

私の本は紅色の表紙をしていたが・・・他に金色の表紙、白い表紙、桜色の表紙の本の他のオレンジや数字が刻まれた本が並んでいた

「貴女が見たのはあくまで可能性未来の1つ・・・ですがこういう未来があるのもまた確か・・・それでは・・・貴女が再びこの図書館に足を踏み入れる時を楽しみにお待ちしております」

そう混沌の魔法使いが頭を下げると図書館は一瞬で消えた・・・

「未来・・・ん！？・・・あれ・・・私如何してこんな所に・・・？」

何も無い空き地の前に立っていた私は首を傾げながら

「うーん・・・判んねえ・・・！！そうだ今日は兄貴と買い物に行くんだった！！早く戻らないと」

私は兄貴との約束を思い出し、六課へ向かって全力で走り出した・・・

チンクの場合

本局に教導官になる為の試験を受けに行く途中、私はぼつんと佇む図書館が気になり立ち止まった・

「むっ？・・こんな所に図書館などあったか？」

本局に向かう途中にこんな図書館があっただろうか？・・少なくとも私はここに図書館がある事を知らなかった・・だが・

「なにか気になるな・・時間もあるし行つて見るか・・」

私はその図書館がどうしても気になり、その図書館に足を踏み入れた・・

「汚い図書館だな・・」

埃だらけの本棚を見ながら呟くと私の正面から

「おやおや・・2度あることは3度あると言いますが・・まさか同じ日に3人も客人が来るとは・・少々驚きです・・ですが・・客人が来るのは嬉しいので気にする事では無いですね・・ようこそ・・チンク・スカリエッティさん」

目の前に黒い服装の男が現れる・・柔和な笑みを浮かべているが・・どうしても私にはその男の顔が見えなかった・・

「どうして私の名前を？」

若干警戒しながら尋ねると男は帽子を脱ぎながら

「私、混沌の魔法使いと申します・・私はここの管理人などをや
らして貰っている・・しがない司書でございます」

帽子を脱いでる筈なのにやはり、混沌の魔法使いの顔は見えなかつ
た・・混沌の魔法使いは柔和な笑みを浮かべながら

「それではチンク・スカリエツティさん・・貴女が望む未来を見せ
て差し上げましょう・・」

そう言うのと私の前に鎖で封印された本が浮かび上がる・・それにも
驚いたが・・

「未来とはどういう意味だ・・？」

その言葉の意味を尋ねようとしたが混沌の魔法使いは

「それは貴女の目でお確かめ下さい・・」

そう言うのと私の意識は闇に沈んだ

「ここは・・どこだ・・？」

私は気が付いたら夜景の綺麗な橋の上に居た・・私が辺りをキョロ
キョロと見回していると・・

「どうだ？・・チンク・・綺麗だろう・・？」

その声に驚き振り返ると八神が後ろに居た・・私が慌てて離れようとするとその前に八神が私の手を掴んで引き寄せる

「だが・・この夜景よりお前の方が綺麗だな」

ボンツッ！顔が一気に紅くなる・・八神にそんな事を言われたのは初めてで・・凄く嬉しくて・・でもそれと同じくらい恥かしくて・・私がおもひおもひしている

「チンク・・私はお前が好きだ・・だが・・お前が私の事をどう思っているのか・・判らない・・だから教えてくれ・・お前の気持ちを・・」

そう言われた私は顔を真っ赤にしながら

「わ・・私は・・貴方が好きでした・・ずっと前から・」

スカートを握り締めながら言うと八神は私を抱きしめながら

「そうか・・良かった・・なら・・これを渡しても良いな」

八神はそう言うと言を放し、ポケットから箱を取り出して私に手渡してくる・・私はその箱を開け・・目を見開いた

「け・・結婚指輪・・」

美しい装飾と大きなダイヤモンドが埋め込まれた指輪が収められていた・・私は嬉しくて涙を流すと、八神は私の涙を拭いながら

「私と・・同じ時を歩んで欲しい・・私が必ずお前を護る・・だから」

ら・・・私と結婚して欲しい・・・」

そう言う八神の顔を見ながら

「はい・・・喜んで・・・」

私がそう言つて頷くと八神の顔が近付いてくる・・・私が目を閉じた瞬間・・・頭の中に

「残念ながら・・・貴女が見れるのはここまでです」

混沌の魔法使いの声が響き、私はその世界から引き戻された・・・

「・・・如何でしたか？・・・貴女が望んだ未来は？」

本に鎖を巻きながら尋ねて来る混沌の魔法使いに

「ど・・・どうして・・・凄く良い雰囲気だったのに・・・もう直ぐ・・・キスして貰える所だったのに・・・どうして・・・」

私が泣きそうな声で言つと混沌の魔法使いは本を本棚にしまいながら

「それは申し訳ない事をしました・・・ですが規則ですので・・・すいません」

混沌の魔法使いは本当にすまないと言う顔をしながら謝りながら

「世界とは数多の姿を持ちます・・・貴女が見たのは貴女と守護者が結ばれる未来・・・まあ・・・貴女だけではなく他の姉妹達とも結ばれるのですがね・・・」

そう笑う混沌の魔法使いの手の中には数字の4が刻まれた本が納められていた・・他に沢山の本が並んでおり・・私はその本を指差しながら

「あの続きの未来が有るなら見せてくれ・・いや見せてください！・・私はあの後どうなったのか知りたい！！」

私が頭を下げながら訪ねると混沌の魔法使いは

「見せてあげたいのはやまやまなんですけどね・・それは出来ない規則なんです・・もし続きが見たければ・・再びこの図書館に足を踏み入れてください・・その時は必ず続きを見せると約束するので・・それではまたいずれ・・何処かでお会い致しましょう」

そう混沌の魔法使いが頭を下げると図書館は一瞬で消えた・・

「私は如何してこんな所に・・？」

私は遠く離れた空き地を見ながら立っていた・・私は首を傾げながら

「どうしてこんな所に？・・！！そうだ早く本局に行かなければ」

私は手に持った教導官の受験用紙を抱き抱えるようにして走り出した・・今日・・試験に合格できれば・・もっと八神の傍に入れる・・緊張して最初は話せないかもしれない・・でも・・時間が経てば成れる事が出来る・・そうすれば・・八神に好きになってもらえる可能性が出てくる・・私はそんな事を考えながら大急ぎで本局へと走った

???の場合

「おや・・本日最後のお客様は貴方がたですか・・嬉しいですね・・一日にこんなにも客人が来るのは初めてですよ」

穏やかに笑いながら混沌の魔法使いは一冊の本を取り出す

「これは・・最近現れた本なんですけどね・・特別にお見せ致しますよう」

その本は15色の色が使われた、とてもカラフルといえば聞こえは良いが・・趣味の悪い本だった・・混沌の魔法使いは嬉しそうにその本を開く・・開かれたページにはタキシードを着た龍也と純白のドレスに身を包んだ14人の美女達の姿があつた・・皆が皆嬉しそうに微笑み・・それはとても穏やかな気分にさせてくれる絵だった・

「ふふ・・これは最近現れたばかりの本・・守護者の独占欲と言いましようか?・・自分を慕ってくれた者全てを幸せにしたいと思つた・・その時に出来た物です・・ふふ・・誰だつて独占欲という物を持つてますからね・・これは当然の理なのでしょう」

混沌の魔法使いは本を閉じ、再び鎖を巻いて封印し

「今日お客様が見たのは、確かにこの世界の未来です・・ですが何度も言いますが、世界とは数多の姿を持ちます・・ですので未来とは1つではありません・・あくまで今日見たのは1つの可能性なのです・・ですが・・未来である事には間違いは無いのです・・こ

れから先守護者の物語がどう動くのか・それは貴方方の目でお確かめください・それでは再び会える時を楽しみにしています」

ギギイツ・・

古めかしい音を立てて扉は閉じ・・それと同時に目の前の図書館は跡形もなく消えていた・・

一周年記念番外編 未来を語る者・・ 終り

一周年記念番外編 未来を語る者・・・（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！未来というキーワードで番外編を書こうと思ったのですが・・・上手く行かず・・・結局こういう形にしました・・・この為に本編にプロローグを追加したのです・・・どうでしたか？なのはの結婚生活の一部、ヴィータの結婚式・・・そしてチンクがプロポーズされた話は？・・・自分では割と良い出来だと思っているのですが・・・やはり少し不安なので感想を貰えると嬉しいです！それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう

コラボ番外編 歌を紡ぐ者と記録者（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回はコラボ小説になります、今回コラボしてくださるのは「魔法少女リリカルなのは」Angel's singer」の悠様です、それと今回は最終回のネタバレが少しあるので、それでも良いという人だけお願いします、それでは番外編始まります

コラボ番外編 歌を紡ぐ者と記録者

コラボ番外編 歌を紡ぐ者と記録者

「悠夜〽今日の夕ご飯は何にするですか」

フェリと夕食の買出しに行く途中・俺は一軒の図書館が目につき立ち止まった・その図書館には看板が無い上に壁も薄汚れていて・今にも崩れ落ちそうな印象を受けた・だが

（何だろう・・淒く気になる・・）

何でか判らないが強烈にその図書館が気になった・俺がその図書館に歩いて行くと後ろから

「悠夜？・・どうしたですか？・・そのボロボロに図書館が気になるんですか？」

そう尋ねて来るフェリに頷きながら

「うん・・何でか判らないんだけど・・どうしても気になるんだ・・買い物の前に行って見よう」

俺はそう言つとその図書館の扉を開いた・俺の背より遥かに高い本棚には淒まじく厚い本がこれでもかと並んでいた・

「淒いな・・どんな本なんだろう・・」

俺がその本に手を伸ばそうとした時

「無駄ですよ．．．この本は私以外の物では開く事は出来ませんよ？」

俺とフェリの目の前に黒いロングコートにつばの広い帽子を被った男が姿を見せる．．俺は

「ここの図書館の人ですか？．．それより見れないってどういう．．「マスター！その男に近付いちゃいけません！！」フェリ？」

凄まじい剣幕で俺の前に立ち塞がったフェリはその男を睨みながら

「貴方一体何者です！！！！人でもない．．かといって私とも違う．．貴方は一体何なんです！！」

そう怒鳴られた男は楽しそうに笑いながら

「いやいや．．初めてですよ．．初見で私が人ではないと気付いたのは．．貴女で3人目ですよ．．フェリさん．．見破られた以上．．名乗らせてもらいましょうか．．私は混沌の魔法使い（カオスマジシャン）と申します．．私はこの図書館に縛られし者．．決して老いる事無く．．そして死ぬ事も無く．．未来永劫ここで記録し続ける事を宿命付けられた者です．．これで宜しいでしょうか？」

帽子を脱ぎながら語る男の顔はなぜか見る事が出来なかった．．俺は

「この図書館に縛られた者．．？どういう意味ですか？」

俺がそう尋ねると男は

「そうですね・・・話しても良いですが・・・長くなりそうなので座りましょうか・・・どうぞこっちへ・・・」

手招きしながら歩いて行く男の後を追って図書館の奥に行った・・・そこには趣味の良いテーブルと椅子が置かれていた

「どうぞ、座ってください・・・悠夜さん、フェリさん」

穏やかに笑いながら言う混沌の魔法使いに

「どうして僕の名前を？」

座りながら尋ねると、混沌の魔法使いは左を掲げた・・・すると本棚から一冊の本が出てきて手に収まる

「私は記録する者・・・貴方の事もちゃんと知ってますよ・・・悠夜様・・・いえ・・・転生者様」

につこりと微笑む混沌の魔法使いに

「僕が転生者って知ってるのか・・・それもその本に記されてるのか？」

その本を指差しながら尋ねると

「ええ・・・その通りですよ・・・これから貴方がどういう道を歩むのか・・・そしてどういう終結を迎えるのか・・・その全てが記されてますよ」

そう笑う混沌の魔法使いに

「人の人生の収集か・・良い趣味じゃないな？」

そう言う混沌の魔法使いは頭を掻きながら

「いやいや・・自分でもそう思うのですがね・・如何せん仕事ですから・・私は今から・・すいませんね・・どれくらい昔か忘れてしまいましたよ・・まあ気が遠くなるくらい昔からここで物語を記録してます・・最初は一冊、二冊だったんですけどね・・今では数え切れないほどの本を管理してますよ」

そう笑う混沌の魔法使いにフェリは

「貴方は・・もしかして・・神様なんですか？」

俺の知る神とは違うが・・何となく、その人に近い雰囲気を持つ混沌の魔法使いにそう尋ねると

「くくつ・・はははッ！！私が神ですか・・面白い冗談ですね・・フェリさん・・私はその神の道具ですよ・・人の身では望んではない事を望み・・その罰としてここに縛られたんですよ・・ここから出ることも出来ず・・老いる事も出来ず・・死ぬ事も出来ず・・最初は気が狂いそうでしたけど・・良く考えれば欲しかった物が手に入ったんで良いですけどね」

そう笑う混沌の魔法使いに

「貴方は何を望んだんです・・こんな囚人のような生活をしてまで・・何を望んだんです？」

そう尋ねると混沌の魔法使いは

「私は全てが知りたかった・無限に広がる平行世界・その全てを見たかった・知りたかった・ただそれだけですよ・さてさて・折角来て下さったんですから、私のオススメの世界を紹介しましょうか・」

混沌の魔法使いは立ち上がり・一冊の本を見せてくれる・それは美しい蒼い表紙をしていた

「これは守護者の物語・どれほど己が傷ついても・常に誰かを護る為に生きた男の物語です・どうぞ・ごゆるりとお楽しみください」

そう言うとながが浮き上がり、俺たちに向かって白い光を放った・避けようと思う前に俺とフェリはその光に飲まれ、意識を失った・

俺は気が付くとあちこちのビルが崩れた廃墟の上空にいた・

「ここは・・・？・・・な・・・何だ!？」

図書館にいたはずなのに・俺が混乱していると下のほうから凄まじい雄叫びが聞こえた

「ぐ・・・オオオオオオッ!!!」

赤黒い騎士甲冑の男が獣のような雄叫びを上げ・その影から白い身体を持った異形が姿を見せる

「我が名はヴェルガディオス．．絶対にして最古の神．．」

その異形に立ち向かう、黄金色の騎士甲冑を纏った男だが．．

「酷い．．勝ち目などまるで無いじゃないか．．」

大人と子供の喧嘩と言っても良い．．男は何も出来ず．．ただただ痛めつけられていた

「愚かな．．お前はただの人形．．我を倒すただけに神王によって、この時代に送られた．．奴の息子．．貴様の理想も．．願いも．．全て仮初の物だと何故判らん？．．貴様は唯のブリキ人形．．いや壊れたロボットだ．．そんな物に生きる価値があると思うか」

蔑む様なヴェルガディオスと言う名の異形を睨みながら

「．．黙れ．．貴様の御託は聞き飽きた．．」

ボロボロの体で飛び上がる男は凄まじい魔力を身に纏いながら

「私は．．はやて達を護ると決めた！貴様に．．いや．．何者にも．．はやて達を傷つけさせはしない！！」

剣を振り翳し突撃していく男を

「哀れな．．自分の価値さえ知らぬ壊れた人形ごときが．．神に齒向かうとは」

そう言うヴェルガディオスは男をを片手で掴み、ビルへと叩き付けた

「駄目なのか・・・私は何も護れないのか・・・？」

瓦礫の中でそう呟く男を見てみると、突然男が空を見上げる・・・そこには13色の魔力で出来た輪が浮かんでいた・・・

「どうしようと言った？」

満身創痍というのも甘い状態で空を舞う男を見ると・・・男は雲の間に消えて行った

「・・・どうなるんだ・・・！！・・・何だこの魔力は！？」

凄まじい魔力を感じ空を見上げると、雲の間から虹色の魔力を纏いながら先程の男が姿を見せる・・・その男は12枚の魔力で出来た翼を羽ばたかせながらヴェルガディオスの前に行く・・・ヴェルガディオスは

「馬鹿な・・・人間の身でありながら・・・我と同じ場所に立つ者がいる訳が・・・」

困惑するヴェルガディオスを斬り付けながら

「ヴェルガディオス！！いや・・・偽りの神よ！！我が名・・・神王の名の元に貴様に断罪を下す！」

男がそう言った所で頭の中に混沌の魔法使いの声が響く

「・・・残念ですが・・・ここまでです」

その声と共に俺の意識は何かにつ張られるようにその場から消え去った

「如何でしたか？・・守護者の物語は？」

本をしまいながら言う混沌の魔法使いにフェリが

「良い所で終ったから・・何とも言えません」

俺が言おうとしていた事をフェリが先に言ったので、俺は別の事を尋ねる事にした

「あの人は・・はやてを護ると言っていましたか？・・あの人は・・はやての彼氏か何かですか？」

そう俺が尋ねると混沌の魔法使いは

「いえいえ・・あの男の名は「八神龍也」・・血の繋がりにこそ無いですけど、平行世界の八神はやての兄に当たる人物です」

そう笑う混沌の魔法使いに

「あの人は・・あんなにボロボロになってまで・・如何して戦うのですか？」

俺がそう尋ねると混沌の魔法使いは

「彼はどんな者からも・・どんな障害からも家族を護ると誓いを立て・・それを決して破る事なく真っ直ぐに生き続けました・・いえ・・彼はその生き方しか知らないのです・・己がどれほど傷つこうが・

・立ち止まらないんですよ．．彼は」

そう言う混沌の魔法使いに

「そうですか．．凄い人が居たんですね．．もし会えるなら．．会って見たいですね．．」

俺がそう言う混沌の魔法使いは

「会えますよ．．いずれ．．時が経てば．．ね．．貴方達は迷い人．．本来ならここに来た方の記憶を消さなければならぬのですが．．」

「

その言葉を聞いたフェリが俺を護るように立ち塞がるが、混沌の魔法使いは柔和な笑みを浮かべ

「大丈夫ですよ．．本来は．．と言ったでしょう？今の私は「守護者の世界を記録する者」．．ですから貴方達の記憶に干渉することは出来ません．．だから今日の事はきつと忘れないでしょう．．」

そう笑う混沌の魔法使いは椅子から立ち上がり

「いずれ貴方と守護者が会う事があるでしょう．．その時は再びこの図書館に本が増える時．．その時を楽しみにしていますよ．．転生者様．．そして融合騎さん．．」

混沌の魔法使いが帽子を脱ぎながら挨拶をすると同時に、俺の意識は一瞬だけ途絶えた

「ここは．．そうだ！あの図書館は．．無い．．そんな．．」

俺は気付くと図書館の外に居た・・慌てて振り返るが図書館はそこには無く空き地が唯広がっていた・・だが見た事と混沌の魔法使いとの話はちゃんと覚えてる・・だからあの出会いが夢ではない筈・・俺がそんな事を考えているとフェリが

「悠夜・・あれは夢ではないですよ・・私も見ましたから・・」

神妙な表情で言うフェリに頷きながら

「そうだよな・・あれは夢じゃないのよな・・それより混沌の魔法使いは・・いずれ八神龍也に会えるって言うてたよな？」

隣のフェリにそう尋ねると、フェリはゆっくりと頷きながら

「はい・・確かにそう言うてました・・悠夜は会いたいんですか？・
・八神龍也に？」

そう尋ねて来るフェリに頷き

「うん・・会ってみたいかな・・僕は確かに何かを護りたいと思うよ・・でも僕とあの人は根本的に何か違うんだ・・だから会ってみたいんだ」

そう言うフェリは俺の手を握り

「そうですね・・私もあつてみたいと思いました・・混沌の魔法使いが嘘を言っていないのなら・・いずれ会えるそうなんですよね・・その時が楽しみです」

そう笑うフェリに頷き、俺は夕食の買い物に向かった・・結構長い時間・・混沌の魔法使いと一緒に居た筈なのだが・・時間的には5分しか経っていなかった・・俺はゆっくりと歩きながら

（何時会えるんだろうか・・楽しみだな・・）

いつ会えるかも判らない、八神龍也との出会いを心待ちにしていた・
・そしてこの不思議な体験から半年後・・俺は八神龍也であった・
・だがその時の話はまた今度にしようと思う・・

コラボ番外編 歌を紡ぐ者と記録者 終り

コラボ番外編 歌を紡ぐ者と記録者（後書き）

今回はコラボなんだけど・・八神龍也ではなく・・記録者としての混沌の魔法使いとの会談という話にしてみました・・混沌の魔法使いはDQ4小説版のホイミンがベースでして・・八神龍也の物語を記録し・・話すと言うのが仕事なんですよ・・どうでしたか？面白かったでしょうか？・少し不安なので感想を貰えると嬉しいです、それとも私の小説とコラボしてくれるという人が居ましたらメッセーじに一言ください！・・希望としては使って貰う方を希望しています！我侭ですいません・・それでは感想とメッセーじが来る事を期待しながら失礼致します

番外編 教導官チンク〜初日編〜（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回は「チンク」メインの番外編で教導官に合格したと言う設定で番外編をやってみようと思ったので、教導官チンクさん〜初日編〜をやります・物凄く不安な作品なのですが・・・どうか宜しくお願いします

番外編 教導官チンクゝ初日編ゝ

番外編 教導官チンクゝ初日編ゝ

私は机の上の封筒を睨みながら腕を組んでいた・・・これには合格かどうかの通知が入っている筈だ

「もし・・・落ちていたらと怖くて開けれん・・・」

自分では大分良い出来だったと思うが・・・もし落ちていたら・・・と思うと怖くて開けられないで居ると・・・ノーヴェが

「チンク姉・・・何時まで睨めっこしてるんだよ・・・好い加減開けろよ・・・それとも私が開けてやろうか？」

そう尋ねて来るノーヴェに

「いや・・・良い自分で開ける」

私は封筒の封を切った・・・中には・・・

『チンク・スカリエッティ・・・教導官試験・・・合格』

と書かれた紙が入っていた・・・私は

「やった・・・合格だ・・・これで八神の傍にもっと居れる・・・」

私が感動に震えてるとノーヴェが

「やったじゃんか！チンク姉！！」

自分の事のように喜ぶノーヴェに

「ありがとう、ノーヴェ．．今度から教導官として頑張るよ」

そう言っただけは自分の部屋の戻った．．合格通知から一週間後

「これが．．これが教導官の制服か．．」

本局から届いた教導官の制服をみながら

「これで何時もより長く八神の傍に．．うん．．頑張ろう」

色々乗り越えなければならぬ問題はあがあるが．．これから頑張ろうと思いつながら、教導官の制服を身に纏い私は部屋を後にした．．六課の入り口の所で八神が待っていた

「ほう．．中々似合うじゃないか．．チンク」

穏やかに笑いながら言う八神に

「ありがとう．．これで今日から私も教導官だ．．八神．．判らない事があると思うが．．よろしく頼む」

今日はなのはとヴィータとは別行動で、私と八神だけでの教導になる．．緊張するが全力で頑張ろう．．私がそんな事を考えてると

「緊張してるのか？・・・大丈夫だ・・・私も居るし・・・リラックスして行けば良いさ」

そう笑う八神に頷き、私は八神の車に乗り込み、教導場所に向かった

「今日は何処に行くんだ？」

そう尋ねると八神は

「聖王教会だな・・・今日は軽い模擬戦と戦術指導だな」

軽い模擬戦か・・・それなら私でも大丈夫だな・・・それに戦術指導も問題無い筈・・・大丈夫・・・大丈夫だ・・・上手く出来る、私は自己暗示の様に繰り返し自分に言い聞かせていた・・・そんな事を考えてると私達の乗った車は聖王教会に到着した・・・

「神王様・・・今日は宜しくお願いします」

シャツハが待っていて八神の顔を見るなり、深く頭を下げながら言う・・・あんまり意識して無いが・・・八神は神王であり・・・本来なら管理局ではなく、聖王教会に居なければならぬのだが・・・本人が嫌がつている為・・・管理局で働いているが・・・本来なら働く必要が無いのだ・・・私がそんな事を考えてると

「シャツハ・・・私はそんなに大層な者じゃないぞ？」

八神がそう言うとシャツハは

「何度も言いますが、貴方様は聖王教会のトップに立つべき存在なんですよ・・・判っていますか・・・私にすれば信仰すべき神その物な

のです・判りますか?・本来ならこうやって話すをする事さえ、
恐れ多いんですよ」

そう言われた八神は頭を掻きながら・

「だから・聖王教会は苦手なんだ・頭の固い連中ばかりだから
な・」

珍しく少し不機嫌そうな八神は私の頭に手を置いて

「シャツハ・連絡して置いた筈だが・今日騎士たちを教導する
のは私じゃない・チンクだぞ?」

急に話題が私に振られたので驚いているとシャツハが

「存じております・チンクは中々優秀だと聞いてます・それで
はこちらです」

先導する様に歩き出したシャツハの後を追ひ、私達は移動した

「「「おはようございます!!!今日は宜しくお願いします!!!
!」「」」

聖王教会の演習場では9人の騎士が待っていた、八神は

「うん・元気がある事は良い事だ・さて・今日の訓練はチン
クが見てくれる・市街戦での戦術と軽い模擬戦だ・それでは訓
練を始めるぞ・チンク頑張れよ」

そう声を掛けて下がっていく八神を見ながら

（これが私の教導官としての初仕事だ・・失敗が無い様に頑張ろう）

私はそんな事を考えながら教導を始めた

「良いか・・市街戦では民間人の保護が最優先になる・・だから3人一組で動く場合は2人が敵に対する対処・・残りの1人が保護になる訳だが・・この時保護に回るのは防御・回復系の魔法が得意な者になる・・お前達は確かに騎士だが・・それくらいの魔法は使えるだろう
？」

そう尋ねると9人のうち3人が手を挙げた

「良いか・・ネクロの生き残りがまだ居る以上、市街戦が多くなると思う・・焦らず的確な対処を取る必要がある・・良いな？」

そう言つて話を締め括り・・

「次は模擬戦だ、私は八神程強くは無いが・・お前達よりかは強い・・安心して打ち込んで来い・・まずはAチームからだ・・来い」

最初の3人が立ち上がり騎士甲冑を展開する・・私もBJを展開する・・黒を貴重にしたBJの上にマントが現れる・・マントの内側からコピーされたルナエッジを2本取り出し、片方は逆手もう片方は普通に握り

「掛かって来い」

そう言つと一番先頭に居た騎士が突っ込んでくる・・私は溜め息を

吐きながら

「私が女だと思って油断したな・・・」

突っ込んできた騎士の剣を逆手の方で弾き飛ばしそのまま首筋に突きつけ

「お前はこれで死んだ・・・騎士甲冑を解除して後の2人が終るのを待て」

そう言うとその騎士は

「はい・・・」

意気消沈した様子で歩いて行く騎士を見ながら

「1人ずつで勝てると思うなよ・・・全力で来い」

そう言うとな後の2人の目から慢心が消える・・・心のどこかで女相手に負ける訳無いと思っていたのだろう・・・私がそんな事を考えているとな後の2人が向かって来る、左右から迫ってくる剣中々に速いが

「そんな物では私を捉えられんぞ？」

跳躍しその剣を回避し、空中でマントの裏からルナエッジを左右の指に挟み着地と同時に

「行けッ！！」

計10本のダガーを高速で投擲する

「「!!」」

反応が遅れた騎士2人は直撃を喰らい吹っ飛ぶ

「まだまだ、甘いな・・・さて・・・次「女・・・女なんかいいッ!!」!!くっ」

次のグループを呼ぼうとした時、吹っ飛んだ騎士の1人が突っ込ん
でくる・・・私は予想もしてなかった攻撃で避ける事も出来ず直撃を
喰らい吹っ飛ばされた・・・私が膝を着いてると、騎士が私の前に立
って

「俺の・・・俺の勝ちだああああッ!!!」

両手で剣を振り下ろしてくる、私その一撃を回避して、そのまま騎
士の胴体に手を置きISを発動させ吹っ飛ばしたが・・・

「痛い・・・痛いよお」

ゼロ距離で爆発させた所為か痛いと感じる騎士を見て

「あ・・・あ・・・」

私が傷つけた・・・私が・・・そう思うと怖くて怖くて私はその場から
走り去った・・・走る中

「チンク!!」

八神の呼ぶ声が聞こえたが、私は立ち止まらずに聖王教会から走り

去った

「チンク・・おい！お前！！」

倒れてる騎士の首を掴み強引に起こして

「貴様は除名だ！2度と聖王教会の敷地に足を踏み入れるな！！判ったな！」

そう言うのと騎士は顔を青褪めさせながら何度も頷き、他の騎士に連れられその場から歩き去った・・私はシャツハを見て

「シャツハ！何だあいつは自分の負けさえ認められず・・あまつさえ不意打ちを仕掛けるだど！！・・そんな奴に騎士としての称号を与えるのか！！！」

そう怒鳴りつけるとシャツハは

「す・・すいません・・神王様・・わ・・私がチンクを探してきました」

そう言うシャツハに

「良い、私が探しに行く・・カリムに伝えておけ！！今日から半年、私は聖王教会に来ないからな！！お前らがなんと言おうと・・三提督が言ってもだ！判ったな！！」

私はそう言つとチンクの後を追つて走り出した

「何処だ．．何処に居る！」

こちら辺はチンクはあんまり詳しくない．．そのチンクが行きそうな場所．．考えるが心当たりが無い．．

「人に聞きながら探すしかないか．．」

私はそう考え走り出した．．

ポツポツ．．ザアアアツ！！！！

雨が髪に身体に当たる．．私はベルカの自治区の外れで膝を組んで座っていた

「．．八神に好きになって欲しくて．．教導官になつたのに．．私は．．私は．．」

脳裏に過ぎるのは痛いと苦しんでいた騎士の姿．．私は首を振りながら

「違う．．わ．．私はそんな事がしたかつたんじゃない．．」

そんな事を呟きながらその場所に座つてると

「チンク！！．．やっと．．見つけたぞ．．」

八神がびしょびしょになりながら歩いてくる・・・私は

「こ・・・来ないで・・・」

八神に怒られると思い立ち上がり走り出そうとすると

「待て、チンク！話を聞け」

八神が回りこんで私の腕を掴む

「嫌だ・・・嫌だ・・・聞きたく無い!!」

そう言つて八神の手を振り解こうとするが、八神の方が力が強いから振り解く事は出来なかった・・・私が暴れてると

「話を聞けと言つてるんだ!!」

「えっ?・・・」

八神に抱きしめられる・・・恥かしいのと嬉しいのがごっちゃになつて私が停止すると

「チンク・・・大丈夫だ・・・さっきのはお前が悪いんじゃない」

そう優しく声を掛けられ私は

「で・・・でも・・・私は・・・ISを使つた・・・あの男を傷つけた・・・こんな風じゃ教導官なんて無理だ・・・」

そう言つと八神は私の目を見て

「あれは正当防衛だ・・・お前は何も悪くない・・・もう帰ろう・・・な・・・このままじゃ風邪を引く」

八神に言われ私は頷き、八神と一緒に六課へ帰った・・・私の教導官としての仕事の初日は大失敗に終わってしまった・・・次の日・・・

「くっしゅん・・・うー頭痛い」

雨に大分濡れた所為か私は風邪を引いてしまった・・・私がベッドで唸っていると

「やっぱり、風邪を引いたか・・・」

八神が私の部屋に入ってくる

「や・・・八神！・・・何でここに・・・」

そう尋ねると八神は

「何って・・・看病に来たんだよ」

そう笑う八神はタオルを絞ってから、私の頭の上において

「私はここに居るからな・・・何か用があつたら声を掛けてくれよ」

本を開きながら言う八神に

（うー恥かしい・・・こんな姿は見せなくなかった・・・）

私が羞恥心で真っ赤になつてると念話で

（チンク姉・折角龍也が看病してくれるって言ってるんだから甘えれば良いだろう）

ノーヴェが部屋の外から言う・私は甘える・八神に・少し考えたが・偶には良いだろうと思ひ

「八神・りんご・食べたい・」

八神に言うとは神は頷き、直ぐにリンゴを剥いてくれた・八神が剥いてくれたリンゴを食べながら・偶にはこういうのも良いな・八神に甘えるというのも・私はそんな事を考えながら八神の顔を見ながら

「八神・ありがとうな」

私が礼を言うと八神は穏やかに微笑み

「気にしないでいいさ・風邪が治ったら又一緒に頑張ろうな」

そう笑いながら言う八神に頷き

「うん・判った・今度はもつと頑張る」

そう言いながら頷いた・仕事は失敗だったが・少し良い事があったから・そんなに落ち込まないで居れた・私は今度こそ失敗せずに教導を頑張ろうと決めた・もつと・もつと頑張つて・八神に好きになつて貰わないと・私はそんな事を考えながら眠りに落ちた・

番外編
教導官チンク〜初日編〜
終り

番外編 教導官チンク〜初日編〜（後書き）

どうでしょうか？上手く出来たか物凄く不安です・・好きなキャラなんですけど・・チンクさんは少し使いにくいですね・・本当はこう・・もつとほのぼのした感じにしたかったんですけど・・何かこういう風になっちゃいました・・何ででしょうね？・・判らないです・・もし次回があれば次は「衝突編」でしょうか？・・なのはとヴィータと喧嘩みたいな感じで・・うーん・・もう少しレベルアップしてから挑戦した方が良かったでしょうか？・・今回はかなり不安なので感想を貰えると嬉しいです、それでは失礼致します

番外編 頑張れ！リインフォースさん！！（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回はタイトル通りリインフォースさんの話ですね、コンセプトは恋愛初心者のあわあわする、リインフォースさんで、ほのぼのの話のつもりです！！それでは番外編始まります

番外編 頑張れ！リインフォースさん！！

番外編 頑張れ！リインフォースさん！！

「さてと・・・家族会議を始めます」

主はやての一言で家族会議・・・正確には兄上様をどうやって自分達の物にするかの会議が始まった・・・

「今回の議題はリインフォースについてや」

私！？私が議題と言う事に驚いてると主はやては、私を見て

「リインフォース・・・兄ちゃんをデートに誘ったりした？」

そう尋ねて来る主はやてに

「デ・・・デ・・・デートですか？・・・いえそんな事はしてませんが？」

そう言う主はやては溜め息を吐き

「なあ・・・リインフォースも兄ちゃん好きなんやろ？・・・私達は皆デートしたことある・・・リインフォースもデートせな」

そう言う主はやてに

「で・・・でも・・・その・・・恥ずかしいですし・・・」

指をちょんちょんとしながら言っているとヴィータが

「最初は恥かしいのは当たり前だ・・慣れれば気にならなくなるぜ・
・そうだ明日休暇だから兄貴をデートに誘えよ」

「なななな・・無・・「良いね、決定！リインフォースは明日兄ちゃんをデートに誘うで決まりやね！」・・はう・・」

そう言うヴィータに私が無理だと言う前に主はやてが強引に決定し、明日までに私は兄上様をデートに誘うと言う事が決定してしまった・私が停止している間に主はやてとヴィータは部屋から出て行ってしまった・・１人残っていたシグナムは私の肩に手を置き

「頑張れ・・きっと出来る」

そう言うて出て行ってしまった・・私はのろのろと立ち上がり

「あ・・兄上様をデ・・デートに誘わなければ・・」

私はそのまま兄上様を探す為に自分の部屋を後にした

ファーストトライ

「執行官も兼ねろ？・・それは無茶じゃないか？」

そう言う兄上様にフェイトが

「大丈夫だよ！最初は私も一緒だし・・龍也なら執行官も出来るよ
！！」

熱心に執行官もと誘う兄上様は私に気付き

「リインフォース？・・・どうしたんだ？何か用か？」

そう尋ねて来る兄上様の顔を見て

「かあああ・・・な・・・何でも無いです！！」

私は赤面して走り去ってしまった・・・ファーストトライ・・・大失敗

セカンドトライ

「今・・・兄上様は1人・・・今がチャンス・・・チャンスなんだ・・・」

私は自分に言い聞かせるように呟き、勇気を出して話しかけようとした所で

「龍也さん、今暇ですか？良かったら訓練に付き合ってくださいませんか？」

ティアナが来て兄上様に言う、私は再び柱の影に隠れ、兄上様とティアナの会話を見ていた・・・

「訓練か・・・まあ良いか・・・暇だし・・・付き合っよ」

頷き歩いていってしまった兄上様を見て

「はっはっはっ……や……やっぱり……無理なのかな……」

私が頭を抱えてると

「お姉様？……どうしたですか？……そんなに頭を抱えて？」

そう尋ねて来るリインに事情を説明すると

「そうですか……お兄様をデートに……頑張るですリインは応援するです……では行くですよ！！」

「ちょ……ちょっと待て……何処に行くつもりだ？」

そう尋ねるとリインは笑いながら

「お兄様の所です！！善は急げですう！」

そう言うリインに手を引かれ、私は兄上様を探し始めた……セカン
ドトライ失敗……サードトライに向け協力者獲得

サードトライ

「ふう……やれやれ……ティアナは頑張りすぎだよな……」

紅茶を飲みながら呟いてる兄上様を見つけたリインは

「さあ！お姉様今がチャンスです！！お兄様をデートに誘うです！
」

元氣よく言うリインに

「は・・・恥かしいんだが・・・」

恥かしいと言うとリインは

「そんな事を言っていてはお兄様を取られてしまつです!!だから
頑張るです!!」

そう言つて背中を押すリインに

「判つた・・・誘ってくる・・・」

私はそう返事を返し兄上様の所に向かつて歩き出した

「うん?リインフォース?・・・どうした」

笑いながら尋ねて来る兄上様の顔を見ながら

「えつとですね・・・その・・・明日・・・お暇でしょうか?」

明日暇かと尋ねると

「明日?・・・別に予定は無いが・・・どうしたんだ急に?」

そう尋ねて来る兄上様に

「その・・・宜しかったらなのですが・・・明日・・・一緒に街に出掛け
ませんか?」

勇気を出して言うと兄上様は

「良いぞ、明日だな・・・判った、明日一緒に出かけような」

そう笑う兄上様に頷き、私はリインの居る場所に戻った

「やったですね！！お姉様！！明日頑張るですよ！！」

私はリインの頭を撫でてから自分の部屋に戻った・・・サードトライ・
・成功

「兄上様・・・その・・・お待たせしました・・・」

六課の前で待っている兄上様にそう声を掛けると

「気にしなくて良い、では行くか」

気にしなくて良いと笑う兄上様に頷き、私達は街へと出掛けた・・・
それを見ていたはやては

「うふふ・・・成功やね・・・リインフォースは奥手やからね、少しは
積極的に成って貰わんと兄ちゃんを物になんか出来へんからなあ」

そう呟くはやて・・・策士ここにあり・・・

「何処に行きたいんだ？」

歩きながら尋ねて来る兄上様に、私は

（しまった・・・何も考えてなかった・・・）

自分から誘っておいて何一つデートの計画を立ててなかった、私は即座にどうするか考え・・・答えを出した

「本を買いたいのです」

今私には欲しい本がある・・・だからそう言つと兄上様は

「それでは近くにはやてと良く来る本屋があるから行こう」

そう言つて歩き出す兄上様の隣を歩きながら

（どうだろうか・・・私と兄上様は・・・その・・・恋人同士に見えるだろうか・・・？）

擦れ違ふ者が皆一瞬止まるので恋人同士に見えてるのだろうか？と
考えながら私は歩いていた

「ここだ」

兄上様が本屋の中に入っていく、兄上様に気付いた店主が

「いらつしゃい・・・おやおや・・・はやてちゃん以外の女の子を連れて来るのは初めてじゃないかい？」

人の良い笑みで言う女の店主に兄上様は

「そうですね、私の知り合いはあんまり本好きがあんまり居ないので」

そう笑う兄上様の隣を通って本を探しに行った

「えっと・・・あつた・・・」

私が探していた本・・・それは料理の本だった・・・兄上様に料理を作
って美味しいと言って欲しくて・・・でも私は料理なんてやった事が
無いからレシピ本を探していたのだ・・・私がその本を持って行くと
兄上様が受け取りレジの店主に渡す

「会計はしておく、本を包んで貰ったらいいで」

そう言つて店から出て行く兄上様を見てると

「料理の本かい・・・好きな男にでも作つてやるのかい？」

そう笑う店主に赤面しながら頷くと

「そうかいそうかい・・・それは喜ぶと思うよ・・・あんな上玉な男は
そうは居ないよ・・・はやてちゃんと協力して頑張りなよ」

そう言う店主に頷き店を出て、兄上様と一緒に又街をぶらぶらと歩
き出した・・・特に大した事はしてないが兄上様と一緒に居るという
事が堪らなく楽しかった・・・ウインドウショッピングをしたり・・・
露天商に声を掛けられたりしていると

「そろそろ・・・お昼か・・・何を食べる？」

そう尋ねて来る兄上様に

「えっと・・・何でも良いです」

そう返事を返すと兄上様は

「それじゃあ、近くに美味しいパスタ屋があるから行こう」

歩き出す兄上様の後を追って歩き出した

「いらっしやいませ」

ウェイターに席まで案内され、2人でメニューを選ぶ

「私は・・・特製シーフードパスタを・・・リインフォースはどうする？」

そう尋ねて来る兄上様に

「私も同じ物で良いです」

私がそう言つと兄上様は

「それじゃあ・・・特製シーフードパスタを2つ」

ウェイターが注文を聞いて厨房に歩いて行く・・・料理が来るまでの間2人で話していた・・・なんら特別な話ではない・・・ただの世間話の様な物だ・・・ヴィヴィオがどうか・・・主はやての話とか・・・ただの世間話だが兄上様と一緒にだからとても楽しかった

「お待たせしました」

ウェイターが私と兄様の前にパスタの入った皿を置く・・海老とかイカとかがたっぷり入った見た目にも美味しそうなパスタだった・・

「それじゃあ、食べようか？」

そう笑う兄様に頷きパスタを食べ始めた、見た目通り味も良かった・・だがそれ以上に兄様と一緒にという事で更に美味しく感じた

「ありがとうございました・・又のお越しを・・」

ウェイターに見送られ、私達は店を後にした・・2人で又何気ない世間話をしながら街中を歩き、日が暮れて来たところで

「あ・・アイスクリーム屋だ・・」

私は移動式のアイスクリームの屋台を見つけて立ち止まると

「食べたいのか？」

そう尋ねて来る兄様に頷くと

「そうか・・では行くでしょう」

2人で屋台によりアイスを買う、兄様はチョコで私はストロベリーを選んだ、2人でベンチに腰掛けアイスを食べ

「そろそろ・・戻るか？」

六課へ帰ろうと言う兄上様に頷き、私達は六課へ戻った

「今日は楽しかったな・・・」

自作の兄上様のぬいぐるみを抱き抱えそう呟いた・・・もう2度と逢えないと思っていた兄上様と過ごす時間はとても楽しくて・・・あつと言う間に時間が過ぎてしまう・・・楽しい時間は早く感じるというのが本当の事の様だ・・・そんな事を考えてると急に眠くなり

「兄上様・・・おやすみなさい・・・」

枕元においてある兄上様と一緒に取った写真におやすみなさいと言ったから、ぬいぐるみを抱き抱えて眠りに落ちた・・・今日の日のような幸福な時間が長く続きますようにと願いを込めながら・・・

番外編　頑張れ！リインフォースさん！！終り

番外編 頑張れ！リインフォースさん！！（後書き）

どうでしたか？デート系の話はボキャブラリーが少ないので上手く表現出来るか自信が無いのです・・やはりデート系の話は難しいですね・楽しいんですけどね・恋愛初心者のおわあわわしてるリインフォースさんが割りつつぼだったりしています・・やっぱり良いですね・リインフォースさん・私は大好きですよ・もし次回があれば、龍也とのユニゾンの話が、今日買った料理の本のレシピに挑戦する話にしたいですね！それでは次回の更新もどうか宜しくお願いします！！

PV2 500'000 記念番外編 エピソード・オブ・ブラックナイト（前書

ども今回の番外編は「黒騎士」の話になります、それではPV2、
500'000 記念番外編始まります

PV2 / 500 / 000 記念番外編 エピソード・オブ・ブラックナイト

どうも今回の番外編は「黒騎士」の話になります、それではPV2、500 / 000 記念番外編始まります

PV2 / 500 / 000 記念番外編 エピソード・オブ・ブラックナイト

「兄ちゃん、お帰り」

私は玄関で出迎えてくれたはやての頭を撫でながら

「ああ・・・ただいま・・・夕食になったら呼んでくれ・・・私は自分の部屋にいるから・・・」

私はそう言つと自分の部屋に戻つた・・・そして・・・

「う・・・うぐっ・・・」

その場に蹲つた・・・胸が痛い・・・いやそれだけではない左腕もブルブルと震えてまるで力が入らない・・・私が蹲っていると

「お兄さん・・・！！大丈夫ですか！！」

シャルマルが部屋に入ってきて、蹲っている私を見て慌てて私の隣にしゃがみ込み、左腕を見て

「酷い・・・骨にそれに筋も大分痛んでる・・・今日もまた無茶な仕事を引き受けたんですね、今治しますから」

シャルが治療を始める、私はベッドに背中を預けながら

「悪いが・・・はやてには言わないでくれ・・・心配を・・・掛けたくない・・・」

私が胸を押さえながら言うところ、シャルは

「はやてちゃんには言いませんよ・・・自分の為にお兄さんが怪我してる、なんて聞いたらはやてちゃんも管理局に入るって言いだすに決まっていますから」

私はその言葉を聞いて一安心した・・・闇の書事件から1カ月、私は司法取引ではやての代わりに管理局に入った・・・だが仕事は異常なほど多く、そして怪我をする率が多い・・・しかも今日はなのはを庇ったからその怪我は何時もと比べて数段酷い・・・私はシャルの治療を受けながら懷から1つのブレスレットを取り出す、それを見たシャルは

「はやてちゃんへのプレゼントですか？」

笑いながら尋ねて来るシャルに頷き私はそれをベッドの横の机に置いた、暫くしてシャルは

「治療は終わりましたよ・・・お兄さん」

それと同時にはやてが私の部屋の戸を叩き

「兄ちゃん、ご飯出来たで」

私はシャルと一緒に自分の部屋を後にした・

「はやて、ほらプレゼントだ」

夕食後私ははやてにプレゼントのブレスレットを渡した・・はやては

「わあ・・綺麗・・ありがとな・・兄ちゃん」

それを握り締めながら笑うはやての頭を撫でてから私は自分の部屋に戻った・

次の日・・私は痛む身体を我慢して、なんとかその日の授業を受け終え帰宅した・

「兄ちゃん、おかえり・」

玄関で出迎えてくれたはやてと一緒にリビングを行くと、はやては不機嫌そうに私を見て

「兄ちゃん・・なのはちゃんが教えてくれたんや・・仕事で怪我をしてたんやってね・・何で・・何で・・教えてくれへんかったんや・・私を護る為に・・司法取引して・・管理局に入ったって・」

握り拳を作り泣きそうな声で言うはやてに

「それは・・はやてが・・気にすると思つて・」

私がそう言つとはやては

「気にするに決まつてるやろ!!何で・・何で兄ちゃんは何も言わ

んのや！！！！決めた・私も管理局に入る！！それで兄ちゃんを助けるんや！！」

泣きながら言うはやてに

「駄目だ！！そんな事は絶対にさせない！！」

私が司法取引をしたのは、はやてを護るためだった・暫く言い合いをしているのはやては身に着けていたブレスレットを外し

「こんなもん・いらん！！兄ちゃんが怪我してそれで買った物なんて・私はいらへん！！！！」

そう言つて投げつけてくる私はそれを避ける事が出来ず

「っ・・・」

目に当たりその場に蹲るとはやては

「仕事でも、任務でも行けば良いやろ！！もう知らん！！兄ちゃんなんて・・・大嫌い！！！！もう帰つてこんで良い！！！！」

そう言つて部屋に戻るはやての後姿を見ると

「兄貴・・・はやてが言ったのは本心じゃねえよ？はやては兄貴が大好きなんだぜ」

私の手を握りながら言うヴィータに

「いや・・・良いんだ・・・私が全部悪かったんだ・・・」

私はそう呟きはやてが投げたブレスレットを拾いポケットにしまった・・次の日は学校は休みだったが・・朝から仕事が入っていた、私は朝食を終え仕事の準備をしてから、リビングの壁の方を向いているはやてに

「今日・・仕事が終わったら・・ちゃんと話をする・・だから待っていてくれ・・では行つて来る」

私がヴィータと一緒に出掛けようとした時はやては私を1度だけ見て

「帰つて来んな・・兄ちゃん・・なんか・・大嫌いや!!」

私はその声を聞いた瞬間目を見開いた・・

「!!!!!!ここは・・」

パチパチと音を立てて弾ける焚き火の近くで私は目を覚ました・・私は上半身を起こすと

「王よ・・随分魔されていたようですが・・大丈夫ですか?」

心配そうに話しかけてくるセレスに私は

(夢か・・あの時の・・)

最も忌まわしい記憶を夢で見るとは・・私は頭を振つてその事を頭の外に出し

「行くぞ・・こんな所で立ち止まって入れない」

私が焚き火に砂を掛けながら言うとセレスが

「大丈夫ですか？・・・もう少し休まれても良いのですよ？」

心配そうに言うセレスに私は

「俺の心配をする必要はない・・・ネクロを潰しに行くぞ」

私はそう言つと歩き出した・・・あの夢の時から2年・・・私は17になつていた・・・私はある遺跡で目を覚まし、そこでセレスに助けられ命を繋いだ・・・そして私はあの騎士の正体・・・目的を知り・・・こうしてセレスと2人で風潰しにネクロを殲滅して回っていた・・・私は森の中を歩き・・・妙な気配を感じて立ち止まった

「「キキ・・・」」

ネクロ達が姿を見せる

「出たな・・・亡者ども・・・」

私はグラムを起動させ剣を正眼に構える・・・失った腕はジェイルによつて義手を提供され両腕を使う事が出来るようになっていて・・・私は拳と剣を油断無く構え

「クロス・・・クロス・・・」

そう言いながら私を囲むネクロ、それを見たセレスが身構えるが

「セレス！手を出すな！！・・・これは・・・俺の戦いだ！！」

私がそう言つと同時にネクロ達が襲つて来た・

「キキー！！」

左右から飛び掛ってくる

「邪魔だッ！！」

右のネクロは剣で両断し、左のネクロには直接拳を叩き込む

「キキィ・・・」

苦しみながら消滅していくネクロを横目で見ながら

「はあああッ！！」

群がっているネクロの中に突っ込んで行き、拳で・・・剣で・・・蹴りで・・・どんどんネクロの数を減らしていく

「待テ・・・待つてくれ！！・・・教えル・・・ジオガディス様の目的を教えル・・・だから・・・だから・・・」

そう言いながら命乞いをするＬＶ２を見ながら

「目的になぞ興味は無い・・・ただ・・・敵は・・・殺すだけだ！！」

剣を投げつける

ズドンッ！！

剣で木に縫い付けられたネクロは足の方から消滅し始め

「痛イ・・痛イ・・ああ・・がああああッ！！！」

痛いと呼しながら消滅が胸に来た所で断末魔の悲鳴を上げ完全に消滅した・・私は剣を引き抜き、騎士甲冑を解除した

「王よ・・お怪我は？」

心配そうに尋ねて来るセレスに

「この程度のネクロで俺が怪我をする物か・・それより・・もう敵の反応は無いか？」

私がそう尋ねるとセレスは

「はい・・どうやらこの近くにあった基地は、既に廃棄されてるようです・・さっきのはどうやらここに残された・・役に立たないネクロだったのでしょう・・」

そう言うセレスに私は内心溜め息を吐きながら

「これで15個目が・・次の場所に行くぞ・・」

ミッドチルダに点在している、ネクロの基地を破壊したのはこれで15個目・・一体、後幾つ基地があるのか・・皆目検討も就かないがこうやって風漬しに潰していくしかないのだ・・私がそう言っ立ち上がると、私の前に仮想モニターが展開され

「ダークネス・・・悪い知らせだ・・・」

モニターに映し出されたのは犯罪者として指名手配を受けている、ジェイル・スカリエツィだ・・・彼は悪人という訳ではなく、ネクロ達に娘を誘拐され、嫌々協力していたに過ぎない・・・言うならば彼も被害者なのだ・・・

「悪い知らせ？・・・どうしたんだ一体？」

私がそう尋ねるとジェイルは顔を曇らせ

「どうやらここに反応を出したのは、クラナガンからお前を引き離す為だ」

その言葉にネクロ達が何をしようとしていたのか理解した

「狙いは・・・はやて達か！！」

私がそう言つとジェイルは新たにモニターを展開して

「そうだ、ベルカ自治区に高町なのはと八神ヴィータが今いる・・・どうやら聖王教会に八神はやてを送るという任務で来ているらしい・・・おい・・・ダークネス何処に行くんだ！！」

私はその言葉を聞き終える前に移動をしようするとジェイルが慌てて尋ねて来る、私は

「ネクロを潰しに行く・・・」

そう言つとジェイルは

「だが・・・見つかるかも知れんぞ？・・・良いのか・・・まだ八神はやての前に立つ勇気が無いんだろ？」

心配そうに言うジェイルに

「ああ・・・その通りだ・・・だがな・・・俺は・・・俺の護りたい者を傷つける者は・・・許さない・・・だから俺は行く・・・セレス・・・お前はジェイルの所にいる・・・ネクロを潰し終えたら俺も戻る」

そう言つて飛行魔法を発動させベルカの自治区に向かって行つた・・・残されたジェイルとセレスは

「やれやれ・・・そんなに家族が心配なら傍にいれば良いのに」

そう言つたジェイルにセレスは

「王は・・・とても苦しんでいる・・・護りたい者を護れなかった・・・自分ではもう護れない・・・そう感じ・・・自分の心の空の中に閉じ籠っている」

ジェイルは頭をがりがりと掻きながら

「そうか・・・こればかりは言葉でどうこうなる物ではないか・・・待つしかないな・・・」

ジェイルがそう言つとセレスは杖で自分の足元を叩き

「私もそちらに戻る・・・王が休める環境を用意しなければ・・・」

そう言つとセレスは転移魔法を発動させ、その場から消え去つた・

「キキ・・黒騎士・・黒騎士!!」

私はベルカの自治区でネクロと対峙していた、聖王教会の近くの
で結界を張つてから戦闘体制を取つた・敵は・・LV1が15・

「殺せ!!彼の者を殺せバ!!王が喜ばれるゾ!!」

LV2が10・・そして

「グオオツ!!」

龍の様なLV3が1体・私はそいつらを睨みながら

「俺を殺す?・・はっ!!やってみろ!!逆に俺が貴様らを殺し尽
くしてくれる!!」

私はそう言つと右目の前に手を持つて行く、それと同時に黒い魔力
が私の身体を包み込み・身体を作り変えていく

「ディランス・・世界の中心で泣き続ける大悪魔龍!!!(ディア
ボロ・ダス・エクストリーム・トラウリヒ・ドラッヘツ)!!」

禍々しいまでの黒い甲冑に蝙蝠の翼・・そして顔の右上を隠すよう
な仮面・・私は自分の身体が変化したのを確認してから

「ウウウ・・グオオオオツ!!!!」

咆哮と共に魔力波を打ち出した・

「ギヤアアアッ！！！！」

その咆哮に耐えられなかったLV1が全て消滅する・耐えたLV2も全身に輝が入っていた・無傷なのはLV3だけだった・私はそれを確認すると地を蹴った・これが戦いの・いや・虐殺の始まりだった・

「オオッ！！！！」

武器を片手に襲って来るネクロを両手の爪で引き裂き消滅させる、私の影から襲って来た者は尻尾と翼で引き裂き消滅させる・物の数秒で10体居たLV2は跡形も無く消えていた・

「グルル・・・グオオオオッ！！！！」

突っ込んできたLV3を片手で受け止め

「消える・・・目障りだ」

私は左手に溜め込んでいた魔力をゼロ距離で打ち込んだ

「ッ・・・ギヤアアアアッ！！！！！！」

凄まじい悲鳴を挙げながら消滅していくLV3を見ながらディランズを解除する・それと同時に

「う・・・げほッ！！！！げほッ！！！！・・・はあ・・・はあ・・・」

蹲り血を吐き出す・・・ディランズは発動者の命を削りその凄まじい

力を発揮する・・・短い時間でも発動した以上・・・私の身体は内部から壊れ始めていた・・・私は手の甲で血を拭いながら

「はぁ・・・はぁ・・・まだ・・・死ぬ訳には・・・いかん・・・」

木に背中を預け無理やり立ち上がり

「全てが・・・終るまでは・・・俺は死ねん・・・」

ジオガデイス、そしてダークマスターズを殺し終えるまでは私は死ねない・・・私は口を押さえながらその場を後にしようとした時

「!・・・はやて・・・」

見てしまった聖王教会から出てくる、はやての姿を・・・なのはとヴィータと何かを話しているはやての姿を見て、私は一瞬会いたいと思った・・・嫌われていても良い・・・少しだけでもはやてと話をしたかった・・・私が無意識で足を一步前に踏み出した瞬間

ズキッ!!

「うつ・・・うぐッ・・・」

右目に激痛が走りその場に蹲る・・・その間にはやて達は行ってしまった・・・私は右目を押さえながら

「くく・・・はは・・・未練がましいな・・・私は・・・もう守護者じゃないんだ・・・」

そうあの時守護者である私は死んだ・・・ここにいるのは

「そうだ・・俺は・・ただの復讐者・・もう2度とはやて達の前に姿を見せる事は・・許されない人間だ・・」

ゆっくりと立ち上がり自分の手を見る・・私の手は黒く薄汚れていた

「そうさ・・この手はもうネクロの血で汚れてる・・こんな手ではやて達に触れる事は出来ないんだ・・」

私はそう呟きコートからサングラスを取り出し

「もう俺には名も・・優しさも・・命さえ・・必要無い!!」

サングラスを身に付けながら空を見て

「もう2度と引き返せない道ならば・・俺は全てを捨て行く!!」

もう2度と会う事は出来ない・・砕けた盾に価値は無いのだから・・ここに今あるのは復讐者の牙・・ならばそれで良い・・この牙で私の大切な者を傷つける者を全て破壊するのみ・・私はコートを翻しながらその場を後にした・・その頃はやて達は

「はやてちゃん・・聖王教会に何の様だったの?」

そう尋ねて来るのはちゃんに私は

「兄ちゃんの搜索依頼や・・」

2年前から行方不明になっている私の最愛の人・・・八神龍也の搜索依頼をしたと言うと

「はやてちゃん・・・そうだね・・・龍也さんが死ぬ訳無いもんね・・・」

そう呟くのはちゃん・・・なのはちゃんも兄ちゃんが好きで・・・私からすれば敵なのだが・・・どうしても嫌いになりきれない・・・私はそんな事を考えながら空を見上げながら

（私は兄ちゃんに謝らないかのや・・・）

兄ちゃんが居なくなる前の日私は生まれて初めて兄ちゃんと喧嘩した・・・そして帰って来るなど言った・・・だから兄ちゃんは帰って来てくれないのだと私を思っていた・・・あの時兄ちゃんの死体は見つからなかった・・・だから生きてるに違いないのだ・・・

（絶対・・・見つけてみせる・・・それで謝るんや・・・）

兄ちゃんに拒絶されようが・・・私には謝るしかない・・・そうそれしか出来ないのだ・・・どんな時も傍に居てくれた・・・私を護ってくれた・・・その人に私は酷い事を言った・・・だから・・・私は謝りたいのだ・・・謝って謝って・・・嫌いなんて言っただのは嘘や・・・大好きだって言いたいのだ・・・私は澄んだ青空を見ながら

（兄ちゃん・・・私はどんな事をしても・・・貴方を見つけます・・・）

私はそんな事を考えながらベルカ自治区を後にした・・・擦れ違う守護者と夜天が出会うのはこれから6年後の事・・・その時止まっていた時が・・・再び動き始めるのだった・・・

ナイト P V 2
終り 5 0 0
0 0 0 記念番外編
エピソード・オブ・ブラック

うーん・・考えてた話だったんですけどね・・中々書き起こすのは難産でした・・楽しかったんですけどね（笑）ちなみに黒騎士の時の龍也のイメージは劇場版ナデシコのアキトだったりします・・判った方居ますかね？・・居てくれた方が居たら嬉しいんですけどね・・それではおまけでデイルランスの詳細を紹介します！！

デイルランス

一時的にネクロの領域に足を踏み入れ、魔力、身体能力を爆発的に跳ね上げる禁呪、一時的にしるネクロの領域に近付くという事は大変危険であり、下手をすればそのままネクロと化す危険性を持つ、身体の変化は一定ではなく使用者の魔力や、性格、心などに大きく影響を受ける、龍也の場合龍であり、その能力は凄まじく高い、ネクロに近い特徴を持つ為再生能力に加え魔力吸収に加えダークマスターズの技の再現も可能である、だがその凄まじい力は内部を破壊し寿命を削る・・本来はこのノックバックを減らす為にユニゾンありで行うのが基本的使用方法である

PV2 / 500 / 000 記念番外編 愛って・・・難しいね・・・（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！PV記念でヤンデレ化のリクエストの番外編です！！今回病むのは「オットー」ただ病むのではなく私が考える最悪に怖い「ヤンデレ化」です、そのほかには「なのは」「シグナム」「デイド」も登場しますが病んではないです、今回病むのはあくまでオットーだけです！！それではPV2 / 500 / 000 記念番外編始まります！！

PV2 / 500 / 000 記念番外編 愛って・・・難しいね・・・

PV2 / 500 / 000 記念番外編 愛って・・・難しいね・・・

「むー兄様・・・最近僕と遊んでくれない・・・」

足をパタパタとさせながらむくれてるのはオットーだ・・・見た目は男の子の样だがちゃんと恋する乙女だったりする・・・彼女の不満は龍也が構ってくれないという事だった・・・頬を膨らます僕にデイドが

「でも、忙しいのも本当だから無茶を言うのは良くないと思います」

そう言いながらヴァイスから買った写真をアルバムに貼り付けるデイドに

「無茶も言うもん！！ここ2ヶ月僕兄様に遊んで貰ってないもん！！」

足をバタバタさせながら言うとおデイドは溜め息を吐き

「それでは明日何か仕掛けますか？明日は殆どの人が出払って、六課に居るのは私とオットーそれになのはとシグナムだけになりますから、邪魔されませんよ？」

そういうデイドの言葉を聞きながら考える、4人かぁ・・・兄様は独占して良い人じゃないし・・・やっぱり皆で仲良くって言うのが僕は一番良いかな？・・・オットーは龍也を好きな者が多いのも理解し、

尚且つ独占して良い人でもないと解釈している、だからオットーが望むのは皆で仲良く暮らすという物だったりする・僕は暫く考え
「うん！それで行こう！！ちょっと・兄様を怖がらせたいし・
ね・」

僕はそう笑い、なのはとシグナムに連絡を取った・僕の考えた事を話すと2人は最初こそ乗り気ではなかった様だが、最終的に僕の話に乗って来た、僕はクスクスと笑いながら

「兄様・女の娘って・ほっとくと・怖いんだよ・」

そう呟いた、それを見ていたデイドは

「オットーは怒ると病みますからね・仕方ないですね・」

オットーはどちらかと言うとチンクのようなタイプなのだが、怒ったり、あんまり長時間ほおっておくと病み化すると言う特徴を持っていたりする・

「うふふ・兄様・兄様・うふふ・」

隣でおかしそうに笑っているオットーを見ながら

(こ・怖いですね・もう2度と見たくないと思ってたんですけど・)
ど・)

私が戦慄してるとなのはが

「あの・・・デイド？・・・オットーが壊れてるんだけど？」

恐々と私に尋ねて来るのはに

「オットーは怒ったり、あんまり長時間龍也兄様と遊んだり出来ないと、セツテみたいになるんです」

そんな話を話してると

「僕ね・・・兄様をこれで捕まえようと思うの・・・」

オットーがレイストームを発動させながら呟く、それにシグナムが

「いや・・・それはやり過ぎ・・・うるさいなあ・・・！！」

オットーがレイストームを剣型に変化させシグナムに突きつける

「僕はね・・・寂しいのが嫌なの・・・だから兄様に遊んで欲しいの・・・判る？邪魔しないで・・・シグナム達も一緒に良いから・・・2人も兄様に遊んで貰ったりしてなくて・・・暇でしょ？・・・だから一緒に良いから・・・ねっ？・・・僕の邪魔しないで」

クスクスと笑うオットーにコクコクとシグナムが頷くとレイストームを消して

「それじゃあ・・・僕・・・兄様を捕まえてくるよ・・・」

ウフフと笑いながら歩いて行くオットーは、はつきり言って超怖い・

・私がそんな事を考えてるとシグナムが

「デイド・・オットーがセツテより怖いぞ?・・どういう事だ?」

そう尋ねて来るシグナムに私は

「オットーは我慢して、我慢して、それが限界になると怖くなるんです・・これは私の個人的な意見ですが・・はやてに匹敵すると私は思います」

私がそう呟くとなのはとシグナムはコクコクと頷き、そして2人同時に

「龍也さん・・大丈夫かな?」

「兄上・・無事だと良いが・・」

龍也兄様を心配する2人に私は

「多分大丈夫ですよ・・」

私はそう呟き、龍也兄様の無事を祈っていた

「ゾクツ!・・・何だ?・・この寒気は?」

私は急に凄まじい悪寒を感じその場に立ち止まった、底冷えするような殺気に似た雰囲気、私が驚いていると

「あはは・・・兄様・・・見つけたあ・・・」

オットーが私を見つけたと言い歩いてくる、私とその妙な気配に困惑し一歩下がろうとすると

「嫌だよ・・・逃げないでよ・・・」

オットーがレイストームを発動させる、私が慌てて飛び退くと

「だから・・・逃げないでって・・・言ってるでしょ!!」

両手からレイストームを発動させるオットーに

「おおおっ!?!」

訳が判らないが必死で回避する、私が避けたレイストームが六課の壁に当たると

ズドンッ!!

音を立てて壁に大穴が空く、私とその穴を見ながら戦慄していると

「僕ね・・・寂しいのは嫌なの・・・兄様・・・最近僕と遊んでくれないでしょ?・・・だから・・・僕・・・寂しいの・・・判る?」

底冷えするような声で言うオットーに

「悪かった・・・最近忙しかったから・・・構ってやれなかったのは謝る」

私が頭を下げるとオットーはウフフと笑いながら私に抱きつき

「ウフフ・・・暖かい・・・兄様・・・兄様・・・」

ギユウウツ！！！！

こんな細い身体でどこからこんな力が出るのか私は驚いた、凄まじい力で締め上げてくるオットーに

「オットー・・・くっ・・・痛いのだが？」

痛いと言うとオットーはニコリと笑い

「痛いのは当然だよね？・・・これは僕が感じた心の痛みと一緒になんだから」

ギリギリと締め上げてくるオットーはニコニコと微笑み

「僕ね・・・兄様が大好きでしょうがないの・・・でもね・・・無視されたりね・・・構って貰えないと・・・憎く思うの・・・おかしいよね・・・僕こんなに兄様が大好きなのに・・・」

更にギリギリと私を締め上げるオットーは楽しそうに微笑み

「きつと・・・あれなんだ・・・愛情と憎しみは表裏一体って言うよね？・・・僕はきつとそう言うタイプなんだよ・・・だから憎いと思うんだ・・・兄様が・・・遊んでくれないから・・・だから・・・もつと・・・僕と遊んで？・・・僕の話聞いて？・・・じゃないと・・・僕・・・壊れちゃうかも・・・」

美しいとも言える黒い光がオットーの目の中に見えた、私はギリギリと締め上げてくるオットーを怖いと感じた・・私が恐怖を感じてるとオットーは私を抱きしめていた力を緩めた・・私はその場に膝を着いた

「だから・・遊ぼう?・・皆待つてるんだ・・兄様に遊んで欲しくて・・話を聞いて欲しくて・・だから行こう?」

そう言つて手を差し伸べてくるオットーの手を取り立ち上がるとオットーはそのまま腕を絡めて

「覚えててね兄様・・女の娘は・・怒ると・・怖いんだよ?」

ニコニコと言うオットーに私は頷く事しか出来なかった・・

「あ・・龍也さん来たよ」

オットーが龍也さんの腕を抱きしめながら歩いてくる、オットーは楽しそうに笑っているのに対して龍也さんの顔は若干引き攣っていた

「デイド、なのは、シグナム、兄様連れて来たよ」

にこにこ言うオットーは龍也さんの腕を放して

「ほら、兄様座つてよ」

につこりと微笑むオットーに頷き椅子に座る龍也さん

「はい、兄様お茶だよ」

オットーからお茶を受け取った龍也さんはそれを飲んでいたが

プルプル

微妙に身体が小刻みに揺れていた・・私はそれを見て

（オットーになにかされたのかな？）

さっきの究極病み状態のオットーに何かされたのか？とか考えてるとシグナムが

「そうそう兄上、今度買い物に付き合ってくれと言ってましたが、何時買い物に連れてってくれるのですか？」

笑いながら言うシグナムに龍也さんは

「今度の休暇にでも付き合うよ、シグナム」

そう笑う龍也さんを見て、私は

（そうだ、折角龍也さんと一緒に入れるんだから沢山話をしよう）

私はそう考え

「龍也さん、今度の休暇なんですけど・・付き合ってくださいですか？」

シグナムと私の休暇はずれているので喧嘩にはならない、私はそう判断し龍也さんにそう尋ねると

「付き合う？・・買い物か何か？別に良いぞ」

良いと言ってくれる龍也さんに私は一安心した、龍也さんとの予定を取っておくのは至難の業だ、だから邪魔者がいないうちに予定を取り付けておかなければならないのだ、（邪魔者の一例 ティアナ、セツテ、スバル、ヴィータちゃん）私は龍也さんと出掛ける約束を出来た事に安心してると

「兄様、クッキーだよ！！これね、僕が作ったんだよ」

にこにこ笑うオットーは私達の前にお皿を3つ置いた、見た目も良くて美味しそうだった、オットーはそのお皿を見ながら

「食べて、食べて！絶対美味しいから！！」

笑顔で言うオットーに頷きクッキーを食べた龍也さんは

「美味しい・・あんまり甘くないし・・」

驚いたという表情の龍也さんにオットーはえへへと笑いながら

「えっとね、それはコーヒー味ので、真ん中のはチョコで、一番端のは普通の奴なんだ、コーヒー味なら甘くないし兄様でも食べられるよね！！」

笑顔で笑うオットーは私達を見て

「ほらほら、なのはもシグナムも食べて食べて！」

私達にもクッキーを勧めるオットーは本当に楽しそうで、さっきの病み状態と同じ人物には見えなかった・・私はそんな事を考えながらクッキーを齧り、目を見開いた

「美味しい・・オットーこれ美味しいよ・・どうやって作ったの？」

そのクッキーが美味しくてレシピを尋ねるとオットーは笑いながら

「んーとね・・教えて上げたいけど・・秘密・・これはね兄様の為に作る奴だから・・あんまり教えたくないんだ」

そう笑うオットーにシグナムが

「兄上の為に作ったのを私達が食べても良いのか？」

私も気になっていた事を尋ねるシグナムにオットーは笑いながら

「うん！！良いよ！！僕ね〴〵皆仲良くってというのが1番好きなんだ、だからね・・なのはもシグナムもディードもどんどん食べて」

本当に楽しそうに言うオットーは嘘を言っているようには見えず、私とシグナムも勧められるようにクッキーを口に運んだ・・私とオットーがクッキーを食べながら話をしているとディードが

「龍也兄様、今度又お手合わせを頼めますか？・・今度こそ勝てると思うんです」

笑顔で言うディードに龍也さんは

「そうか・・・では今度模擬戦をしよう・・・だが・・・そう簡単に勝てると思うなよ？」

笑顔で言う龍也さんにデイドは

「はい、判ってます・・・龍也兄様には簡単に勝てないのは判ってます・・・でもだからこそ挑む意味があるんです・・・私は龍也兄様を越えたいそして隣を歩いていたい・・・だから・・・挑戦するんですよ」

同性の私でも見惚れるような笑顔で笑うデイドの頭をわしゃわしゃを撫でながら龍也さんは

「そうか・・・では楽しみにしてるよ・・・デイドが私を越える時をな」

楽しそうに笑う龍也さんにシグナムが

「私だっていますよ、兄上・・・私も兄上をいつか超えてみます！」

龍也さんは本当に楽しそうに笑いながら

「そうだな・・・シグナムも居たな・・・うん・・・楽しみにしてるよ・・・シグナムがデイドが私を越える時をな」

にこにこと笑う龍也さんとクッキーを食べながら他愛も無い世間話をし、夕方はやてちゃん達が帰ってくる前に解散となった・・・私は自分の部屋に戻りながら

「えへへ・・・今日は楽しかったな」龍也さんと一杯話も出来たし

デートの約束も出来たし」

私は笑いながら自分の部屋に向かって歩いて行った・・・丁度その頃
デイドとオットーは・・・

「オットー・・・龍也兄様に何したの？」

そう尋ねるとオットーは眉を顰めながら

「うーん・・・本当はあんな風にしなくなかったんだけどね・・・ちょっと・・・うつん・・・大分怖がらせたかな？」

髪を梳きながら言うオットーは天井を見ながら

「今回は確かに怒ってやったけど・・・ちょっと振りもしてたしね？」

笑顔で言うオットーは楽しそうにクスクス笑っていた

「こついつ時、オットーが怖いと思うよ」

私がそう言つとオットーはなんら気にした素振りも見せずに

「そう？でも大事だと思うんだよね」偶にこつベルツナという仮面を被るのは
ね？」

透明な仮面を付けるような素振りをしながらオットーは

「言うてしょ？人は様々な顔を持つて・・・だから今日のは凄く怒った僕の顔・・・って事でさ」

そう笑うオットーに私は

「でも、それで龍也兄様が私達の事嫌いになっただらどうするの？」

そう尋ねると笑ってたオットーは真剣な表情で

「・・・愛って・・・難しいね・・・」

どうやらその可能性は考慮して無かったのか冷や汗を流すオットーに

「明日にでも謝れば？・・・昨日のは振りだったって」

私がそう言うとおットーはこくりと頷き

「うん・・・そうするよ・・・それじゃあ・・・お休みデイド」

そう言うて布団に潜り込むオットーを見ながら

「もうちょっと・・・考えてからやれば良かったのにね・・・」

私はそう呟き布団に潜り込み眠りに落ちた・・・

PV2、500、000記念番外編 愛って・・・難しいね・・・終り

P V 2 / 5 0 0 / 0 0 0 記念番外編 愛って・・・難しいね・・・（後書き）

・・・・どうでしたかね？・・・自分が考える最悪のヤンデレをオットーにして貰いましたが・・・少しオットーのイメージとずれてしまいましたかね？それだけが不安ですね・・・いつも通り感想を心待ちにしています、それでは次のP V 記念番外編の前書きでお会いしましょう

PV2 500,000記念番外編 祝福の風と守護者の密会（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回はリインフォースと龍也の密会
？・・・のお話です・・・純情系になるんでしょうかね？・・・ジャンル
は良く判りませんが・・・面白いと思うのでどうか宜しく願いしま
す！！

PV2 / 500 / 000 記念番外編 祝福の風と守護者の密会

PV2 / 500 / 000 記念番外編 祝福の風と守護者の密会

「あの・・・兄様・・・お願いがあるのです」

私はスカートを握り締めながら言うリインフォースに首を傾げながら

「お願い？・・・私にか？」

そう尋ねるとリインフォースはコクコクと頷く

「頼みとは何だ？」

そう尋ねるとリインフォースはちょこちょこと歩いて来て私に耳打ちする

「ふむ・・・成る程・・・判った付き合おう」

私がそう言つとリインフォースは嬉しそうに微笑みながら

「それではこの事は主はやてには秘密でお願いします・・・」

そう言つて歩いていこうとしたリインフォースは赤面しながら振り返り

「あの・・・一緒に寝るのって・・・駄目ですか？」

小動物の様に言うリインフォースに

「別に良いよ・・・おいで」

そう言うとしンフォースは嬉しそうに微笑み

「ありがとうございます!!」

笑顔で抱きつき眠りに付こうとするしンフォースの頭を撫でながら

（本当にしンフォースは甘えん坊なんだな・・・）

私はそんな事を考えながら眠りに落ちた・・・次の日

「それでは手筈通りをお願いします」

そう言うて部屋を出て行ったしンフォースを見ながら

「さてと・・・着替えるか・・・」

私は私服に着替え、はやて達に見つからない様に自分の部屋を後にした

「休日に買い物・・・うーん・・・良いねえ・・・」

私は腕を大きく伸ばしながら呟いた、ティアも誘ったのだが用事があると言って一緒には来てくれなかったのだ・・・

「うーん・・・私どういのが良いか判らないよ・・・困ったなあ・・・」

龍也さんなら何かアドバイスくれたかもしれないのになぁ・・・」

私はそんな事を考えながら街中を歩いていた・・・

「あれ？・・・龍也さんとリインフォースさん？・・・どうして？・・・今日用事とか言って無かっただけ？あれ・・・もしかして・・・デート？」

私は龍也さんとリインフォースさんを見ながらそう呟いた

「ふむ・・・これ等はどつだろうか？」

Tシャツを持ちながら言う龍也さんに

「そうですね・・・良いと思いますよ？」

そう笑うリインフォースさんに龍也さんは

「違う違う、お前にどうかと聞いているんだ」

「えっと・・・私にですか？・・・どうでしょうか？」

首を傾げるリインフォースさんと龍也さんの雰囲気はとても良いと思っただ・・・って！

「じゃなくて！！・・・え・・・嘘・・・龍也さんとリインフォースさんが・・・？」

龍也さんにとってはリインフォースさんは妹の筈なのだが・・・私がそんな事を考えながら龍也さんの後姿を見ると

「ん？」

龍也さんがこちらを向く私が慌てて隠れると、リインフォースさんが

「兄上様？・・・どうしたのですか？」

そう尋ねると龍也さんは

「誰かに見られてる気がしたのだが・・・気のせいだった様だな・・・」

そう呟く龍也さんにリインフォースさんが

「申し訳ありません、兄上様・・・折角の休みを私なんかと付き合つて頂いて・・・本当はヴィヴィオと一緒に遊びに行きたかったのではないですか？」

リインフォースさんが謝ると龍也さんは笑いながら

「いいや・・・私は嬉しいな・・・リインフォースの方からこういう風に誘ってくれたんだしな・・・」

「あ・・・兄上様・・・」

真っ赤になるリインフォースさんを見て

「不味いつて・・・嘘嘘・・・え・・・もしかして・・・付き合ってる？」

その桃色の雰囲気には慌てて

「と・・・とりあえず・・・部隊長に連絡を・・・」

私は部隊長にこの光景をメールで送った・

「ん？スバルから・メール・これは！！」

私はそのメールを見て目を見開いた・そこにはリインフォースと兄ちゃんがカフェで笑いながら、ジュースを飲んでいた・私がメールを見てるとスバルから

「ぶ・部隊長！・わ・私はどうすれば！？」

慌てて言うスバルに私は

「とりあえず監視！！2人が必要以上に接近するのを止めるんや！
！私も直ぐ行く！！」

そう言って電話を切って

「積極的になれとは言ったけど・私に内緒で動くとは・ええ覚悟しとるな・リインフォース」

私は怒りで目の前が真っ赤になって行くのを感じながら

「さーて・悪い娘にお仕置きしに行こか・」

私はそう呟き六課を後にした

「兄上様・・・これなんてどうでしょう?」

私がそう言つと兄上様は

「ふむ・・・パールツクか・・・私も着るのか・・・少し恥かしいのだが・・・」

私と兄上様はそんな話をしていると

「すみませーん!!これ買います!!」

横から走つてきた者がそれを買つてしまった・・・

「今のは良いと思つたのにな・・・」

私がそう呟くと兄上様は私の頭を撫でながら

「仕方ない・・・次の買いに行こう・・・」

そう言う兄上様に頷き移動を再開した

「このイヤリングはどうでし」「これ、これ買います!!!!」・・・むう・・・」

私がおかを買おうとするたびに割り込んで買つてしまふ、者に眉を顰めてると

「ふむ・・・今日はついてないな・・・まあ・・・必要な物は買つてあるし・・・良いじゃないか」

そう笑う兄上様に頷いていると

「ふう・・・」

妙に疲れを感じたため息を吐くと兄上様は

「疲れたのか？・・・少し静かな所で休むか？」

そう言う兄上様に頷いた・・・慌てたのはそれを見ていたスバルだ

「うわわわ・・・し・・・静かな・・・と・・・所！？は・・・早く部隊長来てくださーい」

私が慌ててる間に龍也さんとリインフォースさんは歩いて行ってしまった・・・

「今日は・・・楽しかったです・・・兄上様」

ふらつきながら言うリインフォースさんに龍也さんは

「疲れたんだな・・・少し座って休むと良い」

そう言うと龍也さんは石段に座った・・・私はそれを見ながらしゃがみ込み

「はぁ・・・今日は何か疲れたな・・・でもデートは妨害したいし・・・

龍也さんがリインフォースさんと付き合っちゃうのは嫌だしなあー！！膝枕！！良いなあ・・・」

龍也さんがリインフォースさんに膝枕をする・・・私が羨ましいと思っ
ていると

「ふふ・・・こうしてみると子供みたいだな・・・」

眠っているリインフォースさんの頭を撫でながら

「全く・・・大人なんだか子供なんだか・・・良く判らん・・・だが・・・
可愛い・・・」

穏やかに微笑む龍也さんを見ていると

「見つけたでッ！！！！兄ちゃん！！」

部隊長が走ってくる、それだけでは無くなのはさんやヴィータさん
の姿も見えた・・・私がそれを見て茂みから飛び出すと

「スバル？それにはやて・・・如何してここに？」

リインフォースさんの頭を撫でながら言う龍也さんに部隊長は

「むー兄ちゃんの膝枕は・・・私のなんやー！！！！」

怒ったように部隊長が言うと

「ふえ・・・あ・・・主はやて！？・・・どうして？」

慌てるリインフォースさんに龍也さんが

「どうやらバレテたようだ」

頭を掻きながら龍也さんが言つとインフォースさんが

「そ．．そうなのですか．．驚かせようと思っていたのに．．しょうがないですね．．」

まさか．．告白！？私が慌ててるとリインフォースさんが

「主はやて．．随分遅れましたが．．どうぞ．．私からの誕生日プレゼントです」

へっ！？皆の目が点になる中龍也さんが

「リインフォースがな、今まで誕生日プレゼントを贈れなかった事を気にしててな．．今日選ぶのを付き合ってくれと言われたんだ」

そう言われた部隊長は嬉しそうにその箱を抱き抱え

「ありがとう．．リインフォース．．兄ちゃん．．私．．凄く嬉しいで．．」

にこにこと笑う部隊長を見て良かったと思つてると

ガシッ！！！！

私の肩に手を置かれる．．私は冷や汗を流しながら

「スバル・・・人騒がせな事して・・・覚悟は出来てる？・・・お話・・・
しょうか？」

ウフフと笑っているのはさん達に、死んだと思った瞬間

「そうだ！折角皆居るんだ、このままどこかに物を食べに行こうか？・・・私が奢るぞ」

そう言う龍也さんに頷き皆で夕食に行ったが・・・その際・・・なのは
さんとヴィータさんが

「明日の訓練は厳しいよ？」

「覚悟しとけよ・・・」

凄まじい怒りの気迫を滾らせる、2人に明日こそ死を覚悟していた・
・私が震えてる頃

「ごめんな・・・私勘違いしてたわ・・・」

「勘違い？・・・何の事ですか？」

首を傾げてるリインフォースさんが幸せそうに見えた・・・

外で夕食を食べ終えた後・・・私は自分の机の上に置かれた箱を見ながら

「はやてとのパールツクか・・・これ・・・何時着ようか？」

スバルが夕食後、謝罪と共に私とはやてにと返してくれたのだ・・・だが何時着れば良いのか私は首を傾げた・・・

「まあ・・・良いか・・・はやてが喜んでるみたいだし・・・」

私とお揃いという事で酷く喜んでいたので良いかと思いながら本を読んでる居ると

コンコン

扉を控え目に叩く音が聞こえ私は苦笑しながら

「鍵は開いてる・・・おいではやて」

そう声を掛けるとパジャマを着たはやてが

「何で判ったんや？私やって？」

驚いたという表情のはやてに

「何となくだな・・・そんな気がしたんだ」

私がそう言うとはやては

「超直感って奴？・・・やっぱ兄ちゃん凄いわ」

楽しそうに笑うはやてに

「おいで、寝る前に一緒にお茶でも飲もう」

はやてに貰ったティーカップを見せながら言うと、はやては嬉しそうに微笑み

「うん！！飲むで」

笑顔で言うはやてのカップに紅茶を淹れると

「ありがとう兄ちゃん」

笑いながらお茶を飲みながらはやては

「兄ちゃん、今度の休みにリインフォースに買って貰ったペアルック着て、デートしよ」

私はその言葉に頷きながら

「良いよ、一緒に好きな所に行こうな」

そう言って頭を撫でるとはやては嬉しそうに目を細め

「えへへ・・・私な・・・こうやって兄ちゃんと一緒に話したりするのが私は大好きや」

私はその言葉に微笑みながら

「そうだな・・・私もだよ」

暫く2人でお茶を飲みながら話をし

「ふああああ・・眠くなって来たわ・・」

目を擦りながら言うはやてに

「一緒に寝るか？」

そう尋ねるとはやては

「良いの？」

首を傾げながら尋ねて来るはやてに

「良いも何も、最初からそのつもりだったんだろ？」

そう言うとはやては舌を出しながら笑い

「バレテた？」

私ははやての頭を撫でながら

「当たり前だ・・何年一緒に居ると思うんだ？」

そう言うとはやては

「そうやね・・そりゃバレルか・・うんじゃ・・一緒に寝よ!!」

嬉しそうに言うはやてに

「はいはい・・何時まで経ってもはやては甘えん坊だな」

私はそう言いながらはやてと一緒に寝室に向かった

「んゝえへへ．．暖かい．．」

私の胸に顔を埋めながら言うはやての頭を撫でながら

「そうか．．寝にくくないか？」

そう尋ねるとはやては上目目線で

「うん．．寝にくくないで．．暖かくて．．安心できる．．兄ちゃんと一緒に安眠出来るんや」

私はその言葉に苦笑しながら

「そうか．．それじゃあ．．おやすみ．．はやて」

はやての背を撫でながら言うとはやては

「うん．．おやすみなさい．．私の．．大好きな．．大好きな．．兄ちゃん」

私の胸に顔埋めて言うはやてに

（兄離れさせるのは．．もう無理かもな．．）

私ははやてを兄離れさせるのはもう無理だと思いながら眠りに落ちた．．

P
V
2
5
0
0
0
0
0
0
記念番外編
祝福の風と守護者の密会
終り

PV2 / 500 / 000 記念番外編 祝福の風と守護者の密会（後書き）

どうでしたか？自分では中々手応えのある話だったのですが・・・いつも通り不安なわけですよ・・・ガラスハートですからね・・・私は・・・直ぐ不安になってしまふんですよね・・・だから感想を貰えると自信が付く上に執筆のテンションも上がるわけですよ、また今回のテーマは龍也さんが兄離れさせるのは無理だと思い始めたというのが話もう1つのテーマでした、こう・・・あれなんですよこれも好かれるとやはり邪険には出来ないと言う龍也さんの心境の変化と言う訳ですね、それでは次回の記念番外編で又お会い致しましょう！！

PV2 / 500 / 000 記念番外編 ヴィヴィオの授業参観 父母参観編（前書

どうも今回の番外編は「ヴィヴィオ」の話になります、タイトル通り、ヴィヴィオの授業参観 父母参観編です、誰がヴィヴィオの母親役になるのか楽しみにしてください！！それではPV2 / 500 / 000 記念番外編始まります

PV2 / 500 / 000 記念番外編 ヱィヱィオの授業参観 父母参観編

PV2 / 500 / 000 記念番外編 ヱィヱィオの授業参観 父母
参観編

「パパ・・ヱィヱィオどうしよう・・」

ヱィヱィオは落ち込んだ様子で、鞆から一枚のプリント取り出し、私に見せてくる

「これがどうしたんだ？」

首を傾げながらプリントに目を通して、私は

「そうか・・ヱィヱィオ・・今から六課に行こうか？」

俯きスカートを握り締めているヱィヱィオにそう尋ねると

「六課に？・・どうするのパパ？」

訳が判らないと言う表情のヱィヱィオに

「皆に頼んでみよう・・誰か引き受けてくれるかも知れない」

私はそう言うつとヱィヱィオを抱き上げ自分の家を後にした・・机の上に置かれたプリントには

『ヒルデ魔法学院 父母参観のお知らせ』

と書かれていた・

「皆に頼みがある!」

私はヴィヴィオを肩に乗せ、食堂に居る皆にそう言つと

「兄ちゃんが私達に頼み?・・・何や?」

首を傾げるはやて達の前にヴィヴィオを降ろし、ヴィヴィオの頭を撫でながら

「誰か・・・ヴィヴィオの母親になってくれないか?」

私がそう言つと

ギュッピンッ!!!

はやて達の目が妖しく光る、私が説明不足だったか?と内心慌てるとヴィヴィオが

「明日ね・・・学校で父母参観があるの・・・だから・・・誰か明日一日だけで良いの・・・ヴィヴィオのママになってくれるね・・・居る?」

スカートを握り締めながら言うヴィヴィオを見ながら、誰か引き受けてくれるだろうか・・・と私が不安を感じてると

「私がヴィヴィオのママやります!」

「ティアナ!何言ってるの!!!私がやるよ!!!」

「ティアナじゃ、母親はまだ無理だよ!!」

「やっぱ・・・ここは胸の大きい私がやるっすよ」

ウェンディがそう言うと、なのはとティアナが

「黙れッ!!」

少し残念な胸の2人が同時に拳を繰り出し、ウェンディの鳩尾を捉える

「げふ・・・酷い・・・っす・・・」

崩れ落ちるウェンディを見ずに、激しく口論をする、なのはとフェイトにティアナを見ながら、その席の反対側を見ると

「スバル・・・私って母親で行けるかな？」

「どうだろう・・・歳が・・・ネックかも・・・」

「私では・・・背とか・・・胸で駄目だろうな・・・」

食堂の隅でスバルとノーヴェ・・・それにチンクがぶつぶつと相談をし

「ヴィヴィオのママって事は・・・兄ちゃんのお嫁さん・・・えへへ」

「兄貴の・・・妻・・・にゆふふ」

「龍也様の・・・物に・・・あはは・・・」

はやて、ヴィータ、セツテは・・・どこか別の世界を見始めてしまっていた・・・暫くその争いを見ていたがヴィヴィオがちょこちょことはやて達の前に行き

「はやてねね・・・ヴィータねね・・・セツテねね・・・ヴィヴィオのママになつてくれる？」

はやて達の服の裾を引っ張りながら言う、それを見たのはとティアナ達は

「ヴィヴィオ・・・わ・・・私じゃ駄目なの？」

なのはがしゃがみ込んで言うつとヴィヴィオはそっぽを向き

「ヴィヴィオ・・・乱暴な人嫌い！喧嘩するのはねね達は嫌いなのです！！」

そう言うヴィヴィオ・・・争っていた面々はその場で崩れ落ちた・・・主に・・・

「・・・あううう・・・わ・・・私の・・・馬鹿・・・」

なのはとフェイトとティアナだった・・・3人は目の幅の涙を流しながら食堂から歩き去った・・・

「うーん・・・やっぱ・・・私じゃ母親は無理か・・・しょうがねえか・・・」

しょうがないと言いながら泣きそうなノーヴェに

「大丈夫・・・まだ時間はあるよ」

ポンポンと肩を叩くスバルを見ながらチンクが

「どこかに食べに行こう・・・スイーツバイキング等どうだ？」

そう言われたノーヴェとスバルは

「行くよ、チンク姉」

「すみません、ご馳走になります」

そう言つてチンク達も食堂から消えた・・・それから数分後

「あいてて・・・なのはもティアナも乱暴つす・・・シャマルに見て貰おう」

そう言つて鳩尾を押さえながら歩いて行くウエンディを見ながら隣を見ると

「「ジャンケン・・・ポンッ！！・・・あいこでしょ！！」」「」

はやてとヴィータとセツテがジャンケン合戦を見てるとヴィヴィオが

「誰かな～誰がヴィヴィオのママになってくれるのかな～」

嬉しそうに言うヴィヴィオの頭を撫でている内にジャンケンの決着が付いた・・・次の日

「兄貴・・・わ・・・私がヴィヴィオのママ役で大丈夫かな？」

六課の前で言うヴィータ・ジャンケンでヴィヴィオの母親役になったのはヴィータだった・ヴィータが不安そうに言う、私はヴィータの頭を撫でながら

「大丈夫だ・・そんなに不安がらずに・・何時も通りにやれば良いさ・・それでは行こうか・・」

私はヴィータと一緒にヒルデ魔法学園に向かった・・

「もうすぐかな・・もうすぐかな？」

休憩時間に私は椅子に座りながらパパとヴィータねねが来るのを楽しみにしていた・・

「ヴィヴィオちゃん、パパ着てくれるの？」

隣のマリアが尋ねて来る、私は笑いながら

「うん！パパとね、ヴィータねねが来てくれるの！」

私がそう言うとマリアは

「そっかゝ八神大将来てくれるんだ・・良かったね！」

良かったねと言ってくれるマリアに頷いてると

ガラリ

音を立てて教室の戸が空く、私が教室の入り口を見るとそこには、パパとヴィータねねが居た、私が嬉しくてパパの方を行くと

「ごめんな・・ヴィヴィオ・・1時間目には間に合わなかったようだな」

私を抱き上げ言うパパに

「うっん、良いよパパ来てくれたし！」

私が笑いながら言うとヴィータねねが私の頭を撫でながら

「私がママ代わりになるかどうかは判らないけど・・頑張るからな」
そう言うヴィータねねに頷いてると

「はい、それでは2時間目を始めますよ」

先生が手を叩きながら言う、私は椅子に座る

「2時間目はハンカチを作りますよ・・布を配りますからね」

先生がハンカチの材料を配ってくれる、私がそれを後ろに回すと先生が

「それでは、お父さんとお母さんと一緒に作りましょうね、どうぞ親御さん達も座ってください」

先生がそう言うつとパパとヴィータねねが私の両隣に座る

「ハンカチ作りか・・・懐かしいな」

そう笑うパパを見てるとヴィータねねが

「えっと・・・どうするんだろう・・・？」

針を見ながら首を傾げるヴィータねねにパパが

「はいはい・・・私が教えよう、こうやってやるんだよ」

そう言うつてハンカチの縫い方を教えてくれるパパを見ていると、その隣で

「あう・・・わ・・・私・・・女なのに・・・兄貴の方が上手いなんて・・・」

ショックを受けてるヴィータねねに

「大丈夫だよ、パパが今度教えてくれるよ」

私がそう言うつとヴィータねねはコクリと頷き

「そうだな・・・うん・・・兄貴に教えて貰って裁縫も出来るようにするよ」

神妙な表情のヴィータねねに

「うん！頑張つてね！..」

私はそう言つてパパに教えて貰いながら、ハンカチを縫い始めた・

「はい・・出来ましたね・・どうですか？上手く出来ましたか？」

そう尋ねて来る先生に

「はいッ！！ヴィヴィオ上手に出来たよ」

ハンカチを持ち上げながら言つと

「そうですか・・それは良かったですね・・それでは家庭科の授業は終わりです」

そう言つて出て行く先生を見ながらパパに

「はい、ヴィヴィオが作ったハンカチパパに上げる」

そう言つてパパにハンカチを手渡すと、パパは私の頭を撫でながら

「ありがとう、ヴィヴィオ大切にするよ」

笑いながら言つてパパに

「うん！大切にしてね」

パパと話しているとヴィータねねが私を膝の上に乗せながら

「ヴィヴィオ、次は私が頑張るからな」

そう言うヴィータねねに

「頑張つて！ヴィータねね！！」

次の授業は数学で、ヴィータねねは

「書類整理で数字は見慣れてるからな、全然平気だぜ、ヴィヴィオ・ここはこうでな・・こうするんだ」

数学を教えてくれるヴィータねねに

「うん、こうだね！・・ヴィータねね！！凄いね！凄く判り易いよ！！」

私が笑いながら言うとヴィータねねは嬉しそうに笑いながら

「へへっ！これくらいなら何時でも教えてやるぜ」

ヴィータねねがそう言うとパパは

「うんうん、ヴィータは良い娘だな」

そう言つて頭を撫でるパパにヴィータねねは顔を紅くしながら

「へへ・・褒めてくれてありがとう・・」

私は嬉しそうなヴィータねねを見ながら

（もしかすると本当にヴィータねねがヴィヴィオのママになってくれるかも・・あっ！でもヴィータねねだけじゃなくて、はやてねねも一緒だと良いな）

私はそんな事を考えながら、授業を受けていた・・・パパとヴィータねねと一緒にたつたから授業が楽しくて・・・うん・・・何時も楽しいけど・・・もっと楽しいと思ったのだ・・・楽しい時間はあつという間で帰りの時間になった・・・パパとヴィータねねと手を繋ぎながら私は

「えへへ・・・今日は来てくれてありがとう！パパ、ヴィータねね！」

ヴィータねねの顔を見ながら言うと、ヴィータねねは笑いながら

「そんな事、気にしなくて良いぜ、ヴィヴィオ・・・私で良かったら何時でも来てやるかな」

私はその言葉に笑いながら

「へへ・・・ありがとう！ヴィータママ！」

私がそう言つとヴィータねねは目を丸くして

「へっ？・・・今・・・私の事・・・ママって言った？・・・も・・・もう一回！もう一回言ってくれ」

そう言つヴィータねねに笑いながら

「ヴィータママ、早く帰ろう！パパが待ってるよ！」

先の方で振り返って待っているパパを指差しながら歩き出すと

「ママ・・・良い響きだ・・・うん・・・今行くよ」

そう言って歩いてくるヴィータね．．私はパパの方に歩いていきながら

（えへへ．．やっぱり．．ヴィヴィオ．．パパだけじゃなくてママも欲しいな）

そんな事を考えながら私は夕焼け道を歩いていた．．

「んふふゝヴィータママ」

ベッドの上でヴィータに頭を擦りつけながら笑うヴィヴィオに

「どうして、ヴィータの事をママって言っただ？」

私がそう尋ねるとヴィヴィオは笑いながら

「だって、今日一日はヴィヴィオのママになってくれるんだよね？だからママって言っただけ！」

笑いながら言うヴィヴィオを抱き抱えながらヴィータは

「そっか．．うん．．良いよおいでヴィヴィオ、今日は私がヴィヴィオのママだよ」

嬉しそうに言うヴィータ．．私はヴィヴィオとヴィータを見ながら

（ヴィヴィオには．．母親が必要なのかもしれない．．そろそろ．．

結婚を考える時期だろうか？)

私は男である以上、ヴィヴィオの父親になれても母親にはなれない・だからそろそろ結婚を考える時期なのだろうかと1人物思いに耽つてると、ヴィヴィオが私の手を引いて

「パパ、早く寝んねしよ・・ヴィヴィオ・・眠いよ・・」

目を擦りながら言うヴィヴィオの頭を撫でながら

「そうだね・・それじゃあ寝ようか」

私とヴィータでヴィヴィオを挟みながら横になると、ヴィヴィオは嬉しそうに笑いながら

「パパ・・ヴィータママ・・大好き・・」

そう言つて眠りに落ちてしまったヴィヴィオの髪を撫でながら

「ヴィータ、今日は悪かったな・・折角の休日だったのに」

私が謝るとヴィータは笑いながら

「良いよ・・全然気にしてないし・・それにママって言われるのは・・そんなに悪い気はしなかったしな」

私はそう笑つヴィータの方に身を乗り出し

「ありがとう・・ヴィータ・・それとおやすみ・・」

そう言つて額に軽く触れるだけのキスをすると、ヴィータは耳まで真っ赤になりながら

「うん・・・お・・・おやすみ・・・兄貴」

そう言つて布団に潜り込むヴィータを可愛いなと思いながら、私も眠りに落ちた・・・次の日

「えへへ・・・はやてママとヴィータママおはよう!」

笑顔でそう言つヴィヴィオにヴィータとはやてがが

「ま・・・まだ・・・私の事ママって言つてくれるのか?」

「私もママって言つてくれるん?」

抱き上げながら尋ねるヴィータと、その隣で尋ねるはやてにヴィヴィオはにっこりと微笑み

「えへへ・・・ヴィヴィオ・・・ママって言つての好きになつたみたい・・・」

そう言つてヴィータに頭を擦り付けるヴィヴィオを見て、なのは達が

「わ・・・私も・・・ママって言つて!」

ヴィヴィオに近寄ろうとするとヴィータとはやてがなのは達からヴィヴィオを遠ざけながら

「駄目だ!駄目だ!・・・ヴィヴィオのママは私とはやてなんだよ!」

そう言って走り去るヴィータとはやてに

「ヴィータちゃん！はやてちゃん待つて！！！！私もママって言つて欲しいの」

後を追いかけるのは達・・それから数日・・ヴィータとなのは達の攻防は続いた・・その間嬉しそうに微笑んでいたヴィヴィオを見て、やはり母親が必要なんだなと私は感じていた・・

PV2 / 500 / 000 記念番外編 ヴィヴィオの授業参観 父母
参観編 終り

どうでしたか？ヱイヱイオの授業参観 父母参観編は？上手く表現出来ていたでしょうか？・・今回のテーマは「ヱイヱイオ」「母親」の2つでした、最初の争いのところと最後の方は割りと言信があるのですが・・真ん中らへんはあんまり言信が無いですね・・やはりもっと精進しなければ・・と改めて思いました！そして今回のテーマは母親と結婚を考え始める龍也さんという話でしたが・・どうでしたかね？・・面白かったでしょうか？・・まあ・・感想が来れば判るので楽しみに待っています！！それでは次の番外編の前書きで再開いたしましょう！

PV2 / 500 / 000 記念番外編 デバイスと龍也（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は「デバイスの病み化」がテーマです・・とりあえず・・六課のデバイスを病ませて見ようと思っていますが・・デバイスとかの口調にはあんまり自信は無いですが・内容的には面白いと思うので宜しく願います！それでは番外編始まります！！・あ・忘れてましたアームドとかインテリジエンスとかあんまり詳しく覚えてないので、間違っているかもしれないですが・・広い心で理解してくれると嬉しいです、それでは今度こそ番外編始まります！！

PV2 / 500 / 000 記念番外編 デバイスと龍也

PV2 / 500 / 000 記念番外編 デバイスと龍也

「ふむ・・預かってくれと言われたが・・どうした物が・・」

私の前には、レイジングハート、バルディッシュ、シュベルクロイツ、グラーファイゼン、レヴァンティン、クロスミラージュ、マッハキャリバーが置かれていた・・私が頭を抱えてるとレイジングハートとバルディッシュがコアを光らせながら

『マスター達は夕方まで帰って来ません、その間私達と話してもしてくれませんか?』

『私もその方が良い・・少し・・龍也様と話をしてみたかった・・』

チカチカと光るレイジングハートとバルディッシュ・・更にはグラーファイゼン達も光り始めたので私は

「判った・・それでは話をしようか?」

私は安易な気持ちで言ったが・・それは間違いであったと直ぐに悟ることになった・・その切っ掛けはクロスミラージュとマッハキャリバーだった・・

『龍也様・・龍也様はマスターの事をどう思っていますか?』

『龍也様は相棒の事をどう思っていますか?』

ニュアンスは違うが同じ様な事を言う2機に

「はい？」

質問の意味が判らず首を傾げるとレイジングハートとバルディッシュがコアを激しく点滅させながら

『何を言ってるのですか！！貴方達のマスターはまだ子供ではないですか！！』

『そうだ、子供が恋事をするのは10年早い！』

そう言うと2機はコアを穏やかに点滅させ

『それで龍也様、私のマスターの事はどう思ってるのですか？』

『是非、私にもお聞かせ願いたい・・・龍也様がマスターの事をどう思ってるのか』

期待しているのだろうかコアをチカチカと点滅させるレイジングハートとバルディッシュにどうしようかと考えてると

『何を言う、王は我がマスターである・・・はやて様の物だ！』

『そうだな・・・王には我らのマスターこそ相応しい』

『・・・我は・・・そう・・・我もそう思う』

シュベルトクロイツ、グラーファイゼン、レヴァンティンが私とレイジングハート達の前に浮き上がってそう言う、私はその光景を見て

（デバイスってそのままでも浮けるんだ・・・）

始めてみる光景に感激してると・・・クロスミラージユ達が

『貴方達のマスターなんて年増ではないですか！』

『そうだ！！そうだ！！やっぱり若い方が良いに決まってる！！』

！！この場にはやて達が居たら血の雨が降りそんな事を言う2機に

『温和な私も許す事は出来ませんね・・・破壊される覚悟は良いですか？』

『・・・マスターが年増だと？・・・そのような暴言・・・許す事は出来ん』

レイジングハートとバルディッシュが、セットアップもしていないに待機状態から変化しそう言う・・・私がとんでもない事になったと思つてると、シュベルトクロイツ、グラーファイゼン、レヴァンテインが

『それで・・・王よ・・・何時・・・結婚式をなさるのですか？』

『我也聞きたかった・・・何時結婚なさるのですか？・・・そして誰が本妻なのですか？・・・出来るのなら我が主・・・ヴィータ様が良いのですが・・・そこはやはり王が決める事ですから』

チカチカと光りながら近寄ってくる2機にどうしようかと思つてるとレヴァンテインが

『それとも・・唯の遊びなのですか？・・我達のマスターの誰とも結婚する気は無いのですか？』

とんでもない爆弾発言をする、私が驚いて目を見開いていると

『遊び？・・私のマスターの気持ちを知りながら・・それを見て楽しんでる？・・幾ら龍也様でも許せませんよ！！』

レイジングハートがそう言うのとバルディッシュとグラーフアイゼンが

『流石にもしそうなら許す事は出来ない・・正直に教えてください・遊びなのか！どうなのかを！！』

『王よ・・もし・・遊びだと言うのならば・・ヴィータ様が哀しまぬ内に・・貴方を殺す！！』

待機状態から変形した2機がそう言う私が後退りしようとする

『逃がしません・・正直に白状してください』

『私は信じてるぞ・・王がはやて様を選ぶと・・』

私の逃げ道を塞ぎながら言う2機に私は冷や汗を流しながら

「いやいや！違う！違うから！！・・私はまだ・・その・・恋愛とか・・愛とか・・が良く判らなくて・・どうすれば良いか判らないし・・相談できる内容じゃないし・・でも遊んでるとか言う訳じゃないぞ！！」

私が慌てて言うのとレイジングハート達は待機状態に戻り

『そうですね、龍様は真面目な方ですからね・・・そんな事はしませんね・・・すいませんでした』

コアを光らせながら謝ってくるレイジングハートに一安心していると

『時に龍様、前に私を起動させてくれた事がありませんが・・・またして貰っても良いですか？』

そう言うバルディッシュを拾い上げ

「別に良いが・・・私の登録はあるのか？」

マスター登録にあるのか？と尋ねるとバルディッシュはコアを光らせ

『10年前から登録したままです』

・・・フェイトの奴・・・私の登録抹消してなかったのか・・・私はそんな事を考えながら

「まあ良いか・・・それじゃあ・・・セットアップ」

私がそう言うのとバリアジャケットが展開される、黒のスーツの様な物に肩からマント・・・両手に黒の手袋・・・そしてサismモードのバルディッシュを片手で振りながら

「・・・相変わらずと言うか・・・妙にしっくり来るのは何故だろうか？」

10年前に私がデバイスを落とし、フェイトが魔力切れになった時に使ったのだが・・・妙にしつくり来る感触に首を傾げると

『龍也様は恐らくですが・・・神王です、神王は全てのデバイスを支配する者です・・・ですから適合率が高いのでしょう』

そう言うバルディッシュに頷きながら

「フェイトが気にするかもしれないから・・・もう解除するぞ」

私がバリアジャケットを解除するとバルディッシュはコアを光らせながら

『マスターがきつと喜ぶでしょう・・・』

ぼそぼそと言うバルディッシュを見てると、レイジングハートが

『次は私を起動させてくれますか？』

その言葉に驚きながら回りを見ると皆、期待するようにコアが光っていた・・・私は溜め息を吐きながら

「判った・・・起動テストって事で1回ずつな・・・」

私はレイジングハートを拾い

「セットアップ」

起動させる・・・白のなのはに似たバリアジャケットだがスカートではなくズボンで私は左手のレイジングハートを見ながら

「これで良いか？」

そう尋ねるとレイジングハートはコアを光らせ

『はい！、ありがとうございます！！』

私はレイジングハートを机に置き今度はクロスミラージュを拾い

「今度はクロスミラージュか・・・嫌われないか？」

何となく気まずいと思いながらクロスミラージュを起動させる

「・・・あー1つ聞きたいのだが・・・何でスーツ？」

ぴつちりとしたスーツに白のコート・・・両手に現れたクロスミラージュにそう尋ねると

『ご趣味ではなかったですか？』

そう尋ねて来るクロスミラージュに

「嫌いではないが・・・なんか妙な感じだ・・・」

私は銃は使うが格闘も一緒にやる・・・簡単に言えばガンカタと言うやつなのだが・・・これで格闘戦は無理だな・・・と思いながらバリアジャケットを解除して、マッハキャリバーを起動する

「・・・無いな・・・これは・・・」

真っ赤＋両手の籠手を見ながら言っと

『わ・・・私では駄目なのですか・・・すいません・・・相棒・・・』

何故かスバルに謝りながら勝手にバリアジャケットを解除した、マッハキヤリバーを机の上に置きグラーフアイゼンを拾う

「グラーフアイゼンか・・・前にもやったことがあるな」

私は昔を思いながらそう呟いた、昔ヴィータ達のデバイスを起動させたなあと思いながら騎士甲冑を展開する

「・・・悪くないな・・・」

濃い赤の騎士甲冑を見ながら言っとグラーフアイゼンはコアを光らせながら

『我は王の事もマスターだと思ってます、調子が良いのは当たり前です』

もし顔があるなら笑ってるだろうと思い騎士甲冑を解除して、レヴァンティンを起動させようとすると

『私は・・・辞退します』

そう言うレヴァンティンを机の上に置くと、レヴァンティンはコアを光らせ

『王が起動させた知れば、将が気絶して使い物になり無くなりそうですからね』

その眩きに私は

（それほどいやという事だろうか？）

もしかしてシグナムに嫌われてるのかな？と思いながら最後にシュベルトクロイツを拾い

「お前で最後か・・・まあ・・・よろしく頼む」

手の中のシュベルトクロイツに言つと

『はやて様と王の相性は最も良いと言う事を証明して見せましょう』

何か妙に気合の入ってるシュベルトクロイツに苦笑しながら騎士甲冑を展開する

「・・・大分違うな？」

はやてのと大分違うなと思いながら騎士甲冑を見る、肩や腰回りに展開された甲冑に背中のスレイプニール・・・そしてシュベルトクロイツを軽く振り回しながらそう尋ねると

『王のイメージは黒です、だからはやて様と逆にしてみましたか・・・どうですか？』

そう尋ねて来るシュベルトクロイツに

「いや・・・良い趣味してるよ・・・中々気に入ったよ」

そう言って騎士甲冑を解除して机の上に置くと、机の上に置いた6個のデバイスがコアを光らせながら

『『『それで・・・どれが1番しつくり来ましたか』』』』

そう尋ねて来るレイジングハート達に

「どっという意味だ？」

どっという意味かと尋ねるとレイジングハート達は激しくコアを光らせながら

『『ですから！私達の中でどれが1番感じが良かったですか！！』』

そう言うレイジングハート達に・・・

（どれも一緒くらいなのだが・・・なんと言えば良いのだ？）

騎士甲冑とバリアジャケットの差はある物のどれも同じ感じだった・それを上手く説明するにはどうすれば良いのだろうか？・・・私が首を傾げるとレイジングハートとバルディッシュが

『私ですよ！私が一番ですよ！』

『一番は・・・レイジングハートに譲る・・・では私が二番だな？』

チカチカとコアを光らせる2機に困っていると

『正直に言ってください！私が一番ですよ！』

『わ・・私は・・色!・・そう色が駄目なだけで後は良かったですよね!~!』

ふわふわと浮きながら言うクロスミラージュとマツハキャリバーに

『王よ、正直に言うのだ・・お前達など役に立たないと!~!』

『そうです!我達が一番なのです!~!』

『・・私は・・何とも言えん・・』

コアを激しく点滅させるシュベルトクロイツとグラーフアイゼンに、
1人傍観者を決め込んでいるレヴァンティンを見ながら私は

「皆・・同じ感じだったのだが?」

正直に言うトレイジングハートが

『本当にお優しい・・他のポンコツが傷付かないようにそう言うのですね?』

訳の判らない解釈をし始めるレイジングハートにシュベルトクロイツが

『誰がポンコツだ!お前の方がよっぽどおんぼろではないか!~!』

そう言うって体当りを仕掛ける、その直撃を受けたレイジングハートは

『な・・何をするのですか!~!暴力では何も解決しないのですよ!』

！』

そう言いながらもお返しするレイジングハート・いやそれだけではないレヴァンティンを除く全てのデバイスが喧嘩を始め

「喧嘩するなあー！！」

私がそう怒鳴るとレイジングハート達が

『私が、我が1番ですよね！！私が1番龍也様の役に立てるんですよね！！』

そう怒鳴るレイジングハート達に

（何だろう・・・レイジングハート達のはやて達に見える・・・ああ・・・マスターであるはやて達に似てるのか・・・）

私とその結論に至っているとレイジングハートが

『ポンコツは引っ込め！！私が龍也様の1番役に立てるんだ！！』

私の胸の前で言う・・・それを見たシュベルトクロイツが

『黙れ！！我の主は常に王の傍に居るんだ！！貴様ら如きが！！王の役に立てると思うな！！』

そう怒鳴りつけるシュベルトクロイツの声を聞いて

（そうだ・・・感心してる場合じゃない・・・止めなければ・・・）

私は喧嘩するデバイスを止めるといふ大変貴重な体験をしていた・
それから1時間ほどではやて達が戻ってきて、私は慌ててはやて達
にデバイスを返して、ソファーに座り込みながら

「何か・・とても疲れた・・」

私はそう呟きそのまま眠り込んでしまった・・龍也が眠りに落ちた
頃・・龍也に起動させて貰ったと聞いたなのは達が・・少し嬉しそ
うにしていたのは知らない方が良いと言う物だろう・・

P V 2 / 5 0 0 / 0 0 0 記念番外編 デバイスと龍也 終り

PV 2 / 500 / 000 記念番外編 デバイスと龍也（後書き）

思っていたより難産でした、ヤンデレ化は割りと得意なんですけど・
・無機物であるデバイスを病ませるとというのが難しかったのかもし
れませんがね・でも新しいジャンルを開拓できたと思います、デバ
イス達は自分のマスター達こそ龍也に相応しいと言う思考ですね・
それと自分達のマスターを龍也が選ばない訳が無い！という訳です
ね・まあ・・どうなるかはまだ私も考えてないのですがね（笑）
それでは次のPVの記念番外編も宜しくお願いします！！

PV2 / 500 / 000 記念番外編 逆転する立場？（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回のテーマは「攻めと受けの逆転です」・・・普段攻めてるのは・・・はやて達・・・そして受けてるのは龍也・・・ただ難しいテーマなので上手く出来るか自信が無いのですが・・・まあ面白い事になるのは確実ですね！第2部完結後です！それではPV番外編始まります！！

PV2 / 500 / 000 記念番外編 逆転する立場？

PV2 / 500 / 000 記念番外編 逆転する立場？

それは龍也が目を擦り始めた事から始まった・・

「むっ？・・何だ・・急に眠気が・・」

龍也は暫く目を擦っていたが、遂にその眠気に勝てずその場で眠ってしまった・・龍也が眠りに落ちてから数分後・・龍也の部屋を訪れる者が居た・・白衣の男は寝ている龍也を見て

「ふはは！・・おっと・・大声は不味いな・・」

ジェイルスカリエッティ・・通称天災科学者又は不死身の科学者は笑いながら

「これで面白い事になるぞ・・無味無臭の睡眠薬を開発した甲斐があったと言っ事だ」

ジェイルはそう呟くと龍也の部屋を後にした

ケース1 超病み娘の場合

「うふふ・・龍也様は気付いてくれるでしょうか？」

私は髪型を少し変えて見た・・想い人である龍也様が気付いてくれるかと思ひながら鏡を見て、溜め息を吐いた

「髪型を変えたくらいで気付いてくれる人じゃないですか・・・はあ・
もっ少しだけで良いから女心で敏感でも良いのに・・・」

私は溜め息を吐きながら髪を指に絡めながらそう呟いた・・龍也様は格好良いし・・優しい・・恐らく天が与える全てを持った人物だ・
・だが天は皮肉にもとんでもない物まで与えてしまっていた・・それは究極的に鈍感であるという事だ・・私が溜め息を吐いてると視界に黒いコートが見える・・私はそれを見て胸が一気に高鳴る事を感じた・・

「龍也様・・・」

私がそう呟くと龍也様はこっちを見て、笑いながら

「おはよう！セツテ」

私はお辞儀をしながら

「はい！おはようございます！！・・・所で龍也様・・私・・どこか変わって「髪形変えたんだな・・良く似合ってるぞ」・・・へっ？」

髪型を変えた事に気付きますか？と尋ねる前に龍也様は私の髪を撫でながらそう呟く・・私が赤面してると龍也様は

「セツテは何時も明るくて良い娘だな・・私はそんなセツテが好きだよ」

好き？・・・龍也様が私を好き？・・・私は耳まで真っ赤になりながら龍也様から離れようとすると、龍也様は私の手を掴んで私を引き寄せ

「本当にセツテは可愛いな・・・何時も明るいセツテは私は大好きだよ」

そう言つて頭を撫でる龍也様の目を見る・・・少し・・・少しだけだが目が黒く濁っていた・・・私は慌てて目を走らせる・・・こんな・・・こんな事を企むのは・・・

「あっ！」

通路の影から龍也様と私を見ている、お父さんを見て

（またですか！また変な薬を龍也様に盛ったのですね！）

私がお父さんの所に行こうとすると龍也様は

「そうだ・・・前はセツテからキスしてくれたな・・・」

仮契約の事ですか？・・・それは・・・私からしましたけど・・・私がそんな事を考え・・・ある結論に至った

（不味い・・・不味い・・・龍也様にキスされるのは嬉しいですけど・・・こんな形では御免です！）

私は反射的に龍也様を両手で突き飛ばし

「この事を皆に伝えなければ・・・」

私はそう呟き走り出した・・・

ケース2 鉄槌の場合

「ん？セツテと兄貴？」

私は通路で話をしている兄貴とセツテを見て、2人の方に行こうとした時

ドンッ！！

セツテが兄貴を突き飛ばし走り去る・・・私はそれを見て

「セツテの野郎・・・兄貴を突き飛ばすなんて・・・許さねえ・・・っとその前に兄貴の様子見ないとな」

私はそう思い兄貴に近付いた・・・だが後に知る事になる・・・セツテの行動が最も最適な方法だったのだと・・・

「ん？ヴィータか・・・おはよう」

兄貴はゆっくりと立ち上がり私を見て、笑いながら挨拶をしてくる

「おう、おはよう・・・にしてもセツテの奴なんだよ・・・兄貴を突き飛ばすなんてよ・・・」

私がそう文句を言うと兄貴が私の髪を撫でながら

「私が買ってやった、髪留めをまだ使ってくれてるんだな嬉しいよ」

そう笑う兄貴に違和感を感じた

（?・・・兄貴ってあんまりこういう事言ってくれないのに・・・どうしたんだろ？）

私が首を傾げると兄貴は私を抱き上げる、兄貴の方が背が高いから私の足は宙ぶらりんになる、私が慌てて

「兄貴！降ろしてくれ！！・・・はっ！」

降ろしてくれと言った瞬間に気付いた・・・兄貴の目が濁っていた事に私は

（あの馬鹿・・・また変な薬を兄貴に盛ったな！！・・・今度という今度は許さないぞ・・・）

私が報復を誓っていると兄貴が

「グイータは可愛いな、ずっとこのままでも良いと思うな」

私を抱きしめながら言う兄貴・・・嬉しい事は嬉しいのだがこういうのは嫌で私が逃げようともがくが・・・それは無駄な抵抗だった

「グイータは良い娘だよ・・・本当私には勿体無いくらいだよ」

私を抱きしめながら言う兄貴は楽しそうに笑いながらそう言う・・・私がどうしようかと思っていると

チュッ

「ボンッ！」

兄貴に頬にキスされ耳まで真っ赤になる・・兄貴はそのまま私を抱き抱え楽しそうに笑うだけだった・・私は兄貴の胸に顔を埋めながら

（まあ良いか・・兄貴に抱きしめて貰えるし・・キスして貰えたし・
・馬鹿はあとでぶちのめせば良いか・・今は・・この幸福を噛み締めよう・・）

私はそう考え、抵抗するのをやめた・・

ケース3　ちっちゃいお姉ちゃんの場合

「八神か・・むっ・・ヴィータ・・ずるい・・」

私は八神を見かけて思わず駆け出しそうになったが、八神がヴィータを抱き抱えてるのを見て、私は頬を膨らみながら立ち止まった

「ヴィータ達はずるい・・何時も何時も八神と一緒にで・・私だって・
・八神に甘えたいのにな・・」

・・麻帆良の生活が私を変えたのか、以前の様に緊張もしないし、普通に話せるようになった・・それに少しだけが積極的になり始めていた・・だからヴィータが羨ましいと思い、私がぶつぶつと愚痴っていると

「チンクか、よっと！」

「ふえっ？」

私に気付いた八神がヴィータを抱き抱えたまま、器用に私を抱き上げ

「チンク・・・今日は口紅を変えたのか？良く似合ってるぞ」

私の唇を見て似合ってると言って来る八神に

（八神が化粧品を変えたのに気付いた？・・・おかしい・・・八神はそういう奴じゃない・・・）

普段は全くそんな事を言ってくれない八神が褒めてくれた事に違和感を感じ、それが切っ掛けで全部がおかしいと思い始めた

（待てよ・・・ヴィータを八神が抱き抱えてる時点でおかしいぞ・・・ヴィータが八神に抱きついてるのは判る・・・はっ！父さんだな！父さんが八神に薬を盛ったんだな！）

私とその結論に至った頃八神は私の目を見て

「チンクの目の色は綺麗だな・・・宝石みたいだ・・・」

そう言っただけ私の目を覗き込む八神に赤面していると、ヴィータがぼそぼそと

「チンク、折角兄貴に抱き締めて貰えるのに・・・そんな事だけ考えてて時間を過ごして良いのか？」

そう呟く、私は八神の目を見ながら

（酔ってる訳じゃないし・・・ちょっとおかしいだけで通常時の八神と大差無い・・・これは・・・素晴らしい事かもしれない・・・）

酔ってる龍也はとんでもない事をするが、今回の八神は少し様子がおかしいだけで普段と大差ない・・・私は

（そうだ・・・父さんにお話するのは後で良い・・・今はこの幸福を噛み締めるほうが重要だ・・・）

私はそう考え八神を見ながら

「そのだな・・・前に仮契約の時に・・・私から・・・その・・・キス・・・したが・・・八神は・・・そう言う女は嫌いか？」

気になっていた事・・・仮契約の時に強引に八神の唇を奪った事・・・それがどうしても気になっていてそう尋ねると、八神はきょとんとした顔をしてから

「いや・・・嫌いじゃないぞ？驚いたが・・・悪い気はしなかったな・・・チンクは間違いなく美女だしな」

そう笑う八神に私は耳まで真っ赤になりながら

（美女・・・私は・・・八神にそう言う風に思われてたのか・・・嬉しいな・・・）

私は口下手だし・・・あんまり面白い事も言えない・・・だから私と一緒に居ても楽しくないかもしれないと不安に感じていたのだが、そうではないと知り私は凄く安心した・・・八神にはしたくない女だと思われるのは嫌だったからだ・・・

「チンクと一緒に居るのは楽しいぞ、チンクは色んな事を知りたがる・・・それに上手く話が出来なくてもじもじしてるのを見るのも好きだ・・・可愛らしくてな」

私はそう言われ恥かしくてもじもじしていると、ヴィータの肘が私の脇に突き刺さる

「あんまり・・・調子に乗るんじゃないねえ・・・」

偉くドスの聞いた声で言うヴィータに頷くと八神は楽しそうに笑いながら、移動をし始めた・・・私は隣のヴィータと同じ様に八神の胸に顔を埋めてみた・・・暖かくて・・・凄く安心できた・・・

ケース4 ヤンデレ魔王様の場合

「いい加減、吐けや・・・兄ちゃんに何の薬を盛ったんや?」

バシッ!!バシッ!!

捕獲した馬鹿シェイルにビンタをしながら尋ねるが

「あががが・・・」

何も答えない(答えれない)馬鹿に

「言わんのか?・・・なら1回闇に沈めようか・・・大丈夫や・・・70%でサルベージには成功するで・・・うん・・・じゃあ・・・逝こうか?」

私がダークゲートを開こうとするとなのはちゃんが後ろから組み付いて来て

「だ・・駄目だよ！！そこまでしたら何も言えなくなるよ！！」

私はその言葉に頷き馬鹿の首を掴んで持ち上げ

「んじゃあ・・腹に正拳・・そうやね・・200発くらい行つとく？」

私がそう尋ねると今度はシグナムが

「駄目です！！内臓破裂で死にますよ！！」

慌てて止めに入るシグナムに

「大丈夫や・・そう簡単に死なんで・・ほら・・前に磔にしてラゲナロク40発くらい打ち込んだけど・・2日で回復してたやん」

私がそう言つと皆神妙な表情で頷き同時に

「・・そうか・・そう簡単には死なないか・・この人」「」

皆がそう呟く・・私はGOサインと判断し拳を振りかぶろうとすると

「や・・止めて下さい！！！ドクターが死んでしまいます！！」

ウーノさんが止めに入る・・私は苛々としながら

「でもなあ？ウーノさん・・・この人何も言わんやん？・・・そこまで黙秘するなら実力行使しか無いやろ？」

私がそう言つとウーノさんは

「私が聞きますから！！だからこれ以上は止めて下さい！！」

私はその言葉に頷き指を3本立て

「判つた・・・3分待つ・・・それ以上経つたら刑を執行します・・・良いね？」

そう言つとウーノさんは

「ドクター！！早く！！早く！！龍也様に何の薬を盛つたのか教えてください！！！」

激しく身体を揺すりながら尋ねると馬鹿は

「その・・・何時もはやて君達が龍也に迫ってるから・・・その逆で龍也が迫ると言うか・・・少しだけ自分の気持ちに素直になれる薬を盛りました・・・」

ぼそぼそと呟く馬鹿にウーノさんは

「前にも言つたでしょう！！龍也様に薬を盛つてはいけないと・・・それで解毒剤はどこにあるんですか？」

そう尋ねるウーノさんに馬鹿は

「その・・・解毒剤は無い・・・時間が経つしか・・・ドゴンツ！！」「正直に言え・・・殺すぞ？」・・・サー！イエッサー！！薬は此処にありますです！！」

私が近くの壁に拳を叩き込む・・・それは音を立てて壁にめり込んだ・・・私が拳を引き抜きながら言うと、馬鹿は敬礼しながら水色の液体が入った瓶を取り出す、私が馬鹿の手から薬の瓶を引つたくと

「はふう・・・」

「・・・」

兄ちゃんがヴィータとチンクさんを抱き抱えて食堂に姿を見せる・・・ヴィータは超うつとりしてて・・・チンクさんは無言で顔を兄ちゃんの胸に埋めていた・・・私はそれを見て服の内側からダガーを取り出しかけたが、それを押しとめ

（・・・いかん・・・冷静になれ・・・チンクさんとヴィータは何も悪くない・・・悪いのはあの馬鹿や・・・）

私が自分にそう言い聞かせていると

「はやて、おいで」

兄ちゃんが何時の間にかヴィータとチンクさんを降ろしていて、私を招き寄せる・・・私は反射的に兄ちゃんに抱きついた、兄ちゃんは私を抱き抱えながら

「私はやっぱり・・・はやてが1番好きだな・・・」

そう呟く兄ちゃんに食堂に居た面々の顔が引き攣る・・・私は手の中の瓶を見ながら

「ちょお、スカリエッティさん・・・時間でも元に戻るんやろ？」

私がそう尋ねるとコクコクと頷きスカリエッティさん・・・私は持っていた瓶を落とす・・・

ガチャン・・・

音を立てて割れる瓶を見ながら

「兄ちゃん・・・私も兄ちゃんが一番好きやで？」

そう言つて胸に顔を埋めると兄ちゃんは私の髪を撫でながら、にっこりと微笑み

「そうか・・・それじゃあ・・・私の部屋でご飯でも食べようか？」

そう言う兄ちゃんに頷くと兄ちゃんは私を抱き抱えたまま、自分の部屋に向かつて移動し始めた・・・私はその間兄ちゃんの胸に顔を埋めながら

（偶にはあの人も良い薬を開発するんやね・・・）

そんな事を考えていた・・・残されたなのは達は・・・

「・・・龍也さんの一番がはやてちゃん？・・・嘘だ嘘だ・・・龍也さんにとつてはやてちゃんは妹・・・ああ・・・何だあゝ龍也さんは妹の中で1番はやてちゃんが好きって事なんだ・・・焦って損したゝ」

その結論に至ったようだが・・はやての考えが合っていたのか、それともなのは達の考えが合っているのか・・それは龍也本人にしか・
・判らない・・追記・・翌日龍也はこの事を全て忘れていた・・それに落胆したはやての背が妙に煤けて見えたのは気のせいではないだろう・・

P V 2 / 5 0 0 / 0 0 0 記念番外編 逆転する立場？ 終り

P V 2 / 5 0 0 / 0 0 0 記念番外編 逆転する立場？（後書き）

龍也さんが鈍感ではなく、髪型や化粧品の違いに気付き、尚且つ自分の気持ちに少しだけ素直に・・・と言うのがコンセプトでした・・・面白かったでしょうかね？自分では中々自信が合ったのですよ・・・珍しくね・・・それでは次の番外編もどうか宜しくお願いします！！

PV2 / 500 / 000 記念番外編 ちびちび龍也リターンズ！（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回のテーマは龍也さんの「動物化」だったんですけど・・・上手く出来なくて・・・動物では無く「子供化」してみました、前のちびちび龍也と違い中身は大人という事で・・・そしてそれを知った六課の面々がどんな反応をするのか？・・・中々面白いと思うのでどうか宜しくお願いします！！

PV2 / 500 / 000 記念番外編 ちびちび龍也リターンズ！

PV2 / 500 / 000 記念番外編 ちびちび龍也リターンズ！

不思議な事というのは数多ある、例えば朝起きたら女になっていたとか・養女が大人になってたりとか・そして

「・・・身体が縮んでる・・・なんで？」

朝起きたら私の身体は10歳前後の頃の身長になっていた・・・私はベッドから飛び降り

「まあ対して問題もないし・・・気にする事は無いか・・・」

私はそう呟き部屋を後にしたが・・・それは大きな間違いであったのだ・・・

ケース1 執行官の場合

目の前をちょこちょこと歩く影を見つける、ヴィヴィオかな？と思つてそつちの方を見て目を見開いた

「フエイトか、おはよう」

10歳位だろうか？子供化した龍也が居た・・・私は目が点になるのを感じていた・・・龍也が可愛らしく首を傾げながら

「どうしたんだ？フエイ・・・うおっ！？」

私の顔を覗き込んできた龍也を何も言わず一気に抱き上げ

「龍也ちっちゃくなっただ〜可愛いね」

そう言う龍也は少し落ち込んだ様子で

「可愛いと言われても嬉しくないのだが？」

そう小首を傾げる龍也・・・ああ・・・もうたまらない・・・私は龍也を思いつき抱きしめた

「フエ・・・フエイト！！・・・放せ！！」

ジタバタと暴れる龍也の顔は真っ赤に染まっている・・・理由は簡単だ胸の谷間に顔が挟まれたからだ・・・私はクスクスと笑いながら

「放すなんて勿体無い事しないよ・・・こんなに可愛い龍也を放すなんて勿体無いすぎる」

私がそう言うて更に力強く抱きしめると龍也は慌てて離れようとする・・・その時

「あんっ・・・」

ムニユ

龍也の小さい手が私の胸を鷲掴みにする、私は艶っぽい声を出すと・・・龍也は耳まで真っ赤になり慌てて手を放そうとする・・・私はその手を掴み

「良いんだよ？龍也だって男だもんね？胸とか好きでしょ？だから好きなだけ揉んで良いよ？」

そう言っていると龍也はますます真っ赤になり私の手から自分の手を引き抜こうとしながら

「いい！そんな事しない！！だから私を放せ！！」

そう言う龍也は一生懸命暴れてるが、何とも無い・・・当然だ20歳である私と10歳の龍也・・・力の差は歴然だった・・・私はその時気付いた・・・

「そうだ・・・龍也・・・私の部屋に行こうか？私の部屋に美味しいクッキーがあるんだよ」「いらない！いらないから放せ！！」・・・答えは聞いてないよーじゃあ行こうか？」

10歳の龍也ではどう足掻こうが私から逃れる事は出来ない・・・ならば自分の部屋に連れてってしまつて・・・そこで食べてしまおう・・・そうだそれが良い・・・そこで既成事実を作つてしまえば良い・・・そうすれば・・・龍也は私の物に・・・

ジュール

「あ・・・涎が・・・」

私が涎を手で拭くと龍也は危機感を感じたのか

「放せ！お前何するつもりだ！！放せ」

暴れだす龍也を放さないように抱きしめ

「大丈夫・・・痛くないよ・・・龍也は気持ち良いだけじゃないかな？」

私がそう言つと龍也の顔が紅くそして青褪めるといふ器用な状態になる・・・龍也は

「止める！冗談じゃすまないぞ！！」

説得しようとする龍也に私は

「10年待つてたチャンスが来たんだ・・・今しかないんだよ・・・龍也を食べるのは」

思わず本音を言つと龍也は

「だ・・・誰かゝ助けて！！襲われる！！フェイトに喰わ・・・むぐつ！！！！」

そう絶叫する龍也の口を手で押さえ

「うるさいよ・・・龍也・・・誰か来て・・・龍也取られちゃうじゃない・・・静かにしてよ」

私がそう言つてると龍也はもごとと何かを呟き

「ももはへほほえ！（すまん、フェイト）」

ガブツ！！

思いつきり私の手に噛み付いた

「痛っ・・・あっ！」

噛まれた痛みで思わず龍也から手を放す、龍也は着地と同時に走り出した・・・私は走っていく龍也の後姿を見ながら

「追いかけてこか・・・良いね・・・捕まえて・・・私のに・・・ふふ・・・」

私はそう呟き龍也の後を追って走り出した・・・

ケース2 スナイパーの場合

私が龍也さんに提出する書類を持ちながら歩いてると前の方から小さい誰かが走って来て私にぶつかる

「きゃっ」

私は思わず書類を落としかけたがそれを耐えぶつかって来た誰かを見て、目を見開いた・・・腰元まで伸びた銀髪・・・神秘的な光を放つ蒼銀の瞳の10歳前後と思われる子供だった・・・私が驚いてるとその子供は

「た・・・助けて！ティアナ！！フェイトに・・・フェイトに喰われる」

そう言う子供に私は

「えっと・・・龍也さんですか？」

そう尋ねると頷く子供・・・もとい龍也さん・・・私は龍也さんの手を引いて

「こつちです！」

近くの空き部屋に飛び込んだ・・・部屋の外で

「居ない？・・・どこ・・・？・・・まあ・・・良いや・・・絶対捕まえるんだから」

そう呟くフェイトさんの声が聞こえた・・・龍也さんはその声を聞いてガタガタ震えていた

「龍也さん・・・何をそんなに怯えてたんですか？」

そう尋ねると龍也さんは

「無理やり部屋に連れて行かれそうになった・・・それと食べるとか言ってた・・・」

そう言う龍也さんはプルプルと小刻みに震えていた・・・その様子が小動物の様に凄まじく可愛らしかった・・・

（これは・・・凄い破壊力だわ・・・）

無意識にキョロキョロ辺りを見回す・・・当然だが・・・誰も居ない・・・私は龍也さんの頬に手を伸ばし

「可愛いですね・・・格好良い龍也さんにもこんな時があつたんです

ね・・・」

そう言つて近付くと龍也さんは後ずさりしながら

「テ・・・ティアナ？・・・何するつもりだ？」

怯えた声の龍也さんは近付いてくる私に、龍也さんは近づけまいと反射的に手を伸ばす・・・

ムニユ・・・

「あつ・・・」

龍也さんの手が私の胸に当たる、龍也さんがしまったと言う声で言う私はその手を掴み

「うふふ・・・やっぱり龍也さんも男なんですネ・・・良いんですよ？別に揉んでも・・・何なら脱ぎましょうか？」

そう言つと龍也さんは

「脱がなくて良いし！！揉まない！！というか私の手を放せ！！」

慌てて私の手を振り払おうとする龍也さんに覆い被さるように

「嫌ですよ・・・子供の龍也さんじゃ・・・私を突き飛ばす事も出来ないですよネ・・・このまま・・・食べちゃいましょうか？・・・大丈夫ですよ・・・龍也さんは気持ち良いだけですから・・・じゃあ・・・始めましょうか？」

私が自分の服のボタンに手を伸ばそうとすると、龍也さんは自分の着ていた上着を脱いで

「えい！」

「！！」

龍也さんが私の顔に自分の服を被せる・・・それで一瞬私の視界を隠す・・・私がその服を取り払った時・・・目の前に居た龍也さんは居なくなっていた・・・そして私の背後で自動扉が空く音がした・・・どうやら龍也さんは部屋から逃げ出したようだった・・・

「うふふ・・・こういうのも・・・良いかも・・・」

私はそう呟きその部屋から駆け出した・・・勿論可愛い龍也さんを捕まえる為に・・・

ケース3 烈火とちっちゃいお姉ちゃんと祝福の風の場合・・・

「何か騒がしいな？・・・どうしたんだと思うシグナム」

チンクがそう尋ねて来る私は

「また・・・お前の父親が何かしたんじゃないか？」

私がそう言つとチンクは居心地が悪そうに

「むっ・・・すまない・・・私も何度かお話してるのだが・・・祿に話を

聞いてくれないのだ」

謝ってくるチンクにリインフォースが

「気にする事はない．．それより段々騒ぎがこっちに来てないか？」

リインフォースがそう言う通路の向こう側から

「誰でも良いから．．助けてー！！！」

そう言う絶叫が聞こえた．．私は

「今の声．．兄上の声に似てなかったか？」

そう尋ねると2人とも頷く、私達が声の聞こえた通路の方を見ると
そっちの方から小柄な影が飛び出てくる．．それを1番最初に見つ
けたリインフォースが

「あ．．兄上様！？．．どうなさったのですか．．そんなに可愛ら
しい姿になって．．」

そう尋ねると兄上はリインフォースに

「た．．助けてー！！リインフォース、シグナム、チンク！！フェイ
ト達に追いかけてるんだー！！」

そう言って助けを求めてくる兄上を見る．．エリオより少し背が低
く．．くりくりとした目．．そして声変わりしてないからまだ幼い
声．．涙目で助けを求めてくる兄上はとんでもなく可愛かった．．
思わず私が赤面しながら

（な・・・なんと・・・可愛いのだ・・・）

無意識に手を伸ばそうとするとその手をチンクが掴む・・・チンクも頬が若干赤くなっていた・・・チンクは

「し・・・シグナム・・・落ち着け・・・落ち着くんだ・・・ここで八神を抱き抱えてしまえば・・・引き返せなくなる・・・」

私はその言葉で少しだけ正気に戻った・・・そうここで兄上に少しでも触れてしまえば・・・兄上を追いかけてる者達と同じになってしまうと・・・私がそう考えてると兄上が

「えぐえぐ・・・私が何をしたというんだよ・・・皆・・・追いかけて来て・・・」

よほど怖かったのか泣き出してしまった兄上にチンクが手を伸ばす・・・

「ちょ・・・ちょっと待て・・・チンク・・・」

私とその手を掴むとチンクは正気に戻った様で

「はっ・・・危ない・・・危ない・・・危うく・・・捕食者プレデターになる所だった・・・ありがとうシグナム」

礼を言つて来るチンクに頷いてると兄上が泣きながら上目目線で

「ひっく・・・ひっく・・・」

しゃがみ込んで涙を拭う兄上・・・それを見た私達は

（（ぐはあ・・・何だ・・・何だ・・・この可愛すぎる生き物は・・・）
）

外では笑いながら内面的には吐血していた・・・もう駄目だ・・・私達も捕食者プレデターになつてしまうのは時間の問題だった・・・私とチンクが兄上に手を伸ばそうとするのリインフォースが

「落ち着け！落ちつくんだ・・・2人とも・・・兄上に触れてはいけない・・・我慢出来なくなる・・・」

そう言うリインフォースはまだ理性を保っていられる様で、私とチンクを止める・・・だがそれは次の瞬間・・・崩壊した・・・

「えう？」

泣きながら上目目線で首を傾げる兄上を見て・・・私達の理性は簡単に吹き飛んでしまいそうになった・・・捕食者になるその前に私達は

「「「違う！！・・・私達は違うんだーッ！！！！」」」」

私達は捕食者と化す前に兄上の前から逃げ出す事にした・・・間違いを犯してしまうその前に・・・

ケース4 ヤンデレ魔王様の場合

「なんや・・・騒がしいな？・・・」

私はシグナム達の声聞いて何かあったのかと思い部屋の外に出た・

「うーんと・・確か声はこっちから・・なんや?・・子供の泣き声?」

通路の観葉植物の陰から子供の泣き声が聞こえ、私はその陰を見て目を見開いた

「ほえ?・・に・・兄ちゃんか?」

植物の陰に居たのは10歳くらいの頃の姿の兄ちゃんだった・・兄ちゃんは私を見て

「は・・はやてゝた・・助けて!!皆・・目の色が変わって!!!食べるのか・・何とか言って追いかけて来るんだよ!!!」

泣きながら助けを求めてくる兄ちゃんを抱き抱え・・

（これは皆追いかけるわな・・可愛すぎる・・悪戯したくなるのも当然か・・）

そう考えながら兄ちゃんを抱き抱え・・少し匂いを嗅ぐ・・少し汗臭かった・・私は良い事を思いついた

「兄ちゃん・・ちよつと・・汗臭いな・・お風呂入らんといかなあ?」

そう言つと兄ちゃんは顔を青褪めさせ

「何・・・考えてる？・・・助けてくれるんじゃないのか？」

そう尋ねて来る兄ちゃんに

「助ける？・・・何の事や・・・こんな可愛い兄ちゃん・・・滅多に見れん・・・だから誰にも渡さへん・・・」

そう言つて抱きしめると兄ちゃんは顔を青褪めさせ

「は・・・放せ・・・お前・・・何する気だ？」

恐々と尋ねて来る兄ちゃんに私は

「そうやね・・・まずは汗臭い兄ちゃんを綺麗にして・・・そこからは・・・うふふ・・・今は言わんとく」

私がそう言つと兄ちゃんは短い手足をバタバタさせて

「嫌だ・・・嫌だ・・・放して・・・放してくれ」

暴れ始める兄ちゃんを放さないように抱き抱え

「そんなに暴れんでも良いやろ？・・・大丈夫や・・・痛いことはせんから・・・ね？・・・私に任せてよ」

こんな可愛らしい兄ちゃん・・・誰にも渡せない・・・今の内なら・・・無理やりにも私のに出来る・・・そう考えて私が笑つてると、後ろから殺気を感じて横に跳ぶその直後、6本のナイフが私が居た場所を通過していく

「何するんや？．．兄ちゃんに当たるやろ？」

そう言うときセツテはクスクスと笑いながら

「私が龍也様に怪我をさせる？ありえませんか．．」

私はそう笑うときセツテを睨んでみると、セツテの後ろから走ってくるフ
イト達の姿が見える更には珍しくノーヴェの姿も見えた．．私は
兄ちゃんを奪われないようにしっかりと抱き抱えながら

（これは不味いな．．幾ら私でも数が多すぎる．．シグナムもヴィ
ータも居らんし．．）

はやてが自分の不利を感じてる頃、ヴィータは．．

「あーあ．．教導つて面倒だよな．．今日は兄貴と一緒にじゃないし．
．はあ．．詰まんねえな．．」

ぶちぶちと愚痴りながら教導をしていた．．一方シグナムはと言うと

「ち．．違う．．私は．．シヨタコンじゃない．．私は．．ノーマ
ルだ．．ノーマルの筈なんだ．．」

小さい龍也に欲情しかけた自分にそう言い聞かせていたりする、尚
これと同じ行動をしている者が後2名居たりする．．私がどうするか
考えてる時兄ちゃんが

「すまん！」

ガブリッ！！！！

兄ちゃんが私の左手に思いっきり噛み付く

「痛た！・・・し・・・しまった・・・」

兄ちゃんを思わず手放してしまうその隙に兄ちゃんは私達から逃げ出す

「・・・捕まえんと！！」

私が追いかけて走り出すと

「はやてには渡さないよ」

「貴女には何が合っても渡しません」

ハイエナ（フェイトちゃん達）が私の横を走り出し始める・・・私はフェイトちゃん達を睨みながら・・・兄ちゃんの後を追いかけた・

ケース5 エースの場合

「騒がしいなあ・・・ふあああ・・・夜勤明けなのに・・・」

私はそう呟きながら部屋の扉を空けた・・・そして目を見開いた

「はあ・・・はあ・・・体力まで・・・子供なんて・・・これじゃあ逃げられない・・・」

肩で息をしてる小さい龍也さんが居た

「た・・龍也さん？・・どうしたんですか？そんなに可愛くなっちゃって・・」

そう尋ねると龍也さんは

「ひっ・・」

引き攣った声を出す龍也さんに

「大丈夫ですよ・・私は何もしませんから・・」

そう言つと龍也さんは涙目で

「本当？」

首を傾げながら言つ龍也さんに頷くと龍也さんは私に抱きついてきて

「助けて・・なのは・・皆追いかけて来るんだよ・・怖いんだよ」

そう言つ龍也さんの背を撫でながら

「私の部屋に居れば大丈夫ですよ・・夜勤明けだから寝てるって皆思ってますから」

そう言つて自分の部屋に招き入れる、その直後部屋の外から

「「居ない・・どこに行ったの？・・まあ・・良いや・・子供の足

じゃ逃げ切れないよね」

そう呟くフェイトちゃん達の声が聞こえた・・私はガタガタ震える
龍也さんの頭を撫でながら

「大丈夫ですよ・・もう皆行っちゃいましたから」

そう言うと龍也さんはコクリと頷き私の部屋の椅子に腰掛け

「あ・・ありがとう・・なのは・・助けてくれて」

お礼を言ってくる涙目の龍也さんは凄く可愛くて、皆追いかけるの
も納得の可愛さだった・・思わず伸ばしかけて

（はっ・・いけない・・いけない・・ここで変な事すれば龍也さん
を怖がらせるだけだ）

私はそう思い、伸ばした手を引つ込め代わりに戸棚から

「美味しいクッキーがあるですよ・・一緒に食べませんか？」

そう言うと龍也さんは頷き私が置いたクッキーをもそもそと食べ始
める・・その様子は小動物その物で凄く可愛かった・・私が龍也さ
んの様子を見て笑っていると龍也さんは

「ありがとう・・なのは・・助かったよ」

そうお礼を言う龍也さんの頭を撫でながら

「大丈夫ですよ・・私は龍也さんを苛めませんから」

そう言う龍也さんは気持ち良さそうに目を細め

「本当か？・・・いや・・・なのは信用してない訳じゃないんだぞ・・・でも・・・怖くてな・・・」

そう言う龍也さんを抱き抱えながら

「大丈夫ですよ・・・私は龍也さんを苛めたりしません・・・龍也さんが私を助けてくれたように私が龍也さんを助けますよ」

龍也さんが何度も私を助けてくれたように今度は私が助けると言う龍也さんは安心したようで

「うん・・・ありがとう・・・もとに戻るまでここに居て良いか？」

私はその言葉に微笑みながら

「良いですよ・・・龍也さんが元に戻るまでここに居てください」

そう言う龍也さんはゆっくりと頷き、眠そうに目を擦る

「眠いんですか？・・・私のベッドで寝て良いですよ？」

私も眠いが龍也さんにベッドを譲ろうと思いつつと龍也さんは

「・・・こっくり・・・こっくり・・・」

椅子に座ったまま眠っていた・・・私は寝ている龍也さんの髪を撫でながら

「寝ている顔も可愛いな」龍也さんにもこんなに可愛い時があったんだ」

そう呟きながら、寝ている龍也さんを抱き抱え自分のベッドに寝かせて布団をかける、私は椅子を持って来てそれに腰掛け龍也さんの髪を撫でる・

「本当に可愛いな・龍也さん・」

穏やかな寝息を立てる龍也さんを見ると、龍也さんの小さい手が私の指を掴む

「どうしたんだろ？怖い夢でも見てるのかな？」

そう思いながら龍也さんの顔を見るが、その顔は幸せそうで怖い夢を見てる様には見えなかった・私は一安心して寝ている龍也さんを見ながら時間を潰していた・眠い事は眠いのだが・こんな珍しい体験は滅多にないだから寝るのが勿体無くて・私は眠いのを我慢して龍也さんをずっと見ていた・だが次第に睡魔に勝てなくなつて来て、私は椅子に腰掛けたまま眠ってしまった・

「ん？・あれ・布団で寝てる・そうだ！龍也さんは！」

私が目覚めると龍也さんの姿はなかった・私が寝てる内に誰か連れてってしまったのだろうか？と思って慌てると

「あれ？・これは・」

机の上にラップの掛けられた皿が3つ見えた・私はその上に置か

れていた手紙を見て、思わず苦笑してしまった・

「気にしなくて良いのに・・・」

そこには元の姿に戻ったから自分の部屋に戻る、夜勤明けなのに迷惑を掛けてすまなかった・お詫びに夕食を作っておいた・後で暖めて食べると良い・それと・お礼になるか判らんが・今度の休暇はなのはに付き合う・暇だったら声を掛けてくれ・と書かれていた・私はその手紙を見て笑いながら

「気にしなくて良かったのにね・でも・龍也さんらしくて良いかな？」

私はそう微笑み龍也さんが作って置いてくれた夕食を温め食べた・それはとても美味しくてそれで居て心が満たされる・料理だと思った・次の日・龍也さんの部屋の前を見て絶句した

「ごめんなさい・龍也さん・空けてください」

「兄ちゃん・ごめん・謝るから顔を見せて」

「龍也様・私が・私が悪かったです・もう2度とあんな事はしませんだから・声を聞かせてください」

「龍也・ごめん・何回でも謝るから・お願い・顔を見せてよ」

「調子に乗った私が悪かった・だから龍也・お願いだ・バインドを解除してくれよ」

龍也さんの部屋の扉はバインドで封じられて居て外から開けることは不可能で、扉には一枚張り紙がされていて

『人の嫌がる事をする奴は嫌いだ・・暫く反省してろ・・ 龍也』

と書かれていた・・その張り紙の前で猫の様に扉を叩いて謝る、はやてちゃん達に驚いてるとシグナムが

「高町・・驚いただろう・・昨日な兄上が小さくなってな・・それで追い掛け回された物だから怒ってしまって・・部屋に閉じこもってしまったのだ」

そう教えてくれるシグナムに

「そつか・・それじゃあ・・仕方ないね・・自業自得って奴じゃないかな？」

私とシグナムがそんな話をしていると、横の通路からヴィータちゃん が歩いて来て、龍也さんの部屋の前を見て溜め息を吐きながら

「まだやってんのかよ・・いい加減諦めた方が良くと思うんだけどな・・しつこいと兄貴に嫌われると私は思っただけだな・・なのは どう思う？」

そう尋ねて来るヴィータちゃんに頷くと

「でもまあ・・小さくて可愛い兄貴を見たら理性が飛んじまうのも判るけどさ・・私も見たかったな・・可愛い兄貴・・なのはもそう思うだろ？」

私は見たんだけどな・・・でもまあそんな事言えず頷くと・・・ヴィー
タちゃんは

「まあ・・・防犯カメラの記録を見れば姿くらい見れるかもな・・・」

そう言うヴィータちゃんの隣を歩きながら

（暴走しなくて良かった・・・）

そんな事を考えていた・・・これは全く関係の無い話だが、龍也さん
は相当頭に来てたようでその日1日扉を開く事は無かった・・・次の
日には扉を封印していたバインドは消えていた・・・どうやら龍也さ
んの方が根負けしたようだ・・・シャルルの話によれば・・・一晩中は
やてちゃん達は謝り続けていたらしい・・・それは根負けするのも無
理はないと思つた・・・追記・・・部屋が空いた瞬間はやてちゃん達・・・
と言うか龍也さんを追いかけまして居た面々が部屋に雪崩れ込み、
そのままの勢いで龍也さんに抱きつき・・・龍也さんは気絶し・・・そ
の日1日目を覚ます事は無かつたらしい・・・私は謝りながら龍也さ
んを起こそうとしてるはやてちゃん達を見ながら

（今度の休暇・・・龍也さんが私に付き合ってくれるって聞いたら皆
どんな顔するだろ？）

そんな事を考えながら次の休暇に何をしようか考えていた・・・後日・・・
龍也さんが小さくなった理由は解明された・・・スカリエッティさ
んがまた薬を盛つたらしい・・・それを知つた龍也さんは・・・

「待て！！この大馬鹿者が！！！！」

「悪かつた！！私が全部悪かつた！！だから許してくれーッ！！」

鬼の形相でスカリエツティさんを追い掛け回し、

「やっと・・・追い詰めたぞ・・・さぁ・・・じっくりとお話（処刑）しようか？」

ゴキゴキを拳を鳴らしながらスカリエツティさんを演習場に追い詰め

「・・・もつしないから・・・許してくれるか？・・・ごふっ！！」

駄目元で尋ねるスカリエツティさんの腹に龍也さんの拳が突き刺さる

「・・・駄目だ・・・」

殴ってから駄目だと言う龍也さんは、スカリエツティさんの首を掴み、そのまま演習場の壁に向かって走り出す

ドーンッ！！

「げはあっ！！！！」

凄まじい勢いで壁に叩き付けられたスカリエツティさんが苦悶の声を上げると同時に

「ぶっ潰れる！！！！」

ズドドドドドッ！！！！！！！！

凄まじい勢いでラッシュが叩き込まれる

「ぐおおおおッ！！！！」

何発叩き込まれたが判らないが・恐らく100発以上は叩き込まれたのは間違いないだろう・ズルリと崩れ落ちるスカリエッティさんの首を両手で掴み

「地獄の業火で燃え尽きる！！！」

演習場の天井に届く位の業火が上がる

「ぎゃあああああッ！！」

断末魔の叫びだろうか・凄まじい悲鳴を上げるスカリエッティさん・その悲鳴は段々聞こえなくなり・それと同時に炎も消えた・炎が消えた後には

ピクッピクッ・・・

物凄く痙攣しているスカリエッティさんだけが残されていた・龍也さんは一度も振り返らずに演習場から歩き去った・それを見ていた私達は口を揃えて

「龍也さんは絶対に怒らせちゃいけないね・・・」

と呟いた・ちなみにボ口雑巾の様になった、スカリエッティさんは火傷＋全身打撲で1ヵ月入院する事になった・病院のお医者さんは本当なら死んでもおかしくないと口を揃えて言っていた・その言葉を聞いた私達の中でスカリエッティさんが人間の力テゴリから外されたのは仕方ない事だろう・

終り P V 2 ' 5 0 0 ' 0 0 0 記念番外編 ちびちび龍也リターンズ！

PV2 / 500 / 000 記念番外編 ちびちび龍也リターンズ！（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！どうでしたか？ちびちび龍也リターンズ！は・・欲望に忠実になってしまったはやて達と、シヨタコンではないと絶叫し逃げ出したシグナム達に、欲望を我慢できなかったのは・・そして処刑されたスカリエッティ・・かなり面白かったと思います・・なのはと龍也さんのデートフラグが成立しましたね、妨害無しで幸せなデートが出来るのか！（多分無理でしょうね・・）そこを楽しみにしてくれると嬉しいです！それでは次回の更新もどうか宜しく願います

PV2 / 500 / 000 記念番外編 未来を語る者？（前書き）

どうも混沌の魔法使いでございます、久方ぶりの再会大変喜ばしい限りでございます、今回もまた私の図書館に迷い人が訪れます・・しかし今回はそんなに遠い未来の話ではございません・・そう・・間近に迫る未来のお話でございます・・それではどうかごゆるりとお楽しみください・・

P V 2 / 5 0 0 / 0 0 0 記念番外編 未来を語る者？

P V 2 / 5 0 0 / 0 0 0 記念番外編 未来を語る者？

ケース1 超病み娘の場合

「えっと・・・後は・・・着替えですか・・・お洒落なのが良いですね・・・

」

私は後一週間で別の世界に行く為、その準備をしていた・・・丁度その時私の目に

「あんな所に図書館ありましたか？」

ボロボロの図書館が飛び込んでくる・・・普段なら決して行こうとは思わないのだが、何故だかその図書館が気になり私はその図書館の扉を開いた・・・

「ここは・・・一体？」

天辺が見えないほど高い本棚にこれでもかと納められた大量の本を見て、驚いていると

「・・・ようこそ・・・セッテスカリエッティさん」

穏やかな男の声が聞こえ振り返るとそこには、黒の帽子とマント・・・だろうか？・・・それを来た男が本を片手に笑っていた・・・笑っていたと言っても直接見た訳じゃなく・・・何となく笑っていると思ったの

だ・・・私はその男を見ながら

「ここは・・・何なのですか？」

そう尋ねると男は楽しそうに

「ここは名前の無い図書館・・・ありとあらゆる物を記録している場所でございます・・・そして私はこの司書・・・混沌の魔法使いと申します」

そう頭を下げる混沌の魔法使いは手に持った本を開きながら

「この本には今正に記録を刻んでいる途中でございます・・・特別にお見せしましょう・・・」

混沌の魔法使いが手に持った本から光が飛び出してくる・・・私はその光に飲まれると同時に意識を失った・・・

「ここは？」

私は旅館のような場所の通路に立っていた・・・自分の姿を見ると

「これは・・・どういう事ですか？」

私の身体は縮んでいた・・・まるで中学性の様だった・・・まあ・・・胸はそんなに小さくなってないので良しでしょう・・・私がそんな事を考えてると自然と私の足は先に進んで行く・・・まるで何かに吸い寄せられるように・・・そして私は旅館の屋上に続く扉の隙間から信じられない物を見た・・・

「!」

「・・・んっ・・・」

豆狸が無理やり龍也様の唇を奪っていた・・・何故だか判らないが私と同じ様に豆狸の身体も縮んでいたが・・・豆狸が離れると龍也様はよろよろと後ずさりその場に座り込む・・・私は駆け出そうとしたが私の足は動く事は無かった・・・自分の唇を触りながら驚いてる龍也様の前にちびが座り込み押し倒すように龍也様の唇を奪う・・・それは少しの間の筈だったのだが・・・私には永遠にも感じられた・・・私が凍り付いていると豆狸とちびが歩いて来て、私を見つけ

「遅かったな・・・病み娘・・・あんたが遅いからまた・・・兄ちゃんとキス出来たわ・・・ありがとさん・・・」

勝ち誇ったように言う豆狸と

「うえ・・・み・・・見てたのかよ・・・は・・・恥かしい・・・」

そう言って走り出すちびの後姿を見ながら、私は屋上に出た

「また・・・私は・・・はやて達とキスを・・・」

自己嫌悪だろうか・・・そう呟く龍也様の前に立つと

「セツテ?・・・ま・・・まさか・・・見てたのか?」

そう尋ねて来る龍也様を見ると・・・無性に悲しくなり・・・私は涙を流しながら

「み・・・見てました・・・はやてとヴィータにキスされてる所を・・・」

私がそう言つと龍也様は

「・・・そうか・・・見てたのか・・・」

消えてしまいそうな声の龍也様に

「・・・龍也様・・・私と・・・キスしてくれますか？」

しやがみ込みながら言つと龍也様は

「・・・駄目だ・・・私は・・・もう部屋に戻る・・・セツテも新田先生に見つからない前に部屋に戻れよ・・・」

そう言つて歩いて行こうとする龍也様の背中に

「はやて達は良くてどうして私は駄目なのですか・・・私は・・・龍也様に女として見て貰えてないのですか？」

私が泣き声で言つと龍也様は振り返り、何かを言いかけるが・・・言葉が見つからないのかそのまま押し黙っている・・・私は龍也様に抱きついて泣きながら

「私では・・・龍也様の1番になれないのですか・・・私はこんなに貴方を想っているのに・・・貴方は・・・唯の一度も私を見てくれた事は無い・・・どうして何ですか・・・私の・・・何処がはやて達に劣っているのでしょうか・・・私が・・・私こそが・・・龍也様の悲しみも苦しみも

全部受け入れて・・・貴方の隣に立てるんです・・・なのに・・・如何し

て・・貴方は私を見てくれないのですか・・」

私が泣きながら言うと龍也様は

「セツテ・・私には・・誰かを愛する資格など無いんだ・・それに・
・私は・・自分の幸せに幸福を見出せない・・壊れた男だ・・何時
までもこんな男に構う必要は無いんだ・・判るだろ？」

そう言う龍也様に嫌々と首を振りながら

「違います！！龍也様は壊れた人間なんかじゃありません！！・・
龍也様が自分の幸せを見出せないなら・・私がずっと傍に居ます！
！龍也様が・・変わるまで・・龍也様が心から笑える様になるま
で・・何時までも・・ずっと傍に居ます！！」

私がそう言うのと龍也様は抱きついていて私を引き離し

「駄目だ・・お前にはお前の幸せがある・・私の事など忘れて・・
むぐつ！！」

龍也様が忘れてしまえと言い切る前に、私は龍也様の唇を自分の唇
で塞いだ・・聞きたくなかった・・そんな・・言葉は・・ロマンチ
ックでも何でもない・・ただ・・強引なキスだ・・暫くそのままだ
ったが・・龍也様に引き離され・・その時は終った・・龍也様はそ
の場に座り込む・・私はショックを受けてる龍也様に

「私は・・どんな事をしてても貴方の1番になりたい・・貴方の悲し
みも苦しきも・・全部受け入れます・・だから・・私を見てくださ
い・・龍也様・・貴方は1人じゃないんです・・少なくともここに・
・貴方を想う者が居る・・その事を忘れないで下さい」

そう言つて私は屋上から歩き去つた・・屋上から旅館に戻つた瞬間

「残念ながら・・貴女が見れるのはここまでです」

頭の中に混沌の魔法使いの声が響き、私はその世界から引き戻された・・

「如何でしたか？・・これから起きる未来を見た感想は・・シュッ
！！・・危ないですね・・」

にこやかに尋ねて来る混沌の魔法使いに腹が立ちナイフを投げるが、それは当たる事無く背後の壁に突き刺さつた・・

「やれやれ・・よっぽど不快な未来だったのですか？・・貴方の望み通り守護者とキスできたのではないのですか？」

そう尋ねて来る混沌の魔法使いに

「あんな物を見せて・・何のつもりだ・・」

私が睨みながら言つと混沌の魔法使いは頭を掻きながら

「いえいえ・・別に他意はないですよ？・・ただ私は客人に未来を見せるだけ・・それがどうであれ・・私には関係の無い話です」

そう言つ混沌の魔法使いにまたナイフを投げようとする

「ははは・・もう少し話をしたかったですね・・このままでは殺されてしまいそうですね・・残念ですが話は次の機会にしましょ

う・・・それでは・・・貴女がここに再び足を踏み入れる時を楽しみにしていますよ」

その言葉と同時に混沌の魔法使いの姿は消えた

「待て・・・？・・・私は一体何を？」

私は気が付くと大量の紙袋を抱え道の真ん中に立っていた・・・何かあった気がするのだが・・・それを思い出す事は出来なかった・・・

「？・・・おつと・・・早く買い物を済ませましょう・・・龍也様はどんな下着が好みですかね？・・・レースかな・・・それとも・・・透け透けのかな・・・もういつそ両方買いますか・・・」

私はそう呟きその場を後にした・・・思い出せないと言うことは大した事ではなかったのだ・・・ならそんなに気にする必要が無いと判断して・・・私は買い物に戻った・・・結局私は・・・どの下着が1番龍也様に喜ばれるか判らず・・・大量の下着を買い込む事となった・・・

ケース2 スナイパーの場合

「えつと・・・服も買ったし・・・化粧品も買った・・・もう買う物は無いわね・・・」

私は大量の紙袋を持ちながら街中を歩いてた・・・六課の近くに来た所で

「図書館？・・・あんな所に図書館あったけ？」

何時も通り道だが見覚えの無い図書館に首を傾げながら私は

「とりあえず・・・行ってみましょうか・・・」

私は図書館に向かって歩き出した・・・

「こほ・・・こほ・・・埃っぽいなあ・・・」

私が咳き込みながら呟くと

「おや・・・お客ですか・・・ようこそ・・・ティアナランスターさん」

目の前に黒い服装の男が現れる・・・柔和な笑みを浮かべているが・・・
どうしても私にはその男の顔が見えなかった・・・

「貴方は？」

私がそう尋ねると男は帽子を脱ぎながら

「私、混沌の魔法使いと申します・・・私はここの管理人などをや
らして貰っている・・・しがない司書でございます」

帽子を脱いでる筈なのにやはり、混沌の魔法使いの顔は見えなかつ
た・・・混沌の魔法使いは柔和な笑みを浮かべながら

「それではティアナさん・・・本来なら貴女が望む未来を見せて差し
上げるのですが・・・今回は近い内に貴女に起きる出来事をお見せし
ましょう」

そう言々と私の前に鎖で封印された本が浮かび上がる・・・それにも驚いたが・・・

「未来ってどういう意味ですか・・・？」

その言葉の意味を尋ねようとしたが混沌の魔法使いは

「それは貴女の目でお確かめ下さい・・・」

そう言々と私の意識は闇に沈んだ・・・

「ここは・・・？」

私は豪華な装飾が施された部屋の中に立っていた・・・私が辺りを見回してると

「おっ！居た居た・・・探したよ～ティアナ」

変わった髪形の見覚えの無い女性が話しかけてくる、私はその人を知らない筈に自然に

「朝倉・・・私に何の用？」

そう尋ねると朝倉はにこ～と笑いながら

「んふふ～今日ね龍也さんも別荘に居るでしょ？・・・今の内に仮契約しちやいなさいよ・・・スバルと一緒にさ？」

そう言う朝倉・・・私は仮契約と言う聞き覚えの無い言葉に首を傾げた・・・それを見た朝倉は

「ちよつと．．まだ迷つてゐるの？．．ティアナは龍也さんの事好きなんですよ．もうしちやいなよ．．皆もう仮契約してゐるんだよ？．．はやてにヴィータ．．それになのはにフェイト．．チンクとセツテも、もう龍也さんと仮契約してないのティアナとスバルだけなんだよ？．．恥かしいとか言つて無くてさ．．もうやつちやいなよ．．龍也さんなら今１人で浜辺に居るからさ．．大丈夫！！はやて達は私が押さえとくからさ」

そう言う朝倉に頷き私はその部屋を後にした．．私が浜辺に向かつて歩いてると反対側からスバルが歩いて来て

「あつ．．ティア．．ティアも朝倉に龍也さんと仮契約しろって言われたの？」

そう言うスバルに頷くとスバルは頬を赤らめながら

「でも．．仮契約つてキスしなけきやいけないんだよね．．アーティファクトとかが貰えるのは嬉しいけど．．キスするのは抵抗があるよね．．」

そう言うスバルに

「き．．キス！？．．龍也さんとキスしないと仮契約出来ないの？」

そう言うスバルは首を傾げ

「何言つてゐるの？．．１番最初にネギとカモに言われたじゃん．．度忘れしたの？」

そう言うスバルに頷くとスバルは私の手を掴み

「恥かしいとか言うのは忘れてさ・・仮契約しに行こう・・もうなのはさん達もしてるんだから・・私達もしないと」

私は引つ張られるように浜辺に出た・・そこには

「・・・」

黒いコートを着た龍也さんが空を見上げていた・・私達が近付くと龍也さんは振り返り

「スバルとティアナ?・・何のようだ?」

そう尋ねてくる龍也さんにスバルが

「いえ・・少し話をしたいなと思ひまして」

そう言つて龍也さんの隣に腰掛け、龍也さんと暫く話してると

(おいおい・・何時まで世間話してるんだよ・・早くブチュって行つちまえよ!!)

頭の中に突然響く声に驚き声のした方を見ると

(おこじょ!)

オコジョが私達を見ながら前足を振っていた・・その言葉にスバルが

(ティア・・先にお願ひします・・私は・・まだ無理)

そう言うスバルに頷き・私は勇気を出して

「龍也さん・こつち向いてくれますか？」

龍也さんがこつちを向いた瞬間に龍也さんの唇に自分の唇を押し付ける・龍也さんが驚いたように目を見開くが・私を突き飛ばしたりはしなかった・私が離れると同時に私の前にタロットカードの様な物が現れる・私がそれを掴むと・今度はスバルが

「その・私も仮契約したいんで・その・すいません」

謝ってからスバルが龍也さんにキスをする・私と同じ様にタロットカードの様な物が現れる・スバルがそれを掴むと龍也さんは

「スバル達も私の従者になったのか・」

そう呟く龍也さんは驚いているように見えたがそんなに動揺しているようには見えなかった・仮契約がキスする必要があるという事は龍也さんはこの世界に来てからキスしまくっているので慣れてしまったのだろう・私がそんな事を考えてると

「スバル・ティアナ・まあ・何だ・無理やりキスされた事をとやかく言うつもりは無いが・もう少し女の子としての恥じらいを持つな・それと契約を破棄したかったら声を掛けてくれ・私は従者だからってお前達を縛るつもりは無いからな」

そう言って歩いて行く龍也さんを見ながら、現れたカードを見るそこにはラテン語だろうか・とりあえず私には読めない文字と私の絵が描かれていた・私がそのカードをぼんやりと眺めてると

「残念ながら・・・貴女が見れるのはここまでです」

混沌の魔法使いの声が響き、私はその世界から引き戻された・・・

「・・・如何でしたか？・・・これから来る未来は？」

本に鎖を巻きながら尋ねて来る混沌の魔法使いに

「わ・・・私は龍也さんにキスしちゃってました・・・」

私が赤面しながら言うと混沌の魔法使いは本を本棚にしまいながら

「おやおや・・・それは積極的な事ですね・・・でもまあ・・・鈍感な守護者の事ですからそれくらいの方が丁度良いのかもしれませんが・・・今日貴女が見たのはこれから起きる未来・・・ですが・・・未来は変わります・・・貴女が・・・守護者がどう動くかで全ては変わります・・・私はここでどうなるのか見させて貰いますよ・・・それではまたのお越しを心待ちにしております」

そう混沌の魔法使いが頭を下げると図書館は一瞬で消えた・・・

「未来・・・ん！？・・・あれ・・・私如何してこんな所に・・・？」

何も無い空き地の前に立っていた・・・私は如何してこんな所に居るのだろうか？と考えてると

「あれ？ティア・・・買い物終わったの？・・・私も今終わった所なんだ・・・一緒に帰ろうよ」

そう笑うスバルに頷き私は六課に戻った・・・今日何かとても衝撃的な事があったような気がしたのだが・・・どうしても思い出す事は出来なかった・・・

ケース3 ヤンデレ魔王様の場合

「んふふ・・・お気に入りの香水に・・・新しい下着も買った・・・別の世界に行くのが楽しみやな」

私はそう笑いながら新しい服を買いに行こうとした時

「ん・・・あんな所に図書館あったけ？」

何時も通り道だが見覚えの無い図書館に首を傾げながら私は

「とりあえず・・・行ってみよか・・・」

私は図書館に向かって歩き出した・・・

「こほ・・・こほ・・・埃っぽいなあ・・・掃除してへんのか？」

私が咳き込みながら呟くと

「おや・・・お客ですか・・・ようこそ・・・八神はやてさん」

目の前に黒い服装の男が現れる・・・柔和な笑みを浮かべているが・・・どうしても私にはその男の顔が見えなかった・・・

「どうして私の名前を知ってるんや？」

驚きながら尋ねると男は帽子を脱ぎながら

「私は貴女の事を良く存じておりますよ．．．勿論貴女のお兄様の事も．．．おつと自己紹介が遅れましたね．．．私は混沌の魔法使いと申します．．．私はこの管理人などをやらして貰っている．．．しない司書でございます」

帽子を脱いでる筈なのにやはり、混沌の魔法使いの顔は見えなかった．．混沌の魔法使いは柔和な笑みを浮かべながら

「それでははやてさん．．本来なら貴女が望む未来を見せて差し上げるのですが．．今回は近い内に貴女に起きる出来事をお見せしましょう」

そう言う私の前に鎖で封印された本が浮かび上がる．．それにも驚いたが．．

「未来ってどういう意味や．．？」

その言葉の意味を尋ねようとしたが混沌の魔法使いは

「それは貴女の目でお確かめ下さい．．」

そう言う私の意識は闇に沈んだ．．

「ここは．．何処や？」

私は大きな樹の生えた広場に立っていた．．

「いつひっひ・・・守護者・・・また・・・私にやられに来たのですか？」
鎌を持ったネクロ・・・ファントムが姿を見せる・・・兄ちゃんはファントムに

「残念だが・・・お前の技はもう私には効かん・・・私は答えを得た・・・もう2度と道を見失いはしない！」

兄ちゃんがそう言つとファントムは

「くつく・・・良く言いますね・・・貴方の心の中は悲しみと苦しみ・・・そして孤独しかない・・・そんな人間が私の魔法を敗れるものか！！
ナイトメア・・・クローズ！！」

ファントムが漆黒の球体を放つ・・・兄ちゃんがその球体に呑み込まれるが直ぐに

「効かんよ・・・私は・・・もう・・・孤独ではないのだから・・・私はずっと自分を偽ってきた・・・だが・・・そんな事をする必要は無かったんだ・・・はやてが・・・ヴィータが・・・なのはが・・・フェイトが・・・スバルが・・・ティアナが・・・チンクが・・・セツテが教えてくれた・・・私は孤独ではないと・・・見せてやる・・・私の本当の世界を！！」

兄ちゃんはそう言つと詠唱に入る・・・そうはさせまいとファントムが攻撃をするが兄ちゃんのプロテクションを破る事は無かった・・・

「I was solitary・・・（私は孤独だった・・・）」

兄ちゃんがそう呟くと蒼い炎が迸り・・・世界を作り変え始める

「I concealed everything and was alive・・・（私は全てを隠して生きて来た・・・）

空を鉛色の雲が覆い隠し・・・冷たい風が吹き始める・・・それは雪の庭園と同じ光景だった・・・私では・・・兄ちゃんの心を変える事が出来なかったのか・・・そう思った瞬間

「I shouldn't have done that from the start・・・（私は最初からそんな事をするべきじゃなかった）

嵐になりかけていた風がピタリと止む・・・

「It was not a true desire・・・（それは本当の願いでは無かった・・・）

鉛色の雲の間から暖かな光が差し始める・・・

「The one that I wanted it, the one that I wanted to feel empty soul・・・（私が欲しかった物、私の空っぽな魂を感じたかった物・・・）

地面を覆っていた雪が徐々に解け始める・・・それは兄ちゃんの深い悲しみが消え始めた証その物だった・・・私は自然と目頭が熱くなるのを感じていた・・・

「but・・・I recalled it!（だが・・・私は全てを思い出した!）」

雲が完全に消え去り何処までも澄んだ青空が姿を見せる

「Your gave me the shine.（皆は私に輝きをくれた）」

雪に埋もれていた草原が姿を見せる・・・それは黄金色に輝き、とても美しいと思った

「Therefore I can smile（だから私は微笑む事が出来る）」

冷たい風が徐々に温かい・・・春風のようになっていく・・・

「Do you allow me to come back to you?（私はあなたの元へ戻れますか?）」

穏やかな風が吹く度に兄ちゃんの体に騎士甲冑が展開されていく

「Just running through now.（今をただ駆け抜けて）」

それは今まで一度も見えた事が無い物だった

「With a blue wind...（蒼い風と共に・・・）」

蒼く澄んだ輝きを放つ神々しいまでの騎士甲冑に身を包みながら兄ちゃんは

「Blue wind watched from heaven

n”（天界から見守る蒼い風）

静かにだが・・力強くそう呟く・・それと同時に世界が完全に作り換わった・・何処まで続く黄金色の草原・・透き通るような青空・・そしてその世界の中心で佇む兄ちゃんは、目の前の丘に突き刺さる黄金色の剣の柄に手を置き・・それを勢い良く抜き放ちながら

「Today which you lived today, will be a totally different day from a day which you will live tomorrow・・（今日、貴方が生きた今日は、貴方が生きるであろう明日とは全く別の異なる日になるだろう・・）」

兄ちゃんはその言つと剣を正眼に構え

「行くぞ・・ファントム・・貴様の呪われし鎖・・この私が断ち切るッ！！！」

凄まじい勢いで走り出した・・私は何処までも広がる黄金色の草原と蒼い空を見ながら

「わ・・私は・・ううん・・私達は兄ちゃんの心を変えたんか？」

思わずそう呟いた・・雪と氷に包まれた兄ちゃんの心の象徴であった雪の庭園の面影は何処にも無く・・暖かい風が断続的に吹くこの世界は・・春・・そう春その物だった・・私がそんな事を考えていると

「残念ながら・・貴女が見れるのはここまでです」

混沌の魔法使いの声が響き、私はその世界から引き戻された・

「・・・如何でしたか？・・・これから来る未来は？」

本に鎖を巻きながら尋ねて来る混沌の魔法使いに

「私は・・・私達は・・・兄ちゃんの心の中を変えてた・・・何時や！何時変えられるや！！」

私がそう尋ねると混沌の魔法使いは困った様に

「困りましたね・・・私も何時起きるとかは判らないですよ・・・ただ近い内に起きる未来としか・・・すいませんね・・・はやてさん」

謝ってくる混沌の魔法使いに

「いや・・・そんなに気にせんでも良いよ・・・とりあえずあんたのお陰で兄ちゃんの心の中を変えられるって言うのが判ったで」

私がそう言つと混沌の魔法使いは穏やかな笑みを浮かべながら

「そう言つて貰えると私も安心です・・・もう少し話をして居たいのですが・・・残念ですが時間切れのようです・・・次に貴女がここに足を踏み入れる事があつたのなら・・・貴女が望む未来をお見せしましょう・・・それでは・・・貴女がここに再び足を踏み入れる時を楽しみにしていますよ」

そう混沌の魔法使いが頭を下げると図書館は一瞬で消えた・・・

「未来・・・ん！？・・・あれ・・・私如何してこんな所に・・・？」

私は香水や下着の入った袋を持ったまま空き地を見ていた・・・私が首を傾げていると

「はやて？・・・どうしたんだ？ぼんやりとして」

同じ様に袋を持った兄ちゃんが声を掛けてくる私は笑いながら

「んーちよお・・・考え事・・・兄ちゃんも買い物か？」

判っているのだがそう尋ねると

「そうだよ・・・そうだ・・・折角だから一緒に買い物するか？」

そう言う兄ちゃんに頷き空いてる手で兄ちゃんの手を握りながら

「ねえ・・・兄ちゃん・・・服とか買ってくれる？」

お金はある・・・でも兄ちゃんに買って欲しくて言つと兄ちゃんは微笑しながら

「良いよ・・・好きなのを買つてあげるよ」

そう言う兄ちゃんに

「えへへ・・・兄ちゃん・・・大好き」

私がそう言つと兄ちゃんは困った様に・・・だが楽しそうに

「ふふ・・・そうか・・・私もはやてが好きだよ・・・妹としてな」

そう笑う兄ちゃんに私は

（まだ・・・妹か・・・でも今は良い・・・私は絶対そこから出るんやから・・・）

私はそんな事を考えながら兄ちゃんと買い物を楽しんだ・・・近い内に訪れる未来・・・その時守護者の心は大きく変わっていく・・・それはそう遠くない未来の話・・・それではその時にまたお会い致しましょう・・・

P V 2 / 5 0 0 / 0 0 0 記念番外編 未来を語る者？ 終り

PV 2 / 500 / 000 記念番外編 未来を語る者? (後書き)

どうも混沌の魔法使いです、今回は第二部の予告も兼ねた番外編でした、セツテはネギまの5巻、ティアナは8巻の前編・・はやては9巻と10巻の間のオリジナルの話です・・今回の話で第二部を楽しみにしてくれる方が居たのなら幸いです・・それでは次の更新もどうか宜しくお願いします

龍也とマテリアルと聖王と 第10話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回は久しぶりに龍也とマテリアルと聖王・・・の更新です！！PVの番外編や一周年の方に気を取られすぎて全然更新できてなかった事を思い出し、急遽執筆を始めました！！それでは今回もどうか宜しくお願いします

龍也とマテリアルと聖王と 第10話

第10話

「うわあ・・・凄い・・・」

遊園地を見て凄いという雷華の頭を撫でながら

「今日はここで一杯遊ぼうな・・・では・・・最初はどれに乗る？」

私がそう訪ねると勢い良く静夜と雷華が手を伸ばし、2人同時に

「ゴーカート！」

「ジェットコースター！」

上が静夜で下は雷華だ・・・私はその2つの意見を聞いて

「それじゃあ、最初はゴーカートに行こう、その後でまた何処に行きたいか聞くとよ」

私がそう言つと雷華は私の服の裾を握つて

「パパ・・・僕の乗りたいって言つたジェットコースターには行つてくれないの？」

涙目の雷華・・・本当なら乗せてやりたい・・・だが・・・乗せれない理

由があつたのだ・・私は雷華の頭を撫でながら

「雷華・・言い難いんだが・・ジェットコースターに乗るにはもう少し背が高くないといけないんだ」

ギリギリ・・本当にギリギリなのだが身長が足りず乗せる事が出来ないと言うと雷華は

「そうなんだ・・じゃあ・・ジェットコースターはもう少し大きくなつてからにする！」

そう頷く雷華を連れて私達はゴーカート乗り場に向かった

「全員は乗れないから・・順番をどうする？」

大きなゴーカートと言っても5人は同時に乗れない、だから順番をどうする？と尋ねると、静夜と雷華が同時に手を上げる、星奈とヴィヴィオは椅子に座り

「それでは私達は次ですね・・お父様私はここでヴィヴィオと待っています」

そう言う星奈に頷き、雷華と静夜を連れてゴーカートに乗った

「わーい！」

楽しい雷華に少し怖いのだろうか私の服を握り締める静夜を見ながらコースを一周し、次に星奈とヴィヴィオを乗せる、ヴィヴィオは私の膝の上で星奈は私の隣に腰掛けた

「それでは行きましょう」

何時もの無表情ではなく、楽しげな表情の星奈に頷き、私は再びゴーカートを走らした・・

「楽しかったです・・」

「ヴィヴィオ！凄く楽しかったよ！」

そう言う2人を連れて雷華と静夜と合流し、次にメリーゴーランドとコーヒーカープに乗り、次のアトラクションはどれにする？と話しながら歩いてる、ヴィヴィオが急に立ち止まる

「パパ・・ヴィヴィオ・・あれ欲しい・・」

ヴィヴィオが大きいぬいぐるみを指差し言う、それはボールを投げて落せば貰えると言うゲームだった・・私は

「そうか・・ではやってみるか・・すみません1回お願いします」

そう言って店主からボールを5個貰う、私は1番最初にヴィヴィオが欲しいと言ったぬいぐるみの頭を狙ってボールを投げる

ポス・・グラッ・・

頭に当たって揺れるぬいぐるみ目掛けもう1個投げつける

ポトンッ・・

ゆっくりと倒れるぬいぐるみ、私が上手く行って良かったと思って

ると、今度は静夜が

「我はあれが欲しい」

小さめのぬいぐるみを指差す、その後ろでは雷華と星奈も目を輝かせていた・・私はボールを握り締め

（失敗は許されない・・1発で決める）

手持ちは3個・・ミスは出来ない・・私は妙なプレッシャーを感じながらボールを投げた

「くくくここにこ・・くくく」

思い思いのぬいぐるみを抱き抱え笑っている静夜達を見て安心してると店主が

「パーフェクト賞です、どうぞ特製カエルさんコートです」

カエルのレインコートを4人分受け取り、私達は次のアトラクションを探して歩き出した・・一通りアトラクションを回り終え、昼食を食べ終えた頃、星奈が

「はふ・・つとすいません・・お父様」

疲れたのか欠伸をする星奈、静夜達も眠そうだ、私は近くのベンチを指差し

「少し休もうか？」

そう言って静夜達を連れてベンチに向かった・

「……すーすー……」

ベンチに座って直ぐ眠り始めたしまった静夜達を見て

「昨日はしゃいでたからなあ・・疲れたんだろ」

私はそう呟き4人が起きるのを待っていた・

「むにゅ・・?・・ふああああ・・良く寝た・・」

静夜が大きく伸びをしながら起き出す、それに続いて雷華、星奈、ヴィヴィオの順に起きる、星奈は

「折角遊びに来たのに寝てしまいました・・まだ遊ぶ時間はありませんか?」

そう尋ねてくる星奈の頭を撫でながら

「大丈夫だよ、まだ時間はあるからな・・それじゃあ次は何で遊ぶ?」

そう尋ねると星奈達は同時に

「……観覧車!」

と言った私は荷物を持って

「それじゃあ、観覧車に乗りに行こうか?」

そう言つて星奈達を連れて観覧車乗り場に向かった・・日が暮れ始めたからか大分人が並んでる、このまま待つてたらこれ以上遊べなくなると思ひ

「どうする？大分並んでるから、別のにするか？」

そう尋ねるが静夜達は観覧車が良いと言つて並ぶと言つ、私はそんなに乗りたひのなら並ぶか・・そう思ひ列の最後尾に並んだ・・

「・・綺麗です・・」

私は観覧車の窓から沈む夕日を見てそう呟いた・・待ち時間が長かつたから夕日が沈み始める頃に観覧車に乗れた・・だからこつやつて沈んでいく夕日を見て綺麗だと思ひそう呟くと、静夜も

「うむ・・確かに綺麗だな」

そう呟くただ雷華だけは窓の外を見ずに

「えへへパパ」

頭を擦り付ける様に抱きつき笑つていた・・お父様は苦笑しながら

「雷華は外を見ないのか？」

そう尋ねると雷華は首を振りながら

「何時でも見れるもん・・・だから僕はこっちの方が良い・・・」

そう呟く雷華・・・暫くそのまま見ていたが

「雷華だけずるいです・・・」

「独り占めは許さんぞ」

「ヴィヴィオも！」

3人でお父様に抱きつくとお父様は苦笑しながらも私達の背中を優しく撫でてくれた・・・私はとても幸せだと思った・・・本来私達は生きてはいけない存在・・・でもそんな事を気にせず、本当の娘の様に扱ってくれるお父様・・・それだけで私はとても幸せだった・・・私はそんな事を考えながら

（出来るなら・・・この幸せが何時までも続きますように・・・）

心の中でそう呟いた・・・そんな事を考えてる内に観覧車は一週回り終え降りる時になった・・・私達は観覧車から降り、駐車場に向かいながら

「お父様、またこうやって遊びに来たいです」

私がそう言つと雷華達も頷く、お父様は私達の頭を撫でながら

「そうだね・・・また来ような・・・皆でな」

そう微笑むお父様に頷き、私達は車に乗り込み、アリサさんの家の離れに向かった・・・まだ遊び日は残ってる・・・明日はピクニックに

行く日だ・・私が明日行くピクニックを楽しみにし始めた頃、空には雲が出始めていた・・

第11話に続く

!!

龍也とマテリアルと聖王と 第10話（後書き）

龍也とマテリアルと聖王シリーズは短めの番外編なんですね、登場人物があんまり多くないですし・・ちよつとこう100%ほのぼの？だけというのも長く書くのは難しいんですね・・でも書くのは嫌いじゃないんですよ、ヴィヴィオとかマテリアルズは可愛いので書いて本当に楽しいんですね・・もっと作家としてレベルアップして、もっと活躍の幅を広げてあげたいと思う混沌の魔法使いです！それでは次回の龍也とマテリアルと聖王もどうか宜しくお願いします

番外編 祝福の風と守護者と・・・（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回はリインフォースさんの番外編です！！中々面白いと思うので今回もどうか宜しく願いします

番外編 祝福の風と守護者と・・

番外編 祝福の風と守護者と・・

「い・・今なんと？仰られましたか？」

私はそう尋ねると兄上様は

「明日暇だったら私と出掛けないか？と聞いたのだが？」

小首を傾げる兄上様は私に

「嫌か？・・嫌なら別に・・」いいえ！行きます！！行かせて貰います！！」

私は慌てて言うつと兄上様は穏やかに微笑み

「それじゃあ、明日な」

そう言つて部屋に戻つて行く兄上様を見て、私は

「あ・・兄上様から・・誘つて貰えた・・」

その事が嬉しくてブーツしているとヴィータが私の肩を叩きながら

「リインフォース、ちょっと来い」

そう言うヴィータに頷き、私はヴィータの後を追って食堂を後にした・ヴィータの行き先はシグナムの部屋だった、ヴィータはシグナムの部屋の戸を叩く、暫くすると扉が開きシグナムが姿を見せ、私とヴィータを見ながら

「どうした？2人揃って？」

訳が判らないと言う表情のシグナムにヴィータは

「ちょっとな・・大事な話があるんだよ」

そう言つてシグナムの断りも無く、私の手を引いてシグナムの部屋の中に足を踏み入れた

「強引だな・・別に良いが・・それで話とは何だ？」

私とヴィータの前に紅茶の入ったカップを置きながら言うシグナムにヴィータは

「あのよシグナム、リインフォースに服を貸してやって欲しいんだよ」

私！？私の事とは思つてなかったので私が驚いていると、シグナムは

「別に良いが・・急にどうしたんだ？」

首を傾げるシグナムにヴィータは私の肩に手を置いて

「明日な、リインフォースと兄貴がデートすんだよ」

そう言うヴィータに私は慌てて

「で・・・デートじゃなくて!!・・・ちょっと出掛けないか?と誘われただけだ!!」

私が赤面しながら言うと、シグナムとヴィータは口を揃えて

「それはデートと言うんだ」

「デートだろ」

キツパリと言い放つ2人に私が停止してると、シグナムは

「判った、デートだから私の服を貸して欲しいと言うんだな?・・・だが・・・お前の服でも良くないか?」

シグナムがそう言うつとヴィータは肩を震わせながら俯き

「・・・私の服だと駄目なんだよ・・・」

そう言うヴィータに私が首を傾げるとヴィータは握り拳を膝の上で作りながら

「ウエストとかは大丈夫だと思うぜ・・・でもよ・・・胸周りが・・・駄目だ・・・」

ぼそりと言うヴィータに私とシグナムは

「「あつ・・・」」

口を揃えて呟いた・ヴィータは大きくなったが・その・いい
難いが胸はそんなに大きくない・これは主はやても同じだ・そ
の点、私とシグナムは・大きい・しかもかなりだ・シグナム
の部屋をなんだか居心地の悪い空気が充満し始めた・私とシグナ
ムが目に合わせて困ってるヴィータは

「・・・という訳で、リインフォースに服を貸してやってくれ」

シグナムにそう言ったヴィータは俯いて、自分の胸を見ながら

「良いもん・その内大きくなるもん・」

完全いじけてしまっていた・私とシグナムは今の状態のヴィータ
には何を言っても駄目だと判断し、2人でクローゼットの方に向か
った・

「これなどはどうだ？」

シグナムに手渡された服を見て

「無理だ!!!・こ・こんなの・恥かしい・」

胸元が大きく開いた服で、恥かしくて無理だと言つと

「そうか・・・ではこれは？」

シグナムが差し出して来たのは・

「・・・お前・・・」

私が服の感想を言う前にシグナムは真っ赤になり

「・・・うるさい・・・似合わないのは判ってる・・・」

真っ赤で俯きながら言うシグナムに手渡された服を見る、フリルつきの白いワンピースで胸元には大きめのリボン・・・そして肩やスカートには黒のワンポイントが入っていた・・・なんと言うかお嬢様と言う感じの服で、私は気に入ったがシグナムにはイメージが合わないだろう・・・私が服を持ちながらそんな事を考えてると、シグナムは

「気に入ったならやる、大切にしてくれ」

そう言うシグナムに頷き、ヴィータが待ってる部屋に戻り、私とシグナムは停止した・・・そこには

「くすん・・・どうしてだよ・・・折角成長出来たのに・・・何で胸は小さいままなんだよ」

体育座りで落ち込んでいるヴィータの姿があった・・・私はなんと声を掛ければ判らなかったかとあえす

「ヴィータ・・・服は借りたぞ？」

そう声を掛けるとヴィータはゆっくり立ち上がり

「そうか・・・んじゃあ・・・私は寝る・・・」

ふらふらと歩いて行くヴィータを見ながら、私も自分の部屋に戻った・・・

「ふむ・・・少し早すぎたか・・・」

私は待ち合わせ場所でそう呟いた・・・待ち合わせの場所は遊園地のゲートの前、前に雑誌の取材を受けたときにお礼として貰った、フリーチケットがあるので丁度良いと思ったのだ・・・私は時計を見ながらそう呟き、遊園地のゲートの近くのベンチで腰を下ろしてリンフォースが来るのを待った・・・待ち始めて数分後

「すみません！！お待たせしました！！」

リンフォースの声が聞こえ振り返り、私は目を見開いた・・・白の上品なワンピースに身を包んだリンフォースは長い銀髪を相まつてとても美しかった・・・私が驚いているとリンフォースは不安そうに

「あの・・・もしかして似合っていないですか？」

目の前で首を傾げるリンフォースに慌てて

「いいや、そんな事はないぞ・・・似合いすぎて驚いてたんだ」

私が正直にそう言うのとリンフォースは頬を赤らめながら

「あ・・・ありがとう・・・ございます・・・兄上様・・・」

そう言うリンフォースに

「それじゃあ、行こうか」

「はい！」

嬉しそうに言うリインフォースの隣を歩いてゲートを潜った・

「す・・凄いです・・」

遊園地の中を見て驚くリインフォースに

「何処から行く？」

笑いながら尋ねるとリインフォースは

「そ・・その・・あれはどうでしょうか？」

リインフォースが指差したのは・

「ホラーハウス？・・本当にあそこで良いのか？」

雑誌で紹介されるほど怖いと有名なホラーハウスだった・・私がその事を教えると・

「・・そ・・そ・・そんなにですか・・そ・・それじゃあ・・止めます・・」

止めると言うリインフォースに

「代わりにあれで良いだろう？」

私が指差したのは

「ジェットコースターですか？．．あれなら平気そうですね．．」

そう呟くりインフォース、それは当然だろう空戦魔道師がジェットコースターを怖い訳が無いと思ったのだが．．

「っきゃあああああぁあッ！！！！！」

隣で大絶叫するインフォースに驚いた．．模擬戦とかでは物凄い速さで空中戦をする様には見えなかったからだ．．私は驚きながらもインフォースの手を握り

「大丈夫」

私がそう言うのとインフォースは叫ぶのを止め、耳まで真っ赤になりながら

「．．はい．．」

そう呟くりインフォースが可愛くて私は少しだけ笑ってしまった．．ジェットコースターを降りた後．．インフォースに

「空中戦とは感覚が違うのか？」

そう尋ねるとインフォースはゆっくりと頷き

「出来れば．．もう2度と乗りたくないです．．」

そう呟くりインフォースを連れて私は遊園地の中を移動した．．ゲ

ームセンターや何故かやっていた体験乗馬など色々と遊んだ・・その間リインフォースはとても楽しそうに笑っていて、誘って良かったなと私は思っていた・・リインフォースには楽しい思い出よりも辛くて悲しい記憶の方が多い・・だから少しで多くの楽しい思い出を作ってやりたいと思って、今日誘ったのだ・・勿論訳は他にもあるのだ

が・・私がそんな事を考えてると

「兄上様！こっちです！次はあれが良いです」

笑顔で私を呼ぶリインフォース・・外見的には大人だが、中身は子供のような彼女に苦笑しながら

「ああ・・今行くよ」

そう言いながらリインフォースの呼ぶ方に向かって歩き出した・・

こんなに楽しいのは初めてだ・・私は兄上様の隣を歩きながらそんな事を考えていた・・

「兄上様、最後はあれに乗りませんか？」

私は観覧車を指差しながらそう言った、もう直ぐ閉園時間だ・・最後に乗るのはあれが1番良いと思ったのだ

「そつだな・・行こうか」

笑いながら頷く兄上様と一緒に観覧車に乗った

「綺麗だ・・・」

夕日が沈んでいくのを見ながら私はそう呟いた・・・向かい側の兄上様を見ると穏やかに微笑んでいた・・・その時私は気になっていた事を尋ねた

「兄上様・・・どうして私を誘ってくれたのですか？」

私が気になっていた事はそれだった・・・主はやてやヴィータ、シグナムでも無く私・・・それがどうしても気になっていたのだ・・・私がそう尋ねると兄上様は

「・・・前になヴィータに聞いたんだが・・・お前達には誕生日が無いだろう？」

私が頷くと兄上様は頭を掻きながら

「それでな・・・ヴィータ達は自分で誕生日を決めたんだ・・・何でも自分にとつての記念日にしたそうなんだ・・・それでな・・・リインフォースにも何か記念日があれば・・・それを誕生日に出来ると思ったんだ・・・だが・・・その私はこういうのを考えるのは苦手で・・・それで、前にお前から遊びに誘ってくれただろう？・・・だから・・・その・・・私から誘ったのは初めてだから・・・記念日にならないかな？と思ったんだ」

不安げにそう言う兄上様が酷く可愛く見えた・・・そしてそこまで私を思っていてくれた兄上様がいる事がとても嬉しかった・・・

「兄上様・・・嬉しいです!!」

私がそう言って抱きつくと兄上様は私の背を撫でながら

「その・・・ごめんな・・・もっと気の聞いた事が出来れば良かったんだが・・・」

謝ってくる兄上様を上目目線で見ながら

「いいえ・・・そんな事は無いです・・・とても嬉しいです・・・兄上様・・・」

そう言くと兄上様は空いてる手で頭を搔く、私は兄上様の身体を離さないように確りと抱きしめ・・・観覧車から降りる時間までずっとそうしていた・・・

「兄上様・・・今日はとても楽しかったです・・・」

帰り道で兄上様の腕を抱き抱えながら言うと、兄上様は

「そうか・・・喜んでもらえて嬉しいよ」

そう笑う兄上様を見ながら私は六課へとゆっくりと歩いて行った・・・

「大丈夫・・・何にも問題ないはず・・・うん・・・兄と寝るのは何も悪い事じゃない・・・」

その日の夜、私に兄上様の部屋の前で自分に言い聞かせるようにそう言つと

「良しッ！」

私は気合を入れて兄上様の部屋の扉を叩き、兄上様の部屋に足を踏み入れた

「ん？・・・リインフォースか？・・・どうした」

寝る前だったのかパジャマ姿の兄上様に

「その・・・一緒に寝たくて来たんですけど・・・駄目ですか？」

枕を抱き抱えながら言っていると兄上様は

「別に良いぞ」

笑いながら言う兄上様に頷き、私は兄上様と一緒に寝室に向かった

「はふう・・・暖かいです・・・」

兄上様の胸に顔を埋めながらそう呟くと兄上様は

「少し・・・近すぎないか？」

少し赤面している兄上様に

「近くないです・・・これくらいが丁度良いです・・・」

さらに抱きしめる力を強めると

「まあ・・・良いか・・・ヴィータもこんな感じだしな・・・」

そう呟く兄上様の胸に顔を埋めながら

（私はどんどん欲張りになってしまっ・・・最初は傍に入れば良かったのに・・・今はそれだけじゃ嫌だ・・・兄上様に愛されたいと思ってる・・・でも・・・これは・・・これで心地良い感覚だ・・・自分が・・・プログラムじゃないと認識できるから・・・）

プログラムである時の私なら・・・こんな感情は持たなかっただろう・・・だから今こうして兄上様を愛する気持ちがある以上私はプログラムでは無いのだ・・・私はそんな事を考えながら心の中で

（兄上様・・・私は・・・貴方の事を愛しています・・・）

そう呟き眠りに落ちた・・・少しずつ変わり始めた祝福の風・・・これから彼女がどうなるのか・・・それはきつと誰にも判らないでしょう・・・

おまけ

リインフォース ステータス

愛情度 150 これが高いほど龍也に対する愛が高い事を示す

狂愛度 0 これが高いほど龍也に対する執着度+嫉妬度が上昇し、常軌を逸した行動に出るようになる セツテは300

純愛度 180 これが高いほど純粋に龍也を愛している

積極性 70 積極性をもって行動する、この数値だと色仕掛けな

どの行動が出来ない

恥じらい 200 肌をさらす事への抵抗、この数値では水着などになることも出来ない

執着度 10 龍也に対する執着度 これが高いほど病んでいる。
はやての数値は400・危険域の病み度である

嫉妬度 5 龍也が誰か他の女性という時に感じるムカムカ・・・この数値ではあんまり気にしない・・・フェイトの数値は250

おまけ2

ヴィータ達が自分の誕生日をした記念日

ヴィータ 初めて龍也に抱きしめられて寝た日

シグナム 龍也に服を送られた日

シャル 初めてまともに料理を作れた日

リインフォース 初めて龍也から誘われてデートに行った日

番外編 祝福の風と守護者と 終り

番外編 祝福の風と守護者と・・・（後書き）

どうでしたか？今回のリインフォースさんの話は？面白かったでしょうか？・・・じぶんはどうしてもデート系の話があんまり得意ではなく・・・こういう風になっちゃうんですね・・・もっと精進したいと思っています！！それとおまけのリインフォースのステータスですけど・・・上げて欲しいのが有ったら感想をお願いします、その数値が上がリそうな話を作るので、またなのはやチンクたちのステータスが知

りたい場合もお願いします、一応考えてますが・・・見たいと思う人がいるのか判らないので・・・それでは次回の更新もどうか宜しくお願いします

番外編 融合騎の日常（前書き）

どうも混沌の魔法使いです今回の番外編は「リイン」「アギト」がメインの番外編で、時間軸はユナが仲間になる前の話ではのぼの話にするつもりなので楽しみにしてください！！それでは番外編始まります

番外編 融合騎の日常

番外編 融合騎の日常

ジリジリジリッ！！！

「むにゅー．．そろそろ．．起きるですよ．．アギトちゃん」

目覚ましの音で目を覚まし、目を擦りながら隣で寝ているアギトちゃんを揺り起こすと

「うー．．私はまだ寝るぞ．．」

不機嫌そうに布団に潜っていくアギトちゃんに

「駄目ですよ．．お兄様を起こしに行くんですから」

そう言つとアギトちゃんは漸く布団から起きだし

「うーじゃあ．．兄を起こしてから寝る」

そう言つアギトちゃんを連れて、私はお兄様の部屋に向かったです．
・ここはお兄様の家で現在静養中のお兄様と私とアギトちゃんが暮らしてるです．．本当はヴィヴィオも居るんですけど、学校があるので六課ではやてちゃんと一緒に居るのです．．私は眠い目を擦りながらお兄様の部屋に向かい

「お兄様、お兄様．．起きるですよ」

寝ているお兄様を起こそうと身体を揺すりますが無反応です・・よつぽど深い眠りに落ちているようです・・中々起きないのでふと横を見ると流れるような銀の髪が見えたです・・お兄様の髪の色は変わったのです・・なんでもセレスさんと完全融合した名残らしく、髪は私と同じ銀に、瞳は神秘的な光を放つ蒼銀です・・しかも今は失明していた右目も視力を取り戻したのです・・私がそんな事を考えてると

「ううーん」

ガバツ!!

「ふえ!?!」

「んー!?!」

寝ぼけて居たのでしょうか、お兄様の腕が私とアギトちゃんを抱きしめ布団に引っ張り込みます、私は驚きましたが・・アギトちゃんは寝ぼけていたので無反応でした

「すう・・すう・・」

寝ているお兄様に抱き抱えられた私は

「むにゅ・・・だ・駄目です!!お兄様起きるですよ!!」

そのまま寝てしまいたいと思ったが何とかそう言っが、お兄様は無反応・・私が困って隣のアギトちゃんを見ると

「むにゅ．．」

既にお兄様に抱きついて眠っていました．．．私はそれを見て

「．．．もう良いです．．．リンもお兄様と寝るです．．．」

自分だけ良い子じゃなくて良い筈だと思い、私もお兄様に抱きついて眠りに落ちました．．

「リン、アギト．．そろそろ起きような」

ふえ！？．．お兄様の声で私とアギトちゃんは目を覚ましました．．起こしにきた筈の自分が逆にお兄様に起こされたことにショックを受けていると

「起こしに来てくれたようだが．．寝ぼけて抱き抱えてしまったようだな．．折角お越しに来てくれたのにすまなかつたな」

そう言つて頭を撫でてくれるお兄様に頷いて、私はアギトちゃんと一緒にベッドから降りました．．

はふ．．身体が軽いぜ．．私は欠伸をしながらリンの隣を歩きながらそんな事を考えていた．．兄と一緒に寝ると魔力とかやる気とか色々回復して次の日淒く身体が軽い．．それに心も満たされるから兄と一緒に寝るのは大好きだ．．甘えん坊すぎるかと思うが．．

（別に良いよな．．思う存分甘えられるのは子供の特権だから）

問題ない筈なのでこれで良いと割り切っていると

「ほら、顔を洗っておいで、朝ご飯の準備は出来てるからな」

「はい」

返事をしてから洗面所で顔を洗う、私は基本的にここで生活していると云っても良いので洗面具は常に置いてある

「アギトちゃん・ちゃんと仕事の内容覚えてますか？」

私が顔を拭いているとジト目で私を見ながら尋ねてくるリインに

「ちゃんと覚えてるよ！！は yet とか皆に言われてんだ、忘れる訳ないだろ・・それに・・無茶をする兄は・・見たくない・・」

私とリインがここにいるのは休みだからじゃない・・ちゃんと仕事としてここに居るのだ、兄は今体の調子が良くない・・魔力の以上増大で、魔力行使が出来ない状態にある・・理由は聖王の魔力・・そしてセレスとの完全融合・・この2つのせいで兄は魔道師の限界を超えた魔力を得てしまった・・今はそれを安定させる為に療養中なのだ・・だがほおって置けば無茶をするのは、火を見るより明らか・・だから監視としては yet と皆に言われてここに居るのだ・・忘れる訳がないと思いながら言っているとリインは

「ごめんなさいです・・私はてっきり忘れてる物だと思ってたです・・」

謝って来るリインに

「気にしなくて良いさ・・・そりゃ・・・傍から見れば忘れてるようにしか見えないもんな・・・」

私はそんなことを考えながら頬を掻いた・・・兄に不審に思われないように子供の様に振舞っている・・・素だな・・・うん・・・素だ・・・全力で兄に甘えるようにしている・・・出来るだけ側に居れる様に・・・だから忘れてるように見えても仕方ないと思っていると・・・リビングから

「おーい、いつまで顔を洗ってるんだ？・・・朝ご飯が冷めるぞ」

兄の呼び声に私とリインは

「今行くぜ！！」

「すぐに行きます！！」

そう返事を返して、兄の待つリビングに向かった・・・ちなみに今日の朝ご飯はハムエッグとコンスープに兄特製のパンでとても美味しかった・・・はやてとかチンクの作るのも美味いけど・・・やっぱり兄が一番だと私は思った・・・

「ん？・・・どうしたアギト？」

お昼ご飯の後、リビングのソファーに腰掛け、携帯端末で書類整理をしている兄に

「んーちょっと、暇だからよ・・・兄が何してるのかな？って思ってるさ」

笑いながら兄の横に腰掛け、携帯端末を覗き込む、そこにははやてや皆・・・つまりは機動六課の皆から送られて来た報告書などが映し出されて居た・・・私がそれを見ているのに気づいた兄は端末の電源を切りながら

「さてと・・・仕事はここまでだ・・・アギト・・・何かして遊ぼうか？」

笑いながら尋ねてくる兄に私は

「それならさ、買い物行こうぜ！！・・・ずっと家の中にいるのも暇だろ？・・・ちょっと待っててくれよ今リインを呼んでくるからさ！」

私はそう言つと、リビングを後にして、リインと私の部屋に向かった・・・

「アギトちゃん？・・・どうしたですか？」

はやてに送る書類を纏めていたリインに

「早く着替えろよ、兄と買い物行くぞ！」

私がそう言つとリインは慌てて椅子から飛び降り

「す・・・すぐに準備するです！！ちょっと待ってください！！！」

そついつと着替え始めたリインを見ながら私は

「玄関で待ってるからな」

そう声を掛けて、兄の待つ玄関に向かった・

「何が欲しいんだ？」

玄関でサングラスを掛けた兄が尋ねてくる、私は

「んー・特に欲しいって物は無いけどさ・兄と買い物に行きたいなーって思ってたんだよ」

私が笑いながら言うと兄は穏やかな微笑を浮かべながら

「アギトは甘えん坊だな」

ぐりぐりと頭を撫でて来る兄・私が兄の手の感触に笑みを零している

「お待たせしましたです!!」

走ってくるリインに兄は

「そんなに待ってないさ・それじゃあ・行こうか？」

そう笑いながら言う兄に頷いて、私達は家を後にした・

「お兄様と一緒にです」

手を繋ぎながらにこやかに言うリインと

「兄の手ってやっぱり大きいな・・・」

そう呟きながら私の手を握るアギトを見ながら、買い物の方にデパートに向かっていると

「ん？・・・龍也じゃんか！！久しぶりだね！！」

休暇だったのだろうか？・・・私服姿のセインに出くわした・・・彼女は私の顔のサングラスを見ながら

「うーん・・・龍也がサングラスを掛けてると・・・マフィアのボスみたいに見えるよ？・・・言い難いけど・・・傷のせいで・・・」

サングラスを掛けていても見える傷跡を指差しながら言うセインに私が返事をしようとする前に

「セイン！！兄に何てこと言っただよ！！」

「そうです！！お兄様に謝るです！！」

小さな体を震わせて怒りを露にする、リインとアギトに

「いや・・・その・・・悪気があったわけじゃないんだけど・・・」

しどろもどろになって困っているセイン・・・その目は助けてと私を見ている・・・私は苦笑しながら

「リイン、アギト、私は気にしてないから・・・そんなに怒らなくて良いぞ」

2人の頭を撫でながら言うと、2人は

「兄がそう言うなら・・・」

「お兄様がそう言うなら・・・もう言わないです・・・」

そう言ってセインを睨むのを止めた2人を見ながら

「セイン、今日は休暇か？」

私服姿のセインにそうたずねるとセインは

「んー違う・・・言いたいけど今言つと、お話されそうだから言わない・・・ああ・・・そうだ！龍也！遊ぶのは良いけど6時までには家に戻っててね、夕食の準備もしなくて良いから！！ちゃんと伝えてからね！！忘れないでよ！！」

そう言つて人込みの中に走っていくセイン・・・私はリンとアギトに

「何だっただんたろうな？一体」

そう尋ねると2人は首を傾げながら

「そうだな・・・何だっただんたろうな？」

「判んないです・・・」

そう首を傾げる2人に

「まあ考えても判らないか・・・今は買い物でもしよう」

そう言つて私達は再びデパートに向かつて歩き出した・・・

「あ、可愛いです・・・」

服売り場を歩いているとリインがショーウィンドウに飾られたワンピースの前で立ち止まる、私は

「確かに可愛いな・・・良し買おう」

決めたら即実行、すぐに店員を呼んで服を出して貰うとリインは

「その・・・ごめんなさいです・・・」

謝ってくるリインの頭を撫でながら

「謝ることなんて無いさ、それに去年の誕生日は何も買つてやれなかったし・・・遅れてしまったが誕生日プレゼントだと思つてくれ」

私がリインにそう言つてるとアギトがおずおずと私の手を引いて

「あの・・・兄・・・私これが良い・・・」

活発的なアギトラしく、少し男っぽい服を指差すアギトに

「これが良いんだな？じゃあアギトへのプレゼントはこれだな」

そう言つてまた店員を呼んでその服を出して貰い、会計を済ましデパートの出口に向かっているとリインが自分の服の入った紙袋を抱

き抱えながら

「お兄様・・・ありがとうございます・・・すごく嬉しいです」

少し俯きながら言うリインに

「兄・・・大切に करना・・・」

私の目を見て言う2人の頭を撫でながら、私は家へと戻った・・・

「?・・・電気がついてる?・・・消し忘れたか?」

家の電気がついてる事に首を傾げながら、家の中に入ると

「あ、龍也さんお帰りなさい」

「龍也く待ってたよ」

六課の制服姿のなのはとフェイトに出迎えられ驚いてると

「兄貴?・・・帰ったのか?」

赤いエプロンのヴィータと

「八神・・・早かったな」

黒いエプロンのチンクに出迎えられる・・・ますます訳が判らなくなり私が困っていると、リビングの方から

「八神様、お帰りなさい」

私服のドゥーエまで居て、私がさらに混乱しているとドゥーエが笑いながら

「どうして私達がここに居るのか？とお聞きしたいようなので説明しますね、これから八神様の体調が回復するまで順番で4人、八神様のお手伝いをしに来ます、もちろん仕事として・夕食の準備や家の掃除など、私達が出来ることなら何でもお手伝いする事が決まったのです」

そう言うドゥーエに

「そんな話私は聞いてないぞ！」

私がそう言うとならフェイトが

「うん、言っていないもん！！」

良い笑顔のフェイトに脱力していると、ヴィータとチンクがエプロンを外しながら

「なのは、フェイト！あんまり長居してる時間は無いぞ！！早く戻らないと会議に遅れるぞ！！」

そう怒鳴ったヴィータは私の前に立ち

「兄貴、私とチンクで夕食作っておいたから、食べてくれよ・・・んじゃあ、私達は仕事があるから」

そう言うバタバタと出て行く、なのは達を見ながら

「そんなに慌てて帰るなら、別に来なくても良いのに・・・」

私はそう呟いた・・・私が溜息を吐いてるとアギトが

「んーとりあえず、風呂入って、ご飯にしようぜ！！ヴィータとチンクが作ってくれたんだから味は確かな筈だぜ！」

元気よく言うアギトに頷き、私達は風呂に入りリビングに戻った・・・そしてそこで絶句した・・・私達は代表してかリインが

「凄いです・・・何時から作ってたんですか？・・・ヴィータちゃんとチンクさん・・・」

大きい机の上に所狭しと置かれた料理の数々・・・私が好きな魚介系のパスタやフライ・・・どれも手の込んだ一品で一時間やそこらでは作れないだろうと私は思った・・・私がそんなことを考えてるとアギトが

「兄・・・私お腹空いた・・・早く食べよう？」

そう言うアギトに頷き、私達は椅子に腰掛けヴィータとチンクの用意してくれた夕食を食べ始めた・・・どれもこれもとても美味しくて、私は知らない間にずいぶん料理が上手になったんだな・・・と感心しながら食事を進めた・・・

「ふー・・・作りすぎとか考えなかったのか？」

夕食後私はパジャマに着替えながらそう呟いた・・・ヴィータとチンクの用意してくれた料理は私達3人には多すぎて少し余ってしまっ

た・・まあ残ったのはフライとかの揚げ物だから明日パンにでも挟んでサンドイッチにすればいいか、私がそんなことを考えながら寝る準備をしていると

「兄！」

「お兄様！」

パジャマ姿のリインとアギトが後ろから声を掛けてくる、

「どうしたんだ？」

何の様だろうかと思い尋ねると、アギトが

「ん・・とな・・兄と一緒に寝たいんだけど・・駄目？」

小首を傾げながら尋ねてくるアギト、その隣ではリインがうつうつとした目で私を見ている、私は苦笑しながら

「別に良いよ、おいで」

そう言うと笑顔で抱きついてくる2人と一緒にベッドに横になると

ギュウ・・

2人が確りと私の両腕を掴む、私が首を傾げるとアギトが

「あんな・・私な・・本当に寂しかったんだよ・・兄が・・居なくて・・わ・・私は・・兄の本当の家族じゃないよ・・でもな・・勝手だけど・・本当の兄みたいに私は思ってる・・」

途切れ途切れに言うアギトの言葉を引き継いでリインが

「リインもです・・リインも凄く寂しかったです・・お兄様が・・手の届かない場所に行ってしまったと思って・・どんなに会いたくても・・会えないって思っていて・・凄く・・凄く・・寂しかったです・・」

小さな体を震わせながら言うリインは私の目を見て

「お兄様は・・もう何処にも行かないですか?・・リイン達の傍に居てくれますか?」

涙目で尋ねてくるリイン、アギトの頭を撫でながら

「約束する・・絶対に何処にも行かない・・2人の傍に居るよ・・」

そう言うのと2人は安心した表情になり

「良かったです・・安心しました・・おやすみなさい・・お兄様・・」

「私も安心したよ・・兄・・おやすみ・・」

そう言うが早く眠り始めた、2人の頭を撫でながら

「私は・・愚かだな・・自分の死で・・皆が幸せになるなら・・等と考えていたのだから・・」

あの時・・滅び行くパンデモニウムの中でそんな事を考えていた自

分が愚かだったと考えていると

「お兄様・・・大好きです・・・」

「兄・・・大好き・・・」

寝言でそう言う2人に笑みを零しながら

「大丈夫だ・・・もう2度とあんな事はしない・・・自分の命を蔑ろにするような事は絶対にしない・・・皆に寂しい思いは・・・させたくないから・・・」

セレスに救われた命・・・そう簡単に捨てるわけには行かない・・・それに・・・はやてや皆の寂しい顔も見たくない・・・

「ふふ・・・少し・・・少しだけ・・・自分が大切に思えるようになったよ・・・セレス・・・」

私はそう呟き、眠りに落ちた・・・自分の幸せに幸福を見出せぬ壊れた男だが・・・こんな男を慕ってくれる者が居る、その者為にも・・・そう簡単には死ぬわけには行かない・・・何の為に生きるのか・・・それは判らない・・・だが・・・1つだけ判ってる・・・私は・・・命が続く限り・・・誰かを護る為に生きる・・・それだけだ・・・

番外編 融合騎の日常（後書き）

どうでしたか？今までメインにしたことの無い「リイン」「アギト」がメインだったのであんまり自信が無いのですが・・ほのほの・・？だったと思っています・・しかし・・今回は今まで以上に自信が無いので感想を貰えると嬉しいです、それでは次の話もどうかよろしくお願いします

番外編 幸せの定義（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は「闇の融合騎 アザレア&アリウム」の話です！！第二部で本格的に登場するアザレアとアリウムの日常に目を向けた番外編です！！これで人気が出てくれれば良いなと思っています！！時間軸は第二部です！！それでは番外編始まります！！

番外編 幸せの定義

番外編 幸せの定義

龍也の部屋に向かってちよこちよこ歩く小柄な影・長い黒髪をロングツインにし花柄のパジャマを着た少女・アザレアだ・彼女は枕を小脇に抱え真っ直ぐに龍也の部屋に向かっていた・私は兄さんの部屋の扉を控え目に叩いた・すると

「誰だ？・何だアザレアか・どうしたんだ？」

しゃがみ込んで私の頭を撫でながら尋ねてくる兄さんに

「こ・こ・怖い・ゆ・夢をみ・見たのです・ひ・1人だとまたその夢を見そうなんです・だから・い・一緒に寝ても良いですか？」

私は駄目かもしれないと思いながらそう尋ねると兄さんはいっこりと微笑み

「良いよ、おいでアザレア」

そう言って手を伸ばす兄さんに抱きつき

「・・あ・・ありがとうございます・・ご・・ございます・・」

「良いよ、気にしなくてな・・それじゃあ寝ような」

そう言う兄さんに頷き私は兄さんと一緒に布団に入った・

「あ・・・暖かいです・・・」

兄さんに抱き付きながら言うと

「暖かいか・・・リインとかも良くそう言うけど・・・良く判らん・・・」

ぼそりと呟く兄さんに

「た・・・多分・・・私とか・・・ユナ達とかじゃないと判らないと思います・・・」

私がそう言うのと兄さんは私の頭を撫でながら

「そう言うものか・・・それじゃあ寝るとするか・・・おやすみアザレア」

「お・・・おやすみなさい・・・兄さん」

私は兄さんにおやすみなさいと言ってから眠りに落ちた・・・

「うーん・・・良く寝ました・・・？・・・に・・・兄さんは？」

一緒に寝た筈の兄さんの姿見えなくて混乱していると脳裏に

（落ち着け、兄上様は店の準備をしてるんだ）

もう1つの人格のアリウムの声で混乱状態から脱する・・・私は布団

から抜け出しながら

「そう・・・そうだったね・・・に・・・兄さんこっちで喫茶店をしてたよね・・・そ・・・それにはやて姉さん達の朝ご飯の準備もしないといけないから早起きなんだよね？」

私がそう呟くと

（その通りだ、もし兄上様の所に行きたいなら、着替えてから手伝いをしたいといえは良い・・・お前でも出来る事をやらしてくれる筈だ）

脳裏に響くアリウムの声に頷き私は自分とユナの部屋に戻った・

「アザレア・・・お兄ちゃんの所に行ってたんですか？」

笑いながら尋ねてくるユナに頷くとユナは

「お兄ちゃんのお手伝いですか、それじゃあ私はお店の外の掃除でもしてきますか・・・アザレアは朝ご飯の準備を手伝ってくださいね」

そう言うのと部屋を出て行くユナの後姿を見ながら私は

（ゆ・・・ユナは優しいです・・・）

私が極度の人見知りである事を知って、掃除を引き受けてくれたユナに感謝していると

（おい、あんまりばんやりしていると、手伝う事が無くなるぞ！）

アリウムの忠告に頷いて、私はキッチンに向かって歩き出した

「よつと・・・うん・・・良い出来だ・・・ん？アザレアか・・・手伝いに来てくれたのか？」

笑いながら尋ねてくる兄さんに頷くと

「そうか、じゃあお皿とかを並べてくれるか？」

そう言う料理の入ったお皿を私の前に置いてくれる兄さん、私はお盆に載せて机の上に並べ始めた・・・そんな事をしていると

「ふぁ・・・龍也さんおはようございます・・・」

「しゃんとしなさい！馬鹿スバル！」

欠伸をする、スバルさんを嗜めるティアナさん・・・それに

「んー今日も良い天気だね」

「そうだね、フェイトちゃん今日みたいな日は良い日だよ」

制服に着替えたなのはさんとフェイトさんが姿を見せ

「八神、おはよう・・・朝食の準備を手伝えなくて申し訳ない」

「龍也様！おはようございます！！」

兄さんに謝るチンクさんと満面の笑みで兄さんに言うセツテさん・・・
最後に

「兄ちゃん、おはようさん」

「兄貴、おはよう」

はやて姉さんとヴィータ姉さんが姿を見せる、それと同時に皿を並べ終える、するとヴィータ姉さんが

「おっ、アザレア兄貴の手伝いしてたのか？偉いぞ」

ぐりぐりと頭を撫でてくるヴィータ姉さん・私が知ってるヴィータ姉さんとは少し背が低い・当然だ中学生に見えるように強力な幻術を使っているのだから、私がそんな事を考えてると

「遅れるぞ、早くご飯を食べろよ」

笑いながら言う兄さんに頷いてご飯を食べ始める皆を見ると、兄さんが

「奥でアギト達もご飯を食べてる、アザレアも食べておいで」

そう言う兄さんに頷き、私は店の奥でアギト達と一緒に朝ご飯を食べた・

「「「「行つて来ます！！」」」」」

学校に向かうはやて姉さん達を見送ってから、お店の外の看板をオープンにする・喫茶 夜の庭園の忙しい一日の始まりです・といても忙しいのはモーニングの時間帯と12時から6時くらいまでで、その時間を過ぎればはっきり言って暇だ・私がそんな事を考えながら椅子に腰掛けながら厨房を見る

「兄上様・・・こんな感じでしょうか？」

「うん、上手いぞ、リインフォース」

兄さんに教わりながら料理の準備をしている、リインフォース姉さんを見てると、

カランコロン

ドアのベルが鳴る、お客さんだ・・・私は緊張しながら

「い・・・いらっしやいませ・・・夜の庭園へ・・・」

私がそう言うത്スーツ姿の男は笑いながら

「アザレア君、僕に大分慣れて来てくれたのかな？」

そう言う、えっと・・・高畑先生に頷くと

「はは・・・嬉しいね、最初は声を掛けただけで逃げ出してしまったからね」

そう言うカウンター席に腰掛けた、高畑先生は

「八神さん、おはようございます、まだモーニング出ますか？」

笑いながら尋ねる高畑先生に兄さんは

「残念だが、モーニングは終わった」

そう言われた高畑先生は残念そうに

「そうですか・・当然ですか・・八神さんの料理は美味しいからです
ね・・残念ですが・・帰りますよ」

立ち上がろうとした高畑先生に兄さんは

「話は最後まで聞け、モーニングは終わったが・・今日の日替わり
ランチの準備は出来てる・・それを出してやる」

そう言われた高畑先生は嬉しそうに

「そうですか、いや良かった良かった、超パオズも美味しいんです
けどね・・僕は和食のほうが好きなんですよ」

そう言う高畑先生に兄さんは

「少し待て・・今用意する」

そう言う準備をし始める兄さんとリインフォース姉さんを見ると

モヤ・・

(?・・なんだろうこの感覚?)

何故かモヤモヤとした形容しがたい感情を感じ、アリウムに

(アリウム・・何か・・モヤモヤとして気分悪い・・)

そう言つとアリウムは

（すぐに消えるさ・・・水でも飲んだらどうだ？・・・それとも私と変わるか？）

交代するか？と尋ねてくるアリウムに

（うん、お願い・・・気持ち悪くて兄さんの手伝いできそうに無いから）

交代を頼むと同時に、私とアリウムは入れ替わった・・・

（ちっ・・・あいつめ・・・ついに私達に干渉し始めたな・・・アザレアに悪影響が出始めてるな・・・）

アザレアとのリンクを切ってから、心の中で悪態をつく・・・アザレアの不調の原因を知ってる私としてはすぐにもで解決してやりたい・・・大切な半身の事だからだ・・・私はそんな子を考えながら、フードを取りツインテールにしていた髪を解く・・・するとタカミチが

「アリウム君か・・・元気そうだね」

笑いながら言うタカミチに

「当然だ、私に調子の悪い日など無い」

タカミチにそう言つと厨房から

「アリウムか？・・・出来たから持ってきてくれるか？」

兄上様に頷き、料理のトレーを受け取り

「タカミチ、待たせたな」

タカミチの前にトレーを置く、タカミチはトレーの中身を見て

「おっ！トンカツですか！ガッツリ系ですね！でも喫茶には合わないんじゃない？」

苦笑しながら言うタカミチに兄さんは

「ここは創作喫茶だ・・・普通の喫茶とは違う」

そう言われたタカミチは苦笑しながら

「そう言われればそうですね・・・それじゃあ・・・頂きます」

料理を食べ終えたタカミチは

「美味しかったです、ご馳走様でした・・・また来ますね」

そう言って出て行くタカミチと入れ替わりで

「くくー腹減ったー日替わりランチ大盛りで！！」

工学部や高校の大柄な学生が次々来てメニューを注文していく、私はそれを見ながら

「やれやれ・・・忙しくなるな・・・」

そう呟き、私は出来たメニュー運んでいく

「豪徳寺、中村、山下、大豪院、お前達も大盛りか？」

見知った顔の4人に声を掛けると

「おっ！アリウムちゃんか、いいや違うぜ・・・俺達は特盛りだ・・・腹が破裂するんじゃないかってくらい食ってやるよ！」

サムズアップする、豪徳寺に

「判った、兄上様に伝えよう、腹が破裂するほど食いたいと言っていたとな・・・お前達は大丈夫なのか？・・・本当にやるぞ？」

中村、山下、大豪院の3人は

「・・・いや・・・大盛り・・・なに言ってんだ！！お前達も特盛りだ！！食わないとパワー出ないぞ！！アリウムちゃん、こいつらも特盛りだ！！」

3人の言いたい事を無視して言う、大徳寺に

「了解した、少し待て・・・リン私の代わりに注文を聞いてくれ」

リンに交代を頼み、厨房の兄上様達に

「兄上様、大徳寺がいつもの特盛りを頼んだぞ、今日は更に3人だ」

そう伝えたと兄上様は

「本当に大徳寺は良く食うな・・・わかったすぐに準備しよう」

それから数分後、兄上様が大徳寺達の座る席に特盛りを運ぶ

「大徳寺、待たせたな・・・それと中村、山下、大豪院・・・食べるのか？」

机が軋むほどの特盛りを置きながら言う兄上様に山下は

「が・・・頑張ります・・・それと・・・また相談に乗ってくださいますか？」

そう言う山下に兄上様は笑いながら

「何時でも相談くらい乗ってやるさ・・・ほら冷める前に食べよ」

そう言う兄上様は席から離れると大徳寺が凄いい勢いで食べ始める・・・私はそれを見ながら

（繁盛してるから良いな・・・こういうのは悪くない・・・）

そんな事を考えながら私は出来た料理を運んでいた・・・嵐の様な昼時を終え・・・再び忙しい時間まで暇をつぶしていると

カランコロン

「ほう・・・今日は貴様か・・・アリウム」

上から目線の声に

「ふん・・・吸血鬼か・・・何の様だ」

睨みながら言うと、吸血鬼・・・エヴァンジェリンは

「ふん、店の売り上げに貢献してやろうと思ってな・・・何せ貴様の愛しい愛しい兄上様に私は貸しがあるからな・・・これくらいはさせて貰おう」

私とこいつの相性は最悪だ・・・私はこいつが大嫌いだ・・・私がそんな事を考えてると

「おや、エヴァいらっしやい」

厨房から出てきた兄上様がそう言う

「ダージリン、それと特製シュークリームにショートケーキ・・・あとは・・・特製アイスでも貰おうか」

甘い物を大量に注文するエヴァンジェリンに

「太るぞ・・・太った吸血鬼など醜いだけだぞ」

そう言うエヴァンジェリンは

「ふん、吸血鬼の体型は変わらないんだよ、アリウム」

そう言うエヴァンジェリンを睨んでると

「龍也さん、紅茶とクッキー4人分!! お願いします!!」

3-Aの連中がやってくる・・・私はそれを見て

(ふーまた忙しくなるか・・・)

エヴァンジェリンと喧嘩してる時間は無いと判断して、兄様の手伝いを始めた・・・その日の夜・・・私は夜の庭園の屋上に向かった・・・

(アザレア・・・暫くリンクを切る・・・問題ないから心配するなよ)

(判った・・・でも・・・ど・・・)

アザレアは全て言い終える前にリンクを切り私は

「いい加減にしろよ・・・貴様・・・私とアザレアに干渉するなと言っ
たはずだ」

私が殺気を込めながら言うと、私の前にベルカ式の魔方陣が展開されそこから1人の女性が姿を見せる・・・紅銀と金のオッドアイに腰元まで伸びた黒髪に黒い体にフィットする服を着た女だ・・・私は彼女を睨みながら

「スレイ、最初に言った筈だ・・・私とアザレアに干渉するなと」

そう言うスレイは

「干渉などしてません・・・私は貴女達の中から見ていただけです」

シレっと言うスレイに

「貴様のせいでアザレアに悪影響が出てる、お前の事を認識してる私と認識してないアザレアは違う・・これ以上アザレアにちよっかいを出すのは止めてもらおうか」

私がそう言つとスレイは

「私は貴女・・貴女は私・・そしてアザレアも私・・貴女達は私から出来た存在・・それを見るのが何処が悪いと言つのですか?・・
「黙れ」・・乱暴ですね・・」

馬鹿にするように言うスレイにデスサイズを突き付け、私は

「確かに、私達はお前から生まれた存在だ・・だがな・・私とアザレアには私達だけの幸せがある・・貴様の幸せと私達の幸せは違う!・・貴様が兄上様に感じてる感情は知っている!!・・だがな私達はそんな事を望んでいない!!良いか判ったな!これ以上私達に干渉するなよ・・これ以上干渉するというのは・・私にも考えがある」

そう言つて私は屋上を後にした

「干渉するな・・ですか・・そんなつもりは無かつたんですけどね・・
「」

私はそう呟きながら握り拳を作るが・・

「力が入らない・・・当然か・・・今の私は幻だからな・・・」

魔法で姿を現してるだけで・・・私の本体はアザレアとアリウムの中にある・・・だから今の私は幻なのだ・・・

「私があの方に感じてる感情か・・・アリウム・・・私はな・・・それを望んではいけないのだ・・・」

そう・・・私は・・・私の幸せを得る権利は無い・・・何故なら

「私は血を吸う者・・・呪われし剣・・・ダインスレイフ・・・あの方の目と腕を奪った物・・・私が望む幸せは・・・決して叶う事の無い幸せなのだよ・・・」

私はそう呟き、姿を消した・・・そう・・・私は幸せを得る権利など無い・・・このまま・・・消えてしまえばいい・・・それだけが・・・私の罪を償う・・・ただ1つの方法なのだから・・・

番外編 幸せの定義 終わり

番外編 幸せの定義（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は謎のキャラが出ましたね・・
と言っても正体は判ってるんですけどね・・彼女の存在が第二部の
重要なポイントになっています・・この話を見て第二部が気になる
という人が居てくれたら嬉しい限りです。それでは次回の更新もど
うかよろしく願います

番外編 鉄槌と守護者と・・・（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回の主役は「ヴィータ」さんです
！！本編では大活躍のつもりですですが、番外編ではメインをやったことの無い
ヴィータさんが初主役です、自分ではほのぼののつもりです、それ
では番外編始まります！！

番外編 鉄槌と守護者と・

番外編 鉄槌と守護者と・

「兄貴、遊びに行こうぜ!!」

今日は休みで暇で、兄貴も休みなので遊びに行こうと誘いに行くと

「・・・」

椅子に腰掛け、眠っている兄貴が視界に飛び込んでくる、私は大声を出してしまったのだしまったと思いながら兄貴を見ると

「・・・すう・・・すう・・・」

穏やかな寝息が聞こえてくる・・・私は胸を撫で下ろし、そのままゆっくり兄貴を近づいて、兄貴の顔を下から覗き込んだ・・・私は兄貴の顔を見つめながら

「やっぱり・・・目の傷が気になるよな・・・」

右目の切り傷・・・それが気になると眩き、兄貴の隣に腰掛け、起こさないように気を付けながら兄貴の頬にそつと触れながら、昔の事を思い出し苦笑しながら

「あの時の事はこんなに兄貴を好きになるなんて思わなかったな・・・」

そつ眩き、私は兄貴の体に寄り掛かり目を閉じた・・・寝る前に昔の

事を思い出していたせいか私は昔の夢を見た・

「ヴィータ、朝ご飯が出来たぞ？」

あたしの前でそう言う龍也に

「気安くあたしの名前を呼ぶんじゃないよッ！小僧！！」

そう怒鳴って龍也の前を通り過ぎリビングに向かいながら

（氣にくわねえ・・本当に氣にくわねえ！！・・）

あたしは苛々しながら、あたしははやての隣に腰掛けた・・本当ならはやての向かい側の席でも良いのだがそこは龍也の指定席らしくそこに座るとはやてが凄く怒るので隣に座っている・・あたしが腰掛けると龍也が歩いてきてはやての前の席に座りながら

「おはよう、はやてよく眠れたか？」

笑いながら尋ねる龍也にはやては

「うーん・・イマイチ・・やっぱり兄ちゃんと寝るのが一番熟睡出来るな」

にこにこと笑うはやて・・彼女があたし達の主・・龍也は、はやての兄でそんなに年と言う訳ではないのだが・・妙に大人っぽいと言うか・・不思議な違和感を感じる・・そんな事を考えてると龍也が

「どうかしたか？・・・口に合わなかったか？」

あたしの箸が進んでない事が気になったのかそう尋ねてくる龍也に

「うるせえ・・・あたしにかまうな・・・」

睨みながら言う龍也は肩をすばめながら

「それはすまなかったな・・・では・・・ご馳走様・・・はやて私はそろそろ行くよ」

席を立てて鞆を持つ龍也にはやては

「うん、気をつけて行って来てな、それと出来るだけ早く帰って来てな・・・」

元氣のない声で言うはやて・・・龍也ははやての頭を撫でながら

「判ってるよ、授業が終わったらすぐに帰る・・・ああ・・・そうだしヤマル・・・学校に話はしてあるからはやての調子が悪かったら連絡してくれ、早退して来るから」

龍也がそう言うときヤマルは

「・・・判りました・・・まあ・・・私が居るので・・・連絡しないと思いますけどね・・・」

ぼそりと言うシャマルに龍也は

「はは・・・それはそうか・・・シャマルが居るもんな・・・心配する必

要はないか・・それじゃ・・行つて来る」

苦笑いを浮かべた龍也はそう言うとお出掛けて行つた・・朝食を終えた後リビングでテレビを見ながらあたしは龍也の事を考えていた

（あの小僧・・本当に腹が立つ・・何様だよ・・つたく）

あたし達の主でも無いのに何だかんだ言ってくる、龍也・・嫌いと言つわけではないのだが・・どうしても気に食わないのだ・・あたしがそんな事を考えてると

「ヴィータ・・怖い顔しとるで？・・何かあつたんか？・・やつぱりあのウサギのぬいぐるみが欲しかったんか？」

そう尋ねてくるはやてにあたしは慌てて

「そ・・そんなんじゃないやねえよ！！ちよつと考え事してただけだぜ！！」

そう言うとはやては笑いながら

「そうやったら良いけど・・うーまだ昼前か・・兄ちゃんまだまだ帰つてこうへんな・・はあ・・兄ちゃんに会いたい・・」

車椅子の上でそう呟くはやてに

「はやては直ぐ龍也、龍也だな・・そんなに好きなのか？」

口を開けば龍也、龍也と言うはやてにそう尋ねるとはやては真っ赤になりながら

「・・・う・・・うん・・・私は・・・兄ちゃんが大好きや・・・ずーと・・・ずーと・・・前から大好きや・・・」

そう言うはやてにあたしは

（わかんねえ・・・はやての好きの意味があたしにはわかんねえ・・・）

はやての言う好きはあたし達に対する物とは違うそうだ・・・あたし達に対するのは家族に対する物で、龍也には別の意味の好きらしい・・・あたしには判らないが・・・

「さてと・・・お昼ご飯の用意せなかな・・・んじゃなヴィータ」

キッチンに向かっていくはやてを横目にリビングに飾られた写真立てを見る・・・そこには龍也が車椅子のはやてに寄り添うように立っていた・・・あたしはそれを見ながら

（龍也のことは嫌いじゃねえ・・・でも・・・何でだろう・・・龍也の事を考えると・・・胸がざわつく・・・くそ・・・何なんだよこの気持ちだよ！！）

自分でもわからない不信感を感じ、あたしはまた苛々としながらテレビを見た・・・だが内容は全く頭に入らず、逆に龍也の笑ってる顔ばかり繰り返し頭の中で流れていた・・・

「ただいま」

日が暮れ始めた頃、玄関から龍也の声がする、その声にははやては嬉しそうに笑いながら

「兄ちゃん！！おかえり！！！」

笑いながら手を振ると龍也も笑顔で答える・・・あたしがそのやり取りを見てると龍也があたしの前に来て、手に持っていた袋を差し出してくる

「んだよ・・・これ」

その袋を睨みながら尋ねると

「・・・気に入って貰えるかは判らんがプレゼントだ・・・気に入らなかったら捨ててくれてもかまわん・・・好きにしてくれ」

龍也がそう言うにあたしから離れていく

「あっ・・・」

無性に寂しく思い手を伸ばしかけたが・・・それを直ぐに引っ込めあたしは

（何だよ・・・何で寂しいなんて思うんだよ・・・）

どうして寂しいなんて感じたか判らず、さらに苛々としてると

「うわぁ・・・綺麗・・・どうしたんやこの髪留め？」

手に持った髪留めを持ちながら尋ねるはやてに龍也は

「・・・翠屋で少し手伝いをして、小遣いを稼いだ・・・私から・・・皆

に何か買ってやりたくてな・・・」

頭を掻きながら言う龍也にはやては

「もう・・・そんな気にしんでも良いのに・・・でも・・・ありがとう・
・大切にするで」

笑いながら言うはやてを見ながらあたしも手渡された袋を開けてみた・・・・そこには

「・・・あたしの欲しかったやつだ・・・」

あたしが欲しいと言っていたぬいぐるみを手に持ちながら、そう呟いた・・・・どうして龍也が知ってるのか気になったが・・・・凄く嬉しかった・・・・その日の夜・・・・あたしはそのぬいぐるみを枕元において眠った・・・・

（おい！！プログラム如きが！！とつとと働け！！）

！！！！

男の怒声が響き渡る・・・・これは・・・・過去の闇の書の主の夢・・・・もう皆居ない筈なのに・・・・夢だ・・・・夢だから・・・・怖くない・・・・怖くないのに・・・・

「あ・・・あ・・・」

脳裏が恐怖の二文字で埋め尽くされる・・・・嫌だ・・・・嫌だ・・・・壊したくない！奪いたくない！！嫌だ！！嫌だっ！！夢の中のアたしは命じられるまま全てを壊した・・・・嫌なのに・・・・逆らえないから・・・・従

うしかないから・・・でもあたしは嫌だと叫び続けた・・・だがその叫びが届く事は無かった

「嫌だっ！！・・・はぁ・・・はぁ・・・夢・・・か？・・・」

あたしは飛び起きそう呟いた・・・目からは大粒の涙が流れていた・・・あたしは涙を拭いながら

「・・・少し・・・外の空気でも吸って来よう・・・」

自分の部屋を後にした・・・ベランダで空を見上げると・・・

「・・・また・・・だ・・・」

またぼろぼろと涙が零れて来る・・・

「夢なんだよ・・・もう怖くないんだよ・・・なんだよ・・・止まれってば・・・」

涙を拭うが涙が止まる事は無い・・・あたしが必死で涙を止めようとすると

「ヴィータ？・・・どうしたんだ？」

あたしが1番会いたくない奴・・・龍也があたしの後ろに立っていた・・・龍也はあたしが泣いてる事に気づくと

「怖い夢でも見たのか？」

そう尋ねてくる龍也・・・あたしは腹が立って怒鳴ろうとしたが・・・

あたしの意味と反してあたしは龍也に抱き付きながら

「ああ・見た・怖い夢を・辛くて・苦しい夢を・」

言いたくないと思いながらも、自分の見た夢の内容を話すと龍也は無言で

ギユウ・

あたしの背中に手を回して力強く・でもそれで居て・優しく抱きしめながら諭すように

「大丈夫・もうヴィータは泣かなくて良いんだ・悪夢は終わったんだ・これからは・楽しい思い出を沢山作れば良い・悪夢になんか負けないくらい楽しい思い出を・」

そう言う龍也にあたしは大声で泣きながら

「ほ・本当か・も・もう・嫌な事はしなくても良いのか・あ・あたしは・幸せになっても良いのか？」

龍也の服を涙で濡らしながら尋ねると龍也はあたしの髪を撫でながら

「ああ・良い・誰がなんと言おうが・ヴィータは幸せになればいいんだ・だから・もう泣くな・私がお前を・護るから・」

護る・その言葉にひどく安心感を覚えた・龍也の方があたしより弱い・でも・龍也なら・あたしを護ってくれると・そう思った・あたしは龍也があたしから離れないように全力で抱きし

めながら

「本当だよな．．嘘ついたら．．許さねえぞ．．」

龍也の胸に顔を埋めながらそう言つと

「私は嘘はつかない．．大丈夫．．絶対に護るから．．はやても．．
グイータも．．シグナムも．．シャルも．．ザフィーラも．．私
の家族は私が護る．．」

私はその言葉に頷くと．．龍也に抱きついたまま眠りに落ちた．．
次の日から．．あたしは龍也の事を兄貴と呼ぶようになった．．龍
也なら．．あたしを護ってくれる．．はやてを護るのと同じように．
．あたしも護ってくれと．．確信していたから．．

「グイータ．．グイータ．．起きろ」

ほえ．．兄貴の声．．？私はその声に導かれるように目を開いた、
私が目を覚ますと

「やっと起きたか．．ほら夕ご飯が出来てるから一緒に食べよう」

笑いながら言う兄貴に

「夕ご飯．．？．．も．．もう夜なのか！！」

飛び起き窓の外を見る．．すでに窓の外は真っ暗だった．．折角の
休日を寝て過ごしてしまった事にショックを感じてると

「また今度の休みにでも一緒に遊びに行こうな、だからそんなに落

ち込むなよ」

笑いながら言う兄貴に頷いて私は兄貴と一緒に夕食を食べた・・今日の夕ご飯は私の好きな肉料理だった・・スパイスの効いたタンドリーチキンや・・牛肉の焼いた奴を兄貴と一緒に食べた・・それはとても優しい味がして・・凄く美味しかった・・夕食後私は

「ふああああ・・ご・・ごめん!!」

大きな欠伸をしてしまい慌てて兄貴に謝ると兄貴は

「座ったまま寝てたからな・・疲れが取れなかったんだろう・・今日はもう休むと良い」

笑いながら言う兄貴に私は

「あ・・あのさ兄貴・・きよ・・今日・・一緒に寝ても良いかな?」

赤面しながら尋ねると兄貴は

「別に良いぞ・・じゃあ一緒に寝るか?」

笑いながら言う兄貴に

「うん!!一緒に寝る!!」

私は元気よく頷いた・・夕食後少しテレビを見て、2人でベッドに横になる・・当然私は

「ん・・へへ・・暖かい・・」

兄貴に抱き付きながら言うと兄貴は私の髪を撫でながら

「そうか・・リインフォースもよく言うな・・私が暖かいと・・良
く判らんのだな」

苦笑する兄貴に

「・・私達にしかわかんないと思う・・でも・・凄く暖かいんだよ・
」

そう言うとき兄貴は私の背を撫でながら

「そう言うものか・・それじゃあ・・おやすみ・・ヴィータ」

「うん・・おやすみ・・兄貴・・」

私が最初兄貴に感じていたのは・・嫉妬だったんだ・・はやてだけ
を護って・・私はと思い・・それが凄く嫌だった・・多分・・私は
始めて兄貴に会ったその時から好きだったんだと思う・・でも・・
恥ずかしいのと嫉妬でそれが言えなかったんだ・・でも今なら胸を
張って言える・・兄貴の事が好きだと・・私は兄貴を絶対に護る・・
私達の主は・・はやてだが兄貴だって私の主だと思ってる・・私は
そんな事を考えながら兄貴の顔を見て

「兄貴の事は私が絶対に護るからな・・」

そう言うとき兄貴は驚いた顔をしてから私の頭をくしゃくしゃと撫で

「ありがとう・・でも無茶はするなよ・・ヴィータ」

私はこくりと頷き兄貴の胸に顔を埋めて眠りに落ちた．．私は．．
姫って言う柄じゃない．．でも唯の姫じゃなくて姫騎士なら良いか
も知れない．．ただ護られるだけではなく護り護られる姫．．それ
が私の理想とも言える．．私は兄貴を誰にも傷つけさせはしない．．
何があっても私が護る．．ずーと前にそう決めたから．．私．．鉄
槌の騎士ヴィータは．．八神龍也を．．心から愛しています．．何
時の日にか．．兄貴が私の気持ちに気づいてくれる日が訪れますよ
うに．．

番外編 鉄槌と守護者と．． 終わり

番外編 鉄槌と守護者と・・・（後書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回はヴィータさんがメインの番外編でしたが・・・どうでしたでしょうか？・・・初めてのヴィータメインの話だったのであんまり自信は無いです・・・今回の番外編は過去のヴィータと龍也がコンセプトでした、最初から仲が良かった訳ではないというのを印象付けたかったんですが・・・かなり不安な出来ですので感想を貰えると凄く安心します、それでは次回の更新もどうかよろしく願います！！

番外編 遠い日の記憶（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回の番外編は昔話の番外編です、主役は夜天の守護者では「はやて様」のせいで活躍の場が少なくなっている「なのは」「フェイト」の両名です・・ですが、この2人を主役にした事はあまり無いので自信は余りありませんが、どうかよろしく願いします。それでは番外編始まります

番外編 遠い日の記憶

番外編 遠い日の記憶

「なのは・・龍也は何処？」

フェイトちゃんが1時間目の授業が終わってすぐ尋ねてくる、今日からフェイトちゃんも私と同じ聖祥大附属小学校の生徒だ、フェイトちゃんがこうして学校に来てるのは龍也さんの交渉術のおかげだったりする・・キヨロキヨロと辺りを見回しながら尋ねるフェイトちゃんに

「えつと・・龍也さんは私達より年上だからこのクラスには居ないよ？」

私がそう言つとフェイトちゃんは

「そ・・そんな・・話をしたかったのに・・」

ものすごくショックを受けてる様子のフェイトちゃんに

「だ、大丈夫！お昼には会えるから！！」

お昼に一緒にご飯を食べる約束をしていると言つと、フェイトちゃんは笑いながら

「そつなの？・・昼休みが来ないかな・・」

楽しそうに言うフェイトちゃんと話をしていると、アリサちゃんが

「なのは、フェイトも龍也の知り合いなの？」

そう尋ねてくるアリサちゃんに少し困った・魔法の事は言えないし・どうしようかと困っているとフェイトちゃんが

「龍也は車に轢かれそうになってた私を助けてくれたんだよ」

さらりと言うフェイトちゃんを見ると、フェイトちゃんは念話で

（リンディ義母さんがこう言えって教えてくれてたんだ）

そう言いながらにつこりと微笑むフェイトちゃんに私が一安心すると

キンコーンカーンコーン

ベルが鳴り、それと同時に先生が入ってくる・龍也さんに会えるまで後3時間、頑張ろう・私はそんな事を考えながらペンを取った・

「龍也、偶には一緒に弁当でも食わないか？」

そう尋ねてくる同級生・名前は覚えてない・私はそいつの顔を見ながら

「何故だ？・私は既に昼食の約束をしているのだが？」

なのはやアリサ達と約束していると言うと

「ほら・・・そのあれだ・・・俺を紹介してくれないかな？とか？」

にやにやと笑う馬鹿に

「自分で行け、私はなのは達の保護者じゃない」

私がそう言つて目を閉じようとする

ガラリ

教室の戸が開く音がした・・・なのはかと私が思つてると

「龍也、お昼一緒に食べよう!!」

！この声は！驚いて声の方をした方を見るとそこにはににこと笑つてるフェイトの姿があつた、私が驚いてると

「早く！時間が無くなっちゃうよ」

教室の入り口で呼ぶフェイトに

「あ・・・ああ今行く」

お弁当を掴み教室を出ると、フェイトは私の手を握り

「こっちだよ」

私の手を引いて歩き始めてしまうフェイト、私はおとなしくフェイトの後を付いて行った・・龍也が教室を後にした後

「何だよ！！何で龍也ばかりモテるんだよ！！やっぱりあれか？男は顔か！！」

そう絶叫する男子に女子が冷静に

「龍也君は優しいし料理も上手だし、誰かさん達と違って、欲望まみれじゃないからじゃない？」

そう言われた男子達はがつくりと地に伏せ

「ちくしょう・・俺だってモテてみたいぜーッ！！！」

魂の叫びを上げていた・・

「龍也、フェイトを交通事故から助けたんだって？・・相変わらず無茶するわね」

昼食後龍也にそう言うアリサ、龍也は

「手を伸ばせば助けれるんだ、少しくらいの無茶はする」

冷静に言う龍也は私をちらりと見て、軽く笑っていた・・多分なんだその理由は？と言った所だろうか、私がそんな事を考えてるのはが

「龍也さん、最近お弁当自分で作ってないんですか？」

お弁当箱をしまいかけた龍也は

「ああ、最近な妹が作ってくれるんだ」

そう笑う龍也の顔は楽しげだった・私はその笑顔を見ながら

（私がお弁当を作ったら喜んでくれるかな・・）

そんな事を考え、今度料理を教えて貰おうと決意していた・暫くそのまま話をしていると、なのはが

「龍也さん、今日放課後空いてますか？」

そう尋ねられた龍也は

「特に用は無いが・何か用か？」

首を傾げる龍也になのはが

「フエイトちゃんに海鳴を案内してあげて欲しいんですけど・・駄目ですか？」

私！？私の事なの？まさか自分の事とは思ってなかったので驚いてると龍也は

「私がか？・・こういうのは何だが・・お前達の方は良くないか？・女の子同士だし」

龍也がそう言うところアリサが

「馬鹿ね、こういう時こそ男が案内する物なのよ・・・でどうなの？
行くの？行かないの？」

詰め寄りながら尋ねるアリサに龍也は

「私は別にいいが・・・肝心のフェイトはどうなんだ？・・・フェイト
が私が良いと言うのなら案内するが・・・」

私を見ながら言う龍也に

「私、龍也が良い！龍也に案内して欲しい！！」

私が直ぐに返事を返すと龍也はベンチから立ち上がりながら

「判った、放課後正門で待っているから・・・次の授業は体育だから
そろそろ失礼する」

そう言うところ屋上から歩き去っていく龍也の後姿を見ながら

（放課後・・・龍也と・・・で・・・デートだね・・・う・・・嬉しい・・・
）

デートの様な物だと思うと凄く嬉しくて、私はそわそわしながら放
課後を待った・・・

「・・・来たか・・・行くぞ」

放課後、私が慌てて正門に行くと、そこには既に龍也が待っていた・

・待たせてしまったようで悪いと思つてると

「そんなに待つてないから気にするな、それより行くぞ．．早くしないと日が暮れる」

そう言う龍也に頷いて私はゆつくりと自分の家に向かって歩き出した．．

「ここが図書館だな．．私は割とここに来るんだが．．蔵書量も多い．．ジャンルも多いからお勧めだ」

ゆつくりと家に向かいながら、龍也が立ち寄った場所を教えてください．．私はあんまり地理には詳しくないので教えてもらえて嬉しかった．．私がそんな事を考えてると

「おや？龍也君じゃないか．．隣に居る子は誰だい？．．もしかして彼女かい？」

笑いながら尋ねてくるおばさん．．それより．．彼女？．．私が．．？おばさんに言った言葉に赤面していると龍也は

「フェイトはなのはの友達ですよ．．ここに着たばかりなので道が判らないと言うので案内してるだけですよ」

穏やかな微笑を浮かべながら言う龍也におばさんは少しがっかりした素振りを見せてから、手を振って歩いていった．．

「さてと．．ここに公園があるんだが．．少し休むか？歩きどうしで疲れただろう？」

もう少しで家という所でそう尋ねてくる龍也に頷くと、龍也はゆっくりと公園の中に入っていた・

「ん、ジュース喉か渴いたろう?」

私がベンチに座っているとジュースの缶を差し出してくる龍也に

「ご・ごめん・」

謝ってから手を伸ばすと、龍也はさつとジュースの缶を私から遠ざけ

「ごめんじゃないだろ?・ありがとうだろ?」

私の目を見て言う龍也に

「う・うん・ありがとう」

「ん、よく出来ました」

龍也は私にジュースを手渡し隣に腰掛けた・暫くジュースを飲んでると龍也が私の髪を見てるのに気付いた

「どうしたの?・私の髪に何か付いてる?」

私がそう尋ねると龍也は

「いや・綺麗な髪だと思ってな・気にしたなら悪かった」

そう謝ってくる龍也に

「綺麗な髪？・・・私の髪が？」

私がそう尋ね返すと龍也は軽く私の頭を撫でながら

「ああ、綺麗だよな・・・フェイトの髪は綺麗だと私は思うぞ？」

笑いながら言う龍也の顔が見れなくて少し俯いてしまうと

「頭を撫でられるのは嫌だったか？・・・はやてが好きだから癖でや
つてしまった・・・すまないな」

私が嫌だと思ってると思ったのか謝ってくる龍也に

「うつん！！嫌じゃない！！嫌じゃないよ！！・・・す・・・少し・・・
驚いただけ」

私が慌てて言うのと龍也はくすくすと笑いながら

「あはは、フェイトは可愛いな本当に」

くしゃくしゃと私の髪を撫でた龍也は

「そうだ、折角だから渡しておくか」

何かを思い出したように鞆を空けた、龍也は中から2つの綺麗にラ
ツピングされた袋を取り出して

「私が作った髪留めなんだが・・・良かったら貰ってくれ、1つは悪
いかなのはに渡してくれると助かる」

そう言って手渡してくる龍也に

「綺麗・・・これ本当に手作りなの？」

綺麗な月の装飾が施された髪留めを見ながら尋ねると

「まあ・・・そうだな・・・家に居ると暇だからな・・・髪留めとか良く作るんだ・・・はやてが喜ぶから」

私の為ではなく、妹の為に作ったのかと思い少しがっかりしていると

「でもそれは違うぞ？・・・なのはとフェイトにあげようと思って作っておいたんだ」

がっかりしてる私にそう行つた龍也はベンチから立ち上がり

「悪いが、これ以上遅くなるとはやてが心配する、また明日学校でな！」

そう言って走り出してしまった龍也の後姿を見ながら

「ありがとう・・・龍也・・・凄く嬉しいよ・・・」

龍也に貰つた髪留めを握り締めてると

「あわわ・・・」

ドシャッ！という音がして驚いて振り返るとそこには

「な、なのは？」

なのはがえへと笑いながら倒れていた、私が驚いてるとなのはは
ゆっくり立ち上がり

「どうだった？楽しかった？」

そう尋ねてくるなのはに

「着いて来てたの？」

ジト目で尋ねるとなのはは

「ち、ちがうよ！！龍也さんが走ってくのが見えたから、フェイト
ちゃんが居るのかな？って思ったんだよ！！」

慌てて言うなのはに

「まあ、それなら良いけど・・・あっ！そうだこれ龍也から」

さつき龍也に貰った髪留めを手渡すと

「龍也さんが私に？」

その髪留めを見ながら言うなのはに

「うん、私となのはにだって」

自分の貰った髪留めを見せながら言うと、なのはは隣に腰掛けながら

「龍也さんらしいって言うのか・・・なんて言うのかな？・・・こうい

うのされると勘違いしちゃうよね?」

そう言うのはだが目は笑ってなく真剣そのものだった・・・だから私もなのはの目を見て

「なのはは勘違いするの?・・・私は違うよ?」

私がそう言うとなのはは

「む・・・私も違うもん!」

少し怒ったように言うのは・・・それがおかしくて笑い出してしま
うと

「な・・・なんで笑うの!」

怒りながらも笑い出すのは・・・暫くそのまま2人で笑ってるとな
のはが

「私達・・・ライバル恋敵になるのかな?」

そう言うなのはに

「そうかもね・・・でも私となのはは友達でしょ?」

私がそう言うとなのはは

「そうだね、友達でライバルだよね!」

にっこりと笑いながらなのはは立ち上がり

「私、お使い頼まれてるからもう行くね．．それじゃあフェイトちゃんまた明日！」

そう言つて走つていくのはを見ながら、龍也に貰つた髪留めを胸に抱きかかえながら

「えへへ．．凄く嬉しいな．．そうだ早く帰つてリンディ義母さんに言おう」

龍也に貰つた髪留めを握り締め私は家へと駆け足で戻つた．．次の日からなのはとフェイトに髪には龍也から送られた髪留めが付けれれていた．．

番外編 遠い日の記憶

番外編 遠い日の記憶（後書き）

・・難産でした・・頭では流れが出来ているのに思うように文字に出来なかつたです・・つまりかなり自信が無いという事です・・ですので感想を貰えると嬉しいです！！それでは次回の更新もどうかよろしく願いします！！

番外編 偽りの騎士と守護者（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回は「畏無様」の小説「偽りの騎士」
とのコラボ番外編です、ただ偽りの騎士は執筆中止になるそうです
が、折角書いたので投稿したいと思います、それでは番外編始まり
ます

番外編 偽りの騎士と守護者

番外編 偽りの騎士と守護者

「ん、んん．．」

朝早く起きた俺は、辺りを見回した．．当然、自分の部屋だ

【おはようございます、響介】

「おはよう、スカイ．．とりあえず、散歩にでも行くか」

俺はスカイを身に付け、散歩をするために、高町家を出た．．

「んーん．．こちら辺も寂しくなったな．．」

俺は散歩しながらそう呟いた．．ここは海鳴の外れの方の公園でとりわけ遊ぶ物があるわけでもなく、寂れていくだけの公園だ．．だがゆっくりしたい時にこれほど丁度良い場所は無い．．だが．．

「暑い．．」

そう暑いのだ．．夏は暑いものだが．．流石にきつい．．俺が汗を拭つてるとスカイが

【響介、ここは暑い．．木陰に行く事をお勧めします】

冷静にそう告げるスカイに

「そつだな・・・そつするか・・・」

俺はスカイの提案を聞いて木陰に向かい停止した・

「今日は暑いね、少年」

レジャーシートに座り、暑いと言っておきながら、何故か黒のロングコートに銀髪サングラスの男・・・見た感じ20代後半くらいだろうか？

「ひつ・・・し・・・知らない・・・ひ・・・人です・・・」

黒のフード付のマント？・・・だろうか？それを着た、俺と同じくらい少女は明らかに怯えた表情で、男の陰に隠れてしまった・・・

「アザレア、そんな反応をしては失礼ですよ・・・すいません・・・アザレアは少し人見知りが激しいんです」

笑いながら言う銀髪金目の少女が隠れてしまった少女のフォローをする、この明らかに異様な集団に俺が停止しているとスカイが念話で

【響介・・・この人達は魔道師です】

その言葉に驚きながら男を見ると、男はサングラス越しでも判る柔和な笑みを浮かべ

「そのデバイスの言う通りだよ、私は・・・いや・・・私達は魔道師だよ」

につこりと微笑む男に驚いた、俺とスカイの念話が完全に聞こえていた・・・よほど腕の良い魔道師かと思つて警戒すると

「そんなに警戒しなくても良いだろう？少年・・・まあ座ると良い・・・そこは暑いだろう？」

笑いながら言う男に頷き、敷いてあつたレジャーシートに腰掛ける
と、男は

「私の名は八神龍也だ、八神でも龍也でも好きな方で呼んでくれ・・・それとこっちは」

龍也は自分の後ろの少女の頭を撫でながら

「この子はアザレアと言うんだ・・・人見知りが激しいが良い子だよ」

アザレアはフード越しに俺をジーと見ていた・・・何となく居心地が悪かった・・・俺がそんな事を考えてると

「どうも、始めまして、私はユナです」

につこりと微笑む、ユナ・・・俺は頭を下げながら

「えっと・・・安藤響介です、こっちはスカイです」

スカイを指差しながら言うと、龍也さんは

「ふむ、覚えたよ・・・響介・・・所でお腹は空いてないかね？・・・6人でピクニックに来る予定だったのだが・・・ハプニングのせいで3

人になってしまったのだ・・・言いたい事は判るかな？」

笑いながら言う龍也さん、レジャーシートの上には大量の料理が並べていた・・・とても3人で食べきれない量ではない・・・つまり・・・

「俺にも食べる・・・という事ですか？」

俺がそう尋ねると

「正解だよ」

につこりと微笑む龍也さん・・・邪気はまるで無いが拒否権は無いと目が語っていた・・・俺は観念して

「丁度昼時ですし・・・頂きます」

そう言って手を合わせると

「うんうん、礼儀正しくて良い子だ・・・やはり子供はこうで無ければな」

腕を組みうんうんと頷く龍也さんを見ながら、お弁当箱の中から揚げを1つ取り口に運ぶ・・・

「・・・美味しい・・・」

その美味さに驚いた・・・冷えてるのにジューシーでもものすごく美味しかった・・・俺が驚いてるとユナが

「お兄ちゃんの料理は凄く美味しいんです、レストランのコックに

も負けないですよ」

サンドイッチを食べながら言うユナに

「お・・・お兄ちゃん！？・・・龍也さんはユナのお兄ちゃんなんですか？」

俺が驚きながら尋ねると、龍也さんは

「そうだな、アザレアとユナは私の妹になるな・・・血の繋がりは無いがね」

もくもくと食べながら言う龍也さんの顔を見ると、龍也さんは真っ直ぐに俺の目を見て

「血の繋がりだけが家族か？・・・違うだろ？・・・少なくとも私はそう考えてるよ」

血の繋がりだけが家族じゃないか・・・その通りだな・・・俺は

「そうですね・・・俺もそう思いますよ」

そう返事を返しお弁当箱に手を伸ばすと

「あっ・・・」

アザレアと手が重なる、アザレアは直ぐに手を引っ込め

「・・・ご・・・ごめんなさい・・・さ・・・先に・・・取ってください・・・きよ・・・響介」

ぼそぼそと言うアザレアに

「えっと・・・俺ってそんなに怖い？」

さつきからこんな反応ばかりなのでそう尋ねると

「こ・・・怖くは・・・な・・・無いです・・・で・・・でも・・・は・・・初めて・・・あ・・・会う人ですし・・・わ・・・私は・・・響介の事も知らないですし・・・」

段々声が小さくなっていくアザレアは龍也さんの身体に隠れ

「に・・・兄さん・・・エビフライが食べたいです・・・」

そのままお弁当箱を指差す、龍也さんは

「はいはい、今取るよ」

取り皿にエビフライを載せ手渡す龍也さんは、俺に

「すまないね・・・アザレアは少し複雑な事情があるんだ・・・気を悪くしないでくれ」

頭を下げる龍也さんに

「いや・・・良いですよ・・・そんなに気にしてないですし・・・」

そうは言ったがフード越しに俺を見つめてくる瞳にどうすれば良いか判らないで居ると

「ええい・・鬱陶しいわ!!!」

アザレアが急に大声を出し、被っていたフードを脱ぐ・・紅銀と言えはいいのだろうか？吸い込まれるような色の瞳のアザレア？はツインテールを解き

「響介！悪いんだがな、私の前から退いてくれないか？・・アザレアがどうしても気になるそうだ」

アザレア？がそう言う俺が首を傾げると

「ああ、勘違いするなよ、私はアザレアじゃない、私はアリウムだ・
・覚えててくれ」

そう言うのと龍也さんの隣に腰掛けたアリウムはサンドイッチを齧りながら

「兄上様の料理は何時食べても美味しいな」

そう笑うアリウム・・俺がユナの近くに移動すると

「そうだ・・それで良い・・アザレアはかなり人見知りが激しい上に、対人恐怖症でもあるから、初めて会う人間は怖くてしょうがないんだ」

そう言うアリウムを見ると、隣のユナが

「アザレアは二重人格なんです、そんなに不思議そうな顔をしないでください」

二重人格・・・聞いた事はあるが見たのは始めてだ・・・俺が驚いてると
「響介・・・お前は悪趣味だな・・・人が食べてるのを見るのがそんなに楽しいか？」

絶対零度の眼差しで俺を見るアリウム・・・さっきまでのおどおどした目にも困ったが、この絶対零度の目にも困りながら

「ご・・・ごめん・・・そんなつもりじゃ・・・」

素直に謝るとアリウムは軽く笑い

「冗談だ・・・そんなに気にするな・・・それより早く食べる・・・折角兄上様を作ってくれたんだ・・・味わって感謝して食べる」

その圧倒的な上から目線の口調に

（二重人格ってこんな感じなんだ・・・）

初めて見る二重人格の人間に純粹に驚きながら、お弁当箱に手を伸ばした・・・

「本当に美味しかったです、ご馳走様でした」

手を合わせながら言う・・・お弁当箱の中は殆ど空だった・・・あんまり美味しいので食べ過ぎてしまったのだ・・・今レジャーシートの上には俺と龍也さんしか居ない、ユナとアリウムはバトミントンを持って遊びに行ってしまったからだ・・・

「よく食べたな、良い事だ」

笑いながらお弁当箱を片付ける龍也さんに

「大分日が翳ってきましたよ？・・サングラスはもう要らないんじゃない？」

大分日が翳ってきたのでそう言うと、龍也さんは無言でサングラスをはずして俺を見た

「！」

右目にある深い切り傷と神秘的な光を放つ蒼銀の瞳が俺を真っ直ぐに見ていた・・俺は

「その・・すいません・・」

俺が謝ると龍也さんは

「私は気にしないぞ？・・それは自然な反応だ・・目に傷のある男など怖いだろう？・・だからサングラスを掛けてるんだよ」

再びサングラスを掛けた龍也さんに

「その目は・・どうしたんですか？」

どうしても気になり尋ねると龍也さんは

「これはね・・家族を護った時に受けた傷なんだ・・自分の大切な何かが誰かに傷つけられそうな時・・君ならどうする？」

その問いかけに

「護ると・・・思います」

俺がそう返事を返すと

「そうか・・・では私から一言だけ言わして貰おう、自分の命は蔑ろにしないことだな・・・と言ってもそんな馬鹿は私くらいか・・・」

くつくつ・・・と笑う龍也さんはゆっくりと左腕を伸ばし、太陽を掴むような素振りをしながら

「一度掴んだ幸福を2度と手放さない・・・私はそう決めた・・・その為なら何度だって命を賭けよう・・・っと・・・まだ子供の響介には判らないか・・・」

そう呟く龍也さん・・・俺は龍也さんの過去の事を考えた・・・きつとこの人はいろんな悲しみを乗り越え・・・ここに居るんだ・・・だからこんなに優しい笑みが出来るんだと俺は思った・・・俺はそこまで考えた所で

「そう言えば、ピクニックが中止になったハプニングって何だったんですか？」

俺がそう尋ねると龍也さんは

「妹とその友達2人でピクニックに来る予定だったのだが、私の親友の娘がずるいと言い始め最初は口論だったのだが・・・いつの間にかデバイスまで持ち出す喧嘩になり・・・私達は流れ弾の砲撃に呑み

込まれ、気がついたらここに居た」

さらりと言つ龍也さんに

「・・・えつと・・・平行世界の人ですか？」

知り合いの顔を思い出しながら尋ねると

「おお、凄いなその年で平行世界のことを知ってるのか、そうだよ・
・私は・・私達は平行世界から来た・・いや・・跳ばされて来たんだ」

言い直す龍也さんに

「あの・・帰れるんですか?・・元の世界に」

砲撃で飛ばされたというなら自力で帰れないのでは?そう思い尋ねると

「ん?帰れるよ?・・無理やり次元を切り裂くし・・・」

まるでちょっと買い物に行つて来るとも言つような口調の龍也さんに絶句してると

「そろそろ・・帰るか・・ユナ、アリウム帰るぞ!」

そう言つとユナとアリウムが戻ってくる、龍也さんは荷物を一纏めにし背中に背負い

「何なら見てみるかね?・・次元を切る所を?」

そう尋ねてくる龍也さんに頷くと

「では見せてやろう・・・」

龍也さんが右手を掲げると虚空から、美しい装飾が施された白銀の剣が出てくる・・・龍也さんはそれを無造作に掴み

「ふっ！！！！」

居合い抜きの要領で振りぬいた・・・すると

スパアッ・・・

空間が裂ける、俺がその光景に驚いてると

「まあこんなもんだ・・・きっと君もいつか出来る」

サムズアップする龍也さんに

（絶対俺には出来ません）

心の中でそう呟いた・・・龍也さんはアリウムとユナと手を繋ぎ

「それじゃあ、また会おう・・・響介」

また会おうという龍也さんに

「は・・・はい！！また会いましょう！！」

俺は思わずそう返事を返し手を振った・・龍也さんはもう一度穏やかな表情で微笑み、その空間の中に消えていった・・俺は閉じていく空間を見ながら

「凄い人だ・・多分・・物凄く強いんだろうな・・」

多分龍也さんは俺なんかより数百倍も強いだろう・・それにあの人は強い人が纏ってる独特な空気を身に纏っていた・・

「また会おうか・・こんど会えたら戦い方とか聞きたいな・・ん？これは・・」

帰ろうとした時、自分が座っていた近くに箱が置いてるの気づき中を見ると

「はは・・驚いた・・」

箱の中にはクッキーが入っていて、それと一緒に手紙も入っていた・
・内容は

「家族で食べると良い・・男の手作りだから味は保障しないが・・」

その手紙を見て俺は笑いながら

「味は保障しないって・・さっきの料理も美味しかったじゃないですか・・」

誰に聞かせるわけでもなくそう呟き、クッキーの入った箱を持って、翠屋へと戻った・・今日は良い日だったかな？・・また新しい知り合いが出来たな・・俺はそんな事を考えながら夕日に染まる道をゆ

つくりと歩いていった・

番外編 偽りの騎士と守護者と・ 終わり

番外編 偽りの騎士と守護者（後書き）

えーとやはりコラボは難しいと改めて思い知りました・・でも止められないんですよね・・コラボ・・こんどは誰かに龍也さんを使つて貰えたらなと思つている混沌の魔法使いです！！それでは次回の更新もどうかよろしくお願いします

番外編 恋する乙女の努力（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回の番外編ははやて達の努力の話です、ただそれは皆様の考えてる物とは少し方向性が違うかもしれませんが、今回もどうかよろしくお願いします！！それでは番外編始まります

番外編 恋する乙女の努力

番外編 恋する乙女の努力

それははやての一言から始まった・・

「平行世界に行くまでに兄ちゃんを泳げるようします！」

平行世界に行くまで2週間を切ったある日、唐突にはやてがそんな事を言い出したのだ、私は

「はい？」

膝の上で昼寝してるヴィヴィオの頭を撫でるのを止めはやてを見ると、はやては

「だから、兄ちゃんを泳げるようにするんやて!!」

繰り返し私を泳げるようにすると言っはやてに

「いや、別に良いよ・・泳げなくても死なないし」

その気になれば魔力を足に収束して水の上を歩けるし、と思いきう言っとはやては

「兄ちゃんの見解は聞いてないです、これは会議で決まりました、明日から泳ぎの特訓をするので覚えといてな」

そう言うとはやては私の呼ぶ声を無視して部屋から出て行ってしまった・・私はヴィヴィオの頭を撫でながら

「どうしたものかな・・」

そう呟いた・・次の日・・

「・・無駄に凄いな・・」

私は目の前に広がる光景に驚きながらそう呟いた・・先日まで演習場だった場所にはプールがあった、私が驚いてると

「ふははは!!やはり私は天才だ!!!2日でここまで完全なプールを作ってしまうのだからな!!!・・げふっ!!!」

馬鹿笑いをしてるジェルに取り合えずボディブローを叩き込む、蹲った所で私もしかがみ込み

「ふん!!!」

体ごと突き上げるフック・・いや・・ガゼルパンチを叩き込む

「げふっ!!!」

首を引っかく・・そのまま棒立ちしてるジェルの前で身体を∞の軌道で揺すり、そのままの勢いで左右の拳を叩きつける

「げふ!!!が・・ごっ!!!・・し・・死ぬ!!!!!!」

フックを喰らい悲鳴を上げるジェルに

「一辺死んで来い！！この大馬鹿者がッ！！！！」

全力のフックを叩き込みジェイルの意識を刈り取っていると

「兄上、来られたのですね早くこちらへ」

パーカーを羽織ったシグナムに呼ばれるが

「いや、やっぱり良い・・・泳げなくても困らん・・・」そうは行きません」・・・しゃ・・・シャル！？」

私が振り返ろうとすると後ろからシャルが私の腕を掴む、シャルは笑いながら

「ほら、お兄さん行きますよ、お兄さんは運動神経抜群ですから、直ぐに泳げるようになりますよ！」

シャルに手を引かれ、私はジェイルが作ったプールに足を踏み入れた・・・

「何で！パーカー着てるんよ！！！！」

着替えて更衣室から出た所ではやてが怒鳴る、今ここにいるメンバーはシャル、シグナム、はやて、ヴィータ、それとチンクだ・・・私は怒鳴ってくるはやてに

「やっぱりな、気乗りしないんだ・・・泳ぎの特訓は良いだろう？・・・駄目や！！ちゃんと泳げるようになってや！！！！」

そう言うはやてにくくくと頷くヴィータ達を見て溜息を吐いてると、ヴィータが

「ほら、取りあえずパーカーを脱げよ」

ヴィータにパーカーを引つ張られる・

「ちょ・・ちよつとま・・」

私が止める前にヴィータがパーカーを剥ぎ取ってしまう・・それと同時に

「「「「「あつ・・・・「「「「」

はやて達が黙り込んでしまう・・私は溜息を吐きながら

「だから・・気乗りしないって言ったんだ・・」

はやて達の目は私の胸部の深い傷に釘付けで・・いやよく見るとそれだけではない・・肩には切り傷、わき腹に何かに挟られた痕・・探せば幾らでも傷跡が見えてくる・・これは全部はやてやなのは達を護った時に出来た傷だ・・だから嫌だったのだが・・私が溜息を吐きながら

「判ったろ?・・こんな傷だらけの身体だ・・私は気にしないが他の人が気にするだろ?だから私は泳げなくて良いよ」

私がそう言ってヴィータの手からパーカーを取ろうとすると、ヴィータは

「・・・気にしねえ・・・」

その弦が良く聞こえず

「何て言っただんだ？」

私がそう尋ねるとヴィータは

「気にしないって言っただんだよ！！そんなくだらない事言っていないで早く練習しようぜ！！」

そう言って手を引くヴィータ、私は

「いや・・・だから・・・くどい！！その傷は・・・私とか・・・皆を護った時の傷だろ・・・だから私は気にしない！！そんな事で兄貴を色目で見ると奴は私が叩き潰す！だから泳ぎの練習しようぜ！」

ぼそりと言っヴィータに私は

「ありがとう・・・」

そう呟いた・・・ヴィータは振り返り

「何か言ったか？兄貴？」

首を傾げながら尋ねてくるヴィータに

「頑張るって言っただよ」

何となく素直に言えなくてそう言っつと、ヴィータは嬉しそうに

「おう、頑張つて泳げるようになるうぜ」

元気よく言うヴィータに頷き、私はプールサイドに立った・・プールでは既にはやてとシグナムがスタンバイしていた・・ちなみにシヤマルは緊急セットを用意していた・・ついでにチンクはぶつぶつと

「・・水着を八神に見せるのか・・恥ずかしいし・・ああ・・でも・・見せたいし・・」

なにやら葛藤していたのでそのままにしておく事にした・・私はプールを見てから

「・・とりあえず・・入ってみるか・・」

プールに入った瞬間・・

「ガボガボツ!!!!!!!!!!」

身体が沈んだ・・私は慌てて自分の左腕を見る、左腕はプールの底を向いている・・私は

（ああ・・そうか・・義手が重いのか・・）

何処か他人事のようにそんな事を考えてると、誰かが私の左腕を掴んで引き上げる

「げほっ！げほっげほっ！！！」

私が咳き込んできると、私の左腕を掴んでいたシグナムが

「だ、大丈夫ですか!？」

「兄ちゃん!大丈夫か!？」

心配そうに言う2人に

「ど・・・どうやら・・・義手が重すぎるらしい・・・これではとてもではないが泳げんぞ・・・」

どれほど身体を鍛えていても・・・例え300キロのコートを着ていても・・・身体が沈んでしまうのでは泳げないと言うとはやては

「これは・・・スカリエッティさんに相談やね・・・兄ちゃん取りあえず、今日はここまでにしよ・・・今度プールの予定が決まったら、連絡するわ」

そう言うはやてに頷き、初日の特訓は終わった・・・次に連絡があったのはそれから3日後だった・・・

「じゃじゃーん!!泳ぎ用の改良型義手やで!!」

義手を掲げて誇らしげなはやてに

「・・・大丈夫なのか？」

前の事を思い出しながら尋ねると、セツテが

「大丈夫です、重量計算など全て完璧に計算してあるので今度は沈みません!」

そう言うセツテに頷き、義手を付け替えると

「む・・・軽い・・・腕が無いようだ・・・」

前の義手と比べて大分軽くて付けてる感覚が無い・・・これなら行けるかも・・・私はそんな事を考えながらプールに入ってみた・・・

「沈まない・・・これなら・・・大丈夫そうだ・・・」

私がプールの中でそう言うのとセツテは満足げに頷き、着ていたパーカーを脱いで水着になった・・・前のと違って露出が少ない水着で私が安心していると、セツテは私の前に立って

「良いですか？まず身体の力を抜く事です・・・人間の身体は浮くように出来てるので自然に浮く筈です・・・最初は怖いと思うので私が手を握りましょう」

そう言うセツテの手を握って言われたとおり身体の力を抜いてみるが・・・

「浮かないな・・・どうしてだ？」

全く浮かなくて首を傾げると、セツテは

「腕とか足に力が入ってますね・・・もう少し力を抜いた方がいいです・・・」

セツテのアドバイスを聞いて力を抜いてみると

「お・・・浮いた・・・」

身体が浮いた事に感動してると、セツテは

「それでは次はバタ足ですね・・・判りますよね？」

そう尋ねてくるセツテに

「それくらいならな・・・」

小・中とプールは見学していたので見てある程度は判っている・・・
私がバタ足を始めると

「そうです、最初はゆっくりで良いですよ」

セツテに手を引かれながらバタ足をしていると・・・

「ジーツ・・・」

はやてが私を物凄く見ていた・・・私は何となく肩身が狭いと思いつながら、しばらくセツテに手を引かれバタ足の練習をしていた・・・30分程した所ではやてが

「ほい！セツテ交代！！次は私の番や！！」

どうやら時間で決まってるらしい、私の泳ぎの先生は・・・しかし妹と親友の娘が先生か・・・何か複雑だ・・・普通逆だよな・・・私は何となく惨めな気分になっていた・・・

「うーんと、もうバタ足は出来るよね・・・それじゃあ・・・今度手引

きなしで、やってみよか？」

そう言うはやてに頷いてやってみるが・

「ガボ・・げほっ・・む・・上手く行かな・」

水を飲んで咳き込んだとはやてが

「力抜いてな・・ゆっくりやれば良いで・・大丈夫！兄ちゃんなら直ぐ泳げるようになるよ！」

励ましてくれるはやてに頷いて、言われたとおりにしながらバタ足をする・・最初の方こそ・・水を呑んだりしたが・・数分後には全く呑まなくなっていた・・はやては私を見て

「さすが私の兄ちゃんや、こんなに早く覚えるなんて思って無かったで」

笑顔で言うはやては

「今度は泳ぎ方かな？・・取りあえずやってみよか・・クロール・・判る？」

クロール・・あーと確かこうだったかな？・・思い出しながらやってみると・・

「兄ちゃん・・それバタフライ・・つか・・なんで出来るん？」

呆れるはやて・・どうやら違うらしい・・暫く思い出しながら泳いで見ると・・

「・・・バタフライ、クロール、平泳ぎ、背泳ぎ・・・なんか全部すぐ覚えたな・・・私やること無いやん・・・」

どうやら、もう泳げるようになったらしい・・・私はゆっくりと立ち上がり

「はやてとセツテのおかげで泳げるようになった・・・ありがとう」

長い間カナヅチを解決出来たので2人に例を言うと

「御気になさらず・・・それに龍也様に泳げるようになって貰えて嬉しいのはこちらですから」

・
そう呟いてセツテは仕事があるからと言ってプールから出て行った・

「うーん・・・私も用事があるでもう出るな・・・兄ちゃんは？」

そう尋ねてくるはやてに

「ああ・・・私も出るよ」

そう返事を返して私は着替えてから自分の部屋に戻った・・・泳ぐのに協力してくれた面々にお菓子の差し入れでもしようと思ったからだ・・・

龍也がお礼にとお菓子を作っている頃・

「兄ちゃんが泳げるようになった・・これで一緒に泳げるし・・それに溺れた振りで助けて貰うってのも良いな・・えへへ・・」

自分の部屋でぶつぶつと呟くはやては嬉しそうに

「んで・・溺れた振りして・・兄ちゃんに助けてもらって・・んで気絶して振りして・・人工呼吸してもらう・・えへへ・・上手く行くかな」

邪な作戦を立てているはやてに

「うふふ・・龍也様に泳げるようになって貰えて嬉しいです・・」

龍也の写真ばかりのある意味イタイ部屋でセツテはニヤニヤと笑いながら

「色々買った水着にも意味があるというものです・・今日のは・・私の趣味じゃなかったですしね・・」

セツテは今日着ていた水着をさつと切り刻んでゴミ箱に入れた・・セツテは

「龍也様にはもう少し抵抗を上げて貰わないと・・折角買ったのに着れなくては意味が無いですからね・・」

様々な水着がクローゼットの中にあつた・・右から徐々に露出が多いデザインになっていっている

「少しずつ慣れて貰いましょう・・・これは全部龍也様に喜んでもらうために買ったのですから・・・」

うふふと・・・怪しい笑みで笑い続けるセツテ・・・はやてとセツテがそんな事を考えてるとは知らない龍也は

「本当に、セツテとはやては良い子だな・・・ちゃんとお礼しないとな・・・」

イチゴのタルトを作りながらはやてとセツテの事を褒めていたりする・・・ちなみにセツテとはやてが企んでいた事は実行されるのだが・・・100%計画通りには行かなかったようです・・・そのときの話はまた今度語るとしましょう・・・

番外編 恋する乙女の努力 終わり

番外編 恋する乙女の努力（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！頑張ってみたのですが・・・上手く表現できていたのかは自信が無いです・・・自分の場合泳ぎは誰に教わるでなく自然と泳げていたので、自分の趣味は魚釣りと言書です・・・インドアとアウトドアの両方が好きと変り種です・・・まあ・・・そんな感じで泳ぎも得意なわけです・・・素潜りで魚を突いたりします、ちゃんと漁協には許可を取ってますので違法ではないですよ・・・と・・・関係のない話をしましたが今回はこちら辺で失礼いたします、それでは次回の更新もどうかよろしく願います！！

番外編 義兄と守護者（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回は「珀狼様」とのコラボです、上手くエースさんの雰囲気を出せているか判りませんが、どうか今回もよろしく願います、それでは番外編始まります

番外編 義兄と守護者

番外編 義兄と守護者

「ふう・・偶には1人でゆっくりするといつのも良いな」

俺は自分の部屋で紅茶を飲みながら呟いた、休日だから遊びに行こうと言うはやてやなのは今日はゆっくりしたい、と言って1人の休息を楽しんでると突然部屋に、凄まじい魔力反応が発生する

「な・・何だ!？」

俺が驚いて立ち上がると同時に目の前が光に満たされる・・光が晴れたときそこには・・

「むっ・・エース?・・またこの世界に来てしまったのか・・」

かつて巡洋艦の撃沈の任務の時に会った、平行世界の魔道師・・八神龍也の姿があった

「た・・龍也・・?・・どうしてここに?」

突然の来訪者に驚いてると

「「エース君!？」」

「エース!！」

どんどん私の部屋の戸を叩く、なのは達の声がする・・・俺が困った表情をしてると

「開けるといい、どうせ話すなら聞いて貰った方が良い」

そう笑う龍也に頷き部屋の戸を開ける、それと同時にはやて、なのは、フェイトが雪崩れ込んでくる、龍也を見て困惑してるはやて達に龍也は

「どうも、始めまして」

につこりと微笑んでいた・・・俺は龍也のその素振りを見て大物だと思った・・・

「で・・・あなたは誰や？・・・エース君の知り合い？」

そう尋ねるはやてに龍也は

「知り合いというほどではないが、お互いの顔は知ってるぞ？なあエース」

俺にそう尋ねかけてくる龍也に

「まあ・・・そうですね・・・顔は知ってますね」

私がそう返事を返すとなのはが

「ずいぶん派手な服装ですね？・・・私服ですか？」

龍也の服を指差して尋ねる、龍也は少し嫌そうな顔をして

「これが私服に見えるか？．．私だってこんな服は着たくない」

そう言う龍也は溜息を吐いた．．赤い生地^{（きぢ）}に金の刺繍^{（ししゅう）}が施された凄まじく派手な服だ、俺なら絶対着たく無い．．

「じゃあ、なんで着たく無い服を着てるの？」

フェイトがそう尋ねると龍也は右手を上に向け

「これのせいなんだよ」

龍也の右手から虹色の魔力が放出される．．それは

「『『『聖王の魔力！』『』『』」

ベルカの王である聖王しか扱えない魔力を使う、龍也に驚いてると龍也はぶつぶつと

「カリムもシャッハもしつこいんだよ．．私は聖王教会に入るつもりは無いと何度も言ってるのに．．」

そう呟く龍也にはやてが

「ちょっと待って！！カリムからそんな事聞いてないで！！聖王の魔力が使える人間が居るなんて！！」

そう怒鳴るはやてに龍也は

「そうだろうな．．この世界では居ないだろうな．．いや．．ヴィ

ヴィオが居たか・・ヴィヴィオを除けば居ないだろうな・・」

そう微笑みながら言う龍也にフェイトが

「この世界・・?・・その言い方だと別の世界から来たって言い
いの?」

睨みながら言うフェイトに龍也は

「その通りだよ、私は別の世界から来た・・ああ・・そういえば名
乗ってなかったな・・私の名は龍也・・八神龍也・・平行世界の八
神はやての兄だよ・・従兄妹だがね」

その言葉にはやて達はたつぷり3分停止して

「「ええええええええッ!!!!!!!!!!」」

そう絶叫した・・龍也は

「元気が良いな・・良い事だ」

この時俺は理解した、龍也は超がつく天然なのだ・・

「本当に私の兄ちゃんなんか?」

そう尋ねるはやてに龍也は懷から写真を取り出し、机の上に置いた

「これが証拠だが・・どうだね?」

写真には、はやてとヴィータ、それにシグナムとシャルそして龍

也が写っていた・・・それを見たのはは

「本物だね・・・じゃあ・・・えっと八神さん？・・・「龍也で良いぞ」・
・じゃあ・・・龍也さんは・・・はやてちゃんのお兄さんなんですか？」

龍也は柔和な笑みを浮かべ

「まあ・・・そう言うことになるな・・・と言ってもこの世界では何の
意味も無いがね・・・それと・・・そんなに見られると気まずいのだが
？」

苦笑する龍也の顔をはやてが覗き込みながら

「んーごめんな・・・でも格好良いなあ・・・モデルさん見たいやね」

はやてがそう言うのと龍也は笑ってるのか困ってるのか良く判らない
表情で

「モデルか・・・良く言われるよ・・・あんまり嬉しくないが・・・」

そう言う龍也になのはが

「嬉しくないんですか・・・？どうしてです？」

そう尋ねられた龍也は

「・・・週刊誌とかの写真を撮られたりするのが嫌なんだ・・・はやて・
・いや・・・私の世界のはやて達が乗り気だから・・・断るに断れない
し・・・」

週刊誌の写真に成るほどの有名人なのか・・・まあ・・・聖王の魔力が使えば当然か・・・私がそんな事を考えてると龍也は

「大将だけでも忙しいのにな・・・今度の取材は断ろう・・・」

そう呟く龍也にフェイトが

「大将！？・・・龍也はそっちの世界では大将なの？」

そう尋ねられた龍也は小首を傾げながら

「えっと・・・確か・・・大将と教導官と執行官と・・・後何だったかな・・・
忘れたが後幾つか役職を重ね持ってたと思う」

さらりと言う龍也にはやてが

「何か・・・龍也さんって凄い人何やな・・・」

ぼそりと呟くはやてに私達も激しく同意した・・・管理局の大将で、
教導官の上に執行官で尚且つ聖王の魔力まで使える・・・凄い所の人
間ではない・・・と言うか本当に人間なのかと俺は思った・・・

「そうだ、エース相談があるのだが・・・良いかね？」

暫く談笑していると龍也が笑いながらそう尋ねてくる、俺は

「相談？・・・力になれるかどうか判らんが・・・話くらいは聞こう」

俺がそう言つと龍也はものすごく真剣な表情で

「・・・どうすれば妹は兄離れしてくれると思う？」

その言葉にはやてが

「・・・龍也さんの世界の私って・・・ブラコン？」

そう尋ねられた龍也は真剣な表情のまま

「はやてだけじゃない・・・ヴィータとシグナムとリインフォースも
なのだが・・・どうすれば良いと思う？・・・真剣に悩んでるんだ」

その言葉になのはが

「そんなに悩まなくても良いんじゃないですか？・・・その内好きな
人でも出来れば兄離れしてくれますよ」

能天気と言っなのはに龍也は

「・・・私が好きだと言っただ・・・しかも私と結婚するとまで言っ
ている・・・」

「・・・俺達が言葉を無くしていると龍也は頭を抱えながら

「どこで間違っただ・・・私は兄として接して来た筈なのに・・・ど
うしてこんな事に・・・」

ぶつぶつと呟く龍也に

「彼女でも作ればどうだ？・・・それなら嫌でも兄離れしてくれるん
じゃないか？」

俺がそう提案すると龍也は俺の目を見て

「・・・私に近づく女は殺すと言った笑顔で・・・その笑顔に耐えられる人間はそうは居ない・・・」

龍也の世界のはやてが超が付く危険人物のようだ・・・俺達がそんな事を考えてると

ゴゴゴゴッ！！！！

凄まじい殺気が俺の部屋の中に充満する・・・

「な・・・何だ・・・この殺気は！！！！」

俺が驚いてると

ヒタリ・・・

喉に刃物の様な物が当てられる・・・俺だけじゃない・・・なのは達も同様だ・・・俺達が動けずに居ると龍也が

「止めるんだ！はやて！！エース達は悪くない！！」

龍也がそう言うと言った虚空から

「兄ちゃんがそう言うなら止めよか・・・」

はやての聲がしたと思うとその刃物は消え代わりに

「やーと・・・見つけたで！！兄ちゃん！！！」

龍也の影からはやてが飛び出し抱き付きながら

「うーん・・・やっと見つけた・・・大分探したんやで・・・邪魔者を凍結させてから・・・直ぐ・・・」

そう呟くはやてに龍也は

「・・・なのはか・・・フェイトか・・・誰を凍り付けにした・・・言ってみる・・・」

引きつった表情の龍也と半比例して嬉しそうにはやては

「今回はなのはちゃん達には何にもしてないで、ただ仕事しろって言ってきたグリフィス君、カリムにお話しないでくれて頼みに来た、ロツサは凍り付けにしたけど」

さらりと言っはやてに龍也は

「死ぬぞ！！直ぐに魔法を使っな！！！」

慌てて言う龍也にはやては

「大丈夫大丈夫、ちゃんと手加減してあるで・・・それよりはよ遊びに行こうよ」約束したやんか」

甘えた声で言うはやては俺達の存在に今気づいたのか、値踏みするような視線で俺を見て

「・・・興味ないわ・・・それより早く行こうよ！ヴィータも準備して待ってるんやから」

早く帰ろうと繰り返し言うはやてに龍也は

「ああ、判った帰るから！！エース、騒がしてすまなかった、今度はもっとゆっくり出来る時に来る」

龍也はそう言うとはやてと共に消えていった・・・はやてが消えた事で硬直状態から開放されたはやて達は

「はやてちゃん・・・従兄妹とか居ない？」

こわごわと尋ねるのはにはやては

「居らんわ・・・はあ・・・それにしても私兄ちゃん居るとあんな危険人物になるんか・・・ちよつと・・・いや・・・大分シヨックや・・・」

ぼそりと呟くはやて達に

「・・・気が変わった・・・遊びに行かないか？」

部屋でゆっくりという気分ではなくなり、そう言つと

「・・・行くよ！準備してくる！！」

笑顔で走り去るはやて達を見ながら

「守護者と夜天か・・・達也には会いたいが・・・出来ればあのはやてにはもう会いたくないな・・・」

俺はそう呟き自分の部屋を後にした・・この願いは叶う事は無くまた大魔王なはやてに私は出会うことになるが、それは次の機会にでも話すでしょう

番外編 義兄と守護者と 終わり

番外編 義兄と守護者（後書き）

えーと・・・今回の番外編は「珀狼様」の方のはやてさんとこの世界のはやてさんの違いを明確にする番外編だったので、はやて様になり黒かったです・・・本編ではこれほどではないので、安心してくれると嬉しいです、それでは次回の更新もどうかよろしくお願いします

番外編 教導官の日々（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回の番外編は「スコピオン様」からのリクエストで「教導官の龍也さん」話の・・・予定です・・・上手く表現出来るか判りませんが、今回もどうかよろしくお願いします

番外編 教導官の日々

番外編 教導官の日々

「よろしく願いします!!」

頭を下げる訓練生を見ながら

「うん、よろしく」

今日は教導の依頼が来ていて、魔法学校の臨時講師として来ていた・詳しくは知らないがスバルとティアナが卒業した場所とは聞いている、私は事前に渡されていた評価表を見ながら

「まずは基礎体力を見せてもらおう・今からグランドを10週だ」
書類では判らない所を見たいのでそう言う

「判りました!!!」

元気よく敬礼してから走り出す、訓練生を見ていると

「・・・何か・・・歳を取ったと自覚するな・・・」

今年で25歳・・・何か急に自分が年老いた様な気がする

「まあ良いか、人は歳を取る物だしな」

不老不死で無い以上当然のことだと1人納得しながら、走っている
訓練生を見ていると

「はぁ・・・はぁ・・・ぼ・・・僕・・・もう駄目・・・」

「頑張りなさい！！八神大将が見に来てるのよ！見つとも無い真似
しないの！！」

緑の髪にバンダナをして膝を突いている男の子と、それにはっぱを
かけている少女・・・私はその2人を見ながら

「えつと・・・ウィンダとカムイ・・・2人ともレアスキル持ち・・・風
の民か・・・」

風の民・・・風を操り、原生生物と共存する道を選んだ一族・・・キャ
口の部族と良く似てるかもしれない・・・私がそんな事を考えてると

「終わりました・・・八神大将」

「・・・楽・・・勝・・・」

この2人はエリアルとエリア、双子の魔道師で、エリアルが姉でエ
リアが妹だ・・・この2人もウィンダとカムイと同じくレアスキル持
ちで、水の民になるらしい、水の民は風の民を侵略しようとした一
族らしく、風の民と比べると攻撃的な一族で、水を媒介に異形の僕
を召喚する特殊技能を全員が所持してるらしい・・・見たこと無いの
で何とも言えないが・・・個人的にはとても興味がある、私がそんな
事を考えてると走っていていた面々が次々戻ってくる・・・だが

「はぁ・・・ウインダ・・・僕・・・やっぱり無理・・・」

「頑張れって言ってるでしょ!!」

カムイを半分引つ張るようにしてウインダが最後に戻ってくる、それを見たエリアが

「出来損ない・・・の御守り・・・は・・・大変ね・・・ウインダ・・・」

あざ笑うように言うエリアの頭をリアルが引つ叩きながら

「そう言うこと言わないの」

「姉さん・・・私・・・は・・・本当の事を・・・言っただけ・・・」

ぶつくさというエリアを見ているとウインダとカムイが整列する、私はそれを確認してから

「基礎体力の方は判った、カムイはもう少し頑張ろうな?」

そう声を掛けるとカムイは

「は・・・はい・・・頑張ります・・・」

肩で息を整えるカムイ・・・書類どおり、魔力は多いが体力が少ないらしい、逆にウインダは体力は多いが魔力が少ない・・・ちなみにリアルとエリアは両方ともバランスが取れているが、エリアの人格に難有りでリアルはエリアの性格とは逆で人当たりの良い笑顔良し・・・

（なんとまあ・・・今年の新人は癖が強いのが多いな・・・まあ・・・その分楽しみだがね）

そう思うと言う事はやはり私は歳を取ったんだろうな、そう思って苦笑しながら

「では、次だ・・・次は・・・そうだな・・・誘導弾をいくつまで操作できるか見せてくれ、まずはカムイから」

そう声を掛けるとカムイはおずおずと前に出てきて

「行きます・・・フェザーシュートッ！！！」

羽の形をした19発の誘導弾がターゲットを打ち抜く、それを見て

（ふむ・・・射撃感はピカイチだな・・・だがその割には・・・足の位置がおかしい・・・ふむ・・・もしかすると・・・カムイは）

カムイは後方支援型と聞いていたが・・・どうやら違うようだ・・・

（やはり・・・男の子という訳か・・・）

そんな事を考えながら次のエリアに声を掛ける

「エリア、次はお前だ」

「了・・・解・・・貫け・・・アイシクルシュート・・・」

ぽそりと呟いたエリアの手の杖から無数の氷柱が飛び出す・・・その数・・・約30・・・新人レベルの技能ではない・・・

（戦う為の才能を持っているという訳か・・・）

距離感、操作の精度・・・どれを取ってもハイレベルだ・・・その後のエリアルも同じ事やって見せた・・・その後の面々は7発前後・・・これが平均だから・・・やはり、カムイとエリア、エリアルがずば抜けている・・・ただウィンドだけは3発だけと、やはり魔法は苦手らしい

（だが・・・伸び白があつて良さそうじゃないか・・・）

私は最初から完成してる者より、未完成の方が好きだ・・・成長していく過程を見れるからだ・・・

（見た感じ、エリアもエリアルもまだ未完成だし・・・ウィンドとカムイはこれからどんどん成長していくだろう・・・）

楽しみだよ・・・という魔道師に成長していくのか・・・私はそんな事を考えながら訓練を見ていた・・・

「今日はありがとうございました、態々八神大将に来ていただけるなんて」

穏やかに微笑む先生に

「いえ、そんなたいそうな事では・・・それより・・・エリアとエリアル・・・それに・・・ウィンドとカムイはこの隊に？」

もつとも気になった面々の事を尋ねると

「えっと・・・まだ決まっていなくてですね・・・卒業まで後1年近くありますし・・・それが何か？」

そう尋ねてくる先生に

「決まって無いなら丁度いい・・・彼女達は六課で引き取ります」

今日の訓練を見て決めたのでそう言う

「えっ！？・・・はっはい・・・判りました、そう言う手続きを取っておきます」

慌てる先生を見ながら

「それでは失礼します、今度はなのはかヴィータと一緒に来ますよ」

その声を掛けて兵学校を後にした・・・

「ん？・・・ふふ・・・行ってみるか・・・」

兵学校の外の林に人の気配を感じ、私は笑みを零しながらそちらに向かった

「はっ！はっ！！」

ズダンッ！！バシンッ！！

訓練の後僕は林の中で僕達に伝わる武術の練習をしていた、相手の

力を利用する独特の武術だ・・・ウインダはこれの達人だけど・・・彼女には聞けない・・・だからいつも1人でこうして練習してる・・・暫く身体を動かしていると

「誰かと思ったら君か・・・」

八神大將が僕のいる場所に来る・・・僕は慌てて敬礼しようとしたが

「いや、敬礼は良いよ・・・もう仕事は終わってるからね・・・悪いと思っただが見せて貰ったよ・・・良い動きだな」

近くの切り株に腰掛けながら言う八神大將に

「全然です・・・こんなんじや・・・全然駄目なんです」

そう言いながらまた踏み込もうとすると

「ふむ・・・どれっ!」

バツ!!

突然立ち上がった八神大將の拳を

「わっ!」

シュッ!!

左手を絡ませて受け流すと

「ほう・・・どれ・・・ではこれはどうだ?」

そのまましゃがみ込んで水面蹴りをしてくる

「ふッ!!」

軽く跳躍しそれを回避し、肩からぶつかり掌打を打ち込む

バシッ!!

八神大將は軽く微笑みながら、僕の攻撃を受け止め

「私の攻撃をこれだけ避けるんだ・・・全然とは思わないがね？」

僕はハッとして

「す・・・すいませんでした!!!」

謝って頭を下げると八神大將は僕の頭を軽く撫でる

「へっ？」

怒られると思っていたのでどう反応すればいいか判らずに居ると、
八神大將は

「少し、座って話をしないか？」

そう笑う八神大將に頷き2人で倒れている木に腰掛ける

「あの・・・八神大將は・・・どうやって強くなったんですか？」

僕がそう尋ねると八神大將は

「そうだな・・・護りたい者が居たからな」

そう笑う八神大將に

「僕はもつと強くなりたい・・・ウインダを護りたいんです」

握りこぶしを作りながら僕は

「僕は・・・弱虫で泣き虫で良く苛められてたんです・・・それをウインダがいつも助けてくれたんです・・・だから僕は・・・もつと強くなりたい・・・ウインダを護れるくらいに」

僕がそう言つと八神大將は

「成れるさ・・・君がそう思っている以上・・・必ず君は強くなれる・・・人は護りたい者があるから強くなれるんだ」

そう笑う八神大將に

「僕はもつと強くなります・・・ウインダを護れるように・・・それとガルドスも扱えるように」

バンダナに止めてある羽を手に持ちながら言つと

「ガルドス・・・君の召喚獣か？」

そうか・・・八神大將は知らないんだ・・・

「ガルドスは僕達と共存してくれてる、鳥の神様で、凄く大きくて強いんです・・ウインダはガルドスの操者です・・でも僕が召喚できないから・・ウインダは本当の力を使えないんです」

ウインダはガルドスの操者・・ガルドスと一緒に戦う事で本来の能力を発揮する・・今のウインダは飛ぶ為の翼を失った鳥と同じ・・僕が不甲斐ないから・・

ピシッ！

「い・・痛い！何するんですか！？」

デコピンされ痛むデコを押さえながら言う

「またマイナス思考でもしてたんだろ？・・そんなんじゃ強くなんなれないぞ・・苦しくても、悲しくても前を向いて進め・・そうして歩く事が出来る奴が本当に強い者という訳だ」

そう言つて立ち上がった八神大将は

「君はここまで来れるかな？・・私は待っていよう・・君がここま
で来れるかをな・・」

穏やかに笑つて歩いていく八神大将の後姿を見ながら

「・・頑張ろう・・もっと強く・・八神大将みたいになるんだ・・」

少し話したただが、包み込むような優しさと圧倒的までな闘気・・良く判らないけど本当に強いと言うのは八神大将みたいな人の事を言っただろうな・・僕はそんな事を考えながら再び武術の練習を始

めた・

「行かないのかね？」

カムイと別れ、少し離れた所でそう呟くと

「・・・カムイの所にですか？」

木の陰に隠れたウィンダが言う、その手にはタオルとスポーツドリンクが握られていた・・・彼女は

「いつもここまで来れるんですけど・・・中々近づけなくて」

苦笑いを浮かべるウィンダに

「ふふ・・・見てたいのか？・・・カムイが強くなる所を？」

そう尋ねるとウィンダは真っ赤になりながら

「ああああ・・・な・・・なな何ををを！？」

慌てるウィンダの頭を撫で

「どうせなら、一緒に強くなれば良い・・・1人より2人の方が良い
と言う物だ」

そう言うウィンダは

「は、はい・・・」

とことこと歩いていくウィンダ・・・暫くすると

「ウ・・・ウィンダ！？・・・ど・・・どどつてここに？」

「い・・・いないから探しに来たの！！もう・・・こんなに汗かいて・・・」

「い、良いよ！自分で拭くよ！」

「良いから、大人しくしてなさい！！」

ウィンダとカムイの声を聞きながら

「これも・・・青春というのかね？・・・うん？」

カムイとウィンダの声を聞きながら、そう呟いた時視線を感じそちらを見ると

「ジーツ・・・」

ウィンダと同じようにタオルを持ったエリアが見えた・・・エリアは私と目が合うと、そさくさと戻って行ってしまった、私はそれを見ながら

「好きな子を苛めたくなる・・・とかいう奴か？」

ウィンダを羨ましそうに見ていたように見えた・・・私は早足で歩いていくエリアを見ながら

「・・・まあ・・・良いだろう・・・雨降って地固まると言っし」

その内仲良くなるだろう・・・今はエリアがちょっと壁を作って居るだけのようだし

「喧嘩するほど仲が良い・・・まさしくその通りだな」

そう言っつて暫く歩いたところで

「若者が成長する所を見るのは本当に良いな・・・暫くなのは達と教導の仕事をして回るか」

年寄りくさいかもしれんが、本当にそう思う・・・後から続く者が居るといふのは本当に良い物だ・・・私はそんな事を考えながら六課へと戻った・・・この日から数日教導官の仕事を付き合つて貰つた、なのは、ヴィータ、チンクの3名は凄く喜んだが、それは一週間ほどで終わった、理由は龍也が訓練が厳しすぎてへばってしまう者が多すぎたらしい、レジアスからきつく言われた龍也は

「むー・・・中々楽しかったのにな・・・教導・・・」

「仕方ないっつて兄ちゃん」

はやてに詰まらなそう愚痴って、慰められていたそうである・・・

番外編 教導官の日々

番外編 教導官の日々（後書き）

えーとどうでした？教導官という感じだったでしょうか？・・上手く表現できたか自信が無いです・・それと今回登場した4人のキャラは「遊戯王」を知ってる方なら楽勝で判ると思います「ガスタ」と「リチュア」のキャラですね・・気付いてくれた人が居ると嬉しいです。もし再登場希望の意見が多ければ番外編でまたやるかもしれないですね・・まだわからないですけど・・それでは次回の更新もどうかよろしく願います

番外編 祝福の風と融合騎と（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回の番外編は「Daath様」のリクエストで「リインフォース」と「リイン」のお話です・・勿論、アギトやユナも出ますが・・メインはこの2人です、得意のほのぼの系なので中々に自信があります、それと今回は幾つかのケースの話です・・小話みたいな感じで見てくれると嬉しいです！それでは今回もどうかよろしく願います！！

「お姉ちゃん！」

「ね・・・姉さん・・・！！」

天の助けという表情の4人は声を揃えて

「「「助けてください！！」」」

そう言った・・・

「全く・・・ちゃんと仕事はしておくべきだ、アギト・・・そこ違う、ユナ・・・字が間違ってる、リイン寝るな！・・・アザレアは・・・言う事は無いか・・・」

1人で4人分の書類を見ながら、ここはこうだ、間違ってるなどと丁寧に進め始めた、リインフォース、丁度そこに

「み・・・仕事中か・・・」

龍也が手にクッキーや紅茶を持ってくるが、リインフォースに教えられながら仕事をしている、リイン達を見てゆっくりと柱の陰に隠れ、微笑ましそうな表情でリインフォース達を見ながら

「ふふ・・・こうして見ると、本当の姉妹のようだ・・・ん？・・・姉妹なのか？・・・どうなるんだ？」

何かを考え始めた龍也だが

「まあ良いだろう・・・特に意味の無いものしな・・・こうしている事

が姉妹の証明か・・・」

そう呟いた龍也は持っていたクッキーと紅茶を見て

「持ってくるのはもう少し後にするか・・・」

そう呟いてその場所を後にした・・・それから数時間後・・・

「・・・終わった・・・」

燃え尽きているリイン達と

「全く・・・今度からもう少し気をつけるべきだな・・・」

そう言いながらも笑っているリインフォースの所に

「終わったかね？」

龍也が紅茶とクッキーを持ってやって来て、リイン達の前に置き自分も椅子に腰掛け、紅茶とクッキーを食べながらリイン達の話聞きながら、穏やかな時間を過ごした・・・これは兄と妹達の穏やかな一時の話・・・

ケース2 お姉ちゃんの修行

「あつ・・・あつ・・・」

厨房で頂垂れるリインフォース・手に持ったフライパンからはまるで火事のように煙が上がっている

「うう・・・本を見てるのに・・・」

本を開いてそれを見ながら料理をしていたようだが・・・失敗してしまったようである

「えうう・・・兄上様に・・・食べて欲しいのに・・・こんなじゃ駄目だ・・・」

るるゝと涙を流しながら呟いているリインフォースの元に

「お姉様？・・・何を落ち込んでいるのですか？」

とことことやって来たリインが尋ねる、リインフォースは泣きそうな声で

「あ・・・兄上様に料理を食べて欲しいのだが・・・こ・・・こんなのでは駄目なんだ・・・」

可哀想な玉子焼き×3＋悲劇のチャーハン１・・・一応皿の上に載っているが・・・殆ど炭化してしまっていて、一目では何か判らない・・・それを見たリインは

「少し待つてるです」

とてとてと走り出すリイン・・・残されたリインフォースは

「これ・・・どうしよう・・・捨てるしかないか・・・」

炭化してしまった料理を片付けていると

「お待たせしましたです!!」

リンが青いエプロンを装着して戻ってきて、厨房に入って

「むふふリンは料理が得意なのです!!お姉さまに教えてあげるです!!」

にこやかに微笑むリンにリンフォースは

「た・・頼む・・」

藁にもずがる思いでリンに料理を教えて貰い始めた

「むー火が強いです、そこは中火です」

「むっ・・そ・・そうか・・次は？」

リンに言われた通り火を調整した、リンフォースにリンは

「次は切ったお野菜とお肉です」

「わ・・判った・・」

リンに教わりながら料理を作っているリンフォース、丁度その時食堂にヴィータが来る、料理をしてるリンフォースとリンを見て

「私も昔やったなあ・・・はやてに教わりながら・・・兄貴に食べさせるんだよな・・・しょうがない・・・呼んで来てやるか」

昔を思い出したのか楽しそうに笑いながらヴィータは龍也の部屋に向かつて歩き出した・・・それから数分後

「うん、美味しいじゃないか」

自分が作ったチャーハンと卵スープを食べた龍也からそう言われたリンフォースは

「ほ・・・本当ですか・・・う・・・嬉しいです・・・」

もじもじとしながらも嬉しそうに笑っていた・・・これは恋する乙女の幸せな一時・・・

ケース3 祝福の風と融合騎達・・・

六課の外、龍也とヴィヴィオが良く昼寝してる場所

「むにゅ・・・ほえ？・・・姉さん？」

「うん？・・・起きたか、アザレア」

眠りこけていたアザレアの頭を撫でながら微笑むリンフォースにアザレアは

「・・・えっと・・・その・・・おはようございます」

困惑しながら言うアザレアにリインフォースは

「うん、おはよう、こんな所で寝てしまうとは疲れてしまったのか？」

そう尋ねられたアザレアは赤面しながら

「えっと・・・その・・・ですね・・・何と云えばいいのでしょうか？」

しどろもどろのアザレアにリインフォースは

「無理に言わなくても良い、では私は行くな」

そう言って立ち上がろうとするリインフォースの腕をアザレアが掴み

「ちょっと・・・ちょっとだけ待っててください」

そう言われたリインフォースは微笑みながらしゃがみ込み

「ん、判った」

木に背中を預けるリインフォース・・・暫くアザレアと話していると

「姉!!!」

「お姉様!!」

「お姉ちゃん!!」

とてとてと走ってくる、リイン達

「どうしたんだ？そんなに慌てて？」

首を傾げるリインフォースにアギト達は

「へへ．．はい！！遅れたけど誕生日プレゼント！！！！」

アギト達がそれぞれ、エプロン、腕時計、ペンダント、ぬいぐるみを差し出す

「へ．．わ．．私にか？」

困惑するリインフォースにアギト達は

「うん！！大好きな姉にプレゼント．．少し遅れちゃったけど．．頑張ったんだぜ」

「リインはペンダント作ったですよ、大切にしてくださいね」

「私は．．買って来ました．．で．．でも．．今度はちゃんと手作りのを．．上げますから．．」

「私のお気に入りのぬいぐるみです、大切にしてくださいね」

渡されたプレゼントを受け取ったリインフォースは

「．．ありがとう．．凄く．．嬉しい」

そう言って微笑むリインフォースの笑顔はとても美しかった．．そ

れから数時間後

「うーん・・・おらんね・・・皆・・・どうしたんやろ？」

「そうだな・・・」

龍也とはやてが姿の見えないリインフォース達を探していた、そして木のある方に行ったとき

「はは・・・仲がええね」

「本当だな」

木に背中を預け眠るリインフォースとそれに寄り添うように眠るアギト達、それを見た龍也とはやては

「もう少し後で起こしに来ようか」

「そうやね・・・」

その場を歩き去ろうとする龍也の背にはやてが飛び乗る

「ん？どうした？」

「んー甘えたい気分」

えへへと笑うはやてに

「はいはい、判りましたよ」

はやてをおんぶしたまま歩いていく龍也・・・これは兄妹達の確かな
絆の話

最終ケース 結局の所お姉ちゃんも甘えん坊なのです

「・・・その・・・ご迷惑でしたでしょうか？」

キャツキャツと遊びまわるリイン達を見ながらそう尋ねるリインフ
ォース、今日はアギト達が楽しみにしている龍也と寝る日であり、
そこに無理やり来てしまったリインフォースがそう尋ねると

「ん？迷惑じゃないぞ？」に・・・兄さん・・・抱っこ・・・」はいは
い」

ぬいぐるみ（ドラゴン）を小脇に抱えたアザレアを抱っこする龍也、
それを見たアギト達は

「ずるい！！私も！！」

「リインもです！！」

「当然、私もです」

3人が自分も自分もと言って龍也の背中や肩に抱きついて満足げな
表情をする、龍也は

「皆甘えん坊だな・・・しかし遊ぶのはここまでもう寝るぞ」

と穏やかに笑いながらアギト達の頭を撫で、そう言つと

「「「「はーいッ！！！」」」」

寝る準備を始めるアギト達を見てリインフォースは

「えっと・・・じゃあ・・・私はこっちで・・・」

隅に行こうとするリインフォースの腕をリインが掴んで

「お姉さまはこっちです」

リインはリインフォースを龍也の隣に座らせ、その隣に自分とユナが、龍也の隣のアギトとアザレアがそれぞれ横になり

「んふふ」お兄様とお姉様と一緒にです」

幸せそうなリイン達にリインフォースは嫌とは言えずそのまま眠りに落ちた

「兄ちゃん、皆そろそろ・・・おき・・・んーもう少しこのままでええかな？」

「そうですね・・・もう少しだけ」

「んー私も・・・」

「「「ヴィータ」」」

「んぐっ・・・ごめん・・・」

良く朝、中々起きてこない龍也達を起こしに来たはやて達は楽しげに笑いながら龍也の部屋を後にした、龍也の部屋では

「むにゅ・・・兄上様・・・」

「兄」

「お兄ちゃん」

「兄さん」

「お兄様」

龍也の腕を掴んで幸せそうに眠るリインフォース、龍也の身体に抱きつき眠るアザレアとアギト、龍也とリインフォースの間で幸せそうな笑みのリインとユナの姿があった・・・それは幸せな一時のページ

番外編 祝福の風と融合騎と 終わり

番外編 祝福の風と融合騎と（後書き）

んーちょっと短めでしたかね？・・でもほのぼの感は出せたと思うのですが・・どうでしょう？感想を貰えると嬉しいです、それでは次回の更新もどうかよろしくおねがいします

番外編 2人の姫と龍の騎士（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回の番外編は「竜華零様」からのリクエストで「エリオ、キャロ、ルーテシア」の番外編です！！得意のほのぼの系なので中々自信がある・・・すいません嘘です・・・自信なんて無いです・・・とりあえず頑張るので、今回もどうかよろしくお願いします

番外編 2人の姫と龍の騎士

番外編 2人の姫と龍の騎士

「遊びに行くの？」

僕は2人の言葉に首をかしげながら尋ねた、ここは六課の食堂で周りでは部隊長やフェイトさんが食事をしている・僕の目の前のお姫様「キャロ」と「ルーテシア」は

「明日はお休みだし」

「天気予報では雨は降らない・・だから・・」

「「遊びに行こう!」「」

声を揃えて言うキャロとルーテシアに

「う・・うん・・良いよ・・行こう」

2人の迫力に少し押されながらそう答えると

「約束だからね!」

「楽しみにしてる」

パタパタと走っていく2人を見ながら、僕は食べ掛けの夕ご飯を食

べ始めた・・・次の日・・・

「まだかな？」

僕は六課の外で2人が来るのを待っていた、一緒に出て来ても良かったのだが先に行つて待つてくれと言われたのでこうして待つている・・・僕の今の服装は黒の長ズボンに同じく黒のTシャツにジャケット・・・お父さんの着ている服を真似た服だ・・・フェイトさんがくれたのだが、少し早過ぎるのではないだろうか？僕がそんな事を考えてると

「お待たせ」

「少し遅れた」

2人の声がする、僕は振り返りそのまま停止した

「えへへ〜どうかな？似合う？」

「可愛い・・・それとも綺麗？・・・どっち？」

笑顔で尋ねてくる2人に僕は何と言えば良いのか判らなかった・・・キャロはピンクのフリル付きのお嬢様という感じの服で、キャロの雰囲気にとってもよく合っている、ルーテシアはズボンに蒼いVネックのシャツで、クールと言うのか何と言うのか判らないが、同い年の筈なのに何となく年上に感じた・・・僕が停止していると

「似合わないかな？」

「どっち？」

何にも言わない僕に再度そう尋ねてくる2人に

「う・・うん！凄く似合ってて可愛いよ！」

僕がそう言つと2人は満足そうに頷き

「良かった！初めて着る服だからどうか？って思ってたんだ」

「私も・・チンクに進められたら着たけど・・良く判らなかったから」

そう笑う2人はそれぞれ僕の右手と左手を掴んで

「それじゃあ行こ！」

「早く」

そう言つが早く僕を引つ張るように歩き出す

「そ・・そんなに引つ張らないでよ」

2人は僕の言う事を聞いてくれたようで、少しだけゆっくりと歩き出す、僕はキャロとルーテシアの間に挟まれる形でクラナガンへと向かった・・その様子を見ていた龍也は

「仲が良いという事はいい事だな・・ゼスト」

項垂れるゼストにそう問いかける龍也だが、ゼストは

「ルーテシアに・・ルーテシアに・・嫌われた・・」

ぶつぶつと呟くゼスト、龍也は

「あんまり小言を言うからだな、子供は大らかに育てるべきだよ」

そんな事を言いながら龍也は紅茶を飲んでいた・・

時間はそんなに無いから、ちゃんと考えて遊ばないと・・私はそんな事を考えながら目的に向かった・・一応暗くなるまでは外出許可を貰っているが、計画的に遊びたい・・ルーちゃんと話し合った予定では、ここは無難に遊園地を選んだ、チケットはフェイトさんが用意してくれた、本当はお父さんと行く予定だったらしいが急な仕事で無理になったらしい、口から半分魂が出ているような状態で差し出されたチケットを受け取った私は、その内良い事があるよと励ますのが精一杯だった・・

「着いたよ、キャロ」

ルーちゃんに言われ正面を見る、どうやら考え事してる間に目的地に到着したようだった、エリオ君は

「前にお父さんと一緒に来た遊園地だね」

そう笑うエリオ君に頷き、私達は遊園地の中に入っていた

「最初は どうする? ・ ・ やっぱり ・ ・ メリーゴーランド? 」

そう尋ねてくるルーちゃんに私は

「ジェットコースターが良いよ」

私がそう言つとエリオ君は

「ジェットコースターで良いの？・・キャロ・・ああいうの苦手じやなかったっけ？」

そう尋ねてくるエリオ君・・そう、私はああいうのは苦手だが、合理的にエリオ君に抱きつく理由が出来る、だからジェットコースターを選んだのだ、ちなみに私の意図に気付いたのかルーちゃんは、スタスタとジェットコースターの方に歩き出していた、それを見たエリオ君は

「ほら、早く行こう」

エリオ君が私の手を引いて歩き出す、私はエリオ君に手を引かれながらジェットコースターに乗り込んだ

「ツきゃあああああッ！！！！」

「・・・・・・・・ツ！！！！」

思いつきエリオ君の腕に抱きつく、反対側を見るとルーちゃんは悲鳴は出していなかったがしっかりとエリオ君の腕を掴んでいる、私とルーちゃんはジェットコースターが終わるまで

エリオ君の腕を掴み続けていた・

「えっと・・・大丈夫？」

心配そうに尋ねてくるエリオ君に

「だ・・・大丈夫・・・だよ？」

「・・・も・・・問題ない・・・？」

ふらふらの私とルーちゃんがそう応えると

「全然大丈夫そうじゃないよ！今何か飲み物買ってきて来るね！」

走っていくエリオ君を見ながらルーちゃんが

「エリオは優しいね」

「そうだね、エリオ君は凄く優しいよね」

エリオ君はお父さんのような人になりたいと言っていた、優しいのは良いが、お父さんのように女の人を落としてしまうのは良くない、エリオ君には私とルーちゃんを見て貰わないと

「だから、積極的に行かないとね」

そう言うルーちゃんに頷いていると

「おまたせ！オレンジジュースで良かった？」

差し出されたオレンジジュースを受け取り

「ありがとうエリオ君」

「ありがとう」

殆ど同じタイミングで言うとエリオ君は少し頬を赤らめて

「う・うん・そんなに気にしないでいいよ」

そう呟いてベンチに腰掛けジュースを飲み始めるエリオ君、少し離れて座ったから照れてると私は思った、そんなエリオ君がおかしくて私とルーちゃんはジュースを飲みながら自然と笑っていた・・

絶叫系のアトラクションに乗ったのは、最初に乗ったジェットコースターだけだった・・後はゴーカートやふれあい動物園などの優しい系の物を選んで行った・・ふれあい動物園から出ながらエリオが

「そろそろ、お昼だね、どこで食べる？」

そう尋ねてくる、エリオの目はレストランのある方を見ている、私は

「どこでも食べない」

私がそう言つとエリオは

「もう帰るの?」

首をかしげながら尋ねてくるエリオに

「お弁当を作ってきた、だから広場で食べよう」

私がそう言つとキャロも

「私も頑張つて作つたんだよ!!」

笑いながら言つ、エリオは嬉しそうな表情で

「それじゃあ、キャロとルーテシアが作ってくれたお弁当がお昼だね、行こう」

3人で手を繋いで、私達は広場に向かった・

「私は・・・お母さんとチンクに聞いて作つた」

広げたレジャーシートにお弁当箱を置いて開く中身は、小さなオムレツやサンドイッチに、エリオの好きなから揚げやスコッチエッグだ

「私はねフェイトさんとお父さんに聞いて作つたんだよ」

キャロのお弁当箱の中身は一口大のおにぎりに玉子焼き、焼きそば、焼き魚に野菜とこんにゃくを炒めた物に肉じゃがだった、龍也が教えてくれたのならば和食系が多いのは当然だ、私がそんな事を考えてると、エリオはサンドイッチを手にとつて

「美味しいね、ツナサンドだね」

につこりと微笑むエリオに

「後、タマゴとベーコンに、タルタルと魚のサンドイッチもある」

自分の分のサンドイッチを齧りながら言うときャロが

「はい！私のも食べてみて・・・あーん！」

キャロが肉じゃがを摘んでエリオの口に運ぼうとする、エリオは耳まで真っ赤になりながら口を開き、肉じゃがを食べ

「美味しい・・・味が良く染みてて美味しいよ」

笑顔で言うエリオにキャロは

「えっとね、地球だと肉じゃがは良いお嫁さんの条件なんだって、フエイトさんが言ってたんだ」

嬉しそうに笑うキャロに対してエリオは

「お・・・お嫁さん！？・・・ごほっ！げぼげほっ！..」

激しく咳き込むエリオの背を撫でる

「げぼっ・・・けほっ・・・あ・・・ありがとうルーテシア」

落ち着いたのかお礼を言ってくるエリオに爪楊枝に刺したから揚げを差し出し

「あーん」

私がそう言つとエリオはもごもごと口を動かした後、口を開きから揚げを頬張る、

「美味しい、ルーテシアもキャロも料理が上手なんだね」

につこりと微笑むエリオに

「当然、エリオには美味しい料理を食べて欲しいから」

「私もだよ！」

笑顔で言つとエリオは赤面しながら

「ほ・・ほら！早く食べてまた遊びに行こう」

パクパクと食べるエリオに苦笑しながら私達もお弁当を食べるのを再開した

「色々乗ったね」

笑いながら言うエリオ、昼食後一休みしてからまた色々アトラクションを見て回った、コーヒーカップやメリーゴーランド・本当に色々だ・・

「最後はどれに乗る？」

もう日が暮れ始めている、後乗れて1つだろう・・私とキャロは同時に

「「観覧車ッ！！」」

観覧車を指差しながら言うところのerioは

「うん、それじゃあ観覧車に乗ったら帰ろうか」

笑いながらそう言うerioの手を握りまた3人で歩き出した

「綺麗だね」

観覧車の窓から沈む夕日を見ながら言うところのkyaroとるーてシアは

「本当だね」

「綺麗」

そう笑う2人の笑顔が綺麗で少し顔を背けると

「「よいしょ」」

「キャロ、ルーテシア!？」

2人が僕の両隣に座り腕を抱き抱え

「折角綺麗な景色だから・・・erio君の隣だね」

「・・・私も・・・そう思う」

笑顔でそう言うキャロとルーテシアを見ながら僕は

（この2人には勝てないよ・・・）

僕では絶対に勝てない・・・この2人には・・・それでも良い・・・僕は2人と一緒に居たいと思った・・・どちらかなんて選べない

（優柔不断なのかな・・・？・・・でも・・・僕は3人一緒に良いんだ）

僕がそんな事を考えてると

「エリオ君、もう終わりだよ、降りないと」

キャロに言われはつとなり、慌てて立ち上がり

「う・・・うん！それじゃあ降りようか」

キャロとルーテシアと手を繋ぎ、僕は六課に向かって歩き出した・・・夕暮れの道の中

「楽しかったね！エリオ君！！」

「また来たい」

笑いながら言う2人に頷き

「また、3人で来ようね！」

僕がそう言うと2人は笑顔で

「うん！また3人で！！」

夕暮れ道の中伸びた3人の影・繋かれた手は決して離れる事はない・これは断ち切れぬ絆の話・

「えっと・・どうして・ここに居るのかな？」

僕はパジャマでそう尋ねるとルーテシアが

「ここは3人部屋・空いてる部屋を使わないのは勿体無い」

「だから・お父さんに頼んで、荷物を動かしてもらったんだよ」

笑顔で言う2人に僕は

「えええええッ！?!？」

そう絶叫した・その声を聞いた龍也は

「うん?・・今の声・エリオか・もしかして知らなかったか?・・はは・それは無いだろうな・・所で・いい加減自分の部屋に帰れ。ゼスト」

「ルーテシアアアア・・」

ルーテシアの名前を呼んで机に突っ伏しているゼストを見ながら龍也は

「親馬鹿もここまで来ると凄いな・」

そう呟きゼストを部屋まで連れて帰って居たりする・・積極的な2
人のお姫様・・彼女らの愛を受ける龍の騎士・・これもある意味1
つの答えの形

番外編 2人の姫と龍の騎士

番外編 2人の姫と龍の騎士（後書き）

どうでしたか？・・今回は少し短めでした・・メインにしたことが無い組み合わせでしたので中々難しかったです・・でもほのぼのはあったと思います・・それでは次回の更新もどうかよろしく願います

番外編 夜天と守護者（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回の番外編は「畏無様」のリクエストで「過去のはやてと龍也」の話になります、ほのぼの？か微ヤンデレの予定です、それでは今回もどうかよろしくお願いします

番外編 夜天と守護者

番外編 夜天と守護者

キッチンに立つ黒髪の少年・少年と言うには落ち着いた雰囲気があるせいか見た目より年上に見える、彼の名は「八神龍也」、足の不自由な従兄妹と2人暮らしをしている

「よし、出来た」

お皿にベーコンエッグとトースト、更にコーンスープを盛り付け、着ていたエプロンを外しながら

「はやてゝそろそろ起きろよ」

そう声を掛けるが反応が無い・私は溜息を吐きながら

「やれやれ・・起こしに行くか・・」

そう呟きはやての部屋に向かった・

「はやて、起きろ」

寝ているはやてを揺すると

「んーまだ寝る・・」

布団に潜り込もうとするはやてに

「寝るな！」

そう言うとはやては布団から顔を出し

「チューしてくれたら起きる」

えへへと笑うはやてに

「却下、強制的に起こすぞ」

時間が無くなるのではやてを抱き上げると

「んふふ私これ好きや」

「お前がやれと言ったんだろう？」

お姫様抱つことか言う奴じゃないとやだと言うはやての言う事を聞いて、車椅子に移動する時はこうしているのだ・・はやてを車椅子に乗せ、2人でリビングに向かった

「いただきます」

2人で手を合わせて、朝食を食べ始める

「んー美味しい、卵の半熟具合とか絶妙やね」

にこにここと笑うはやてに

「そうか、それは良かった」

最初の方なんて酷い物だったからな・・・そんな事を考えながらトーストを齧っていると

「今日、病院やけど・・・兄ちゃんも一緒に来てくれる？」

不安そうに尋ねてくるはやてに

「今日は早退して来る、だから良い子で待ってるんだぞ」

そう言うとはやては、華が咲くような笑顔で

「うん！ちゃんと待ってるで」

2人でそんな話をしながら朝食を食べ終え

「さてと・・・では行つて来る、誰が来ても開けるんじゃないぞ？」

玄関で靴を履きながら言うとはやては少しむくれた様子で

「そんな子供じゃないもん、ちゃんと判ってるで」

むくれた様子のはやての頭に手を置き

「はいはい、そんな顔しない折角の可愛い顔が台無しだぞ？」

頭を撫でながら言うとはやては嬉しそうに笑いながら

「うん！判った、じゃあ気をつけて、行つてらっしゃい」

「行つてきます」

はやてに見送られ、私は学校に向かって歩き出した・

「んー暇・・・」

私は車椅子の上でそう呟いた、兄ちゃんがいなから、私は1人きりだ・

「兄ちゃんの部屋にでも行こうかな？」

こうしているのも暇なので兄ちゃんの部屋に行こうかなと思ったが・

「んー親しき仲にも礼儀ありかな？・・・止めとこか・・・」

兄ちゃんが居る時なら良いが、居ない時に入るのは良くないと思います止まる

「じゃあない、本でも読もか・・・」

リビングに置いてある本棚に手を伸ばす、私の手の届く範囲に取りやすいように揃えられている

「兄ちゃん本当優しいな」

全て兄ちゃんが揃えてくれている・・・そういう心遣いが本当に嬉しい

い・・・そんな事を考えながら置いてある本を開き読み始める

「騎士様かあ・・・んーでも私には居るもんね」格好良くて優しい騎士様が・・・な・・・何言ってるんやろね」

そう呟いたときに妙に恥ずかしくなり、本を閉じ紅い顔を誤魔化す為に手をパタパタと振っていると・・・

「何してるんだ？」

ドキイ！！ゆつくり振り返るとそこには兄ちゃんが立っていた・・・まだ帰ってくる時間には早い筈だが・・・私が考えてる事に気付いたのか兄ちゃんが

「先生がな、許可してくれたんだ、だから4時間目が終わってすぐ帰ってきたんだ」

そう笑う兄ちゃんに

「そ・・・そそそ・・・そうなんや・・・お・・・おかえり！！」

噛みながら言つと兄ちゃんは

「本当に何かあったのか？」

そう尋ねてくる兄ちゃんに

「んーん！！何でも無いで！！」

慌てて言う兄ちゃんは

「そうか？・・・それなら良いが・・・」

そう言うて部屋に戻っていく兄ちゃんの後姿を見ながら・・・

「タイミング良すぎやろ・・・あーびっくりした・・・」

ふと横を見ると紅い顔の自分がガラス棚に映っていた・・・私は自分の頬に両手を当て

「恋・・・ちゅうやつなんかな・・・」

私は兄ちゃんが大好きだ・・・それが兄妹としての物なのか、それとも別の物なのか・・・良く判らない・・・

「んーその内判るかな？」

私はそう呟きキッチンに向かった・・・自分がお昼に食べようと思っていた、お味噌汁を温めながら、卵を焼く

「・・・んーと出汁巻き卵とお味噌汁・・・後は・・・魚かな？」

アジを2匹グリルに入れると、兄ちゃんがリビングに来る、お昼を作っている私を見て

「私が作るから良かったんだぞ？」

そう言う兄ちゃんに

「良いの、兄ちゃん座っててな」

そう笑うと兄ちゃんは

「はいはい、判ったよ」

椅子に座る兄ちゃんを見ながら卵を巻いていく

（んふふ〜良い出来や）

ちゃんと焼けている卵に笑みを零しながら、焼き上がった卵を皿に乗せ、焼き魚も同様にお皿に乗せ、お味噌汁をお椀に入れ

「出来たで〜」

トレーに乗せ兄ちゃんの前に持って行き、兄ちゃんの向かい側に座り

「「頂きます」」

朝と同様2人で手を合わせてから食べ始める

「ん、美味しい、はやても料理が上手になったな」

卵を食べながら笑う兄ちゃんに

「そう・・・嬉しいわぁ」

嬉しくて笑いながら返事をする

（えへへ、兄ちゃんに褒めて貰えた・・・嬉しいわ〜）

兄ちゃんに褒めて貰えたという事が嬉しくて、私は舞い上がりそうな気持ちのままお昼を食べ終え、病院に向かった・・

「はやてちゃん、元気？・・龍也君は？」

主治医の石田先生に

「兄ちゃんはロビーで待ってる言っただけです」

そう言うと石田先生は

「そう、さてと・・今日も始めましょうか？」

「はい！」

歩けるようになるためのリハビリを始める・・時間一杯までリハビリを続けるが

「んーまだ歩けるようになるまで時間が掛かるわね」

カルテを見ながら言う石田先生に

「まだですか？・・まだ歩ける様にならないんですか？」

そう尋ねると石田先生は

「焦っちゃ駄目よ、大丈夫絶対歩けるようになるから！」

力強い笑みの石田先生に

「私・・早よ・・歩ける様になりたい・・兄ちゃんに負担掛けなくてすむから・・」

ぼそりと呟く、兄ちゃんは何も言わないが車椅子の私はきつと兄ちゃんの負担になってる・・だから早く歩ける様になりたいと言つと石田先生は

「はやてちゃん、気持ちは判るわ、でもね？ここで無茶して怪我したら心配するのは誰？」

そう言われはつとなり

「兄ちゃんです・・」

私が怪我して心配するのは兄ちゃんだ・・だからそう答えると石田先生は

「そうよ、はやてちゃんを心配するのは龍也君よ・・だから無茶せずゆっくり頑張りましょう、ねっ」

そう言う石田先生に頷き私は治療室を後にした・・

「終わったのか？」

ロビーで本を読んでいた兄ちゃんに頷くと

「そうか・・それじゃあ帰ろうか？」

帰ろうと言つ兄ちゃんに頷き私達は病院を後にした・・

「兄ちゃん・・・公園に寄ろうか？」

家への帰り道にある公園を指差し尋ねると、兄ちゃんは

「良いぞ、公園に寄って行こう」

そう笑う兄ちゃんと一緒に公園の一角に向かった・・・

「んー暖かいね・・・」

日当たりの良いベンチに腰掛け、隣の兄ちゃんに言うと

「そうだな・・・暖かくて・・・良い気持ちだな・・・」

陽だまりの中のベンチに腰掛けてしていると眠くなって来て、こくこくと舟を漕ぎ始めると兄ちゃんが

「眠いなら少し寝ると良い・・・」

兄ちゃんはそう言うと私の頭を自分の膝の上に乗せる・・・膝枕だ・・・私が両手で確り兄ちゃんの腕を掴むと、兄ちゃんは優しく私の頭を撫で始める・・・それと同時に言葉に出来ない程の安心感と安堵が胸の中に広がる・・・私は心の底から安心して眠りに落ちた・・・

「はやて、そろそろ起きろよ」

軽く兄ちゃんに身体を揺すられ目を覚ます

「ん・・・ごめん・・・寝すぎた？」

オレンジ色に染まった公園を見ながら言うと

「いや・・・そんな事はないさ・・・それじゃあ帰ろうか・・・」

兄ちゃんにベンチから車椅子に動かして貰い、夕暮れ道の中私達は家に戻った・・・

「えへへ・・・」

ベッドに腰掛け、頬を赤らめながら笑うはやてに

「そろそろ一緒に寝るのを止めないか？」

1カ月に2回ある、一緒に寝る日を止めないか？と尋ねるとはやては

「嫌やッ！！絶対に嫌やつ！！」

枕を抱き抱え絶対に嫌だと言うはやてに

「判った、判ったよ、じゃあもうちょっとだけな？」

一緒に寝るのはあと少しだけなと言ってベッドに横になると

「んふふ・・・暖かい・・・」

すぐに抱きついて来て胸に顔を埋めるはやてに

「近いぞ？」

近すぎるのでそう言うとはやては

「近かないよ・・・これでちょうど良いんよ・・・おやすみ兄ちゃん・・・」

抱きついたまま目を閉じるはやてに苦笑し

（やれやれ・・・いつまでも甘えん坊だな・・・）

甘えん坊の従兄妹の背中を撫でながら・・・

（前に言ってたな・・・お前は私が居るから笑えるって・・・でもな・・・それは私の方だよ・・・はやてが居るから・・・私は立って居れるんだ・・・）

全てを諦め、絶望していた私を救ってくれたのは誰でもない・・・はやてだ・・・はやてが居たから・・・私は立って居れるんだ・・・

（護るから・・・絶対・・・誰にもお前を傷つけさせないからな・・・）

腕の中で眠っているはやての額に軽く触れるだけのキスをして、私は眠りに落ちた・・・

これは夜天と守護者の遠き過去の話・・・決して断ち切る事の出来ない絆の話・・・

番外編 夜天と守護者 終わり

番外編 夜天と守護者（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回の番外編はどうでしたか？・・面白かったでしょうか？はやてと龍也だけの話だったので上手く出来たのか自信がありません・・ですので感想を貰えるとても嬉しいです！！それでは次回の更新もどうかよろしくお願いします

番外編 欲望の神と夜の守護者（前書き）

どうも混沌の魔法使いです今回は「天叢雲様」の小説「魔法少女リリカルなのは 欲望の王と欲望の神」とのコラボです、上手く「魔法少女リリカルなのは 欲望の王と欲望の神」の雰囲気表現できるかは自信がありませんが、どうか今回もよろしく願いします、それでは番外編始まります

番外編 欲望の神と夜の守護者

番外編 欲望の神と夜の守護者

夕暮れの道の中歩く2人の男・いや・1人は少年だ・身長は130?くらいで、髪は髪色でストレートにしている、小動物のよ
うな印象が持てる、少年だった・もう1人は身長は192?でか
なり高く、髪は漆黒で膝裏まで伸び、背中の真ん中辺りで金色のバ
インドで縛っている、瞳は深い深紅色で、2人揃ってかなり目立つ
容姿だ、2人の手には買い物袋が提げられていた・と言っても殆
どは男の方が持っており、少年は小さな紙袋を胸に抱え込んでいた
「デイスと2人きりで買い物なんて久しぶりだね?」

隣でニコニコと笑う少年・俺の半身であり大切な相棒「星空聖」
の頭に手を置き

「そうだな・本当に久しぶりだな」

アंकやセイバー・といった仲間・いや・家族か・が居る
からか、聖と2人だけと言うのは本当に久しぶりの事だった・2
人で家に向かってしていると

「ちっ・ヤミーか・」

青年・「デイス」が不機嫌そうに言う・ヤミー・人間の欲望
から生まれた異形だ・聖は

「行こう」

その気配の方に行こうと言う聖に頷き、俺達は走り出した・

「何だ？ヤミーだけじゃないぞ？」

ヤミーの他に、ボロボロの鎧の異形に、4足歩行の獣が居た・・俺は困惑しながらも

「聖、メダルだ」

腰にオーズドライバーを巻いている聖にメダルを投げた直後、

「おっと・・そうはいかんよ」

銀髪の男が乱入して聖が取りかけたメダルを強奪する

「貴様！何者だ！！！」

聖の前に移動し怒鳴ると男は

「そう怒鳴るな、すぐに済む・・懐かしいな・・コアメダルか・・折角だから」

男の腰を見るとオーズドライバーに似たベルトが装着されていた、男はベルトにメダルをセットし

「変身」

【タカ・トラ・バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！】

オーズ、タトバコンボに変身する．．それを見た聖が

「貴方は？」

そう尋ねられた男は

「通りすがりの魔道師さ」

メダジャリバーを左手に持ち、ヤミーに向かって走り出した

「す．．凄い．．」

僕は目の前の光景を見て思わずそう呟いた．．

「ふっ！」

謎の男が変身したオーズは強かった．．僕よりもそして．．アーチヤーやデイスにも匹敵する強さだと．．舞う様にヤミーの攻撃を回避し流れるように拳と蹴りを叩き込む．．一切の無駄の無いその動きは1つの舞のようだった．．

「ふむ．．弱い．．な．．早々に片付けるか」

男は腰のメダルを取り僕に投げ渡し

「返すが・・・変身しようなんて考えるなよ？負担が大きいんだからな」

諭すように言う男はベルトに新たなメダルをセットし

「変身」

【ドラゴン・グリフォン・ペガサス！ ドドドド！ドリサス！！】

僕の知らないコンボに変身する・・・驚いている間に

【スキヤニングチャージ！】

「はあああッ！！」

男が気合と共に腕を振るうと竜巻が発生してヤミーを拘束する、それと同時に竜巻の中に飛び込み

「はっ！はっ！」

竜巻の中のヤミーに拳と蹴りを叩き込み徐々に上に運んでいき

「でいやああッ！！！」

身体を反転させ足のブレードでヤミーを両断した・・・男は着地と同時に変身を解除して

「次はネクロか・・・全く・・・忙しい・・・」

そう呟くと同時に黄金色の騎士甲冑を展開する．．それを見たデイスは

「転生者．．？．．いや．．腐った気配は感じない．．だがデバイスも持っている．．本当に何者だ？」

ぶつぶつと呟くデイスはかなり考え込んでいる様子だったが、それでも僕の前に立っていて、近づいてくる異形を殴り飛ばし、僕を護ってくれていた．．

「守護者アアア！！何故貴様がここいる！！」

男と鎧迫り合いをする異形が怒鳴る．．守護者．．？英霊なのかな？．．でもアーチャーとは違うし．．僕がそんな事を考えてると男が

「貴様達が居るからだ．．哀れな．．道化よ．．」

少しだけ悲しそうな声でそう言うと剣でその異形の剣ごと両断した

「か．．ああ．．ああ．．」

頭から両断された異形は徐々に粒子となり、最終的には弾けて消えた．．まるで最初から存在しなかったように．．その様子を見て少し．．少しだけ胸が痛んだ．．どうしてだか判らなかったが．．少しだけ悲しい気分になった．．

「「逃げるツ！！やつには勝てん．．逃げるんだ！！」」

背を向けて逃げ出す異形達．．数が多い上にはらばらに逃げている、とても１人では対処出来ないだろう．．僕はそう判断して

「デイス、あの人を手伝って「問題ないよ、すぐに終わる」・・・えっ?・・・」

デイスに助けるように言う前に男がにこやかに笑い、そう言つと男の目の前にミッド式の魔方阵が展開され

「全ての咎人に聖なる星の断罪を・・・スターライト・・・」

収束された魔力が更に収束され光り輝く・・・まるで夜が昼間になったと僕は思った・・・

「ブレイカーッ!!!」

剣で収束された魔力を打ち出す、それは空中で四散し、逃げていた異形達をほぼ同時に背後から貫き消滅させた・・・それを見届けた男は片手で十字を切り

「哀れな魂に魂の救済を・・・」

そう呟いた男は騎士甲冑を解除して

「コアメダルを持つてた事は・・・ここはオースの世界か?・・・いや・・・でも君は魔力があるし・・・ここは何処なんだ?」

そう尋ねてくる男に僕が近づこうとした瞬間

「質問はこちらが先だ、その後にお前の質問に答えよう」

デイスが僕と男の前に割り込んでそう言った

どうしたものか・少年の方は警戒してないようだが、男の方は物凄く警戒してる・どうしてこんな事になったんだろうか？・ネクロが居るから来たのだが、何故かコアメダルはあるし、知らない人間・ああ・違うこの男は人間じゃないな・グリードに似てる・それじゃあ・この男はグリードなんだろうか？・目の前の男について考えてると

「貴様の名は？」

下手に答えればすぐに攻撃される、鋭い気配を身に纏っている男に

「時空管理局所属 八神龍也だ・「それだけじゃないだろう？」
それと・神王でもあるな」

自分の役職を言うと鋭い視線のままそう言う男に、私は肩を竦めながらあんまり好きじゃない称号を言うと

「神王？・馬鹿な、あいつには息子は居なかった筈だ・」

ん？こいつ・神王の事を知ってるのか・・・？・私はある仮説を立てた、この男は私と同じ別世界の人間・そして私の知らない聖王の関係者なのかもと・私はそう判断し

「これを知ってるか？」

天雷の書を見せると、男は目を見開き

「天雷の書・・黄泉の神書の同型機・・それは神王の者の筈・・それを持っていると云うことは・・お前の言ってる事は真実なんだな」
漸く警戒を解いた男は

「俺はデイス・・神魔王と言えば判るか？」

そう尋ねられたが私は首を振り

「聖魔王は知ってるが、神魔王は知らない・・」

正直に答えるとデイスは何かを考える素振りを見せながら

「では、負の神ヴェルガディオスは？」

ヴェルガディオス・・あんまり聞きたい名じゃないな・・私はそんな事を考えながら

「知ってる、私が倒した・・半年前の事だ」

あの事件から半年・・自身の半身を失った事件の事を思い出しながら言つと

「人間の身で神の座まで登りつめたか・・恐ろしい才能だな」

そう笑うデイスに

「才能か・・そんな物無いさ・・ただ愚直に前に進んでいたら・・何時の間にかな・・手にしてたよ・・」

右拳を握り締め言つとデイスは

「何を失った？・・・力の対価に？」

全てお見通しという目のデイスに

「相棒さ・・・私に道を示してくれた・・・私に力を与えてくれた・・・そして・・・自分の命を私にくれた・・・」

消えてしまった・・・いや・・・一体化した自分の相棒「セレス」の事を思い出す・・・何時だって傍で支えてくれた・・・道に迷った時、私に道を示してくれた・・・力を欲した私に私が望むだけの力をくれた・・・そして死んだ私に再び生を与え・・・そして消えた・・・少し考えが暗い方向に向かつていると

「お前が失った物は・・・自身の半身か・・・」

理解したと言つ表情のデイスに

「それで・・・デイスは何者なんだ？・・・人間ではないだろうか？」

私がそう尋ねるとデイスは

「俺は神のグリード・・・そしてこっちは俺の契約者であり相棒の聖だ」

隣で私とデイスの話に着いてきて来れて無かった、少女にも見える、少年・・・聖は急に話を振られ驚いた素振りを見せたが

「えっと・・・星空聖です・・・八神さんで良いですか？」

小首を傾げながら尋ねてくる聖に

「龍也で良い、聖君」

私がそう言つと聖が

「はい！それじゃあよろしくお願いします！龍也さん！」

笑顔の聖を見て、私は

「よろしく、聖君」

手を差し出し握手をしてるとデイスが

「ふん、言っておくがお前の助けなど必要なかった、俺一人で聖を護れたんだ・・・だが・・・まあ礼は言っておく」

そう言つデイスの姿に

（何となく私に似てるような気がする・・・）

何処と無くだが、私に似ていると思つていと聖が

「あの・・・さっきの化け物は何なんですか？」

ああ・・・そうか、私とデイスは判つてるが・・・聖は知らないのか・・・私が説明しようとするるとデイスが

「ネクロ、人間の魂とネクロマンシーによって作られた生体兵器、魔力や人間の生命力を吸収し、無限に成長する．．そうだろ？龍也」

デイスが完結に説明すると聖は

「そ．．それじゃあ．．さっきのは人．．だったんですか？」

ショックを受けた様子に聖に

「そうだ、操られ望まぬ殺戮を強制されてる哀れ者達．．その魂を解放し安らぎを与えるのが私の役目だ」

私がそう言つとデイスは

「偽善だな」

きつい事を言うデイスに

「そうかもな．．だが．．少なくとも私は救えたと思う．．操られた魂をな．．」

少なくとも私はそう思っている、望まぬ戦いをする必要は無い．．待っている家族の下に逝けるのだから．．私はそう思っている偽善と言われようが構わない

「さてと．．私も家族が待っている．．そろそろ失礼しよう」

遅くなるとはやてが荒れる、最近はいびきまで不機嫌になるから大変だ．．いい加減兄離れして欲しいものだ．．私がそんな事を考えながら歩き去ろうとすると

「ま、待って下さい！」

聖に呼び止められ振り返ると、聖は

「あの・・・やっぱり助けて貰ったお礼がしたいんで・・・一緒に来て貰っても良いですか？僕の家族が夕食を用意して待ってるんです」

そう言う聖に

「いや・・・用事があるんだが・・・駄目なんですか？」むっ・・・」

落ち込んだ様子の聖の後ろでデイスが困ったような表情をして念話で

（聖は見た目に寄らず頑固だ・・・言い始めたら聞かないんだ）

私は心の中で溜息を吐き

（今度の休暇はヴィータとはやての言う事を聞かないと行かん・・・）

夕食を作って待っていると言っていた2人に心の中で謝り

「判った・・・一緒にしよう」

私がそう言うのと聖はにこやかに笑い

「それじゃあ行きましょう！龍也さん、デイス！」

私とデイスの前をとてとてと歩いていく聖の後姿が、はやてやヴィ

「夕に重なり、私は隣で大量の紙袋を抱えているデイスに

「苦労してるんだな、お前も・・・少し持とう」

デイスから紙袋を受け取りながら言つとデイスは

「苦労してるとは思わん、聖を護る事が俺の仕事だからな」

穏やかな表情のデイスは私に

「お前も護りたい者がいるのか？」

そつ尋ねてくるデイスに私は首から提げたロケットを握り

「当然、命に代えても護りたい者が居るさ」

私がそう言つとデイスは

「何となく似てるのかも知れんな、俺とお前は」

確かに何となく似てるのかもしれない・・・2人でそんな話を話してると

「2人とも早く！！置いて行っちゃうよ！」

少し前を歩きながら手招きする聖に頷き、私とデイスは聖の後を追つた・・・丁度その頃機動六課では・・・

「兄ちゃん・・・帰って来れないやて・・・」

「嘘・・・折角頑張ったのに・・・」

作られた料理の前でがっくりと頂垂れるはやてとヴィータの前に、
タイミング悪く徹夜明けのジェイルが来て

「美味しそうだね・・・少し頂こう・・・」スカリエッティさん！！」・
ん？・・・凄く美味しいが？・・・はっ！」

もぐもぐと口を動かすスカリエッティの前に2人の鬼がゆらりと立ち上がり、同時にデバイスを展開する・・・それを見たのはは顔を背ける

「ま・・・待ちたまえ！！落ち着け！落ち着くんだ！！」

見捨てられたと判断したスカリエッティは、へたり込んだまま後退するスカリエッティにはやてとヴィータはにこりと魔王の笑みで微笑み

「「兄ちゃんの為に（兄貴の為に）作った・・・料理を食べるなーッ！！（食うなーッ！！！！）」」

「ぎゃあああああッ！！！！」

怒声と共に放たれた2人の一撃は人外の打たれ強さを誇るスカリエッティの意識を一撃で刈り取り壁まで吹っ飛ばした・・・

「片付けよか、ラップしてしまつとけばまた食べれるし」

そう言つて皿にラップしていくはやてとヴィータはトレーに料理を乗せ、何事も無いように歩き去つた・・・残されたなのはは

「スカリエツティさん？大丈夫ですか？」

ピシピシと頬を叩かれたスカリエツティの目が開く、その目は漆黒に染まっていた・・

「やれやれ、兄弟も馬鹿ですね、夜天と鉄槌の怒りを買うとは・・」

優雅な動きで埃を払ったスカリエツティ？は

「暫く私が身体を使わせて貰いましょうか、試したい事もありましたし・・それではエース、御機嫌よう」

スタスタと歩き去っていくスカリエツティ？の後姿を見ながらなのはは

「突然ヴェノムと切り替わるから驚くんだよね・・別に良いけど・・さてと・・むふふ」龍也さんが作ってくれたシュークリームでも食べよう」

・ 鼻歌を歌いながら歩き去るのは・・機動六課は今日も平和だった・・

番外編 欲望の神と夜の守護者 終わり

番外編 欲望の神と夜の守護者（後書き）

・・・どうでしたか？・・・上手く表現できていたでしょうか？「天叢雲様」の小説「魔法少女リリカルなのは 欲望の王と欲望の神」はとても面白い小説で自分も好きな作品です、記念でコラボしてくれませんか？と来た時はとても驚きましたが、これも上達への道かなと思います。引き受けましたが・・・自信が無いです・・・ですので感想を貰えるとても嬉しいです、それでは次の番外編もどうかよろしくお願いします、それと「天叢雲様」の小説「魔法少女リリカルなのは 欲望の王と欲望の神」はとても面白い小説なのでまた見てない方は一度見ることをお勧めいたします、それでは今度こそ失礼いたします

番外編 龍虎と共に歩く者達と夜の守護者（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回の番外編は「エドワード・ニューゲート様」の小説「魔法少女リリカルなのは 四神伝奇」とのコラボです、本編とは全く違うIFストーリーですので、設定や時間軸が少し違いますが、どうかよろしくお願いします、それでは番外編が始まります

番外編 龍虎と共に歩く者達と夜の守護者

番外編 龍虎と共に歩く者達と夜の守護者

「ほえ？教導の依頼ですか？」

モニターに映る強面の男に尋ね返す1人の女性にモニターに映る男性は

「そうだ、六課に囑託魔道師の指導を依頼したい」

強面の男性レジアスゲイズ中將がそう言う

「んーでも明日は皆予定あるし・・・兄ちゃんしか空いてへんよ？そんなでもええ？」

そう返答する女性・・・本来なら敬語で話すのが当然だが、彼女にそんな事をいえる存在はそうは居ない、「漆黒の女神」の異名をとる「八神はやて」に上官や上の役職だからと言う常識は通用しない、彼女が管理局に居る理由・・・それは最愛の兄が居るから、それ以外の理由など無いのだから・・・

「構わない・・・それでは頼む・・・」

モニターが切れると同時にはやては立ち上がり

「んー教導の事は明日兄ちゃんに伝えよ・・・ふあ・・・はよ寝よ・・・」

そう言うとはやてはダンスからYシャツを取り出す・・・どうみても男物の大きいYシャツだ・・・はやてはそれを胸に抱え込み

「えへへ・・・兄ちゃんのYシャツ・・・勝手に持ってきてもうたけど・・・ええよね・・・」

そう笑うと下着の上にそれを着込みベッドに横になる

「んふふ～兄ちゃんの匂いがする～」

ごろごろと寝転がりあつという間に眠りにつくはやて・・・ここまで来れば判るだろう彼女は自分の兄を心から愛しているのだ・・・俗に言うブラコンという奴だ・・・と言っても血縁関係は無いのだが・・・彼女は穏やかな寝息を立てながら

「兄ちゃん・・・大好き～」

と幸せそうに呟いていた・・・そして次の日・・・

「教導？・・・良いのか？」

銀髪の男・・・「八神龍也」がはやてに尋ねると、はやては

「そうや、私達は朝は本局に行かなかんし・・・教導出来るのは兄ちゃんだけやろ、だからお願いな、何でも2人来るらしいでな・・・そうそうちゃんと手加減したってや？」

そう言つて歩いていくはやてを見ながら、龍也は

「久しぶりの教導の仕事だ・・・うんうん・・・楽しみだ・・・」

本当に嬉しそうにそう言っていた・・龍也は教導官の免許を持って
いるが滅多に依頼が来る事はない・・何故か?・・簡単だ龍也の訓
練は超が付くほど厳しいのだ・・耐えれば間違いなく強くなれる・
・だが耐えられる者が少ないので必然的に仕事がないのだ、そんな
鬼教官の指導を受ける事になる囑託魔道師の運命は・・?

機動六課の前に立つ茶髪の少年と美しい黒髪をポニーテールにして
いる少女、彼らの名は「東郷龍清」と「秋西麗」で今日龍也の訓練
を受ける、囑託魔道師だ

「ここが機動六課・・」

僕は目の前の建物を見上げながら呟いた・・最強の魔道師が居る場
所で、僕と僕の相棒である西麗は

「ねえ・・私達・・死なないかな?」

不安げに呟く西麗に

「だ・・大丈夫だと思う・・」

今日僕達の教導をしてくれるのは、最強の男「八神龍也大将」の訓
練は厳しい事で有名で、はっきり言って緊張しているし怖い・・僕
が不安がついていると

「きゅっ?」

心配そうに僕のズボンを噛む龍・名は「春青」僕のユニゾンデバイスで「四聖獣」の1匹、青龍である、反対側を見ると

「不安がってもしょうがないけどね」

「ガウ」

虎の姿をしたユニゾンデバイス「白秋」を抱き抱えながら言う、白秋も四聖獣の1匹で、白虎である・僕はそのやり取りを見て

（まあ・その通りかな・心配しててもしょうがないし・占いの結果も悪くなかったし）

僕の特技に占いがあるが、結構当たる・結果はそんなに悪くなかったし・そんなに不安がる必要は無いか・と思っっていると

「お待たせしました」

「・・・しょ・・・しょ・・・囑託魔道師・・・の方ですね・・・お・・・お待ちしました」

黒と白と言えばいいのだろうか？黒髪と銀髪の10歳前後の少女が僕達の前で頭を下げる、銀髪の少女は

「お兄ちゃんが待っています・・・こちらへ・・・アザレア・・・私達の体格では私の後ろに隠れるのは不可能ですよ？」

アザレアと呼ばれた少女は銀髪の少女の影に隠れようとしているが、ほぼ同じ背なので彼女の言うとおり不可能だろう・・・そう言われたアザレアは

「や・・や・・やっぱり・・戻ります」

パタパタと走り去るアザレアに驚いていると

「すみません・・アザレアは少し・・人見知りが激しいんです・・でも良い子なんですよ・・自己紹介が遅れましたね・・私はユナです」

そう穏やかに微笑むユナに

「僕は東郷龍清です、こっちは春青」

足元の春青を抱き抱え挨拶すると、ユナは

「可愛いですね、よろしくお願いします春青」

「きゅう！」

春青の頭を撫で微笑んでいた、それを見ながら西麗は

「よろしく！ユナ、私は秋西麗ね！こっちは白秋だよ」

「ガウッ！」

挨拶する西麗にユナは

「はい、よろしくお願いします、西麗さん、龍清さん、付いてきてください」

僕達はユナの後を着いて行った・案内された場所では既に八神大將が待っていた

「君達か、私は八神龍也だ、よろしく」

微笑みながら手を差し伸べてくる八神大將に

「ははい！！東郷龍清です」

「わ・・私は、秋西麗です！！」

僕だけではなく西麗も少し囁んでいた・生き伝説になりつつある人物なのだから、当たり前かなと思った、八神大將は柔和な笑みを浮かべ

「そんなに緊張しなくて良いよ、役職など飾りだ、普通に龍也で良いよ」

そう笑う八神大將に驚いていると

「今、大將って付けたる？龍也で良い」

！！僕の考えを読まれた！？西麗も驚いた表情を浮かべると

「伊達に歳は取ってないぞ？君達の考える事など手に取るように判るよ」

にこりと微笑むや・・龍也さんに驚いた、纏う空気や雰囲気は常人とは違う・・目の前居るのに・・本当に居るのかどうかよく判らないのだ・・

（最強って言うのは伊達じゃないんだ・・・）

僕がそんな事を考えてると

「それでは始めようか・・・まずは君達の実力が知りたいから模擬戦をしよう、ルールは私は左手と右足だけ、君達は2人で、勝敗は私に一撃入れたらか、2人とも気絶したら終わり、準備が出来たら掛かって来たまえ」

離れた所で右手をポケットにいれ構えを取る龍也さんに

「騎士甲冑は？」

ユニゾンを行い鎧を展開した西麗が尋ねると

「ん？大丈夫大丈夫、危ないと思ったらすぐ展開するから、心配ないよ」

そう笑う龍也さんに頷き僕は破山剣を西麗は虎王神速槍を握り、2人同時に駆け出した・・・

「はっ！！」

全力で槍を繰り出すが

「ふむ・・・筋は良いが・・・脇が甘いそれと踏み込みも」

片手で槍を弾き飛ばし指摘する龍也さんの背後から龍清が突っ込むが

「甘いよ」

ぶんっ！！

回し蹴りが叩き込まれ吹き飛ばされる、龍清・まるで後ろに目があるかのような動きだ・

「驚いてる暇は無いよ？」

そう言われた直後

「へっ・・・？・・・うわああッ！！」

片手で私は龍清の方に投げ飛ばされた・

「あいたた・・・大丈夫？西麗」

そう尋ねてくる龍清に

「大丈夫・・・やっぱり1人ずつじゃ駄目だね・・・2人同時に行こうか？」

龍清は頷き、2人同時に駆け出した・・・数分後・・・

「「ぜえ・・・ぜえ・・・」」

2人の同時攻撃も、龍清の札攻撃も駄目・・・それどころか・・・それ面白いな、とか言って次の瞬間には龍清と同じ技を使う・・・噂通り

の化け物じみた強さだった・・攻撃はかなり手加減されてるのかダメージは無いが疲労で限界で私達がしゃがみ込むと龍也さんは

「5分か・・うん、中々体力もあるし根性も良い、大概の奴は1分くらいで諦めるんだが・・」

そう呟きながら歩いてくる龍也さんは、私達の頭に手を置いて

「よく頑張った、合格だ・・10分休憩、その後基礎をやるからな」
そう笑う龍也さんに頷き、ユニゾンを解除すると

「きゅうつうつう!!!」

「がう」

白秋と春青が楽しそうに龍也さんにじゃれつく、龍也さんは楽しそうに笑いながら白秋を抱き抱える、驚いたことに白秋は抵抗せずになれるままだった・・それどころかごろごろと喉を鳴らしご機嫌だった・・あんな白秋初めて見る・・よく見ると春青は龍也さんの頭にべたと乗りご満悦そう・・それを見てた龍清は

「うーん・・なに感じるものがあるのかな？」

と笑う龍清に

「そうかもね・・でもなんか見てて楽しい光景かも・・」

龍也さんの周りを駆ける白秋とその頭上を飛ぶ春青・・上手く表現できないが・・心の底から安心できる光景だった・・その後、基礎

の体術や魔法の扱い方や、大多数戦での心得など、色々教えてもらった、その全てが判りやすくすぐに理解できた、本当に強い人間とというのは教えるのも上手なんだと思った・・・そして2時間後

「うん、今日の教導は終わりだ、また来週な、そうそうシャワーを浴びたら食堂においで、昼食を作っておくから」

そう笑う龍也さんに頷き、私達はシャワールームに向かった・・・シャワーを浴び終えた私達は食堂に向かって歩きながら

「思ったより怖い人じゃなかったね」

「そうだな・・・優しいし・・・良い人そうだよね」

噂では機動六課は魔窟だとか・・・危険だとか聞いていた・・・多分龍也さんの風貌のせいではそんな噂が出たんだろうなと話していた・・・だが機動六課で危険なのは龍也さんではないと知る事になる・・・

どうしてこんな事に・・・僕はダラダラと冷や汗を流しながらそんな事を考えていた、隣を見ると春青と白秋は完全に丸くなり防御体勢、西麗はぼそぼそと「ああ・・・これが危険って言われる理由なんだ・・・はは・・・知りたく無かったよ・・・」と遠い目をしている、少し離れたところでは龍也さんが、逃げないように動きを封じられていた・・・そして目の前には

「・・・さあ！！早く教えて！！！！兄ちゃんと「龍也さん」「龍也様」と一番相性が良いのは誰や！」「誰なの！」「早く言いなさい」
「・・・」

黒い目の美しい女性の数々に急かされながら、僕はどうしてこうなったのか、思い返していた・・

「龍清は占いが得意なんだ・・それじゃあよ、占って欲しい事があるんだよ」

そう笑いながら言う赤い髪の女性・・ヴィータさんに・・いや今僕達が座る場所は女の人だらけだ・・雑誌手見たことのある、今管理局で最も有名な魔道師の方の数々・・「八神はやて」「高町なのは」さんなどに囲まれている・・いや・・正確には僕ではなく龍也さんを囲んでいるのだが・・僕はヴィータさんに

「何を占えばいいんですか？」

ヴィータさんは怒った表情で

「兄貴が私のために作ってくれたケーキが無くなってんだよ・・誰が食べたか教えてくれ、お話（処刑）するから」

目が完全に据わっているヴィータさんに頷き、占いを開始する・・そして答えはすぐに出た

「えっと・・そこで逃げようとしている人です」

食堂の入り口に向かう白衣の男・・スカリエッティさんがぎくりと立ち止まり、ヴィータさんを見て

「すすすす・・すまなかったああああ！！！！知らなかったんだあああああッ！！！！」

「知らなかったで、すむかああああッ！！！！くたばりやがれれえええッ！！！！」

逃げ出すスカリエッティさんとデバイスを振りかざし追いかけていく、ヴィータさん・数分後・外から

「ギガントシユラークッ！！！！」

「みつぎやああああああッ！！！！」

凄まじい轟音と悲鳴が響き渡った・・・それからすぐ

「ありがとう龍清、犯人見つかったぜ、それと・・・兄貴ゝまたケーキ作ってゝ」

甘えた声で言うヴィータさんを見て

（ここの人は皆龍也さんが好きなんだな・・・）

雑誌に書いてあった通りだと思っていると、龍也さんが

「私も頼む・・・最近・・・私のＹシャツが無くなってるんだ・・・誰が盗ったとかどうでもいいのだが・・・どうなったのか教えてくれ」

その言葉にびくりと肩を竦める人達が数名居た・・・間違いなくその人達が犯人だと僕は思ったが、ちなみに誰が肩を竦めたかと言うと「ティアナさん」「はやてさん」「セツテさん」「なのはさん」の4名だったりする・・・だがその4名は言ったら殺すという目で僕を見ていた・・・ただなのはさんだけは・・・なのはさんは「言わないで

って言う懇願に満ちた目で見ていて、なにか可愛そうになり僕はと
りあえず嘘を絡め

「えっと・・ボタンが取れてたのを見つけたので縫ってくれたみた
いですよ?」

そう言う龍也さんは

「そっか、ありがとう気になってたんだ」

椅子に腰掛ける龍也さんとその周りではあゝと深い溜息を吐いてる
人達を見てると、今度はノーヴェさんがもじもじと

「えっとな・・龍也がくれたリボンが無いんだよ・・どこに行った
か教える」

そう言うノーヴェさんに頷き占いを始めると答えはすぐに出た

「えっと・・破けてたのを龍也さんが見つけて縫ってくれたみたい
ですよ?」

僕がそう言う龍也さんは忘れてたといいながらリボンをノーヴェ
さんに渡していた、龍也さんはリボンを持ったノーヴェさんに

「折角だから着けてみてくれよ、私はお前がリボンを着けてる所見
たこと無いぞ?」

そう言われたノーヴェさんは、真っ赤になりながらリボンを髪に結び

「ど・・どうだ?・・に・・似合うか?」

「うん、似合う似合う」

と笑う龍也さんの顔を見ていたノーヴェさんは耳まで真っ赤になり、そのまま脱兎のように走り去った。それを見ていた龍也さんは「どうしたんだろ？」と首を傾げていた。それを見ているとはやてさんが

「最後に私を占ってや。ずばり。兄ちゃんと1番相性が良いのは誰かや!」

ざわざわ!と席の周りの女の人達がざわめく。龍也さんが逃げようとするがその前に捕獲されていた。そしてここで冒頭に戻る

「「「さあ!早く!」」」

周りの黒い目の人達の女の人達に促され占いを開始する。えつと・見えるのは・黒いのに光り輝いてる?・星空?・狂気に似た愛情?・多分これは・僕には誰を指しているのか判った、僕は結果を言おうとして硬直した、なのはさんとかが凄まじい眼光で僕を見ているのだ。正直凄まじいプレッシャーだ。それでも言おうとするが・

「う・占いの・け・結果・は・」

僕はここまで言った所で意識を失った・

「あれ?・ここは・私の部屋だ」た・龍也さんと・西麗に・ユナと・アザレア?・あれ・僕は・?」

ソファーに寝かされていて身体を起こしながら何があったのか思い出そうとしていると、西麗が

「はやてさんとかの気配に負けて気絶したのよ、それで龍也さんがここまで運んでくれたの・・・」

西麗に教えられて1人納得していると

「今、何か食べれるものを作ってこよう・・・もう夜だからお腹空いたろ？」

そう笑う龍也さんに頷くと龍也さんはコートを翻し部屋を後にした・
・僕がソファーで上半身を起こしてると

「それで・・・結果は？教えてよ」

「私も知りたいです、お兄ちゃんと相性のいい人は誰なんですか？」

「に・・・兄さんが・・・帰って・・・来る前に教えて」

そう言う西麗達に頷き耳打ちすると、みんなやっぱりと言う顔をしていた・・・暫くして龍也さんが戻ってくるとユナが

「お兄ちゃん！！黒き夜とそれを守護する者が結ばれると幸せになるんだって！！」

そう言われた龍也さんは首を傾げながら

「？どういう意味だ」

そう尋ねる龍也さんにアザレアは

「そ・・・それは・・・自分で考えてください」

小首をかしげる龍也さんは本当に訳の判らないという表情をしながら

「まあ、そのうち判るかな？・・・はい龍清と西麗、晩御飯な」

差し出されたトレーには美味しそうな中華が並べられていた・・・龍也さんは

「気をつけて帰れよ、これから頑張れよ！」

そうやって激励され僕と西麗は六課を後にした・・・これはまったくの余談だが、度々龍也の講習を受けることになった、龍清と西麗だが、その度に龍清は相性占いをさせられる事になる。だがその度にプレッシャーに負け気絶するのであった・・・

番外編 龍虎と共に歩く者達と夜の守護者

番外編 龍虎と共に歩く者達と夜の守護者（後書き）

どうでしたか？面白かったでしょうか？自信はあまり無いですね・
コラボは特に自信が無いですよ・難しいので、でも依頼が来ると
凄く嬉しいんですよ・それでは次の番外編のときもよろしくお願
いしますそれと「エドワード・ニューゲート様」の小説「四神伝記」
はまだ始まったばかりの小説ですがとても面白いのでお勧めです！
！まだ見てない方は是非一度見てみてください！！それでは失礼い
たします

番外編 第2部先行版 1話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は第二部の先行版の第1話です！！この話では「アザレア・アリウム」と「龍也」がメインの話です、あんまり長くは無いですが・・・どうかよろしくお願いします

番外編 第2部先行版 1話

第1話

「何時までそうしているつもりだね？」

ベルカ自治区の外れの丘の上に佇む黒髪の女性に話しかける、銀髪の男・管理局最強の魔道師であると同時に、ベルカの王の1つである神王の称号を冠する男「八神龍也」の言葉に黒髪の女性はゆっくりと振り返りながら

「この身が朽ちるまでです・・私に生きる価値は無い・・このまま消えて行ければ良い・・それだけが貴方に出来る、私の罪滅ぼしです」

振り返った女性の目は紅銀と金の珍しいオッドアイだった・・私は溜息を吐きながら

「何時まで過ぎた事を気にしてるんだ？・・私は気にしていない・・だから一緒に来いこんな所で独りでいてはいけない」

そう言いながら手を伸ばすが女性は

「私にその手をとる資格はありません・・神王よ・・私は貴方の目と腕を奪った・・血塗られた魔剣・・ダインスレイフ・・この手は・・この身体は血に濡れ過ぎている・・こんな私が神王の手をとろうなど・・許される事ではありません・・私の事はもう良いです・・

お引取り下さい」

取り付く島も無いスレイに溜息を吐きながら

「食事を置いていく・・・せめてこれだけでも食べてくれ・・・ではな・
・また来る・・・」

スレイの近くに風呂敷に包んだサンドイッチを置いて、私は丘を降りて行った・・降りた先ではベヒーモスのサイドカーではやてが待っていた

「どうやった？兄ちゃん・・話聞いてくれた？」

そう尋ねてくるはやてに首を振りながら

「駄目だ・・消えてしまえば良いの一点張りだ・・あいつ・・相当の石頭だぞ」

ダインスレイフ・・通称 スレイ・・極めてレアなユニゾンデバイスとアームドデバイスの2つの特徴を兼ね備えた融合騎で、ネクロ達の王「ジオガデイス」のデバイスであった・・

ジオガデイス・・国と家族を失い、復讐を誓った古代のベルカの王・
・聖魔王の称号を持ち本来は心優しい王だったが・・負の神 「ヴエルガディオス」によって心の闇を増幅され・・狂気に落ちた王だ・
・しかし最終決戦の時にはその呪縛を打ち破り、私に力を貸し・
そしてそのまま死んだ・・私はジオガデイスから託されたスレイを何とかして六課に連れて帰ろうとしているのだが・・これで7度目の説得失敗で・・相当の石頭だと言うとはやては

「自分のせいで思ってるからなあ・・あの人は・・・」

ネクロによるクラナガンの破壊・・・自分のマスターであるジオガデイスを止められなかったという・・・自責の念・・・そして私の目と腕を奪ってしまったと言う後悔・・・責任感が強いから全て自分のせいだと思っっているのだろう・・・私はベヒーモスに跨りながら

「あいつが負うべき罪など無い・・・それに気付くまで私は何度でもここに来るぞ」

私がそう言うとはやては少し不機嫌そうに

「なんでそこまであの人を気にかけるんよ・・・」

どうして不機嫌になったのか判らなかった物の私は

「頼まれたからだ・・・スレイに幸福の意味を教えてやってくれとな・・・それだけだ」

・
ジオガデイスに頼まれたからでもあるが・・・何となく・・・なのだが・

（私とスレイは良く似てる気がする・・・私もあんな時期があったかな）

今のスレイは私が目と腕を失った時の私そのものだ・・・だからどうしても気になるのだ・・・

（お前の心・・・私が救ってやる・・・私が皆に救われたように・・・）

私はそんな事を考えながらその場を後にした・・・

どうして・・神王は私に構う・・私は独りきりになった丘の上でそんな事を考えていた・・私は神王の腕を目を奪った・・そんな物に構う神王が判らない・・その時ふと視界に神王が置いていった包みが飛び込んでくる・・毎回来る度に置いていかれる包みだ・・私はゆっくりとその包みを拾い上げ中身を見る・・中にはサンドイッチが入っていた・・

「・・もぐ・・美味しい・・」

1つ取りもぐりと齧りながら呟く・・神王が置いていく料理はどれも美味しい・・また食べたいと思う・・そんな事を考えてる内に包みの中のサンドイッチを全て食べてしまっていた・・

「もう無い・・」

少しかだけ残念な気持ちになりながらその包みを畳んで元の場所に戻し、何時ものように木に背中を預け空を見上げる・・

（最近・・神王に会うのが楽しみになってきた・・）

最初は嫌だった・・自分の罪を再確認しなければならいから・・でも今は違う・・少し楽しみになってきた・・それに差し伸べられた手を掴みたいという衝動も感じた・・

「そばに行っても・・！駄目だ・・私は何を考えている！？・・私
が腕と目を奪ったんだ・・そんな私に傍に行く資格など・・！そう

か・・・私で無ければ良いんだ・・・」

私はある結論に達し、自分のプログラムの改変を始めた・・・そして次の日・・・

「今日こそ連れて帰るぞ」

昼少し前に神王が来る・・・私はゆっくりと近づきながら

「何度言われても私の答えはNOです・・・でも・・・私じゃなくて・・・私の分身なら・・・貴方と共に行きましょう」

私がそう言っていると神王は訳が判らないという表情をする・・・私はその顔を見て微笑みながら・・・

「どうか・・・私じゃない・・・私をよろしくお願いします・・・彼女達に幸せを教えてあげてください」

私はそう言っているとプログラムを起動する、それと同時に足元にベルカの魔方陣が浮かび私の姿を隠す・・・初期化プログラム・・・自分を完全に初期に帰す・・・そして私じゃない私を再構築する・・・でも

（消えるのは正直怖いだから・・・私は私を封印しよう・・・）

作り上げた2つの人格に「記憶」と「姿」をわけて組み込む・・・そうすれば・・・私は消える・・・何らかのきっかけが無ければ眠っているままの筈だ・・・私はそんな事を考えながら意識を失った・・・

「な・・・なんだ？」

スレイの姿が光に消え完全に見えなくなる・・・私は腕で目を庇い光が晴れるのを待った・・・光が晴れた時そこにスレイの姿は無く変わりに

「!？」

黒髪に金の瞳のリン達くらいの少女が座っていた・・・少女はきよろきよろと辺りを見回していたが、私に気付くと立ち上がり

「・・・ま・・・マイスター?・・・そ・・・それとも・・・マスター・・・?ど・・・どちらでしょうか？」

おどおどとした口調で話しかけてくる少女に

「う・・・うん・・・マスターだな・・・私は・・・」

視線を合わすためにしゃがみながら言うと少女は

「よ・・・良かったです・・・私・・・私は・・・あ・・・アザレアです・・・よろしく・・・お・・・お願いします・・・」

ぺこりと頭を下げたアザレアは

「え・・・えつと・・・も・・・もう・・・1人の・・・私も紹介します・・・」

かくんと頭が落ち、もう一度視線が合った時、アザレアの瞳は紅銀に染まっていた・・・

「私はアリウム、よろしく頼むマスター」

アザレアと違い少し高圧的なアリウムに

「よろしく・・・アリウム・・・」

とりあえず連れて帰るか・・・とりあえずどうしてこういう姿になったのか判らないが・・・連れて帰ろうと思い抱き上げるとアリウムは

「う・・・うむ・・・暖かい・・・それに安心するぞ・・・」

少し抵抗するかと思っただが予想に反し安心した表情で頭を預けてくるアリウムをだっこしながら

（とりあえず・・・ジェイルに見て貰うか・・・私じゃ判らんし・・・）

私はそんな事を考えながら、丘を降りて行った・・・

第2話に続く

番外編 第2部先行版 1話（後書き）

えっと短めですね、次で先行版は終わりで、次でネギまの世界に行きます・・次回も短めですが・・どうかよろしくお願いします！！
それでは失礼いたします

番外編 第2部先行版 2話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回で先行版は終わりです、これで第二部を楽しみにしてくれると嬉しいのですが・・・それでは第二部の先行版第2話始まります

番外編 第2部先行版 2話

第2話

アザレア・アリウムが六課に来てから4ヶ月・アザレアはすっかり六課に馴染んでいた・

「アザレアちゃん！行くですよ！！」

「ま・・まって・・ひ・・引っ張らないで」

リインに振り回されるアザレア・だがその表情は楽しそうだった・最初は酷いものだった・アザレアは極度の人見知りで、はやて達に話しかけられれば逃亡、リインに腕をつかまれれば泣き出す・皆どう接すれば良いのか判らなかったが今ではすっかり馴染んでいる・まあ人見知りには治らなかったが・私がそんな事を考えてるとリインフォースが来て

「兄上様、準備は出来ていますか？」

そう尋ねてくるリインフォースに

「ああ、準備は出来てるが・大袈裟じゃないか？休暇で平行世界に行くなど？」

レジアス、リンディさん、三提督に働きすぎだと怒られ半年の強制休暇（有給）+平行世界へを与えられた私は、前から疑問に感じてた事を尋ねると

「兄上様は今や超がつく有名人・・・普通に休暇にしているのは休暇が休暇になりませんから」

そう言うものかね・・・私は溜息を吐きながら

「まあ・・・皆がそれだけ心配してくれてるって事だな・・・」

良く皆に心配させてるんだなと思いながら紅茶を淹れているとリンフォースが

「それでは明日迎えに来ますので」

そう笑って出て行くリンフォースを見ながら

（ここ数ヶ月は色んな事があったな・・・）

特訓と称し、ミニスカートのヴィータ達に抱きつかれ（番外編 龍也の受難 参照）泳ぎの特訓をさせられたり（番外編 恋する乙女の努力 参照）まあ色々あったが・・・それなりに楽しかった・・・それに

（それだけ心配させてたって事だもんな・・・あんまり心配させたくないしな・・・）

無茶をするなって言われても無理だ・・・もうこれは癖になっているから・・・でも少しでも良いから心配させる量を減らせるように努力しようと思った・・・そして次の日・・・私とヴィヴィオ達にハーティーン&ラグナ、なのは、はやて、フェイト、ヴィータ、チンク、セツテ、ドゥーエ、スバル、ティアナは並行世界へと向かった・・・

「ほー麻帆良と言うのか・・・しかし大きいな・・・学園都市とか言うのかね」

かなり広大な敷地を持っている麻帆良学園を見渡していると

「兄ちゃん、はよ行こう」

「兄貴！早く」

ヴィータとはやてに呼ばれ振り返るとそこには

「なんで子供？」

14歳くらいだろうか・・・明らかに中学生くらいの姿をした、はやて達が居た、私がそう尋ねるとスバルは

「聞いてないんですか？・・・私達ここの中学に転入するんですよ？」

転入！？・・・聞いてないぞ！私が驚いているとチンクとセツテは

「学校など行った事が無いからな・・・実に楽しみだ」

「学校ですか・・・どんな所なんですかね？」

逃亡生活のせいか学校なんて縁の無かったチンクとセツテはどんな所なのか話しており、スバルとティアナは

「普通の学校ってどんなことするんだらうね？」

「勉強よ、勉強・・・まあ・・・幾ら馬鹿のスバルでも中学くらいの勉強は大丈夫なんじゃない？」

辛口のティアナに言われしょぼんとしているスバルに

「えへへ二度目の中学生かゝ青春謳歌みたいだね」

「そうやね・・・海鳴では管理局の仕事もあつてゆつくり学生生活は楽しめかつたしね」

「・・・勉強か・・・嫌だな・・・」

楽しそうなのはとはやてに勉強が嫌だと言っているフェイトを見ていると

「八神様、こちらです」

ドゥーエに案内され、私達はここにいる間、住む家に向かった・・・

「でかいな・・・それにこれは・・・喫茶店か？」

かなり大きい二階建て家に1階は喫茶店になっていた・・・私がそう尋ねるとリインフォースが

「兄上さまのことですから、やる事が必要だと思い皆で話し合つて喫茶店をやらしてあげようという結論になったんです」

喫茶店・・・前からやって見たかつたんだよな・・・そんな事を考えるとユナとアギトが私の手を握り

「ほら、お兄ちゃん・・・早く行きましょう」

「兄！早く！！」

アギトとユナに手を引かれ、私は家へと足を踏み入れた・・・次の日

「んーんーッ！！良い天気だ！」

日が昇る少し前に起き家の前で背伸びをしていると

「ほっ！ほっ！！」

髪をツインテールにし新聞を配達してる少女が見える、少女はこちらに走ってきて

「おはようございます！！新聞です」

渡してくれた新聞を受け取り

「新聞配達かね？大変だな」

そう話しかけると少女は

「そうでもないですよ、もう慣れちゃいましたから・・・ところで・・・見ない顔ですけど・・・引っ越してきたんですか？」

そう尋ねてくる少女に私は

「ああ・・・昨日引っ越してきたんだ・・・私の妹も中学生でね・・・多分君と同じ学校なんじゃないかな？・・・少し待っててくれるかな？」

そう言いながら家に帰りカウンターに置いてあったクッキーと小銭を取り

「はい、持って行きなさい」

クッキーの包みと小銭を渡すと少女は

「そんな・・・悪いですよ・・・」

悪いという少女の頭を撫でながら

「朝から頑張ってる君を応援したくなつたのさ・・・気にしないで持って行きたまえ、ほら早く行つた遅れるぞ」

そう言う少女はクッキーをポケットにしまい

「今度絶対返しますから」

そう言つて凄まじい速度で走り出す少女の背中を見ながら

「昔、私も新聞配達したな」

そう呟きながら私は家へと戻つた・・・

「・・・・行つて気まーすッ！！！！」

朝食後、学校に向かつていくはやて達を見送り、私とドゥーエとリインフォースは喫茶店をやるための準備を始めた・・・アギト達は掃除や喫茶店のメニューを作ってくれていた、ハーティーンは知らん

とか言って出て行ってしまった・・・まあ・・・あいつが接客など出来る訳が無いのでそんなに気にしない

「どんなお店にするんですか？」

ドゥーエの質問に私は

「売り上げはそんなに気にしないで良いだろう、学生のお小遣いの範囲で食べれる店にしよう」

唯の喫茶店というのも面白くないので創作喫茶をやる事にした・・・その日は食材の調達やお店のレイアウトを考えるだけで終わった・・・龍也達が麻帆良の地に足を踏み入れた頃・・・イギリスはウェールズでは・・・

「ネギがないから退屈だわ・・・」

森の中を散歩する金髪の美女・・・ネカネ・スプリングフィールドはそんな事を考えながらゆっくりと散歩していた・・・すると

「「うつうつ・・・」」

森の奥から苦しげに呻く声が聞こえ

「誰がいるのかしら・・・」

私はすぐに声の聞こえる方へと向かった・・・そこには赤黒い髪の子と金髪の男が血塗れの服を着て倒れていた

「だ・・大丈夫ですか！」

慌てて駆け寄り赤黒い髪のを揺さぶると、男は目をゆっくりと開き

「え・・エリナ・・？・・よ・・良かった・・また・・会えた・・」

それだけ言うと男は気を失ったのか地面に倒れこむ、私が回復魔法をかけようとした時

「うつ・・こ・・ここは？」

金髪の男が上半身を起こし・・自分の身体を見て

「！！ば・・馬鹿な・・生身に戻っている？・・な・・何が起きたんだ？」

驚いている男に

「す・・すいません！！この人を運ぶのを手伝ってくださいませんか？」

190近い男を1人で村まで運ぶのは無理だと判断して助けを求めると、その男は

「じ・・ジオガデイス様！」

ジオガデイスと呼ばれた男に駆け寄る男は素早い手つきで脈や怪我がないかを確認し

「よ・・良かった怪我はしてないようですね・・早く休めるところ

へ案内してください」

ジオガデイスを背負った男に言われ私は

「はっ・・・はいこつちです」

村へと向かって歩き出した・・・村人は見たことも無い男に最初こそ驚いたものの・・・すぐに薬品や食べるものを用意してくれた・・・

「どうぞ・・・」

作ったシチューを金髪の男に差し出すと

「ありがとうございます」

頭を下げてから食べ始めた男は穏やかに微笑み

「美味しい・・・久しぶりにこんな美味しい物を食べましたよ」

優雅などこかな貴族のような仕草で食事を進める男に

「どうしてあんなところで倒れていたんですか？」

そう尋ねると男は考え込む素振りを見せた後

「判らないんです・・・何をしていたかは覚えていませんんですけど・・・
どうしてあそこに居たかがどうしても判らないんです」

そう答える男に

「えっと・・・名前を覚えていただけますか？・・・何と呼べば良いのか判らないので」

私がそう尋ねると男は

「ヘル・・・いえ・・・この名は必要ないですね・・・私はカイエル。カイエルシファーです、そしてあの方はジオガデイス様・・・私の主君です」

そう笑うカイエルさんに

「えっと・・・ジオガデイスさんはマギステル・マギなんですか？」

もしかして魔法使いかなと思いカイエルさんに尋ねると

「マギ？・・・なんですか？それは？」

訳の判らないという表情のカイエルさんに

「い・・・いえ判らないなら良いんです・・・それじゃあ・・・おやすみなさい、部屋は悪いんですけど・・・ジオガデイスさんと一緒でお願いしますね」

私はそう言っただけで席を立つたするとカイエルさんは

「とても美味しいシチューでした、ありがとうございます」

優雅に一礼して部屋に戻っていくカイエルさんを見ながら、私は後片付けを始めた

「どうして・・・私は生きています・・・私はあの時・・・ハーティーンに斬られた筈なのですが・・・」

自分の身体を見るがあの傷は無い・・・それに狂気の書に取り込まれる前の生身の姿にも驚いた・・・死んだ筈なのにこうして生きてる自分・・・それがどうしても腑に落ちない・・・

「デバイスもありますね・・・使えるか試して見ましょう・・・セットアップ」

騎士甲冑を展開してみる・・・やはり生前の騎士甲冑だ・・・青い鎧に背中の鞘には2本の剣・・・だが・・・

「あの剣が無いですね・・・ハーティーンに預けた・・・」

腰の鞘に剣が無い・・・それを見る限り完全に過去の自分ではないと判る・・・

「考えても判りませんね・・・今は寝るとしますか・・・」

与えられたベットに横になり、私は眠りに落ちた・・・ジオガデイスとカイエル・・・死んだ筈の2人が何故この世界のいるのか・・・それはまだ誰にも判らない

第3話に続く

番外編 第2部先行版 2話（後書き）

どうも〱混沌の魔法使いです〱第2部では「ジオガデイス（善）」
と「カイエル」が登場します！彼らがネギまの世界で何をするのか
？それを楽しみにしてください！！ちなみに第2部の第3話はジオ
様とカイエルの話になります、生きてる事に驚くジオ様とカイエル・
・穏やかなときを過ごしていた彼らの前に現れる、敵・・その時彼
らは何をするのか？・・そこを楽しみにしてください、それで
は先行版は終わりです！続きは第2部をお楽しみに！！

番外編 修羅と守護者（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は「白き修羅様」の小説「魔法少女リリカルなのは」『紅き修羅の力を持つ者』と「とのコラボです、自分もヤルダバオトやアルクオンの技を使っているので、違和感無く書けましたが・・やはり自分のキャラではない人を使っている以上、自信はあんまり無いです、でも頑張って書いたのでどうか今回もよろしく願います！！

番外編 修羅と守護者

番外編 修羅と守護者

第80管理外世界ダイダロスに響き渡る戦いの音・戦っているのは少年と異形で、少年で拳と脚で戦い、異形は爪や自身の体の飛び道具として戦っていた、異形は「ジユエルシード」と呼ばれるロストギアから生まれた存在だ・その異形と戦う少年の名は「真崎龍牙」転生者であり、魔力を持たないが、この世界では無く別次元の「修羅」と呼ばれる一族が使う「覇気」をこの世界で扱える唯一の人間だ・龍牙は拳を異形・「クノッヘン」に当てようとしたが

「グオオオツ!!」

クノッヘンは雄叫びと共に回避し薙ぎ払いを仕掛けてくる、何とか回避したが少しダメージを受ける

「くっ!!」

やはり今までの暴走体とは全然格が違うな・。。正直アインストクノッヘンの姿だから甘く見ていた・俺は右手は上から下に、左手を下から上に流すように動かし、青いオーラを両手に纏わせ

「機神双獣撃!!せえい!せえい!!」

グオオオオオオオ!!!!

両手から覇龍を撃つ、覇龍はクノッヘンに襲い掛かる・・・だが・

「グガアアア！！！！！」

バシユン！！

「何！？」

俺が打ち出した覇龍はクノッヘンの爪の一撃で消滅した、そしてクノッヘンは

「ヴオオオオ！！！！！」

ビキィビキィ・・・

クノッヘンが雄たけびを上げると、背中のおばら状の骨が大きくな
っていく・・・不味いこれは・・・俺が不味いと思った直後

「ガアア！！！」

骨がクノッヘンの背中から外れ、ブーメランのように回転し俺に向
かってくる・・・俺は直ぐに上空に飛んだが、クノッヘンはそれを読
んでいたのか先回りしていた・・・

「ヴオオオアア！！！」

ズバア！！！！

「ぐうう！！！！！」

咆哮と共に繰り出された、クノッヘンの爪で袈裟に切り裂かれ、切られた傷から血が流れる・・・それでも何とか反撃をと思い

「ぐっ、はぁぁー!!」

クノッヘンに拳を繰り出したが、クノッヘンは後ろに飛んでかわす

『マスター大丈夫ですか!!』

アレースが心配そうな声で言う、俺は

「ああ、少し痛むが問題ない・・・」

しかし戦力差は明らか・・・このままでは負ける・・・俺に出来ることは・・・考えた結果俺はアレースに指示を出す

「アレース、本気でやるぞ!」

「御意!!」

俺は覇気を限界まで高めていく

「おおおおおおっ!!!!!!」

大気が震え、ユーノの張った結界がピシピシと輝が入ってく・・・クノッヘンは再び俺に襲い掛かって来るが

「遅い・・・」

ガシッ!

「ガアア!？」

クノッヘンの振りかぶった左腕を難なく受け止める、クノッヘンは

「ガア!！」

受け止めた腕を振り払おうと、力を込めるクノッヘン・・・だが俺の腕が振り払われる事は無かった・・・俺は腕を掴んだまま

「どうした？振り払えないのか？」

挑発するように言うと、クノッヘンは、空いた右腕の爪で俺を切り裂こうとするが

「ぬうん!！」

バキイイ!!

「グガアアアア!！」

爪を粉々に粉碎し、そのまま背中に背負い気合と共に

「はあ!！」

ブン!!

俺はクノッヘンを投げ飛ばした・・・クノッヘンは地面にぶつかるように、もがく様に起き上がる・・・俺はそれを見ながら

「そろそろ終わらせる・・・」

俺は右手は上に、左手を下にする・・・そして両手をそれぞれ流すように動かし

「全てを・・・粉碎する!!!」

構えを取り

「はああああっ!!!!!!」

今まさに駆け出そうとした瞬間、この世界に異変が起きる・・・クノツヘンの頭上の空間が割れ、中から黒い姿をした亡霊のような物が現れる・・・亡霊はそのままクノツヘンの上に落ちると・・・

「ま・・・魔力を・・・寄越せエエエエエツ!!!!」

ぐばっ!!!!

形容しがたい音を立ててクノツヘンを丸呑みにする

「ぎ・・・グイイッ!!!!」

クノツヘンは暴れるが、あっという間に吞まれ姿が消える・・・ゴキベキョッ!!!と生々しい音を立ててクノツヘンが変容していく

「グググ・・・オオオオオオツ!!!!・・・ゴキツ!!!!くつくつ・・・
なんと言つ上等な魔力だ・・・消えかけていた俺が再生できる程とは・・・」

黒い霧が晴れた時そこにクノッヘンの姿は無かった・・真紅の鬼面を想起させる装甲を身に纏い、両肩に鬼面のようなパーツが浮遊し、まるで禍々しい鎧をまとった鎧武者のような外見をしていた・・俺にはその姿に見覚えがあった・・

「アインスト・ペルゼイン・・リヒカイト・・だと？」

俺がそう呟くとリヒカイトは俺を見て

「・・魔力ではないが・・上等な波動だ・・貴様の命と共に頂こうか・・」

そう言うとりヒカイトは腰から日本刀を抜き放ち襲ってきた・・

「どうした！どうした！！その程度か！！」

恐ろしい勢いで振り下ろされる刀を弾きながら、俺は

（なんと言うスピード・・フェイト、アリシアくらすだぞ！）

早くそして重い攻撃を弾くので精一杯だとリヒカイトは

「マブイタチッ！！！」

両肩の鬼面の目が光り俺は後方に向かって弾き飛ばされる・・それは奇しくも・・なのは達の居る方向だった・・俺がユーノの張った結界の前に蹲ると

「リュウ君！「龍牙」！！」

結界の中でののは達が心配そうな声で俺の名を呼ぶ、俺は大丈夫だと言おうとしたがそれより早く

「ふんっ!!」

リヒカイトの蹴りが俺の腹を捉える

「げほっ!!!」

サッカーボールの様に蹴り飛ばされた俺を見ながらリヒカイトは嬉しそうに

「ほう・・・エース、死神・・・くく・・・そうか・・・ここは過去か・・・丁度良い・・・貴様らの命も刈らせて貰おうか」

リヒカイトが結界に近づく・・・俺はそうはさせまいと覇龍を打ち出そうとしたが、それより早く

「貫けッ!!!覇龍ッ!!!」

俺ではなく俺の背後から2匹の龍が向かって行きリヒカイトを捉える、俺が驚いて後ろを見ると其処には

「やれやれ・・・まさか過去とは・・・珍しい経験だよ・・・」

黄金色の騎士甲冑に長い銀髪を持った男が拳を突き出した状態で立っていた・・・男は俺を見て

「ふむ・・・知らない子供だ・・・という事は平行世界の・・・」「守護者アアアッ!!!」・・・やれやれ・・・推測は後だな・・・少年・・・これ

を使いたまえよ」

投げ渡された小瓶を受け取るとリヒカイトが俺を無視して男に突っ込むが・・

「羅刹連拳ッ！」

ズドドドッ！！！！

一瞬で17発の蹴りを叩き込み

「ふんっ！！！」

踏み込んで身体を回転させながら裏拳を放ちリヒカイトを殴り飛ばす・・俺はその技を見て

「覇皇拳・・？」

修羅の流派の1つ覇皇拳を扱う男に驚いていると、男は俺を見てにこりと微笑み

「それを飲めば傷は治るよ・・味是最悪だがね・・傷が治ったら逃げたまえ・・ではな」

言うだけ言って男は殴り飛ばしたりヒカイトの後を追って走り出した・・俺は渡された小瓶を見ながら

（逃げる・・いや・・俺は・・！！）

俺に逃げるといふ選択肢は無い・・俺は小瓶の中身を飲み干すと同

時に男の後を追って走り出した・・味は男の言つとおり最悪だったが・・体の傷は完全に治っていた・・

「守護者！！貴様を殺す！！」

殺気を放ちながら言うネクロに

「殺すかね・・ではやってみたまえ！！！！羅刹剛鉄甲ツ！！！！」

一気に間合いを詰め身体を回転させながら裏拳を2発放ち、そのまま覇龍を打ち込むが

「ぬうツ！！甘いわ！！」

ネクロは刀で弾き飛ばしそのまま斬りつけて来る

「ふっ！！」

左手の鉄甲で受け流しそのまま、ネクロの胴を蹴り上げる

「ぐほっ！！」

浮き上がったネクロの懷に飛び込み

「はあああッ！！！！」

浮かせたネクロの胴体に連続で拳を叩き込む

「が・・がはああッ！！！」

一撃叩き込む度に苦悶の声を上げるネクロ、全力のアップで弾き飛ばし

「機神猛撃拳ッ！！！」

勢いをつけた飛び蹴りを叩き込む

「ぐはあッ！！！」

バキバキ・・私の蹴りがネクロの胴体を完全に貫き両断する・・私は足を引き抜きながら

「任務完了・・甘いわアッ！！」・・！それでまだ動くか・・」

両断された上半身を起こし魔力波を打ち込んでくるネクロ・・それを回避していると

メキメキ・・

嫌な音を立てて離れた所に落ちていた下半身が独りでに動き出し、上半身と合体する・・私はそれを見て

「幾らなんでもそこまでの回復力は無かったはずだが？」

ネクロは確かに回復力はあるが、身体を分断されてまで回復は出来なかったはずだが・・私が驚いて尋ねるとネクロは上機嫌に

「俺はジュエルシードを20個取り込んだ・・この魔力があれば俺

は無敵！貴様とて勝ち目は無いぞ！！」

私はまた厄介な物を取り込んだなと思った・・ネクロの能力は魔力で変わる、ジュエルシードを20個も取り込めば、1回、2回では倒しきれない・・どうしようかと考え一瞬動きが止まる・・だがそれが不味かった・・隙を作ってしまった・・ネクロはその隙を見逃さず

「マブイエグリッ！！」

両肩の鬼面に魔力が込められ、それと同時に人型に変化する、そしてそのまま斬りかかって来る

「むっ・・」

左右からの猛攻撃を何とか捌いていると、突然鬼面が4本の腕で私の胴と足を掴む、それと同時に

「貰ったアアッ！！！」

ネクロが刀の切っ先を向け突っ込んでくる、回避は出来ないタイミングだ

（ちっ・・仕方ない）

内心舌打ちを打ち腕をクロスして攻撃に備えた瞬間、ネクロの横から

「機神双獣撃！！せえい！せえい！！」

龍が飛んで来てネクロを吹き飛ばす・・それと同時に私に動きを抑

えていた鬼面が消える、そして私の前に先ほどの少年が立ち

「協力する・・・どうすれば良い」

拳を構えながら言う少年・・・その構えは機神拳に似ていた・・・それを見た私は

「ふむ・・・では協力してもらおうか・・・少年」

そう言うと少年は怒ったように

「俺は少年じゃない！！真崎龍牙だっ！！」

そう言う少年・・・いや・・・龍牙に

「判ったでは、私の名は龍也だ・・・行くとするか・・・龍牙」

「おうつ！！」

2人同時に構えを取る・・・

「我が拳に碎けぬ物は無い！！」

「受けてみよ・・・我が究極なる一撃を・・・」

2人同時に気迫と共に

「貫けッ！！覇龍！！！！」

4匹の龍が飛び出しネクロを捉える・・・

「むっ・・・」

4匹の龍に動きを拘束されたネクロに龍牙が近づき

「はあああッ！！！！」

ズドドドッ！！

凄まじいラッシュを叩き込む

「ぐ・・・ぐおおおおッ！！！！」

ネクロの魔力が凄まじい勢いで減っていく・・・この調子で行けば・・・再生は出来ない・・・

「龍也ッ！！！」

殴り飛ばされてきたネクロに膝蹴りを叩き込む

「ぐはっ！！！」

くの字になるネクロにそのまま連続蹴りを叩き込み

「はああっ！！！」

蹴り上げると同時に跳躍する、上空で体勢を立て直し蹴りの準備をしていると

「はああああッ！！！！真霸猛撃烈破ッ！！！！」

龍を全身に纏い突っ込んでくる龍牙に合わせ

「覇皇捷破斬ッ！！！」

魔力を纏った上空からの蹴りを叩き込む

「ぐっ・・・がああああッ！！！」

下からの打撃、上空からの蹴りで完全に身体を両断されたネクロを、龍牙が纏っていた龍が呑み込み爆発する・・・幾らジュエルシードを20個取り込んでいても、あの魔力には耐えられない・・・完全に気配の消えた事を確認していると、龍牙が

「貴方は何者だ・・・何故覇皇拳を使える？」

そう尋ねてくる龍牙に

「私としては君が機神拳を使える事のほうが驚きだ、何故？私が考えた流派を君が使えるんだ？」

龍牙は驚いた表情を見て1つの仮説を立てた

「貴方が考えた？・・・ありえない・・・」ふむ・・・君は平行世界を知ってるかね？・・・一応知ってます」

そう答える龍牙に

「それは好都合、私は平行世界の魔道士だ、そして仮説を聞いてくれ」

私は自分の考えた仮設を話し始めた、世界は無限に枝分かれし、時間の流れも違う・私の時間では私が考えたが別の時間では、私ではない誰かが考え伝わってきた・平行世界ではそう言うことが良くあるのだと、話すと龍牙は納得したように頷いた・私はそれを確認してから

「そうそう、この世界の人に私の記憶が残っていると不味いな・消して行こう」

パチンと指を鳴らし、記憶干渉計の魔法を発動する・発動が終わったのを確認してから

「君がああのネクロを倒した事にしておいたから、上手く話を合わせるんだよ、それではまた会おう龍牙君」

私はそう言うのとゲートを展開しその世界を後にした・残された龍牙は

「平行世界の男か・まあ・転生した人間と言える立場じゃないけど・ほかにもあるんだな・平行世界って・」

そんな事を呟きながらなのは達の待つ場所に向かいながら、龍牙は（また会おうか・会えたら良いな・あれほどの達人・きっと学べる事は多いだろうな・）

龍牙はそんな事を考えながらゆっくりと戻っていった・そしてこの出会いから数年後・再び修羅と守護者は出会う・それが何を意味するのか・それはまだ誰にも判らない・

番外編 修羅と守護者 終わり

番外編 修羅と守護者（後書き）

えーとバトルの話でした・・あんまり長くなってすいません・・戦闘系しか出来ないタイプだったのでこういう話になりました。戦闘シーンだけというのは本当に苦手ですね・・それと「白き修羅様」の小説は現在、エース編です、オリジナル展開が始まっており、自分としてはとても楽しみな小説です・・ただアンチ系なので好みに分かれると思いますが、面白い小説なので一度見てみる事をお勧めします、それでは次の更新もどうかよろしく願います！！

番外編 気になるあの人の本音（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回の番外編は「鳴神様」のリクエストで本来なら「本音を語る召喚獣」の話なのですが、残念ながら私は「バカテス」を知らないので、急遽「スカリエッティ」の開発した「本音を語る機械」の実験台として龍也さんの本音が暴露されます、・・・龍也さんに思いを寄せる面々がどんな反応をするのか？・・・そこを楽しみにしててください！！それでは番外編始まります

番外編 気になるあの人の本音

番外編 気になるあの人の本音

六課の食堂でマイク片手に上機嫌な白衣の男・元狂気の天才科学者、現在「天災科学者」「天才なのに馬鹿」「不死身の科学者」「ジエイルスカリエツティが自分の開発した機械の隣に立ち解説をする、その言葉に集まった恋する乙女軍団のボルテージは最大まで上がる

「それでは今から、私の新開発したマシン！「本音を語る君」の実験を行います！・・・本音を語るのはこの人！、現場のヴァイスさんどうぞ！」

演習場がモニターに映し出されると同時に男の怒声が飛び込んでくる

「ヴァイス！！ジエイル！！殺す！！殺してやるからな！！！」

とんでもない数のバインドと機械によって動きを完全に束縛されている、管理局最強の男「八神龍也」の隣でヴァイスが

「まあ、まあ・・・旦那も怒らないで、少し実験に付き合ってくださいよ」

そう言うヴァイスに龍也は

「私の本音を暴露する機械だろ！そんな物の実験に付き合えるか！この！！・・・くそなんだこのバインドは！外れんぞ！！！」

暴れる龍也の頭にヴァイスが機械を被せ、指でOKサインを作りながら

「ジェイル、準備できたぜ！旦那の本音を面白ろおか・・・ごほん！機械の実験を始めようぜ！」

「今、面白おかしくって言いかけただろ！！待て！ヴァイス！！ヴァイスウウツ！！！！」

その怒声を無視して演習場を後にするヴァイス・・・そこでモニターは切れた、私がそれを確認してから

「演習場に居る龍也の頭に被せたヘルメットとこの機械が伝動していて、この機械に質問すると、その答えに該当する物を龍也の頭の中を検索して調べ、この機械にCG合成された、龍也が写り話すと言う物だ、それではまずは誰から質問できるのか・・・ルーレットスタート！！」

話し合いなどでは決まらないのでルーレットで決める事にした、質問出来る回数は4回、理由は幾ら最高のレベルのバインドと捕縛装置でも、そんなに長くは龍也を押さえる事が出来ないからだ、念密に繰り返したシュミレーションの結果・・・4回分は聞ける筈と言う結論に至ったのだ、唯ルールとして「龍也が最も愛してるのは誰か？」は一番最後の人に質問する権利があるので、質問できるのは実質3回・・・その3回の質問出来るラッキーガールを決める為のルーレットなのだ・・・そして1回目の質問の出来るラッキーガールが決まった・・・

ケース1 猪突猛進少女の場合

うつ・緊張するよ・何時も頭に巻いてるハチマキを外しながら私は舞台の方に向かった・1回目の質問が出来る権利を得たのはスバルだった・

「羨ましいな・」

「何でスバルなんだよ・」

恨めしそうな皆の視線を背中に感じながら、私はスカリエッティさんの隣に行くと

「ではモニターに質問してくれたまえ」

私はその言葉に頷き質問を考える・選ばれるなんて思ってたから、即興で考える・そして思いついたのは・

「た・龍也さんが・わ・私をどう思ってるのか知りたいです
!!!!」

思わず大声で言うと機械が動き始め、モニターに龍也さんの顔が映し出される・少し考えた素振りを見せながらCGの龍也さんは（これからCGと表記します）口を開いた

「スバルか・うん・よく食べる子だと思っぞ？」

ズル・私はその場でずっこけた・私の評価ってそんなの?・
思わず泣きそうになると

「何時も美味しい、美味しいって食べてくれるのは作る側としては嬉しいし・・食べてる時のスバルの顔はとても幸せそうで見えて、可愛いと思うな」

へっ・・可愛い・・？私が・・CGでもそう言っただのは初めてで耳まで真っ赤になる・・その間もCGの返答は続き

「それにこう・・何と云うか・・スバルは弟子みたい感じなんだが・・最近良く判らなくなっただけ来ていてな・・弟子なのか・・それも私を慕ってくれてるのか・・曖昧な感じだ・・まあ・・スバルみたいな子が私を好きなのかわからないか・・」

とここまで言っているとモニターは切れた・・スカリエッティさんが

「うん、どうやらここまでのようだね、良かったじゃないかスバル君、龍也は君を嫌っては無いようだよ」

笑いながら言うスカリエッティさんの言葉は私の耳には入らず、CGが言っていた可愛いと曖昧な感じ・・の2つの言葉が繰り返し頭の中で流れていた・・私はそのままふらふらと歩いて元居た場所に腰掛けた・・

ケース2 金色の死神の場合

夢見心地と言う表情のスバルを見ていて、私は少し羨ましかった・・CGでも良いから龍也にそんな風に言っただけだと思っただけだからだ・・私がそんな事を考えると

「次は・・・おおっ！！フェイト君だ！！さあ！質問をどうぞ！！」

名前を呼ばれ、私は驚きながらも立ち上がり舞台に向かった・

「さあ、質問を」

笑いながら言うスカリエッティに頷き、私は前から考えていた事を尋ねてみた・

「た・・・龍也は・・・私となのは・・・どっちの方が好き？」

ガタ！後ろで椅子の倒れる音がして、それと同時になのはが

「ななななな！！何言ってるの！！フェイトちゃん！？」

動揺してるなのはに

「いや・・・き・・・気になるから・・・」

「だ・・・だからって・・・ああ・・・モニターが・・・」

なのはと話しているとモニターにCGが映し出され、返答を始める

「なのはとフェイトか・・・うーん・・・どっちが好きって言われもな・・・まず・・・私は好きとか言うのは考えた事が無いが・・・」

そこでCGは言葉を切る・・・ふと隣に気配を感じそちらを見るとなのはが舞台に来ていた・・・自分も関係する事だから、近くで聞いて良いと判断したのだろう・・・そこでCGが返答の続きを語る

「なのはは・・大人しいのかな？・・日本美人って感じたよな・・さりげなく出してくれるお茶とか書類整理をしてる時に、肩を揉んでくれたりするの嬉しいな」

！なのはそんな事してたの？と驚きなのはを見るとなのはは

「えええと・・大変だなと思って・・疚しい気持ちは全然無いからね！！」

手を振りながら言うなのはをジト目で見てると

「フェイトは・・頑張りやさんだよな・・日本の常識知らないのに頑張つて、色々覚えてくれて・・私の為なのはどうか判らないが・・もし私の為だと言うのなら・・本当に純粋に嬉しいと思うな」

・・私が日本の常識を覚えたのは・・全部龍也の為・・もし・・もしも結婚できたら・・龍也がもう戦わなくても良い様に・・私も龍也も管理局を辞めて海鳴に行こうと思っていた・・そこで大きく無くても良い・・小さい喫茶店を開いて・・穏やかに過ごしたいと思つて居るからだ・・私がそんな事を考えてるとCGは

「でも・・どつち？と言われると返答に困る・・こう何と言うか・・なのはとフェイトは2人で居てこそだと思ふんだよな・・しっかり者だけどこか抜けてるフェイトとちょっと嫉妬深いけど・・気の利くなのは・・2人は2人で居てこそだと、私は思う」

そう言つてCGは消えた・・私となのははゆっくり舞台から降りながら、元居た場所に座り

「2人で居てこそか・・・そうかもね・・・」

そう呟くのはに私は

「お互い苦手なところあるしね・・・それ良いのかも・・・ルーテシアとキヤロ見たいな感じで・・・」

いがみ合う必要は無い・・・協力して龍也を幸せにすれば良い・・・龍也は自分は壊れてると言う・・・そんな事は無いと思わせれるように・・・2人で龍也を支えて行ければ良い・・・それも・・・1つの愛の形なのだから・・・

ケース3 超病み娘の場合

お互い無言で腰掛けている、エースと死神に舌打ちしながら、からから回っているルーレットを睨む、何故私が出ない・・・私が最も龍也様を愛しているのだ・・・私が質問できないなんてありえない・・・絶対に・・・もし出来ないのならば・・・それは誰かの陰謀だ・・・そんな事を考えルーレットを睨んでいると・・・ルーレットが私の名前で止まる・・・それを見た私は

（当然です・・・私が・・・私こそが最も龍也様に相応しいのですから・・・）

私はそんな事を考えながら舞台上上がり、モニターに向かって

「私はどうすればもつと龍也様に相応しい女になれるですか？」

今のままでは駄目なのかもしれない・・・どうすればもっと相応しい女になれるのか・・・自分では判らない・・・だから質問するならこれだと私は思っていた・・・モニターにCGが映り返答し始める

「セツテか・・・セツテは気立ても良いし料理も上手だし・・・裁縫とかも得意だよな」

当然です、龍也様に手はかけさせません・・・普通の女として必要な技能は全て習得しています、私は自分に絶対の自信がある・・・だがその自信は碎かれる事になる

「そういった面では言う事無いが・・・性格面というか・・・そう言う方面は少し改善して欲しいな」

！？・・・性格・・・？私の考えが間違ってる？・・・私がショックを受けてるとCGは

「確かに私の事を第一に考えてくれるのは嬉しい・・・でも私以外の人に対する態度が良くない・・・怒らせようとしたり、反感を買うような事ばかりしてるから・・・そこさえ治してくればな・・・」

間違っていたのか？・・・龍也様だけを愛し・・・尽くし・・・仕えるのが間違いだと言うのか？・・・自分の築き上げてきた物が崩れるのを感じているとCGは

「私はセツテの事は嫌いじゃない・・・でも他の人と喧嘩してたり、口論してるセツテを見るのは好きじゃない・・・皆と仲良くしてくれるセツテの方が良いな・・・私は」

そう言って微笑むとモニターは消えた、私はよろよると自分の元い

た場所に戻った・・本当なら今すぐでも自分の部屋に戻りたかった・
・自分と龍也様だけの空間に行きたかったが・・まだ龍也様が最も
愛してるのは？の質問を聞いてないので戻る訳には行かない・嫌で
もここに居なくてはいけない・・私が俯いて座っていると

「はい」

ティアナが私の前に紅茶の入ったカップを置く、私は目だけでティアナを見てると

「まあ、そう言われるわよね、龍也さんは喧嘩とか見るのは好きじゃないし・・そこだけ治せば？それと・・その紅茶、龍也さんが育てるハーブのお茶だから美味しいわよ？」

そう言ってスバルの隣に戻って行くティアナの後背にぼそりと

「あり・・がとう・・ティアナ」

そう呟くとティアナが振り返り

「何か言った？」

そう言われ私は

「何も言っていないです！早く座ったらどうですか！」

そう言っつて紅茶を口に含みながら

（皆と仲良く・・難しいですけど・・頑張りましょう・・そうすれば・・龍也様に愛して貰えるのならば・・私は・・）

ティアナの淹れてくれた紅茶は悔しい事に龍也様が淹れてくれた紅茶に近い味がした・・・この日の出来事の後、少しでも皆に対する態度が丸くなったセツテが六課で見られるようになった・・・それはあの水と油のような関係であった、ティアナも例外ではなく、普通に話してる姿が度々目撃された・・・それを見たチンク達が少し安心したという表情をしていた・・・

ケース4 夜天の女神と怒れる守護者

最後の質問・・・「兄ちゃんが最も愛してるのは誰か？」・・・その質問を聞くのは正直勇気がある・・・もし尋ねて自分の名前が言われなかったら・・・そう思うと質問するのは相当の勇気がある・・・そしてその最も勇気のある質問をすることになったのは・・・

「よりにもよって私か・・・」

3回の質問に選ばれず・・・最後で私か・・・自分の名前が呼ばれると思う反面・・・もしと思うと・・・怖くなるが・・・

（いやー！大丈夫の筈やー！小さい頃からずっと一緒にいた、私の名前が言われない筈は無いー！！兄ちゃんも素直になれないだけできつと私の事が好きな筈やー！！）

根拠の無い自信を持って私は舞台上上がった・・・

（いざ・・・ここ来ると怖いわ・・・）

質問を言う段階になると怖い・・・でも

（ええい！！女は度胸！！質問するで！！！！）

気合をいれモニターに向かって

「兄ちゃんが1番好きなのは誰や！」

大声で言つと同時にモニターが展開され、CGは頭をぱりぱりと掻きながら

「むっ・・・いやそのだな・・・まさか・・・はやてから聞かれるとは・・・参ったな・・・」

へっ・・・この反応は・・・CGは顔が若干赤く・・・どこか気恥ずかしそうな表情をしている・・・それを見た皆が

「「「ま・・・まさか・・・」」」

私が考えてる事を同じ事が頭を過ぎったのか・・・顔が青くなる・・・それに反して私の頬は蒸気し始めていた・・・

（も・・・もしかして・・・私の思ったとおりか・・・）

長い事思い続けてきた事に漸く意味が・・・

「あああああゝ」

遠くから悲鳴の様な物が聞こえるが気のせいだろうと割り切る・・・CGがもごもごと口を動かす

「言っしかないよな．．わ．．私が1番好きなのは．．」

CGの言葉に合わせて

「．．．龍也さんが「龍也が」「兄貴」が1番好きなのは」「」

皆が両手を組みながら言う．．私も手を組んで

（神様．．私の想いが届いてますように！）

そう祈りを込める．．その時通路の奥から

「ま．．待つて．．お．．おおおお．．落ち着いて．．」

恐れおののく声が聞こえた気がしたが気のせいだろう．．

「それは．．考えるまでも無い．．私が1番好きなのは．．八神．．
「ぎゃあああああッ！！」ズドンッ！！．．が．．がが．．
ピーッ！！．．へっ？」

悲鳴と共にヴァイス君が飛んで来て機械を破壊する．．や．．八神．．
．．と言うと．．わ．．私だけ．．最後まで聞きたかったと思っ
てい

ガシャンッ！！ガシャンッ！！！！

鎧が擦れる音がする．．ヴァイス君はよろよろと立ち上がり

「に．．ににに．．逃げるぞ！！鬼神！！鬼神が．．誰が鬼神

だッ！！！」ぎゃああああッ！！も・・・もう来たッ！！！」

食堂の入り口に騎士甲冑を展開し、全身から怒気を撒き散らしている兄ちゃんが現れ

「遺言は書いたか・・・まあ・・・書いてなくても殺すがな・・・」

脚とか腕に兄ちゃんを拘束していた機械の残骸が纏わり付いているが、そんな物で兄ちゃんは押さえられない・・・兄ちゃんは左手を振るいバインドを発動させると、スカリエッティさんとヴァイス君を雁字搦めに拘束し、2人を引き摺りながら

「私は人の嫌がる事をする奴が嫌いだ・・・2度とこんな物を開発しようなんて考えないように・・・徹底的にお話（虐殺）してやる」

・・・今お話の裏に虐殺って聞こえた・・・皆が青褪めていると

「い・・・嫌だアアアアッ！！ま・・・まだ・・・死にたくないいいッ！！よ・・・嫁さんも貰ってないのにいいいいッ！！」

「す・・・すまなかったああああ・・・許せ・・・許して・・・許してくださいいいッ！！」

じたばたと抵抗する2人の前に兄ちゃんが立ち

「やかましい！！少し黙ってろ！！」

ドゴンッ！！！！

本気で殴ればダイヤモンドだって破壊する兄ちゃんの拳が、2人の

頭を捉えた・

「ぶくぶくっ・・・」

漫画みたいなタンコブと泡を吹いた2人を拘束してるバインドの先を肩に担ぎ歩いていく兄ちゃんは、入り口の所で振り返り

「質問の結果は聞かない・・・だが・・・今後この機械の話題をしてみろ・・・私は2度と口を利かないからなッ！！！」

物凄く怒っている兄ちゃんにコクコクと皆で頷くと

「よし、皆良い子だ・・・2、3日帰らないが心配するな・・・ではな」

ズルズルと気絶してる2人を連れて兄ちゃんは食堂から出て行った・

「えっと・・・皆で後片付けしよか？」

兄ちゃんの一撃で崩壊した機械とばらばらになった机と椅子を指差すと皆無言で頷き、掃除を開始した・・・その日の夜・・・私はベットの上で

「途中までしか聞いてへんけど・・・兄ちゃんが好きなのは・・・私やよね・・・八神つくの私だけやし・・・えへへ嬉しい」

ベットで自作の兄ちゃん人形を抱き変えながら身悶えしながら

「えへへ・・・兄ちゃんが早く自分の気持ちに正直になってくれたら良いな」

私はそう呟いて眠りに落ちた・・・その日見た夢は・・・兄ちゃんと結婚する夢だった・・・

PS 兄ちゃんはきつかり3日後に帰ってきた・・・あの本音暴露マシンの事は兄ちゃんの中で完全に無かった事になっていた・・・

PS 2

「旦那いい加減許してくれよ」

「あははは・・・変だね・・・目の前に羽の生えた人が見えるよ・・・」

「逝くなあああッ！！戻って来れなくなるぞ！！！！」

バインドで木で出来た十字架に縛り付けられた2人の前に

『私達は人の嫌がる事をする大馬鹿者です、反省が終わるまで降ろさないでください・・・』

の看板が立てられ、兄ちゃんの怒りが収まるまでの2日間、ずっと外で放置されていました・・・今日の教訓・・・「人の嫌がることはしてはいけません」

番外編 気になるあの人の本音 終わり

番外編 気になるあの人の本音（後書き）

どうでしたか？面白かったでしょうか？・本音・自分を偽る事の達人である、龍也の真意をするには機械の力を借りなければならなかったのですが・そのせいで龍也の怒りを買った「スカリエツティさんとヴァイスさん」でした！！そして龍也さんが最も愛するのは「ふんっ！！！」がふうっ・

「あとがきで初めて登場する、八神龍也だ、作者は疲れてしまって寝てしまったようなので、あとがきはここまでだ、次回もよろしく頼むぞ」

この人の好きなのは・や・八神・「ふんっ！！」ぎゃあああああッ・

「それではまた会おう」

番外編 世界を渡る者と守護者？（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回の番外編は「海人様」とのコラボの第2弾です！！今回でリクエストの話も最後・次からは「IS」 「本編」に力を入れていこうと思うので楽しみにしてください！！それでは番外編始まります

番外編 世界を渡る者と守護者？

番外編 世界を渡る者と守護者？

「うむ．．最近は平和だ．．」

平行世界に飛ばされる事もないし．．はやて達も少し大人しいし．．何か企んでるのかも知れんが．．まあ可愛い悪戯くらいだろう．．いや．．そうだと信じたい．．私ははやて達の常識を信じている．．

「カタカタ．．あれ？おかしいな．．て．．手が震えるよ．．はははは．．妹達がそんなに酷い事をするもんか．．しないよな．．？」

私の直感が己の身の危険を警告している．．なにかとんでもない事を企んでいるのか．．それともこれからとんでもない事が起きるのか．．どちらだと思っていると

「うわあああつ！？」

上から悲鳴が聞こえ上を見ると虚空から男が落ちてくる、突然の事に反応できず私はと男はそのまま頭をぶつける事になった．．私はゆっくりと倒れながら

（これか．．このことを予言していたのか．．）

あの手の震えがこの事を教えてくれていたのだと考えていた．．

「いたたた．．誰だ？．．飛翔．．飛翔じゃないか！どうしたんだ一体」

起き上がり痛む頭を押さえながら落ちてきた人物を見て私は驚いた、前に平行世界のアリシアと共に、現れた男・・不破飛翔だった・・私が驚きながら尋ねると飛翔は

「龍也・・？・・そうか・・俺は無意識にこの世界に逃げてきたのか・・はあ・・助かった・・」

起き上がり椅子に腰掛ける飛翔に

「紅茶で良ければ出せるぞ？」

カップを用意しながら尋ねると

「頼む・・」

かなり消耗してる飛翔に

「何があつたんだね？・・服はボロボロだし・・顔色も悪いぞ？」

まるで内側から剣が生え穴だらけにされたような服を指差しながら尋ねると、飛翔は顔を青褪めさせ

「俺は無茶をした・・その代償で大怪我をして・・治ったは良いが・・無茶をした俺にお話（お仕置き）をすると行って聞かない、アリシア達から逃げてきたんだ」

私が説明を聞いてると

ドンドンッ！！！！

「兄ちゃん！？凄いい音をしたけど大丈夫か！？何かあったんか？」

「龍也さん！？大丈夫なんですか！？？」

「龍也！扉破壊するけどいい？・・良し・・やるよ・・プラズマ・・」

外からとんでもなく物騒な言葉が聞こえ、私は慌てて扉を開け、今まさに砲撃を放とうとしているフェイトの頭に

「止めんか！！この馬鹿者ッ！！！！」

ゴンッ！！

大分手加減した拳骨を落とした・・

「！！！！うっっ！！！！」

涙目でごろごろ転がるフェイトを見ながら、飛翔が

「容赦ないな意外と・・」

そう呟いていた・・

「痛いよぐす・・心配したのに・・酷いよ」

机に伏せぐすぐすと泣いているフェイトに

「あーすまなかった・・だがな・・砲撃で扉を破壊しようとしたお

前が悪いんだぞ？・飛翔、イチゴのタルトは好きか？」

フェイトにそう言いながら冷蔵庫からタルトを取り出し、はやて達の前に置きながら尋ねると

「頂こう・・・」

頷く飛翔の前にタルトを置いてから椅子に腰掛けると

「龍也さん・・・その人誰ですか？知り合いっぽい感じですけど・・・？」

前に来たとき会わなかったなのはが尋ねてくるので、私は飛翔に手を向け

「こちら、不破飛翔・・・平行世界のエリオの可能性未来な」

私ができるだけ完結にわかり易く言うとなのはは・・・

「えーと・・・良く判ないけど・・・大人版のエリオって考えれば良い？」

ちんぷんかんぷんという感じのなのはに飛翔は

「考え方はあってるが、俺は飛翔でエリオではない、そこだけを間違えるなよ？」

タルトを食べながら言う飛翔になのはは頷きながら

「判ったよ・・・所で・・・どうしてそんなにボロボロなの？」

なのはがそう尋ねると飛翔は

「それは・・・」「見つけたわよ！！飛翔！！（飛翔君ッ！！！！）」「

虚空からアリシアと・・・すずかがやってきて凄い剣幕で飛翔に迫る、
飛翔は

「おおおお・・・落ち着け！！お仕置きは理解してる！！逃げようとは思わない！！だから・・・だからここで暴れるな！！龍也に迷惑だ！！！！」

説得しようとする飛翔だが

「龍也、ちょっと騒がせるけど我慢してね？」

「ヒシヨウクン？カクゴハイイ？オシオキシテ・・・イチニチワタシト・・・ウフフフ・・・」

聞く耳を持って無さそうな2人に私はタルトと紅茶を差し出しながら

「まあ、まずはお茶でもどうかね？」

と話しかけた・・・

「美味しいです・・・作る時のこつとか何ですか？」

「美味しいですね」

アリシアとすずかにタルトを差し出しながら

「嬉しいね、ドンドン食べてくれて構わないよ？・・・洋梨のタルトとかもあるよ？」

怒っている女には甘い物とでも考えているのだろうか、次々お菓子を差し出す・・・徐々にアリシアとすずかの怒気が納まって来ていて俺が安心してると、はやて達は

「・・・体重・・・また・・・ダイエットしないと・・・」

差し出されるお菓子を食べながら葛藤していた・・・俺はそれを見ながら目の前のクッキーに手を伸ばした・・・

「それで何をあんなに怒っていたんだね？宜しければ話を聞かせてくれないかな？」

笑いながら尋ねる龍也にアリシアが

「この馬鹿、また固有結界なんて展開して傷だらけのボロボロになつて・・・あんまり心配させてくれたんでお話ししようとしたら逃げたんですよ」

俺を睨みながら言うアリシアにはやてが

「固有結界！？・・・兄ちゃんも展開できるけど・・・展開するだけなら怪我とかしいへんで？」

その言葉に俺は驚きながら龍也を見ると、龍也は

「痛い、痛い飛んでけ〜んっ?・・・私に何か?」

フェイトの頭を撫でながら子供騙しのおまじないをしていた・・・俺達がジト目で見ると

「固有結界の話だろ?ちゃんと聞いてたよ・・・どうして話を振られたのかは判らんがね」

首を傾げる龍也に俺は

「龍也もフェイカーに会ったことがあるのか?」

型月の世界の事を思い出しながら尋ねると、龍也は

「フェイカー・・・?贋作者って言う意味か?・・・どういう事だ?」

どうやら、アーチャーの事は知らないらしい・・・俺がそんな事を考えてるとすずかが

「龍也さんの固有結界ってどんな感じ?」

「えっとね・・・青い空と黄金色の草原だよ?」

なのはに龍也の固有結界について聞いていた・・・俺も気になり

「龍也の固有結界の能力は?」

能力が気になり尋ねると、龍也は

「私の能力は事象の拒絶と傷の回復だな．．私以外に対する攻撃を無効にして、仲間の傷を治す物だな」

俺はその説明を聞いて

「龍也はダメージを受けるのか？意味ないじゃないか？」

自分のダメージを無効に出来ないなら意味が無いと言うと龍也は

「何、自分の痛みなど幾らでも我慢できるよ．．私は仲間が傷つく事の方が耐えれんのさ」

からからと笑う龍也に俺は

（完全な守護向きの能力か．．その中に自分は含まれない．．フェイカーや士郎より、性質が悪いかもな．．）

俺がそんな事を考えてると龍也はアリシアに

「飛翔の固有結界にはリスクがあるのかね？」

そう尋ねられたアリシアは

「飛翔が固有結界を展開すると、一定のラインを超えると、展開終了後に自分の身体を内側から貫かれる．．幾ら強くても．．そんな事してたらいつか死んじゃうじゃない．．だから固有結界を使わせたくないの」

「私も同意権です」

アリシアとすずかがそう言つと龍也は穏やかな光を瞳に映しながら
「だがね・・男というのは無茶をするものなんだよ・・護りたい者が
大切であればあるほど無茶をするのさ・・私も無茶をした・・腕
を切り落とされたり・・目を潰されたり・・胸を貫かれた事もある
な・・」

遠い目をしている龍也の言葉を聞きながら、俺は

「普通・・死んでないか？胸貫かれたら？」

そう尋ねると龍也は

「まあ・・普通わな・・まっ、生きてるから良いだろ？「良くない
わ！（良くない！！）（良くないよ！！）・・まあ・・考え方の違
いという事だな」

はやて、なのは、フェイトに怒鳴られ肩を竦めながら龍也はアリシ
アとすずかに

「まあ、それだけ無茶をしなければ君達を護れなかったんだ・・そ
れだけ大切に思われてるって事だよ・・今日の所は許してやったら
どうかね？・・これで・・」

龍也がそう言つと同時に

「ぐっ・・へぷるぱーっ！！！！」

ズドンッ！！！！

と龍也の剛拳が俺の頬を捉え殴り飛ばす・俺は空中で7回転半位して龍也の部屋の床の上に落下した・それを見たアリシア達は

無言で俺を見下ろしていた。・龍也は拳をポケットにしまいながら

にこりと微笑む龍也を見て俺は

俺はそこまで考えた所で意識を失った・・

氣絶しい具合に痙攣してる飛翔の襟首を掴みながら言うアリシアに

結構本気で殴ったので暫くは起きないだろうと伝え、帰る準備をしてるすずかに

ケーキとタルトを入れた箱を手渡すとすずかは

「ありがとうございます、今度お礼を言いに来ますね」

にこりと微笑むすずかとアリシアに

「気にしなくて良いよ、それより仲良く過ごしたまえよ？」

喧嘩や揉め事が嫌いなのでそう言つとアリシアとすずかは

「善処はしますね、それじゃありがとうございます」

ぺこりと頭を下げ、自分達の世界に戻っていくアリシア達を見送っている

「？はやて達がいらない？どうしたんだ？」

さつきまで居たはやて達が居ない事に首をかしげていると

「兄ちゃん！！」

「龍也さん！！」

「龍也！！！！」

ドタドタとはやて達が戻ってくる、私ははやて達に

「どうした？そんなに慌てて？」

紅茶のカップを置きながら尋ねると3人はエプロンを私に見せながら

「えへへ・今日はな、私が兄ちゃんに夕食を作るんや（作るの）（作るんだよ）・・・・・・ギロツ！！」

睨みあう3人に私は溜息を吐き

「どうせ作ってくれるんなら、3人で仲良く作って欲しいな」

自分の希望を言うとはやて達は

「兄ちゃんが（龍也さんが）（龍也が）そう言うなら・・・」

3人でキッチンに向かっていく・私はなのは達の後背を見ながら

（喧嘩などせずに仲良くしてくれるのが一番良いな・・・）

平和が一番だなと思いながら3人の料理が出来るのを待った・・・その頃飛翔はと言うと・・・

「うつつ・・・痛い・・・」

漫画のように膨れ上がった頬に氷を当てながら呻いていたりする・・・

・ちなみにこの話を聞いたエリオ達はと言うと・・・

「エリオ君！！前に固有結界使って見たいって言ったよね！！絶対駄目だからね！！！」

「そんなことするなら・・・私は・・・お話しするからね？」

キャラとルーテシアに詰め寄せられたエリオは

「使わない！！使わないから！！！！というか僕には絶対使えないから！！！！」

僕は赤面しながら両手をぶんぶんと振る、飛翔さんと僕は違う・僕の中の多分・

（キャラとルーテシアの事しか考えてないからな・・きっとそういうのが全部出るだろうな・・無理無理！！恥ずかしくて使えないよ！！！！）

エリオの心の中は自分のお姫様の事で、埋め尽くされている・・そんな人間の固有結界はきつと恥ずかしくて見れないし、見せることも出来ない世界だろう・・

番外編 世界を渡る者と守護者？ 終わり

番外編 世界を渡る者と守護者？（後書き）

短めの番外編でしたね・・面白かったでしょうか？龍也さんは大人と言ったのがコンセプトの番外編でした・・これでリクエストの番外編は全消化です、次からは「IS」「本編」に力を入れていこうと思っています、本編も完結が近いですからね、気合入れていこうと思っています！それでは次回の更新もよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0204s/>

夜天の守護者 番外編

2011年10月1日13時55分発行